

OVERLORD～王の帰還～

海野入鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

至高の四十一人と呼ばれる者達がいた。

彼らが創り上げたナザリツク地下大墳墓、そこには隠された秘密があった。

全ての罪を背負うと決めた者と、自分の行ないに苦悩する者。

嘘をつき続ける事を決めた者と、それを真実へと導こうとする者。

今、ナザリツクの地に王が帰還を果たす。

ドミニク・ズボズ様から頂きました。

ビクトリア・F・ホーエンハイムのロゴ入りイラストです。

第二部、黎明の魔女開始致しました。

楽しんで頂けたら幸いです。

目次

転移

寝物語

玉座

侵攻

怨嗟

策謀

衝突

カルネ村

危機

蹂躪

絶望

決着

81 74 67 61 51 41 29 18 6 1

疑念

回想

考察

出陣

願い

開戦

参戦

地獄

希望

対決

慈愛

戯れ

法国

178 172 163 155 146 137 131 123 114 107 101 95 88

闇夜の独白	295	思わぬ来客	435
王の恐怖	284	届く思い	422
僕達の密談	275	救国	409
王の決断	265	二つの戦い	397
王の訪問	257	来訪者	388
王の仕事	249	本当の心	379
王の思考	240	無慈悲な夜	369
王の喧噪	232	蝶の羽ばたき	359
王の脅威	225	蒼天の下	348
王への涙	214	それぞれの思惑	339
王の望み	206	PVP	331
漆黒の戦士		それぞれの黄金	321
終結	189	王と戦士	307

563	Grand Symphony	鮮血の戦乙女	
		化物達の宴	442
		人と言う種	455
		漆黒との邂逅	469
		氷結牢獄	477
		ワールドアイテム	491
		白き鎧	504
		霊廟	514
		真実	527
		死を記憶せよ	539
		見守る者達	552
		一顧傾国	
		帰還	571
		終末の訪れ	583
		コンクラーブ	593
		宝石の悪魔	600
		リリー・マルレーン	611
		困惑する者・暗躍する者	619
		法皇	630
		次の一手	641
		命の値段	650
		大切な事	660
		兔の願い	672
		謝罪と和解	683

魔女は静かに世界と寄り添う	694	戦争準備	816
死を呼ぶ凶鳥		集う者達	827
再びの地カルネ村	705	泥の悪魔	838
呪いの対価	716	光の一撃	849
故郷の森	729	心の内	859
白き凶鳥の女王	740	戦後報告〜ナザリック篇〜	870
訪れた解放	753	戦後報告〜スレイン法国篇〜	884
思いの果て	764	ビクトリアの異世界探訪録	
皇帝と法皇	777	ピッチと金の鳥 前編	898
混乱の産声	787	ピッチと金の鳥 後編	908
宝石と黄金		ピッチと豆の木 前編	919
猫と侠客	797	ピッチと豆の木 中編	930
争いへの序曲	808	ピッチと豆の木 後編	941

その名は夜右衛門

あなたが居れば

王都動乱 序章

魔女と蝙蝠

王都にて

招かれざる者達

最初のドミノ

敗者として

苦悩

魔女と悪魔

黄金と黄金

暗殺依頼

王の帰還

953

964

977

989

1003

1019

1030

1042

1056

1068

1080

くすむ楼閣

薔薇と蜘蛛

反逆者

最強の称号

見つめる先

真皇

砕かれた希望

黄金の意思

悲しみの果て

王の帰還

1093

1106

1118

1127

1138

1148

1161

1172

1184

1196

転移

寝物語

ある日絵本が語ります

古い古いお話です

ある日、ある時、ある街に、光に包まれながら六人の神様が降りたちました

六人の神様は言いました

光の子らよ、もう何も心配する事は無い

邪悪なる神は我らが煉獄の地に封じて来たと

人々は喜び神様に感謝しました

そして八人の欲深き王が現れました

八人の欲深き王は罪と言われるありとあらゆる事を行いました

人々は嘆き悲しみます

だが八人の欲深き王は言います

我らを止める事が出来る者など皆無だと

それが出来る煉獄の王は此処には居ないと

そして非道の限りを尽しました

人々は涙を流して言いました

なぜ煉獄の王は我らを助けてはくれないのかと

誰が語ったお話なのかは解りません

誰が書き記した物語なのか解りません

嘘なのか

本当なのか

それは誰にも解りません

しかし吟遊詩人は唄います

キラキラと輝く長い金色の髪と全てを見抜く金色の瞳を持ち、空に浮かぶ虹の糸で織られたドレスを纏って暗闇の中を走る光を従えてかの者は有る

これは昔の物語

それは未来の物語

そして歯車は回り出す

ゆっくりゆっくり回ります

二つの歯車は近づいて

そして歯車は重なり合う

もうすぐカチツと音がする

終りが訪れ、始まりが産声を挙げる

それはたぶんもう少し

死者の王が目覚めるまでの僅かな時間

そして二人は踊り出す

へたくそな笑顔を浮かべながら

不器用にステップを踏みながら

二人はワルツを踊ります

愛しき子らと世界を巻き込みながら

愛の音で踊ります

友との絆で踊ります

そしてその後もう一つ

二人は踊り続けます

絶望か

それとも希望か

それはあなたの選択次第

それは世界の選択次第

あなたは何を望むのでしょうか

世界は何を望むのでしょうか

二人は何も知りません

ふたりはただ踊ります

あなたの為に

友のために

世界のために

そして世界は歪みだす

世界は誰の為にある

あなたの為にあるのでしょうか

二人の為にあるのでしょうか

世界はクルクル回り出す

ふたりはクルクル回り出す。

これから先のお話は神様でも知らぬ事

そう言つて絵本は口を閉じた

夜の帳が落ちた山間の村で姉は妹に本を読み聞かせていた。妹はベッドの中で眠気を忘れて姉の語る物語に聞き入っている。

姉が一行一行ゆっくりと読み上げるお話に妹は一つ一つ質問を口にする。その都度姉は答えが解らない質問に困った様に「さあ」と首を傾げ返事をしていた。

誰が最初に語ったのか解らないお話。誰が書いたのか解らない絵本。でもその本は古くから読み聞かされ続けていた。

姉も幼い頃によくこうやって寝物語として母に読んで貰っていた。そして妹と同じ質問をしていた。あの時の母も自分と同じ顔をしていたのだろう。そう思うとなぜだか可笑しくなり、自然と姉の顔に微笑みが浮かぶ。

その表情を見て安心したのだろうか、口を尖らせていた妹も同じように笑顔を浮かべ姉に問いかけた。

「ねえ、お姉ちゃん。王様は何て名前なの？」

問われた姉は一息吐く様に押し黙ると唇に指を一本立て「内緒だよ」と念を押すところを言った。

「王様の名前はね……………ビクトーリア・F・ホーエンハイム」

玉座

DM MORPG, 仮想世界で現実にいるかの如く遊べる体感型ゲーム。数多あるDM MORPGの中でユーザーの自由度とその拡張性の幅広さでナンバーワンの人気を博したタイトル

《YGGDRASIL》

発売から十二年経った現在、その幕が引かれようとしていた。

「結局誰も来なかったな……」

悲しむ様に、当然と納得していたかの様にその者は呟いた。

金と紫の糸で裝飾された、豪華な漆黒のアカデミックガウンを纏った骸骨がそこには居た。

種族、死の支配者オーバーロードであり、この場所、ナザリック地下大墳墓をホームとする、ギルド アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター、プレイヤーネーム モンガ。

ナザリック地下大墳墓、第十階層にある玉座の間にある王座に座り、その空っぽの瞳で自分達の作り上げた物を見つめていた。

視線の先には天井から吊下げられた自分の物を含む四十一枚の旗がある。その旗を一枚一枚見つめながら、それに刻まれた紋章越しにかつての仲間達を思い出していた。

『最後に皆で集まりませんか？ 玉座の間でお待ちしています』

ギルドのメンバー達に充てた最後のメールだった。モモンガはそれに縋りたかった。決して皆忘れてなどいないのだと。

だが、それは無残にも破られる結果となった。

現在午後十時三十分、誰からもメールの返事は帰って来てはいない。その寂しさ、悔しさ、そして虚しさから逃げる様に、モモンガは自分の座っている王座の横に視線を向ける。

そこには今、自分が座っている物よりも数段豪華な王座があった。そして、視線はゆっくりと自分の背後へと向けられる。

目の前には、巨大なギルドのエンブレムを染め抜いた旗があった。しかし、モモンガの瞳にはその旗は映ってはいない。

モモンガが見つめていたのはその向こう、旗に隠されている物だった。旗越しにソレを見つめていた。

虚ろな何も無いその空洞の瞳は、ソレから視線を逸らす事は無い。幾つもの思い出がモモンガに押し寄せて来る。楽しい思い出を、寂しさ、虚しさを振り払う様に思い返していたその時、ポーンとメールの着信の音がした。

モモンガは慌ててメールを開く。そこには簡潔にこう書かれていた。

これよりナザリツク地下大墳墓に侵攻を開始する。

この文字を見た瞬間、モモンガのプレイヤー鈴木悟の心臓がトクンと跳ねた。

差出人は？　こんな文言を送りつけて来る人物など解りきっているはずなのだが、違っていたらと言う僅かな不安から焦って差出人を確認した。

そこには待ち焦がれていた人物の名前があった。

【ビクトリア・F・ホーエンハイム】

「ビッチさん」

そう呟く言葉には嬉しさと、安堵があった。



「なんか物足りない。そう思わないモモンガさん」

そう言ったのは種族バードマンであるペロロンチーノだった。

ギルド アインズ・ウール・ゴウン、当時はナインズ・オウン・ゴールと言う名だったが、見事ここ地下大墳墓を攻略し自分達のホームとして改築作業をしている時の出来事だ。

ギルドマスターであるモモンガが「どう言う事ですか？」と言う問いに対して彼はこう言った。

「ここは、地下大墳墓の第十階層。つまりは最終目的地な訳じゃない」

この言葉に、場に居合わせた者達全員が肯定の意を告げる。

「それってつまりラスボスがいる場所でしょ」

「ええ、そうです」

皆を代表してモモンガが答えた。

「そこにさー、ラスボスがいるだけって。ねえ」

「何が言いたいの。はつきり言いなさい、この愚弟」

要領を得ない物言いに、ピンク色の肉棒が言葉を挟む。

ピンク色の肉棒、種族ローパー、プレイヤーネーム　ぶくぶく茶釜。ペロロンチーノの実姉である。

「なんて言ったら良いのかなー。つまりはラスボスであるモモンガさんが倒された時にここは攻略されたってことでしょ」

「ま、まあそうですね」

モモンガは肯定の意を告げる。

自分がギルドの長なのだから必然的にそうなる。

ギルド長が倒され、ギルド武器が破壊されれば、そのギルドの敗北が決まる。

「でもさー、何か悔しいじゃない。それだけだ」と

「つまり何かドツキリを仕掛けたいと?」

銀色の騎士甲冑を着たたつち・ミーが答えた。

「そうー!　そう言う事!」

我が意を得たりと言った感じでペロロンチーノは愉快げに返す。

しかしそうは言ってもどんなドツキリを?　そんな事を皆が考えている中一人のキャラクターが声を挙げる。

タコの様な容姿をした種族ブレイン・イーター　タブラ・スマラグディナ。

「こう言うのはどうだろう。ここは地下大墳墓、つまりは墓だ」

その言葉に皆頷き肯定の意を告げる。

「しかし、実際はある人物の復活の為に創られた場所だった」

「その人物って？」

ぶくぶく茶釜がふよふよと動きながら問う。

「神様、とか？」

「神様？」

全員の声がかさなった。

その驚きを含んだ声色に気を良くしたのか、タブラ・スマラグデイナの声は一段大きくなり、楽しげな物になって行く。

「そう神様。それも異形種の神様。遙かな昔に消滅した異形種の神様を再び現世に降臨、復活させる為の場所がここ地下大墳墓」

タブラ・スマラグデイナのぶつ飛んだ発言に皆賛成の意を告げた。

皆の楽しげな空気は自然とナザリック地下大墳墓を包んで行く。

「それで具体的はどうします？」

言うもモンガの問いかけに、タブラ・スマラグデイナは少し考える様にフリーズした後

「そうだねえ、玉座を二つにするってのは？」

そんな事を提案した。

「玉座を二つ、ですか」

「そう、モモンガさんの玉座よりも豪華なヤツを。それから……そうだ！ ギルドの特
大フラッグの後ろに肖像画を隠すとか」

この発言に一番先に乗って来たのはぶくぶく茶釜だった。

「なるほど！ 誰かが攻略に成功してヤッターって喜んでる時に肖像画がバサーって現
れる、そんで誰？ って」

形を変えながら、ノリノリで悪だくみを披露するぶくぶく茶釜の意見に、さらなる悪
戯を加える者が続く。

「いやいや姉ちゃん、そこまでやるんならあらかじめBBSとかで神様ねつ造しなきゃ」
皆この提案に参加し、あーでも無いこーでも無いと意見を突き合わせる。

モモンガは楽しく、頼もしいこの悪ガキ達の悪戯会議を微笑ましく眺めていた。
しかし此処でモモンガにある疑問が生まれた。

「あの皆さん、肖像画の神様ってどんな姿にするんです？」

この問いに皆がキョトンとしたようにフリーズすると、一斉に声を挙げた。その姿
は、落とし穴に落ちた友人を笑うかの様な楽しさがあつた。そして、全員の声が一人の

人物の名を高らかに宣言する。

「ビッチさんしかいないでしょう！」



ビッチさん。

プレイヤーネーム、ビクトーリア・F・ホーエンハイム。

金色の長い髪と金色の瞳をした、ロココ調ドレスをまとった見目麗しい女性型のキャラクターで、ロールプレイに寄ったキャラ構成かと思われがちだが、実際はかなりの戦闘寄りのガチビルドと言われている。キャラクターメイク、装備などにかなりのお金を突っ込んでいるらしく、種族、武器等は一目では判別出来ない程。

鎧などは全てドレスのグラフィックに置き換えられ、武器は全てフラッグポール、つまりは旗の付いた棒に置き換えられていた。

種族は雷獣と本人は言っているが噂によると特殊クエストの攻略に成功し何らかの神となっているらしい。

そして一番の特徴は種族の一つであるアンドロギノスを取っていることだった。

この種族は男女どちらの武器、武器、装飾品を付けられると言うメリツトの代わりに全習得種族のレベルアップには、倍の経験値が必要になると言う種族である。

YGGDRASIL発売当初は、今のように多数のクリエイツールが発売されていなかった為、わりと重宝された種族だったが、今の課金しだいで何でも出来る状況ではただプレイを縛る種族でしか無くなっている。

しかし、彼女がこの種族を上書きせずに取り続けている事が、彼女の種族の何かに起因しているのではと噂された事もあった。

彼女はギルド、アインズ・ウール・ゴウンには所属していないが、ギルドに身を置く者達にとって、とても大切に思い出深い人物だった。

ギルドの前身である、最初の九人と呼ばれる以前に行動を共にしていた人物であり、その後は、悪名高い情報提供系のクラン“ 魔女の夜明け ”の中心であった人物。

お騒がせ集団としても、超がつく程の有名な集団で、ナザリック地下大墳墓千五百人大進行と呼ばれた、人間種によるナザリック総攻撃の音頭を獲ったのもこのクランだった。

常々ナザリックは私の遊園地だ！ と公言してやまない人物で、グレンデラ沼地でアインズ・ウール・ゴウンのメンバーとの邂逅が何度も目撃され、示し合わせた大虐殺だった。

たのではと一時BBSでは騒がれていた。

ギルドメンバーが、少しずつ減って行く中でも残ったメンバーに合わせたちよっかいを度々掛けるなど、何かにつけサプライズを仕掛ける様な人物だった。

このちよっかいは定期的に行われ、その行為は、YGGDRASILに関わるプレイヤー達を飽きさせないかの様にも映っていた。

それはモモンガ一人になっても続けられ、孤独の中にあつたモモンガにとつては唯一の心の拠り所となっていた。

また、YGGDRASIL上でもかなりの古参プレイヤーで、その緻密に練られた馬鹿騒ぎゆえ一時は運営側の人間では無いかと疑われた事もあつた。

そんな彼女がYGGDRASIL最後の日に寄こしたメール、『これよりナザリック地下大墳墓に侵攻を開始する』は、湿っぽく暗く落ち込んでいたモモンガの気持ちを晴らすには十分な内容であつた。

玉座の間にて、この騒がしくも優しい客人にどう言つた歓迎をしてやろうかとモモンガは一人思索する。

そんな折、視界の隅に一人の女性の姿が映つた。

純白のドレスを纏い、妖艶な笑みを浮かべ、夜の闇を思い浮かべる黒髪はつややかに腰まで届いていた。しかし、左右のこめかみから山羊を思わせる太い角が曲がりながら

前へと突き出し、腰の辺りからは黒く染まった天使の羽が広がっている。

その姿は女神の様にも取れるが、彼女もまた異形の者だった。

ナザリック地下大墳墓階層守護者統括アルベド、ナザリック地下大墳墓を守るNPCの頂点に立つ者。

その姿を見つめながらモモンガはかつてメンバーの一人が言っていた事を思い出した。

「モモンガさん、アルベドは神の妃なんだよ」

そう言っていたのは、アルベドの創造主であったタブラ・スマラグディナだった。

モモンガは眼前にコンソールを出すとアルベドの設定を表示する。

「うわ」

画面には溢れ出す程の文字が映し出される。

「そう言えばタブラさん設定魔だっけ」

そう呟きながらカーソルを下へ下へと持っていく。そして最後の行にたどり着いた。そこにはこう書かれていた。

『ビッチを愛している』

モモンガはため息を一つ吐くと手に持ったギルドの象徴、ギルド武器であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをかざす。

「アクセス」

その言葉に反応し、画面上にカーソルが現れた。BSキーでピッチと言う文字を消し、こゝろ書き変える。

『ビクトーリア・F・ホーエンハイムを愛している』

書き換えたは良いが、モモンガには何か腑に落ちなかつた。何かこゝろもう一捻り。そう思ったモモンガに、ある悪戯心が生まれる。そしてこゝろ書き加えた。

『ビクトーリア・F・ホーエンハイムを病的に愛している』

侵攻

一仕事を終えたモモンガは、本格的に歓迎の方法を思案する事にした。

「うーん。一応は俺って魔王な訳だし……」

そう言うとおもむろに立ち上がり、モモンガは両手を広げ声高らかに言葉を発する。

「ビクトーリア・F・ホーエンハイムよ、我が物となれ。さすれば世界の半分を……」

そこまで言っただけ出した。

「あ、あの人、俺達の神様だっけ」

そう呟き再び玉座に座り、コンソールを開き幾つかのページを表示して行く。何かヒントでも探す様に。幾度か立ったり座ったりを繰り返した後

「とりあえず歓迎は大勢の方が良いよな」

そう言っただけコンソールにナザリック地下大墳墓のマップとPOPモンスター以外のNPCの一覧表を出す。

「えーと、第一〜第三階層の守護者シャルティアとバンパイアブライド……」

などと呟きながら各階層守護者と主だったNPC達にチェックを入れて行く。

「よし、これで全部だな」

そう言つて実行を選択した。

ほんの一瞬の静寂の後、ナザリック地下大墳墓 第十階層 玉座の間は異形の者達で溢れ返つた。

「そうだよ、やつぱりお出迎えは全員でだよな」

満足げにそう言うモモンガだったが、ここで彼本来の中二病がうずき出して来た。演説つてしてみようかな。そう思つたら止まらなかつた。わざとらしく荒々しげに口を揺らしギルド武器を頭上に掲げモモンガは大声で僕達に語りかける。

「皆の者よ！ 我が愛する下僕達よ！ 今宵、この時、我らアインズ・ウール・ゴウンは目的を達成する！ 我らが神が！ 我らが愛が！ 憎つき光の神によつて封じられてから幾万の月日が流れた！ 我らアインズ・ウール・ゴウンは光の神によつてかけられた四十の封印を見つけ出しそれを撃破する事に成功した！ 封印一つにつき一人、我らアインズ・ウール・ゴウンの仲間達は、至高の四十人達はその身を持つて封印を破壊し戻らぬ者となつた。だが、だがだ！ 今宵、この時、我らの神は復活する！ 見よ！ 神の姿を！ 見よナザリック地下大墳墓の真実を！」

そう言つと ギルド武器を大きく振るう。その瞬間モモンガの背後にあつた巨大なギルドフラッグが音を立てて落ちた。

そして、そこには巨大な肖像画が掲げられていた。黄金の髪と黄金の瞳を持ち、この

石段を一步一步登るたびに、腰までの長さの髪は優雅に揺れ、その豊かな双球はたゆんだゆんと揺れ動く。微妙な動きに対してのグラフィックの追従、その為に大金をかけたキャラクターのデータ量を増やし続けた結果が此処にあった。

YGGDRASILと言うゲームの中で、ビクトリア・F・ホーエンハイムと言うプレイヤーは、そこそこに有名な存在であった。彼女の存在は年月によつて様々な変貌を見せる。最初に彼女の名がゲーム内で語られた時は、雷を纏った獣人としてだった。その二年後、再び彼女の名が表舞台で囁かれた。その時はWeb詩人、情報屋、魔女、様々な言葉で彼女の存在は語られていた。

しかしここ数年の彼女の二つ名は煉獄の王。

それを聞きかじった見た事も無いPKに追われる事も数知れず。不審に思った彼女は、自身のクランのメンバーに相談するも、笑顔のアイコンを出されるだけで何も教えてはくれなかった。友であったギルド、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーに聞いても冷や汗アイコンを提示されるだけだった。最後の頼みの綱と思えば、普段は見ない掲示板を覗いた瞬間、驚きと疑問の渦が捲き上る。それは何故か？

その理由とは知らない間に自分が神様になっていたからである。

投稿者の名前を一つ一つ確認して行く内に、こんな事をしてかした連中が判明して来た。一大叙事詩とも取れる異形の神、煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイムの伝

説を語っていたのは旧知の連中の名ばかりであったから。

その内容はこうだった。

遙かな昔、地上は楽園であった。

く神達は様々な生き物を創造し、それらの者達は楽園で幸せに暮らしていた。

時は流れ、多種多様な種族へと別れた生き物達は自然に光と闇へと別れて行った。

光を宿す者達は美しく可憐に、闇を宿す者達は醜くなつて行った。

光に属する神達は醜い闇の者達を嫌い楽園から追放しようとした。

しかし、最も光に近い雷の神は異形の者を追放するのに反対した。

彼らの姿もまた神々のそうあれと言う意識によつてだと。

だが光の神達はそれを理解しようとしなかつた。

そして戦争が起こつた。

結果闇の者達は破れ地中深くに追いやられ、雷の神は精神と体を分けられ、さらに体を幾つかの断片に分けられこの世界のどこかに封印されたく

そんな内容の叙事詩が、永遠とも取れる程の文字を使って掲示板には書かれていた。

ビクトリア・F・ホーエンハイムは知らない間に神様の精神体にされていたのだつ

た。そこには尾ひれが付き様々なトンでも情報も書き込まれている。たとえば、彼女のHPを0にすれば運営側から特別なクエストへのカギが貰えるや、彼女こそが新たなる世界への扉である、などと言った真に受けるほうがどうかしていると言った情報まであった。

「まったく、思いだすと腹が立つたら……ありやしない！」

そう呟きながらビクトリアはフラッグポールをブンツと横に薙ぐ。

この攻撃によつて眼前のモンスター二匹が砂粒の様な光を残して消えて行く。それを確認しポールを肩に担ぐ戦闘時におけるデフォルトのポーズを取ると正面にある下り階段に視線を向けた。

「現在地下三階。解せないわねー。階層守護者も居ない、POPするのは30Lv以下のモンスターばかり。舐められてる？ それとも………歓迎、してくれているのかな？ アインズ・ウール・ゴウンの皆様。いえ………モモンガさん」

そう言つてドレスの裾を揺らしながら階段を降りて行くビクトリアの表情は、一切の変化を現さないが僅かに微笑んで見えた。



第四階層、地底湖。

第五階層、氷河。

第六階層、ジャングル。

第七階層、溶岩。

第八階層、荒野。

一つ、また一つと広大なマップによって創られた階層を下って行く。しかしどの階層も第一〜第三階層と変わらない状況だった。変化があるとすれば、POPするモンスターのレベルが若干上がった程度。

「うーん。これはこれは、本格的に防衛システムを切っているわね。最後だから玉座の間で雌雄を決しようって事かしら？ 四十一対一、いや、今は四対一か。それはそれで……………素敵ね」

呟きながら歩みは下へ。

第九階層を超え最終、第十階層へ。

「大理石の床と左右に居並ぶレメゲトン、だったかな。ソロモンの七十二柱に守られし玉座の間。冥府の魔王の居城に相応しき場所」

遠くに見える巨大なドアを見つめながら、芝居がかった言葉と共にゆっくりとビクトーリアは歩を進める。玉座の間前室、大広間も半分ほど歩いただろうか、ビクトーリアは足元と体の正面に僅かな違和感を感じた。

そして……………

「ふぎやー！」

盛大に転んだ。

「え？ 何？ 一体…………」

周りをキョロキョロと見渡し誰も居ない事を確認し、やっと自分が自分のスカートの裾を踏んで転んだ事に気づく。そして体の正面に感じる重さに。

「何が起った？！」

両腕で体をさすりながらその違和感に背筋が寒くなって行く。

太ももからでん部へ、そして豊に突った胸へ

「うんっ！」

胸の先端を掌がかすった瞬間、自身の口から艶を秘めた声が漏れる。その声に驚いたのか左手で口元を押さえるとシステムメニューを立ち上げる。

しかし何も起きなかった。

操作はいつも通り、通常なら眼前にステータス、マップ、などの情報が表示されるの

だが、今は何も起きなかった。時間の確認、とっさに思いついたのがそれだった。いつもの習慣でシステムメニュー上に時計を表示するのを怠っていた事を今さらながらに後悔した。

アイテムボックス！ とっさにビクトーリアはそう思う。その瞬間、目の前の空間が歪む、それはまるで水面に小石を投げた時の様だった。恐る恐るその中へ手を入れてみる。心の中で思う物は何の変哲も無いアイテム。アバターのアクセサリーにでもと買った懐中時計。

波紋の中に突っ込んだ右手に僅かな感触が浮かんた。ビクトーリアは慌ててそれを掴みながら手を引き抜く。その右手には鈍く銀色の輝きを放つ懐中時計が握られていた。

慌てて焦りながら、何度も失敗を繰り返しようやく蓋を開く。示されていた時間は……零時二分。

「どう……言う……事？」

混乱の中、やつとの事でそれだけの言葉を吐き出した。

それと時を同じくして、前方にある大扉の中から声が聞こえて来た。知っている声だった。何度も何度も聞いた声だった。

ビクトーリアは縋る様に大扉へと近づいて行く。声はだんだんと大きくなり何を

言っているのか聞き取れる様になって行った。

ビクトーリアは扉に手を掛けようと右手を伸ばす。あと少しで手が届く。だがその指は直前で止まった。

「我が下僕達よ、しかと見よ！ この方こそが我らが神！ 全ての異形の母！ そして………全ての善なる者の敵！ 煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイム様である！」

聞こえて来たのは友からの神様紹介の言葉だった。

そして一瞬遅れて

「ウオオオオオオオオオオオオオオ」

大歓声が響き渡った。ビクトーリアの背がビクリと跳ねる。今、ビクトーリアの全身を支配している感情は恐怖だった。

ナザリック大墳墓に大歓声を挙げられる人員など存在しない。ならばあの声は一体誰の声なのだろうか。逃げだしたい、しかし今自分が逃げ出したら扉の向こうに居るモモンガはどうなってしまうのだろうか？

自分はモモンガを捨てて逃げ出して良いのだろうか？

あの、寂しがり屋で意地っ張りな死の支配者を残して。

ビクトーリアの頭に過去の光景が浮かんでは消える。

その光景はアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーのアカウントが消えた事を知った時のモモンガの姿だった。笑いながら、自分にメッセージを飛ばして来た時の痛々しい声だった。そして、YGGDRASILを辞めていったアインズ・ウール・ゴウンのメンバー達がビクトーリアに残した最後の言葉

「モモンガさんをお願いします」

ビクトーリアは立ち上がり、フラッグポールを握り直すと背筋を直し大扉を開けた。

怨嗟

勢い良く、力強くビクトーリアは両大扉を開け放った。そこに見えた光景は、おびただしい数の異形の者達だった。

足が震いだしそうになり、冷や汗が豊かな胸の谷間を滑り落ちて行く。

ビクトーリアは、必死で先ほど聞いたモモンガの言葉を思い返していた。

そして、何度も何度も心の中で反芻し一步を踏み出した。威風堂々と、モモンガが言う通り神と見える様に。奥歯をギュッと噛み締め威厳に満ちた表情をしよう。優雅に、気品に満ちる様にゆつくりと異形がひしめく道を歩こう。

大扉が開かれた瞬間、その音と空気の震えに反応し、ナザリック地下大墳墓玉座の間に集まったNPC達は全員振り向き戦闘態勢をとった。

それは、力なきLVIの一般メイドも同様に。

そして、全てのNPC達は息を飲んだ。

今、自分達の前に現れた人物は、先ほど自分達の絶対的支配者が神と呼んだ人物と瓜二つだったからだ。

ビクトーリアは歩を進める。進む先は、少しずつ、少しずつ左右に分かれて行き道を

作った。踏鞴を踏む様に後ずさりながら。

ゆっくりとゆっくりとドレスの裾を揺らしながら歩く。背筋を曲げぬ様に気を付けないながら。ただ一点、前方に居るモモンガを見つめて。

緊張がビクトリアの身体を支配する中、気が付けばNPC達は左右に分かれ道を造っていた。

緊張が緩みそうになる。威厳と気品、そんな言葉は何回も何回も繰り返し、自分に言い聞かせ、必死に折れそうになる精神とビクトリアは戦っていた。

気が付けば、異形な者達の道も半分程過ぎていた。だが、これから本番だとビクトリアの瞳に映る者達は無言で語る。

今まで歩いて来た道の左右に居た者達は、ほとんどが姿形では個人を判別出来ない者達だった。それは、NPCとはいえそれほどのリソースを割かれていない者達だろうとビクトリアは判断する。

しかし、ここからは違う。一人一人が個性を持っている。それはつまり、ギルドアインズ・ウール・ゴウンのメンバー達が、何かしら深く製作に関わっている物と容易に想像できたからだ。

メイド達の間を過ぎる。悪魔達の間を過ぎた。あともう少し。ばらばらな、鎧の様な物を身に着けたメイド服を着こんだ者達の横を通り過ぎる。彼女らが戦闘メイド プ

レアデスなのだろう。小柄なダークエルフの横を通り過ぎる、アウラにマーレ、ぶくぶく茶釜の愛しい娘達。ボールガウンに身を包んだ小柄な少女が横に並ぶ、真祖シャルティア・ブラッドフォールン。

彼女らの視線がビクトーリアに突き刺さる。その視線は敵意で満ちていた。後少し、後少しで玉座に続く階段に。そう思った瞬間、行く手を塞がれた。

赤いスーツを着込み、寶石の様な瞳をメガネで隠し、茨の様な尻尾を持つ悪魔、第七階層守護者デミウルゴス。冷気を漂わせる巨体に四本の腕を持つ蟲王、ヴァーミンロード、第五階層守護者コキュートス。

その二人がビクトーリアの前に立ちはだかる。

言葉にはしないが二人が漂わせる雰囲気はこう言っていた。
絶対的支配者（モモンガ）の元へは行かせない。

ビクトーリアは足を止め二人を見上げた。ビクトーリアに比べ、前に立つ二人の身長が高い為、必然的にこう言う図式になった。

ビクトーリアとデミウルゴスの視線が交錯する。その視線からは、明らかな殺意がビクトーリアには感じられた。コキュートスの意思は解らないが、発する気迫からは敵意が滲み出ている。

何故此処までなのか、ビクトーリアには解らなかつた。

じつとデミウルゴスの瞳を見続けながら、モモンガへとメッセージを飛ばしてみる。頭の中で書いた手紙を紙飛行機にして飛ばすイメージ。望んだだけでアイテムボックスが出現した事を鑑みそれを試してみる事にした。

『モモンガさん、聞こえます』

『え？ ビ、ビッチさんですか』

ビクトーリアは安堵した。

繋がって良かったと。

『一体どうなっているんですか？』

ビクトーリアが話すよりも先にモモンガが質問を口にした。

『私にも解りません。何故にこうまで私が怒まれているのか。外敵と言うだけのレベルではありませんね、これは』

『え、怒み？ NPCが？ 俺には一体？』

『モモンガさん、先ほど演説を聞かせて頂きましたが、最初から教えて頂けますか？』

モモンガは『はい』と返事を返すと簡潔に演説の内容を説明した。

『成程、解りました。それはさぞかし私が憎いでしょうね』

『え？』

ビクトーリアは納得した様だったが、モモンガには何を言っているのかがさっぱり解

らなかつた。

ビクトーリアはゆっくりとまばたきをし、二人を睨みつける様に仰ぎ見る。その瞬間、ビクトーリアの瞳孔は爬虫類を思わせる様な縦型に変化した。

「妾を誰と心得る、道を開けよナザリックの階層守護者よ」

いつものビクトーリアの声よりも一段低い声で告げる。それは、底冷えするほどの冷たく平坦な声だった。しかし二人の階層守護者はピクリとも動かない。

この光景に一番あせっているのはモモンガだった。なぜNPCであるデミウルゴス、コキュートスがビクトーリアの前を塞いでいるのか。そしてビクトーリアは怨みと言った、それもNPC相手に。

「ほう、動かぬか……妾も舐められた物よな。ならばその首を落とし進むまでよ」

ビクトーリアはそう言つてニヤリと笑う。その微笑みは邪悪で遙か高みから見降ろす絶対者の笑み。

それに呼応する様に、その瞬間場の空気が一瞬のうちに凍りついた。デミウルゴス、コキュートス、そして場に居る全ての僕から殺気が吹き出したからだ。

何故こうなったのか解らないが、居ても立つても居られずにモモンガは声を出した。

「鎮まれ！ デミウルゴス、コキュートスよ、道を開けよ」

絶対的支配者の言葉に二人は顔を見合わせると、今までの膠着は何だったのかと言う

様にデミウルゴス、コキュートスは左右に分かれ道を作る。二人の心の内は知る由もないのだが。

その間をビクトーリアは、ゆっくりと歩きながら玉座への階段を登って行く。壇上でモモンガが両手を広げビクトーリアを出迎えていた。

その右手にビクトーリアは懐中時計を握らせると子声で囁く。

「モモンガさん、暫くの間私が注意を惹きます。その間にそれを確認して下さい」
そう言うのとビクトーリアは、モモンガの隣でNPC達と向き合い口を開いた。

「皆の者大義であった。妾が煉獄の王　ビクトーリア・F・ホーエンハイムである！　此処に居る瞑府が王モモンガを除く四十人が妾に命を捧げ、妾はその血肉を食らいこの地に舞い戻った」

ビクトーリアの発した言葉に、場のNPCはざわめき、敵意を顕わにし、モモンガは二重の意味で絶句した。

『ビツチさん！』

『モモンガさん。解りましたか？』

『はい。ですがゲームが延長された可能性は？』

『それは無いです。私はビクトーリアの心臓の鼓動を感じています』

メッセージで交わされる会話。

アンデットであるモモンガには解らなかつたかも知れないが、肉体を持つているビクトーリアには解った、解ってしまった。これが現実だと言う可能性を。

仮にゲームが延長、または新たなゲームが始まったとしよう。だがそこに、心臓の鼓動や、流れる冷や汗の感覚を盛り込んで一体何になると言うのだ。

『それにビッチさん、血肉を食らいって、何を言っているんです！』

『これはモモンガさんが言った事です。至高の四十人達は私の為に封印を破壊し戻らぬ者となったと』

『そ、それは……』

言い淀むモモンガを余所に、ビクトーリアはNPC達に向け言葉を続ける。

「妾は此処に蘇り、妾の心は此処にある。そして……妾の身体は至高の四十人が血肉でできておる。ナザリック全ての僕達よ、妾は誓おう此の身、此の力、妾の全てを掛けて汝らを守ると。全ての脅威から、全ての災厄から」

この演説に場に居るNPC達は、自然と片膝を付き礼を取る。だが、ビクトーリアの視線は居並ぶ異形の者達の先頭にいる者達に注がれていた。

その者達はモモンガの手前、形的には礼を尽くしていても、そこからは怒り、憎しみ、怨み、殺意があふれ出していた。各階層守護者、戦闘メイド達である。

自分達の創造主の血肉を食らい、自分達から奪った者が代わりに自分達を守ると言っ

ている、それはまるで出来の悪い冗談だった。

『ビッチさん。なんで皆の事を？』

『ああ言えば少なくともモモンガさんへ敵意が向く事は無いでしょ』

『だから何で！』

『だってモモンガさん、あなた……彼らを殺せないでしょ』

『な！』

『モモンガさん、気づいていないんですね。彼ら、NPC達は明確な意思を持って生きています』

『そんな！』

『本当です。先ほどデミウルゴスの瞳から、明確な殺意を頂きましたから。そんな彼らから襲われたら、反撃できますか』

ビクトーリアからの冷静な分析にモモンガは言葉を失う。何かを言わなければと苦悶するモモンガの視線が白い影によって塞がれた。

「皆の者、顔を上げなさい」

背筋を伸ばし、つややかな黒髪を垂らし、女神の如し容姿を持った女性。守護者統括アルベドが二人の前に立つ。

「我らが絶対的支配者モモンガ様の御言葉通り、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハ

イム様が至高の四十人様の……お……お力によりこの地に再誕なされました。しかしそのお力は完全には戻ってはおられず、しばしの休養が必要」

アルベドはそこまで言うかと視線を背後に向けると

「モモンガ様、ビクトーリア様、ご自愛を」

その言葉を受け、モモンガはビクトーリアを自室へと誘う。ビクトーリアも精神的にギリギリの状態であった事と、この場からの脱出の機会を得た事でそれを了承する。

モモンガはビクトーリアの肩に手を掛けると転移の呪文を発動した。去り際、ビクトーリアはアルベドの自分と同じ黄金の瞳を見つめ

「ありがとう」

その一言を残し、二人の姿は玉座の間から消えた。

二人が消えた空間を黙って見つめるアルベドの瞳から涙が一粒こぼれ落ちた。



支配者二人が消えた玉座の間では階層守護者、戦闘メイド達だけが残り顔を突き合わ

せていた。

「アルベド！ 一体どう言う気ですか！」

デミウルゴスが激昂し守護統括アルベドに喰つてかかる。

「何かおかしな事でもあったかしら、デミウルゴス」

アルベドは、何事も無かった様に涼しい顔で向き合う。

「あのような、我らの創造主の血肉を食らつて蘇つて来たような化け物に対してのあなたの行動の事です」

「化け物……」

アルベドの眉がピクンと跳ねる。

「そうです！ 何故に我らが創造主が、あのような化け物の為に命を散らさなければならぬのです！ それほどまでにアレに価値があるとでもいうのですか！」

アルベドは、デミウルゴスの言葉を受け周りに居る者達へと視線を向ける。一様にその表情は暗く憎しみが溢れだしていた。アルベドは一言「解りました」と呟くと皆に声を掛ける。

「第一く第三階層守護者シャルティア・ブラッドフォールン」

「な、なんでありません」

「あなたは どう思っているの？」

アルベドの問いにシャルティアの瞳はスツと細く淀み

「首を引きちぎっても心が晴れる事はありません」

この答えにアルベドは一言「そう」と呟くと次の者へと視線を移す。

「第五階層守護者コキュートス、あなたは？」

「アノ者ガ、我が創造主ガ命ヲ賭ケル程ノ強者カドウカ」

「第六階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラ、同じくマール・ペロ・フィオーレ。」

名前を呼ばれるが、ダークエルフの双子は目に涙を浮かべ話す事が出来なかった。

「ナザリック地下大墳墓執事セバス・チャン」

「あの方がそうするべきだと判断したのなら」

「プレアデス副リーダー ユリ・アルファ」

「ぼ、いえ、私には判断しかねます」

「プレアデス ルプスレギナ・ベータ」

「気に入らないっすねえ」

「プレアデス ナーベラル・ガンマ」

「ウジ虫以下の存在です」

「プレアデス CZ2128・Δ、シズ・デルタ」

「解らない、でも神様だから……」

「プレアデス ソリュシャン・イプシロン」

「神様とはどんな味なのでしょうか」

「プレアデス エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ」

「パクパク」

アルベドは一通り意見を聞くと、皆に背を向け大扉に歩きながら

「そう、解ったわ。モモンガ様には私からそう伝えます」

その言葉を残し玉座の間から姿を消した。

誰も気づかなかったが、その顔には涙と怒りが溢れていた。

策謀

ドスン！ ナザリック地下大墳墓第九階層に地響きと共に破裂音が響く。

「化け物ですって……あのお優しい、美しく慈悲の化身の様なビクトーリア様が化け物？ 至高の四十人の血肉を食った化け物？ ナザリックを捨て私達を捨て……モモンガ様を悲しませたあの者達に劣る存在？ 何も知らないくせに。玉座に座りながら何度も、何度も、何度も悲しい声で別れをおしやっていたモモンガ様を知らないくせに。どれだけモモンガ様がビクトーリア様に救われたかも知らないくせに！」

そう言つてアルベドは何度目か解らぬほど壁に拳を叩きつけた。ハアハアと息を乱しながらやつとと言つた感で拳を引き息を整える。

そして

「大丈夫ですビクトーリア様。誰が知らずともこのアルベドは知っています。あなたの愛を……愛していますビクトーリアさま。いえ、ピッチ様」

アルベドは蕩けた様な表情で呟いた。それは甘い夢を見ている様に。そのアルベドにつきさつき自分達の支配者が語つた言葉が蘇る。

“私の物となれビクトーリア・F・ホーエンハイムよ……”

未だに涙を流し続ける二人をユリはなだめていた。優しく言葉を掛け、何とかユリはなだめようと必死になって話しかける。そんな中唐突にマールレが口を開いた。

「ぐすつ、お姉ちゃん。ビクトーリア様ってあのビッチさんなのかなあ？」

「う、うん。たぶん……………」

二人のこの言葉に驚いたのはユリだった。

ユリ自身もビクトーリアの名前を聞いた時に同じ疑問を持っていたからだった。

恐らくこの疑問を持つ事が出来る者は、ナザリックNPCの中でも三人の他には、メイド長ペストーニャ・ワンコだけだろう。その理由は、この四人の創造主がギルド内で三人しかいない女性メンバーだった事が起因する。他の男性メンバーとは違い、この三人、ぶくぶく茶釜、餡ころもっちもち、やまいこは定期的に第六階層に集まり、自分達が創造したNPCとお茶会をしていたからだった。

その場所で良く話題に出ていたのがビッチさんと言う名前だった。

仕事が忙しくなり、なかなかIN出来なくなつた事に後ろめたさを覚えていた三人は事ある毎にモモンガを外に連れ出していたビクトーリアに感謝していた。

その時の会話を三人は覚えていたのだった。

「でも、そうだとするとホントなのかな？」

マールレが改めて疑問を口にする。

「うん、私もちよつと信じられないかな。茶釜様がおつしやつてたビツチさんは優しく
て思いやりのある方だったから」

このアウラの意見にはユリも同感だった。自分の創造主であるやまいこが信頼する
人物が友の血肉を食らうのだろうか。自分が生き返る為に友を殺すのだろうか。

ユリは自分の内にあつた考えを、思い切つて打ち明けてみた。

「アウラ様、マール様、一度モモンガ様にお聞きしては見ませんか？」

「モモンガ様に？」

二人から同じように返事が来た。

「それに先ほどのデミウルゴス様とアルベド様の会話、なんだかアルベド様の様子がお
かしくて」

ユリは、先程の二人の会話の違和感を覚えていた。それを踏まえての提案だった。ア
ウラはその言葉を受け一度大きく頷くと

「じゃあ、後で尋ねてみようか」

そう言つて三人は、連れ立つて玉座の間を出て行つた。



第九階層にある自室に転移したモモンガとビクトーリアはぐったりと伏せっていた。モモンガは大きめのソファアーにどっかりと腰を下ろし、ビクトーリアはベッドに倒れ込んでいる。

「しかし……ホントに現実なんですかね」

そう呟いたのはモモンガだ。

「それは間違いないと思いますよ。モモンガさんと出会う前に私一度転んだんですが痛みありませんでしたもん」

「成程、痛みですか……………」

モモンガはそこまで言っただけで淀む。

「どうしましたモモンガさん？」

問われたモモンガは、どう答えようか逡巡したが意を決して口を開いた。

「あの一、ビッチさん」

「何です？」

「スカートがはだけて、その、下着が丸見えです」

そう、現在ビクトーリアの豪華なドレスは盛大にめくれ、豪華なレースと刺繍が施さ

れた恐らくシルクであろう下着と、そこから伸びる白く扇情的な太ももが丸見えだった。

「そうですか」

そっけない言葉を返しながらビクトリアはもぞもぞとスカートを直す。その姿は優雅とか気品などと言った物とは180度違う物だった。一言で言うならば、だらしない娘がそこに居た。

「でもこれでYGGDRASIL、もしくはYGGDRASILIIと言う線は完全に消えましたね」

「ええ、下着を見せるなんて欲情を誘う行為は出来ませんでしたから」

そこでお互いの言葉が途切れる。

だが最初に沈黙を破ったのはモモンガだった。

「これからどうします?」

「そうですねー。まあ、私の好感度がヘル Heim まで落ちているのは解っているので、モモンガさんの好感度調査とかじゃ無いですか? どう動くにしろ誰が味方なのか知らなければ動けませんから」

「そうですねー」

モモンガは気だるげな声で返事を返す。しかしそんなモモンガも急に姿勢を正し座

り直すと

「それにしてもビッチさん、何で全部の罪を背負う様な事を？」

「そう言う訳でも無いんですけど、先ほども言いましたけどモモンガさんは戦えないでしょっ。」

問われたビクトーリアは依然ベッドに寝転んだまま答えた。

「それはそうですが、周りにいたのはI O O L V N P C達ですよ」

「まあそうですね。いざとなったらアレを使えば逃げる事ぐらいはと」

「ああ、あれですか。まあそれは確かに……」

これからどうすれば良いのかと回らぬ頭で考え込んでいたいた時、ガバリと勢い良くビクトーリアが起き上がった。

「どうしたんですビッチさん！」

一体何があったのか、モモンガは慌てて問いかける。だがその答えは……

「モモンガさん……胸がつぶれて呼吸が出来ませんでした」

「はあ？ だったら仰向きに寝れば良いでしょうに」

「そうですね」

そう言つてビクトーリアは仰向けに寝転んだ。その瞬間、先ほどよりもさらに勢いよく起き上った。

「どうしました！」

「胸が左右に引つ張られて……すつごく痛い」

たわわな乳房を持ち上げながらビクトーリアは涙目になっていた。モモンガにとっては心配のし損である。

「……………何やってんだあんたは！」

「うるさい骸骨！ 巨乳なめんな！ 骨には解らん痛みなんだぞ！」

「そんなもんリアルでも知らんわ！」

ギヤーギヤーと言ひ合う骨と美女。そこには魔王としての威厳も神としての神々しさも何も無かった。ストレスの為か二人のじやれ合いは次第に過激になって行く。ドツタンバツタンと大きな音を立てながら取っ組み合いは続けられ向き合いながらのこう着状態となった時、おもむろに部屋の扉が開かれた。

「モモンガ様、大変不敬とは存じておりますが、幾らお呼びしてもお返事が無いため失礼させて頂きます」

礼儀正しい言葉と共に守護者統括アルベドが入室して来た。モモンガの自室へと一歩を踏み入れた瞬間、アルベドの表情は固まった。眼前に繰り広げられている光景、両の腕で豊かな乳房を守る様に抱きしめているビクトーリアと、両の掌を開きニギニギとさせているモモンガ。

簡単に言えば死の支配者にセクハラをされている女神。そんな光景が目の前にはあった。

「アルベド？」

「ア、アルベド？」

キョトンとする神、動揺する死の支配者。

「モ、モモンガ様、それは……」

「ア、アルベド！ こ、これは、これは違うぞ！」

此処からのアルベドの行動は早かった。

「ビッチ様、ビッチ様」と呟きながらクラウチングスタートの様に駆け出すとビクトーリアの背後を取りその豊かな乳房をむんずと揉みしだく。

「ビッチ様、ああ、ビッチ様、素敵です、感動です。この柔らかさ、この重さ。まさに、まさに……」

その言葉にモモンガは慌てふためいた、それほどまでに素敵な物なのかと。

「ア、アルベドよ！ そんなになのか！ それほどの物なのか！」

「はいモモンガ様、これぞ至高の逸品！ 素敵です！ ああ、掌がとろけてしまいそうです……ビッチ様、ビッチ様、愛しています、愛しています、愛しています！ く

ふーーーーー！」

アルベドはもはや自我を失い胸をまさぐるだけの装備と化し、モモンガは混乱と常識を逸した眼前の光景に飲み込まれその骨ばった、いや、骨の掌をニギニギさせながらビクトーリアににじり寄る。

ビクトーリアの全身を恐怖とは違う何かが支配する。いや、正確に言えば恐怖に分類される物なのだろうが、死や危険に対する物とは全く別種の貞操の危機と言う物だ。

ビクトーリアはひとえにテンパッテいた。頭の中がグルグルと回る。何も考える事が出来なかった。出来る事はたった一つだけ。

「お、お前ら、いい加減にしろー！ー！」

バチンと言う破裂音がした瞬間ビクトーリアの身体が発行し稲光をあげる。その光が収まった場には満足そうな笑顔を浮かべる守護者統括と、ブスブスと煙をあげる死の支配者が横たわっていた。

衝突

モモンガはナザリック地下大墳墓第九階層、通称円卓の間でブツブツと愚痴めいた言葉を呟きながらぐったりと頭を垂れていた。

「はあー、解つてはいたけど、ビツチさんへの好感度は凄い事になってるなあ。何とかなりそうなのはコキユートスぐらいか……。それにしても悪い事したな、最初は冗談から始まった事なんだよなー」

自分達の過去の行いを悔むモモンガだったが、部屋の扉をノックする音で現実への帰還を果たす。

「うむ。入れ」

魔王ロールで入室を許可する。

「第六階層守護者アウラ・ベラ・フィオーラ」

「同じくマール・ベロ・フィオーレ」

「入ります」

緊張した双子の声が響いた後、軽い音を立て扉が開き二人は姿を見せる。

今モモンガが何をしているかと言う事をまずは説明すべきだろう。

現在モモンガは円卓の間で新入社員の面接宜しく僕達を一人ずつ呼び寄せ自分とビクトーリアの好感度調査を行っている最中である。

最初は第六階層に皆を集め、一度にすませてしまおうと思っていたモモンガだが、細心の注意を払うべきと言うビクトーリアの助言を受け、一人ずつの応対とした。

最初に結果を話してしまえば、結果は想像の通りだったと言う事だ。モモンガへの好感度はストップ高と言つてもいい程の物で、方やビクオーリアについては語るのも悲しい程の散散たる物であった。

そして最後に呼び出されたのが、先ほど部屋へ入つて来たアウラとマーレである。

モモンガは二人に腰かける様促すと、レモンの入ったグラスに水を入れ差し出した。

「モ、モモンガ様！」

アウラはモモンガの行動に驚き声を上げ、マーレは口元に手をやりながら言葉を失つた。

「どうした二人とも？ 冷たいうちに飲むと言い」

モモンガが笑顔？でそう促すと二人は元氣よく返事を返しグラスに口を付ける。水を飲み終え二人が一息付いたのを確認すると、モモンガは口を開いた。

「アウラ、そしてマーレ。私は二人にとってどう言う存在だ」

「お優しく、偉大な御方です」

アウラは元気よく答える。

「すつごく優しい方だと思います」

マーレは緊張からか若干小声だが迷いなく答えた。ここまでは今までの僕達と同じ。本題はここからだった。

「ではもう一つ質問だ。ビッチさん。いや、ビクトーリア・F・ホーエンハイムと言う人物はどうだ？」

モモンガにとつてこの質問は非常に悲しい物だった。自分達の冗談から始まり、自分の作り話で大切な友を非情な立場に追いやってしまったのだから。重い気持ちで双子の言葉をモモンガは待った。

アウラとマーレの方はお互いに目を合わせると、何かを確認する様に一度頷き口を開く。モモンガに質問して見ると言う絶好の機会が今訪れているのだ。アウラとマーレは、思い切つて先程のユリとの話の中で出て来た案件を聞いてみる事にした。

「モ、モモンガ様。ビクトーリア様は、茶釜様がおっしゃっていたビッチさんなのでしょうか？」

アウラが代表して口を開く。

この問いにモモンガは何故そんな事を？ と疑問に思いながらも素直に答える事にした。

「そうだ。私達がビッチさんと呼ぶ者はビクトリア・F・ホーエンハイム唯一人だ」

この答えに二人は声には出さなかったがその表情は「やっぱり」と言った物だった。「では、ではモモンガ様、なぜビクトリア様は至高の御方達を、茶釜様を殺したんですか！ 茶釜様、館ころもつちもち様、やまいこ様は、その、楽しそうに、まるですごく、すごく感謝している様にあの方のお話をなさっていました。そんな方が何で！ 何で茶釜様達を……」

アウラは涙を隠すこと無くモモンガに詰め寄る。隣ではマーレも目に涙を貯めている。本当の事を話すべきなのか、モモンガは困惑する。本当の事を話せば、少なくともビクトリアへの風当たりは少しは緩和される。

だが、至高の四十人はお前達よりも別の物リアルを選んだと言ったらどうなるんだろうか？ お前達は捨てられたのだと言ったらどうなるんだろうか？

彼ら、彼女らはもうお人形さんでは無いのだ。単なる拠点防御用の駒では無いのだ。自らの意志を持って動く事が出来る者達なのだから。そんな自分達の子供を悲しませる様な行為を進んでしたのなら、自分はビクトリアに見捨てられるだろう。

いや、最初の九人と呼ばれる前からずっと見守って来てくれた恩人から、アインズ・ウール・ゴウンと言うギルドは見捨てられるだろう。二度とビクトリアを友と呼ぶ事が出来ないだろう。だからモモンガは嘘を吐き通す事を決めた。ただ努力だけはして

行くこうとも思う。あの照れ屋で優しい友人と共に歩んで行く為に。

モモンガはそう決意をし口を開いた。

「アウラ、マールよ、ビクトーリアさんの言う事は真実だ。だが少々誇張的でもある」

「誇張、ですか？」

二人の声が重なる。

モモンガは一度大きく頷くと

「そうだ、ビクトーリアさんの身体を封じた封印はY G D R A S I Lには無かった。それはお前達の居る世界の外、リアルと呼ばれる世界にあった。その世界はお前達の知っている至高の四十一人の姿、つまりはお前達が今見ているこのモモンガの姿では行けぬ場所にあった。そこで我らは一行を案じた。別の入れ物を用意し私以外の至高の四十人はリアルへと旅立ち封印を破る事にしたのだ」

アウラとマールの喉がゴクリと鳴った。

「しかし封印を見つける事が出来たが、それは非常に悪意に満ちた物だった。その封印はs y a i n と呼ばれる物で、そこから誰かが脱出に成功してもその中に誰かが入らなければ災厄が起こると言うものだった」

「s y a i n」

二人の額に汗が滲む。

「モモンガ様、syainを空にするとどのような災厄が？」

アウラが質問を口にする。モモンガは顎に手をやると一泊置いて答える。

「各々、syain一つに対して一つの社会が破滅の危機に陥る。つまりは四十の社会が、四十の世界が破滅の危機を迎える」

「ー」

「その為に皆は、ビクトーリアさんの身体の一部と引き換えにsyainへと身を捧げたのだ」

「で、では茶釜様達は……」

「生きていると言う事だ。だが、次元の壁は壊れ世界に帰還は不可能となった」

「それではビクトーリア様の言った血肉を食らったと言う言葉は……」

「自分が犠牲の上に成り立っていると言う意味だ」

モモンガの言葉にアウラは言葉を失いマールは茫然としていた。

しばしの沈黙の後やつとの事でアウラは口から言葉を吐き出す。

「それほどまでにビクトーリア様は必要な方なのですか？」

「必要だ」

モモンガははつきりとした言葉でそう言い切った。

恐らくこれはアウラが言っている事とは意味が違うのだろう。だが、モモンガにとつ

「こうかな？ それとも……こう！」

両手と上半身を使ってアレコレと試すその姿はお世辞にも上品とは言えず、まるでタコ踊りを踊っているようだった。

そんな呑気に踊る彼女の背後から声がかかる。

「ビクトーリア様」

「なにかな？」

背後から声をかける人物、それはナザリック地下大墳墓執事セバス・チャン。

「私が背後に居てあなた様は襲われるとは思わないのですか？」

「襲いたければ襲えば良い。私はそれだけの事をしたのだから」

セバスの問いにビクトーリアは飄々と返した。まるで何の危機感も感じていないように。セバスと言うNPCがそんな事を決してしないと知っているかの様に。

その言葉を最後にビクトーリアの動きが止まり金色の瞳、その瞳孔が爬虫類を思わせる形に変わり遠隔視の鏡をじっと見つめる。急激な雰囲気の変化にセバスは疑問を持ちビクトーリアの背中越しに遠隔視の鏡を覗き見た。

「祭り、ですかな？」

セバスは素直に見たままを口に出す。

二人が見つめる遠隔視の鏡には小さな集落の中を走り回る人間達が写しだされてい

た。

ビクトーリアはセバスの問いに小さな笑みをこぼすと

「違う。これは虐殺だ」

小さな声で呟いた。

セバスはコホンと咳払いを一つ吐くと

「いかがなされますか？」

平坦な声で問いかける。その声には何の感情も込められておらず、ただ指示を待つ人形の様だった。

「セバス」

凍える様な声色で自分の名前を呼びながらビクトーリアが振り返る。その姿は先ほどまでの気の抜けた様な姿では無く、遙か上位から見降ろす支配者の物だった。

その爬虫類を思わせる黄金の瞳に射抜かれたセバスは身動きが取れなかった。いや、本能的とでも言えば良いのだろうか、セバスの中の何かが動いてはいけないと判断していた。

「セバスよ、お前がそれを言うのか？ アレを見てナザリック地下大墳墓の誰でも無いお前が、お前の口が言うのか」

そう言うのとビクトーリアはアイテムボックスを開くとスクロールを一枚取り出し展

開させる。その瞬間ビクトーリアの前に闇が浮かんだ。ゲートの魔法を発動させたのだ。

その闇に向けビクトーリアが一步を踏み出そうとしたその時。まさにその時

「御一人では危のう御座います。このセバス・チャン御供を務めさせて頂きます」

そう言つて胸に手を当て執事然とした礼をする。その言葉、その仕草を見たビクトー

リアは嬉しそうに、心から喜びを表す様に

「許す。やはり彼の魂は君と有る様だ」

そう言つて微笑みを向けた。そして二人は闇へと歩み出した。

カルネ村

危機

普段なら、夜鳥の鳴き声と漆黒が支配する夜の森を、二人の少女が走っていた。一人の少女が、自分より小さな女の子の手を引いて。姉妹なのだろうか、顔立ち、髪の色などに似た物を感じる。

姉であろう少女は、ハアハアと荒い息を吐きながら、妹の手を絶対に離さないと叫びながら強く握りしめ、懸命に走る。妹は、少しでも姉に負担をかけまいと、必死で足を出し付いて行く。

(ハアハア、息が苦しい、喉が張り付く、心臓の鼓動が鼓膜を破りそう)

心の中では弱音を吐いても、妹の前では吐く事は出来ない。後ろを振り返り妹に？せ我慢でしか無い笑顔を見せた。それがいけなかったのだろうか、不意に見えた姉の笑顔に、妹の気が一瞬緩んだ。それは、ほんの一瞬だった。その瞬間、妹の足は木の根に捕らわれた。そして、姉と共に地面に打ち付けられる。

その瞬間、本能なのかはたまた無意識での事なのか、姉は妹を抱きしめ、地面に倒れ込んだ。すぐに体を起こそうと姉はもがくが、痛みの為か、上手く動いてはくれなかつ

た。

気だけが早る中、後方、自分達が来た方向から、硬い、金属が擦れる音が近付いて来る。ガシャガシャと騒がしい音が、次第にゆっくりになり、大きくなつて行く。そして、音が止まった。

姉は視線を後方へと向ける。そこには……………絶望があつた。

「はっ！ やつと追いついたぜ。まったく逃げ足の速い」

中心の男が息を切らせながら呟く。

「頭にきて殺つてしまふなよ。楽しまなきや損なんだからな」

右側の男が下卑た笑いを浮かべながら言う。

「俺は小せえのを頂くぜ。おもちゃとしては良い塩梅だ」

左側の男が狂気を含んだ瞳で話す。

鎧を着込み、剣を手にした三つの絶望が絶対的な弱者を嗤う。

ズリズリと姉は妹を抱き抱え、少しでも遠くへと這いつて行く。しかしその行動は何の意味も見出さない。姉妹が一生懸命這いずつた距離など、大人の一步にも満たないのだから。

ズリズリと男達が近寄つて来た。「嫌、嫌」と姉は呟きながら這いつて行くが、男達の手は姉妹に伸びる。

「いやー……」

姉は地面を掴み眼前に迫る男達に向け土を投げつけた。

「うえ。ぺっぺっ。てめえ」

土は中央の男の顔にかかり、一步後ろに下がった。ただそれだけだった。

反抗された事に激高した男が腕を振りかぶる。その腕には剣が握られていた。

振り下ろされれば、そこで終わり。姉は、せめて妹だけでもと抱きしめた。強く強く目を瞑り、それ以上に強く妹を抱きしめる。

だが痛みは襲っては来なかった。代わりに、生暖かい何かが自分達に降り注いでいるのを感じた。

姉はゆつくりと閉じられていた瞳を開いていく。

その瞳には、背後から延びる白金の棒と、頭頂部の代わりに赤い液体を噴出する、人だった物があつた。自分に降りかかっていた物が、目の前でまき散らされている物なのだ、姉はやつと理解した。

そして、恐る恐る背後を振り返つてみる。そこには闇があつた。木々達が創る闇よりも、なお暗い漆黒が。

そこから白金の棒が突き出ていた。いや、ゆつくりだが前へと進んでいた。ゆつくりゆつくりと、白金の棒は前へと進む。その後には黄金に輝くガントレットが現れ、同じ

く黄金のグリーブが、そして最後には人の姿が現れた。

黄金色に輝く髪をなびかせながら、赤いドレスを纏った人物が。

その人物は、一步一步確認する様に姉妹の横を通り過ぎると、残った二人の男と向き合い、棒を横に薙いだ。ブンツ！　と言う空気の切れる音と共に、狂気を含んだ瞳をしていた男の上半身がかき消える。

一瞬の出来事だった。姉は何が起きたのか解らず、赤いドレスだけが眼に映る。

その時、少し離れた場所からドスンと言う衝撃音とベチャリと言う破裂音が聞こえてきた。

ここで姉は初めて理解する。男の上半身は消えたのでは無かった。切断され、弾き飛ばされたのだと。

圧倒的な力、理不尽、などの言葉が陳腐に感じるほどの力の差。これを言葉にするとすれば、運命かもしれない。今、目の前にいる人物と出会わない運命は幸せ、出合ってしまったのは不幸。その者は只そこにあり、それだけである様に。

姉の身体を、先ほど感じた死への恐怖以上の感覚が支配する。

歯はかみ合わず、いつの間にか、自分の下半身を生暖かい液体が濡らしているのに気づく。

最後に残った男は、転びそうになりながら数歩後ろに下がると、踵を返し全速力でこ

の場からの脱出を図っていた。見る見る内に男の身体が小さくなつて行く。赤いドレスを着た者は、持っていた棒を地面に突き刺すとパチンと指を鳴らす。

姉はその時初めて気が付いた。棒はただの棒では無く、先端に青い旗が揺らめいていた。それはフラッグポールと呼ばれる物だった。

赤いドレスを着た者の上空がグニヤリと歪み、ストーンと地面に突き刺さる様に同じフラッグポールが出現した。先ほどの物と全く同じ、いや僅かな違いしか無い物だった。僅かな相違点、それは旗の色が赤だった事。

赤いドレスを着た者は、赤い旗の付いたフラッグポールを掴み取ると、まるでペンを回す様に指先で遊びそれを投擲した。投擲と言う仰々しい言葉を使つてはいるが、実際には片手で軽く投げた様にしか見えなかった。

しかし、指から離れたフラッグポールはバチバチと小さな音を立て、うつすらと光の帯を纏いながら、信じられないスピードで男に迫つて行く。

そして、フラッグポールはまるで抵抗など無い様に、男を貫通し爆発を起こした。ポーンツ！ という破裂音と周囲を照らす明かり、そして僅かな地響きを残して男の姿は地上から消えた。

姉妹はただボーゼンとそれを受け入れる事しか出来なかった。そこには恐怖も絶望も無く、ただ赤いドレスを見つめていた。そしてその時

「大丈夫ですか？」

背後から低く優しい声が聞こえた。

蹂躪

「大丈夫ですか？」

姉は声の主を見る。

そこには、田舎の村には似つかわしくない、執事服を着こんだ老人がいた。

髪は白く、蓄えた口髭も同様に真白だ。猛禽類を思わせるその瞳は、彫りの深い顔立ちに刻まれる皺によつて緩和され温厚に見える。

執事服の老人は姉の肩に手をやると、先ほどの言葉をもう一度二人に掛けた

「大丈夫ですか？」

その問いかけに、姉は我に帰つた様に慌てて返事を返す。

「は、はい。ありがとうございます。あの、お名前は？ あ！ 失礼しました。私はエン

リ、エンリ・エモットです。この子は妹のネム」

そう言つてエンリは頭を下げる。恐怖の残滓で固まっていたネムも、姉に習つてちよこんと頭を下げた。執事服の老人は、その行動を微笑ましく見つめながら、優しい笑みを浮かべると

「私はセバス・チャン。セバスと呼んで下さい」

「は、はい。セバス様」

弱々しいながらも、ハッキリと返事を返したエンリは、視線を赤いドレスの者へ向ける。

無言だが瞳は有言に「あの方は？」と尋ねていた。それに気付いたセバスは、同様に赤いドレスの者へと視線を向ける。

その者はセバス達に背を向け、硬い表情で、自らが殺害した者達の骸を見ていた。赤いドレスの者、ビクトーリアは思考の中にいた。自分とモモンガは、想像以上にやっかいな現状に立たされているのでは無いか、と目の前の物が語っていたからだだった。

最初ビクトーリアは、この件を装備などから見て中級プレイヤーによる下級、新前プレイヤーに対しての集団PKでは無いかと推理した。

しかし実際は違っていた。自分の倒した者の骸が、一向に消える気配が無いのだ。

それに、YGGDRASIL内では、キャラクターの四肢の切断などのグラフィックは用意されてはいない。R-18、つまりは性的表現ばかりでなく、過度な残虐的な表現も規制されていたからだ。キャラクターでは血しびき程度で、体の一部欠損などはほんの一部の大型モンスターに限られていた。

しかし、目の前の物体は何時まで経つても消える事は無く、血の匂いを漂わせている。今までビクトーリアは、ゲームが現実になったのでは？と考えていたのだが、それ

は呑気すぎた。現状はもつと深刻で、もつと思慮深く行動をしないと破滅ルートへ一直線と言う結果が待っているだろう。

しかし止まっても居られない。ビクトーリアは現状を打開し、なおかつ、この状況での戦士と思われる者達の強さを確認するべきと判断した。

そう決めたのなら一刻も早く行動を開始するべきだ、との考えに至ったビクトーリアは振り返る。

「セバス。その者達の保護、及び警護は任せる。妾は村へと赴く。後は頼むぞ」

そう言うと、返事も聞かずにビクトーリアは前へと歩を進めた。セバスは去って行くビクトーリアの背を、その猛禽類の様な瞳で見つめながらはつきりと「は！」と了承の返事を返す。その姿に自身の創造主の姿を重ねながら。

エンリとネムは言葉が出なかった。振り返った赤いドレスの者は美しかった。自分の知る、どんな美辞麗句を重ねても表現できない美しさがあった。暫く呆けていたエンリだがやっつとと言う感じでセバスに問いかける。

「あの方は？」

この問いにセバスは表情を引き締め

「あの御方はビクトーリア様。ビクトーリア・F・ホーエンハイム様。」

彼女の名前を聞き、エンリは、いやネムも目を見開く。

そして眩く様に

「……………煉獄の王」

この眩きに、今度はセバスが驚愕した。



やっとの事で新入社員面接、もとい、好感度調査を終えたモモンガは、ビクトーリアが居る執務室を訪れていた。愚痴を聞いて貰おうとモモンガはドアを開けたが、そこには誰一人居なかった。

疑問に思いビクトーリアへとメッセージを飛ばしてみる。しかし返事は無かった。

急ぎアルベド、ユリ、そしてメイド長のペストーニャ・ワンコにメッセージを飛ばし、ビクトーリアの搜索の指示を出す。時間にして約十分、返事が返って来た。結果は発見出来ず。

この事にモモンガは慌てた。執務室をウロウロと徘徊しある事を思い出す。この部屋にはもう一人執事が、セバスが居た事を。

慌てながらメッセージを飛ばそうとしたモモンガの眼に、机の上に置きっぱなしになつていた遠隔視の鏡が映る。

そこに映し出されていた物は、戦士らしき者達を蹂躪するビクトーリアの姿だった。



優雅に、だが足早にビクトーリアは村へと急ぐ。

木々が薄れ、地面がはつきり解る様になると家屋が見えて来た。それと同時に、鎧を着込んだ者達と地に伏せる者達も見える。

鎧を着込んだ者達は楽しげに、しかし狂気を含んだ声を挙げ、地に伏せる者達はすでに者では無くなつていた。

近づけば近づくほど、その場の異常性が顕になつて行く。ある者は骸に剣を差し続け、ある者は血まみれの女を犯し続けていた。周りの者もそれを咎める事もせず、逆にあおる様に騒ぎ立てる。

ビクトーリアはゆっくりと、しかし注目を集める様にその者達に近づきフラッグポー

ルを振るう。一振りで一人、もしくは二人の胴を、首を跳ね、血しぶきが舞い散る中それがレッドカーペットであるとしても言う様にビクトーリアは進む。

ビクトーリアの前には生者と混乱が広がり、後には死と静寂が付き従う。

まるで、ステップを踏むかの様に相手に近づき、ダンスを踊るかの様に命を奪う。一言も言葉を発する事も無く、その顔には何の表情も浮かんではいない。それが当たり前であるかの様にフラッグポールを振るい、命を刈り取っていった。

そんな舞踊を踊り続ける中、ビクトーリアの意識は後方へと向けられる。ズシンズシンと地を鳴らしながら何者かが近付いて来たのだ。

ビクトーリアは、本能的にそれが人では無い何かだと確信した。

そして、それが姿を現す。白骨化した巨大な身体に鎧を着込みうねった剣、フランベルジュとタワーシールドを装備した者。

アンデッド、死の騎士デス・ナイト。

「デス・ナイト?」

ビクトーリアは、そう呟くと動きを止め指を弾く。先ほどと同じように上空が歪み、一本のフラッグポールが出現した。しかし、先ほどとは違い旗の色は現在使っている物と同じ青だった。だが、旗の刺繍は現在使っている物よりも少しだけ豪華に見える。

ビクトーリアは、それを掴むとデス・ナイトへ向け走り出す。

フラッグポールからは、バチバチと言う音と湧きあがる様な光の線が見てとれた。恐らくは何らかの魔法属性の武器であると思われる。

ビクトーリアの顔にうつすらと微笑みが浮かぶ、まるで戦いを楽しんでる様に。

デス・ナイトの直前で、土煙りを上げながら停止するとフラッグポールを横に薙ぐ。

その瞬間

「待ったー!」

上空から声が響いた。

絶望

「待ったー!」

その声に反応しフラッグポールをあと数センチと言う所で止めたビクトーリアは空を仰ぎ見た。そこには、漆黒のアカデミックガウンを纏い焦った様に右手を付き出す死の支配者の姿があった。

「あれ、モモンガさん?」

モモンガは地面に降りるとゆっくりとビクトーリアに近づくと

「何やってんだアンタは! 部屋に居ないと思つたらこんな所で好き勝手暴れて心配する方の事を少しは考えて……」

怒りの感情を顕にしていたモモンガが急に押し黙る。

「どうしました?」

「いえ、精神が沈静化された様で」

この言葉にビクトーリアは首を捻りながら

「どう言う事です?」

「アンデッドの基本特殊にある精神作用無効化の影響で、感情が一定以上になると強制

的に沈静化されるらしいんですよ」

「それって、心が種族に引つ張られているって事ですか？」

「恐らくは。実際、そこに転がっている肉塊を見ても何も感じませんし。ビッチさんもそうじゃないですか？」

モモンガは言葉にはしないが「これだけ殺しても何も感じ無いでしょ」と告げていた。「それに、ビッチさんが此処を助けようとした根っこも、此処が農村のせいかも知れませんが」

その言葉にビクトーリアは成程と頷くと、表情を引き締め先ほど起きた事柄を語り出す。

「モモンガさん、悪い情報があります。どうやら此処はゲームが現実になった世界では無く、別の世界の可能性が……」

モモンガは顎に手をやると、一瞬の沈黙の後

「やはりそうですか。あれを見た時からそうでは無いかと」

そう言つてビクトーリアの殺害現場を指差す。モモンガもビクトーリアと同じ物に違和感を覚え、同じ結論へと辿りついた様だ。

「ええ。ナザリックの防衛に関しても、一度考えた方が良いかと」

「そうですね」

そこまで言うと、ビクトーリアは申し訳なきような表情をし

「モモンガさん、勝手な行動と我がまを言っているのは百も承知でお願いします。この村を助けるのを見逃してもらえませんか」

そいつで頭を下げる。

モモンガはため息をひとつ吐くと

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前」

「は？」

「セバスが俺に言った言葉ですよ」

「セバスが？」

「ええ。たっちさんの子供であるお前が、その言葉を忘れたかって叱られたと言っていましたよ。それがとても嬉しかったとも」

「はあ」

セバスの抑揚のない物言いについてカッとなって言ってしまった。その時の事を思い出しビクトーリアの顔は赤く染まる。

「まあ良いでしょう。情報の蒐集も大事な事ですから。ナザリックの事は、デミウルゴスにメッセージを飛ばしておきます。でも後でちゃんと罰を受けて下さい」

「デミウルゴス？ アルベドでは無くてですか？」

「アルベドの方が良いですか？」

声色からでしか判断出来ないが、モモンガは楽しそうにそう言う。表情が有つたなら、ニヤニヤと笑いなから言っているのだろう。大変な事になつてもいいですか？と。

「ありがとう」

ビクトーリアは、二重の意味でモモンガに対してお礼の言葉を口にする。二人はそこで会話を終了しビクトーリアは再び駆け出し、モモンガはデス・ナイトに指示を飛ばした。



村の中央広場では、村を襲った部隊の中心人物達が慌てふためき混乱の中にいた。その理由は、遠くから聞こえて来る声とも咆哮とも取れる音のせいだった。

その声は、デス・ナイトの挙げる声だったのだが、彼らはそれを知らないのだから。もつとも、知っていた方が幸せだっただろう。なぜなら、これから起きる、恐怖が支

配する演目に参加せずにいられたのだから。

部隊長であるベリユースは、部下であるロンデスに指示と言う名の罵倒を浴びせ続けており、それに耐えながら、ロンデスは偵察を言いつけた同僚のエリオンの帰りを今か今かと待っていた。

しかし何時まで待ってもエリオンは帰ってこず、痺れを切らしたベリユースからの言いつけにより、ロンデスが偵察に出ようとしたりした時にそれは起こった。嫌な事から逃げ出す様にロンデスが駆け出した瞬間、何かが自分めがけて突進して来たのだ。

もみ合う様に一緒に転がり、起き上がりながらそれを確認する。

ロンデスは驚愕し声を出す事を忘れた。それは何故か？ それは自分の同僚であるエリオンの上半身だったからだった。

まだピクピクと動くそれを見つめ、ロンデスの身体は混乱と恐怖に支配されて行った。まずは胴体を一刀の下に切断、または引きちぎるほどの者がおり、なおかつそれを凄まじいスピードで投げける事が出来る者であると言う事。

そんな事を出来る者がいるのか？ と聞かれればロンデスはYESと答える事は出来る。

しかし、それは英雄譚に名を連ねる者達や、神人と呼ばれるその英雄に先祖返りをおこしたイレギュラー中のイレギュラー達だった。

自分の内から湧きあがる恐怖と必死に戦いながら、やつとの事で起き上がったロンデスの眼に人影が映る。それは長い棒を持った赤いドレスを纏った女性の姿だった。

闇の中からゆつくりとこちらへと歩いて来る。

うつすらと見えるその姿は、神の信徒であるロンデスには、天使に見えた。

しかし、そうは見えない者達がいるのは当たり前前で、いきなり出現した怪しげな女に剣を向けた。殺意と共に剣を向けた瞬間、女の姿はかき消え、再び目に映った時には既に眼前で、手に持った棒を横に薙いでいた。

まさに一瞬の出来事とはこの事を言うのだろう。ロンデスの眼に女が映った瞬間、自分の横を何かが通り過ぎて行つた。

それが今、剣を抜いた者の頭部だったと気付いた時、ロンデスの意識は飛びそうになつた。

何とか意識を繋ぎとめたロンデスは気が付いた。気付いてしまったと言つた方が正しいのかも知れない。先ほど自分の同僚を屠つた者。英雄や、神人にしか出来ないと思つていた芸当が出来る者が今、目の前に敵としてある事に。

そしてロンデスは新たな絶望も発見してしまった。今この瞬間、生まれて初めて神を呪つた。

目の前の絶大なる絶望の後ろに、もう一つ絶望の姿がある事に。赤いドレスを纏つた

絶望の後ろには、巨大な白骨化した戦士が従者の様に従っていたのだった。

「デ、デス・ナイト！」

ロンデスは思わずそう叫んだ。

伝説の中で語られるアンデッドの騎士。

人に話せば鼻で笑われる程のあり得ない存在。

しかし、目の前にいるモンスターの名を聞かれば、そう答えざるを得なかった。

決着

二つの絶望を前にして出来る事など何も無かった。

ロンデスの膝はガクガクと笑い出す。

少しでも気を抜けば失禁しそうな恐怖が精神を削って行く。

その恐怖が、絶望が、一步一步ゆっくりと自分に迫って来る。

体中に冷や汗が溢れ、喉はからからに乾き、頭痛と耳鳴りが襲って来る。

気が付けば目の前には赤いドレスの裾が優雅に揺れていた。ロンデスの視線は本人の意思とは裏腹に、そのドレスを上へ上へと登って行く。

見たくは無かった。知りたくは無かった。信じたくは無かった。そして目を瞑る事もしたく無かった。見た事、知った事、信じた事で絶望の未来は真実に変わり、目を瞑った事で終わりを受け入れてしまう。

「助けて、助けて、助けて……」

ロンデスの口からは、その言葉が無意識のうちに溢れだしていた。

助けを求める声が天に届いたのだろうか、赤いドレスの女は何もせず、まるでロンデスの事が見えていないかの様に横を通り過ぎて行った。

ロンデスは全ての神経を聴覚に集中する。ゆっくりと遠ざかって行く絶望の足音を聞き逃さない様に。

どんどんと足音は小さくなって行く。ロンデスは安堵した。周りに目をやれば、自分と同じような仲間達が数人いた。その者達と目が合うと自然と笑みが漏れる。助かった、と。

だが、絶望の波は簡単には引いてはくれなかった。ビクトーリアはゆっくりと振り向くと指をパチンと鳴らす。

それが合図となって、今まで停止していたデス・ナイトが動きだした。

ドスンドスンと地面を揺らしながらロンデス達との距離を詰め、タワーシールドを振るう。その強大な力はロンデス達を、いや、人と言う種を、まるで群がる羽虫の様に跳ねのけた。ビクトーリアはそれを何の感情も浮かべず、至極興味がなさそうに見つめると指をこめかみへと持って行った。

「モモンガさん聞こえますか？」

『ええ。どうしましたビッチさん』

ビクトーリアは上空で待機しているモモンガにメッセージを飛ばす。

「これはダメです」

『何がですか？』

「弱すぎです。モモンガさんの言い付け通り。無力化して捕らえようと思っても一撃で死んじやいます」

『うーん。それでも何人かは生かして捕えてほしいんですよ。ちなみに任せますって言ったらどうします?』

「低位階魔法一発ぶち込んで……ですかねえ」

『千尋の谷ですか?』

モモンガは、呆れ気味にそう言葉にした。

「そう言う訳でも無いんですが……。魔法の実験もしたいかなーと」

『成程。そう言う事なら許可します』

「感謝します。それとモモンガさん、下に降りて来る時は変装して下さいね」

そう言つてメツセージを終了し視線を前方へ向ける。そこには、部隊長であるベリユースを守る様に数人の兵士が束になっていた。

ビクトーリアは、ゆっくりと波打つ様に右手を上げると力ある言葉を紡ぐ。

「ライトニング」

ライトニング（電撃）、第三位階に属する魔法である。

右手から放たれた稲光は一直線に相手へと走つて行く。稲光は、中心付近に居た兵士一人を貫き、ブスブスと煙を立たせ絶命させた。

此処までの結果はYGGDRASILの時と変わらない。

しかし、事はこれでは終わらなかった。周囲に居た兵士達も同時にバタバタと倒れ瘡癩し出したのだ。

この結果に満足したビクトーリアは僅かに口角を上げる。

此処が現実だと確信した時、ビクトーリアにはある疑問が生まれた。

YGGDRASIL、つまりはゲーム内での魔法と言う物は、範囲であったり火球や光の筋に当たり判定が存在していた。まあ、それはこの世界でもそうなのだが、ファイアーボールなどが自分の横を通り過ぎていっても、当たっていなければ何のダメージも食らう事は無い。

しかし、それが現実で起きた場合はどうなのだろうか？と 言うのがビクトーリアの疑問だ。

自分のすぐ傍を、何千度と言う火球が通り過ぎて無事でいられるのだろうか？ 熱を発する暖房器具ですら、手を近づけすぎれば直接接触しなくても火傷をする。

ならば、火球や氷の矢などが近くを通る、または近くに着弾した場合はどうなのだろうか。結果はビクトーリアの想像通りの結果となって現れた。

着弾したライトニングの魔法は、被弾した人物の周りにも電撃をまき散らせていたのだ。それほど大きな範囲では無いだろうが、確かに周りにも影響を及ぼしている。

自分の考えが正しかった事に喜ぶビクトーリアは、小さくガッツポーズを作る。

だが、握った指先に違和感を覚えマジマジと指先に視線を向けた。

指先は黒く汚れていた。

ビクトーリアは最初、魔法での怪我か？ 火傷か？ と疑ったが指を擦りつけてみると黒い汚れは消えていった。さらさらと砂の様に。

指に付着した物が何なのかを理解したビクトーリアは先ほどよりもさらに口角を上げ喜びを露にした。

その時、ビクトーリアの耳に短い間隔の足音が聞こえた。

音の聞こえる方角へ視線を向ける。そこには、ガシャガシャとみつともなく鎧を鳴らしながら逃げて行く人影が見えた。人影との距離はまあまあ有る。直線状にその者は居た。

ならばやる事は一つ。

理解した事を試して見よう。ビクトーリアは直立のまま力ある言葉を紡ぐ

「ライトニング」

その直後に、腕を下から上へと勢いよく振り上げる。

バチバチと言う破裂音が響き、稲光が地面を這う様に人影を追う。

しかし、それだけでは無かった。

稲光を追う様に、黒いカーテンが波打ちながら走つたのだ。

そして、その黒いカーテンは人影の右腕を切断した。

勢いのまま右腕は舞い、残された側からは紅い液体が勢いよく噴き出した。

この結果に、ビクトーリアは満面の笑みを浮かべ人影へと歩を進める。いつもと同じように、優雅にゆっくりと人影に近づいて行く。途中で人影が落とした物を拾いそこへと到着する。

そこでは、左手で右手があつたであろう場所を抑え転げ回る鎧を着込んだ男がいた。

ビクトーリアは、男の腹を蹴りあげると胸を踏みつける。

「ギャーギャーと五月蠅いのが。少しは黙らぬか」

踏みつけられ息が詰まったのか、それとも痛みで頭が可笑しくなつたのか、男は騒ぐのを止めた。しかし、今度は「腕が、腕が……」と呟き続ける。

ビクトーリアはため息を一つ吐くと、極上の笑みを浮かべ

「ほーら、妾が拾つてきてやったぞ」

そう言つて拾つた右腕を投げ捨てる。

まるで魚に餌を与える様に。

「キサマ、名は？」

ビクトーリアは質問するが、男は答えない。

いや、男は自分から離れて行った右腕を、じつと見つめ答える事が出来なかった。

だが、ビクトーリアにとつてそんな事はどうでもいい事だった。大事なのは自分の質問に答えなかったと言う事。

「何じゃ、そんなに生き別れになったソレが不憫か？ なら友を作つてやろう。友は良きものじゃからな」

そう言うのと、至極楽しそうに左腕を胸元辺りまで上げると、三度力ある言葉みたびを紡ぐ。

「ライトニング」

掌から地面へ向け稲光が走る。それと同時に、地面から黒いカーテンが登つて来た。

その黒いカーテンは男の左腕を切断する。それは、ギロチンの様だった。下から上へと登る逆ギロチンといえる物だ。

男は、口をパクパクさせるだけでもはや言葉が出なかった。そんな状態の男に、興味の失せたビクトーリアは

「もうよい」

そう言つて、男の喉めがけてフラッグポールを突き立てる。

それが、部隊長ベリユースと言う男の最後だった。

疑念

ベリユースの喉にフラッグポールを突立てたまま一息ついていたビクトーリアの背後から、弱々しい声が聞こえる。ゆっくりと振り返ると、血と土で汚れた服を着た老人が近寄って来ていた。

「あ、あの、あなた様は？」

そう言う老人の遙か後には、ベリユース達によって集められたこの村の住人とおぼしき人達が見える。ビクトーリアはこの老人が村の顔役なのだろうと推測した。

「妾か？ 妾は単なる通りすがりの者」

ビクトーリアの答えはそっけない物だった。

その時、ビクトーリアの形の良いお尻に何かがドスンとぶつかる。首を傾げながらその方向へと視線を向けると、森で見かけた姉妹の妹が張り付いていた。

小さな手で必死にビクトーリアのスカートを掴み、しがみ付いている。村長は顔面蒼白で妹を引き離そうとするが、妹は何かを呟きながら離れようとはしなかった。

ビクトーリアは手で村長の行動を制止すると、妹の頭へと手を伸ばす。柔らかな髪の毛の感触を楽しむ様に優しく頭をなでながら妹に声をかけてみる。

「幼子よ、もう脅えんでも良い。」

そう言われても妹は首を横に振り離れようとはしない。はて困つたとビクトーリアが思案していると、姉を伴いセバスが近寄つて来た。

そして、妹を見つけたとたん脱兎の如く走り出し、村長同様に顔を青くして姉は妹を離そうとする。ビクトーリアは先ほどと同様、姉を制止すると妹の脇に手を差し込み抱き上げた。

妹と視線が合わさる位置まで持ち上げると

「幼子よ、名は？」

「ネ、ネム」

妹、ネムは小さな声で答える。

それを聞き、ビクトーリアはニッコリと優雅に微笑み

「ネムか。……良き名じゃ」

そう言うのとネムをしつかりと抱きしめた。

自分の心臓の鼓動を聞かせる様に。

そうしながら視線を村長に向け

「そなたらはアレの捕縛と死者の埋葬。それから……このゴミの始末を」

指を指しながら指示を出す。

アレとは失神しているロンデス達を指し、死者とは村人達、そしてゴミはそこからここに転がっているベリユース達を指していた。

しかし村長は頷くものの行動を開始しようとはしなかった。これに疑問を抱いたビクトーリアは周りを見渡す。そしてそれが視界に映る。ポツンと寂しげに立っているデス・ナイトが。

ビクトーリアは声には出さなかったが「ああ」と呟き、空に向って手招きをした。村長も姉も不思議そうに上空を見上げるが、そこにある物を見つけるや表情が一変する。

そこには夜空よりも暗い、漆黒のカーテンが揺らめいていた。いや、目を凝らせばそれが人だと言う事が解つて来る。漆黒のアカデミックガウンを纏った何者かが空中に浮遊していた。

村長も姉、エンリも魔法と言う物は知っていた。だが、空を飛ぶ魔法を使う者など、長年生きて来た村長ですら出会った事が無かった。まだ年若いエンリなどもつての他だ。

ポカんとただ空を見つめる事しか二人は、いや、この場に居る者達は出来なかった。

じつとその人物を見つめていると、それが少しずつ大きくなって来るのが解つた。僅かな時間の後。それは自分達の前へと降り立つ。

「初めまして。私はアインズ・ウール・ゴウン。旅の魔法詠唱者です」

マジック・キャスター
礼儀正しくモモンガ、いや、アインズは語りかけるが、返事は帰っては来なかった。

「あれ？」

アインズは首を傾げながらビクトーリアに視線を向けた。

二人の視線が交差した瞬間………ビクトーリアは顔を背ける。結果、アインズと視線を交わしているのは、何か不思議な動物を見る様な目をしたネムだった。

そしてビクトーリアの身体は小刻みに揺れている。まるで笑いを堪えるかの様に。

アインズは不思議に思っているのだが、実際には当たり前の対応だった。

正体不明な大男が、両手に厳ついガントレットを嵌め、泣いている様な、怒っている様な何とも表現しづらい仮面をつけて、なおかつそんな男が丁寧に挨拶をして来るのである。それも自分達が命の危機にあつた直後に。目の前で多くの命がたった一人に蹂躪される現場を見せられた後に。

返事を返せと言う方が酷である。

だが、この中で空気を読まずに発言が出来る者が一人だけいる。その人物が、やつの事で口を開く。

「そ、その仮面が怪しすぎるからですよ。嫉妬マスクさん」

ビクトーリアが笑いを堪えながらもアドバイスを送る。

「嫉妬マスク、正式名称は嫉妬する者たちのマスク。十二月二十四日、クリスマスイブの十九時から二十二時までの間に二時間以上ログインしていると強制的に手に入っ

てしまうアイテムであり、本当の意味での呪いのアイテム。いや、呪い、怨み、妬みと言った負の感情が込められたアイテムである。

見た目からして怪しげな人物が、怪しげな仮面を着けての登場ならば、反応はこんな物だとビクトーリアは言う。

「変装して来いって言った……」

文句の一つでも返してやろうとアインズは口を開いたが、ビクトーリアの姿を見たとき、たんな言葉を失った。

「どうかしましたか？」

「ビ、ビッチさん。………いつの間に子供を産んだんです？」

言葉を言い終わった瞬間、アインズの視界が揺れた。ビクトーリアの右ストレートがアインズの顔面、いや嫉妬マスクの顔を捉えたのだ。

しかしそこは呪いのアイテム、頑丈さならピカイチの物だった。近接戦闘向きの職業を多く取っているビクトーリアに殴られても持ちこたえたのだから。壊す事も捨てる事も出来ないとは、呪詛が詰まったアイテムとは良く言った物である。

「失礼じゃな。失敬じゃぞ。これは妾の子では無い。セバスも何か言うてやれ」

ゲーム時代の口調と共に、無茶振りと言ってもいい程の振りでセバスに助けを求めた。しかし、セバスもセバスで、エンリと手を繋ぎながら空いた手で鬚を撫で

「微笑ましい光景で御座います、ビクトーリア様」

そう言つて腰を折る。

ビクトーリアはため息を一つ吐くと村長と向き合い

「こちらの者達は妾の連れじゃ。心配の必要は何も無い」

そう言つて村長の疑心暗鬼を解こうと試みるが、完全には不可能だった。

「皆様は何故に我らの村をお助け下さつたのじやろうか？」

村長のこの言葉でアインズもビクトーリアも成程と頷きあう。この人達は信じられないのだろうと。何の見返りも無く、鎧を着込み、剣を持った者達から誰かを救おうと思ふ者などいるのか？ と。それも旅人である。

それならば、とアインズは口を開く。納得出来ないのであれば、納得良く理由を付けてやればいいのだと。

アインズはコホンと咳払いを一つすると

「なに、我々として無償で……」

そこまで言つた時、ビクトーリアが一步前に出た。

そして……

「幼子が襲われていたのじゃ。助けるのが当たり前であろう。そなた達は只のおまけよ、気のする程でもあるまい」

そう言ってネムに向けビクトーリアは微笑むのだった。

回想

事後処理は淡々と進みアインズは村長宅で情報の確認を行っていた。そしてビクトリアはその場には居ない。

最初はビクトリアもこの場に参加するつもりでいたのだが、ネムが離れてはくれず、姉のエンリを伴って葬儀の場へ出席していた。

アインズの情報収集もつつがなく終え、村長に礼を言い外に出る。そこにはセバスが直立不動で待機していた。そして隣には、体育座りで待機するデス・ナイトの姿が。

「お疲れ様で御座います。モモンガ様」

セバスから労わりの言葉が発せられる。

「アインズ・ウール・ゴウン。アインズと呼べ」

「は」

セバスは簡潔に返事を返すが、「しかし」と言葉を続ける。

「しかしアインズ様、何故お名前を変えられたので御座いますか？」

セバスの疑問は当然の事だった。それを理解しているアインズは、一つ一つ順を追って説明する。

「まずは、此処が我々の居た世界では無いと言う事だ」

この言葉にセバスは沈黙のまま頷きで返す。

「これは私達が異世界へと転移した事を示している。そして今の村長の話でそれは真実だと確認出来た」

「成程。しかし、それとお名前を変えられる事の繋がりが、わたくしには……」

言い淀むセバスに、アインズは慌てるなど言う様に右手を上げると、話を先に進める。

「この転移が我々ナザリックだけの物なのか、それとも他に転移してきている者達が居るのか解らない状況で、我らの情報を完全に隠ぺいするのは愚策と判断した」

セバスはアインズの話す言葉を一言も聞きもらすまいと耳を澄ませている。

「もし転移してきている者達が居た場合、我々は何者かも解らない存在に対して防衛手段を構築しなければならぬ。しかし、それが何者か解っていれば最善の策が取れる。

だからこそ私はアインズ・ウール・ゴウンを名乗ったのだ」

「成程。お話は解りますが、お名前を変える事とどう繋がるのでしょうか？」

「うむ。まずはモモンガと言う一プレイヤーの名よりも、ギルドとしてのアインズ・ウール・ゴウンの名の方が情報としては解りやすいと言う事。そして二つ目は個人の名前を出してしまうと、我らが何名居るのかを相手に教える事になるからだ」

セバスは目を瞑ると

「流石はアインズ様。深いお考え、私共には到底至る事は出来ませぬ」

この最上級の世辞にアインズの機嫌はこれでもかと高まって行く。上機嫌のアインズを前にして、セバスは疑問に思っていた事を聞いてみる事にした。

「アインズ様。不敬だとは思いますが質問をよろしいでしょうか」

「許す」

「ビクトーリア様は、何故これほどまでにこの村に固執するのでしょうか？」

この問いにアインズは押し黙る。

その事を自分の口から話しても良いのだろうかと言う疑問からだ。

だが、話す事でビクトーリアを困り込んでいる敵意を、少しでも薄める事が出来るかも知れない。可能性はほんの僅かな、分の悪い賭けだったが、アインズはあえて手を打ってみる事にした。

「それは、ビッチさんの種族から来る物と思われる」

「種族？」

「うむ。ビッチさんの種族は、荒ぶる神として知られている物だが、もう一面では農耕の神でもあるのだ」

アインズは敢えて種族名をぼかして語る。それは、もしビクトーリアが何か窮地に陥った時に切り札となる物だったからだ。

セバスもその所を追及する事無く、納得の意を示している。そして二つ目の疑問を口にする。

「しかし、何故私はビクトーリア様の中に、我が創造主であるたち・みー様の面影をあれほど感じるのでしょうか？」

アインズは一度頷くと、星が煌く空を見上げ

「それは恐らく時間なのだろう。思い出と言っても良いかもしれん」

「時間、思い出で御座いますでしょうか？」

「我ら四十一人の中で、ビッチさんと最も長い時間を共有していたのは、たちさんだからな」

懐かしむ様に話すアインズの口調は優しげな物だった。

「我らアインズ・ウール・ゴウンの歴史は、あの二人が出会った事で始まっているのだ」



ビクトーリアとたち・みー、二人の出会いにはYGGDRASILと言うゲームの黎

明期まで遡る。

二人とも、強さを求めるプレイヤーであり、ソロで活動するプレイヤーだった。ある時は経験値の為にモンスターを狩り、ある時は技術向上の為に、プレイヤー同士での戦闘を行っていた。

そして、そんな二人が出会うのは必然だった。

何度も何度も戦いながら、二人は技術を、力を付けていった。

そして、たち・みーはワールドチャンピオンへと駆け上がっていった。一方のピクトーリアは力の証明と言わんばかりに、数々の難関クエストへの挑戦を繰り返していた。

そんな時にYGGDRASIL内で流行し出したのが、人間種プレイヤーによる異形種プレイヤー狩りだった。

そして二人は異形種プレイヤー達の救済を開始する。

なんの見返りを求めない二人の周りには一人、また一人と仲間が集まって行った。そして、それがアインズ・ウール・ゴウンと呼ばれるギルドへと発展して行く事になる。



「何故、ビクトーリア様はアインズ・ウール・ゴウンに入る事は無かったのでしょうか？」
セバスがポツリと呟いた。

それは質問などでは無く、ただ、ただ疑問を口に出しただけの様に見てとれた。アイ
ンズも答える訳では無く、ただ呟く様に

「あの人は、あの神は自由を愛する神だからな。もしかしたら、アインズ・ウール・ゴウ
ンもあの神から見て、子供達の秘密基地遊びの様な微笑ましい物だったのかも知れな
い」

だからこそ見守り続けてくれたのかもアインズは語る。

物想いにふけっていたアインズとセバスの下に、何者かが足早に近寄って来た。

今までの優しさを纏った様な雰囲気、セバスは一瞬にして警戒を強めた物へと変化
させた。守る様にアインズの前に出ると、セバスはその声を挙げる。

「止まりなさい！ 何事ですか？」

問われたのは村の若者であった。その者は息を切らせながら悪報を口にする。

「む、村の近くに、先ほどの者達と同じ様な鎧を着た者達が迫って来ています」

その報を聞いたアインズとセバスは視線を合わせると村の入口方向へと歩を進めた。

考察

村の入口に向け歩みを進めるアインズとセバスに、報告を受け急いで駆けて来た村長が合流していた。村長は不安を隠そうともせず、アインズに話しかける。

「アインズ殿、一体何者なのでしょう？」

この問いかけに対してアインズは首を横に振るのみで何も答えなかった。

今、アインズの頭の中を支配しているのは、今後のナザリックでの対応策の事だったからだ。先ほどの村長との会話の中で、この村の近隣には三つの大きな国家が存在するのが解った。

この村、カルネ村から見て北にはリ・エステーゼ王国、バハルス帝国が存在し、南にはスレイン法国が位置する。

ナザリックが今、どここの位置にあるのかは不明だが、もしこの村の近くに転移していたとすると、ナザリックは三つの大国に包囲された形となってしまう。相手の情勢、戦力がまだ不明な今の状態では、取りあえず敵対は避けたいと言うのがアインズの本音だった。

鎧を着た者達とは王国か、帝国か、法国か、どんな対応が望ましいのだろうか、頭

の中でシミュレートしていたアインズの視線の先に件の者達の姿が映る。

先発隊なのだろうか、人数は五名程で馬に跨り、それぞれバラバラな装備を纏っていた。まるで取り急ぎ装備を整えて出発して来た様に見える。アインズは僅かに進む速さを緩和させると、時間を掛けながら男達を観察した。

一人、また一人と視線に収める中で、一人の男が眼に留る。短く刈り込まれた頭髪に、顎髭を生やした男。目の前の男達の中で、その男だけが一步抜きん出ている様に見える。アインズはこの男が隊長、もしくはそれに準じた者だろうと推測する。

したがって、他の者達には目もくれず、一直線に男の下へと歩を進めた。「何用ですか？」

鎧を着た者達に対して、先ほどまでの記憶がフラッシュバックしたのか、緊張で言葉が上手く出てこない村長に代わりアインズが男に対して問いかける。

「私はリ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ……」

男、ガゼフがそこまで名乗った時、上空からアインズとガゼフの間に何かが落下して来た。

それはドスンと言う音と土煙を上げ、二人の間に突き刺さった。土煙が徐々に晴れて行くと、その正体もぼんやりと判明してくる。

それは、アインズにとっては見知った物であり、ガゼフにとっては初めて目にする物

だった。

アインズが、それがフラッグポールだと認識した瞬間、背後から不機嫌そうな声が聞こえた。

「喋らんで良い。相手にする必要も無ければ、何かに答えてやる必要すら無い」

そう言いながら、声の主は近づいて来た。苛立ちをまき散らせながら。

「何処の誰かは知らぬが……いや、王国戦士長だったか？ 他人の家にならずかと土足で入り込んできて何様のつもりか」

この言葉に、ガゼフと共に来た者たちは一斉に腰の剣に手をかけた。

「剣を抜くよりも、先に馬から降りるのが礼儀と言うておるのじゃが？」

ビクトーリアは苛立ちを隠す事もせず、フラッグポールを引き抜くと先端をガゼフへと向ける。一触即発、アインズにはその言葉しか浮かんでこなかった。だが、アインズの考えは覆る事になる。良い方の意味で。

「こゝ、これは申し訳ない。先ほども言ったが、私はガゼフ・ストロノーフ。王国戦士長の名を戴いて居る者」

急いで馬を下り、腰を折る。

共に来た者達には僅かに動揺が広がるが、順にガゼフ同様馬を降り、腰を折った。

戦士達のこの行動にビクトーリアは軽く拍手をすると

「良く出来ました。仮にも王国の名を戴く者が礼も出来ねば国王の顔に泥を塗る事と覚えよ。例えばそれが敵であってもな」

そう言つてビクトーリアは、興味が失せたと言わんばかりにアインズの隣で視線を遠くへと向けた。

「それで……この村で一体何が？」

そう言つてガゼフは辺りをぐるつと見渡す。そこには何も無く、ただ平らな土地が広がっているだけだ。

だが、注意して見てみれば、その地面のいたる所に黒いしみが点在している。ガゼフとて数々の戦場を生き抜いてきた男、それが何かはすぐに理解出来た。

そして僅かに香る鉄の様な臭い。それがこの場所で、先ほどまで戦闘が行われていたと有言に語っていた。

ガゼフはおおよその予想は出来ていた、だからこそ当事者達から聞きたかつたのだ。

アインズの仮面に包まれた双眸を無言のまま、ガゼフは見つめる。その時、今まで沈黙していた村長がおずおずと口を開いた。そしてゆつくりとだが、丁寧なこれまでの経緯をガゼフに語る。

一つ、一つ、事実が明るみになって行く。話が進めば進むほど、ガゼフの顔はこわばつて行つた。

「成程。ならば、相手は法国、もしくはは帝国……」

ガゼフはそう呟くが、その言葉には異議が出される。

「そうかのう。彼奴等の鎧はヌシと同じような物に見えたが？」

ビクトーリアだった。

しかし、このビクトーリアの言葉は、ただの言いがかり、いちやもんだ。だが、何も見えて無い現状では、僅かでも情報を引き出したかった。アインズの考えも同様であつたらしく、言葉を遮らず沈黙を守る。この言葉にガゼフは戦士長としての立場から冷静に反論を開始した。

「確かに仰る事はごもつとも。だが、それが正しいならば、我々は、いや、王国は只の間抜けな集団になつてしまいますな」

「ほう」

冷静な言葉遣いにビクトーリアは感嘆の意を表す。

「成程。成程。だが、あえて矛盾を突く……と言う事は？」

「それこそ面倒と言う物でしょう」

「そうよな。やはり相手は法国か、帝国か……」

会話の内容が一步進んではまた戻る。その事に痺れを切らしたのかアインズが口を開いた。

「戦士長殿はどうお思いで？」

「ガゼフで結構。私の判断からすると、恐らくは法国だと」

この発言にビクトーリアとアインズは「ほう」と相槌を返すに留める。いつその事捕虜を尋問でもして見るかとビクトーリアは思案するが、真実の確認が面倒だと言う感情もわき出して来る。

その時、村の外から何者かが馬を駆つて来るのが眼に入った。ビクトーリアがガゼフに合図を送る。背後を確認したガゼフは、慌ててその馬の下へ駆け寄り、二言、三言、言葉交わすと再び元の場所へと戻つて来る。

そして

「何者かが部隊を率いてこの村に進軍中との事だ」

簡潔に告げた。

アインズは表情こそ解らないが、面倒な事になったとゲンナリしている様に見える。だがビクトーリアはニヤリと笑みを浮かべ

「馬鹿が勝手に喰いついた」

そう楽しそうに呟いた。

出陣

何者がが近付いて来ている。だが、その何者が誰なのか解らない。ガゼフにとつても、アインズ達にとつても。

では、自分達を狙って誰かが軍を動かした。そう言う理由ならば、ガゼフにもアインズ達にも思い当たる節はある。

しかし、あるからと言って、それが誰で何の目的かまでは解らない。

ならば、この村が目当てなのだろうか？現実問題として、この村には何の価値も無いだろう。せいぜい遠征中の小休止につかえるくらいだ。

消去法で行けば目当てはガゼフかアインズ達のどちらかに絞られる。

「……………」

ガゼフが口を開くが、第一声で躊躇した。アインズは一瞬不思議に思ったが自分がまだ名乗っていない事に気づく。

「アインズ・ウール・ゴウン。旅の魔法詠唱者マジックキャスターですよ、戦士長殿」

「ではゴウン殿、そちらには何か心当たりは？」

心当たりなら腐るほどある。

だがそれはこの世界では無い場所での事だ。万が一に自分達と同じように転移して来たプレイヤーがいたとしても、自分達、もしくはナザリックの所在がバレルのが早すぎる。

視線を横に向けるとビクトーリアが一度頷いた。自分と同じ考えに至ったと教えていた。だからアインズはこう返す。

「我々では無いでしょう。我々は旅の者、それ以前もずっと魔道の研究に時間を取られ、あまり人とは接していませんので。心当たりの方ならば戦士長殿の方が御有りでしょう」

この言葉を受けたガゼフは顎髭を摩りながらしばし思いを巡らせた後

「そうですね……ならば、目的はやはり私なのではないでしょうか」

そう言って詰まらなそうな笑みを浮かべた。

だが、時は待つてはくれない。実際に敵と思われる一団が迫って来ているのだから。部隊の全貌は未だ不明。ガゼフは一考を案じる事にした。

「ゴウン殿。どうだろうか、我々に雇われてみないか？」

先程の村長の話を聞く限り、この村を襲った敵はかなりの人数が居た物と推測された。

ならば、それをたった二人で片付けた者達を味方に引き入れない手は無い。だが、こ

の行動は不発に終わる。

アインズが丁重に断ろうと口を開いた瞬間、隣から怒りの声が響く。

「馬鹿者！」

あまりの怒声にガゼフの顔は若干引き攣っていた。ビクトーリアはズカズカとガゼフに近寄ると、ガゼフの胸に人差し指を突き付け不満を爆発させる。

「貴様は妾の話を聞いておったのか。貴様は何者じゃ！ 戦士長と言う肩書は只の飾りか！ 貴様達は何の為に存在しておる！ 国王の為か！ 貴族の為か！ 違うじゃろう！ 貴様らは国の為に存在しておるはず……違うか！」

「う、うむ。貴殿の言う通りだ……」

ガゼフはたじろぎながら何とか答える。ビクトーリアのあまりの剣幕に一緒に居る他の戦士達も口を挟む事が出来ないでいた。

「では、ガゼフ・ストロノーフ。国とは何ぞや」

「く、国？」

ガゼフは言い淀む。

国とは君主が治める場であり、また、土地である。しかし、本当にそうなのだろうか？

目の前の婦人の怒りの源はそこなのだろうか？

ガゼフは記憶を辿り、答えを探す。五年前、十年前、記憶を辿って行く。国とは何か、何故自分は戦士になろうと思ったのか。自分が戦士になろうと、憧れた時まで遡った時ガゼフには答えが見えた気がした。

「国とは……………民だ」

ビクトーリアは納得がいったのか怒りを収め笑顔を浮かべる。

「そう、国とは民である。民がいなければ、国王だろうが貴族だろうが何の意味を見出す事は出来ぬ」

ビクトーリアは、そこで一度言葉を切ると、ガゼフの後ろに控えている者達へと視線を向ける。

「だが、そなたらは守れなんだ。この村は蹂躪された……。そなたらが遅れたせいで無辜の民は殺され、守るべき民は悲しみの底へと沈んでいった」

ビクトーリアの辛辣な言葉に、兵士達の表情は怒りとも悲しみとも取れる物に代わって行く。

だが、ビクトーリアの言葉は終わらない。

「無念は尽きぬだろう。じゃが、本当に無念なのは、本当に悲しいのは誰なのかを知れ。そなたらは、もう解っているはず。」

此処で一旦言葉を切り、ガゼフを含めた全員の顔を見つめた。

その表情は先ほどとは少し違って見えた。

怒りとも悲しみとも取れる表情は同じなのだが、そこから向けられる敵意は、今はビクトーリアには向いていない様に感じる。

「しかし！ 悲しみは終わってはおらぬ！ 今、まさに今！ 再びこの地を、そなたらが守るべき民を！ 悲しみの底へと導こうとする者達が迫っておるのじゃ！」

両手を高々と上げると、まるで戦士達の君主であるかの様に言葉を続けた。

「じゃからこそ、そなた達自身の手で守らねばならぬ。この国に住まう全ての者達の信頼を胸に受け、その脅威を屠るはそなた達の使命。さあ、行くがいい。勇敢なる者達よ！」

ビクトーリアの言葉が終わった瞬間、その場に居た戦士達は剣を抜き雄叫びを挙げ
る。

「うおおおおおおお！」

ガゼフは内心驚いていた。

この場に居る者達は少なくとも一度は戦を共にした者達だった。だが、ここまで高揚感を、戦意を高らかにした姿は見た事が無かったからだ。

正直恐怖を覚える程だった。目の前に居る貴族の令嬢の様な女性は、言葉だけで男達を死地へと送りこむ事が出来る者なのだから。

そんな事は露程も知らないビクトーリアは、満足そうに頷くと背後にアイテムボックスを開き、そこから革袋を取り出した。

その革袋をガゼフに渡し

「その中の物を皆に。幸運のアイテムトじゃ」

言われてガゼフは中の物を取り出し、その場に居る者達に一つずつ渡して行く。

四角いガラスで出来た掌に収まるほどの物だった。アイنزの目にもそれは見えた。だが、アイنزは首を捻るのみだった。

ビクトーリアが配ったアイテムは幸運、つまりはLuckのステータスが上がる様な代物では無いからだ。ビクトーリアの真意が解らない。

だが、今その事を問いただす時でない事もアイنزは理解していた。

アイテムを受け取った者達は口々に「女神の守りだ」と言いながらそれを懐にしまつていった。ガゼフは乗馬の指示を下した後、ビクトーリアに一礼すると

「あなたの名は？」

「妾の名はビクトーリア。行け武士達よ、大義を示せ」

「感謝する。ゴウン殿、ビクトーリア殿。何卒この村を」

その言葉を最後にガゼフ達は戦場へと駆け出した。その姿を満足げに見つめた後、ビクトーリアは踵を返しながらか村長に声をかける。

「村長、戦が始まるやもしれぬ。村人を一ヶ所に」

この言葉を聞いた村長は一目散に走って行く。村長との距離が離れたのを確認したアインズは疑問を問いただす事にした。

「流石は情報操作による人心掌握はお手の物ですね。それからビツチさん、あのアミユレットって……」

「うむ。そうじゃ。モモンガさんの想像通りの物じゃ」

「アインズと呼んで下さい。アインズ・ウール・ゴウンと名乗る事にしましたから」

そう言ったアインズの顔を、仮面をピクトリアは一睨みすると

「いやじゃ。拒否じゃな。じゃがまあ、表向きはそう呼んでやろおかのう、モモンガさんや。さて、彼らは妾の期待に答えられる者達か否や……」

そう言って村長の向かった先へとゆっくりと歩みを進めた。

願

戦士達が戦場へと向かった後、村人達は速やかに村長の家に集められた。

村長と共に立つアインズとビクトーリアから状況を説明され、一時はパニックに陥った村人達だが、今は何とか落ち着きを取り戻しつつあった。

アインズは村長と共に今後の事についての話を詰めている。

周囲にナザリックのモンスター達を潜ませると言う案をアインズは提案したのだが、それはビクトーリアによって止められた。

現状アインズはデス・ナイトを召喚し使役している。これはビクトーリアが葬儀の場で蒐集した情報によると、およそ一般の魔術師が到達出来るレベルを遙かに超えている事が解った。そして、デス・ナイトが伝説級のモンスターである事も。

そんな伝説を具現化出来る者が、さらに伝説を上乗せしたらどうなるのだろうか？ 答えは二つしか無い、そしてそこから湧きあがる感情も二つしか無い。隷属か敵対、羨望か嫉妬である。

YGGDRASIL時代でもそうだった。強大なギルド、アインズ・ウール・ゴウンに対して敵対の立場を取っていたプレイヤー達はどうしただろうか？

結果があんなザリツク地下大墳墓千五百人大行進である。まあ、その音頭を取ったのはビクトーリア達なのだが、いくら情報操作、いや、情報提供系のクランだとしても、火種の無い所では火を熾す事は出来ないのだから。

だからビクトーリアは慎重策を取った。

そしてもう一つの懸案、ビクトーリアにはこちらの方が重要だった。

それは、アインズ、いや、モモンガのイメージを恐怖で固める事を避ける為であった。

この密談とも言える会議に参加していたセバスは、こつそりとビクトーリアにある質問をしていた。それは、先ごろアインズにした質問と同じ物だった。

何故、ここまでこの村を守るのか？

アインズの答えはビクトーリアの種族から来る物だと言った。だが、ビクトーリア本人の答えは全く別の物だった。

“モモンガさんを孤独にさせない為に必要な事”

デス・ナイトと戯れるネムを見つめながら呟いた。

恐怖が支配する部屋の中に視線を向けながらセバスは困惑する。この村を救う事が、何故自分達の絶対的支配者を孤独にしない事に繋がるのか。

ましてや、アインズは孤独なのでは無い。自分達、ナザリツクのNPC達が居るのだから。セバスの胸中に不安と疑念が渦巻いて行く。

もしかしたら、ビクトーリア・F・ホーエンハイムと言う者は、自分達からアインズを奪う者では無いかと考えてしまう。

そう考えながらセバスは視線でビクトーリアを探した。だが、その姿はこの場には居なかった。

セバスはアインズの元に近づき、ビクトーリアの所在を質問して見た。恐恐としながら、「お前が知る必要は無い」と言われる事も覚悟しつつ尋ねるとアインズは不快感など一切無く居場所を教えてくれた。

確認したい事があるから外に居ると。セバスは執事然とした礼を取るとビクトーリアの下へ行く許可を申し出る。それもまたあっさりと許可された。外の警戒をすと言う事を含めて。

セバスは戸口で村人達に対して一度腰を折ると、屋外へと踏み出した。

さて、目当ての人物はと視線を巡らせると、お目当ての人物はあっさりと見つかった。村長の家の前に広がる畑、その境界の柵に腰掛けながら、手元にある何かを凝視していた。

セバスはゆっくりと近づくと良く通る低い声で、決して不敬に当たらない様に声をかける。

「ビクトーリア様」

声で気が付いたのか、はたまたすでに知っていたのか、ビクトーリアは自然に返事を返して来た。

「ビクトーリア様は此処で何を？」

セバスの問いかけに対して、ビクトーリアは手に持つ遠隔視の鏡を見せつつ

「戦況の確認、かのう。彼らがどこまでやれるのか。敵がどんな者達なのか」

「成程」

「じゃが……そんな事を聞きに来たのでは無いのじやろ？」

セバスの表情が一瞬ひきつった。一体どこまで見抜いているのだろうか。しかしこれは好都合でもあった。セバスは腹の中にある疑問をぶつけて見ようと覚悟を決める。

「ビクトーリア様。ビクトーリア様は先ほどの村を救う事が、アインズ様を救う事だとおっしゃいましたか……」

「そうじゃ。それが何かや？」

「ですが孤独にさせないとは一体？」

「そのままの意味じゃが？」

「恐れながら、アインズ様には我々が、ナザリックの僕達が居ります。決して孤独になど

……」

「無理じゃな。お前達では無理じゃ。いや、今のお前達と言い直しておこうかの」

ビクトーリアの言葉はセバスには理解出来ない物だった。

体の奥から憎しみと殺意が湧き出して来る。自分の創造主を奪い、今、たった一人残ってくれた絶対的支配者をも奪おうとする者に対して。

だが、ビクトーリアの表情には何の変化も無かった。ただ、ただじつと遠隔視の鏡を見つめるだけだった。

セバスは右の拳にゆつくりと力を集中させていった。何時でも目の前の化け物を屠る事が出来る様に。だが、そんな事知った事かとても言う様にビクトーリアが語りかけて来た。演技では無い、普通の言葉で。

「セバス、君はモモンガさんが雪が黒いと言ったら、どう答える？」

この行動は、セバスに取っては虚を突かれる格好になったが、何とか平静を装いつつ返事を返す。

「アインズ様が仰っているのです、雪は黒いと返すべきでは？」

「だからダメなんだ」

「何故です」

「今の君達は人形だ。創造主にそうあれと創られた喋る人形に過ぎない。そしてそれはアインズの中からモモンガさんを消し去って行く。君達は自分自身で、君達の言う慈悲深き御方を消し去って行くんだ」

「あなたに何が解る！　我が創造主の血肉を食らった、我らから至高の御方達を奪ったあなたが！」

セバスの感情が爆発した。

僅かにでも、その背に自身の創造主を重ねて来たがゆえに、それは激しい物となった。だが、ビクトリアの態度は変わらず柔らかいままだった。まるで駄々をこねる幼子を優しく諭す母の様でもあった。

「君達は依存しすぎている。全てをモモンガさんに委ね過ぎている。恐らく……いや、決して君達はモモンガさんに対して反論など出来ないだろう？」

「当然のこと！」

「そこがダメなんだ。良いかいセバス、敬愛と心酔は似ている様で全く違う物なんだ。君達はモモンガさんを完璧な支配者だと思っているかも知れないが、それは間違っている事なんだ」

「……」

ビクトリアの言葉にセバスは何も言う事が出来なかった。いや、セバスには理解出来なかった。

「アインズが完璧では無い？　それがNPCとして創られたセバスには理解出来なかった。」

自分達を創造し、支配者として君臨した者達が完璧な者では無い。これを瞬時に理解しろと言うのは少々可哀そうだと言う事をビクトーリアも気づいていた。だから言葉が続ける。

「いいかい、セバス。モモンガさんが完璧な人物だったのなら、何故アインズ・ウール・ゴウンなるギルドは創られたんだい？ 何故彼ら四十一人は集って行動していたんだい？ 人には、いや、どんな種族にも長所と短所がある様に個人にもそれは有る。その短所を補う為に群れるんだ。モモンガさんは完璧な存在では無い。だからこそ、その短所を君達が補って行くんだ。失敗する事もある、でも、それで良いんだ。その時は私が全力を掛けて守ろう。忘れないでおくれ愛しき子らよ、君達を見捨てず、最後まで残った心優しき支配者はアインズ・ウール・ゴウンでは無く………モモンガさんと言う事を。そして支えてあげてくれ、何時か私が消えてもモモンガさんが消えない様に」

セバスの右手からは力が抜けていた。自分の創造主が何故自分の身を捧げたのか、その一旦が理解出来た様な気がしたからだった。

セバスは主従の関係では無く、ビクトーリアと言う人物に興味を引かれた。ナザリツクでも無く、アインズ・ウール・ゴウンでも無く、モモンガを守れと言う神に。

そうだから、こう言う方だから自分の創造主は、と思えてしまう。そして最後の言葉が刺を産んだ。

「ビクトーリア様……消えてしまうとは？」

言葉を言いながら体が震えていた。忠誠心からでは無い、何かの感情がセバスを支配して行つた。だが、ビクトーリアは姿勢を崩さず飄々と

「言葉のあやだ」

そう言つてほほ笑んでいた。



カルネ村での光景を遙か彼方、ナザリツクの地から覗き見ている者達がいた。

アルベド、ユリ・アルファ、ペストーニャ・ワンコの三名だ。

アインズからビクトーリア搜索の命を受けた三人が執務室に残された遠隔視の鏡で今までの光景を見守っていた。

ユリとペストーニャの顔は驚きと驚愕を現していた。まあ、ペストーニャの顔は犬そのものなので表情を読み取るのは至難の業なのだ。

「やはり、ビクトーリア様は……」

そう呟いたユリに、ペストーニヤも同意する。

「私達が知らない何かがビクトーリア様と至高の方々との間にはある様ですね」
「くふー！ ビツチさまー！」

真剣な顔で心情を語る二名とは違い、アルベドは恋する乙女のそれだった。

「……………わん」

開戦

「いかがですか？」

しばしの間沈黙を守っていたセバスが口を開く。

「何がかな？」

何に対しての質問なのか解りきっているのだろうに、ビクトーリアはおどけた様に言葉を返した。

「戦況の事で御座います」

「歩が悪いのう。八、二、と言った所かの」

悲しむ訳でも焦る訳でも無く淡々とした口調でビクトーリアは告げる。

「戦士達の剣撃に対して相手は魔法詠唱者……相性は最悪ですな」

「そうじゃなあ。近接戦に持ち込めれば……」

「出来ますか？」

「無理じゃろう。じゃが、妾が見たいのはそこでは無いからの」



ガゼフ達が赴いた戦場、そこは死地であった。

純然たる戦士達で構成されたガゼフ達は、最初の一步ですでに躓いていたのだった。

スレイン法国、陽光聖典。

それがガゼフ達の敵の名だった。

遙か昔にスレイン法国に降り立ったと言う、六人の神に由来する六色聖典と呼ばれる秘密部隊の一つである。

法国による非合法的な活動を一手に引き受ける部隊であるが故、その姿は法国に生きる人間にも噂レベルでしか知る者は居ない。

そしてその中の一つ、陽光聖典は特殊工作部隊の中で最も戦闘行為が多い部隊ではあるが、それを構成する人員は驚くほど少なかった。予備兵も合わせて約百人少々と言う物だ。だがこの人数の少なさが陽光聖典の優秀さを表してもいた。

陽光聖典に入隊する最低条件、それは第三位階の魔法が唱えられる神官戦士でなければいけないと言う事だ。第三位階の魔法とは、およそ人間が到達できる最高の階位魔法であり、それが唱えられる者はエリート中のエリートである。

そんな連中が、ガゼフを除けば何の特殊能力を持つ事も無い只の戦士達の前に立ちただかったのだ。もうこれは戦闘行為なのでは無く、只の虐殺、蹂躪と言つてもいい物だった。

だが、目の前の敵が陽光聖典だけだったならば、もしかしたら、万に一つ、億に一つでも突破口があつたかも知れなかつた。

敵はそれだけではなかつたのだ。

目の前に展開する陽光聖典の戦士達の上に絶望と言つて良い物が浮遊していたから
アークエンジェル・フレイム
だ。炎の上位天使、天使と呼ばれるモンスターがそこにいた。

レベルとしては下級に位置するモンスターだが、普通の人間にとつては、おおよそ相手が出来る代物では無い。それが数十体、上空に待機していた。

陽光聖典リーダー、ニグン・グリッド・ルーインは、眼前に迫りくる土煙りを見つめながらニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

その土煙りを上げ迫り来る者達の先頭に目当ての人物、ガゼフ・ストロノーフを見つけるとニグンはすぐさま攻撃の指示を出す。流石と言うべきか、陽光聖典は良く訓練された部隊だった。ニグンの号令が終わるか否や、部隊員二十数名とそれに召喚された炎の上位天使達から無数の魔法の矢が放たれる。

空に向けて放たれた魔法の矢は、まるで豪雨の様にガゼフ達に降り注いだ。

勝負はたったそれだけで決してしまつたかの様に見えた。ガゼフ達、戦士だけで無くその馬までもが地に伏せる格好になつていた。

しかし、ガゼフ達戦士団は傷こそ負つてゐるものの死者は皆無だつた。乗つていた馬は全て絶命してゐるのにも関わらず。これはビクトーリアが渡したアミュレットの効果なのだが、この場に居る者達は、まだ誰も気づかずにはいた。

「お前達、無事か？」

ガゼフは後ろに居る仲間達に声をかける。その声に弱々しいがはつきりした返事が返つて来た。

「どうやら俺達は、とんでもない者達を相手にしなければならぬ様だ。お前達、俺が時間を稼ぐ、走れる者はこの戦場から離脱しろ」

何とか一人でも多く生き残つてほしい、そう願いを込めてガゼフは命令を告げた。だが、部下達の答えはそうでは無かつた。

「隊長、我らは一度失敗しております。ここで逃げて何が王国兵士ですか！」

「そうです隊長！ あの姫さんも言つていたでは無いですか！ 此処で引いたら我らは国民に顔向けが出来なくなります！」

部下達は口々に、此処が戦いの時と叫ぶ。この声を聞きガゼフの顔には笑いが浮かんで来た。

「どいつもこいつも。行くぞ！俺が道を切り開く、キサマらは一人でも多くの術者を討て！」

「オオoooooooooooo！」

戦士団は立ち上がり陽光聖典へ向け駆け出した。

しかし陽光聖典も甘くは無い、第二派、第三派と魔法の矢を打ち込んで来る。ガゼフは先頭に立ち、自らの全力で魔法の矢を打ち払う。

「武技、能力向上！ 流水加速！」

武技、この世界に存在するゲームに例えるならスキルの様な存在。

ガゼフは能力向上で身体能力を底上げし、流水加速で精神と攻撃速度を速め魔法の矢を打ち払う。だが、これだけでは終わらない。

「武技、即応反射」

剣を振るい終わった瞬間、即応反射を発動し再度剣を振るう態勢に持つて行く。そして上空に向け

「六光連斬！」

とっておきを爆発させる。

六光連斬、一度に六つの斬撃を繰り出すガゼフの持つ最終奥義。

死兵と見紛う兵士達、ニグンの精神は徐々にじれったさを感じていた。

「炎の上位天使を前へ！ 一気に彼奴の首を取れ！」

号令一過、炎の上位天使はその手に光剣を出現させ、ガゼフめがけて突貫を開始した。「一人で相手にするな！」

ガゼフは絶えず一対二以上で炎の上位天使に対応する様に激を飛ばす。

「即応反射、流水加速、急所感知、……………四光連斬！」

周囲に居た炎の上位天使三体を巻き込む様にガゼフの斬撃が走る。二体の炎の上位天使が光の砂へと変わる。

「即応反射！ウオラアアア！」

残りの一体の腹部めがけ剣を横に薙ぐ。だが、ガゼフの斬撃は炎の上位天使の防御力で革一枚の所で防がれる。

しかし、そんな事は予測済みだと言う様に、ガゼフは剣に力を込めて行く。ゆっくりとだが刃は喰い込んで行き、炎の上位天使は光の砂と消えた。

だが、戦いは終わってはいない。目の前の絶望は消えてはくれず、逆に増えていた。炎の上位天使を倒しても、すぐに再召喚され数は一向に減って行かない。

それにも増して不味いのは、武技の連続使用によりガゼフ自身の精神も体力も限界に近付いていた。

後ろを振り返れば、仲間の半数が地に伏せている。生きているのかも今の状態では

判別は不可能。

もし、この状況を覆せる手段があるとするならば、敵のリーダーの首を取り、戦場に混乱に導く事だろう。しかし、前衛に炎の上位天使、中衛に陽光聖典、これを突破しなければ大将と思われる者には到達は出来ない。

ガゼフは悟った、これは負け戦なのだ。だが、一人でも多く部下を撤退させねばいけない。ガゼフはその事を最優先とし行動を開始する。

「スレイン法国と言う場所は、随分と小物ばかりを飼っているのだな」

この安い挑発で敵司令官の足が一步前に出るのが見えた。

「これだけの人数をもつてしても、私一人殺せないのだからな。これは、お笑いか何かか？」

「殺せー！ 全ての天使をガゼフ一人に集中しろー」

ニグン・グリッド・ルーインは激昂する。

エリートばかりがそろえられた六色聖典であって、その中でもリーダーにまで上り詰めた男だ。プライドの高さも窺い知れると言う物だろう。

全ての炎の上位天使がガゼフに向け攻撃を開始する。

剣を突き立て、魔法の矢を穿つ。ガゼフは最後を覚悟した。自分の戦いはこれまでだと。願わくば一人でも多く仲間が生き残ってくれることを望みながら。

これで終わり、その言葉がガゼフの脳裏に浮かんだ瞬間、耳を劈く雷鳴と共に二匹の龍が空を駆けた。

参戦

「(「)ちらはどの様に？」

「そちらは……草原が広がっておりますが」

アインズは板に描かれた簡略的な地図の上で、指を走らせながら村長らと脱出経路の確認作業をしていた。

しかし、この地、カルネ村は街道に点在するごく普通の村であり、守るに難く攻めるに易い構造だ。南北を貫く街道と、西に平原、東に森林と言う構造は、逃亡にはお世辞にも適しては無く、森に身を潜めるやり方でも、モンスターや野生の獣達からの襲撃を考えなくてはいけない。

結論から言えば、このカルネ村と言う場所は、力ある守護者が強固な防衛施設などが無ければ、いとも簡単に落ちる場所だと言う事だ。

アインズはため息しか出なかった。ナザリックと言う物を隠しながら、ましてや自分の実力も隠さねばならない。そして、一番アインズを悩ましているのが、この世界の魔法詠唱者の実力が解らない事だった。

デス・ナイトが、伝説級のモンスターだと言うこの世界、恐らく魔法自体もあまり高

い位階までは使用されてはいないだろうと考察は出来る。出来るのだが、それが第五位階なのか、第三位階なのか解らない。村長や近くに居た男衆に聞いても、彼らの魔法知識はサツパリだった。

アインズは机を指で叩きながらどうした物かと思いを巡らせる。一度ビクトーリアとすり合わせを行うかとアインズが腰を上げたその時、まさにその時、昼間と見紛う閃光と大地を揺るがす程の轟音が響いた。



ガゼフ・ストロノーフが死を覚悟した瞬間、周りは昼の明るさと激しい衝撃に包まれた。

光で眩んだその瞳をゆっくりと開き、周りを確認する。眼前に陽光聖典は居た。だが、上空を舞っていた炎の上位天使はその姿を金の砂粒へと変えていた。

「何だ？ 魔法……なのか？」

今起こった事象はガゼフにとって理解を超える出来事だった。

ガゼフだけで無く陽光聖典側でも同様であつたらしく皆凍つた様に固まっていた。

そんな異常な混乱の中、ガゼフ達の後から拍手の音が戦場に木霊する。

小さな、草を踏み締める音が徐々にだが近付いて来るのも解る。

パチパチと拍手をしながら戦士達の横をすり抜けガゼフの隣まで来ると、その者は振り向いた。

何時着替えたのか、先程の赤を基調としたドレスでは無く、緑を基調としたドレス姿のビクトーリアが、満足そうな笑顔を浮かべながら戦士達と向き合つた。

「戦士達よ、先ほどの非礼を詫びよう。貴殿らは真の意味で、この国の守護者である。」

ビクトーリアは戦士達から視線を外すとガゼフと目を合わせた。

「戦士長殿も。お疲れであろう、後は妾に任せるが良い。セバスー。」

「はー。」

「負傷者の方々を後方へ」

「承知いたしました」

ビクトーリアの登場によつて、ガゼフの思考はさらなる混乱に陥つた。そもそもガゼフにはビクトーリアの話している意味が解らなかつた。

ビクトーリアが言う事を要約すれば、自分達戦士団全員よりも、彼女の方が強いと言っている事になる。

そんな事があるのだろうか、確かに女性でも強い者達は存在する。冒険者として最強の称号、アダマンタイトを冠する蒼の薔薇などがその代表的存在だ。

しかしそんな彼女達でも、たった一人で陽光聖典の連中と、次々と召喚される炎の上位天使を相手に出来るのか？ 答えは否だろう。だが、目の前の女性、見た目には貴族の令嬢にしか見えない者がそれをやると言うのだ。

確かに、この女性の志は尊敬に値する物だろう。彼女の演説で、兵士達の士気は上がった事は間違いない。だが、これはどんな冗談なのだろう。

そこに考えが行きついた時、一つの答えが導き出された。この女性はパトロンか何かなのだろうと。

魔法詠唱者だって人である以上生活がある。こんな辺境の村まで執事を連れて来る様な人物だ、多分、あのアインズ・ウール・ゴウンなる魔法詠唱者の研究成果を、自分の事の様に自慢しているのだろう。

そう結論づけたガゼフは、視線を動かしアインズを探す。しかし、いや当然そこにはアインズの姿は無い。そして、隣に居たビクトリアの姿も無かった。

ガゼフは慌てて振り向く、そこにはゆっくりと陽光聖典へと歩を進めるビクトリアの姿があった。ビクトリアは戦士団と陽光聖典の中間程の位置で立ち止まると、スカートを摘み令嬢然と腰を折る。

「初めましてスレイン法国の者達よ。此度の戦、見せて貰うた。この戦で王国戦士達は、妾の期待以上の輝きと、その有り様を見せてくれた。貢には報いてやらねばならぬ。よつて妾はこの者達の味方をしようと思う。怨むな、とは言わぬ。痛みは一瞬じゃ、覚悟せい」

ビクトーリアは無防備な姿勢で死を宣告した。

陽光聖典リーダー、ニグン・グリッド・ルーインは、この滑稽な演説を披露する道化師を見つめながら、笑いが込み上げて来ていた。すでに死に体の王国戦士団と共に、目の前の女は戦うと言っているのだ。これが笑わずに済ませられるだろうか。ニグンは部隊の前に出ると、ビクトーリアを嘲う様に口を開く。

「これはこれは、笑わせてくれる。どこのお嬢様か知らんが、冗談はお父上にでも披露していたらどうかかな?」

「冗談、か。うぬらの様な脆弱な者達が勝てるだけでも? 先程の天使の消失は見たのであろう?」

「ふははは! どんな手段を使ったのかは知らぬが、無駄な事だったな。お前達、天使を召喚しろ」

ニグンの号令一過、再び天使が召喚される。

「どうだ! 死に体の戦士団とキサマの様な女一人で、この軍勢を倒せるとでも言うの

か！」

「戦士団？ うぬは何を言っておる。遊ぶのは妾一人よ、そんな事も解せぬか……それに、そんな小鳥では妾は倒せんよ」

ビクトーリアは、ニヤリと相手を馬鹿にする様な笑みを浮かべた。

「ほう。痛みは一瞬、だったか。あの女へ攻撃を集中しろ！ 布切れ一片すら残すな！」
ニグンの檄が飛ぶ。その直後、炎の上位天使達が一斉にビクトーリア目がけ飛来した。

事象を目の当たりにして、慌ててガゼフは飛び出そうとするが、その行動はセバスに
よって止められる。

迫り来る炎の上位天使達の前に、恐れる訳でも無く、慌てる素振りすらせず、ビクトー

リアは力有る言葉をおにした。

「魔法効果範囲拡大化ワイデンマジック、電撃エレクトロ・スファイア」

ビクトーリアの身体を包みこむ様に出現した雷球は、一気にその範囲を増し、炎の上位天使達を巻き込んだ。

地獄

膨れ上がった光は破裂音を残して霧散し、上空からは金色の砂粒が降り注ぐ。

これを見て、この光景を見せられて戦場にいる者達はやっと気付いた。気付かされたと言つても良い。今、自分の目の前に居る者は、圧倒的強者だと言う事に。

驚きなのか、恐怖からなのか、誰も口を開く者はいなかった。その戦場に相応しくない静寂が支配する中、唯一人何とか言葉を絞り出す事に成功した者がいた。陽光聖典リーダー、ニグン・グリッド・ルーインだ。

「なんだ……何だこれは？　だ、誰だ！　誰なんだ！　貴様は誰なんだ！」

呟く様に発せられた言葉は徐々に大きくなり、最後には恫喝の様であったが、ビクトーリアにとっては何の効果も無かった。そして「ふむ」と一つ呟くと声を挙げる。

「妾はビクトーリア。ビクトーリア・F・ホーエンハイム。以後、御見知りおきを」

ビクトーリアは嘲る様に、また茶化す様に名乗りをあげる。それを聞いた瞬間、ニグンは膝から崩れ堕ちた。そして、ぶつぶつと呟く様に

「嘘だ。嘘だ。嘘だ。……………」

それだけを繰り返しながら、ビクトーリアだけを見つめ続けた。ニグンの虚ろな眼差

しは、ビクトーリアの一つ一つを確認する様にその瞳に映す。流れる様な黄金の髪、人では有り得ない金色の瞳、素材が何か解らない鈍い光沢のドレス、そして、先ほどの雷の魔法。

「……煉獄の王。煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイム」

ニグンはポツリと眩く。

その言葉は伝染病の様に陽光聖典内へと広がって行つた。そして一人、また一人と膝を着き戦意を失つて行く。

そんな光景を王国戦士団は茫然とした状態で眺めて居た。ガゼフに至つては何が起こつているのかすら理解の外にあつた。

「何がどうなつてゐるんだ？ スレイン法国の奴らから戦意が消えたが……」

ガゼフの言葉に、横に居た戦士団の一人が答える。

「隊長はご存じ無いのですか？ 煉獄の王のお話を」

「煉獄の王？」

「スレイン法国に降り立つたと言う六大神が、六人がかりでも封印がやつつと言う神で

あり……」

「であり？ まだ何かあるのか」

「あの八欲王が恐れた唯一の者」

「何だと……では俺達は、神話を目撃していると言うのか」

煉獄の王のお伽話を語った戦士も、ガゼフの問いに目を伏せ「恐らく」と答えるのが精一杯だった。

六大神への信仰が薄い王国戦士でもこのあり様だ、信仰が厚いスレイン法国の民だったらどうなのだろう？ それは陽光聖典の者達を見れば、一目瞭然だった。

煉獄の王のお伽話はスレイン法国に生を受けた者なら、子供の頃に誰もが聞くお話である。それこそ親が子を叱る時「そんな事をしてしていると、煉獄の王に攫われるぞ！」と言われるくらいメジャーな名前であった。

その人物、いや神が目の前に居るのだ。嘘だと、騙りだと言い張る事も出来るだろう、しかし先ほどの二つの魔法、数多の天使を一撃で、一瞬で消滅させた事実がそれを許さない。もう認めるしか無いのだ、今、目の前に居るのは、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムなのだ。

「煉獄の王よ」

「……………なにかな？」

「も、申し訳ありません！」

ニグンはビクトーリアの名を呼ぶが、ビクトーリアの返事が遅れた為、機嫌を損ねたと思ひ顔を地面に擦り着ける。だが、それは勘違いだ。ビクトーリアの返事が遅れた理

由は、何故異世界であろうこの地で、自分を知っている者が居るのかと言う驚きからだった。

驚きから素の言葉遣いが出てしまう程に。

しかし驚いてばかりもいられない、彼らが自分に対して何らかの恐怖を持っているのなら都合がいい、聞きたい事を全て聞き出そうとビクトーリアは頭を切り替える。何故自分の名を知っているのか？と言う事を聞きたいのは勿論なのだが、まずはコレからだろう。

「うぬら、スレイン法国の者で間違い無いな？」

この問いにニグンは黙って頭を縦に振る。

「名は？」

「スレイン法国、陽光聖典リーダー、ニグン・グリッド・ルーインであります」

「ニグン、か。カルネ村への襲撃、うぬらのしでかした事で良いな？」

「は、はい。ですが！」

ニグンは何か言い訳を付け加え様とするが、ビクトーリアの視線で止められる。

「目的は？」

「も、目的……」

ニグンは驚愕した、目の前の神はスレイン法国の目論見など関係無く、ただ村を襲つ

たからと言う理由だけで力を振るつたのだ。改めて理解した、これが神と言う物なのだと。

自分の気分で力を振るう、気に入った者は助け、気に入らない者は滅ぼす。神とはそういう者で、信仰とは只のご機嫌取りにしか過ぎなかったのだと。

「は、はは、はは」

ニグンから乾いた笑いが漏れだす。

ビクトーリアは気でも触れたか？と眉をひそめるが、ニグンはポツリポツリと懺悔を始めた。スレイン法国の為、六大神の教えに従い、それが正しい事と信じ、国の暗部として手を汚して来た。そして最後にこう言った。

「神よ。煉獄の王よ、私を裁いて欲しい」

周りを見れば、陽光聖典皆が頭を下げている。どうやら満場一致の意見の様だ。

しかし此の案件、ビクトーリアに取ってはどうでも良い事だった。ハッキリ言えば面倒臭かった。かと言って、飽きた、もう帰って良い、などとは言えない。

此処で放り投げてしまったら、エンリやネムの怒りや恨みはどうなる？ 一様王国戦士団も被害を受けた、馬も死んだ。

さてどうすべきか、ビクトーリアは必死に落とし所を探す。そして閃いた。コイツら自身で責任を取って貰おうと。

もしかしたら、甘い処置なのかも知れない、しかし、スレイン法国と言う国がどれほどの規模かも知らない現状で、無暗に「じゃあ、死ね」は下策と判断しての事だった。

ビクトーリアは両手を大きく広げると力強く言葉を紡ぐ。

「従属たる天よ、無慈悲な雨を降らせ、レインメーカー」

言葉に反応する様に上空に波紋が浮かび、剣が十振り程落下し地面に突き刺さる。

別にビクトーリアは、特別な事をした訳では無い。只単純にアイテムボックスを開いただけだった。それらしい呪文めいた何の意味も無い言葉を呟きながら。

だが、陽光聖典からどよめきが起こる。空から剣が降って来たのだ、もしこれが自分達の上で展開されていたなら、それだけで終わっていたかも知れない。それ以前に先ほどの魔法の事もある。

陽光聖典は改めて目の前の者がどれほどの化け物なのかを知った。自分達の常識など通じぬ相手なのだ。

だからこそ神なのだ。

そして知る事になる、神は無慈悲だと。

「うぬら、その右手を妾に捧げよ」

ビクトーリアは短く言い切った。簡潔に言えばこうだ、自分で右腕を切断しろと。それで許してやる、と。

ニグンは覚悟を決め剣を右脇に挟み込む。後は肉を割いて行くだけ。だが、柄を握る左手は震えだし力が入らない。

それは仕方が無い事だろう。自分で自分の右腕を切断するのだ、平然と出来る者などいない。

しかしビクトーリアは詰まらなそうに口を開く。

「早ようせい。」

右足でタンタンとリズムミカルに地面を鳴らしながら、いかにも退屈だと態度で表しながらニグンを急がせる。

だが、ニグンは震えるだけで何も出来ない。

ビクトーリアはため息を一つ吐くと、優しいな微笑みを浮かべニグンの肩に手を置いた。

その微笑みからニグンは許しが出たのだと思った。腕を切断する覚悟を見せた事で許しが出たのだと。ニグンはビクトーリアに対し恐怖で引き攣りながらも笑顔返す。

その瞬間、右の視界を何かが横切った。黒いカーテンの様な物が。

それを認識した直後に激痛と紅い液体が吹き出した。

何て事は無い、焦れたビクトーリアがニグンの腕を切断したのだ。

村での戦いで発見した現象、雷の、電気の力を利用し地中の砂鉄を刃物の様に扱う術

を使って。

長距離での使用や、威力ある物を作り出すには魔法の力が必要になるが、腕一本程度、それも直に触れている状態なら、ビクトーリアのパッシブスキル、帯電の利用で使用出来る事を学んでいた。

ビクトーリアはゆっくりと陽光聖典の者達の中を歩き、肩に手を触れて行く。

通り過ぎた後には、切断された右腕と、あふれ出す真っ赤な血液、そして……悲鳴が響いていた。そこは地獄と言つて良い場所へと姿を変えて行つた。

ガゼフ達はその光景を見つめながら、足が震え、喉がカラカラに乾くのを感じていた。恐怖に飲まれていたのだ。

次々と腕が切断されて行く陽光聖典、しかし、ガゼフ達が最も恐怖したのはビクトーリアの表情だった。

狂気に震える訳でも無く、残酷に微笑む訳でも無く、無表情で、何の感情も浮かべる事無く、さも当然とその地獄を作り出しているビクトーリアに恐怖したのだつた。

自分達は一体どんな存在に助けられたのか？

隣で沈黙を守る老人は一体どんな力を秘めているのか。そして、アインズ・ウール・ゴウンと言う魔法詠唱者。

最早、一兵士であるガゼフ達の想像の範疇を超えていた。

ビクトーリアが陽光聖典の者達の中を通り過ぎた時、つまり全員の右腕が本体と別れを告げたまさにその瞬間、ガラスが割れる様な音をさせながら、空が砕けた。

希望

『ビッチさん!』

空が砕けた事を認識した瞬間、アインズからメツセージが飛び込んで来た。

「モモンガさん、今のは?」

『アインズでお願いします』

「……で、アインズ、今のは?」

名前を訂正され不機嫌になったのか、ビクトーリアはぶつきらぼうに答える。その事にアインズは違和感を覚えるが、今はそれどころでは無いので話を先に進める事にした。

『今、ビッチさん達は監視されています』

「どう言う事じゃ?」

『俺が張った対情報系魔法の防壁が発動しました。さっきの現象はその為です』

「なるほど」

そこで一旦アインズとのメツセージを終了し、視線を陽光聖典へと持って行く。そこには憔悴しきった表情の男達が項垂れている光景が広がっていた。

傷口はライト・ヒーリングによつて塞がれているが、腕は再生してはいない。これはライト・ヒーリングが低位階の回復魔法と言うのもあるが、ビクトーリアの職業、クラスドナイトの特性に依る物も起因している。

痛みは無いのだが、損失感拭えぬ様で、皆一様に左手で右肩を押さえている。それは隊長であるニグンも同様だった。

しかし、陽光聖典の行動はビクトーリアの不機嫌さを増すだけだった。

「うぬら、何を暗い顔をしておる。うぬらに命を奪われた者達は、そんな顔すら出来ぬ。それが解つていて、妾の前でそのような顔をしておるのか？ それとも……………本国に信用されておらぬのが悲しいのか？」

ビクトーリアの言葉が終わつた瞬間、ニグンの瞳が見開いた。表情から察するに、信じられないのだろう。

ビクトーリアはため息を一つ吐くと、説明する様に口を開く。

「先ほど、空が割れたのをうぬらも見たであろう。あれは対情報系魔法の類でな、何者かがいかがわしい行為をしようとする、ああなる訳だな」

「いかがわしい行為？」

「覗きはいかがわしい行為じゃろ」

この言葉に、ニグンは成程と納得するが、慌てて頭を切り替える。

「煉獄の王よ、我が国が覗き見、いや、我らを見張つていふと言う事は真実なのですか？」
「消去法で行けば……な。王国戦士団を王国が監視する理由は無いであろう。此処が敵地なら解らんでも無いが、此処は王国の領地。監視する理由なぞ作戦の失敗か脱走兵の確認ぐらいいいか思い浮かばん。しかし、そんな物は後で幾らでも捏造出来るからな、意味は無いじゃろ」

「ここで一旦ビクトーリアは言葉を切ると、ぐるりと回りを見回した後話を再開した。

「後残る可能性は……この村を監視して何をする？ 作物の生育状況の確認か？ 村人の夜の営みか？ これも意味無かろう」

「はあ、まあ」

「最後は妾達じゃが、妾達は只の旅人なのでな、監視される云われは……」

「ここまで言ったビクトーリアの美麗な眉がピクンと跳ねた。

「掌をニグンの前に出し、暫し待てとジェスチャーで示すと、陽光聖典と戦士団の中間地点まで移動し、メッセージの魔法を発動する。

「アルベド」

『はい！ はい！ ビッチ様！ ビッチ様！ ビッチ様ー！ アルベドで御座います！

妻のアルベドで御座います！ あ・な・た』

メッセージの魔法を繋げた瞬間、コレだった。何がどうなつてこうなつてい

サツパリ不明だが、アルベドのテンションはとてつもなく高かった。

ビクトーリアは何故に？ と疑問に思うが、下手に付き合うととんでもない事に進行しそうなので放置を選択し、用事を優先する事にした。

「アルベド、ちよつとした質問なんじゃが……」

『はい！ 何時でも準備は整っておりますわ。どんな時でもバツチコイです！』

何がバツチコイなのか、後でアインズに確認しようと思しながら、ビクトーリアは話を続ける。

「それでね、今そつちで監視系の魔法って使つおるかや？」

『え？ あ、はい。遠隔視の鏡を使っておりますが？』

「あー、左様か。了解、了解。通信おわ……」

『ビツチ様！』

ビクトーリアがメッセージの魔法を終了しようとした瞬間、喰い気味でアルベドの悲痛な叫びが放たれた。

「どうしたの」

『そちらへ行つても……』

「ダメ」

『くすん。では、では……』

「帰ったらいっぱい相手してあげるから」

『あ・い・て?……………本当に御座いますか!』

「嘘は言わんぞ」

『では、お帰りお待ちしております。……………よつしやー!』

この会話を最後にビクトーリアはメッセージの魔法を終了させた。

だが、魔法を解除しても、指はこめかみに当てたままだ。それは、全身を襲う寒気と、何か大切な物を失った喪失感から来る物だった。

何を亡くした?と問われても、何も失つてなどいない。だが、何か大変な過ちを犯してしまった様に感じて仕方が無かった。多分、悪い予感と言う物だろう。それも最大級の。

心地よくも無い疲れを引きずりながら、ビクトーリアは次の相手へとメッセージを飛ばす。

「アインズ、聞こえるかや?」

『どうしました?』

ビクトーリアの呼びかけに対して、すぐに返事が返って来た。

「今、アルベドに連絡を取ったのじゃが、遠隔視の鏡を使っていたらしい。さっきの防壁が発動したのは、ソッチと言う可能性は?」

『それは無いと思います』

「その心は？」

『俺が魔法を展開させたのは、王国戦士団が来た辺りからですから』

「それが何か関係が？」

『デミウルゴスに連絡を取った時、アルベドから要請があつたら、全軍率いて行くつて事でしたから』

「なるほど。その頃から見てたつて訳ね」

『そう言う事です』

これで現状の整理が付いたと、魔法を終了し、陽光聖典の下へ向かった。たった二十歩程の距離なのだが、近づいて行くたびに陽光聖典達の顔色が青ざめて行くのが見てとれた。まあ恐怖の対象が近付いて来るのだから、当たり前と言えども当たり前なのだが。

ビクトーリアは、ニグンの前に立つと、ピシッ！と指をさしながら宣言する。

「ニグンよ、現状の確認は滞りなく終了した。行くぞ、案内せい」

「は？」

ビクトーリアの要求に対して、ニグンは間拔けな返事で返した。

「じゃから、スレイン法国へ案内せい」

ニグンはやっと言葉の意味を理解した。理解はしたが、案内などしたくは無い。行き

たいなら行けば良いし、案内なら他の者に頼んで欲しい。

ハツキリ言つて、こんな神話級の化け物と何日も一緒に居るなど、自分の神経が持つ自信がニグンにはなかつた。

体中からねつとりした油汗が吹き出して来る。断れば何をされるか解らない。だが了承も出来ない。答えを見失つたニグンは沈黙を守る他選択肢は無かつた。

その時、自分の頭が何かでポンポンと叩かれている事に気づく。ゆつくりと視線を上げ、その物体を確認する。それは魔法のスクロールだつた。

「これは……」

「魔法のスクロールじゃろ」

「それは解りますが」

ニグンの煮え切らない態度に、ビクトーリアの少ない忍耐力はすぐに限界を迎える。「早よう展開せい。妾は法国へは行つた事が無きゆえ、うぬが導け、早よ導け、とつとと導け」

そう言いながら右足はタンタンとリズムを刻む。ニグンはこの光景を見た事があつた。自分が腕を切り落とすのを躊躇つていた時だ。あの後はどうなつた？ 思い出すのもおぞましい阿鼻叫喚の地獄が待つていた。

だからニグンは素直にスクロールを受け取ると、それを展開する。目の前に漆黒の闇

が姿を現した。

ビクトーリアはアインズへとメツセージを繋げ、事後を任せると告げ、ニグンと共に闇へと消えた。



ゲートを通りビクトーリア達が出現した場所は、思っていた景色とは少々違う所だった。

床も壁も天井でさえも石で囲まれた所に転移門は現れ、てつきり屋外に開かれると思いを込めていたビクトーリアは少々拍子抜けしていた。

「少し肌寒いのが。ここは地下か何かかえ？」

「は、はい」

ビクトーリア達が転移した場所、そこは聖典本部のかなり重要な場所であった。

何故此処に転移門が開いたのか、それはニグンの助けを求める心が導いた結果である。ニグンが知る上で、この煉獄の王を倒せるかも知れない唯一の人物が居る場所が此

処だった。つまりニグンはビクトーリアを罫にはめたのだ。

か細い希望を抱いて。

それは今、現実となった。

「なに、やってるの？」

その声と共にビクトーリアの喉元に刃が触れた。

対決

首筋に感じる冷たい感覚を、気にする素振りを見せずにビクトーリアは振り向く。

そこには十代半ばと思われる少女の姿があつた。その肌は白磁とも言えるほどに白く透通り、長く伸びた髪は奇怪な事に左右で色が分かれている。右側は光を反射しキラキラと輝く銀色をしており、左側は全てを飲み込む様な漆黒。そして、その瞳はまるで凶つた様に髪とは逆の虹彩で彩られていた。

身に纏うのは、まるで拘束衣の様な色気の無い物で、手に持つ凶器は十字架を思わせる様な、巨大な鎌である。

ビクトーリアはじつくりと舐める様に少女を観測し、興味深そうに口を開く。

「娘、いきなりコレとは、無粋なヤツじやの」

そう言つてそつと鎌の柄を掴んだ。

「そつ？」

少女は短く呟くと握る鎌に力を込める。

薄く微笑みを浮かべながら相對する二人からは、見た目からは想像出来ない程のプレッシャーが感じられた。そんな緊張感の中、少女は僅かな違和感を感じ始めていた。

自身の得物である鎌が、まるで空中で固定されたかの様に微動だにしないのだ。

少女の動揺は徐々に大きくなって行く。

自分が生まれて二百年余り、自分より強い者には出会った事が無かった少女は、今の状態が理解出来ていなかった。そして、その動揺は焦りに変って行く。

「あ、あなた、何者？」

そしてポツリとそんな言葉が漏れる。

この問いかけに、ビクトーリアはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、掴んだ柄に力を込め

「人に名を聞く時は、自分から名乗るのが常識じゃろ」

言って少女を壁に叩きつけた。

ドカン！　　と言う衝撃音と、立ち上る土煙の中、少女は石壁を突き破りその姿を消した。

この光景を目の当たりにし、ニグンは改めて驚愕した。ビクトーリアが圧倒的な強者だと言う事は解っている。しかし、相手の少女とて神人と呼ばれる存在だ。

六大神の血を引き、信じられない程の確立の中生まれた先祖返りの突然変異。それが彼女、漆黒聖典番外席次、絶死絶命。

法国最強の存在であり、負けを知らない者であった。そんな存在が、軽々と壁へと投

げつけられた現状を見てニグンはやっと過ちを悟ったのだった。

ニグンが再びビクトーリアへと視線を向けると、番外席次の開けた穴へ向かう所だった。

壁に開けられた穴を抜けると、そこには別世界が広がっていた。

全てが石造りなのは同じのだが、先ほどの通路と比べると、いや、比べるまでも無い広い空間がそこには広がっていた。円形劇場とでも言ったら良いのか、すり鉢状になったその場所は、外側から八段階に中央に向け窪んでおり、その四段目に番外席次が倒れ伏していた。

痛みの為か、ゆっくりと番外席次は身体を起こして行く。だが、その瞳はしっかりとビクトーリアを敵と見据えていた。

それに呼応するように、ビクトーリアは青い旗のフラッグポールを取り出す。

二人は武器を片手にゆっくりと相手に向け歩き出し、その速度を徐々に上げて行つた。走る速度になり、最後には地面を蹴り、跳ねると言い表した方が正しい程のスピードで二人は邂逅する。

番外席次の鎌と、ビクトーリアのフラッグポールが空中で激突する。

御互いの刃が合わさった瞬間、音を上げたのはビクトーリアのフラッグポールだった。

ビクトーリアは切断されたフラッグポールを見つめ、ニヤリと愉快げに笑みを漏らした。

「小娘。うぬのその鎌、なかなかの物らしいの」

ビクトーリアの問いかけに、番外席次は優越感に浸りながら楽しげに返す。

「そう？ あなたが弱いだけじゃない？ あーあ、せつかく負けが味わえると思ったのに」

「ほう。愉快な事を言う小娘じゃ」

番外席次の挑発とも取れる発言に、ビクトーリアの瞳が爬虫類を思わせる物へと変化した。

パチンと指を鳴らし、新たなフラッグポールを出現させる。それは今までとは比べ物にならない程、豪華な旗が揺らめく物だった。地面に突き刺さるソレは、そこにあるだけで空気を震わせ、今までの物とは格が違うと無言の内に語っていた。

ビクトーリアはゆっくりとソレに手を伸ばしブンツ！と一振りさせる。

それが第二ラウンドの開始のゴングになった。

再度、跳ねる様に駆け出し中央で二人は激突する。先程の録画VTRを見る様な光景であったが、今回負けたのは番外席次の方だった。ビクトーリアの一撃を、何とか鎌で受けたが、その力任せとでも言える攻撃を受け切る事が出来ず、壁へと叩きつけられ、ド

スン！　と言う本日二度目の衝撃音が鳴り響く。

この光景をビクトーリアは目を細めながら見つめていた。

「得物は無事……か。身体の方も、装備品も無事。と言う事は伝説級レジェンドもしくは、神器ゴッス。そしてあの小娘……面白い。妾達の脅威となるか、それとも」

そう呟くと、一気に番外席次との距離を詰め、そして、フラッグポールを上から一気に振り下ろす。この攻撃を番外席次は何とか柄で防ぐが、またしても威力を殺し切れず膝を着いた。だが、攻撃の手は休まる事無く続けられる。

番外席次はもはや防戦一方となっていた。

どれほどの攻撃が繰り返されただろうか、ビクトーリアが距離を取り、攻撃が止んだ。番外席次は疑問に思う傍ら、ほっと息を吐いた。

だが、この直後に放たれた言葉は番外席次にとって、いや、スレイン法国にとっても屈辱的で恐ろしい物だった。

「小娘、キサマ弱いのか」
「！」

番外席次の目が見開かれる。スレイン法国、いや、人間種最強の自分が弱い？ そんなはずは無い。もしそうだったのなら、自分は何の為に存在して来たのだ？ 誰からも愛されず、誰とも向き合う事無く、ただ二百年と言う時間を生きて来たのか？ そう思った瞬間

間、番外席次の感情が爆発した。

「うああああああああ！」

構えも、型も無く、ただ手に持つ鎌を振りかざし、番外席次はビクトーリアへ突進して行つた。二人の距離が縮まる。もう少して目の前のペテン師に手が届く。この憎いヤツを殺す事が出来る。

番外席次が勝ちを意識した瞬間、自身の腹部に激しい衝撃を感じた。そして気付いた時には、またもや地面に倒れていたのは自分の方だった。

何が起こつた？

答えは簡単であつた。

突進して来た番外席次の腹部に、カウンターでビクトーリアの蹴りが入つたのだ。これでもう勝負は決まつた様な物だった。番外席次は蹲りながらカハツ、カハツと息をつまらせている。

しかし、戦う者の本能なのか鎌を杖代わりにして何とか身体を起こす。やつとの事で番外席次は立ち上がるが、その瞬間、ビクトーリアによつて足を払われた。そして本日何度目かに地に這いつくばる事になる。

これは負けを知らぬ番外席次にとつては屈辱以外の何でも無かつた。

何度も何度も立ち上がっては転ばされる。

どれほどの同じやり取りが繰り返されたらどうか、地に伏せる番外席次には、もう立ち上がる気力が残されていなかった。それどころか、整った愛らしいその顔を涙で濡らし、その表情には悔しさが滲んでいた。

それでもビクトーリアは番外席次に立てと言葉を突きつける。そして何もせず、ただ一点に番外席次を見つめ自分の力で立ち上がるのを待っていた。

もう一度、何とかそう決意し番外席次は腕の力だけで上半身を持ち上げる。

その時、横から声がした。

「王よ、煉獄の王よ、どうか、どうか御慈悲を」

視線を向けると、ニグンが地に這いつくばり、頭を擦りつけていた。番外席次は訳が解らなくなっていた。何故にこの男はこの様な行動を取っているのだろうか？ 一体何の為に？ そして誰の為に？

「ほう。この娘は、うぬがその様な行動をとるに足る者か？」

「解りません。昨日まで、いや、先ほどまでは只の同僚と言う意識しかありませんでした」

「では、何故に？」

「解りません。しかし王の御言葉を借りれば、この者には戦う者の輝きがあったのではありませんか？ ああの王国戦士達の様な」

「言うではないか」

そう呟くとビクトーリアは番外席次の脇に手を差し込むと、抱きしめる様に起き上がらせる。

ビクトーリアに体を預ける形になった番外席次は、味わった事の無い感触に戸惑っていた。

人の身体の柔らかな感触に、その暖かな体温に、そして……自分に向けられた優しい微笑みに。

慈愛

「おお……さ……まっ！」

番外席次は、ビクトーリアの胸に身体を預けながらポツリと呟いた。しかし、その呟きに返事は無かった。

ビクトーリアは、返事の代わりに両手で番外席次の頭を掴むと、髪をワシヤワシヤと掻き混ぜる様に弄ぶ。番外席次も、それを心地よく受け入れていた。

方やビクトーリアは、指に程良い刺激を味わいながらも、胸に湧き上がるもやもやに頭を悩ませていた。

そのもやもやの正体、それは煉獄の王と言う名であった。天井を見上げながら、呟く様に言葉を漏らす。

「ニグンよ。うぬは何故に妾を煉獄の王と呼ぶ？」

この問いにニグンは言葉に詰まった。何故に？そう言われても王は王なのだ。

法国の国宝書庫に存在すると言う、六大神が残した聖辞典に記されている神。

遙か昔から、口伝で伝えられたと言う吟遊詩人の詩に登場する荒ぶる者。

何時書かれたのかは解らないが、子供達が読む英雄物語（ヒロイツク・サーガ）の魔

王。

それが、雷を伴い現れる者、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイム。

ニグンの思考はグルグルと回り、何を言って良いのか解らず言葉が出てこなかった。そんな状態のニグンに、ビクトーリアは再度言葉をかける。だが、そこには苛立ちも怒りもなかった。

ただ単に興味からの質問だと、その雰囲気でも理解出来る。

「うぬは、妾の名をどこで知った?」

ニグンは、質問の意味がやつと理解出来た。これならば答える事が出来る。

「私の場合は……幼い頃に母に読んでもらった絵本でした」

ニグンが母と言った時、番外席次の身体がピクンと反応したが、ビクトーリアは構わず髪を弄びながら、ニグンとの会話を続行する。

「うぬの場合は母と言ったが、他にも有るのか?」

「はあ、英雄物語であったり、旅の吟遊詩人の詩であったりと、王の御名前は広く伝わっております」

「何故じゃ?」

「何故と申しますと?」

ニグンの問いかけに、今度はビクトーリアは言葉に詰まった。さて、どう言ったら良

い物か。

ビクトーリアは、ナザリツクの事やアインズとの関係をあやふやにした状態で、ある程度の情報を流して見る事にした。

「妾は別の世界から来た。その妾の事を、何故うぬの世界は知っておる」

この発言にニグンの表情がひきつった。

書籍や詩（サーガ）によって、煉獄の王は、煉獄と言う地に封じられていると言う事は知っていた。その煉獄の地が、異世界だとは思っても居なかつたのだ。

しかし、良く考えて見れば、それも一理ある考察なのだった。

六大神がかつて居たとされる場所。それは天界と言われる場所だと法国は伝えてい

る。
天の国とはどこにある？それは空にあると言われていた。この言葉の空とは？人が決して行けぬ場所。死後の世界。神々の国。そして此処とは異なる世界。そして煉獄の王はその異世界から来たと言う。

ニグンは驚きと共に、何故か喜びが湧きあがって来ていた。それは信仰心と言える物であり、圧倒的な強者との邂逅による興奮からであった。その喜びを隠す事無く、ニグンは再び口を開く。

「伝承では、このスレイン法国に降り立った六大神が、王の名を告げたと伝わっておりま

す。」

ビクトーリアは「ふむ」と相槌を打つが、ニグンの言葉に少し違和感を覚える。何故ニグンは信仰の対象である六大神に対して、様、などの敬称を付けなかったのかと言う事だ。神、と言うのが敬称であるのなら、別にそれで良いのだが、こう言う場合、六大神様と言うのがビクトーリアには普通に感じたからだ。だが、それはビクトーリアにとつての違和感であり、ニグンが良ければそれで良いのだろう。

其処に突っ込みを入れるのは、ハッキリ言つてメンドクサイ。番外席次をいじつていた方がよっぽど有意義に感じる。

しかし、ビクトーリアの違和感は的を得た物だった。スレイン法国に生を受けてから、ずっと信仰してきた六大神への思いが、ニグンの中からすっかりと抜け落ちてしまつていたのだ。

その理由は明確だった。圧倒的な強者によつてもたらされた恐怖と、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムと言う、生きた伝説を前にして、教義と云い伝えの中だけでは存在しない六大神と言う存在が、吹き飛んでしまつたからだ。結果、ニグンは、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムを信仰する信者と化していた。

そんな事は露ほども知らずに、番外席次をいじりながら、ビクトーリアは思考の海に浸っていた。

自分の事を語ったと言う六大神、その者達が神として崇められているスレイン法国、これは思わぬ拾い物をしたかも知れないとビクトーリアは思う。自分達の転移に関する情報が、この国には眠っている可能性がある」と。

そんな時、ビクトーリアは指に違和感を感じた。

人の形状として決して存在しない感触。番外席次の髪の中に鋭利な角を感じたのだ。

その瞬間、あれほど身を任せていた番外席次が跳ね起きビクトーリアから距離を取る。

そればかりか、愛らしい瞳を見開き、両の手を側頭部にあて悲鳴をあげた。

「いやー……」

足取りは踏鞴を踏み、頭を左右にブンブンと振りながらゆっくりと後退して行く。その姿は、まるで恐怖から逃げる様だった。いや、実際にそうなのだろう。

ビクトーリアの頭脳は、この一瞬の出来事が理解出来なかった。

しかし、隣に控えるニグンには解っていた。何故に番外席次がこれほどの脅えを示すのか。ニグンは片膝を付いた姿勢で、静かにビクトーリアに語り出した。

「王よ、我が王よ、私の言葉をお聞き下さい」

ビクトーリアは頷きでこれを許可する。

しかし、視線は番外席次からは外さない。

「かの者は、ハーフエルフに御座います」

「ハーフエルフ……」

そして、ニグンは語り出した。

スレイン王国の闇を、この世界の常識と言う闇を。

昔、スレイン王国に六大神の血を引く女性が居た。しかし、近隣にあるエルフの国の王は、その女性をさららい、鎖で拘束をし無理やり孕ませた。その結果生まれたのが、番外席次、絶死絶命。

そしてもう一つ。

「王よ、僅かな国家を除き、エルフなどの亜人は……奴隷として扱われております」
「何?」

ビクトーリアの視線が、番外席次からニグンへと移動した。

その瞳孔は、爬虫類を思わせる物に変化する。

「あの者は、自分の出自を、自分の種族を恥じ、自らその耳を切り落としたと……。エルフの耳を切り落とす行為は……」

此処まで言つてニグンは言葉に詰まる。此の先を伝えて良いのかと。恐らく伝えた瞬間に、スレイン王国と言う国家は終わりを迎えるのではないかとニグンは想像出来た。

しかし、ニグンの葛藤はすぐに霧散した。滅びるのなら、それが運命なのだ。煉獄の王が、神がそれを決めたのなら、と。

そう決意して、ニグンは言葉を続けた。

「奴隷の証で御座います」

「それを知っていて、娘は……」

「自分がハーフエルフと知られるのが、恐ろしかったのでしよう」

「生まれてからずっと、その思いを？」

「恐らくは」

この会話を最後に、ビクトーリアは再び視線を番外席次に向ける。

ブルブルと震えながら蹲る番外席次、そして、急激にその様態を変えた。カハッ、カハッ、と息が詰まるような声を出し、震えが痙攣の様に変わる。

ビクトーリアは、急ぎ番外席次へと駆け寄り、その身体を強く抱きしめる。

しかし、依然息は詰まり、痙攣は続く。

「落ち着け！ この場にうぬの敵はおらぬ！ うぬを恥ずかしめる者などおらぬ！ 見よ！ 妾の……私の目を見ろ！ 私がいる！ お前の恐れる者は、全て私が屠ってやる！ 私がお前を守ってやる！ 恐れるな！ 私の全てでお前を守ってやる！」

ビクトーリアは、焦りにも似た口調で番外席次に語りかけ、一層力強く抱き締める。

暫くそうしていると、ゆっくりとゆっくりと番外席次の呼吸は穏やかな物へと変化していった。

そして、涙に濡れるその瞳で、まっすぐにビクトーリアを見ていた。

ビクトーリアは優しく微笑むと、番外席次の髪をゆっくりと、その髪を撫でる。何度も、何度も。もう大丈夫だと、何も怖くは無いと、言い聞かせる様に何度も撫でた。

ビクトーリアは、この少女をほっては置けなかった。

この少女は………あまりにもモモンガに似ていた。そして、自分にも。幼い頃から、縋る者はだれ一人存在せず、周りに人は居るものの、心はいつも孤独を感じていた。

その孤独の中、唯一自分を救っていたのは、モモンガや自分は、YGGDRASILであり、この少女にとつては、恐らく強き、なのだろう。

そんな少女だからこそ、助けずには、抱きしめずにはいられなかった。

ビクトーリアは、その豊かな胸に番外席次を抱きながら、右手でアイテムボックスを探る。

そして、一つのアイテムを取り出した。細かい裝飾が入ったガラスの小瓶に、赤い液体が入った物、ポーションと呼ばれる回復アイテム。

それを、ゆっくりと番外席次の口元に近づけて行く。

番外席次は、一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、すぐにポーションを口にした。コクン、コクンと少しずつ飲みほして行く。

全てを飲み干した時、番外席次の側頭部には、特徴的な長いエルフの耳があった。

ビクトーリアは、確認する様に、愛しむ様に、悪戯をする様に、番外席次の耳を撫でる。

そして……愛らしい、少女の笑みで番外席次、絶死絶命は、それからもたらさせる安堵を感じていた。

戯れ

「平気か？」

ビクトーリアの問いに、番外席次は首を縦に振る事で答えた。目には生気が戻り、僅かに疲れが見えるが、表情も自然な物に見える。

もう大丈夫だと確信したビクトーリアは、次の行動へと移るべくその場で立ち上がった。その行動を、追いかけてようと番外席次も追従するが、若干まだ力が入らないのか膝立ちの状態でポスンとビクトーリアに寄りかかる。しかし、場所が悪かった、いや、番外席次にとっては良かったと言える。

まさに今日、彼女は当たりを引き当てた。

番外席次の頭部は、その愛らしい頬は、ビクトーリアの足の付け根あたり、つまりは股間部にすっぽりと収まった。

「はうっ」

ビクトーリアから奇妙な声が漏れる。そして、番外席次も微妙な表情を浮かべた。そして、何かを確認する様に、番外席次は顔を左右に振る。それは愛おしい物に頬ずりする様に見えた。

しかし、場所が問題である。

人の股間部に頬ずりする、これは乙女のする行動では無い。しかし、番外席次はそれ
を続け、首を捻る。

「……陽光聖典」

番外席次はニグンに声をかけた。これは、ニグンにとつても意外だったのか、どもつ
た様に返事を返した。

しかし、驚きはこれでは終わらなかつた。番外席次の爆弾発言は投下される。

「なんか、ぐにぐにした物がある。この感触は私には無い物。ニヨツキみたいになら
ない。これは何？」

そう言つて番外席次は、より一層強く股間部に頬を擦りつける。問われたニグンも、
番外席次の質問の意味が解らず首を捻るばかりだ。

それよりもニグンの視線は、ビクトーリアに注がれる。ニグンにとつてビクトーリア
とは、崇拜の対象であり、恐怖の具現者なのだ。それが今は、頬を赤く染めながら、番
外席次と戯れている。

「おおさま、おおさま、これは何？　これ、これ」

ニグンからの返答は諦め、番外席次は本人から聞き出す事にした。

「や、止めんか！　こ、これ、止めよ！」

「ぐにぐにぐにぐに、これは何？」

ビクトーリアは、必死に番外席次を引き離そうとするが、番外席次もLv90オーバーの強者、簡単には離れない。その間も、番外席次はビクトーリアの股間部に頬ずりを続ける。

「わかつたから！ 答えるから！」

「うんうん。ぐにぐに。これは何？」

「じゃから、まずは止めよ！」

「拒否。ぐにぐにぐにぐに」

「……………止めんかー！」

怒りの言葉と共に、バチンと雷が跳ね、番外席次の頭頂部に拳が振り落とされた。ハアハアと息を荒げるビクトーリア、番外席次はその場で突つ伏す様に蹲った。

「ま、まったく。何と言う小娘じゃ、少しは恥じらいと言う物をわきまえんか。」

注意を促すビクトーリアだが、その頬は羞恥で赤く染まり、両手は股間部をガードする様に前で重ねられ、その腰は若干引かれている。最早、王の威厳とか、強者の態度とかそんな物は微塵も無かった。ビクトーリアの脳内に、番外席次はどこぞの守護者統括と並ぶ危険人物として記憶された。

そしてビクトーリアは、片足を若干引き、いつでも逃走出来る状態を保ちながら口を

開く。

「娘よ。こ、これは……アレじゃよ」

「アレ？」

「そうじゃ、アレじゃ」

「アレって何？」

「言うなれば、……せ、せいしよく」

「せいしよく？」

「あーもう！」

ビクトーリアは髪を掻き上げると、真実を口にする。

「妾は、両性具有じゃ！ したがって、アレはアレじゃ！」

ビクトーリアのこの言葉に反応する様に、番外席次はゆっくりと顔を上げると、その艶やかな唇をニイツと上げ、邪悪な笑みを浮かべる。

「両性……具有。……だーりん。だーりん！」

叫びながら番外席次はビクトーリアへ向け突撃を開始した。スレイン法国の国宝が眠る地で、緊張感の無い追いかけっこが始まる。

「だーりん！ 子作り！」

「何じゃ！ いったい、何じゃ！」

「こつづくくり！ こつづくくり！」

番外席次の秘めた思いは、自身の持てる全ての能力を解放しビクトーリアへと迫る。ビクトーリアは、番外席次の右腕を取ると、払い腰の要領で地面に叩きつける。ドスン！ という音をたて、またしても番外席次は地面に寝転がる事になった。

番外席次と視線が交差する。だが、此処で予想外の出来事が起きた。ビクトーリアを見つめる瞳から、涙が溢れて来たのだ。それは、先ほど見せた悔しさの涙では無い。

その真意は番外席次の口から語られた。

「だーりんは私の事が嫌い？」

ビクトーリアはがっくりと膝を付く。そして、こう誓った。この娘に、もう少しまともな恋愛観を叩きこもうと。そして、こんな歪な教育をしたスレイン法国上層部に、文句を言つてやろうと。

番外席次を立たせながら、ビクトーリアはニグンに視線を向ける。

「ニグン、案内せえ」

「はっ。」

あまりの突然の発言に、ニグンは付いて行けず間抜けな返事が口から洩れた。だが、それ以前に「何処へ？」と言う疑問がニグンの頭をよぎる。

「じゃから、案内せえ」

声から推測すると、非常にいらついた感じを受け取るのだが、目の前で起こっている事象を見れば、ニグンは安心して恐怖の大王と会話が出来る。それは何故か？その理由は、真面目に話を進めようとする煉獄の王に対して、事もあろうか横から番外席次がちよつかいを出している為である。

ビクトーリアが、自分から目線を外しているのをいい事に、お尻やら、胸やらを指で突いているのだった。その度に手で払われ続けているのだが、負けずに？何度も繰り返している。

それはそれは楽しそうに。

「じゃから、ふん！ ニグンよ、ふん！ 妾を、ふん！ 此処の、責任者の、ふん！ 下へ、ふん！ 案内せい。ふん！」

此の頻度で番外席次は悪戯を続けている。

だが、言いたい事は解った。残るはその理由だけだ。

「王よ、何用得最高神官長に？」

ニグンの問いにビクトーリアは「それはのう」と呟くと、後を振り向き番外席次に一撃を入れると

「この国について、一言言いたい事があつての」

と、いかにも憤慨した態度で言い切った。

法国

「……酷い目にあつた」

ニグンを先頭に、スレイン法国の最奥へ向かうビクトーリアの表情は、酷く疲れ切つた物だった。しかし、その原因である番外席次の表情は、非常に晴れ晴れした物である。ビクトーリアの腕に自身の腕を回し、しな垂れかかりながら満面の笑みで隣を歩く。だが、この一行で一番疲れているのは、一番泣きたいのは、一番酷い目にあつているのは、間違いなくニグンであろう。

そんな一行の前に、厚く重苦しい扉が現れた。これがスレイン法国の最奥、法国裏側の最高意思決定所。

ニグンはうやうやしくその扉を開けた。だが、その敬意は法国でも六大神でも無く別の者に向けられている。

ガチャリと言う小さな音を立て、扉が開かれる。その僅かな隙間から、冷たい空気と、少しカビ臭い香りが辺りを満たした。

ニグンは一人で先に部屋に入り、魔法の光と呼ばれるマジックアイテムで内部を照らす。しかし、法国で使用されている魔法の光の光量は小さく、部屋の中をぼんやりと照

らすに留まっていた。

その仄暗い明かりでも、この部屋の状況はありありと解った。それは、この部屋には極端に物が少なかったからだ。部屋の中心に半円形の机があり、それを囲む様に椅子が十一脚。そして一段高くなった上座には、その他の椅子よりも一段豪華な椅子が一脚と、何かの儀式か調印にでも使用するのだろうか、椅子と机の中ほどの場所に高さ一米ートル、程の石の台がある。そして、豪華な椅子の後ろにぼんやりと浮かぶステンドグラス。それだけだった。

書類を入れておく書棚や、資料を管理する書棚などは何も無かった。

この場合は、会議と決定のみをする場なのだろうとビクトーリアは推測する。

ニグンは豪華な椅子へとビクトーリアに着席を促すと、目的の人物を呼び出す為に部屋を後にした。ビクトーリアは、その椅子にどっかりと腰を降ろす。そして足を組み、舐める様に部屋の中を観察する。時折、番外席次に声をかけ、細かい事を確認しながら、スレイン法国と言う物を頭の中で組み立てて行く。

どれほどの間そんなやり取りを続けただろうか、扉をノックする音が聞こえ、ニグンが戻って来た。

扉を開き誰かを中へと招き入れる。その人物を見て、番外席次はサデイスティックな笑みを浮かべるが、ビクトーリアの反応は淡々とした物だった。

この部屋へ招かれた人物、それはスレイン法国の最高位に座す者、最高神官長。

最高神官長は部屋の中で、自分が座る場所に腰を降ろしたビクトーリアと、何故か此処に居る番外席次を見つめながら怪訝な表情でニグンに言葉をかける。

「陽光聖典隊長、これは何の遊びだ？ 伝説を見つけたと言うから此処まで来たのだが」
その言葉にニグンは「ごもつとも」とだけ答え、最高神官長をビクトーリアの前まで誘導した。そして一礼すると、表情を引き締め最高神官長に対し口を開く。

「最高神官長、あなたの目の前の御方がお解りですか？」

そう言うニグンの言葉には、スレイン法国と言う国にも、最高神官長と言う肩書にも、一切の礼は無かった。あえて言うならば、真実を知らぬ哀れな者に教えを授ける聖職者のそれだった。有る意味ニグンは、全くブレてはいないとも言える。信仰の対象が変わっただけで。

最高神官長は、ニグンに恫喝する様な視線を向けながら口を開く。

「知らぬ。知らぬな。陽光聖典隊長、君は私に何をさせたいんだ？」

「言つたはずですが？ 私は伝説と出会つた、と。そして、真の信仰を見つけたと」

「確かに。しかし、この娘が伝説と言うのか？ そうであるのなら、君は一度心を癒すべきだ。」

ビクトーリアに対しての、無礼とも取れる発言にニグンの顔色が変わる。しかし、次

の行動はビクトーリアの言葉によって止められた。

「よい。妾はビクトーリア。うぬがこの国を治める者と見てよいのか?」

「どこの娘かは知らぬが……キサマが座っている椅子が如何なる物か解っているのか?」

質問を質問で返す様な最高神官長の言葉を、ビクトーリアはいとも楽しげな表情で聞いている。

「これか? この椅子が如何なる物か、………粗悪品じゃな。クッションは悪いし背もたれも立ち過ぎておる。最高神官長とやら、この椅子を選んだ者を此処に呼べ。妾直々に説教してやる。有り難い説教をな」

そう言つてカラカラと笑つた。

最早、この会話は探り合いや心理戦などでは無かつた。只の安い挑発だ。

普段の最高神官長ならば、これを上手くかわしていただろう。だが、この場は異常過ぎた。

国の最奥、選ばれた者しか足を踏み入れる事が許されない場所に、若い女が堂々と入り込み、裏の玉座と言つても良い椅子に腰を降ろしている。そればかりか、スレイン法国の最高機密である、漆黒聖典番外席次、絶死絶命が横に立っている。何も知らずに見れば、王と従者にも見えた。そんな状況だからこそ、最高神官長は対応を間違えた。興

奮からビクトーリアの出したヒントに気づかずに。

「娘。キサマの頭は相当病んでおる様だな。生きては帰れんぞー！」

怒りの言葉と共に、最高神官長は前にあつた石造りの調印台を両手で叩いた。

その瞬間、最高神官長の手首に痛みが走る。最高神官長には、何が起こつたのか解らなかつた。それほどスピードでの出来事であつた。

最高神官長は、茫然とする意識の中で、痛みの発生源を確認する。目線の先には、調印台に固定された自分の両腕があつた。石の調印台に、突き刺さる様に伸びた鉄の手錠によつて。

「どうじゃ？ 妾からの贈り物は？」

ビクトーリアは最高神官長に顔を近づけ、ニヤリと笑う。

一体ビクトーリアは何をしたのか？ 答えは単純にして明快であつた。最高神官長が怒りと共に、調印台に両手を叩きつけた瞬間、背後の椅子の頭頂部にあつた飾りを引きちぎり、それを叩きつけたのだつた。

最高神官長は必死に拘束から逃れようともがくが、深く打ち込まれた金具はびくともしない。

ビクトーリアはそれを見、満足そうに頷くと、番外席次に声をかける。

「小娘、うぬは少し外に出ておれ。これから起こる事を見ん方が良きゆえな」

この言葉に、番外席次は可愛らしく頬を府膨らませると異議を唱える。

この抗議があまりにもだった為、仕方無くビクトーリアは同席を認めた。

ビクトーリアは調印台の前に立ち、最高神官長に対し「さて」と議題を提出する。

「さて。これから始まる催しは、うぬの罪を数えるものじゃ」

「つ、罪だと！ スレイン法国の最高神官長として、そんな物は無い！」

「ふむふむ、なるほど。では最初の罪じゃ。ニグンよ、うぬは誰の命で村を襲った？」

「この問いに、ニグンは腰を折ってからハッキリとした言葉で発言した。

「今回の任務は、最高神官長直々の命で御座いました」

「だそうじゃ」

そう言つて邪悪な笑みを浮かべ、拳を最高神官長の右の小指めがけて振り下ろす。

「ぎゃああああー！」

部屋に悲鳴が響く。見れば、最高神官長の右小指は紙の様にぺらぺらにつぶれていた。

「次の質問じゃ。襲った村の数は？」

「二つで御座います。一つ目の村の住人は、全員が死亡。村は焼き払いました」

「なるほど。では罪としては、一つ目の村での殺害と放火。そして、あの村での殺害、
「じゃな」

言つて最高神官長の薬指、中指、人差し指を潰す。最高神官長は悲鳴を上げ続けるが、ビクトーリアは構わず話を続ける。

「では次じゃ。村への襲撃の目的は何じゃ？」

「リ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの殺害で御座います」

「なるほど。ちなみにニグンよ、人を殺す事は良き事かえ？」

「いいえ、それは罪で御座います」

「そうじゃな」

返事と共に、右親指に向け拳を振り降ろす

「ちなみに、あの村で妾達や戦士団と会わなんたらどうなつておつた？」

「村を全滅させ、次の村へと向かえとの命令でした」

「ひどい話じゃ」

言つて左の親指に向け拳を振り降ろす。

「しかし、何故に戦士長を殺害しようとしたのじゃ？」

「はい。王国内の軋轢を生むためであります」

「それはどう言う事じゃろうか？ 妾に解る様に説明してはもらえぬか？」

「王国には王制派と貴族派が居りまして、貴族派はどちらかと言えば、スレイン法国寄りの考えを持つ者達で御座います」

「そう言う事か。王国を分裂させ、あわよくば傀儡として使おうと」
「左様で」

「最高神官長、それは内政干渉じゃなあ。他国のうぬが、ましてや、神の言葉を伝える神官のする事では無いな」

最高神官長の左人差し指が潰される。

「それでは最高神官長、うぬ自身への問いじゃ。何故に小娘はこんな場所におる」

ビクトーリアの問いに、この場に居る全員が息を飲んだ。名を出された番外席次など、口を開けたり閉めたりしながら、あつげに取られていた。

痛みの為言葉が出ない最高神官長に対して、その髪を掴み自分の方へと向かせると、再度同じ質問をする。

最高神官長は、痛みで朦朧としながらやつとの事で言葉を返す。

「あの者は、スレイン法国の最高機密にして人類の守り手……外に出ればドラゴン・ロードの怒りを買う恐れが……」

「ふうん、それから？」

それから？それ以外に何があるのだろうか？機密が漏れる、もし命を落とす事があつたら、人類は守り手を失う。そして、ドラゴン・ロードに存在がバレれば、スレイン法国と言う国が消滅してしまう。

それが、目の前の女には解らいと言う。最高神官長は、なんて馬鹿な者なのかと思う。だが、そうでは無かった。

それがビクトーリアの口から発せられた瞬間、この場の全員に再び衝撃が走る。

「小娘一人に全てを背負わせなければならぬ者など、滅べばいいのじゃよ。ドラゴンごときから、自国の民一人を守る事が出来ん国など、滅んで当然じゃ。これは、罪が重いのだ」

言つて左の掌へ向け、拳を振り降ろす。その衝撃は凄まじく、最高神官長の左手ごと、調印台を粉碎した。

「ぎゃあああああ!!!」

衝撃で拘束具も飛び、最高神官長は床を転げ回る。

そして、何とか言葉を絞り出す。

「誰だ！ 誰なんだ！ キサマ！ もしかして神人か！」

「神人？ 何を言うておるのじゃか。妾はビクトーリアじゃと言つたであらう。」

ビクトーリアは涼しい顔でそう言うが、最高神官長はまだ気付けずにいた。

その時、ニグンが代表する様に口を開いた。

「最高神官長。この御方はビクトーリア・F・ホーエンハイム様。煉獄の王ビクトーリ

ア・F・ホーエンハイム様で御座います」

ニグンの言葉を聞き、最高神官長の顔色はどんどん白くなって行く。喉の渇きが増大し、体中からねっとりとした汗が噴き出すのを感じる。

「真実なのか？」と言う頭に、嘘だと答える心。

これはスレイン法国、いや、六大神、もしくは四大神でも良い、それを信仰する者達には決して認められぬ出来事なのだ。自らの全てを捧げた神々が、力の限りを尽くしても封印が精いっぱいいの者が目の前に居るのだ。

ニグンとは違い、最高神官長と言う立場から六大神の事は良く知っていた。知っていると云つても、直接の事柄では無い。識つていと言いつい変えた方が適切であろう。

番外席次が守る宝物殿、そこに眠る法国の秘宝、六大神の残した武器に触れる機会があった、と言う事だ。

それを直に見、そして触れた事がある最高神官長には解る、この世界のどんな物でも傷つける事さえ不可能だったその武器を纏った六大神と、一人で戦い死ななかつた者。それがどれほど危険な存在か。

最高神官長は、恐る恐るニグンに声をかける。

「陽光聖典隊長よ、真実か？ 真実なのか？」

この問いに、ニグンは今までの出来事を語つた。カルネ村での一件を、天使の集団を一瞬で屠つた事を。

最高神官長はがっくりと膝を付く。もう信じるしか無かった。

「王よ、どうか私を御裁き下さい。ですが、何卒、法国の民を御救い下さいますよう」

最高神官長は命を差し出す覚悟を決めた。

だが、ビクトーリアの返事は奇妙な物だった。

「困ったのう。うぬの命なぞ、妾はいらん」

「は？」

「は？　では無い。償いがしたいなら、殺めた者達にせえ。妾から言う事は、二つの願いと一つの提案だけじゃな」

こうしてスレイン法国の最奥で起こった亡国の危機は去って行つた。

最高神官長は、すぐさま法国の最高会議を開き、被害にあつた者達への救済を決めた。もちろん犯人が自分達だとは隠してだが。

ニグンはスレイン法国に残り、最高神官長付きの次官となつた。これは煉獄の王との橋渡しをするための処置であつた。

ビクトーリアに関しては、最高神官長止めの最高機密とされ、外部には一切漏らさない事が決定する。

そして、スレイン法国最高機密、漆黒聖典番外席次、神人、絶死絶命は……………スレイン法国から姿を消した。

終結

スレイン法国の最奥、その地下通路をビクトーリア、番外席次、ニグンの三人が歩いてきた。次からの転移に向け、そのポイントへと向かう為に。

転移到着点は、あのすり鉢状になった円形劇場の中心点と決めた。

その道行きでビクトーリアは、ニグンに細かい指示を与える。

「ニグンよ、うぬの右腕、暫くの間再生は利かぬはず。じゃからな、一日に一回治癒魔法をかけ、再生したら連絡をよこせ。」

この指示に対し、ニグンは不思議そうな表情で説明を求めて来た。

「それなのう、妾のクラスの一つが関係しているの、それの、まあ、呪いみたいなものじゃない。妾の攻撃を受けた者は、一定時間、回復や解呪が出来なくなるのじゃよ」

「の、呪い！」

「まあ、そう驚くな。死に至る物では……………無い」

「王よ、その間は……………」

「重傷の場合、治癒が利かねば死に至るであろう。」

この答えに納得したのか、ニグンは成程と合意する。若干震えてはいたが。

その後、日報?の提出や、六大神に関わる物の精査、六色聖典の動向の報告などと言いつけ指示は終わる。

そして一行は目的の場所へとたどり着き、ビクトーリアはゲートのスクロールを展開した。目の前に暗闇が広がる。ビクトーリアは、一度ニグンに視線を向けた後、暗闇に向け歩みを進めた。暗闇がビクトーリアの身体を飲み込んで行く。番外席次もそれに続く。二人の姿が闇に飲まれ、暗闇が消滅した。

その瞬間、ニグンは腰が抜けた様にその場で座り込み、大きなため息を吐いたのだった。



暗闇を抜けると、懐かしの、と言う程でも無いが、カルネ村外れの平原が広がっていた。そこには、大きく分けて二つのグループが出来ていた。王国戦士団とカルネ村の男衆と言うグループと、項垂れながら腰を下ろしている、スレイン法国陽光聖典の者たちだ。

ビクトーリアは視線を巡らせる。

陽光聖典の傍らには、セバスが付いており、監視の任についていた。

そして、お目当ての人物は、村人達と共にいた。その人物の下へと、ビクトーリアはゆっくりと歩き出す。漆黒の、夜の闇を写し取ったかの様なアカデミックガウンを纏った者の所へ。

「今、帰ったぞ。アインズ」

「ビッチさん」

平然を保つ様な言葉遣いだが、どこかほっとした様な響きがその声から感じられた。

「どうじゃ？ 村の人はアレで勘弁してくれたかのう？」

ビクトーリアの言うアレ、とは陽光聖典達の右腕を指していた。

「ええ、まあ」

「普通はそうじゃな」

「ですが、戦士団から状況を聞いて、それほどの恐怖を味わったのならと」

アインズの言葉に、ビクトーリアは空を見上げながら言葉を紡ぐ。

それは誰かに語りかける様でありながら、独白の様にも取れた。

「さようか。彼らは、強き者なのじゃな」

「ええ。そうかも、いや、そうですね」

ビクトーリアは、視線を空から大地に戻し、仕切り直したとばかりに口を開く。

「皆の者、向こうとは話が付いた。何かしらの謝罪が来る筈じゃ。済まぬがそれで手打ちとしてはくれぬか？ あ奴らも、国に命じられて行つたのじゃ。気が済まぬと言うのなら……妻がスレイン法国を焦土と化そう」

物騒な物言いを交えながら、ビクトーリアは再度確認の言葉を口にする。これは、カルネ村の住人だけでは無く、王国戦士団にも向けられていた。

その意図にすぐに気付いたのは、ガゼフ・ストロノーフ。

「兵士は国の意思には逆らえん。我らはそれで良い。それに……彼らの、あの姿を見てはな」

そう言つて、何かを含んだ笑みを漏らす。含まれた物は、恐らく憐みなのだろう。陽光聖典の者たちへの、そしてスレイン法国に対しての。

続いて導かれる様に、カルネ村村長の言葉が続く。

「私も戦士長様と同じ。殺された者達への悲しみや、法国に対しての恨みは消えはせんだろうが、もう戦は御免じゃ」

二人の言葉に対して、ビクトーリアは、まるで礼を言う様に一度腰を折ると陽光聖典達の下へと向かう。

陽光聖典達の下には、見張りとしてセバスと、何故か番外席次がいた。

近寄って来るビクトーリアに対して、セバスは腰を折り礼を示し、方や番外席次は、嬉しそうに抱きついて行く。

陽光聖典達の前にビクトーリアは立つと、腰にぶら下がる番外席次を気にも留めず、目の前の者達に話しかける。

「うぬら、話は付いた。もう帰っても良いぞ。と言うか帰れ。」

この言葉に、陽光聖典達の反応は、言葉にするならポカンだった。

帰れ？ どうやって？ 歩いて？ この体で？ 陽光聖典達の中に、疑問と言う名の恐怖が広がって行く。もし、意見を言つて機嫌を損ねたら、自分達は一体どんな目にあわされるのか。目の前に居るのは、真の意味で恐怖と暴力の体現者なのだから。だから、何も言えなかった。只、沈黙を守る他無かった。

暫しの沈黙の後、陽光聖典達の一人が口を開く。その者は、陽光聖典の副リーダーの地位にある者らしい。

「煉獄の王、申し訳無いが、我らの体力を思うと、すぐに出立は難しいと考えられる。今暫くの猶予を」

その顔からは、必死さが滲み出ており、自らの命と引き換えに、何とか願いを聞いて貰おうと言う意思が見えた。しかし、ビクトーリアからは、願いの受託は得られなかった。

その代わりに、残酷な未来を知らされる。

「困ったのう。妾は別に良いのじやが……うぬら、このままじやとちいいと不味い事になるぞ」

「不味い事、でしようか？」

「そうじや。うぬは頭が固いのう。まず、此処は何処じや？ 今は何とか納得しておるが、明日になれば気が変わるかも知れぬ。そしたらうぬら、殺されるぞ」

「？」

「解らぬ、と言った顔じやな。この村の者を屠つたのは誰じや？」

陽光聖典達の顔色が一気に青ざめる。

しかし、ビクトーリアの未来予告は終わらない。

「そして、ここは王国の領地。早よう逃げんと、うぬら捕虜として捕まるぞ。その先どうなるかは知らぬがな」

そう言ったビクトーリアの表情は、すこぶる楽しげだった。

だが、陽光聖典達にも事情がある。体力は立つ事がやつとと言った感で、気力に至つては、天使の召喚と、ビクトーリアから与えられた恐怖でギリギリだ。ここに残る事も出来ず、だからと言って国に帰るほどの余力も無い。

陽光聖典達は、またもや沈黙するしか無かった。その姿を見つめるビクトーリアか

ら、ため息が漏れる。陽光聖典達からは、恐怖の音が漏れるが、実際にはそうでは無かった。

ビクトーリアは、どこかにメッセージを飛ばした後、アインズに向かって手招きををする。それに気づき、アインズはゆっくりと近づいて来た。

「アインズ、ゲートの魔法を」

「は？」

ビクトーリアのリクエストに対し、アインズは素つ頓狂な声を出す。

「コイツら帰すから、ゲートの魔法、早ようせえ」

「いやいや、ビッチさん。無理です」

「なんで？」

「俺、スレイン法国知りませんよ」

アインズの答えに、今度はビクトーリアがキョトンとした表情をする。その後、「チッ！」と言う舌打ちと共に、うっかりミスを隠すとばかりに考えるポーズを取る。そして、おもむろに空中に浮かんだ歪みに手を入れると、一つのアイテムを取り出す。

「ほい」

短い声と共に、乱雑にそれをアインズへと手渡す。

「これは？」

「魔封じの水晶じゃ。それに魔法込めよ」

「どうしたんです?」

「もらった」

「誰に?」

「ニグン」

「誰です?」

「陽光聖典隊長」

「え? あんた……向こうで何やって来た」

アインズが、怒気を強めて問いかける。だが、相手はビクトーリア、のらりくらりと言葉遊びの様にはぐらかす。それでもアインズの追及は止まず、最後はビクトーリアが折れる形となった。

水晶に魔法を込める事を条件に。

「……で、裁判めいた事を致しまして、向こうの偉い人にこう言う事はダメですよ、とコンコンと説いた訳じゃな」

「それで?」

「まあ、向こうも解つてくれて、罪滅ぼしに援助やら何やらをすると」

「それを条件に手打ちと?」

「そう言う事じゃ」

アインズは、ビクトーリアを見つめながら考えを巡らせる。コイツは絶対に何かヤバい事をしでかして来ている、と。だが、思慮深さでは自分よりも上だと言う事もしている。

ビクトーリアが、今、話さないと言う事は、今は知るべき時では無いと言う事なのだろう。それを解っていたから、アインズはこれ以上の追及を止めた。

しかし、一つだけ確認しなければならない事があった。

「解りました。しかし、一つだけ」

「なにかな？」

「ビッチさんの腰に張り付いているのは、誰です？」

この問いに、ビクトーリアは、腰に抱きつきニコニコと笑顔を浮かべる番外次席に視線を移す。

一瞬の間の後、再びアインズと向き合いながら

「スレイン法国からの研修生……かな？」

ニコリと少女の様な笑みで誤魔化した。

「はあ。細かい事は後で詳しく教えて下さい。皆にはビッチさんのペットと言う事にしておきますから」

「感謝する」

そう言つてアインズは、魔封じの水晶を受け取るとゲートの魔法を込める。込め終わった水晶は、ビクトーリアに返還され、魔法が発動された。陽光聖典達の前に、転移門が開く。それを前に、陽光聖典達に向け、ビクトーリアが口を開く。

「ほれ、さつさと帰れ。これをくぐれば懐かしき法国じゃ。ニグンにも連絡済じゃからな」

そう言われても、喜んで転移門をくぐる者などいない。だからと言つて、拒否すれば目の前の恐怖の大王に何をされるか分かつた物では無い。前門の狼に後門の虎、それどころか右門には村人からの殺意、左門からは王国の捕虜。どれを選ぶかと聞かれれば、選択肢は一つしか無い。

法国へと帰る道だ。

陽光聖典達はゆっくりと立ち上がると、転移門へと入つて行つた。全員がくぐり終え、転移門が霧散する。

それを確認したアインズとビクトーリアからため息が漏れる。

大変な一日だったと。

だが、まだ一日は終わつてはいない。

ナザリックでの事後処理が待っているのだ。

アインズにビクトーリア、そしてセバス、番外席次の四人は、村長の家に赴き、今後の事を確認し、ナザリックへと帰還した。



四人？ は無事転移に成功し、ナザリック地下大墳墓表層階に居た。

そこには連絡を受け、出迎えに来たアルベド、ユリ、ペストーニヤの姿があつた。

ユリ、ペストーニヤは目をつむり、礼儀正しく腰を折っているが、一人、違和感を醸し出している者がいた。

アルベドだ。

一件他の二人と同じ様に見えるのだが、艶やかなその髪の間隙から垣間見える表情は、単に異常性が滲み出ていた。星を封じ込めた様な黄金の瞳は、ドロリと濁り、艶やかなその唇は、大きく歪み、また、呼吸は荒く頬は紅潮している。そして、腰から生える濡羽色の翼は、時折ピクンピクンと痙攣を起こしていた。

つまるところ発情中なのである。

ビクトーリアは幸せであった。この場にアインズが居なければ、その身にどんな仕打ちが襲って来たか。

そんなアルベドの仕草にアインズは首を捻るが、疑問の解決は後回しとし、ユリとペストーニャに声をかける。

「ユリ・アルファ、ペストーニャ・ワンコよ」

「はっ、モモンガ様」

「お前達は第六階層にある星青の館（せいせいのやかた）を識っているか？」

星青の館、第六階層の森の中に佇む洋館の名である。

第六階層の自然群や空をデザインしたギルドメンバー、ブループラネットが、疑似でも自然の中で暮らしたいと願い建造された場所である。

時折、ギルドの女性陣&彼女達の創ったNPC達のお茶会場所としても貸し出されており、当然その女性陣を創造者に持つ二人は、その存在、位置を把握していた。

「はい。存じ上げております。」

この問いには、ユリが代表として答えた。

その返答にアインズは、短く相槌を打つと、番外席次の肩を押す。

「紹介しよう。この者はビッチさん、いや、ビクトーリアのペットだ。暫しの間、ナザリックで預かる事となった。自らの同僚と思いい接するのだ。」

「畏まりました」

「そこだ。一人にはこの娘を星青の館まで案内を頼む」

「畏まりました」

この言葉を聞いて、番外席次は不安げにビクトリアに視線を向けるが、返された微笑みに頷き二人と共にこの場を後にした。そして、それを追う様に、残された者達も目的の場所へと歩を進める。

くナザリック地下大墳墓 第十階層 玉座の間く

水晶から削り出された、キラキラと光を乱反射する玉座にアインズはどっかりと腰を下ろし、集まった者達を見つめる。

そこには、守護者統括アルベド、各階層守護者、執事セバス、そしてプレアデス、一般メイド。至高の四十一人から名前を付けられた、全NPCが集合していた。

「まず初めに、今回の行動について詫びよう。そして、伝える事がある。私は名を変えた。これより私を呼ぶ時は、アインズ・ウール・ゴウン。アインズと呼ぶが良い」

この発言にNPC 達は声をそろえ

「アインズ・ウール・ゴウン万歳！ アインズ・ウール・ゴウン万歳！ アインズ・ウー

ル・ゴウン万歳！」

声高らかに賛辞する。

アインズは右手を僅かに挙げ、これを沈めると次の議題へと話を進める。

デミウルゴスからの、ナザリック地下大墳墓周辺の様子や、各階層の防御レベルの報告。そして、ナザリックの隠べいに関する指示。まずは最初の一步、と言うべき事柄を終え、アインズは最後の議案を提示する。

「皆の者、聞け。私は常々罪には罰を、功には褒美をと思っている。それは、どんな地位にある者にも適用される。それが………神であつてもだ！ ……ピクトーリア・F・ホーエンハイム、入れ」

玉座の間の大扉がゆっくりと開き、ピクトーリアが入室する。

背筋を伸ばし、笑みを浮かべ、静かに歩を進めた。アインズの五メートル程前で、その歩みは止まる。

「さてピクトーリアよ、今回のお前の身勝手な行動は、ナザリックを窮地に陥らせる可能性があつた。従つて私は、ギルドマスターとしてお前を捌かねばならぬ。解るか？」

「ああ。理解しておるよ」

言葉は静かに交わされるが、辺りを支配する静寂に、徐々に緊張感が混ざつて行く。

「そうか。では罰を言い渡す。ピクトーリア・F・ホーエンハイム、その力を封じ、第六

階層星青の館での謹慎を持って罰とする。ホールド オブ グレイプニル！」

その言葉と共に、ビクトーリアの足もとに魔方陣が出現し、そこから現れた鎖が蛇の様にビクトーリアを捕縛した。ホールド オブ グレイプニル、伝説級レジェンドに分類され、各ボスと呼ばれる物以外は、一定時間行動不能にする効果を持っているアイテムである。

完全に自由を奪われ、ビクトーリアは地に伏せる。

それを見た瞬間、駆け出す者がいた。セバスである。

だが、その行動はコキュートス、シャルティアによつて防がれた。右肩をコキュートス、左肩をシャルティアが押さえつけ、セバスを膝まづかせる。

だが、それでもセバスの憤りは収まらなかった。セバスの眼には、自身の創造主が拘束されている様に見えたのだ。セバスは、セバス・チャンと言うNPCはハッキリとビクトーリアの中にたっち・みーを感じていた。

だからこそ許せなかった。

そして、理解出来なかった。

正しい行為を行ったビクトーリアが、何故罰を受けなければならないのかを。

「アインズ様！ 何故です！」

セバスは呼びかけるが、アインズは沈黙で答える。

代わりにデミウルゴスが口を開く。

「何を言っているんだね、セバス。アレはこの、至高の方々が御造りになったナザリツクに害を与える物だよ。そんな化け物は鎖に繋いでおくのが一番じゃないか」

「な、何を言っているのかは、あなたの方ですデミウルゴス！ ビクトーリア様は、此のナザリツクの神！ その御方を拘束するなど！」

僕二人の言い争いを、静かに見つめるアインズの耳に、ギリツと言う歯を噛む様な音が聞こえた。その音を立てた人物は容易に推測出来る。アインズは囁く様な声で、その者に言葉をかける。

「アルベド、耐えよ」

「……………は」

アルベドを抑えたアインズは、皆に向け言葉を放つ。

「鎮まれ！」

その言葉で、場の喧騒は一気に静けさを取り戻す。

「セバス、お前にも罰を与える。ビクトーリアと共に、星青の館での謹慎だ。私は外を確認に行く。デミウルゴス、着き従え」

「はっ」

その言葉を最後に、アインズは玉座の間から姿を消す。他のNPC達も徐々に持ち場へと帰って行った。残されたのは、アルベド、セバス、ユリ、ペストーニヤ、そしてビ

クトーリア。

鎖に縛られるビクトーリアを前にセバスはひざまづく。

「申し訳ありません、ビクトーリア様」

その声は震え、まるで涙を流している様だった。

「良い。セバス、モモンガさんを憎まないでおくれ。妾を守るには、これしか無かったのだから。悲しい思いをさせたね。ごめんね。そして……ありがとう」

漆黒の戦士

王の望み

満天の星空。

漆黒の中に点在する輝き。

その小さな光は、人々の命の輝きを映しとったかの様だった。

その、魂魄の安息の場に、僅かに見える染みがあった。地上から見上げるその煌きに、まるで不幸を暗示する様な一点の闇。夜空を見上げるほとんどの者達は、気付かないであらうその染みは、この世界の未来を現していたのかも知れない。

その染みの正体は、死の支配者、オーバーロード、アインズ・ウール・ゴウン。空中で、その身に纏う漆黒のアカデミックガウンを揺らしながら、世界を見つめていた。隣には変態し、カエルの様な顔と、蝙蝠の様な翼を生やしたデミウルゴスが、無言で控えている。

アインズは、デミウルゴスの存在を気にする仕草も無く、右手を掲げた。そして、煌く星を手に入れるが如く、ゆっくりとその手を握って行った。無論、星を掴む事など出来ないのだが、右手を胸元まで戻し、その骨の拳を、親指から一本ずつ開いて行く。

開かれた掌には、当然何もなかった。

アインズは、小さくため息をひとつ漏らすと、誰に言うでも無く、言葉を漏らす。

「奇麗だ。夜空とは、こんなに奇麗な物だったのか。」

そう呟くと、視線を下へと向ける。眼下には、どこまでも続く平原が広がっていた。アインズは思い出す。

何時かビクトーリアが語っていた、冒険の数々を。

クリエイト系のクエストを主としていた、自分達とは正反対の冒険譚を。

YGGDRASILと言うゲームの真髄は、探究と言う言葉に尽きる。頭が可笑しいと、常々言われていた運営から投げかけられる、クエストと言う名の難問をプレイヤー達は必死で解いて来た。

YGGDRASILに置ける難関クエストとは、ボスの強さや、ダンジョンの複雑さとかでは無かったからだ。数々発表されるクエストの、どれがどう繋がって、それに必要なアイテムは何か？ それをどう作ればいいのか？ などを精査しクリアして行く。それは、ストーリークエストとプレイヤーには呼ばれ、一部のプレイヤーからは、絶大な人気を誇っていた。

だが、何故一部のプレイヤーからなのか、それは、ストーリークエストは非常に長い期間で行われるからだ。現に、ビクトーリアの隠し種族に関係したストーリークエスト

など、約三年がかりでの物だった。そんな一面も、YGGDRASILと言うゲームにはあった。

脳裏に浮かぶ思い出を噛み締めながら、アインズから言葉が漏れる。

「冒険、してみたいな」

その言葉は、死の支配者では無く、プレイヤー鈴木悟の物だったのかも知れない。

だが、アインズの発言に、素早くデミウルゴスが反応する。

「アインズ様。この地の情報が、あまり無い現状での冒険は非常に危険であります。現地調査なら、我ら僕に御言い付け下さいますよう」

この言葉に、アインズは答える事はせず、只、世界を見つめていた。

そして……………

「ならば、世界征服なんて良いかもな」

そう、ポツリと呟いた。

頭を振り、馬鹿な事だと思いつながら、アインズは後方へと視線を向ける。

そこには、ナザリック大墳墓があり、墳墓周りの地面が波打っている様に見える。まぶたも眼球も無い目を、少し擦って見るが、やはり地面は鳴動していた。そこで、ある事に気が付いた。

「あれは、マールレの魔法か？」

「はい、アインズ様」

「そうか。全ての処置が終わった後、マーレに私の下へと来るよう言っておいてくれるか？」

「畏まりました」

その言葉を最後に、二つの異形は闇に溶けて行った。



鎖で上半身を拘束されたまま、ビクトーリアは第六階層にある星青の館に到着する。ビクトーリアの後ろには、セバスが付き従い、その後にはユリ、ペストーニヤが並んで歩く。

その隊列は、最後尾を歩く性欲の権化からビクトーリアを守るかの様だった。

いや、実際そうだった。第十階層を出た辺りから、徐々に息が上がり、時折「くふ」とか「くふふ」などと言った奇声を発し続けている破裂寸前の淫乱処女ビツチから。

またの名をナザリック大墳墓 守護者統括アルベドから。

生真面目な性格のセバスは、その使命感からビクトーリアを、いや、ビクトーリアの貞操を守る使命に燃えているが、後を歩く二人の心情は、うんざりだった。なにせ、執務室で遠隔視の鏡を見てからずっとこの調子なのだ。

女の匂いをまき散らせながら、ブツブツと愛しい者の名前を呟くその姿は、同性から見てもドン引きの姿だった。

そんな事など露にも気にせず、いや、実際には背中にもひしひしと感じながら、ビクトーリアは扉を開き館の中へと歩を進める。

館の中は、単に見事な物だった。

アールデコを基調とし、柱や、階段の手すりに至るまで、非常に凝った仕上げがなされている。

その中に、ドレスを纏ったビクトーリア、執事服のセバス、そしてメイド姿のユリとペストーニヤが収まると、実に見事に絵になる光景だった。

皆が興奮と共にその造形美に見惚れる中、別の物に注目する四つの目があった。今か、今かとタイミングを計る。

ビクトーリアから、ゆっくりとセバス、ユリ、ペストーニヤが離れる。

もう少し、絶好の空間まで後僅か。

そして、その時が訪れた。姿勢を低くし、絶好のタイミングで地面を蹴る。ビクトー

リアの前後から影が猛スピードで駆け出した。

そして、その影はビクトーリアの………股間と臀部へ突貫する。

「ぬあああああああ！」

館にビクトーリアの悲鳴が響き渡る。

ビクトーリアは、慌てて自身の下半身を確認する。その臀部には、割れ目に顔を埋める守護統括が、そして、股間には、扉の陰で機会を伺っていた番外席次の姿が。

「ビッチ様ー、ビッチ様ー、ああ、ビッチ様ー！」

「おおさま、おおさま、ふにふにふに」

「やめんか、やめろ、やーめーろー！」

最早、制止の声は届かなかった。

星青の館は、いや、ビクトーリアの周りはカオスと化していた。愛おしい者の香まで愛しむ様に、二人は顔を押し付ける。

「痛い！ アルベド！ お尻に、つ、角が！ 角がめり込んでるから！ アルベド！」

ビクトーリアは、必死で引きはがそうとするが、相手はLv100の前衛職と、Lv90オーバーの前衛職。密着状態では、さすがの近接戦闘ガチビルドであるビクトーリアでも、拘束された状態では容易な事では無かった。

しかし、ビクトーリアは一人では無い。ここには頼もしい常識人がいた。

取り残された様にボーゼンとしていた三人は、急ぎアルベドの引きはがしにかかる。だが、相手はアルベド、愛と言う燃料を情欲と言う力に変えて我が道を行く暴走機関車、そう簡単には行かない。それなりの時間をかけ、何とか引きはがしに成功する。

だが、それでも名残惜しかったらしく、じりじりとビクトーリア目がけて牛歩の歩みで近づいて行く。

ビクトーリアは、それを警戒しながらも、まずは目の前の敵の排除を優先する事にした。それも、強引な手を使って。

「小娘！ いい加減にせんかー！」

その言葉と共に、無詠唱化したエレクトロ・スフィアを首筋に打ち込んだ。

ビクンと一つ痙攣し、番外席次はその場に崩れ堕ちた。しかしその表情は、とても満足げだった。

一仕事終えても安心は出来ない。最強の獣が、背後に迫っているのだから。

ビクトーリアは振り返ると、ゆっくりとした步調でアルベドに近づいて行く。一体何が起こるのか、セバス達の顔に緊張が走る。二人の距離は徐々に縮み、ほぼゼロ距離となる。

この後一体何が？ その何とも言えない空気が部屋を支配した瞬間、ビクトーリアはアルベドの身体を、しっかりと抱きしめる。番外席次や、ネムにした様に慈愛を持って

しつかりとその身に包んだ。アルベドの表情は、発情期の獣のそれから、徐々にいつもの貞淑な物へと戻って行った。

「ビツチ様……」

「うん」

「愛しのビツチさま」

「うん、アルベド。………甘えるのは良いけど、私の胸とお尻揉むのはやめようね。みんないるから」

「……はい」

頬を赤らめながら、アルベドは返事を返す。しかし、それが羞恥から来る物か、ビクトーリアの注意にある、“みんながいるから”に対して、誰も居なければ好きにして良いと言う解釈からかは、アルベドのみ知る事であった。

そんな、愛する者の感触と香りを堪能するアルベドが、真面目な声色でビクトーリアへ囁きかける。

「ビクトーリア様……」

ビクトーリア様、ビツチ様では無く、ビクトーリア様、とアルベドは呼びかける。

「何故、ビクトーリア様は全ての責を御一人で背負われるのですか？」

王への涙

「何故、ビクトーリア様は全ての責を御一人で背負われるのですか？」

アルベドのこの発言に、場の空気が凍りつく。

質問の真意を理解している者、していない者。だが、ビクトーリアの言葉に、疑問を感じていた者もこの場にはいる。しかし、この問いにおける回答は、決して表に出すべきでは無い。それが、モモンガとビクトーリアの気持ちだった。

ビクトーリアは必死に頭を回転させ、この場を乗り切る方法を絞り出す。だがそれは容易な事では無かった。セバス、ユリ、ペストーニヤには、アルベドの言った言葉が全て聞こえている。君達の聞き間違いだ、などと言う言い逃れは決して出来ない。ましてや、「何言ってるの」などと、とぼけるのも愚策だ。

悩んだ末、ビクトーリアは暫し時間を開ける事にした。自分自身にとつても、守護者達にとつても、若干のクールダンは必要と思ったからだ。

ビクトーリアは、拘束時間が過ぎた鎖を解くとアイテムボックスにほおりこみ、皆を見回した後、口を開く。

「皆、暫し待て。妾はこの者を寝かせて来るゆえ」

そう言つて番外席次を抱きかかえると、階段を上り、寝室と思われる部屋へと消えて行つた。

残された守護者達は、お互い顔を見合わせながら無言で時を過ごす。誰もが、先ほどの言葉の真意をアルベドに確認したい気持ちは持つていたであろう。だが、*“*全ての責*”*と云う言葉がそれを躊躇わせていた。もし、この場に シャルティアかルプスレギナ辺りが居たなら、話は早かつたかも知れない。

しかし、この場にはナザリックの中でも、特に慎重派、もしくは穏健派が集まつていた。だからこそ、ビクトーリアの帰りを、口を噤んで待つ、と云う選択肢を選んだのだつた。

一方、ビクトーリアは番外席次をベッドに寝かせると、アイテムボックスを掻きまわしていた。そして、やつとの事で目当ての物を探し当てる。

アイテムボックスから取り出したそれは、何の変哲も無いアイテム。

防御力も、特殊効果も、何も付与されてはいない衣装、いわゆるパジャマと呼ばれる物だ。クラン、魔女の夜明けで定期的に行われていた、パジャマパーティーと呼ばれる情報交換会での着用品が義務づけられたアイテムである。

ビクトーリアは、番外席次の装備を手早く？ぎとると、パジャマ片手に一息吐き、眠る少女の生まれたままの姿を見つめながら

「見事にペったんこじゃの。下は影も見えん。エルフとはいと悲しき種族なんじゃるか？　これで二百歳とは……………アウラの未来も真つ暗じゃな」

などと、失礼極まりない感想を呟く。

だが、いつまでも全裸で放つて置くのも忍び無い。ビクトーリアは、いそいそと番外席次にパジャマを着せ、正しくベッドに寝かせる。

布団をポンポンと軽く叩き、作業終了の合図を自己演出した瞬間、背後から冷えた声が語りかけた。

「本当にあなたは愚かだ。甘くて優しい愚か物だ」

「そうかな？」

言葉をかけられ、ビクトーリアは驚きつつも振り返らず答える。

その行為のせいなのか、それとも言葉になのか、背後の者は苛立ちを顕にしながら、言葉を続ける。

「そうです。あんな者達など放つておけば良い。誰のおかげで絶望を味合わなくて済んでいるのかも気付かない、いや、気づこうともしない輩など。あなたが恨まれて、そして傷ついてまで守る価値は無い。さらにはアレらの創造主達も。……全ての責任をあなたに！　……ビクトーリア様に押しつけた者達を救うなど、馬鹿げている！　違いますか！　違いますか！　我が創造主様っ！」

悲痛な叫びだった。

ただ、そうただ、ビクトリアの身を案じての言葉だった、怒りだった。

ビクトリアは、ゆっくりと振り返ると声の主を抱きしめる。

「お前の言う通りかもしれない。でもね、どんなに憎まれても、どんなに傷つこうと、一人でいるよりはずっと良い。孤独の寂しさに、虚しさに、恐怖に比べればずっと良い。モモンガさんは私の傍に居てくれた。私の話し相手になってくれた。私に笑いかけてくれた。私には、それで十分なんだよ。許しておくれ、我が愛しき子。怨まないでくれ、彼らを」

抱きしめられた腕から逃げる様に離れると、「あなたは、本当に愚かだ」と言う言葉を残し、その者はビクトリアの影へと沈んで行った。

暫しの間、自身の影を見つめていたビクトリアだが、気を取りなすかの様に、自分の頬を両手で叩き、守護者達の元へと歩き出した。



「ふむ、待たせのう」

そう言つて、二階へ上がった時と同じ笑顔でビクトーリアは戻つて来た。

その顔を見た守護者達は、一様にほっとした表情を浮かべた。

階段を下り終り、一階に降り立ったビクトーリアは、守護者達に落ち着ける場所はないかと問いかける。腰を下ろせる場所として食堂などが候補に挙がったが、不敬であると却下され、場所は書齋に決まった。

扉を開き、入つたそこは、見事に書齋と言う場所を現した場所だった。

一番奥に重い色合いの、——年月を育んだマホガニーだろうか——机に、柔らかなクッションの椅子。扉の右側には一対二脚の椅子と三人掛けのソファ、そしてテーブルが一つ。壁際には机と同じ素材で出来た本棚が並び、そこには古びた本が並ぶ。

ビクトーリアは、感心しながら椅子に腰かける。守護者達に着席を進めるが、それはやんわりと断られた。

机に置いた手で頬杖を付きながら、ビクトーリアは、さてと再開の合図を送る。

これを理解したアルベドは、先ほどとは違い、落ち着いたトーンで語り始める。

「では、僭越ながら。……何故、ビクトーリア様は全ての責を御一人で背負われるのですか？」

改めて疑問を口にする。だが、クールダウンの時間を置いた事で、ビクトーリアも冷

静さを取り戻していた。

「責、か。しかしアルベド、妾は何の責も負ってはおらぬが？」

努めて冷静にビクトーリアは言葉を返す。

「それがいけなかった。抑圧されていたアルベドの感情が、一気に吹き出したのだ。それは嘘です！ ビクトーリア様は、私達を捨てこの地を去った——」

「アルベド！」

アルベドの言葉を遮り、ビクトーリアの激しい檄が飛ぶ。しかし、アルベドの激情も納まりはしない。追及しようとするアルベドに、それを妨げるビクトーリア。諦めないアルベドに、遂にビクトーリアが折れる形になった。

そのためにビクトーリアは、セバス、ユリ、ペストーニャに退室を命じる。三人は怪訝な表情を見せるが、ナザリック地下大墳墓の最高機密に関わる、と言うビクトーリアの言葉に、渋々、と言った感で書齋を出て行った。

「して、アルベド。うぬの質問なのじゃが……」

「演技は御止め下さい」

この言葉にため息を突きつつ、再び口を開く。

「そうだね。君は知っているんだろうね。じゃあ答えよう。何がしたいのかな？」

「先ほどと同じです。何故、ビクトーリア様は全ての責を御一人で背負われるのですか

「？」

再度ため息を吐いたビクトーリアは、虚空に手を伸ばし、アイテムボックスから木箱を取り出した。オーク材だろうか、木目のはつきりした木地に茶色いニスが塗られた様な木箱だ。

アルベドは、その木箱をマジマジと見つめる。その瞬間、アルベドの瞳が見開かれた。その木箱の上部には……アインズ・ウール・ゴウンの紋章が刻まれていた。

ビクトーリアは、木箱を机の上に置くと、ゆっくりとその蓋を開けて行く。蓋は蝶番で固定されており、アルベドの側が開かれて行く。そして、その中身を視認した瞬間、驚きの声と共に、再びアルベドの瞳が見開かれた。

箱の中に収納されていた物は、血を思わせる紅玉をはめ込まれた指輪、リング オブ アインズ・ウール・ゴウンだった。

しかも、その数三十七個。

ビクトーリアは指輪を前に、アルベドに向け話始める。

「アルベド、君はアカウントと言う言葉を識っているかい？」

「はい、ビクトーリア様。モモ、いえ、アインズ様から聞いた事があります。」

「モモンガ様で良い。ここには二人しか居ないから」

「はい」

此処で一度首を縦に振り、ビクトーリアは話を進める。

「アカウントとは、リアルと呼ばれる世界と、私達が元居た世界を繋ぐ物だ。」

アルベドは黙って頷く事で、ビクトーリアに話の続きを促す。

「彼ら三十七人は、YGGDRASILを去る時、つまりはアカウントを消す時に、私の元を訪れ、指輪と、あるメツセージを残して行っただ。」

「メツセージ、で御座いますか？」

「うん。モモンガさんをよろしくと」

アルベドは、その整った顔に、驚きを刻む。そして、それ以上の安堵も湧き上がって来ていた。やはり、この人は、自分の愛したビクトーリア・F・ホーエンハイムは、至高の四十人に対して何もしてはいなかったのだと。

それどころか、呪いと言ってもいい程の重責を背負わされていたのだと。

アルベドは、必死に冷静さを保ちながらビクトーリアと対峙する。

「ビクトーリア様、それを我ら僕達に公表されては」

「ダメだ。それはダメだよ」

自分を諫めるビクトーリアの言葉は優しく、それでいて悲しげだった。

「捨てられるなんて事は悲しい事だ。知らなければ知らない方が良い。出来れば君にも知らずに居て欲しかった」

「その事はモモンガ様も？」

「いや、知らない。これは私と、この地を、いや、YGGDRASILを去った彼らしか知らない」

「では！」

アルベドの声が非難する様な物に変わる。

だが、対するビクトリアの声色は同様に優しい物だ。

「今までずっと頑張つて来たんだ。これ以上彼に重荷を背負わせたくは無い。」
隣で見て来た君にはわかるだろ、とビクトリアはアルベドに問いかける。

そして

「一人は寂しいものだよ」

と、付け加えた。

アルベドは湧きあがる涙を抑え、片膝を付くと頭を下げる。

「ナザリック地下大墳墓 守護者統括アルベド。煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイム様に生涯の愛と忠誠を」

そのまま部屋に沈黙が流れる。

「御許しを」

そう言ったアルベドの言葉には、慟哭が含まれている様に感じられた。顔を上げ、必

死に見つめて来るアルベドに、ビクトーリアは最大限の威厳をもって

「許す。妾と共に歩め」

そう言葉を贈る。

その後、ビクトーリアからの疲れたと言う言葉で、この場はお開きとなった。

最後にアルベドから、「では、また明日」と言う言葉にビクトーリアも「また明日」と砕けた言葉で返した。その時のアルベドの表情は、とても嬉しそうだった。



書齋を出たアルベドの前には、セバス、ユリ、ペストーニヤの姿があった。

だが、アルベドは何も言わず、館を後にする。その行動をユリ、ペストーニヤは慌て後を追う。セバスは僅か躊躇するが、事の重大さを思い後を追った。

館を出て五十メートル程だろうか、アルベドが急に膝を付く様に倒れ込んだ。

何が起こったのか解らず、三人はアルベドに駆け寄った。ユリとペストーニヤが左右から、セバスが背後から様子をうかがう。

三人の眼に映った姿は、両目から大粒の涙を流しながら、地面を握りしめ、ビクトーリアの名を連呼するアルベドの姿だった。

王の脅威

カルネ村の事件から数日後、ガゼフ達王国戦士団は、城砦都市エ・ランテルに滞在していた。

国命である国内を荒らす賊の討伐は、無事完遂された。だが、被害調査と言う点で王国領の一番東のこの街まで足を運んでいた。

一応王国への報告として、部隊の中で馬の扱いが上手い物を三人ほど選び、新たにこの城砦都市で購入した馬に乗せ出発させている。一方、エ・ランテルに残った者達は、著しく体力が低下している者は、宿で休養となり、動ける者は、物資の調達などの任に付いている。

隊長であるガゼフは、どの任にもついてはおらず、一人、この都市の魔術師組合を訪ねていた。

扉を開け、屋内へと足を踏み入れると、薄暗い明かりの先に受付が見えた。ガゼフは、そこに見える受付嬢とおぼしき年配の女性に、驚かさないう様に静かに、且つ丁寧に声をかける。

「失礼。私は王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。組合長殿は御居で？」

この言葉を聞いた瞬間、受付の女性は頬を引きつらせる。だが、話しかけられた事に驚いたのでは無い、男が口にした名前に驚いたのだ。しかし、そこは熟練の者、すぐに立ち上がると、ガゼフに一礼し階段を上がって行った。

室内をあれこれと見ていると、先ほどの女性が戻って来た。ガゼフの前に立ち、礼儀正しく腰を折ると

「ガゼフ・ストロノーフ様、おまたせ致しました。当組合長テオ・ラケシル、歓迎するとの事です。三階の右の部屋で御座います。」

そう言つて再び腰を折る。

ガゼフは丁寧に礼を言うと、階段を上り、目当ての部屋へと向かう。目的の部屋のドアを開けると、奥にある執務机にほっそりした神経質そうな眼をした男が座っていた。その者は、ガゼフの姿を見ると立ち上がり、両手を広げると言う芝居がかつた仕草で歓迎の意を告げた。

「これは、これは、戦士長殿。私は魔術師組合 組合長テオ・ラケシルと申します。今日は一体何用で？」

ラケシルの挨拶に対し、ガゼフも自分の階級と名と、急な来訪を詫びる言葉を告げる。御互いの挨拶も終り、ラケシルはソファアに座る様に進める。二人ともが着席し、一息ついてから、ガゼフは本題を切り出した。

「ラケシル殿、まずはこれを見てほしい」

そう言つて懐から、ガラスの様な物で出来たアミュレットを取り出す。

それを受け取つたラケシルは、一様に全体を眺めた後、口を開く。

「只のアミュレットに見えますか？」

「ええ。ここからの話は内密にお願ひしたいのだが……」

この問いに、ラケシルは頷きで返す。

了承を確認したガゼフは、カルネ村での戦闘の一部始終をラケシルに話して聞かせた。話し始めの頃のラケシルの表情は、興味程度だったが、後半に行くにつれ真剣な物に変わつて行つた。

「つまりガゼフ殿は、これにどんな魔法が掛かっているか知りたいと？」

「そう言う事です」

「解りました」

そう言うのとラケシルは、アミュレットをテーブルに置き、両手を近づけて行く。

ディテクト・エンチャント
「付与魔法探知」

そして力強い言葉を紡ぐ。

僅かの後、ラケシルの顔は大量の汗で濡れて行く。同時に目を見開き、驚愕の表情でガゼフを見つめた。

「ガゼフ殿……ここ、これは……」

それ以上言葉が出なかった。

ラケシルの慌てぶりを目の前にし、ガゼフの心にも焦りの感情が湧きあがる。一体ラケシルは、何を感じ取ったのだろうか？

「ガゼフ殿……これを身に付けていた者らは、全員無事、と言う事でしたな」

「ええ。重症、軽傷の違いはあれど」

「その者らのアミュレットは？」

「砂のように砕けておりました」

もちろん、自分の物も、とガゼフは付け加える。

今、ガゼフが持ち込んでいるアミュレットは、隊員達に配った時に、偶然袋の中に残った物だ。

「ガゼフ殿の部隊は、何名程で？」

脈絡のない質問に、首を捻りながらもガゼフは答える。

「なるほど。その、三十数名の隊員達全てにコレを？」

「ええ」

この答えに、ラケシルの表情はさらに曇る。

「ラケシル殿、一体それにはどんな魔法が掛かっているのです？」

ガゼフはとうとう我慢できずに本題を口にした。

だが、ラケシルの口は重い。まるで、認めたくは無い、いや、認められない何かがある様に見える。

ラケシルは、水差しからコップへと水を注ぎ、それを一息で飲み干すと、やつとの事
で口を開く。

「ガゼフ殿。このアミュレットに込められた魔法は……………致命的な一撃を、一度
だけ無効にする魔法だよ」

手を机に叩きつける、バンッ！　と言う音を響かせ、ガゼフはラケシルに詰め寄る。
その表情からは、驚きと、焦りと、畏怖が込められていた。

「では……………これは」

「うむ、王国の秘宝、ガーディアン守護の鎧と同じ効果を持つアイテムだ」

使いきりのアイテムだが、と付け加えるが、ガゼフの耳には届かない。

それはそうだろう、国家の秘宝と位置づけられている為、装着主のガゼフでさえおい
それと身に付ける事が出来ない程の物が、使いきりと言え、ゴロゴロと現れたのだ。

煉獄の王と言う言葉が、ガゼフの中で恐怖へと変わって行く。

だが、ラケシルの口からは、別の見解が発せられた。

「確かにその者、煉獄の王は脅威でしょう。ですが、……………私としては、隣に居た魔法詠唱

者の方に恐怖を感じますが」

「どう言う事でしようか？」

ガゼフはラケシルの意図が解らず、説明を求める。

「真にその者が、伝承にある煉獄の王なのだとしたら、それは想像以上の化け物と言う事になります。何しろ四大神様が、総出でも封印がやつとの者ですから」

「ええ」

「しかしガゼフ殿、良く考えて見て下さい。話からすると、その者は煉獄の王と仲が良く見えたと言っていましたね」

「ええ、友人の様な関係に見えました」

「それですよ。どうやってそんな化け物の友になるのです？　どんな人物なら煉獄の王と肩を並べられるのです？　そう考えると、その魔法詠唱者も底が知れないと私は思います」

ラケシルの言う通りだった。

最初に村を襲っていた、陽光聖典の先発隊、そして陽光聖典の本体を、煉獄の王は一人で圧倒した。

その現場の片方に居合わせた自分達は、その姿に恐怖した。しかし、あの魔法詠唱者、アインズ・ウール・ゴウンはどうだったろう。

ガゼフは改めて思い出して見る。一つ一つの場面を記憶の限り遡る。

ガゼフの背中を、じつとりとした嫌な汗が流れ落ちて行く。二人の会話、態度、思い起こせば起こす程、異常性が際立って来た。二人の間に流れていた雰囲気、それはあまりにも普通過ぎた。親しい友の様に、長年切磋琢磨して来た戦友の様に。

彼が煉獄の王に、特別目を掛けられているのならそれで良い。最も危険なのは、そうで無かった場合だ。彼が、アインズ・ウール・ゴウンが、煉獄の王と肩を並べる者と言ふ危険性だ。そうであった場合、王国は、いや、世界は、扱いを間違えれば終末へと導きかねない爆弾を二つも抱える事になる。

ガゼフは、ラケシルに自分の考えを話すと、今後の情報交換を密にする事を確約し、魔術師組合を後にした。

王の喧噪

「冒険がしたいです」

星青の館の書齋で、ニグンから上がってくる報告書に目を通していたビクトーリアの前に、予告なしに突然現れた骨の第一声がこれだった。

「何を言っているんですか、モモンガさん」

マジックアイテムである赤いフレームの解析眼鏡を掛けたビクトーリアは、書類から目を離さずに言葉を返す。

「辛いんです！」

「そうですか」

アインズの必死の訴えに、ビクトーリアは涼しげに返答を返す。

まるで、別な物に集中しているかの様に。いや、実際そうだった。ニグンからの報告書は、実に有意義な情報が細かく書かれていたからだ。貨幣価値から、国同士の繋がり、特殊な職業、もちろんスレイン国内の細かな情報も記されている。

その情報の精査に夢中なため、今アインズの存在は邪魔でしかなかった。

しかし、そんなうわの空での返事を繰り返していれば、真剣に相談しに来た者の怒り

を買うのは当然の結果だ。

「ビッチさん！ 真面目に聞いて下さいよ！」

アインズには珍しく、大声で異議申し立てをする。

ビクトーリアは、大きいため息を吐くと、眼鏡を外しアインズと向き合う。

「それで？」

「辛いんです。毎日、毎日、メイド達がですね、俺の世話を何でもしようとするんですよ。」

「はあ」

「それですね、自分でやるからって言うと、……この世の終わりみたいな顔をするんですよ」

「ケッ！」

ビクトーリアは、アインズの話聞いた瞬間、毒づく様に舌打ちをする。

「ケッ！ って何です。ケッ！ って」

「はあ？ 沢山の女の子にお世話されて困ってます？ はあ？ 死ぬ！ あ、死んでるか」

アインズの、リア充モテ話に憤慨したビクトーリアは、暴言で返す。

「そんな事言わずに聞いて下さいよ！」

アインズから、悲痛な叫びが漏れだした。

ビクトーリアは再びため息を吐くと、アインズへと視線を向け、話を聞く態勢をとる。それが嬉しかったのか、アインズはいそいそと椅子を持ってきて着席した。

そして、すぐさま濁流の様に心情を吐露する。

メイド達の一件もそうだが、やれシャルテイアがくつついて来るとか、僕達の自分に対しての忠誠度が怖いとか、一人になれないとか、そのせいで気を抜く事が出来ないとか、最早これは、相談では無く、愚痴だった。

話を聞いているビクトーリアにだって愚痴はある。

ナザリックの僕達の信頼が皆無であるとか、番外席次が、事あるごとに子作りを要求してくるとか、何故か毎晩ベッドが湿り気を帯びているとか、だが、この場ではアインズの話をも、黙って右から左に聞き流す事に専念する。

荒れた河川と化していたアインズの心は、何度かの沈静化と愚痴を吐き出す事で、一応の安息を得られた様だった。あらかた吐き出したアインズに、ビクトーリアは真意を聞き出す事にする。

アインズは何がしたいのかと。

「冒険がしたいです」

これがアインズの望みだった。本音は外へ出て、一人の時間が欲しいと言う所だろう

が、あえてそこをツツコム様な事はしない。

ビクトーリアは、眼鏡を掛けると、机の上に広がった書類の中から、一枚の羊皮紙を取り出す。

「それではこう言うのはどうでしょう。この世界には、冒険者と言う職業があるそうですが?」

「マジですか?」

「はい、マジです」

この提案に、アインズは掌をワキワキと握ったり開いたりしながら、考えを巡らせていた。しかし、この行動を見るに、どうやら乗り気の様だ。

「行ってもいいんですかね?」

アインズは、不意にこんな言葉を口にする。

意味を訳せば、ナザリックから外に出てもいいのか? と言う意味だろう。

「一人では不味いじやろうな。守護者達が許しはせんじやろ」

この言葉に、アインズはがっくりと頭を垂れる。その姿に、ビクトーリアは、本日三度目のため息を吐くところ切り出した。

「まず、最初の条件じゃが、人の街へと行く訳じゃな?」

「ええ」

「ならば、お供は人に近い姿をした者が適切じゃな」

「ここまで話すと、二人は適合する者達をピックアップして行く。

「それから第二の条件じゃが、見ず知らずの人達の中で暮らす訳じゃから、礼儀正しい者、じゃな」

「そうですねえ。トラブルはなるべく避けたいですし」

そう言つてアインズは、僕達の顔を一人一人思い出してみる。しかし、どうにもピンとこなかつた。何と云うか、こう、癖が強すぎるのだ。

それはそれとして、御供として考えるに、まずは、階層守護者は外さねばならない。ナザリックの防衛を考えるならば、当然の結果だ。

では次は、執事であるセバスだ。しかし、彼は現在謹慎中の身であり、今後別の任務に付ける予定があるため却下となる。

ならば、プレアデスはどうかろう。すでに除外となつているのは、シズとエントマだった。シズの場合は、彼女自身がナザリックの防衛に関わつているため除外されていゝる。そして、エントマは、彼女の愛らしい容姿の問題で除外された。無表情だと言つて通すにも程がある、と。

その他のメンバーの中で、まずは、長姉であるユリ。性格的にも、礼儀的にも何の問題も無いが、人前でポロリする可能性があるため除外となる。

続いては、ルプスレギナ。アイنزの感想としては、なかなか良いのでは、と言う評價だ。

そして、ナーベラル。転移後、御側付きとして、よく身近にいたのだが、礼儀的な面から見ても、高評価を与えても良いとアイنزは考える。

最後にソリュシャン。全く問題が無さそうだが、はたして金髪縦ロールな髪形と言う、見た目豪華な冒険者が居るかどうか不明なため、現実的には保留である。

「ビッチさん、俺的には、ルプスレギナかナーベラルが良いと思うんですが？」

と言うアイنزの発言に、ビクトーリアは首を縦に振り、肯定の意を表しながらも、一つの疑問を口にする。

「モモンガさんは、冒険者になって何がしたいんじゃない？ やはり、魔法詠唱者かや？」

この問いに、アイنزは一瞬言葉を失うが、暫しの沈黙の後、ゆっくりとだが、自分の気持ちを正直に打ち明ける。

「俺は……。俺は戦士になってみたいんですよ」

「成程。それであれば、先ほどの二人はうってつけじゃなあ」

そう言っつてビクトーリアは、指を二本立てると言葉が続ける。

「それでどっちにするのじゃ？ 魔法詠唱者か？ 神官戦士か？」

一択を提示され、アイنزは真剣に悩んだ。

その結果、回復、蘇生等の神聖魔法は、スレイン王国との繋がりを邪推される恐れがあるため、遠距離での攻撃をアインズは選択した。

「やっぱり、戦士と魔法詠唱者の二人連れって、かつこ良いじゃないですか」

は、アインズの弁。だが、この選択を後ほど後悔する事になるとは、今のアインズには想像出来なかった。

話が一段落した所で、ビクトーリアが口を開く。

「現地協力者として、小娘をあてがってもいいのじゃが……」

「ああ、あのスレイン王国の？」

「うむ。じゃが、ちと問題が」

「あの娘にですか？ 一体どんな？」

「常識がね、無いの」

ビクトーリアの言葉を聞いた瞬間、アインズの顎がカクンとずれた。

常識が無い。それはどう言う事だろう。もしかして、あの少女はフランスの姫か何かなのか？ そんな疑問が、アインズの頭の中をグルグルと回る。

そして、いや、やはりと言うかアインズは少女、番外席次が何者であるのかの説明を求めた。

最初は戸惑っていたが、話し始めればスラスラとビクトーリアは、番外席次について、

自身の知る限りの情報を開示する。

曰く、神人と言われる者である事。

曰く、法国の最終兵器である事。

曰く、人類の守り手である事。

曰く、何かすつごいドラゴンに存在を知られると、都市が一つ滅ぶらしい事。

全てをさらけ出し、まあ、こんな物か、とビクトーリアは踏ん反り返る。話し終わって満足した様だった。

だが、アインズの反応は

「何やってんだ、あんたはあああああ！ この駄巨乳ビッチが！ 死ね！ 脳筋教師

に腹パンされて、死ね！」

「な・ん・だ・と。うおら！ ボッチ骸骨！ 言うに事かいて何て言い草だ！ お前こそ、

鳥に掘られながら埋葬されろ！」

「お前の様なヤツは、ロリータピンクに説教されて、悶え死ね！」

御互いを罵倒しながら、最後に口にした言葉は同じ物だった。

そして、同時に

「それは……嫌だなあ」

と、言葉を漏らし、疲れ切った顔をした。

王の思考

ナザリック地下大墳墓 第六階層、星青の館内にある書齋でビクトーリアは椅子に座り、一冊の本に目を通していた。机の上には、羊皮紙の束と共に、もう何冊か書籍が積まれている。パラパラと紙を捲る音だけが支配するその部屋には、二人の人物がいた。

一人はビクトーリア、そしてもう一人は、ナザリック地下大墳墓、守護者統括アルベドだ。

活字に視線を落とすビクトーリアの姿を、アルベドはうつとりと見つめていたが、本を閉じ一息吐いた頃合いで、その艶やかな口を開く。

「ビッチ様。熱心に目を通していましたが、その書籍に何か重要な情報が？」

この問いかけに、チラリとアルベドに視線を向け、手に持った本を差し出した。それを素直に受け取ったアルベドは、静かに、ゆっくりとページを開いて行く。開かれたそのページには、僅かな文字と思われる物と、一面に絵が描かれていた。

いわゆる一般的に、絵本と言われる物だ。

開かれたページには、一体のスケルトンと、五人の光で包まれた人の姿が描かれていた。次のページには、その六人が人々に囲まれている絵があった。三ページ目には、天

から降りて来る光輝く女性と、泣き叫ぶ人々が。

そして、最後のページには……スケルトンと、五人の光で包まれた人が、天から降りて来る光輝く女性を槍で突き刺している姿が。

アルベドは首を捻ると、ビクトーリアに詳細を問う。だが、ビクトーリアは言葉を発する事はせず、掛けていた眼鏡を差し出した。解析眼鏡を掛け、アルベドはもう一度絵本に視線を移す。今回は、解析眼鏡のおかげで、文字を読み取る事が出来た。

そして、読み進める内に、アルベドの表情は緊張に満ちて行く。

「ビッチ様。これは？」

「うん。それはスレイン法国で、普通に流通している絵本だ。それで、これが活字だけの物、こつちが法典」

そう言つて、二冊の本を指差す。アルベドは、慌ててその二冊を手に取ると、ざっと目を通す。

活字を読み取るその表情は、緊張した物から、うっとりとした妖艶な物へと変化していった。

「さすがは煉獄の王ビッチ様。異世界でも御名が轟いていらつしやるのですね」

そう言うアルベドは、どこか誇らしげだった。だが、ビクトーリアの次の言葉によつて、その表情は一変する。

「私の成した事で、名が残っているのなら誇る事も出来るけど、これは非常に不味い事態だよ。」

「不味い事態、ですか？」

「そう。煉獄の王、と言う名を残したとされる六大神、もしくは八欲王。後、十三英雄とかも入れておこうか。これらの者達は、どこで私の名を知った？ 私達がこの世界に転移して来たのは、つい先日だぞ。それなのに、昔から我が名はこの世界にあった。六百年も昔から。」

「そ、それは、ビッチ様の偉大なる……」

「違うな。この謎の答えは一つしか無いだろう」

言葉を遮られたアルベドは、キョトンとした表情で目をパチクリさせているが、ビクトーリアは構わず言葉を続ける。

「彼らは恐らく、私やモモンガさんと同じ存在だ。そして、転移したこの世界で、私の名を口にした」

「ですが、その者達がそうであったとして、何故ビッチ様の御名前を？ やはり、ビッチ様が偉大だからでは無いでしょうか？」

アルベドの酔っているかの様な、上げ感想にビクトーリアはクスリと自虐的な笑みを見せると、こう続ける。

「恐らくは語感だろうね。」

「語感?」

「そう、語感。YGGDRASIL内で最強のプレイヤーは、ワールドチャンピオンだ。たっちさんがそうだね」

「はい」

「ならば、それを現地の人に聞いて見よう。Come on 小娘!」

ビクトーリアはおもむろに立ち上がると、呼び声と共に指を弾く。その瞬間、ドアが勢いよく開かれ、何者かが猛スピードで進入して来た。アルベドが警戒態勢をとるが、それは瞬時に解除される。

ビクトーリアの横で、笑顔を見せるその者は、全く邪気を感じさせなかったからだ。

少女、番外席次は、アルベドと向き合おうと丁寧な腰を折り

「おはようございます。おおさまのお嫁さん——」

その瞬間、アルベドからドス黒い何かが吹き出した。

「ビクトーリア様、そのゴミ……、その娘をしばしお借りしてもよろしいでしょうか?」

……よろしいでしょうか?」

確かに聞こえたゴミ、と言う言葉と、につこりとほほ笑むアルベドから感じる黒いオーラに気押され、ビクトーリアは首を縦に振る。アルベドは、番外席次の首根つこを

むんずと掴み、まるで大型の猫を運ぶ様に、引きずりながら部屋を出て行った。ビクトーリアは、番外席次の無事を願いながらも、この状況は、絶対絶命ならぬ、彼女の名が示す通り、絶死絶命だ、と不謹慎な考えを浮かべる。

時間にして約十分、二人が帰って来た。それはもう、にこやかな笑顔で。「アルベド様の髪は奇麗ですねえ」「そんなあなたの耳も愛らしいわ」などと女子トークを交えながら。

一体、空白の十分間に何が起こったのだろうか？

確認したい気持ちは十二分に有るのだが、先ほどのドス黒いオーラがそれを躊躇わせる。

しかし、確実に解った事がある。それは、アルベドの視線。ビクトーリアの股間部を凝視しながら、唇を湿らせる様に舌が蠢く。そう、ビクトーリアは完全に狙われていると言う事だ。

何とかこの状況を回避するために、頭脳をフル回転させる。しかし……何も良い案は思いつかなかった。アルベド一人なら、何とかなったかもしれない。しかし、此処にはもう一匹の淫獣、番外席次がいるのだ。

二人の雰囲気からして、何らかの同盟が成ったと思つて間違いは無い。

では、ビクトーリアに出来る事は？

「は、はい！ 仲直りした様でたいへんよろしい。では、話を戻そう」

強引に軌道修正する事だった。

そう言った物のビクトリアの心中は半信半疑だ。普段ならば、こちらの言う事を真面目に聞いてくれる二人だが、淫獣化している場合の暴走度は身を持って知っている。ドキドキしながら二人の返事を待つことしか、今のビクトリアには出来なかった。

はたして結果は？

「了解しました、ビッチ様」

「はい、おおさま」

なんとか綱渡りは成功した。

ビクトリアは安堵の溜息を突きながら、話を再開する。

「では小娘、これから妾の言う事に、素直に反応せえ」

番外席次は、この意味不明の言葉に、首を傾げながらも了承する。

「実はもう、妾はワールドチャンピオンに勝利した事があるのじゃ」

「ええっ！」

ビクトリアの言葉に、驚きの声が重なる。だが、これはアルベドの発した物だった。対象となる番外席次の反応はと言うと、無反応だ。まるで興味が無い様に。

これを確認したビクトリアは、満足げに一度頷くと、次の言葉を口にする。

「もう一つ秘密の話じゃ。妾はな、冥界の王にも勝利した事があるのじゃ」
「ええっ！」

今度の言葉には、アルベドと共に、番外席次も反応を示す。してやったりと何度も領きながら、実験結果の総括であるとアルベドに視線を向ける。

「な。言つた通りじゃろ」

「一体どう言う事なのでしようか？」

結果に満足するビクトーリアと、真偽の説明を求めるアルベド。

ビクトーリアは、天井を見上げながら持論をぽつぽつと語り出す。

「恐らくは、六大神……彼らの転移場所は人々の目に付く場所だったのじゃろう。そして、人々との邂逅の中、此処が異世界と知って不安になり、口から出た言葉が煉獄の王、そして封印」

「ですが、何故ビツチ様の御名前を？ それに、倒した、では無く封印、と？」

アルベドが根源の疑問を口にする。

そもそもこれが疑問の始まりなのだ。

だが、ビクトーリアの浮かべる表情は、苦笑いを伴ったあきれ顔だった。

「ハツタリじゃ。誇張と言つてもよいな。ワールドチャンピオンと言う言葉よりも、煉獄の王と言う言葉の方が派手じゃ。それに加えて、言葉が重く聞こえる。封印も同様

「じゃな。倒したよりも、難しげに聞こえるからの。小娘の反応が良い例じゃな」

「成程。しかし——」

アルベドの言いたい事は解る。なぜ、煉獄の王と言う名が、此処まで恐れられているかの説明がついてはいないからだ。

「それはのう、彼奴等が神格化されたからじゃよ」

「神格化？ でしょうか」

「そう。月日が経つにつれ、彼らは神になった。そして、神々が封印した者は、神々でも封印がやつとの者に変化した」

「では、八欲王や十三英雄の話は？」

「尾ひれじゃな」

「成程。ビツチ様はそれを知るために——」

「違う。妾が調べておつたのは、敵の存在についてじゃ」

「敵、でございますか？」

ビクトーリアの発言に、アルベドは緊張気味に声を絞り出す。それは、まるで失念していた事を指摘された様だった。

「そう。妾達、プレイヤーを打倒できる者。そなたら100Lv NPCに匹敵する者。YGGDRASIL製のアイテム。ギルド武器。最後に……ワールドアイテムの存在」

そこで一旦言葉を止め、表情を柔らかい物に変えつつ、ビクトーリアは言葉を続ける。「今回の精査では、あまり有益な情報は得る事が出来なかったが、一つ希望を見つける事は出来た。」

満足げに言うビクトーリアに、アルベドは首を傾げる。それを見たビクトーリアは、絵本の一ページ目を指で叩きつつ

「アンデッドが、人々に受け入れられる可能性を見つけた」

王の仕事

城塞都市エ・ランテル。

リ・エステイーゼ王国の領地であり、バハルス帝国とスレイン王国の国境に位置する都市である。その立地故の物なのか、この都市は三重の城壁で囲まれていた。

外界と隔てる第一の壁。その内側は王国軍の駐屯地や資材倉庫が並び、第二の壁の内側には、市民の生活の場である街が広がる。そして、中央の壁の内側は、行政区などが収まっている。簡単にだがこれが、城塞都市エ・ランテルの全貌だ。

その第二の壁の内側、昼時の喧騒が鳴り響くエ・ランテルの街を、二人の人物が人混みをすり抜けながら歩いていった。

一人は女性。艶やかな黒髪をポニーテールに結び、涼しげな切れ長の瞳には、黒縁の眼鏡が良く似合っていた。もう一人は男性であろうか、疑問形なのは、この者の容姿からである。真黒な、まるで夜の闇を想像させるフルプレート（全身鎧）で性別の判断が難しい物になっていた。だが、およそ二メートルに届くであろうその長身と、大きな歩幅が、この人物が男性であると物語る。

その正体は、モモンガことアインズ・ウール・ゴウンと、戦闘メイドプレアデスが一

人、ナーベラル・ガンマ。

賑わう街を嫌う様に、二人は裏道へと姿を消した。表通りから数メートル裏道に入った所で、鎧姿の男は口を開く。

「ナーベよ、その眼鏡はどうした？」

この問いに、ナーベと呼ばれた女性は両手で頬を覆いながら

「似合いませんか？ アインズ様」

「モモンだ！ いや、似合ってはいるが、一体どうした？」

「はい。出発前にアルベド様から。そしてコレを」

そう言つてナーベは、懐から小さな羊皮紙を差し出す。モモンはそれを受け取ると、静かに目を通して行つた。そこにはこれからの行動指針が簡潔に記されている。まずは、物を買ひ取ってくれる店へと向かえとの事だつた。

モモンは、まるで子供のお使いだなと思ひながらも、この指示に素直に従う事にする。

大通りに戻り、軒先に店を出している商人達から情報を得、二人は何とか目当ての店を見つけた事が出来た。店のドアの前に立つモモンであつたが、ふとよぎつた疑問を口にする。

「ナーベよ、お前は一体何を売るつもりなのだ？」

「はい、アイン——」

「モモンだ！」

「はい、モモン様……」

「モモンだ！」

「すいません、モモンさ——ん」

「モモンさ——ん、か。まあ良い。それでお前は一体何を売るつもりなのだ？」

「ここ何日かで、すでに定番になりつつある、名前の訂正と言う寸劇を終え、やつとの事で二回目の質問をモモンは口にする。

問われたナーベは、懐から布で包まれた物を差し出した。モモンはそれを受け取ると、ゆつくりと布を開いて行く。姿を現したそれは、見覚えのある物だった。鈍く銀色に輝くそれは、あの日、この世界に転移した日に見た物だ。あの時ビクトーリアが差し出した懐中時計が、そこにあった。

それを見た瞬間、モモンはこの一件の首謀者を理解した。

「ビッチさん」

懐中時計を握りしめ、モモンは静かに呟くと、手にしたそれをナーベに返す。そして、手を振り早く行っていいと指示を出す。ナーベは、モモンのこの行動に、怒られた時の様に僅かな緊張を醸し出すが、素直に従い先程の店へと消えて行く。

モモンは、その姿が見えなくなると、ヘルムで覆われた頭部を、壁に叩きつけた。ガ

ンッ！　と言う音を立て、壁と頭部は相対する。かなりの衝撃があったと思われる音だった。

だが、モモンの口から吐き出された言葉は、痛みを伴う言葉でも、憎しみを含む物でも無かった。

「ビッチさん。……………なんであなたは此処までしてくれるんだ」

どこか悲しみと申し訳無さを感じさせる物だった。

そうして、後悔の念に打ちひしがれているモモンの所に、ナーベが帰って来た。そして、手に持つ袋を誇らしげにモモンへと差し出す。袋はその大きさに似合わず、モモンの手にズツシリとした重さをもたらす。

「ナーベよ。いくらになつた？」

「はい、モモンさん……………金貨二十五枚、だそうです」

「金貨二十五枚、か」

モモンの肯定とも否定とも取れる物言いに、ナーベの表情が一気に曇る。自分は何か重大な失態を犯したのではないかと言う、不安がナーベを襲う。だが、それは杞憂なのだ。モモン、いやアインズとしては、ピクトーリアが持たせてくれたあの懐中時計を最高の額で売却したかった。そして、その売却金額は金貨二十五枚。それがアインズには、高いか安いかの判断が付かなかつた為の微妙な対応だった。

ここで悩んでいても仕方が無いと、モモンはナーベを伴い冒険者組合へと歩を向ける。だが、頭の中は懐中時計の金額の事で一杯だった。僅かではあるが、これまでに蒐集した情報を思い返して見る。

カルネ村の村長は何と言っていたか？

ビクトーリアが、法国から得た情報はどうか？

確か……三人家族が憤ましくだが、一年暮らせる額は……金貨十枚ほどだったはず。ならば、金貨二十五枚は悪くは無いのではないかとモモンは思い至る。もし、ぼつたくらわれていたのなら、それが解った段階であの店の主人には報いを受けて貰えば良い。そんな黒い思いを頭の片隅に描きながら、考えを閉めるアインズだった。

モモン達の当初の目的である、冒険者組合での登録は、つつが無く終り、次の目的場所である宿へと場面は移る。

ウエスタンドアを左右に開き、立ち入ったそこは、お世辞にも上品とは言えない物だった。確かに、冒険者などと言う荒くれ者達がたむろする場所としてはそうなのかも知れないが、此処はあまりにも酷過ぎだ。体臭が匂って来そうな男達が、まだ日が高いと言うのに、ほぼ泥酔状態で突つ伏している光景。それが、何人も居る状態がこの空間には広がっていた。

モモンは確信する。この場を早く離れなければ、間違いなく面倒に巻き込まれる、と。

足早にチェックインカウンター、いわゆる店の親父に金を支払い二人部屋を取った。支払が金貨であった為、非常に迷惑がられたが、モモンは両替の手間が無くなったとほくそ笑むに留まる。

そして、いざ部屋へと向かおうとした時、問題が発生した。先程の男達の中を通らねば、部屋へと続く階段には辿りつけないからだ。モモンは覚悟を決め、最初の一步を踏み出す。しかし、その行動は三步で妨げられる事になった。

階段へ向け歩きだした時に、最初に目に入るテール。そこに座る男が、大きく足を出し、モモン達の進路を妨害したのだ。そればかりか、下卑た笑みを浮かべながら、ナーベをいやらしい目で見つめていた。

モモンにとって、いや、アインズにとってナーベラル達NPCは、友人の子供の様な物だ、そんな存在を、そんな目で見ればどう言う気分になるか。その時、鬱憤を募らせるモモンの脳裏に、出発前に言われたピクトリアの言葉が蘇る。

モモンガさん、行動はなるべく温厚に。でも……やる時は徹底的にですよ。怨む事もバカバカしくなるレベルで。

成程、そうだった。目の前の者達が、自分に対してこう言う態度を取るのには、全て自分達を、ひいてはアインズ・ウール・ゴウンを舐めているからだ。成らば、思い知らせてやるまでだ。この名を世界に轟かせる第一歩として。

モモンは身を屈めると、目の前にあつた短い脚をむんずと掴み、店内に向け放り投げた。投げられた男は、まるで重さを感じず居並ぶテーブル達へと突撃して行つた。

モモンはナーベに視線を向けると、無言で待機を命じ、投げた男へと近づいて行つた。そして、男の胸倉を掴むと、低く静かな声で語りかける。

「私達が何だと？ 私の連れに何をしろと？ 言う事だけは聞いてやる。さあ、話すがいい」

だが、男は息が詰まり言葉が発する事が出来ない。それが解つていながらも、モモンの苛立ちは収まらなかつた。暴れに暴れ、それは数分間続く。精神抑制も何度もかかつたが、それ以上の感情が後から後から湧き続け、あまり意味を成してはいなかつた。

やつとの事で落ち着きを取り戻したモモンに、店の店主が近付く。

「御客さん、困るよ」

そう言つて店をぐるりと見渡す。そこは、もう店では無く廃墟と言つた方が適切な様に破壊されていた。

「それで？ 私にどうしろと言うのだ。まさか……修理費を払えなどとは言わんよな」
ドスの利いた声だった。

店主は何も言えず、ただ額から汗を流すだけだ。だが、モモンも鬼では無い、ここで妥協案を提示する。

「私としても、少々やり過ぎた、とは思っている。だから、これから私達の仕事の報酬の中から、一定の額を毎度そちらに渡そうではないか？ どうだ」

この提案と先ほどの実力を鑑み、店主は渋々了承する。

やっとひと段落、そう思ったモモンだが事はまだ終わってはいなかった。

王の訪問

「ね、ねえ。ちよつと」

モモンは、後ろから掛けられた緊張気味の声に振り返る。そこには、割れた瓶を持った赤毛の女性が立っていた。その赤毛は短く刈られており、肌は日焼けで健康的な褐色。ライト・レザ^革ーアマー^鎧に包まれたその肢体は、引き締まった筋肉が感じられる。名はブリタ、彼女もまた、冒険者なのだろう。

そんな人物が、勝気そうな瞳を伏せ、恐る恐ると言った感じでモモンに言葉を掛ける。まあ、先程の暴れっぷりを見ていれば、当然なのかも知れないが。そんなブリタからの声に、主人を守る様に率先してナーベが返事を返す。

「羽虫^{やぶ蚊}が何の用ですか？」

「え？ や、やぶ？」

ナーベからの、突然の虫発言に、ブリタはまるで踏鞴を踏んだ様に切れ切れに言葉を繰り返す。

この、目の前で披露されているナーベのコミュニケーション能力を見た、いや、見させられたモモンは、静かにため息を吐くと、ナーベの肩に手を掛け後ろに下がらせる。

「申し訳無い、連れがご迷惑を。それで、用件は何でしょうか？」

「あ、あのさ、さつきあんたが、いや、あなたが暴れた余波で、あたしのポーションが割れてしまったてね、そ、それで、その、弁償、して貰えないかと……」

ブリタはおどおどと、言葉を選びながらモモンへの要求を口にした。

モモンは、ブリタが手に持つ割れた小瓶を凝視する。御世辞にも上級品とは言えない小瓶に、僅かに付着したポーションを見て、モモンの頭脳は疑問符を掲げる。

YGGDRASILで使用されるポーションの色は、総じて赤だ。だが、小瓶に付着した物は、青味を帯びている様に見える。モモンはここで、YGGDRASILとこの世界の、相違点の確認を試みてみると言う選択をした。

「解りました。弁償はしましょう」

「ほんと！」

「ええ、ですが一つ条件が」

「な、何よ」

モモンの返答に対し、ブリタは懐疑的に答える。だが、モモンからの提案は意外な物だった。

「そのポーションを買った店を教えては貰えませんか？」

「へ？」

あまりにも単純な要求に、ブリタの声は間抜けな物となる。それに気づき恥ずかしかつたのだろうか、ブリタは慌てて次の言葉を口にした。

「いい、いいわよ、それぐらい。それで、どう弁償してくれるのかしら？　品物？　それともお金？」

モモンはしばし考えてから

「現金で支払おう。いくらだ？」

「金貨一枚と、銀貨十枚」

モモンは小さな革袋から指定の金額を取り出すと、静かにブリタの掌に載せる。だがブリタは、乗せられた金貨を数える事無くモモンをただ見つめていた。

「どうした？」

ブリタの、この行動に違和感を覚え、モモンは問いかけた。

この言葉で、ようやく正気に戻ったのか、ブリタは慌てたように金額の確認をする。その行動と共に、ブリタは心中をさらしていった。

「いい、いや。冒険者なんて、さ、荒くれ者の集団、だからさ、あんたが紳士的だったから、ちよつとびつくりしちやつて。あは、あは、あはは！」

言つて、ブリタは照れくさそうに頭を掻く。

モモンは、この女性の、自分に対する好感度は悪くないのでは？と感じていた。なら

ば、ここで行うべき行動は一つ。さらに好感度を上げ、自分の名を広げて貰う駒の一つとする事だろう。

この行動が、ビクトーリアの言う友好的に、と言う行動にも当てはまるはず。

「ふむ。これは異なることを言う。人に対しては友好的に接する。これは当たり前的事だろう?」

この、気障つたらしいとも言える言葉に、ブリタは頬を赤く染めながら「そうですね」としおらしい返事を返す。

まあ、彼女以上に羨望の瞳で見つめていた人物が隣に居たのだが、今はそれを語るべき時ではないだろう。

その後、件の店の説明を受け、モモンとナーベは宿を後にした。



「此処のようだな」

そう言ってモモンは一軒の店先で足を止めた。

「その様です」

隣に控えるナーベが、解析眼鏡越しに店名を確認しそれを肯定する。

モモンは意を決して、ドアノブに手を掛けると静かに手前へと引いて行く。その瞬間、店内の空気が一気に漏れだした。そして、その中に混ざる青臭い臭い。モモンには覚えが無い臭いであつたが、それが薬草の匂いであろうと想像は出来た。

扉を完全に開け放ち、モモンとナーベは店内へと歩を進める。店内は、先ほど表で嗅いだ匂いの十倍程の匂いで満ちていた。まるで、空気に色が付いている様な密度で。

そんな中、モモンはゆつくりと店内を見回した。側面の壁は、小さな引出がびつしりと詰まった棚が占拠しており、奥には小さなカウンターと、私室なのだろうか？そこへと続く戸口が一つ見てとれる。簡素と言えば簡素なのだが、そこからはえも言われぬ重い雰囲気が漂う。

モモンは異国情緒とはこう言う物なのか？と僅かな関心と、湧きあがる好奇心でこの光景に見入っていた。

そんな時、店の奥から声がかけられる。

「いらっしやいませ」

静かで、それでいて丁寧な言葉だつた。

声の方向に視線を移すと、少年が一人奥の扉を開け、店へと出て来る所だつた。

モモンの、眼球の無い瞳に映し出されるその少年は、単にだらしの無い少年だった。丁寧にケアすれば、眩き光を放つであろうその金髪はぼさぼさで、長く伸ばされ、彼の瞳を世間から隠している。身に纏っている装束も、所々、薬品だろうか？、しみが目立ち、お世辞にも清潔とは言えない物だ。営業マンとして、長くの間を過してきたモモン、いや、鈴木悟としては、一言注意の言葉を投げかけてやろうと思うレベルに酷い格好だった。接客業としては失格だと。

だが、今は異世界で初めての飛び込み営業を成功させるべきと、気持ちを切り替える。「突然の来訪を失礼。実は少々お話を聞かせて貰えればと思ひまして。ああ、私はモモン。冒険者です。隣はナーベ、同じく冒険者です」

「僕はンファイレア・バレアレ。この店の店主代理、みたいな者です」
御互いの挨拶も終り、ンファイレアは本題は？と切り出す。

これを受けモモンは、ポジションを見せてほしいと願ひ出る。

当たり前と言えば当たり前なりクエストに対し、ンファイレアはそれをすぐさまカウンターに三本の瓶を乗せた。そこにある物は、モモンが予想した通り、青い色をしたポジションだった。手にとつても？と言うモモンに対し、ンファイレアはそれを快く了承する。

ガントレットをはめた厳つい手で、ポジションを優しく掴むと、明りにかざしながら

ゆっくりと観察を始める。

YGGDRASIL製のポーションと比べると、この世界のポーションには幾つかの違いが見てとれた。

まず、第一に色。そして二つ目に気になった所は、二つの瓶の底に見える若干の沈殿物の存在である。見た目で解る違いはその二つであるのだが、次の確認は中身に関してである。

これは素直に制作者に聞いた方が良いとモモンは判断した。

「ンファイレアさん、これはどの程度の回復が可能な品物ですか？」

「はい。こちらの商品は第二位階魔法、ライト・ヒーリング軽と同等の効果がありますよ」

「第二位階魔法、ですか……」

「ええ。それが何か？」

「いえ。それ以上の効果を持つポーションは？」

「存在しません。いえ、伝説の中にはあるようですが」

「では、青以外の色のポーションは？」

「それも存在しません。製造過程で全てのポーションは青くなります」

モモンは成程と頷くと、今までの情報を頭の中で整理する。

今、モモンの手にあるポーションは、この店の最上級品で金貨八枚の値段であり、第

二位階の魔法と同等の効果を発揮する物だ。この品以外の、あと二種類は、それぞれ金貨一枚と銀貨十枚の品と、銀貨数枚の品がある、と。

そして重要なのが、この世界のポーションは劣化すると言う事だ。そのためブリザベイション、保存の魔法をかける必要がある。

モモンは、この先の行動を思案する。

この情報だけを持ち帰り精査するか、それともYGGDRASIL製のポーションを開示して見るか。暫く沈黙と共に思考の海に浸っていたが、ここは出自をうやむやにしなからの提示を選択する。

「ンファイレアさん、これを見ていただけますか？」

そう言つてマントの陰に開いたアイテムボックスから、マイナーヒーリングポーションを取り出す。

カウンターに置いた瞬間、ンファイレアの顔色が傍目からでも解るほどに変化する。

「モ、モモンさん！　これをどこで！」

「いえ、旅の途中で偶然手に入れた物なので。それで、それは何なのですか？　ポーションだとは思うのですが」

「モモンさん、落ち着いて聞いて下さい。これは恐らく………伝説の神の血です！」

王の決断

アインズ達が出発して早二日、その間もピクトーリアはナザリック地下大墳墓、第六階層星青の館の書齋で書類を楽しく眺めていた。その傍らのソファアでは番外席次が美味しそうに果物を摘み、そしていつもの様に客が訪れる。

艶やかな黒髪をなびかせて、腰から生える黒翼をはばたかせながら、毎日の日課としてアルベドはこの場所を訪問する。時には只の息抜きに、時にはピクトーリアの頼み事の処置に。己の欲望の……いや、愛ゆえに、彼女は甲斐がいしく通い妻を続けている。

玄関ドアを開け室内へ入ると、アルベドはそこで立ち止まり、大きく息を吐く。気分を落ち着かせ、失礼にあたらない様にと深呼吸を繰り返す。その後、ゆっくりとした優雅な歩みで、書齋の扉に近づくと、きつちりとしたリズムでドアを叩く。コンコンと言うノックの音が響き暫しの静寂の後、入室許可の声が聞こえた。もう一度深呼吸をしようと、アルベドは静かに書齋のドアを開ける。

解放された室内からは、紙とインクの香りが混じった空気がアルベドを包みこむ。アルベドの視線は正面にいる人物に釘付けとなり、瞳はトロンと呆けた様に濡れ、頬は桜色に染まる。

「おはよう御座います、ビクトーリア様。アルベド、参りました」
言つて丁寧な腰を折る。

「おはよう、アルベド」

「おはよー」

アルベドの挨拶に、部屋に居た二人からも挨拶が返される。一つは凜としながらも、優しい声で。もう一つは、どこか呑気さがうかがえる声で。

アルベドが姿勢を正した時、呑気な声の主に視線が止まる。

「あら。絶死絶命、あなたその衣装は？」

「これ？ おおさまに貰つた」

そう言つて番外席次は、自身の着ている物の襟を掴む。

現在、彼女が身に付けている物は、以前の拘束服に似た物とは百八十度違う可愛らしい物だった。左胸にYと刺繍されたワッペンが付いた濃紺のブレザーに、白い開襟シャツを、青と赤の縞模様様のネクタイで飾り、下半身は、農緑の地に淡い黄緑とそれを縁取る白のタータン・チェック柄のプリーツスカート。そして足元は、紺のソックスにローファーと言ういでたちだ。

これは、番外席次の言葉通りビクトーリアが与えた物で、今までの拘束服風の物での日常生活では、あんまりだとの考えと、番外席次のあまりにも常識外れの考えの矯正

を加味しての物だった。

中世風の異世界で、二十世紀後半から二十一世紀のJK風衣装はどうかとも言えるのだが、まずは可愛いとか、美味しいと言った一般的な感情からの矯正を第一にした処置だった。

しかもこのJK風衣装、一件そうとは見えないのだが、伝説級アイテムには若干落ちる程の防御力を持っている。もともとは、ビクトリアの軽戦鎧として製作した物だったが、一度着用して見たところ、あまりにもなコレジャ無い感の為、長年封印して来た品物だ。

そんな品物を、羨ましげに見つめていたアルベドだが、意識を切り替えてビクトリアに視線を向ける。そして口を開こうとした瞬間、ビクトリアの口が動いた。

先手を取られた驚きか、アルベドの口から驚きの声が漏れそうになるが、これは何とか阻止する事に成功する。さすがは守護者統括、出来た女だった。

「ほら、そんな目をするではない。アルベドにも何か贈り物を見繕うておくからの。」

「ほ、ホントで御座いますか?」

「嘘は言わんよ。」

そう言つてビクトリアは書類へと視線を戻す。

ほんの僅かな静寂の後、微かな笑い声が響いた。声の主はビクトリアだ。

「ビツチ様、何か可笑しな事が？」

そう言うアルベドの問いに、ビクトーリアは微笑みを浮かべたまま

「いや。そうじゃな、なかなか苦勞をしておる様じゃと思うてな」

「苦勞、で御座いますでしょうか？ 一体誰が？」

「モモンガさんじゃよ。何でもナーベラルのコミュニケーション能力が、驚くほど低いらしい」

そう言うビクトーリアの表情は、依然笑顔のままだが、アルベドの表情は厳しい物に変化する。

「では、急いで御供の変更を……」

「いや、このままで良いじやろう」

「しかしビツチ様、このままではモモンガ様にご迷惑が」

アルベドの発言に対して、ビクトーリアはカラカラと笑い声を上げる。

「それは過保護じゃな。この地で生きて行くのなら、人の中で学び修行すべきじやろう」
ビクトーリアの言葉に対して、アルベドの流麗な眉がピクンと跳ねる。それは、何か異論があると言う様に見てとれた。

「人の中で……。不敬とは思いますがビツチ様」

「何かな？」

「人などと言うゴミに、何か価値がある様には思えません？　ましてや、そこから学ぶなど」

「そうかのう？　本当にそうかのう？」

ビクトーリアは、含みのある笑みでアルベドを見つめる。

そして、机の上に羊皮紙の束を置いた。

「妾は、今まさにそれを実践しておる最中なのじゃがな」

そう指摘され、アルベドは今さらながらに気が付いたと思われ、小さな声を漏らし下唇を噛んだ。その仕草は、恥らう様でありながらも、自身の失態で尽くす者を失うかの恐怖も見えてとれた。

ビクトーリアは、アルベドの仕草を見ている内に、自然と笑みが漏れてくる。

「そんなにスネるでは無い。奇麗な顔が台無しじゃぞ」

「は、はいー！」

ビクトーリアのお世辞とも取れる言葉に、アルベドの表情は、これでもかと輝く。そんなアルベドとは対照的に、ビクトーリアの表情は硬く静かな物へと変貌していった。これから話す言葉を、一言一句記憶せよ、と言わんばかりに。

「アルベド、人を侮るな。決して」

「人を？」

短く言い切られたビクトリアの言葉。自分達、100Lv NPCにとっては、取るに足らないゴミの様な存在。それを、自分達より遙かに高みに居る存在が侮るなど警告する。

アルベドの身体は小さく震え、背筋がヒヤリと冷えた。

「で、ではビッチ様は絶死絶命の様な存在が、多数存在すると?」

「小娘の様な存在か……。妾が知る限り、王国戦士長、法国漆黒聖典、そして小娘、ドラゴロードと呼ばれる上位種、程度じゃな。探せばまだ居るじやろうがそれほど数は居まい。それらの者など対応を講じれば脅威ではないわな」

「それではビッチ様の脅威とは? 王族や貴族などの権力を持つ者で?」

「違う。妾が恐れている者達は、うぬら力持つ者の目に留らぬ者達じゃ。」

「そ、それは……」

意味深なビクトリアの言葉に、アルベドの喉がゴクリと鳴る。横に目を向ければ、番外席次も同様の反応を見せていた。場に緊張と不安が充満する。一体、ビクトリアは何を語るのか。誰を敵と定めるのか。

「妾が最も恐れ、危惧する存在は、名を知る事無く、振るう力は小さく、声なき者達じゃよ」

「そ、そんな存在が居るのでしょうか?」

「おるよ、見えているのに見えない者達。一度その力が集まれば、英雄とて、神とて殺せる者達は」

「そんな！ それは一体？」

「民草、国民と呼ばれる人々の事じゃ」

「羽虫の様な存在である者達が……脅威に」

「そう、羽虫だと思っていた存在が、一瞬にして蜂に変わる。何万、何億の針が敵に向け小さな力を振るう。その力は多くを巻き込み、人種、種族を超え一つの力となり濁流の如く敵に襲いかかるじやろう。アルベド、小娘、ウヌらは力ある者達じやろう、じやがな、例え一人で国を相手に出来る者でも、世界を相手には決して勝てぬと知れ」

ビクトーリアの口から発せられる言葉は、重く、またアルベドや番外席次にとって驚くべき物だった。今までの価値観がひっくり返るほどの。だからこそ、二人はこの言葉を重く受け止める。

そして、それが疑問を生む。

「おおさまは、どうしたいの？」

「どうしたい、とな？」

「そう。おおさまは世界とどう向き合うの？ 滅ぼすの？ 救うの？」

番外席次の言葉に、ビクトーリアは一瞬言葉を失う。

そして、ビクトーリアの視線は、目の前に立つ二人の女性に向けられる。その者達は微笑みを浮かべ、ビクトーリアの返答を待っていた。例えばどんな答えでも肯定すると言う様に。

ビクトーリアは、ゆつくりと一度まばたきをした後

「妾か。妾は、愛すべき友と、友らが残した愛しき子らと、妾が愛する者達と共に、おつかなびつくり黄昏を歩もう。世界に寄り添いながら、な」

そう言うのと、邪気のない笑みを浮かべたのだった。

場が静寂に満ち、誰も言葉を発せようとはしなかった。その空気に、一番最初に耐えられなくなったのはビクトーリアだ。両の掌をパチンと合わせ、硬い話は此処までと合図を送る。

「さ、さて。今日はアルベドに折り入って頼みがあつてのう」

「私に、頼みで御座いますか?」

ビクトーリアは一度大きく頷くと、空中から小さな木箱を一つ取り出し机に置いた。それをアルベドに向け開いて見せる。木箱の中には、恐らくは水晶だろうか、一センチ程の球体が十個入っていた。

「これは、魔封じの水晶と同じ物なのじゃが、これにゲートの魔法を封じて貰いたいのじゃよ」

「はい。その程度の事ならば、後ほどシャルティア辺りにでも……ですがピツチ様、魔封じの水晶とおっしゃいましたが、随分と小さいのですね」

「そうじゃな。これは単体で使うのでは無く、これで起動させるのじゃよ」

そう言つて空中から、一つのアイテムを取り出す。それは、フリントロツク式の短銃に酷似した物だった。シズが持つ、現代兵器に似た魔法の銃と比べると、古くさいデザインの。

「これはの、銃に見えるかも知れんが実際にはワンド短杖の類での、魔法を封じた水晶を、この中に入れ引き金を引けば魔法が発動すると言う寸法の物じゃな」

低位階の魔法しか込められんが、とピクトーリアは補足説明を入れる。

アルベドは、成程と相槌を打つが、番外席次に至つては余り解つてはいない様だった。その後は、雑談を交えた報告会が開かれ、ピクトーリアからはスレイン法国へ未知の敵との交戦を避ける様にと命を下した事が告げられる。

アルベドからは、セバス、ソリュシャン、シャルティアが近くナザリツクを離れる事が告げられた。

アルベドの話をもじつと聞いていたピクトーリアだったが、アルベドの話が終わつた瞬間、何かを思いついた様に口を開く。

「そうじゃアルベド、セバスに言付を頼めるか？」

「はい。なんなりと」

「うむ。ではこう伝えてくれるか

“己の善性に従って動け”

とな」

「畏まりました」

僕達の密談

「おばあちゃん！ おばあちゃん！」

声を荒げ、少年、ンファイレア・バレアレは祖母であるリイジー・バレアレに声を掛ける。

「何だい、騒々しいね。調合中は声をかけるで無いと言ってあるだろうに」

祖母であるリイジー・バレアレの言葉は、字面では厳しいが、その声色は孫へと向ける優しい響きが含まれる。

「ごめん、おばあちゃん。実はさっきのお客さんの事なんだけど……」

そう前置きして、ンファイレアはモモンとの一件を話し出した。

「それは本当かい？」

リイジーの問いに、ンファイレアはゆっくりと頷く。

「たぶん、間違い無いと思う。混ぜ物やワインでは、あの透明度は出無いから。それに、
香も」

「草の匂いかい？」

「ううん。鉱物系だと思う。錬金術を用いて創る物に似ていたから」

リイジーは、孫の言葉を反芻しながら、老眼鏡とおぼしき眼鏡を外し、目頭を右手でほぐしながら次の言葉を口にする。

「錬金術で製造したポーションと同系統の香りの赤い液体……。これはひよつとすると、かも知れないねえ。ンファイレーアや、そのお客はどう言った者だったのかのう」

「冒険者……だね。カッパー（銅）の。でも……」

「でも？」

「う、うん。装備がすごく豪華だったから、どこか別の土地から来た人かも」

「帝国や法国では無くてかい」

「連れの女の人の髪色を見る限りはね」

リイジーはそこで一旦言葉を切り、暫しの沈黙の後何かを閃いたのか再び口を開く。

「そう言えば、お前さん近々薬草を採りに行く予定だったね」

「う、うん。そうだけど」

「ならば話が早い。薬草採りの護衛、その者達に依頼してみてもどうかねえ」



くナザリツク地下大墳墓 第十階層 玉座の間く

「それでデミウルゴス、私に皆を集めさせてどんな用かしら？」

開口一番、不機嫌そうな空気を纏いながら、アルベドが発した言葉がこれだった。

この場には、至高の四十一人に名と姿を賜った者達が、若干名を除き集結している。その中でアルベドの発する雰囲気は、一種別の物を感じさせていた。そして、それが言葉として具現化している様に見える。

その違和感は全ての者が感じており、また、その原因が場を冷やす材料となっていた。だがその中で、まるで冷え切った雰囲気を楽しむ様に口を開く者も居た。

「そうだねアルベド。実は皆にアインズ様の御言葉を伝えようと思つてね」

デミウルゴスだ。

「そう。それでどんな御言葉かしら？ 私は聞いてないわよ」

「ああ、そうだね。君はおろか全ての僕が聞いてはいない御言葉だよ。なぜなら私と二人っきりの時の御言葉だからね」

そう言つてデミウルゴスは誇らしげに胸を張る。

そこには、自分が守護者統括よりも信用されているのだと言う、自慢とも言える思いが込められている様に見えた。だが、その傲慢とも取れる行動も、彼の悪魔と言う種族

から来る物かも知れない。

「ナカナカ話が始ラナイナ。デミウルゴス、アインズ様ハ何ト仰ツタノダ」

「ああ、すまないね友よ。前置きが長過ぎたようだ。アルベドもすまないね」

アルベドとデミウルゴス、二人の衝突を感じ取ったコキユートスが先を促す。

「御言葉を賜ったのはあの晩だ。あの化け物が幽閉された夜だね。しかし、アインズ様は優しすぎる。あんな化け物など素早く消せばいいのだが……いやいや、アインズ様の事、何か使い潰す方法をお考えなのだろう。おっと、話がそれたね」

デミウルゴスが此処まで言った瞬間、アルベドからドス黒い殺気が湧きあがる。いち早くそれを察知したセバスが、アルベドに近寄り囁く様な声で言葉をかけた。

「アルベド様、ビクトーリア様の優しさは、接する事でしか解りません。どうかこの場合は怒りを鎮めますよう……」

「ええ……解ったわ」

気付かれない様に深呼吸を二度ほど繰り返して、アルベドは落ち着きを取り戻して行った。

セバス同様にアルベドの変化に気付いた者達——ユリとペストーニヤ——は、ほっと胸を撫で下ろす。

「デミウルゴス、勿体付けるのもいいけれど、皆忙しいの、早く本題を話しては貰えないか

しら」

アルベドの言葉には、若干の毒が含まれる。

「そうだねアルベド。今は、あの化け物の話をしている場合では無かったね」

そして、返すデミウルゴスの言葉も毒を含んだ物だった。

そんな二人のやり取りを見守る他のNPC達の心情は如何なる物なのか。ウンザリする者、呆れ返る者、恐怖に震える者、その行動は各人のレベルによつて様々な物だった。

「まったく、二人とも何を遊んでいんす。早く話を始めるであります！」

「ホントだよ、二人とも。シャルティアに言われる様じゃ……」

「なにおう！ このチビ！」

「ホントの事じゃん！」

御互いをけん制する様な、アルベドとデミウルゴスに感化されたのか、シャルティアとアウラまでもがじゃれ合いを開始する。

デミウルゴスはこの光景を楽しむ様に、暫しの間眺めていたが、ようやくと言った感じで本題の話を再開した。

「あの夜、その偉大なるお姿を煌く星々に映しながらアインズ様は仰いました。世界征服なんて良いかもな、と」

デミウルゴスのこの言葉に、場が一気にどよめき、世界征服と言う言葉を口にする。だが、全ての僕が同じ感情かと言うと、少々違いが生じている。ある者は歓喜の声で、ある者は戸惑いの声で、またある者は良く解らないと言う声で。しかし、どの感情も一つの答えへと集約されて行く。

“それが主の望みとあらば”

こうして、ナザリツク地下大墳墓の異世界での第一目標は、この世界の征服となった。そして、この計画の前段階として、情報収集に出発するセバス達に幾つかの追加事項が言い渡される。

デミウルゴスが嬉々として指示を出す中、近くで嘲笑とも取れる声が響く。その声の正体は……アルベドだ。

「ふふつ、知謀の将デミウルゴスともあろう者が今更ね」

「何が言いたいのです、アルベド」

「いえ、言いたい事は無いわ」

「そうは思えませんが？」

再び二人の視線に火花が走る。

一体何がここまでアルベドを刺激するのだろうか？ほとんどの僕達は気付けなかったが、セバス、ユリ、ペストーニヤの三名にはありありと理解出来た。デミウルゴスの化け物呼びである。

「アルベド、腹を割って話そうじゃありませんか？」

「そう。では言わせてもらおうわ。あなたが今、セバスに言った調査条項、ビクトーリア様はすでに行っているわよ」

「ー」

デミウルゴスは言葉が出なかった。

「それに、スレイン法国と言う蛮族の国を手中にして周辺国家の調査もしているわ。あー、そうそう、この世界でプレイヤーと呼ばれるアインズ様達と同種の存在の有無も探っていらしたわね」

ほほほー、と嘘くさい笑い声をアルベドは上げる。が、一瞬の後表情を引き締め、守護者統括としての命をデミウルゴスに告げる。

「デミウルゴス、これは守護者統括としての命です。計画の開始に当たり、これより随時草案をビクトーリア様に開示なさい」

「な、なんですと！ 我らがナザリック、そしてアインズ様の為の計画を、いちいちあの化け物に許可を取れと言うのですか！」

「ええ、そうよ」

「あなたは一体何を考えているのです」

「全てを考えての言葉よ」

「それで何故あの化け物が出て来るのです」

「それはすでにあなたが言っているわ」

デミウルゴスは訳が解らなかつた。アルベドがビクトーリアに心頭しているのは解る。だが、何故それが許可を取る事に繋がるのか。

しかしアルベドは、デミウルゴスの混乱など知る物かと言葉を続ける。

「デミウルゴス。あなたの計画の万に一つの間違いがナザリックを滅ぼすと覚えなさい」

「私の間違いがナザリックを滅ぼすですと？ 至高の御方々が作り上げられたこのナザ

リックを、一体誰が滅ぼせると言うのですかな、守護者統括殿」

そう言つて、あざけ笑う様な表情をデミウルゴスは浮かべる。

「そんな事も解らないのかしら？ 知謀の将とは名前だけなのかしら？」

この挑発とも取れる言葉に、デミウルゴスの感情が爆発する。

「だから一体誰だと言うのです！」

「ビクトーリア様よ」

「なっ！」

「ビクトーリア様は、至高の御方々がその命を捧げ、アインズ様とこのナザリックを託した御方。そして、至高の御方々が神と崇めた御方よ。しかし、ビクトーリア様は至高の御方々とは別の存在。今、あの御方が私達を見守って下さっているのは、その慈悲の心からのみ。我らの行動の何らかが、ビクトーリア様の意にそぐわねば、あの御方は対立し、その力は私達、ひいてはアインズ様に向くわ。それでもあなたはビクトーリア様を無下にするのかしら？ それとも、ビクトーリア様を止める力をあなたが持っているんですか？」

デミウルゴスは言葉を失う。

ビクトーリアを葬る事が出来る可能性のある者は、このナザリックには確かに存在する。だが、それはデミウルゴスの独断で使用出来る物では無い。仮に使用出来たとしても、アインズはそれをビクトーリアに向けるのを良しとするだろうか？

そして、最も注意しなければならない事柄が、ビクトーリアのスペックである。一体、どれほどの強さなのだろうか？ 一体、どんな戦い方をするのだろうか？

デミウルゴスにとって、ビクトーリアと言う存在は未知すぎた。

だからこそ、最善の手を取る事は出来ない。

残る道は一度折れ、アルベドの指示に従う事だった。

王の恐怖

今日も今日とて、守護者統括アルベド、またの名を色欲の通い妻は星青の館を訪れる。

その地位に見合った優雅な歩みで地面を踏みしめる様は、流石はナザリックNPCの頂点に立つ者と見て取れた。だが、視線を小さな所に向ければ、それが建て前だとたやすく見抜く事が出来る。黄金の瞳はトロリと濡れ、白磁の頬は薄つすらと桜色に染まる。そして、異形を形作る腰から生える漆黒の翼は、ピクピクと小刻みに揺れていた。

つまりは、いつも通り発情中で、サキユバスとしての彼女にとつては平常運転中であり、結果ベストコンディションなのである。

正面扉を躊躇無く開け、いつも通りに書斎へと足を向ける。扉の前に立ち、今日こそはと期待を胸にノックをしようと右手を上げた瞬間、室内からカラカラと言う笑い声が漏れだして来た。

一体何が？ そう思いながら、そつと音を立てない様にドアを開く。

アルベドの瞳に映る物は、いつも通りに執務机で書類を整理するピクトーリアの姿。だが、唯一の違いは、いつもは真面目な表情のピクトーリアが、さも楽しそうに笑顔を浮かべている事だ。

室内には、番外席次の姿は見えず、ビクトーリア唯一人。それでも彼女は愉快に笑っていた。

「あの、ビッチ様？」

アルベドはおっかなびっくり声をかけてみる。

「ん？ ああ、おはようアルベド」

返つて来たビクトーリアの返事は、普通の物だった。

「ビッチ様、今日は随分と御機嫌なのですな」

「そうかな？ いや、面白い報告書が届いてね」

そう言つて一枚の羊皮紙をひらひらと振つて見せる。

その瞬間、アルベドの明晰な頭脳は正解を弾き出す。羊皮紙を見ると言う目的を出汁に、その妖艶な肢体をべったりと密着する様にビクトーリアへとしな垂れかける。

「アルベド、近くない？」

「それで御座いますでしょうか？」

そう言つてアルベドは、さらに体を密着させる。

これは最早、擦りつけると言つた方が正解だ。アルベドとビクトーリア、二人の豊かな、計四つの乳房がぐにぐにと形を変えて行く。

「ア、アルベド？」

「はあい」

「何、やってるの？」

「愛の儀式で御座います」

「儀……式？」

「はあい。新たな生命誕生のセレモニーですわ」

そう言つてアルベドは、ビクトーリアの鎖骨辺りに舌を這わせる。

ビクトーリアの身体を恐怖と寒気と快楽が襲う。

最早、ビクトーリアは強者では無く、捕食者に狩られる草食動物たる存在となり下がっていた。

アルベドはビクトーリアに顔を寄せると、囁く様に

「大丈夫で御座いますわ、ビクトーリア様。天井のシミを数えている間に終わりますわ」
アルベドはそう言うが、どう考えてもそれでは終わらないと感じるビクトーリアだった。

口から発せられるハアアハアアと言う桃色吐息は、徐々に荒くなり、ちろりちろりと鎖骨を這っていた唾液で艶やかに濡れた舌は、徐々に上へと這い上がって行く。首筋を通り、頬を舐め上げ、ビクトーリアの黄金の髪に隠された耳へと到着する。耳たぶを、内耳をぴちやりぴちやりと舐めする。

その音はビクトーリアを染め上げる様に響き、最早成すすべは無く快樂の淵へと引き込んで行く。

そしてアルベドは、耳たぶを甘噛みしながら次の言葉をビクトーリアに囁く。

「ビツチ様、ビツチ様は先日私に贈り物を下さると仰いました」

「う、うん。そう……だね」

「では、本日頂きたいと思えますわ」

「へ？ な、何を。まだ、何もよ、用意してない、けど」

アルベドの眩きに、ビクトーリアは途切れ途切れに言葉を返す。が、アルベドはそうでは無いと言い切る様に次の言葉を口にする。

「いいえ、それはすでに有りますわ」

「な、なにかな？」

「ビツチ様の、いえ、ビクトーリア様の……子種をちょうだい致したいと」

「え？」

「子種、ですわ」

子種、つまりアルベドは、これからアレをアレしてアレをする、と言う事だ。

ビクトーリアにだって性欲、と言う物はある。そして、その相手がアルベドの様な絶世の美女ならば言う事は無い。

だが、なぜ彼女は此処まで自分に愛を注いでくれるのだろうか？自分はギルド アイ
ンズ ウール ゴウンのメンバーでは無い、そして彼女の造物主でも無い。一体何が此
処まで彼女を走らせるのだろうか。一度モモンガに確認を取る必要があるな、とビク
トリアは流され行く意識の中で思い至る。

最早これまで。アルベドの細く、白い指がビクトリアのドレスに掛かり、左手は裾
を這い上がり、艶やかな太ももを撫でる。後少し、後少しで捕食者アルベドは獲物を獲
る事が出来る。もう少しでアルベドの指が、ビクトリアの敏感な部分に到着する。も
うほんの僅か、その瞬間、救世主が現れた。

「何していません」

背後から聞こえた声に、アルベドはゆっくりとその方向へと首を向ける。

「あらシャルティア。何の用かしら？」

「何の用とは心外であります。わらわは、守護者統括様から頼まれた物を持って来た
であります。」

「そう。苦勞様。早く置いて行きなさい。私達は忙しいのよ」

「はあ？ 何を言っているんです。種族だけでなく頭の中まで桃色満開になったであります
か？ お姉さまとどうなるかが知った事では無いであります。今、ナザリックは火急
の事態であります。そう言う事は後にしんないし」

「!!」

シャルティアの言葉にアルベドは、いや、意識朦朧としていたビクトーリアですら驚愕で言葉を失う。

そして、二人が、異口同音に口を開いた。

「シャルティアが真面目な言葉を話してる!」

「……………し、失礼であります! わたしだってマジメな事ぐらい言えるであります! あ・り・ん・す!」

「そ、そうね。ごめんなさい」

「そうじゃよなあ。ああ見えてペロロンさん、根は真面目な人だし。今もエロゲやってんのかのう」

アルベドは素直に謝罪の意を告げ、ビクトーリアは感慨深く呟いた。だが、そのビクトーリアの言葉にシャルティアが食いつく。

「待ちなんし! お姉さまは今、何と言ったでありますか!」

「へ?」

ビクトーリアは間拔けな声を挙げる。内心は舌打ちと共に、自身の失態を悔みながら。どう言い繕うか、ビクトーリアは必死で、そのとろけ切った頭を回転させる。

だが、ビクトーリアが言葉を発する前に、アルベドの口が開く。

「そうよシャルティア。ペロロンチーノ様は生きていらっしやるわ」
「は、ほんとなの……」

郭言葉も忘れて、シャルティアは言葉を返す。

「ええ。そうですわね、ビクトーリア様？」

ビクトーリアの立場を、少しでも良い物にする為に、アルベドは爆弾に火を付ける。

だが、これはビクトーリアにとつては窮地以外の物では無かった。一体何と言つて説明すれば良いのか。必死でアインズが語つた新入社員面接の事柄を思い出す。

「ふう。そうじゃな、生きておるよ、ペロロンチーノは。他の者達も含めてな」

やっと、と言う感じでビクトーリアは言葉を絞り出す。

「で、では何故ペロロンチーノ様はこの地にお戻りになりんせんのでありんすか！」

シャルティアはビクトーリアへと言葉をぶつける。

これは疑問では無く、慟哭だった。

ビクトーリアはゆっくりと、静かに言葉を選ぶ。

「シャルティア・ブラッドフォールンよ。うぬはSHAINと言う言葉を聞いた事があるか？」

この問いに、暫しの沈黙を挟みながら

「確か……ちびすけ、いえ、第六階層守護者アウラから聞いた事がありんす。何でもお姉

さまが封じられていた結界、とか？」

「そうじゃ。じゃが、それは光の神の表側の目論見に過ぎん」

ビクトーリアの口から出た言葉に、シャルティアの表情がひきつるのが見えた。

「光の神の裏、真の目的は……妾を復活させようと暗躍していた異形の者、つまりはギルド アインズ ウール ゴウンの者達の抹殺。その為の餌が封印結界SHAIN」

ビクトーリアは此処まで語ると、一度口を閉ざす。

（しかしモモンガさん、幾らネーミングセンスが無いと言っても、SHAIN、社員は無いでしょうに）

「じゃが、知恵高き者達は、神の目論見を見破り、自らが結界の内側へと封印される事を選んだ」

「で、ですがお姉さま。封印されても身の危険は有るのではありんせんか？」

「いや、それは無い。封印先は別の世界。そこはそこを司る神の手の中、妾を封じた神には手を出せぬ場所じゃ」

ビクトーリアの補足で、シャルティアはほっと息をついた。

「そして妾は蘇り、モモンガさん、今はアインズじやったな、と共に光の神への対策を講じるはずじゃった」

「はず、でありんすか？」

「そう。じゃが、力が集まるのを恐れた光の神は、世界を破壊し妾達と他の者の分裂を図ったのじゃ」

此処までの説明を聞き、シャルティアは表情を引き締め

「それならば、何故お姉さまは血肉を食らったなどと言いんしたえ？」

「妾の為にその命を賭したのは事実じゃからな。それに、うぬらを神との戦に巻き込む訳にはいかんじやろう。彼らが愛し、創造した愛しき子らを」

この言葉がきつかけになったのか、シャルティアは崩れ落ち、涙を流す。

アルベドはビクトーリアから離れると、シャルティアの背後に回り、その肩に手を置いた。そして、慰める様に言葉をかける。

「シャルティア、あなたの悲しみは良く解るわ。でも、真実を語られ無かったのは、ビクトーリア様の優しさゆえ。私達僕を悲しませたく無かったからよ。私達を絶望させるより、御自分が憎まれる事で真実を覆い隠されたの。これも単に、ビクトーリア様が私達を愛して下さっているから」

そう言うアルベドの言葉に、シャルティアは何度も頷きで返す。

その光景をつぶさに見つめるピクトーリアの瞳には、まるで悪徳企業のたちの悪い勧誘に見えて仕方がなかった。そして、真に恐ろしいのはアルベドだと確信するのだった。

暫く泣き続けたシャルティアだったが、ようやく涙も止まり、アルベド共々何度も頭を下げ館から帰って行った。

帰り際にアルベドが言った「続きはまた次回に」と言うセリフが気になったが、深く考えると迷宮に入り込みそうだった為、ピクトーリアは考えを放棄する。迷宮はナザリック地下大墳墓だけでお腹一杯だと。



星青の館からの帰り道、アルベドは気になっていた事柄をシャルティアに尋ねる。

「ねえ、シャルティア」

「何でありんすか、アルベド」

「あなた、何でビクトーリア様の事、お姉さまって言うの？」

この問いかけに、シャルティアは一瞬キョトンとすると

「さあ、何でありんしょうか。知りません。ひよつとすると、ペロロンチーノ様が、そう御造りになったのかも知りませんえ」

闇夜の独白

「おおさま、おつはよー!」

朝早くから、星青の館に響く声。

その正体は、元気を持って余した少女、番外席次 絶死絶命。ビクトーリアの寝室のドアを勢い良く開け放ち、声を轟かせる。

「何じゃ小娘。朝早ようから騒がしい」

方やビクトーリアは、文句を言いながらベッドから身体を起こす。

ゆつたりとしたTシャツの様なパジャマは、肩部がずり落ち、その豊かな双丸の大部分が外気にさらされていた。そして、寝癖の付いたぼさぼさの髪を右手で掻きながら

「……小娘、服を脱ごうとするでない。子作りならば五十年は我慢せえ」

「ひつどーい! ぶー」

番外席次はそう言つて頬を膨らませると、子供の様にブーイングを飛ばす。

「まったく、子供かや。それで小娘、朝ごはんは?」

「アルベド様が用意してる。………決戦装備とかで」

「アルベド? ユリじゃなくて?」

「そう」

ここ星青の館の家事は、基本ユリかメイド長のペストーニヤが行っている。理由は、彼女達二人がナザリックに置いて数少ない家事スキル持ちのNPCだからである。だが、あまり知られてはいないが、アルベドもその類のスキル持ちなのであった。

まだ眠気の残る頭を抱えながら、ビクトーリアはもそもそと起き上がり、着替えもせずに食堂へと足を向ける。

ほりほりとだらしなく尻を搔きながら。

ふらふらとした足取りで、食堂にたどり着いたビクトーリアの眼に映った物は、決戦装備を身に付けたアルベドだ。いや、こう言い変えた方がいいだろう。決戦装備のみを身に付けたアルベド、と。

「ビッチ様、おはようございます」

「うん、おはよう。そんでね……………その恰好は、なに？」

「……………裸エプロンでございませうが？」

「うん、そうだね。とつても魅力的だけど、取り合えず服、着ようね」

「いやですわ」

溜息を一つ吐くと、最早ツツコム気力も出ないと言う感じで、ビクトーリアは自分の席へと着席する。

すると、すかさずアルベドが朝食をビクトーリアの前へと差し出す。

メニューは卵二つの目玉焼きに、ソーセージが二本。たつぷりな新鮮サラダと、バスケットに入ったバケットがテーブル中央に鎮座する。そして、飲み物はオレンジジュース。

ビクトーリアが着席した後すぐに番外席次も到着し、JK風少女、だらしのない金髪女性、裸エプロンの妖艶な女性と言う訳のわからないメンツ三人でのささやかな朝食会が始まった。

カチャカチャとナイフとフォークが奏でる小さな音の中で、ビクトーリアが不意に話し始める。

「アルベドよ、ちいと頼みがあるのじゃが」

「はい。何で御座いますでしょうか？」

「うむ。妾は本日此処を留守にするゆえ。偽装工作を頼みたいのじゃが」

「留守、で御座いますか？ 一体どこへ向かわれるのでしょうか？」

「あそこじゃよ。先日妾とモモンガさんが向かった村。カルネ村、じゃったかのう」

そう言つてビクトーリアは椅子に深く腰掛け、足を組むと、手に持ったフォークを遊ばせる。

ビクトーリアの気楽な態度とは裏腹に、アルベドはその表情を曇らせ

「ビツチ様……………帰っていらっしやいますわよね」
そう呟く。

そこには、悲しみ、怖れ、様々な感情が混じっていた。

だが、当のビクトーリアはお気楽な物で

「当たり前であろう。言つては何じゃが妾は一文なしじゃぞ。小娘と二人で、どう生きて行けと言うのじゃ」

そう言つてカラカラと笑う。

だが、アルベドにはこれが嘘だと言いきれる。なぜなら、あのスレイン法国と言う場所に転がりこむと言う選択肢もビクトーリアにはあるからだつた。先程の言葉は、自分を悲しませない為に発せられた言葉なのだ。アルベドは確信していた。

「では、ビツチ様。何を為さりにあの村へ？」

「まあ、小娘に外を見せてやる、と言うのも目的の一つなのじゃが……」

「じゃが？ で御座いますか？」

「妾個人としては、村を作つてみようかな、と思つてな」

「村を作る？」

アルベドと絶死絶命は同時に驚きの声を挙げる。

この人は一体何を考えているのだろうか。

あまりにもな二人の驚きと声の大きさにたじろいだビクトーリアは、両掌を振りながら慌てて説明を開始する。

「いや、あのね、作ると言ってもそんな大げさな物ではないぞ！ 治水管理とか、農地の改良とか、道の整備とか、産業の構築とか、その程度じゃぞ！ あ、後はそうじやな、村の防衛プラン、とか？」

ビクトーリアの言葉に、アルベドも絶死絶命も言葉が出なかつた。

自分達の考えが間違っている事に気付かされた為である。ビクトーリアは、何を考えているのか解らない人物では無かつた。どこまで考えているか解らない人物なのだ。

アルベドは、暫しの間考えを巡らせるが、村の発展が今後のナザリツク支配のテストケースの可能性を加味して了解の意を告げる。ただし、護衛を一人付ける事を条件に。



夜の帳の中、パチパチと細かな火の粉が上がる。

大地を包む暗闇の中、焚火の灯りだけが生を感じさせていた。

その灯火を中心に、六人の男性と、紅一点、一人の女性が輪になって座りながら一日を振り返っていた。

「すごかったですねモモンさん。あのオーガを人喰い大鬼一撃で仕留めるなんて」

尊敬と敬意を持って話すのは、ペテル・モーク。

短く刈り込んだ短髪と、人が良さそうな風貌をし、バンデット帯・アーマー鎧を着込んだ戦士風の男だ。

「うむ。それも一刀両断とは、怖れいるのである」

次に言葉を発したのは、恰幅の良い男で名はダイン・ウツドワンダー。クラスは森司祭ドルイド。

「いやいや、それよりもナーベちゃんの魔法も凄かった」

そう言うのは、レンジャー野伏であるルクルット・ボルブ。

髪を肩辺りまで伸ばし、一見すると非常に軽薄にも見える。技能は優秀ではあるのだが、女癖が悪いのが短所、そんな人物だ。

「いえ。どちらも凄いですよ。モモンさんの力もナーベさんの魔法も。あれは常人では届かないレベルです」

最大の賛辞を贈るのは、ニニヤ。二つ名はスペルキャスター術師で、クラスはマジックキャスター魔法詠唱者。

短髪の髪形でなければ、少女と見紛う幼い顔立ちの人物で、今いる人物の中では最年少と思われる。

余談だが、本当に最年少なのは、恐らくはナーベであろうが、外見的、見た目的には彼が最年少だろう。

以上の四名が、チーム漆黒の剣、冒険者チームのメンバーである。

そのチーム漆黒の剣に加え、薬師のンファイレア・バレアレと、戦士モモン、魔法詠唱者のナーベが今、息吹を感じさせる者、全員である。

まずは、何故彼らが此処に、この平原に居るのかを語らねばならないだろう。

時は一日程遡る。

モモンとナーベは冒険の第一歩を踏み出す為、冒険者組合を訪れる。様々な依頼書が張り付けられた壁面のボードを眺めるが、モモン、いや、アインズが期待する様な依頼は皆無であった。貴族連中の護衛、近場に出没するモンスターの討伐など、実に夢が無くアインズにとっては退屈な仕事しかなかった。

YGGDRASIL時代の様な冒険を期待していたアインズにとって、まさにはずれを引いた、と言う気分一杯になる。その虚しさからアインズはビクトリアに向けメッセージを送った。ただ、普通のメッセージの魔法、お互いがリアルタイムで話すタ

イブでは無く、タイプ・メツセージ文
字
伝
言と呼ばれる方の。

タイプ・メツセージと言う魔法、と言うよりはYGGDRASILに置ける機能、と言った方が適切な物である。メツセージがリアルタイムで話す電話や無線に例えるなら、タイプ・メツセージはFAXに例えられる物だ。

ゲーム内で岩や棺などに刻まれた古代文字や謎掛け文、それをスクリーンショットの様
様に記録する為の魔法である。では、何故スクリーンショットでは行けないのか。それは容量の問題である。

タイプ・メツセージのデータ量は文字のみの為、スクリーンショットの百分の一以下の容量で保存出来る。ビクトリアの様な、探究、情報などを多く扱っていたプレイヤーが好んで使っていた物だ。

話がそれだが、夢破ればーぜんと立ち尽くしていたアインズに声をかけたのが、チーム漆黒の剣。

アインズは細かな説明を聞いた後、彼らの仕事に付き合う事に合意する。そして、出発しようとした時、まさにその時にアインズ、いや、モモンへ指名の依頼が来ていると冒険者組合の受付嬢から告げられる。

その依頼人がンファイア・バレアレであった。

依頼内容は葉草採取の護衛と言う事だったが、先日の赤いポーションの件があるため、モモンは漆黒の剣のメンバーを巻き込む事にした。

街を出て、しばらくしてオーガなどのモンスターを撃退し、一日の終りとしての夕食とキャンプ、それが現在の彼らである。

「そう言えば、皆さんは何故漆黒の剣と言うチーム名を？」

皆が思い思いに話す中、じつと黙ってばかりでは浮いてしまうと考え、モモンは当たり障りの無い質問を振って見る。その問いに、漆黒の剣の面々は懐から黒い短剣を取り出す。

「俺達はさ、昔、遙か昔に存在したと言う黒騎士が持っていた伝説の剣を探しているんですよ」

「ほう。」

メンバーを代表してリーダーであるペテルがそう答えた。

伝説の剣、と聞いてアイテムコレクターであるモモンは興味を引かれた。

「それがどこにあるかも解らない。でも、それを探す事が俺達の目標。だから、チームの名前も最終目標の漆黒の剣、にした訳。まあ、見つかるまでは、これが俺達にとつての漆黒の剣なんだよね」

そう言つてペテルは手に持つ短剣を見つめる。視野を広げてみると、他のメンバーも同様の表情を浮かべていた。

そんなしつとりとした雰囲気の中でもルクルットは、ニニヤにちよつかいを掛けるなご場の空気を暖めていた。ルクルットは、このメンバー内でのムードメーカーなのであろうとモモンは感じ取る。

「仲がよろしいのですね。冒険者とはそういう物なのでしょうか？」

かつてのギルドメンバーを、彼らに投影しながらモモンは問いかける。

だが、返事は曖昧なものだった。そう言うチームもいれば、ビジネスライクなチームもいると。

だが、一つだけ気になったのはルクルットが言った言葉。

「男ばかりだからな、女がいたらこうは行かない」

この言葉を聞いた時のニニヤの表情だ。モモン、いや、アインズにはその表情に覚えがあった。嘘を吐いている者の表情だ。そして、それを申し訳無く思っている者の。

モモンは、ニニヤと言う少年に少し興味を覚える。

そんな中、自分の表情を和らげ様とニニヤが口を開く。

「モモンさんは……えっと、ナーベさん以外とチームを組む気はないんですか？」

単純な質問だった。

悪気の無い問いかけだった。

だが、アインズにはこう聞こえてしまった。

【モモンガさんは、以前の仲間を忘れて新しい仲間を作らないのですか？】

「組みませんよ！」

大きな声だった。

怒りを含んだ声だ。

「す、すみません」

ニニヤはすぐに謝って来た。だが、アインズは理解していた。今のは、八つ当たりだと。

「いえ、私の方こそ」

アインズもすぐに謝罪の言葉を口にする。

そして、その罪悪感からか、ぼつりぼつりと心情を語る。

「仲間は、私の仲間達との距離は、今はとても遠き物です。私の仲間は彼らであって、彼らだけなのですよ」

この独白とも言える言葉に、全員が沈黙で答える。

誰も茶化す事など出来ない程の重みが、その言葉にはあった。

「ですが、そんな私の為に友がそばに居てくれました。私の弱さも、私の醜さも、全てを受け入れ笑い飛ばしてくれる友が」

「モモンさん。その方は仲間、なのでは？」

根源の疑問をインフィーレアが口にする。

「そうですね。一緒に冒険をして、長い時間を二人で過ごしましたが、仲間、と言う感じでは無かったですね。彼女を例えるならば、やはり友、ですね。……………彼女が居なかつたら……………私は、世界の敵になつたかもしれません」

王と戦士

エンリ・エモットの朝は早い。

早朝から井戸での水汲み、妹の世話、朝食作り、洗濯、そして畑仕事。

村での生活と言うのは、そう言う物なのだが、彼女の場合は少し違う。それは、両親の不在だ。先日起こったとある事件によつて、彼女の両親は死亡している。

つまり、エモット家の全ては、まだ年若い彼女の肩にかかっていると言う事だ。

もちろん、他の村人達は色々と助けては貰っている。事件以降、妹は良い子になった。だが、それがエンリに事件を思い起こさせる。

あの夜の出来事を。

エンリは、家の前にある、椅子変わりの切り株に腰掛け深い溜息を吐いた。何故、こ
うなつたのだらうと。必死で自分の中からわき出る、黒い何かと戦いながら。

「若い娘が朝つばらからため息とは。幸せが逃げていくぞ」

突然声が聞こえた。

それに驚きエンリはとつさに目を開ける。

「きゃあああああー！」

絶叫が響く。一体エンリは何を見たのか？エンリの眼前には……生首が浮いていた。そして、悲鳴に呼応するように

「朝から乙女のスクリーム？」

生首がもう一つ増える。

「うにゃああああああ！」

二度目の絶叫に、生首の一つがため息を吐きながら、呆れた様に口を開く。

「これエンリよ、何を驚いておるのじゃ。妾じゃ。わ・ら・わ」

「はい？」

虚を突かれた様に返事を返すエンリだが、よくよく見れば生首の一つは見知った顔だった。

「ビクトーリア様？」

この言葉に、首だけビクトーリアはうんうんと頷き、漆黒の闇からゆっくりと姿を現す。続いてもう一人、見た事も無い衣装の少女も出てきたが、エンリは知らない人物だった。

エンリの前に立つビクトーリアは、何かを思い出した様に、まだ残る漆黒に顔を入れると

「手間をかけたのうオーレオールよ。礼をいうぞ」

と、闇の向うの誰かに言葉をかける。

その後、それを受ける様に

「いいえ、御気になさらずにビクトーリア様。再びお会い出来てしあわせです」

鈴の音の様な声が答えた。

そして、闇は消滅する。

「ひさかたぶりじゃのうエンリ・エモット。息災であつたかや？」

「は、はい！ 元気でやっています」

エンリは健気にもそう伝える。

だが、ビクトーリアは再度ため息を吐き、エンリの頭に手を置くと

「嘘を吐くではないわ。身体は元気でまごころは辛かろう」

そう言つて、空いた右手でエンリの慎ましい左胸をつつく。凶星であつたのだろうか、

エンリは顔を伏せると黙り込んだ。重い空気が場を支配する。凶星を付いたビクトー

リアもどうした物かと判断に困る。ハッキリ言つて、ビクトーリアは年頃の少女を慰め

た経験など一切無かつたからだ。

どうしよう、ビクトーリアの身体を嫌な汗が流れる。泣くかな？ 泣いた少女にはどう

対応すればいいのか。隣にいる番外席次は、絶対に当てには出来ないと解っている。

ビクトーリアは神に祈つた。誰でもいいから助けて、と。その時、背後から足音が聞

こえた。タン、タン、と足早に。その音は、歩幅が狭く、体重の軽い者の足音だ。そして、その足音の者の声が響く。

「あー、ビッチのお姉ちゃんだ!」

この言葉で、エンリがぶっ! と噴き出す様に笑う。それと同時に、重い空気は消えていた。

声の主はネム・エモット。エンリの妹だ。

ビクトーリアは、走り寄って来たネムを思いつきり抱きしめる。あの夜の様に。今のビクトーリアにとって、ネムは天使であり、救いの神なのだ。

「あ、あの、ビクトーリア様。今日は一体何用で?」

エンリが遠慮がちに問いかける。それもそうだと、ビクトーリアが来訪の理由を語るうとした時、近くに暗闇が広がった。

そこから現れたのは、すらりとした長身に、優雅にたなびくメイド服のスカート、そして、きつちりと結び上げられた夜会巻き風の髪形に細い眼鏡を掛けた美人女性。絵にかいた様な出来る女を体現する者。

プレアデス長姉にして副リーダー、ユリ・アルファ。

ユリはビクトーリアに向け一礼すると

「ビクトーリア様、何故御一人でお出かけになられたのですか?」

底冷えする様な声だった。

「え？ 小娘もおるのじやが……」

「関係ありません！ アルベド様と、必ず護衛をつけると言う約束をなされたのでは？」

そう言つて、右手で眼鏡を直す仕草をする。

ビクトーリアの眼に映る者は、最早ユリでは無かった。此の気迫は、此のgori押し具合は、ギルド アインズ ウール ゴウンの脳筋教師、やまいこの姿だった。こうなつてしまつたら、取れる手段は数少ない。謝罪の言葉を口にするか、丁寧な腰を折り素直に謝るか、土下座をして許しを乞う事である。

「ごめんね。テヘッ」

茶目つけたつぷりに謝つてみる。

その瞬間、ユリの背後からドス黒い何か吹き出した様に見えた。すかさずビクトーリアは腰を折り

「ごめんなさい！ もうしません！ 反省しています！」

正しく謝罪を口にする。

その時、下を向いたビクトーリアの視線に、黒い影が映る。誰かが自分の前に立つた様だ。

「ビッチのお姉ちゃんをいじめちゃダメ！」

どうやらネムの様だ。

「あら」

この行動に、ユリも驚きの声を上げた。

そして、ビクトーリアも、姉であるエンリも驚きを顔にする。

この小さな少女は、ビクトーリアを守るために一步を踏み出したのだ。

あの夜、姉に抱かれて震えている事しか出来なかつた幼子が、今は誰かを守ろうと立ち上がっている。強くならうと必死に頑張っている。

それが強く解り、ビクトーリアは再度ネムを抱きしめる。だが、その表情は誇らしげな物では無かつた。唇を強く噛み締め、必死に何かの感情を抑えていた。その感情は、悲しみだ。

この小さな勇者は強くなろうとしている。だが、本来ならばそんな必要は無かつたのだ。父と母に守られ、優しい姉と共に過ごしていたはずの幼子だ。そんな思いと共に、ビクトーリアは確かに気付く、守る物が増えたのだと。

ネムの決意を目の当たりにしたユリは、厳しい表情を緩め

「大丈夫よ。ビクトーリア様はお謝まりになられました。ですからもう怒ってはいませぬよ。ね、ビクトーリア様」

そう、語りかける。

「そうじゃ。悪き事をすれば、必ず報いがある。じゃから妾は叱られた。礼を言うぞネム。そなたは強き子じゃ」

ビクトーリアがそう言うと、ネムは恥ずかしそうに笑うのだった。

ユリのお叱りも一段落し、ビクトーリアは本題へと話を進める。

「エンリよ、妾はこの村の防衛プランを立ててみたのじゃが、乗る気は有るかや？」

「防衛プラン、ですか？」

「そうじゃ」

ビクトーリアの言葉を聞いて、エンリだけで無く、ユリや番外席次も不思議そうな表情を浮かべる。

そしてエンリは、あの夜の様な悲しみを二度と起こさない為に、首を縦に振る。それはまるで、悪魔との契約の様だった。

ビクトーリアは虚空からアイテムを取り出し、エンリへと手渡す。それは古びた小さな角笛、ゴ布林將軍の角笛と呼ばれるマジックアイテムだ。

頤をクイツと煽り、エンリに吹く様に促す。恐る恐る口元に近づけ、笛に息を吹き込む。ボー、と言う不細工な音が奏でられる。そして、それと呼応するように、森からガサガサと言う音が聞こえた。

その後、森からそれは姿を現す。合計一九体のゴ布林。内訳は、兵士十二体、メイ

ジ一体、クレリック一体、アーチャー二体、ライダー二体、そして部隊を統治するリーダーが一体。

その者らはゆつくりとした足取りでこちらとの距離を詰めてくる。

そして、エンリの前まで来ると、片膝を付き

「ゴブリン軍団総勢十九、主の召喚に答え此処に参上致しやした」

最後の訛りが少々残念だが、しっかりとした意志でエンリへの忠誠を誓う。

ビクトーリアは、無事召喚が成功した事に満足し、隣に目を向ける。そこには、羨ましそうな瞳で姉を見るネムが居た。

「なんじゃ、ネムも部下が欲しいのかや？」

そう聞かれ、ネムは恥ずかしそうに小さく頷く。

一度空を見上げ、何やら考え込んだ後、ビクトーリアは虚空から一枚のスクロールを取り出しネムへと渡す。「これは？」と言うネムに、「投げてみよ」と言うビクトーリア。ネムは言われた通りにスクロールを正面に投げ捨てる。放物線を描くスクロールが地面と接触した瞬間、青味がかかった魔方陣が出現し、そこから何かが浮き上がる様に見える。

「ぷむ」

空気の抜ける様な鳴き声と共に姿を現した物、それは見事な鬣を持った子ブタだっ

た。

登場した奇妙な生物は、場の全員の目を釘付けにする。

愛らしいと言えば愛らしいのだが、見た目的にはやはり、ふさふさの鬣を持ったうり坊なのだ。

「ねえ、ビッチのお姉ちゃん。この子、なに？」

「うん、これかや？ これはのう、ぬえじや」

「ぬえ？」

全員の声が重なった。

「うむ。カテゴリー的にはペットモンスターじゃな」

くペットモンスターく

YGGDRASIL内で、モンスターを使役、もしくはペット感覚で所持をしようと思えば、ビーストテイマーと言うクラスを取るしか方法は無い。ナザリックでは第六階層守護者のアウラがこれにあたる。

だが、すでに100Lvに達した、またはテイマーを取りたくないと言うプレイヤーから、モンスターを所持したいと言う意見が運営に挙げられた。これを考慮し精査した運営は、一つの方向性を見つける。

この意見を挙げていたプレイヤーのほとんどが、戦闘目的では無く愛玩目的でのモンスター所持を望んでいたのだ。

そして、アツプデート時に追加されたのがペットモンスター。

獣、鳥、魚、などを基本とするモンスターのみに構築されたこれは、通常YGGDRASIL内に居るモンスターと同じ名を持つが、上限Lvは元になったモンスターの三分の一までしか上がらず、名前もひらがな表記であり、姿も可愛い物へと変わっている。

此の仕様は癒しの効果が高く、ペットモンスター愛好家のみに構成されたギルドまであったほど。

育て方で模様が変わるなどの楽しみもあり、後期YGGDRASILでは爆発的に人気のあったアイテムである。

「今からネムがそ奴の親じゃ。可愛がってやってくれ」

ビクトーリアがそう言うと、ネムは満面の笑顔で頷きぬえを抱きしめる。抱かれたぬえも「プピピ」と鳴き声を上げ喜んでいる様に見える。

「ネムよ、ぬえとの散歩ついでに、この娘に村を案内してやってはくれぬか？」

そう言うとビクトーリアは、番外席次の背中を押す。この頼みをネムは二つ返事で引

き受け、あつという間に番外席次の腕を掴むと何所かへ消えて行つた。

その様子を優しく見つめていたビクトーリアだが、その表情を収め口を開く。

「ユリ、うぬは何故来たのじゃ。うぬは妾が憎くは無いのか?」

急にそう問いかけられ、ユリは少し戸惑うが

「さあ、どうでしょうか。僕はあなたを信用してはいませんから」

「そうじゃろうな」

「ええ。あなたは嘘を吐いていると思つていますから」

ユリの発した言葉にビクトーリアは驚きを隠せなかつた。

ユリはこう言っているのだ。

ビクトーリアは、至高の四十一人に対して何もしていないと。「そうか」と短く呟き、ビクトーリアはこの話に決着をつける。

その時、村の男衆の一人が冒険者の帰還を告げる。

ビクトーリアとユリには意味が解らなかつたが、すぐさまエンリが説明してくれた。自分の友達が、エ・ランテルの冒険者達と薬草採取に来てしていると。

村の入口まで迎えに行くと言うエンリに、興味を引かれたビクトーリア達は付き合う事にする。

村から見たその者達は、思つたよりも人数が多かつた。そして、その中には見知つた

顔もあつた。

冒険者達が近付いて来る中、その姿が大きく確認出来る程の距離まで来た時に異変は起こつた。ビクトーリアが冒険者達に背を向け、柵に寄りかかりながら震えだしたのだ。ユリもエンリも心配し声をかけるが、ビクトーリアは大丈夫と手を振るのみだつた。

村へ到着する冒険者達。

そのメンバーは、出て行つた時とは少し違つていた。人数が増えていたのだ。正確に言えば、増えたのは人では無い。白銀色をした体毛を持つ、人の身の丈を遙かに超えるモンスターが加わつていた。それは、カルネ村近くに広がるトブの大森林に生息する、森の賢王と呼ばれる存在だった。

冒険者達は、蹲り震えるビクトーリアを可愛そうな眼で見つめていた。森の賢王が、魔獣が恐ろしくて震えているのだろうか。

その中で一人、その魔獣にまたがついていた漆黒の鎧を着た者が、地に降りビクトーリアの背後に近づく。

冒険者達もエンリもこう思った。女性を気遣えるなんて、彼は何て優しいのだろうか。だが、男が発した言葉は真逆の物だった。

「笑えよ。笑いたいんだろ」

冷たい言葉だった。怒りさえ含んだ言葉だった。普通の者なら耐えられない程の重みのある言葉だった。

だが、言われた張本人は、鎧の男の姿を視界に納めると

「ぷっ。は、はは、あー、はっ、はっ、はっ！ く、くるしい、いたい、お、おなか、おなか、いたい。ふつきんが、ふつきんが、きれる、きれる！ ふる、ふるぷれーとのよろいをきた、か、かっこつけた、おっさんが、は、ハムスターにまたがってる！ い、いたい。おなか、いたい」

そう言ってお腹を抱えながら、大笑いしながら地面を転げ回る。

ビクトーリアのこの行動に、場の空気が凍りつく。

冒険者達はある。圧倒的な強さを持つ、戦士モモンに対してあの様な無礼な態度は死を意味しないかと。

エンリは思う。たった一人で、スレイン法国の者達を撃退した煉獄の王に手を出して、あの戦士は無事でいられるだろうか。

戦士モモンは、ビクトーリアのドレスを掴み、立ちあがらせると

「可笑しいか？ 可笑しいよな！」

先程よりも、さらに激しい言葉でビクトーリアに詰め寄る。

だがビクトーリアは、なおも笑いながら

「おかしい、だって、は、ハムスターじゃぞ。ハムスターに、だ、大の男がまたがつて、それ見て、笑うなって、言う方が、まち、まちがつて、ぷっ」

「そうだよな！ 可笑しいよな！ だけどもんな、カッコいいって言うんだよ！ ナーべですらー！」

「あ、あいんず、おまえが正しい。やつぱり笑える、から」

「そうだよな！ そうですよね！ ビッチさん！ 俺が正しいですよね！」

周りの心配を余所に、二人は意気投合した会話を繰り返す。

場の空気は、満場一致でほっとした物だ。

ただ一人、ビクトーリアが発したアインズと言う名前に気が付いたエンリ以外は。

それぞれ黄金

月光が優しく大地を照らし、生き物はその役割を変える。

夜鳥の声のみが響く空間を、一人の女性が鼻歌を奏でながら楽しげに歩いていた。人間の女性で、年齢は二十歳前後と思われる。

足並みは、まるでステツプを踏む様に軽く、それはダンスを踊っている様に見えた。

ただ、この女が歩く場所が、城塞都市エ・ランテルの一面にある墓地で無ければだ。

ボブカットの金髪はふわふわと揺れ、マントで隠された、瑞々しい贅肉の少ない引き締まった体は、それを包むビキニアーマーかと思えるほど面積の少ない革鎧に、幾つも括り付けられた金属プレートによって、カチャカチャとリズムを刻む。

その者は、墓地の最奥にある霊廟に到達すると、ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「ほーい、しよつと」

軽口のような、人を舐め切った様な甘い声色で呟くと、霊廟の岩扉を開け放つ。中からは、カビ臭い匂いが漂って来たが、ただそれだけだった。これの意味する物は、誰かが定期的にこの霊廟に出入りしている事を示していた。

女は、臆する事無く霊廟へと足を踏み入れる。

屋内には死者を安置する石台だけがあつた。その他の装飾は一切無く、がらんどろの空間が広がる。

女はゆつくりと石台へと歩を進めると、石台の下の方にある装飾へと手を伸ばす。そしてその装飾に手を這わせると、ゆつくりと力を込めていった。装飾は沈み込み、一瞬後にガコンと言う歯車がかみ合つた様な音を響かせる。その後、僅かに遅れてゴリゴリと石台が動き出した。

そこに現れたのは地下へと続く階段。

「はいるよー」

まるで、友達の家遊びに来た時の様な口調で言葉を投げかけ、女は階段を下つて行く。

女は気配を探り、周りに目を向ける。誰も居ない？ そう感じた瞬間、女の鋭敏な感覚は通路の奥の微かな音を捉えた。姿勢を低くし、腰に下げたステイレット刺殺武器を握る。そして、それと同時に地面を蹴つた。風、とでも表現すれば良いのだろうか、それほどに女の駆ける速度は速かつた。

一瞬の内に音の発生源との距離を詰め、ステイレットを喉元へと突き付ける。音の正体、それは黒いローブを纏つた若い男だつた。女は男には興味は無いと、一方的な質問を口にする。

「あのさー、カジツちゃん、いる？」

そう言われるが、男は冷汗を流し体が震えている為、答える事が出来ない。

「ふふっ。べつにさー、答えてくれなくてもいいんだよ。わたしはさあ……殺すのも大好きだから」

そう耳元で囁くとステイレットの先端に力を込めて行く。

喉元の皮膚が鋭角に陥没した瞬間、プツリ、と言う僅かな音を残して皮膚はその役目を終える。男の喉元からは、赤い体液が一筋流れ出す。さらに奥へ、ステイレットに力を込めようとした時

「止めんか」

奥から声が響く。

女は舌をペロリと出すと、茶目っ毛たつぷりに

「じょーだん、じょーだん。バイバイねー」

そう言つて男を解放し、奥を指して歩き出した。

霊廟の地下に創られた秘密部屋、その最奥にその男は居た。

名はカジツト・デイル・バダンテール。その体軀は、アンデッドを思わせる、痩せた、瘦せこけたと言つて良い物で、その骨の様な顔には一切の体毛が無かった。髪の毛も眉毛も髭も無く、唯一確認出来るのは、僅かに残つたまつ毛ぐらいだ。年齢は中年と言わ

れる程の者だが、その見た目により、何百年も生きて来たように見える。

「それで、何をしに来た、クインティアの片割れ」

「ぶー、ひどいなあ。デイルたん」

「デイルは止せ。すでに捨てた洗礼名だ。今さら六大神何ぞに興味は無い」

「ふふつ。ならこつちも名前前で呼んでほしいなあ。クレマンティーンって」

元漆黒聖典 第九席次 疾風走破 クレマンティーン・クインティア。

「ふん、それで何をしに来た」

「ひどいなー。同郷の友達に会いに来たんじゃない。あ、これお土産ね」

そう言つて右手にぶら下げた物を差し出す。それは、非常に細い鎖の様な物だった。

だが、それを見たカジットの表情は、一瞬は窪んだ瞳で驚きを顔にするが、すぐに呆れた物へと変化する。

「それは……観者の額冠、か？ しかし、そんなゴミみたいな物を持ち出して、面倒な事になるぞ」

カジットのこの発言に、クレマンティーンはキョトンとした表情を浮かべ

「あれー、あれれー。もつと喜んでくれるかと思つたのになー」

と、不満を口にす。

観者の額冠、それはスレイン法国の至宝であり、人を超魔法を発動するマジックアイ

テムへと変える事が出来る物である。それを、カジットはゴミと言い切る。これには正当な理由があった。それは、叡者の額冠は扱える人間が非常に少ない、と言う事だ。つまりは、例えそれが強い力を持っていても、自分が使えなければ、それはゴミなのだ。

だが、カジットはそれが前置きである事を解っていた様に、クレマンティーヌへ向け口を開く。

「何度も言わずな。何をしに来た」

「ふーん、解っちゃうんだあ。これも愛のなせる技かな？」

「ふん。解らん筈がなからう。お主、自分の顔を鏡で見てもよ、まるで恋する乙女の様だぞ」

カジットに凶星を突かれ、クレマンティーヌは身体をくねらせる。

「ほんとお？　でも、正解かもしれない。実はさあ、法国の動きがおかしいんだよねえ」

「法国、だと？　戦の準備でも始めたか？」

「うんー。上の方の動きだねえ。最高神官長の下に、次官が付いたみたいなんだよねえ」

「次官だと。最高神官長の下には、各聖典の神官長達がおるではないか」

そう、その通りだ。

スレイン王国のトップは最高神官長であり、その下には各聖典の神官長、五人が控える。最高神官長が、その地位を去った場合は、五人の神官長から次の最高神官長が選ばれる。

つまりは、ナンバーワンである最高神官長一人に次いで、ナンバーツーである神官長五人、と言うのがスレイン王国の体制だ。その下にはナンバースリー、ナンバーフォー、と地位はあるのだが、今はそれを語る場では無い。

今大切なのは、ナンバーツーであるはずの神官長五人を差し置いて、その地位についた者が居ると言う事だ。

古き歴史を重んじる、スレイン王国において、これは異常事態であるとクレマンティーンは語る。

「それがさあ、どうも次官に抜擢されたのは、陽光聖典の隊長みたいなんだよねえ」「何だと。漆黒の隊長ならば解らんでもないが、よりにもよって陽光だと?」

カジットは此処まで言つて、ふと言葉を止める。確かに、今クレマンティーンが言つた事は大きな事件かも知れない。だが、その事でこの雌猫が恥らう乙女の様になるはずは無いのだ。

だからこそカジットは話の風向きを変える。

「で、重要な話は何だ」

「もー。カジツちゃんの前漏れ！ 早すぎー！ でもいつか。なんでもさあ、法国に黄金が舞い降りたらしいんだよねえ」

「何」

カジツはその窪んだ瞳を大きく開き、先ほどと違い驚きを顔にする。

「黄金だと。ま、まさか雷いかずちのおうごんの黄金神の事か！」

「せーかーい！」

雷の黄金神。

王国を除く、法国、帝国、聖王国は六大神信仰である。だが、これは表向きの事で、実は法国、聖王国は七大神信仰でもある事は誰もが知っている事だった。では、消し去られた一柱は何なのだろうか？

それは、黄金と呼ばれる神の事だ。

王や皇帝を頂点に戴く王国や帝国に置いて、黄金とは富と権力を意味する。では、法国や聖王国などの宗教色の濃い国ではどうだろうか？この二つの国での黄金の意味する物は、欲と罪である。

これは、法国最奥に位置する聖書庫に保管されている六冊の聖辞典、六大神が残した

と言われる六冊の書籍の一つ、死と闇の書と言われるスルシャーナの残した本に寄る事になる。その書籍によると、雷の黄金神は光の白神によつて追放された異形の者達を擁護し、光の白神に反逆した事が書かれていた。

それによつて、自らが信仰する神と敵対した黄金は法国、聖王国では不浄、とされる物へと変化して行つた。そしてこれによつて、力無き圧政に苦しむ者には反逆の象徴として、また、罪を犯した者達にとつては、異形、つまり罪を擁護する神として水面下での信仰を集める存在となつていた。

無論、これが表に出れば、異端として処罰されるのだが。

カジット、クレマンティーヌの所属する、秘密結社ズーラーノンの信仰する神も黄金であり、また、生命の深淵へと手を伸ばす、禁忌を行おうとするカジットにとつては崇拜の対象である。そして、暗い幼少期を送つたクレマンティーヌにとつても憧れの信仰対象であり、幼き頃から自分を守つてくれていた救世主であつた。

そんな存在が現界したとなればどうだろうか？

答えは、居ても立つても居られない、だろう。カジットは急に落ち着きを無くし、そわそわと貧乏揺すりをし始める。

「なーに、カジットちゃん。慌てすぎー。もしかして、童貞？」

そう茶化すクレマンティーヌも、この情報を手に入れてから、下腹部が疼きつばなしであった。

「バ、バカ者。ワシや帝国の死に損無いの様な者に取っては天啓だぞ！ 雷の黄金、煉獄の王に会えるのなら、糞に塗れた靴でもペロペロと舐めてやるわ！」

しかし、そうは言っても、相手は法国、お尋ね者の二人としては、直接会いに行く訳には行かない。

さてどうした物か？

最早二人の中には、ズーラーノーンなる矮小な組織の事など、すつぽりと抜け落ちていた。スレイン法国最高次官を笑えない状態だ。

うーん、と言葉を発しながら纏まらない考えを二人は巡らせる。この状況の二人を端的に説明すれば、どうやってお小遣いを増やそうか悩む子供である。

その時、クレマンティーヌの眼にある物が映る。

カジットの目の前にある、水晶玉が。

「ねー、カジットちゃん。それ何？」

問われたカジットは「うん」と短く相槌を打つと

「これか？ これは死の宝珠。……そんな事は今は良い。今は雷の黄金」

「これ、使えない？」

「は？」

クレマンティーヌの考えはこうだった。

死の宝珠を使い、カジットの最初の計画であった死の螺旋で、このエ・ランテルをア
ンデッドの群れで埋め尽くす。そして、人的被害が甚大になれば、あの国、このエ・ラ
ンテル近くに国境を築く人類絶対主義国家、スレイン法国が出て来るのではないか？そ
して、法国が対処出来ない程の損害が出れば、雷の黄金が出て来るのではないか？と、言
う物だ。

だが、この意見にカジットは異議を唱える。現在の死の宝珠には、それほど力は無
いと。それを聞いた瞬間、クレマンティーヌの艶めかしい唇は半月を作る。

「その為のコレじゃない」

そう言つて、叡者の額冠を掲げた。

「しかし、使用者はどうする。法国から巫女を攫うのか？」

「だーいじようぶ。この街には特別なタレント持ちがいるから」

そう言つて極上な笑みをクレマンティーヌは漏らした。

PVP

「ビッチさん、いつまで笑ってるんですか？」

ブスツとした不機嫌な声を上げたのはモモン。未だに気を抜くと笑いが漏れているビクトーリアに対しての言葉だ。

現在モモンとビクトーリアは、村の中央にある畑の柵に寄りかかりながら、今までの出来事をお互い報告しあっていた。

側には、ユリとナーベラル、そして森の賢王が付き添い、番外席次はよほど気に入ったのか、ネムと一緒にぬえとじやれ合っている。

「ふふん。何時までも笑えるぞ。これ以上の笑いを取ろうと思えば……」

「思えば？」

「アインズで乗るべきじゃな」

ビクトーリアのこの発言に、プレアデスの二人は「おお！」と賛辞の反応を向ける。どうやら彼女たちには、笑いの部分が理解出来ていないらしい。

此の反応を見て、モモンはそのフルフェイスの仮面越しにビクトーリアの顔を見つめ
「な」

と同意を促す。

この事象によって、ビクトーリアはナザリックの真の恐ろしさを理解出来た様な気がした。

「そう言えばアインズ」

「モモンです」

「はあ？」

「この姿の時は、モモンでお願いします」

モモンからの指示に対して、ビクトーリアは口を噤み、じつとモモンの、その鉄仮面を見つめた後、小さな声で

「メンドクサ」

と呟くに留まる。

「あー。その姿の時は、モモンと呼べと言う、アインズと呼べと言った、モモンガさんや」
「バカにします？」

「いいえ。かわいいなあー、って」

そう言うのとビクトーリアは、にんまりと笑みを浮かべる。

「やめて！ 小動物を見る暖かい目で俺を見ないで！」

そう言うってモモンは、乙女のように顔を両手で隠す。

そして、どちらからでも無く

「わっはっはっはっはっ」

楽しそうに笑うのだった。

これを見て、その表情からは解らないが、ユリとナーベラルは驚きと戸惑いを感じていた。なぜならば、今の楽しそうなモモンの姿こそが、転移前、自分達NPCが最も見て来たアインズの、至高の四十一人の姿だったからだ。

ユリは考える。もしかして、他の至高の方々はこれを予期してビクトーリアに命を捧げたのではないかと。あの、楽しそうに笑うアインズを、いや、モモンガを守るために、全てをビクトーリアに託したのではないかと。

ユリは、もう少し中立の立場でビクトーリアを観察して見ようと心に誓う。

そんなユリの真面目な心中など露にも聞せず、最強の二人の会話は可笑しな方向へと向かう。

「それでモモン。実はちいと聞きたい事があるのじゃが？」

「何ですか？」

「アルベドの事じゃ」

ビクトーリアの言葉に、モモンの無いはずの心臓が心拍数を跳ね上げる。

「……最近の妾はの、何度も貞操の危機を迎えておる訳じゃが、何故にあれほどアルベド

は妾に好意を寄せるのじやろうか？ 何か知らぬか？」

「え、えーと。俺にはあ」

「タブラの奴が、何ぞ仕込んでおったのかのお」

「えーと……」

そう言うのとモモンは言葉に詰まりしやがみ込むと、地面に冷や汗の表情アイコンを描く。

このパターンは、ビクトーリアには覚えがあつた。あの時、ギルド アインズ ウール ゴウンの悪ガキ共が、自分を神様にした時だ。

ビクトーリアはモモンの正面に立ち、その鉄仮面をむんずと掴み

「おい骨。お前何やった。今度は何をやらかした」

実にドスの利いた声だった。

モモンは蹲った姿勢のまま、こめかみに指を当て、メッセージの呪文を介してアルベドの設定について説明する。

「ほーう。なかなかはっちゃけた事をしておるではないか」

そう言う指をパチンと鳴らす。その瞬間、上空が歪み、青色の旗の付いたフラッグポールが出現する。

それに呼応するかの様に、モモンも立ち上がり、背中に背負ったグレートソードを抜

いた。

僅かな距離でビクトーリアとモモンが対峙する。二人から漏れだす雰囲気は、殺気と言えぬ物だった。

ビクトーリアはフラッグポールを手に取り

「キサマら四十一人は、妾を使って遊ぶ趣味でもあったのか？」

「はあ？ 美人の嫁さんを紹介してやったんだ、感謝したらどうだ？」

「美人なのも、嫁を紹介してくれた事にも、礼は言おう。じゃがな……可笑しな設定を付け加えるで無いと言っておるのじゃ！」

「ふふつ、礼は我が友タブラ・スマラグディナの名と共に、素直に受け取ろう。だが！

可笑しな設定とは聞き捨てならんな！」

御互い得物に力を込める。

「言うてくれる……この、ボッチ骸骨があ！」

「何だと、駄巨乳ビッチがあ！ 来いやあ！ パーフェクト・ウオリアー！」

その瞬間、二人の武器が交差する。

魔法で100Lv戦士へと変化したモモン、いや、アインズと、100Lv近接戦闘職であるビクトーリアの衝突。

ビクトーリアのフラッグポールが上段から振り下ろされる。その攻撃を、モモンはグ

レートソードを交差させる事で防ぎきる。その瞬間、二人を中心に半径五メートル程の地面が陥没した。

「ビッチさん」

「何じゃ？」

「俺の報告書、読みました？」

「うむ。当たり前であろう。愉快的文言じゃった。実に夢の無い仕事です。じゃったか？」

「ああ。それで聞きたいんだが………あんた、知ってただろ？ 冒険者がこう言う物だと」

膠着状態の中、突然放たれたモモンの言葉に、ビクトーリアは一瞬言葉を失うが、二ヤリと邪悪な笑みを浮かべると

「当たり前であろう。妾をさて置き、一人お外で遊ぼうだなんて、のう」
「そうだった。そうだったよ。あんたは、そうだった。このお、魔女があ！」

モモンの放つ怒号とも取れる言葉と共に、レートソードを横に薙ぐ。ビクトーリアはそれを、フラッグポールで受け切る。最初の一手、どちらも決定打は打てなかった。

「知っておろう。魔女の夜明けを語る言葉を」

「ああ、魔女が動く時、それは世界が変わる時、だったか」

「左様。うぬらが悪の体現者ならば、魔女は混乱の体現者」

力が均衡し、二人は微動だにしない。衝突する視線。どちらも外す事は無く、じつとお互いを見つめ続ける。

そして……………再びどちらからとも無く

「ふっ、ふっ。はーはっはっはっはっ！」

笑うのだった。

御互い武器を収め、何事も無かった様に相對する。

「ふっ。今の妾達を言い表す言葉を覚えておるか？」

「当然ですよ。YGGDRASILで、人間種プレイヤーの間で囁かれた、あの言葉」

そう言つて二人は、誇る様に次の言葉を口にする。

「ギルド アインズ ウール ゴウンと」

「クラン 魔女の夜明けが手を組んだ時」

「地獄の釜は、開かれる」

そう言つて二人の王は邪悪な笑みを浮かべた。

まあ、アインズは鉄仮面、骸骨フェイスであるため表情はうかがえないが。

この一連の流れ、一部始終を見ていたユリとナーベラルは、恐怖で、歓喜で、恍惚で体が震え出していた。ナーベラルに至つては、地に膝をついている。

これが至高の御方アインズ・ウール・ゴウン、そして煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイム、100Lvプレイヤーの力の片鱗。

ナーベラルは思う、何故自分はあれほどの存在を、ウジ虫以下だと侮ったのか？ 何故自分はあの存在に勝てると思っていたのか？

アルベドの言った通りだった。デミウルゴスの言葉は正しかった。やはり、煉獄の王は……………化け物なのだ。

自らの主、至高の四十一人の頂点に立つ者、アインズ・ウール・ゴウン。その者が、自身の内手を出さなければ相対せない存在。

自分達は、選択を間違えたのではないのか、と。あの時、自分達ナザリックの僕達は、敵対では無く、従属を選ぶべきでは無かったのか。もし、あの時、アルベドが間に入らなければ、あの力が第十階層 玉座の間で振るわれていたのだ。ナーベラルは、改めて自分達の愚かさを知ったのだ。無知を知ったのだ。

それぞれの思惑

「エモット家」

「大変だったね」

「うん」

「ンフィーレアの劳いの眩きに、エンリは小さな囁きで答える。

「現在、エンリはあの夜の事についての事柄を、語り終えた所だ。何故、あの事を語ったのか、語りたくは無い悲しい事件を。それは、どうしても確認したい事象が、今、起こっているからだった。」

「だから、もう少し語らなくてはならない。」

「悲しみよりも、驚きが多く占める、この後の出来事を。」

「それでね、私とネム、ううん、村の人達全員が恐怖の中、倉庫に集まっていたの。」

「うん、それで？」

「その後、急に地面が揺れて……………お昼になったの」

「え？ それは……………雷、とかじゃ……………」

「うーん。窓から見えたのは……………二匹のドラゴンだった。雷のドラゴン」

エンリの発言に、ンフィーレアは言葉を詰まらせる。

エンリの言葉を素直に受け取るならば、このカルネ村にドラゴンが襲来した事になる。それも、二匹。

しかし、ここが幾ら田舎の開拓村だとしても、そんなドラゴンが上空を飛行すれば、誰かが気づくはずだ。近くには、自分が生活する都市、エ・ランテルもあるが、騒ぎにはなっていない。

東は帝国領、南は法国領、西は王国の領地。北からの飛来、と言う可能性も無いわけでは無いが、北のアゼルリシア山脈には、フロストドラゴンが居る。

では、フロストドラゴンが飛来したのだろうか？違う、フロストドラゴンは、光もしなければ地面も揺らさない。

ならば、導き出される答えは？何らかの魔法、と言う事になる。

だが、どんな魔法なのか？雷の魔法には、ライトニングと言う魔法がある。だが、それは第三位階の魔法で、地面を揺らす事は出来ないし、周りも出来ない。

これでは堂々巡りだ。これに答えを付けければ、自然現象、落雷、と言うのが一番簡単だが、先ほどエンリに否定されている。

それでは何なのだろうか？最早、答えは一つだった。自分達の知らない高位の魔法と言う事だ。

だが、エンリの疑問はそこでは無いらしい。何でも、この村を救った英雄は三人。一人は先ほどエンリと一緒に居たビクトーリア様と言う人。もう一人は、仮面を付けた魔法詠唱者、アインズ・ウール・ゴウン。最後の一人は、執事服を着た老人セバス・チャン。

その中の一人、アインズ・ウール・ゴウンなる人物の名を、ビクトーリア様が呼んだらしい。それが、自分と一緒にこの村へ来た、漆黒の鎧を着た者、モモンさんに対してだと言う。エンリはもう一度、お礼を言いたいが、ホントに彼がアインズ・ウール・ゴウンなる人物か確認が出来ない為、こうして相談しているのだと言う。

だが、此処でエンフィーレアはさらなる驚きに襲われる。

もし、モモンとアインズ・ウール・ゴウンが同一人物ならば、たった三人でこの村を救える程の者達が、あの神の血をも所持していると言う事だ。

エンフィーレアの脳裏に、次々と疑問の言葉が浮かぶ。追及したいと言う欲求が、湧きあがって来るのを抑えられない。

だが、それ以上に、気持ちを寄せる女性を、エンリを救ってくれた事に感謝したい思いで一杯になっていた。

「エ、エンリ」

「なこ？」

「ぼ、僕が一度聞いてみてあげるよ」

「ほんと！」

その瞬間、カルネ村を地響きが襲った。



村の入口付近、その場所にインフイーレアの馬車が置いてあり、その番でもするかのように、チーム漆黒の剣の面々はその場でたむろっていた。

「ニニヤが不機嫌であるようだな」

ドルイドのダインがポツリとそんな言葉を呟く。

「あー、多分あの貴族の美人さんが気に入らないんだろ」

「べ、別に！」

ルクルットの軽口に、ニニヤは慌てて否定の言葉を口にする。

「しかし、ナーベちゃんがいるのに、またあんな美人さんと、モモンさんって実は女好き、とか？」

「いや、モモンさんが言っていた友達って、あの人の事じゃあ」

続けざまに開かれる、ルクルットの軽口に、リーダーであるペテルが答えた。

だが、この言葉に、他の三人は懷疑的であった。まあ、普通に考えれば当然なのだが。大体、異国の生まれだと思われるモモンが、何故この地の貴族と、友、と呼ぶほどの信頼関係を築けると言うのだろうか。それも異性、をだ。

それに、モモン本人が言っていたでは無いか、ずっと近くに居てくれた、と。

だから、彼女では無いだろう、と言うのが漆黒の剣のメンバーが出した答えだった。

ならば、あの貴族令嬢は誰なのだろう。見たところ、馬車はおろか、護衛の者の姿も見えない。居るのはメイドが一人だけ。

そんな貴族令嬢などいるのだろうか？ 答えは、居ない、だ。

ここは、開拓村だ。近くにある都市は、城塞都市エ・ランテルのみ。その地から此処まで、あの貴族令嬢はどうやって来たのだろうか？ 冒険者である自分達ですら、単独では決して来はしないだろう。

だが、あの者は此処にいる。ただ一つ思い当たるのは、何日か前に馬車できて、二人で滞在している可能性だ。

だが、だがだ、彼女の服装などから推測するに、かなりの地位を持った貴族の出だろうと思われる。そんな人物が、お世辞にも豊かとは言えない、このカルネ村で過ごせるであろうか？ と言う疑問にも行きつく。

結局は結論など出無いのだ。

く。

「なんでだよ！ 仕事は受けるって言っただろうが！」

「あーれー、そうだったかなあ。楽しすぎて忘れちゃつてたあ。仕事かあ。じゃあ説明しとこつかあなあ」

そう言つてコロコロと笑う。

「有名なさあー、薬師のお孫さんっているじゃない」

「ん、ンファイレア・バレアレの、事か？」

「そーそー、そのンファイレアくん。その子にちよーつと用があつてさあ。でも、ざあーんねん。彼、留守なんだよねえ」

此処まで言つて、女はその猫の様な顔を男に近づける。

「それでさあ、帰つて来るまで監視、してくれるかなあ？」

男は言葉を失う。

今、この女は何と言つた？

監視？ 監視と言つたのだ。

そのために、それだけの為に、この女はこれほどの事をしたのだ。男の驚愕の理由、それは、女の背後にあった。

悠々とした態度の女の後ろには、数体の刺殺体が転がっていた。その全てが、男の仲

間である。

「か、監視？ おまえ、それだけを頼む為に仲間を？」

「えー？ だつてえ、秘密を知るのには少ない方がいいじゃん。私としては、お兄さん一人居れば良い訳だし」

男は喉がヒリ付くのを感じた。

この女は、狂っているのだ。

常軌を逸し、常識を無くし、狂気に酔っているのだ。

血の匂いが、肉の感触が、そして、命の消える瞬間の情景が、この女にとっては媚薬なのだ。

「お前……………なんで……………なんで……………そんなに狂っているんだ？」

必死に絞り出された言葉に対し、女、クレマンティーヌはうつとりとした、とろける様な表情を浮かべ、その両手で首筋を、胸を、引き締まった腹を、女の部分を、そしてふとももを撫で降り

「黄金に会えるの……………黄金に、私を見て貰えるの。ここも、ここも、ここも、黄金に捧げる事ができるの」

そう言つて、艶めかしく濡れた舌は唇を濡らし、右腕は柔らかな乳房を揉み潰し、そして、左腕は女の部分を擦り上げた。その時、クレマンティーヌの女の部分は、微かに

くちゆり、と言う濡れた音を奏でる。その姿は、最早自慰をしているかの様だった。

それほどまでに、クレマンティーヌと言う女は、黄金に酔って、寄って、依っているのだった。

「お、黄金？ ……ラナー王女の事か？」

その瞬間、クレマンティーヌの、夢見心地の様な表情が一変した。

男の眉間にステイレットを突き付け、それをえぐる様に回しながら

「あんな偽物と、あんな臭くて汚ねー豚と一緒にするんじゃねーよ……………あれ、死んじやった？ ククツ、まあいーかあ」

蒼天の下

衝撃の大きさに驚き、エンリとンファイレアは外へと駆け出した。遠くに視線を向ければ、漆黒の剣のメンバーの姿も見える。彼らも、恐らく目的は同じなのだろう。

先程の振動、あれは地震などでは無いとエンリには解った。そして、こんな事をしでかせる者達の事も。エンリは率先して、その者達が居るであろう場所を目指す。

ンファイレアと漆黒の剣のメンバーは、首を捻りながらも、その後を追う。ほどなくしてエンリは目的の場所へとたどり着く。そして、自分の予想が大当たりであった事に落胆するのだった。

そこには、地面が大きく陥没した、見るも無残な畑があった。

そして………中央で、大笑いする漆黒の戦士と貴族令嬢の姿が。

エンリはがつくりと腰を落とす。呆れて物が言えなかつた。

ハッキリ言つて、目の前の二人組は常識外と言つても過言では無い人物だ。そして、常識的にも規格外なのだ。一体、何をすれば地面に大穴など開ける事が出来るのだろうか？

いや、ビクトーリアならば、尻もちを付く程度で出来るのだろうか。

そんな考えが、エンリの頭をよぎった。しかし、今、エンリがするべき行動は、呆れ返る事では無い。

「ビクトーリア様！」

「はい！」

クレーターの中央で、ご機嫌に笑っていたビクトーリアが背筋を伸ばし、恐る恐る後ろを振り返る。

そこには、腰に手を当て、仁王立ちする村娘の姿があった。

「ど、どうかし、た、かな？」

若干のひきつった笑顔で、ビクトーリアは問いかける。

「どうしたじやありません！ コレはどう言う事ですか！」

「コ、コレ？」

そう言っただけで周りを見回した後

「な、なんでも、ないよ」

言いながら、その視線はエンリから外される。やつちまった、と。気まずい思いを抱きながら、ビクトーリアは言い訳を考える。

その時、後から微かな笑い声が聞こえた。その声は、明らかに状況を楽しんでいる物だった。

ビクトーリアの機嫌が一気に降下する。後ろの骨は一体何を楽しんでいるのだろう。何で呑気に笑っているのだろう。

「おいコラ、まっくろ黒すけ」

「なんです、金ぴか」

「お前、何楽しんでいるのかなあ。妾に解る様に、説明して貰えるかのうう」

「はあ？ あんたが叱られているのが楽しい、と言えば喜んでくれるのか？」

再び、二人の間に不穏な空気が漂いだした。

しかし、こんな事をされて、一番損害を被るのはカルネ村であり、この場ではエンリなのだ。

「もーう、ビクトーリア様、ゴウン様も止めて下さい！」

大声だった。

絶叫と言える物だった。

あまりにもな声に、二人の動きが止まる。

そして、向き合った視線を、ゆっくりとエンリの方へ。

「怖いもう」

「ええ」

眩く様に言う二人の超越者。

終息へと向かおうとするこの現場で、今だ不満の空気を醸し出す不発弾が二つ、存在していた。

一つはナーベラル・ガンマ。

主人であるモモン、アインズ・ウール・ゴウンへの叱りの言葉、不敬な言葉を口にしたエンリに対して。

もう一つはチーム漆黒の剣のメンバーである、二ニヤ。

じつと、怨みと怒りの視線をビクトーリアへと向ける。

そして、それを感じずにいられるほど、ビクトーリアの感覚は甘い物ではなかった。顔はエンリに向けたまま、交互に二人へと視線だけを向ける。その時、左側で僅かに動きがあった。

モモンとビクトーリアの横を、影が猛スピードで横切ろうとする。

モモンの横を通り過ぎた。

ビクトーリアの横を通り過ぎる。

その時、影は地にねじ伏せられる。腹ばいの態勢を取らされ、右腕をねじり取られた。ビクトーリアはその背中に左膝を乗せると

「何をはしやいでおるのじゃ？ ええ、ナーベラル・ガンマ」

「うっ！」

「聞こえんか？ うぬは今、何をしようとしたと聞いておるのじゃがな」

そう言つて、短剣を持った右腕を捻り上げる。

「何とか言つたらどうじゃ？ 聞こえぬのか？ それとも……妾の言葉など、聞くに値しないかええ」

「ビッチさん！」

慌ててモモンがビクトーリアを止めにかかる。

しかし、ビクトーリアの怒りは収まらなかつた。

「アインズ！ これは貴様の責ぞ！ 僕、一人も制御出来ずに、何が支配者じゃー！」
「ビッチさん!!」

「この程度の言葉で。何も知らぬ者のこの程度の言葉で相手を傷つけ、貴様は何じゃ！
この世界で、この世界で………血と屍の山を築くつもりか！ ナーベラル・ガ
ンマ！ ユリ・アルファ！ うぬらは、そんな地獄を、孤独を主人に捧げるつもりか！
どうじゃー！」

この場に居る全員が、一体何がビクトーリアの起爆スイッチであるのかが解らなかつた。ナーベラルが動いた事が、起因である事は解る。だが、彼女の怒りはそれ以上だと感じるのだ。

しかし、この場にはその怒りがどこから来るのかを知る者が一人だけ存在した。

ナザリック地下大墳墓の僕の中で、それを推測出来る四名の内の一人が。その者はユリ・アルファ。ユリはじつと瞳を閉じると、セバスが語った言葉を思い出す。そして、今ビクトーリアが口にした言葉を。

『そんな地獄を、孤独を主人に捧げるつもりか』

これが全てなのだろう。

セバスが語った

『君達は自分自身で、君達の言う慈悲深き御方を消し去って行く』

これに繋がるのだろう。

ナーベラルが、妹が短絡的に起こした、この事柄が最初のドミノを倒す行動なのだろう。だからこそ、ビクトーリアは怒ったのだ。盛大なドミノ倒しが起こってからでは遅いのだと。

自分達はもっと知らなければならぬとユリは思う。アインズ・ウール・ゴウンと言う自らの主人の事を。ビクトーリア・F・ホーエンハイムと言う神の秘密を。

だが、今はその時では無い。

今すべき事は

「ビクトーリア様！　どうかお許し下さい。ナーベラルの行いは無知からの物。どうか僕らに学習の機会を！　どうか、どうか」

頭を下げ、許しを乞う事だ。

ビクトーリアは、ユリの下げられた頭をじっと見つめ

「よかろう。じゃが次は無い物と知れ」

そう言つてナーベラルを解放した。

それでもなお地に伏せるナーベラルの目には、驚きと、悔しさと、悲しみと、申し訳無さを映していた。

その後、ナーベラルはゆっくりと立ち上がると

「申し訳御座いません、この失態、命を持つて……」

腰に刺さつた剣を抜き、その切つ先を首筋へと当てる。

「馬鹿者があー！」

その瞬間、怒声と共にビクトーリアの前蹴りがナーベラルの腹部に突き刺さる。その衝撃で、ナーベラルの身体は、三回、四回と地面を転がり、十メートルほど先で再び地に伏せる。しかし、それだけではビクトーリアの怒りは収まらない。

急ぎ大股で近づくと、ナーベラルの襟元を掴み立ちあがらせる。

そして、ナーベラルの白磁の様な頬を、二度、三度とひっぱたく。

「馬鹿者が！ この大馬鹿者が！ キサマは何も解つてはおらぬ！ ナーベラル・ガンマ！ キサマの命は誰の物じゃ！ 妾はうぬらに誓つたであらう、此の身、此の力、妾

の全てを掛けて汝らを守ると！ それは失敗も同じじゃ！ うぬらの失敗など、妾が補ってやるわ！ なのに！ 何故！ うぬは命を散らそうとする………何故にうぬは、うぬは、お前は、私に守らせてはくれぬ」

そう言つてビクトーリアは膝をついた。

その後姿は、酷く小さく、泣いている様に見えた。

ナーベラルはその場で立ち尽くし、事態が理解出来ていない様だった。だが、その瞳はじつと、只一点にビクトーリアを見つめていた。

アインズは驚きの中に居た。自分達の嘘で創られたこの神は、どれほどの慈悲と愛を持つてギルド アインズ ウール ゴウン、引いてはナザリックを見守ってくれているのか。

いや、そうでは無いのかも知れない。

ビクトーリアの瞳が、ギルド アインズ ウール ゴウンやナザリックを見ているのなら、この行動は、どこか歪だ。彼女が一体何を見ているのか、一度真面目に話を聞く必要がある、とアインズは思うのだった。

片方の不発弾処理が進む中、もう一つの爆弾にも変化が起こっていた。

怨みで濁った眼は驚きの色を示し、怒りで硬く結ばれた口は、何か言葉を発しようとして開いている。漆黒の剣のメンバーは、そんなニヤを不思議そうな目で見つめていた。

「あ、あの人は……何なの？」

やつとの事で、口から出た言葉だった。

「え？ 貴族のご令嬢、じゃないか？」

そう言うのはルクルットだ。

「違う。貴族はあんな事しない。貴族は人をゴミの様に扱う。貴族は私達から全てを奪う。貴族は、貴族は………人が死のうとした時、あんなに悲しそうにはしない！」
必死な声だった。目の前で起こっている事が理解出来ないと言う思いだった。そして、認めてしまうと、何かが崩れてしまう、そんな感情からだった。

異様な緊張感と、それぞれの思いが交錯する中、動ける者、動こうとする者は誰一人いなかった。そんな中、一つだけ小さな影がビクトリアに向け、足早に近寄って行くのが見えた。

「ビッチのお姉ちゃん！ 大丈夫、痛くない？」

ネムだった。

膝を着いた姿勢のビクトリアを見て、心配して駆け寄ってきたのだ。その声に反応する様に、ゆっくりとだが視線をネムに向けると、弱々しいが優しい笑みを向ける。

「うぬは優しいのう。妾は大丈夫じゃ」

「嘘だもん！ ビッチのお姉ちゃん、すごく辛そうな顔してるもん！ ネムにはわかるもん！」

ネムは瞳に涙を浮かべ、そう訴える。

「……………そうじゃな。辛いもう。誰かが命を失うのは、ほんに辛いもう」
そう言つてネムを抱きしめる。

この光景を誰もがみつめていた。そこには、人間種も異業種も違いは無い。誰もが、自分の中にある何かを感じながら、何かを思いながら見つめるのだった。



「のうアインズ」

「何ですビッチさん」

「なーんで妾は、鍬を持って畑を耕しているのかのう」

「それは、ビッチさんが畑を無茶苦茶にしたからでしょうが」

アインズの言葉に、ビクトーリアは一度「うむ」と頷きはするが

「では、何故うぬはしておらぬのじゃ？」

この問いに、アインズは「さあ？」と答えを返す。

そして……相も変わらずの言い争いとなり、その戦いは夕暮れまで続いた。

蝶の羽ばたき

窓から射す優しい日の光は、室内を漂う埃を現実の世界へと映し出す。

そこは、お世辞にも上等とは言えない場所だった。城塞都市エ・ランテルの場末にある、低級冒険者御用達の宿屋の一室である。室内には、簡素な作りのベッドが二つに、にわか作りの机と椅子が一脚あるだけ。

何時もはそれだけが、この部屋の主であると主張する場に、今日は別の物が存在した。部屋の中央にて、我こそは、と存在する異質な物が。

それは、黒い霧の様に見えた。

それは、どこまでも続く暗黒に見えた。

その漆黒から、まるで生まれ出る様に何者かがこの場へと足を踏み入れる。

「汚つたないのう」

「何か、くさい」

「こんな所に御泊りとは……」

出現したのは、女性が三人。

ビクトーリア、番外席次、ユリ・アルファ。

この者達が、エ・ランテルに何か用があるのか、と聞かれれば、これと言って用は無
い。今回の転移は、何かあった時用の為の転移拠点作りの為である。わざわざアインズ
に、ゲートの呪文を使わせての。

そんな、ビクトーリアと番外席次の二人は、左腕を腰に当て、右手で鼻を摘む、と言
う同じポーズで並んで立つ。ユリは一步引いた場所で、頬に手を当て主人の境遇を嘆く
のだった。

ビクトーリアは周囲をゆっくりと見回した後

「小娘、ちいとそこのマット、めくって見よ」

悪趣味とも言える興味で、そんな事を口にした。

「えー」

言われた番外席次は、否定的な言葉を口にしながらも、何故か興味を引かれ、ゆつく
りとベッドの上にあるマットを引きはがす。

「うあつ！　なんか動いた！」

「おおさま！　なんか見た事無い虫！」

無様にもはしやぎまくる圧倒的強者の姿があつた。

その後ろで呆れ返る声が囁かれる。

「酷い物です。これでお金を取ろうなどと、恥ずかしい行いです」

「どう言う事じゃ、ユリ?」

ビクトーリアに問われ、ユリは一点を指差す。

「うわべのシーツは……酷い物ですが、洗濯はされている様です。ですが……」

「ですが?」

ユリの言葉に、ビクトーリアと番外席次は同じ言葉を返す。

「見てください。そのマットのシミを」

そう言うユリの表情は、嫌悪感を映していた。

言われたままに、二人の視線は番外席次が持つマットへと注がれる。

「うああ」

ドン引きだった。

マットには、べっとりとしたシミが広がっていたのだ。

それは、長年の間この部屋が見送って来た、数多くの冒険者達の汗や体液なのだろう。だが、そう言えば聞こえは良いが、結局の所このマットは、長年交換される事も無く、なおかつクリーニングすらしてないのだと物語っていた。

「なんかこう……妊娠しそうじゃな」

ビクトーリアはマットを見ながら、そんな感想を呟く。

「新しいモンスターとか誕生しない?」

これは番外席次の感想だ。

「ああ、汚物喰らいの亜種、フアエックデッセみたいな感じでしようか」

「汚物喰らいの亜種？」

「はい、病原菌の代わりに、汗や精液などで構成された……」

ユリの言葉に、顔をしかめながら

「それって……男の冒険者の？」

番外席次は、口に出すのも嫌だと言った風に呟く。

「そうでしようね……性欲満タンの若き者から、脂ぎった中年男性までの、ありとあらゆる——」

「やめーいー！」

ビクトーリアは会話を中断させる。これ以上は聞いていられないと。

「何かこう、背筋が寒むうなってくるわ」

そう言つて自分自身を抱きしめる。番外席次の行動も同じ物だった。

「ユリよ、何故にうぬは平気なのじゃ？」

「はあ。近寄つて来たら……まあ、殴り倒せば——」

ユリのこのあまりな回答に

「はあ。やっぱりうぬは、やまいこの子じやのう」

ビクトーリアは疲れた言葉で、この場を締めるのだった。



二階から姿を現した三人組に、宿屋のラウンジ……などとはお世辞にも言えない吹きだまりは、大騒ぎとなっていた。理由の一つは、降りて来た三人が、全て絶世の美女であつた事。

そして二つ目、これが一番の理由だろう。此の宿には、こんな客は居ないからだ。それが当然と言つた様に、階段から降りて来た。何故？この者らは一体どこからやつて来たのだろうか？ 吹きだまりに鎮座していた者達の思考は、最早機能してはいなかつた。

しかし、その三人は、知つた事かと自身の行動を貫き通す。吹きだまりの中央にあるテーブルに三人は席を取る。そしてビクトーリアは店主を呼び寄せ

「店主、取り合えず酒じゃ。酒を持ってまいれ」

「おおさま、わたしは甘い飲み物」

「私は結構です」

三者三様に注文を下す。

店主はため息を一つ吐くと

「御客さん、お代は銅貨三枚だよ」

「は？」

「だから、銅貨三枚」

「……………モモンが支払う。ツケておくが良いぞ」

ビクトーリアの言葉に、店主の顔がひきつる。

「御客さん、困るよ」

そう店主は言葉が続ける。この者達が、ホントにモモンの仲間だとしたら、問題は無い。しかし、あの騒ぎを聞きかじった無関係の者達ならばどうなのだろう？恐らく……………もう一度、店はボロボロだ。

だから、店主はツケを渋るのだった。

「むう」

はて困ったと、ビクトーリアは唸り声を挙げる。その声で、店主は全てを悟り、カウンターへと消えて行った。

無一文の三人組は、どうした物かとテーブルを見つめる。その中で、ユリに動きが

あった。懐から畳まれたハンカチを取り出すと、テーブルの中央でそれを開く。中には……金貨が一枚。

それは、交易金貨と呼ばれる物で、むろんこの場で使用可能な代物である。

「うん？ これは何じゃ？」

「おおさま。これはお金と言う物だね」

「そんなくらは知っておるわ」

「で、ユリよ、これは？」

「あ、はい。これはアインズ様が、正確にはナーベラルからですが、資料にと渡された物です」

「使っても良いものか？」

「さあ。いけない、とは言われてませんか？」

ビクトーリアは、じつと目の前の金貨を見つめる。さすがにコレは不味いだろう。下手をすれば、ユリの立場が問われかねない。

ビクトーリアは、テーブルの下に空間を開き、何か無いかとアイテムボックスを探る。頭の中で、様々なアイテムを思い浮かべながら。遠い記憶の旅の途中で、ビクトーリアはある物と遭遇した。それを手に取り、テーブルの上へと置く。

それは、何の変哲も無いペンダントに見えた。細い鎖と、先端に付いた小さな金属プ

プレートで出来たペンダント。

「ビクトリア様、それは？」

ユリからの問いかけだ。

言葉こそ発しないが、番外席次も興味深そうに凝視している。

「これか？　これは、あまのまひとつに貰った物でな、何でもナザリックのゲスト用に創った物らしいぞ。没作品じゃが」

そう言つて、ユリの目線に金属のプレートを掲げる。そこには、しっかりとギルド

アインズ ウール ゴウンの紋章が彫刻されていた。

「没作品、ですか？」

「うむ。制限付きでのリング オブ アインズ ウール ゴウンを作りたかった様じやな」

「ですが、何故、それが没に？」

「客が一人しか来んのじゃから、意味無かろう。ギルド外の者で、ナザリックに招かれたのは、やまいこの妹のあけみだけじゃぞ。」

そう言つてビクトリアは、周りの人間達を観察して行く。そして、店の奥にあるテーブルに着く者に目を付ける。赤い髪をしたその女は、テーブルに並べられたアイテムを、一つ一つ確認しつつバッグに納めていた。

ビクトーリアは、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、単身その者の下へと歩いて行く。

「ねえ、ユリさん」

「なに？」

「おおさま、悪つるい顔してたね」

「ええ。お腹が真黒な笑みでしたね」

二人が見つめる先、ビクトーリアは女の正面に座ると、手で口元を隠し、何かをささやいていた。その後、身振り手振りで何かを伝えると、再び手で口元を隠し、何かをささやく。そして最後に、左手を右手で覆い隠し、なにやら指を立てている様子が見える。女も首を縦に振ったり、横に振ったりを繰り返していた。

時間にして三十分程だろうか、ビクトーリアが帰つて来た。

「売れたぞ」

「は？」

「じゃから、先ほどのペンダントが売れたのじやよ」

そう言つて、テーブルの上に金貨一枚と銀貨を五枚置いた。

それを見て、番外席次は「おお」と言う声と共に、好意的な表情を浮かべるが、ユリの表情は苦々しい物だった。

「どうした？」

「いえ。いくらお金の為とはいえ、至高の方々が御造りになった物を……」

ユリの言葉は、ビクトーリアには痛いほど解った。だが、この行動は単なる売買行為では無かった。一種の賭けであり、未来の行動指針への投資でもある。

「ふん。妾の蒔いた、あの蝶の羽ばたきが、どうなるか、じゃよ」

「ビクトーリア様？」

「アレが、あの女の中で収まるのか、それとも外へと波及するのか。楽しみではないか」

謎かけの様な言葉を口にするビクトーリアを、ユリはじつと見つめ

「それは………ナザリックが外にどう広まるか？　と言うことですか？」

「うん？　ナザリックと言うよりも、アインズ　ウール　ゴウンが、じゃな」

そう言つてニヤリと笑うのだった。少なからず、女、ブリタの幸運を願つて。

無慈悲な夜

ガタゴト、ガタゴト、馬車は車軸を鳴らし、のんびりとした街道をゆつくりとした速度で進んで行く。

御車台では、ンファイーレア・バレアレが手綱を握り、馬車の前方では、先頭をレンジャーであるルクルツトが務め、その後ろに、ペテルとダインが並んで続く。後方にはモモン、ナーベ、ニニヤが並び、最後尾には森の賢王がトコトコとしんがりを務める。

「あの、モモンさん」

ニニヤがおずおずと、若干の畏怖を込めて名前を呼ぶ。

「何ですか？ ニニヤさん」

対するモモンの反応は、至って紳士的な物だ。

「失礼な質問かも知れませんが、あのビクトーリアと言う方は一体？」

顔を伏せたまま、そう口にする。隣を見ると、ナーベもその答えを欲している様に見える。

「そうですねえ、彼女は……戦友であり、協力者であり、ライバルであり、ふふつ、何と言ったら良いのでしょうか。優しく、強くて、思慮深く……それでいて意地悪で、悪

戯好きで……俺にとっては……寂しさを忘れさせてくれる、そんな人、ですね」

ニニヤは、この言葉を一度受け入れ

「あの方は……貴族、なのでしようか？」

そう、問いかけた。

モモンは、どう反応したら良いか解らず、噴き出してしまふ。

「ふふつ。貴族？ 違いますよ。彼女は、いや、あいつを言い表す言葉は一つ、アレは混

乱を呼ぶ魔女、ですよ」

「魔女、ですか？」

「ええ。何かあったら、一度相談してみるのも良いですよ。乗ってくれるかは、アレの気

分次第ですが」

モモンは楽しそうに、そう語るのだった。

それに釣られてか、ニニヤもまた少しだけ笑顔を浮かべた。



く城塞都市エ・ランテル 城門付近く

「ではモモンさん、僕達は先に店の方へ行っていますね」

「ええ。我々も後ほど合流しますので」

ンファイレーアとモモンは、そう言葉を交わすと、別々の道へと歩を進める。ンファイレーアと漆黒の剣のメンバーは、バレーアレ商店へと、モモン、ナーベは森の賢王を引き連れ、冒険者協会へと。

「しかし……強烈な数日でしたね」

ポツリとそう言葉を漏らしたのは、漆黒の剣のリーダー、ペテルだ。

「そうだなあ。この三日程で、俺の中にある美人の価値観が総崩れだ」

続いて言葉を発したのは、ルクルット。

「美人はともかく、強さと言う意味でもそうであるな」

ダインが、そう補足する。

「ははっ。全部が規格外な方々でしたね」

御車台から、ンファイレーアも同意を示す。

そんな中、唯一沈黙を守っているのがニニヤだ。

「どうしました？ ニニヤさん」

心配そうにンファイレーアが声をかける。

「惚れたんじゃねえの？ あの、ビクトーリアって人に」

茶化す様にルクルットが言葉を挟む。

「ち、違う。何を言うんだ！」

ニニヤはすぐに、その言葉に反応し異議を唱える。

「じゃあ、何だっというんだ？」

「……………あの人、なんか、姉さんに似ていて」

小さく、絞り出す様にそうニニヤは口にする。

「姉さんって。そんなに似ていたのか？」

ペテルが、心配そうに会話に加わる。

「うん。佇まいとか、雰囲気は違うんだけど、あの金色の髪とか、どこか寂しそうな表情

とか…………」

「なら、後で会ってみれば？ モモンさんも言ってただろ」

「うん」

そう結論をつけ、ここ数日を振り返っていた者達は、バレアレ商店へと到着し、ようやく仕事を終える事となった。裏口へと回り、ンフィーレアは、ギシリと音を立て、ドアを開ける。

「ただいまー。お婆ちゃん？ ただいまー」

明かりの無い屋内へ向け、祖母の存在を確認しつつ、帰宅の言葉を口にする。居ないのかな?と思いつつ、後を振り返ると、漆黒の剣のメンバーが荷降ろしを開始する所だった。

「あ、皆さん。とりあえずお疲れ様でした。一度中に入って下さい。果実水でも出しますのぞ」

ンフィーレアは労いの言葉を掛ける。

外に居た者達は、一度顔を見合わせると、ンフィーレアの言葉に甘える事にする。屋内で待つンフィーレアに対し、ペテル、ルクルト、ダイン、ニヤの順で屋内へと歩を進める。全員が屋内へ入り、一番後ろに居たニヤがドアを閉める。彼らが外界と遮断された、その瞬間

「おかえりー。まっつたよお。遅いんだもーん、待ちくたびれちゃったあ」

ギシリと床板を踏む音と共に、そんなふざけた、甘ったるい声が聞こえた。

そして、その者が、暗闇からゆっくりと姿を現す。ローブを纏ってはいるが、隙間から覗くその肢体は、酷く扇情的な物だった。方やその瞳は、冷たく、冷え冷えした物で、この世の一切に興味が無いような虚ろさを感じさせる。現れたのは、そんな女だった。

「あれー?　なんか人数が多いなあ。まーいつかあ、殺せばいいんだしい。きやはあ」

「馬鹿者。遊んでおらずに、とつとつ仕事をせんか」

次に現れた者は、魔術師風の男だ。体軀はやせ過ぎと言つてもいい物で、見た目は、人、と言うよりもエルダーリッチなどのアンデッド様に見える。

「えー。いいじゃん、少しぐらい遊んでもお」

「ふん。次の計画に支障が出たらどうする」

「ぶー。わかつた。わかりましたよお。それじゃあ、あんた達、サクツと死んでくれる？

あはつ、答えはきかなーい」

そう言つてケラケラと、実に愉快に笑う。

レンジャーであるルクルットには解つた。いや、レンジャーで無くても解る。コイツはヤバいやツだ、と。

「ニニヤ！ 依頼主を連れて逃げろっ！」

「でも！」

「早く！」

ルクルットの言葉は、必死な物だ。

この場に居る者は、全員が理解していた。

コイツと相對せば、必ず死ぬと。

ペテル、ルクルット、ダインは、それぞれに得物を抜く。ペテルとルクルットは、場所が屋内であるため短剣を選択する。その光景を見つめていたニニヤだったが、心の中

で、謝罪と礼を口にする、意を決してンファイレーアの手を掴み、ドアへと手を掛ける。だが、脱出のために目を離れた一瞬の時間、ドサリと何かが地面に落ちる音がする。慌てて振り返ると、床に倒れるペテル、ルクルット、ダインの姿があった。そして、うつぶせに倒れる三人の下から、液体が床へと広がって行く。一瞬、ニヤには、それが何か解らなかつた。それが、仲間達の血液だと言う事に。

「んーもう。死んじやつた。早すぎー、弱すぎー。こんなんじや、ちつとも感じないじゃない。自分でしちやおつかなあ？ あは、うーそ。きやはは。おもちやは、まだあるし……」



「わしはもう行くぞ。遊びも程々にな」

カジットはクレマンティーヌにそう言うと、自分と同じようなローブを着た男達に指示を出す。一番体躯の良い男が、何かサンドバックの様な物を担ぎ、周りの男達と共に、この場を後にする。

「はーあーいー。あ、そうそうカジツちゃん、アレ、やってくれた？」
「仕掛けはして置いた。早めに戻れよ」

そう言つて、カジツトも場を後にする。

この場に残つたのは、三つの遺骸と、腹部から血を流すニニヤ。そして、ステイレツトに付いた血液に舌を這わすクレマンティーヌだ。

「あれれー、どうしちゃつたのかなあ？ おなかいたいのお？ それ、と、も……痛みで興奮しちゃた？ 勃起しっちゃつた！ いやーん、変態！」

そう言いながら、ニニヤの顔を左手に持つたメイスで殴打する。

「グフツ！」

ニニヤからは、くぐもつた様な呻きが漏れる。

「かわいくなーい。鳴くのなら、もつと可愛い声で鳴いてくれるかなあ。そんなんじや、全然、濡れないのー。お姉さんを、もつと興奮させてよー」

そう言つて、何度も何度も殴り続ける。

「ん？ なーに。聞こえなーい」

クレマンティーヌは、ニニヤの口元に耳を近づける。

「モモンさんが、モモンさんが、きつと、来て、くれる……姉さん……ピクトーリアさん……」

血に濡れたニニヤの頬を、クレマンティーヌはペロリと舐め上げると

「うーん、助けを待ってるの？ でも、ざーんねん。お姉さんの耳には、足音一つ聞こえませーん」

言いながら、ステイレットを右肩へと突き立てる。

「ぎゃあああああああ！」

部屋にニニヤの絶叫が響く。

それがまるで、甘美な音楽である様にクレマンティーヌの表情はうつとりした物へと変わって行く。

刺しては傷口を抉り、刺しては抉り、ニニヤの身体は穴を増やし続ける。何度刺しただろうか？クレマンティーヌの身体は、小さく痙攣した。

「あ、あはあ。い、いっちゃたあ。ごめんねえ、お姉さん、絶頂しちや^{ちや}った。下着が大変な事になってるのー。はずかしー！ だまっててくれる？ いい物あげるからあ。でもその前に……」

話し終えるや否や、メイスをニニヤの頭頂部にかけて勢いよく振り下ろす。

「はああああああ！」

クレマンティーヌは奇声を発し膝まずつくと、二度、三度と大きく痙攣する。

生命が消える瞬間を目にして、大きな絶頂を迎えたのだ。

「うんっ」

クレマンティーヌは下半身に手をやり、ねっとりとした恥液が付く下着を脱ぎ去ると、それをニニヤの懐深くにつっこんだ。

「あ・げ・る。プレゼントだよ。大事につかってね。匂いも沁みもバッチリだから。はずかしー！ うん？」

その時、クレマンティーヌの手は、違和感を感じる。

「これはー？」

言いながら、ニニヤの衣服を？ぎとる。

衣服の下には、さらしでガッチリと巻き上げられた、慎ましい少女の乳房が。

「ありやりや。女の子だったんだー。ごめんねえー。お姉さん、勘違いしちゃった。」

そう言つて、ペロリと舌を出す。

「女の子だつて言つてくれればなあ……………女にしてあげたのにい」

そう言つて残酷な瞳でメイスの先端を舐め上げる。

その姿は、サディステイックで、淫靡な物だった。

本当の心

何の効果も無いアイテムを割と高額で売りつける、と言う詐欺めいた行為を行った張本人、ビクトーリア・F・ホーエンハイムは、そのお金で割とたらふく酒を嗜み、今は夕食の時間までまったりとした時間を過ごしていた。

そんな中、そのたるみ切った頭脳に喝を入れるかの様に、メッセージが届く。

『ビッチさん……』

アインズからだ。だが、その声は重々しく、決して楽しい報告では無いと語っていた。「どうしたの?」

『こつちに来て、貰えませんか?』

「何故?」

『……………』

ビクトーリアの問いに、アインズは沈黙で答える。

その無音の言葉に何かを感じ、ビクトーリアは即座に行動を決定する。

「わかった。行こう。転移は任せる。時間は十分後」

『はい』

此処からのビクトーリアの行動は、早い物だった。すぐさまアルベドへとメッセージを飛ばし、ナザリックの防護結界の解除を依頼し、ユリと番外席次を招集する。そして、全員が集まった時、眼前に闇が開いた。



鉄の様な臭いが立ち込めるバレアレ商店の一室。その一角の空間が歪む。

その中から生まれ出る様に、三名の女が現れる。ビクトーリア、ユリ・アルファ、番外席次だ。

部屋に足を踏み入れた瞬間、ビクトーリアの表情は不快感で歪む。

そこには、首を刎ねられた男の遺体が三つと、撲殺されたであろう痕跡を残す少女の遺体だ。

「これが呼び寄せた理由か……」

ビクトーリアはアインズへ視線を向けずに、そう呟く。

「ええ」

「下手人は？」

ロケット・オブジェクト

「物体発見で確認しました。ナーベ」

クレアボヤンス

クリスタル・モニター

「はい。千里眼、水晶の画面」

ナーベラルは空中に、二本のスクロールを展開する。

「墓場、か」

空中に浮かぶ映像に、ビクトーリアは小さな眩きを洩らす。

だが、事はまだ終わっていない。

「どうしました？」

「モモンガさんが一杯、じゃな。と、思うてな」

そう言って、渋い笑みを浮かべる。

「せめて骨って言って下さいよ。でもまあ、あの程度の数なら……」

仮面の下で、苦笑いを浮かべながら？アインズはそう言葉を返す。

「しかし……湧き過ぎでは無いか？」

「何らかの儀式魔法、かと」

映し出されるクリスタル・モニターには、何千と言うアンデッドの群れがあった。

恐らく、エ・ランテルの墓地は、すでにアンデッドに占領されているのだろう。

「で、どうする？」

「ンファイレアが攫われた可能性がありますから」
「行くのか？」

「……」

話も終りに差し掛かろうとしたその時、ドアが開かれる。

現れたのは、レイジー・バレアレ。この店の主人にして、ンファイレアの祖母である人物。

「モモンさん。それで、孫は？ 孫の居場所は？」

焦り、憤りながらも、出て来る言葉は、孫を案ずる祖母の物。

ビクトーリア達が増えている事も、目に入っていない様だ。

「ええ。相手は墓地を根城にしている様です」

「では、孫は！ ンファイレアは！」

「恐らくそこでしょう」

この言葉で、レイジーの胸は僅かに安堵を覚える。が、それはすぐに絶望へと変わる。目の前に映し出される映像には、墓地にひしめく大量のアンデッドの姿があった。

「あ、あれは……。あの中にンファイレアが……」

「ああ」

「どうすれば……。どうすれば、良いんじや」

最早、レイジーの顔には、絶望の色しか無かった。

それを見つめる一人の者から、場にそぐわぬ笑みの声が漏れる。その声の主は、モモ
ンだ。

「何が可笑しい！」

「いや。随分と絶望していると思つてな」

「なんじやと！」

「こ言う時こそ、冒険者の出番では無いのか？ 依頼したらどうだ？ とびっきりの

冒険者に」

そう言つて、親指で自分を指すポーズを決める。

どう見ても格好付けのダサイポーズなのだが、レイジーの目には、そう映つてはいな
かった。

「分かつた……依頼しよう！」

「高いぞ」

「いくらじゃ」

「お前達の全てだ」

「まるで悪魔との契約じゃな」

お互い視線を合わせ、ニヤリと笑う。

これが、依頼締結のサインとなった。

モモンは急ぎ、リイジーを冒険者組合へと走らせる。万が一の保険と称して。が、実際は自身の活躍を多くの人の眼に見せる為であった。

再び場は異形の者達のみとなる。

「では……」

そう言つてモモンはナーベを連れ、決戦へと一步を踏み出す。

だが、それはビクトーリアによつて止められる。

「モモン。いや、アインズよ。うぬは何故にそんなに不機嫌なのじゃ?」

「え?」

ビクトーリアは、さも嬉しそうに微笑むと

「気付かれんとも思つておつたか? それとも……自分でも、気づいてはおらんんだか?」

「い、いや。それは、少し不快だと思つてはいますが」

アインズの否定的な言葉に、ビクトーリアは首を横に振る。

「違うのう。うぬのその感情は、その感情の正体は………悔しいというのじゃよ。悔しくて、悲しくて、辛くて、泣いているのじゃよ」

「ビッチさん、何を言つて。俺はアンデッドですよ」

「アンデッド、ねえ」

ビクトリアは、再度首を横に振る。

「アンデッドとは、生者を憎むものじゃ。間違っても、こ奴等と冒険には出ぬわなあ」

そう言つて、血で塗れたニニヤの髪を撫でる。

「もう少し早く到着していたら。ハムスターの登録を後回しにしていたら。違うか？」

「……………」

アインズは否定する事が出来なかつた。

自分自身でも、その感情が理解出来なかつたからだ。ずっと一人で生きて来た者には、理解出来ない感情だつた。ゲームでは無く、リアルで顔見知りの死を目の当たりにしたのは、両親の死だけだったから。

「それで良いのじゃよ。妾は安心しておる。うぬの心は未だアインズでは無く、モモンガさんじゃと確信できたからのう。すまぬな、無駄話が過ぎた様じゃ。さあ、行つてこい。その名、広げて来るがよかろう」

「は、」

モモンは短く返事を返すと、足早に部屋を出て行つた。



部屋の中には、ビクトーリア、番外席次、ユリ・アルファと、四体の遺体が残される。ビクトーリアは座り込み、ニニヤの様子を見ていた。

「まさか、おなご、じゃったとはの」

「ホント。でも何で隠してたのかな」

「さあ」

そう言つてビクトーリアは立ち上がると

「小娘、ユリ、指示を出す。しかし、これからの行動は、妾の名を持つて極秘とせえ」
「何故で御座いますか、ビクトーリア様」

ビクトーリアの言葉に、ユリが疑問を呈す。

それはそうだろう、ユリはナザリックに属する者。その者に、仲間には極秘で行動しろと言っているのだから。それどころか、自分達の支配者にも、だ。

それを成せ、と言うのならば、それ相応の理由が必要となるのだ。

だがビクトーリアは、笑みを保つたまま

「理由、か。それはのう、簡単な事じゃよ。妾がこれからする事は、ナザリックの利益に

は、一切ならんからじゃ。それどころか、害をなすものじゃからな」

「ビクトーリア様！」

ユリが制止の言葉を口にする。

只でさえ立場があやふやなビクトーリアが、そんな事をすればどうなるかを心配しての言葉だ。これによって広がる被害は、ビクトーリア一人では収まらないだろう。ビクトーリア派とも取れるアルベド、セバスにまで及ぶかも知れない。

「まあ、そういきり立つな。妾の言葉を聞いた後でも良からう？」

「は、はい」

ユリは一度口を閉じ、ビクトーリアの計画を聞いてみる事にする。

ビクトーリアは「良いか」と前置きをした後で

「……………」

「りょーかい、おおさま」

「畏まりました、ビクトーリア様」

二人は同意を示す。

そして、三人は行動を開始した。

来訪者

「少し不快、か。モモンガさんは辛抱強い。妾は……………酷く不快、じゃ」

暗闇の中、ビクトーリアが呟く、それと同時に。モモンとナーベ、そして森の賢王は、敵陣深く攻め込んでいた。モモンは、地上でその双刃を振るい、ナーベは上空で森の賢王を背負い待機していた。

「こんな物か。作成した中位アンデッド達も、上手くやっている様だな」

「さすがですモモンさん」

「さすがでござるよ殿！」

モモンの働きに、上空のナーベと森の賢王が喝采を送る。

「ナーベラル殿お」

「何？ それからあまり動かないでくれる。もふもふして持ちづらいのよ」

急激にテンションが下がった森の賢王が、ナーベに声をかける。

「申し訳無いでござるよ」

「どちらにしても、下はアンデッドの海。降りれば一斉に襲われるわ」

そんな会話を交わす空の事など気にも留めず、モモンはゆっくりとだが、本丸へと歩

を進めて行った。そして、その空洞の瞳に、目的地である霊廟が、段々と大きく映って行く。次第に克明になって行く景色の中、霊廟の前に幾人かのローブ姿の者達が確認出来る。

「こんばんは。良い夜だな」

内心、あの魔女みたいだな、と思いつつも、モモンはそんな軽口を言ってみる。

さて、相手がどう出るか？

「誰じゃキサマは？」

先頭のアンドレッドの様な容姿の男がボソリと呟く。すかさず、弟子と思われる物が、何やら耳打ちをする。

「ふん。冒険者、か。ハズレじゃな」

「ハズレ？ では一体何が当たりなんだ」

「ハズレに答える必要など無いわ」

「おいおい。こっちは苦労して此処まで来ているんだ。そう邪険にしなくてもいいだろう？」

モモンはそう言いつつも、目の前の男、カジットへの興味が段々と薄れて行くのを感じていた。

その理由は、霊廟入口から感じる視線？ の様な物のせいだった。

「ふう、仕方が無い。ナーベ、こちらの相手は任せる。私は……そうだな、お前が相手をしてくれるか？」

そう言つて、グレートソードを掲げる。

後ろには、いつの間にか女、ナーベが付き従つていた。

「あーれー、ばれちゃった？　でも何でかなあ」

呑気な、だが神経を逆なでするような甘い声と共に、霊廟から女が現れた。

「お前の体に聞いてみたらどうだ？」

「いやーん。えっち、へんたーい！」

茶化す様に、女は自身を抱きしめ身体をくねらせる。だが、一瞬の後表情を変えると、

マントを広げ

「んー、もしかしてコレのせいかなー」

そう言つて誇らしげに、鎧に括りつけた数多の金属製のプレートを見せる。

「ああ、それだよ。それがお前達の居所を教えてくれたのだよ」

「ふーん」

モモンの言葉に、女は興味なさげに相槌を打った。方やモモンも、女の体になど興味は無いと言うのか、周りを見渡すと

「ふむ、ここは少々狭いな。おい、お前、俺達は向こうで殺し合わないか？」

挑発的な言葉を投げつける。

女は怯むどころか、ニヤリと口を半月にすると

「あは。素敵なお誘い、あつぎーす」

ふざけた言葉と共に、微妙な距離を保ちながら歩く。

「ねー。あんた、名前は何ていうの？ あ、私はクレマンティーヌ」

「ふつ。モモンだ」

「へー、モモンねえ。聞いた事が無いなあー」

ゆっくりと進む二人の姿は、酷く滑稽な物に映る。これから殺し合うであろう双方から、殺気のさの字も感じられなかった。まるで、陽だまりを散歩する様に、まるで、仲の良い友達のように。

しばらく歩くと、開けた場所に出た。恐らくは、いずれ誰かが土に返る予定の場所なのだろう。

モモンは、歩みを止め振り向くと

「ここで良いだろう。異存は無いな？」

「おっけー」

短い言葉を交わし、お互い得物を抜く。

モモンはグレートソードを、クレマンティーヌはモーニングスターを。両腕を広げ、

モモンは無形の構えを取る。方やクレマンティーヌは、まるで地面に這いつくばる様に姿勢を低くし

「不落要塞、疾風走破、超回避、能力向上、能力超向上」

呟く様に、自身の武技を唱える。

この瞬間、二人から殺気があふれ出して行き、一瞬の静寂の後。バン！　と言う破裂音と共に、クレマンティーヌが走り出す。それは走る、と言うより、発射すると言った方が正解の様な光景だ。

それほどまでに、クレマンティーヌは早かった。

一瞬にして、モモンとの距離を詰めると、モーニングスターを横薙ぎに振るう。僅かに遅れ、鎖で繋がれた棘付き鉄球が、モモンの右側頭部を襲う。割れ鐘の様な音を立て、鉄球はモモンの頭部を打ち抜いた。

グラリとモモンの姿勢が揺らぐ。それを見、クレマンティーヌは勝ちを確信する。だが、そう旨くは行かない。モモンは揺れただけだった。

モモンの、左のグレートソードが切り上げる様にクレマンティーヌを襲う。

「流水加速」

そう呟くと、クレマンティーヌはネコ科の動物の様に、その斬撃をかわす。そして、重力が、体重が無いかの様な軽さで、地面に着地する。それと同時に、バックステップで

モモンとの距離を取った。

これだけを見ても、クレマンティーヌが相当の場数を踏んできた事が解る。

だからクレマンティーヌにも解る。

「あれー、あれれー。何で倒れないかなあ。そ・れ・に、てめえはバカかあ。てめえのは剣術でも何でもねーんだよお。てめえのは、そのバカ力で剣振り回してるだけの、お遊戯だつてーの。そんなんじや、この人外、クレマンティーヌ様には勝てねーんだよ」

「そうか？　でも……お前も私を倒せていないじゃ無いか。それに、ご自慢の刺殺武器はどうした？」

モモンの軽口に、一瞬クレマンティーヌは不機嫌な表情を浮かべるが、すぐに舐め切った様な表情に戻り、腰からステイレットを抜く。

「うーん、これの事お？　あ、そうだ。あのマジックキヤスター、お仲間だった？　いやー、楽しかったよお。なーんか必死でさあ。ずーとお仲間が来るって信じていたみたい。きやは。モモンさんがー、モモンさんがー、つてさ。あと、び何とかつてお姉さんが。あ、そつかり、モモンさんって、あんただー。きやはは」

そう言いながら、クレマンティーヌは狂った様に笑う。

しかし、モモンの態度は冷静その物だった。身動き一つせず、じつとその虚空の瞳でクレマンティーヌを見つめる。

「仲間、か。そうだとも言えるし、違うとも言える。だがな！ お前のしでかした事は……非常に不愉快だ！」

そう言つてモモンは、剣を掲げ………振り下ろす事は出来なかつた。

モモンとクレマンティヌとの中間地点。

その場所に、モモンにとって見知つた物が突き刺さつていた。

「フラッグポール。……ビッチさん？」

「まーったく、随分とはしゃいじやつてまあ。隊長の指導がなつていない証拠だね。うん」

暗闇の中、誰かが近付いて来た。

「だーれえ？ 楽しい時間を邪魔してくれちゃつて。私が誰だか解つてんのか？」

「元漆黒聖典、第九席次、疾風走破……脆弱なひよこちゃん。でしょ」

「て、てめえは。なんで。なんで！ なんで、てめえが居やがる！」

クレマンティヌの口からは、最早軽口などは漏れず、恐怖と混乱が同居する絶叫だけが響く。姿を現した人物、それは人間種最強の存在である、漆黒聖典、番外席次、絶死絶命。

「絶死絶命、何でお前が？」

モモンは困惑していた。そして、その問いは正しい物だ。

「さようか。で、首尾は？」

『マジックキャスターの蘇生は、お借りしたワンドにてペスが行いました。結果は成功ですが、若干のレベルダウンがあるかも、との事です』

「うむ。して、他の者は？」

『ペスの見立てですと、魂レベルで異種族へと変貌しており、蘇生させてもゾンビが生まれるだけだと。いかががいたしますか？』

「……………止めておこう。丁重に吊ってやってくれ」

『畏まりました』

「ご苦労じゃったな、ユリ。ペストーニャにも同様に言っておいてくれ」

『はい。では、失礼します』

ビクトーリアは、こめかみから指を離すと、眼下に視線を移し

「さてナーベラル。ここからは、勉強の時間じゃ」

二つの戦い

「ありがと、骨の王様」

番外席次は、にっこり笑ってそう言うのと、ゆっくりとした速度でフラッグポールに近づき、それを引き抜く。

そして、いつもビクトーリアがしている様に、肩の上でそれを遊ばせる。

「まあ、連れて行くと言っても、このひよこは素直には従わないから……」

言うが早いか、番外席次はクレマンティーヌ目掛け、フラッグポールを振り下ろす。だが、クレマンティーヌ自身も、力では敵わない事は重々承知だ。左のステイレットを、フラッグポールと交差させると、その柄を滑らせ、同時に身体を反転させる。

そして右のステイレットを、番外席次の眉間目掛けて突き出す。だが、そこにはすでに狙いの物は無かった。

「え？」

そう眩いた瞬間、クレマンティーヌは腹部に衝撃を覚える。

それによって、その身体は吹き飛び、地面を二回、三回と転がり土に塗れた。

番外席次にとって、これはビクトーリアと剣を交えた時と同じだ。クレマンティーヌ

の攻撃の瞬間、頭を下げながら身体を反転させ、その回転の勢いそのまま腹部に蹴りを打ったのだ。

ゆっくりと番外席次は、クレマンティーヌへと近づき、右足を上げる。そして、勢いよく踏み抜いた。

だが、この行動は、寸前の所で地を転がりクレマンティーヌはかわす事に成功する。クレマンティーヌはその勢いを利用し、何とか立ちあがる事に成功した。

「あつぶねーな」

「ふん。素直に潰れば良いのに」

「けっ！ 気にいらねー。気にいらねえーんだよ！」

怒鳴りつけながら、超速で突撃する。

しかし、番外席次は僅かに身体を捻ると、自身の脇でクレマンティーヌの右腕を取り、すかさず右膝をクレマンティーヌの顎をめぐけて打ち上げる。もはや、一方的な攻防だった。

どんな攻撃を持つても、その全てが番外席次のカウンターで弾かれてしまう。どんなに頑張つて手を伸ばしても、決して手が届かない。

「クソ！ クソ！ クソ！」

それでもクレマンティーヌは立ち上がる。

自分の欲しい物を手に入れる為に。

自分の行きたい場所にたどり着く為に。

「……黄金。私は黄金を手に入れるんだ。クソツタレ、どけ、死ぬ……」

「はあ？ 黄金？ あんた、お金の為にやってたの？ 落ちたもんだわ」

そう言つて番外席次はせせら笑う。

「はあ。てめえこそ何言つてんだ。黄金だよ。私の黄金だよ！ 煉獄の王を、ビクトーリア様を………手に入れんだよ！ ビクトーリア様に、私を見て貰うんだよ！ ビクトーリア様に、私を捧げんだよ！」

クレマンティーヌの必死の叫びに、番外席次は興味無さそうに相槌を打つと。

「ふーん。おおさまを、ねえ。ねえ、ひよこ。私が何で此処に居ると思う？」

「はあ？」

「一体誰が、私を檻から解放したと思う？ 一体どんな人だったら、法国を言う通りに出来ると思う？ 一体どんな神様だったら………私が愛を捧げると思う？ 正解は………煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイム様」

番外席次の言葉に、クレマンティーヌの表情は一瞬引き攣り

「………うあああああああああああああ！」

絶叫が、墓地に響く。

全てを理解した。

全てが理解出来た。

自分のしてきた事は………愛する神の怒りを買う行いだつた事に。

クレマンティーヌは叫びながら、拳を握り番外席次へと突進する。

番外席次はタイミングを取り、その場でクルリとバク宙を決める。しかしそれが只のバク宙では無い事は解り切つた事。足を前後に伸ばしたT字の様なその姿勢で、クレマンティーヌの顎を、その爪先で正確に穿つ。

そして着地すると、その勢いのまま身を屈ませ足を払つた。自然とクレマンティーヌの身体は、尻もちを着いた姿勢になる。そのタイミングで番外席次は……横蹴りでクレマンティーヌの右側頭部を撃ち抜いた。

その瞬間、糸の切れた人形のように、クレマンティーヌは地に伏せた。

「ほう、その戦い方は……」

モモンが関心した様に声をかける。

番外席次は嬉しそうに振り向くと

「おおさまに教えてもらったの」

そう言うと、クレマンティーヌに近づき腰を降ろす。

そして……クレマンティーヌの衣服を剥ぎ出した。

「ちよ、お前、何をやってるんだ！」

「なに？ あ、これ。ひよこを連れて行くのは良いんだけどね。打ち取った証拠がいるでしょ。これが証拠になるからって、おおさまが」

そう言つて番外席次は、まだ体温が残るクレマンティーヌのブラジャー型胸部鎧とスカートを、モモンに手渡す。

「う、うん。そうか。そうだな」

その後番外席次は、腰のフリントロック式の銃を抜き、虚空へと発射する。場には暗闇が出現し、番外席次はクレマンティーヌを連れ、闇へと消えて行った。

そして、女性の生温かいブラとスカートを握りしめる、フルプレートフルプレートの男だけが取り残された。



「スケリトル母のドラゴン竜、か。きて、ナーベラルよ、どうする？」

楽しんで眼下を見下ろすビクトリアの瞳には、スケリトル・ドラゴンと戦う冒険者

ナーベの姿があった。

「さあどうする？ マジックキャスターには、荷が重い相手よ。頭を下げ許しを乞うてはどうじゃー！」

スケリトル・ドラゴンの召喚により、有利を確信したカジットが声高々に叫ぶ。

「このガガンボが。せめてゲンゴロウに進化してから言いなさい」

そう言うとナーベは上空へと跳ね、スケリトル・ドラゴンの、その骨の顔面を鞘に収まった剣で殴打する。だが、スケリトル・ドラゴンは少し揺れただけで、すぐさまその前足でナーベを蹴りつける。直撃を食らい、ナーベは地に伏せる事になった。

スケリトル・ドラゴン、Lv16のモンスター。実質、Lv62のナーベラル・ガンマの敵では無い。だが、冒険者のナーベとして第三位階以上の魔法を禁止された状態では、戦闘職をほぼ習得していないナーベにとって、有効手段が無いのが事実だ。

しかし、例えナーベとしてでも、ナザリックの、主人アインズ・ウール・ゴウンの名誉の為に、引く事は出来なかった。だからこそ、ナーベは何度打ち倒されても起き上がっていた。

だが、そんなナーベに更なる脅威が襲う。

上空から巨大な影が一体、この場に飛来した。

「スケリトル・ドラゴンが、二体」

「ふはははは！ どうじゃ！ この状況で、まだ減らず口が叩けるか！ 魔法への絶対耐性を持つ、スケリトル・ドラゴン二体を前にして！」

「くっ」

カジットは優位を武器に勝ち誇る。

だが、場は静寂に包まれる事になる。轟音と落雷と共に、一人の人物が戦いに割って入ったのだ。其の者、ビクトーリア・F・ホーエンハイム。

戦いの場には相応しくない、頬笑みを浮かべながらその瞳はナーベを見つめていた。「ぼろぼろじゃのう、ナーベ」

掛けられた言葉に、ナーベは消えてしまいたくなくなった。自らの主人が信頼する者に、自分の惨めな姿をさらしたのだ。恥ずかしさと悔しさで、ナーベの心は染まっていた。

「ナーベよ、うぬは少し待つておれ。妾はその細いのと話があるゆえ」
そう言うのと視線をカジットへと向けた。

が、カジットを見た瞬間、ビクトーリアの背筋に冷たい物が流れる。

カジットは、目を見開き血走らせながら、口は言葉が出てこない様で開いたり閉じたり、両手は震え、じりじりと近寄って来ていた。

正直に言つて、気持ち悪いのだ。

「れ、れんぐくの、おう」

「うん?」

「煉獄、の王であらせられるか?」

ビクトーリアは、やつと理解する。どうやら目の前の気色の悪い人物は、自分の事を聞いているらしい。それならば、素直に答えてやるのが人?の情、と言う物だろう。

「そうじゃ。妾がビクトーリア・F・ホーエンハイムじゃ」

とりあえず、威風堂々と名乗りを上げる。

だが、これがいけなかつたのだらうか? カジットら、ローブを纏った集団は、瞬時に膝を着き、頭を下げる。

そして……

「お待ちしておりました、煉獄の王よ。いと高き御方」

仰々しい言葉を発つし、歓迎の意を告げる。

此の時ビクトーリアは、彼らの言葉を理解するのに暫しの時間を要した。

「待つておつた、じゃと」

「はっ! 煉獄の王。我らが黄金」

頭が痛くなる思いだった。

この者達は、自分に会いたいが為に、この事象を引き起こしたのだ。

この程度の事象を。

「なんともまあ、こんなこじんまりとした祭りで、妾を呼び出せると思うとは。舐められた物よ」

「な、なんと?」

「妾が此処へ参つたのは、後に居る愛しき娘に力を授ける為。うぬらなど、モモン一人で十分じゃからな」

カジツトらは言葉を失う。

力を見せた自分達よりも、この王は後ろに居る脆弱な女を選ぶと言うのだ。

愚かだと感じた。

愚かだと思った。

愚かな選択だ。

「王よ! あなたは選択を間違えておられる。脆弱な小娘よりも、我らを! 我らの此の力を!」

「力……じゃと。ふん、何が力じゃ。この程度、妾が知る世界では、ペーペーの初心者でも出来る芸当。それとも何じゃ? あの骨格標本を自慢したいのか? ならば、工作の先生にでも誇るが良いわ」

カジツトの懇願も、ビクトーリアにはそよ風程度にしか効果が無い。

しかし、カジツトの懇願は続く。

「我らは、我らは……。王よ、何卒我らを、我らを導きたまえ！」

「めんどくさいのお。あー、わかった、わかった。話ぐらいは聞いてやる。じゃがな、自分の立ち位置は知らんとなあ」

そう言うときクトーリアは、意地の悪い笑みを浮かべ

「ナザリックが神体、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムが命ずる。ナーベラル・ガンマ、ナザリックが威を示せ！」

「え？」

ビクトーリアの言葉に、理解が付いていかないかの様にナーベは呟く。

その表情を、まるで楽しむ様に見つめながら

「何を慌けておる。妾はこう言うたのじゃ。あのゴミをけし飛ばせ、とな。理解できたかや？ 式式炎雷の娘よ」

此の言葉が、ナーベラルの心に火を付ける。

目の前の者は、ナザリックの僕では無く、至高の四十一人の一人、式式炎雷の娘として事を成せ、と言っているのだ。

心が暖かくなった。

心が軽くなった。

心が震えた。

そして確信する。

此の方もまた、主人なのだ。それならばどうする？ 決まっている。
主人が言うのだ。

「御心のままに。これよりは、冒険者ナーベでは無く、ナザリックが僕、戦闘メイド プレアデスが一人、ナーベラル・ガンマとして対処させて頂きます。良く見ておきなさい 銀バエ。脆弱と罵った力を」

堂々とそう宣言し、見に纏った早着替えのマントを翻す。

そして、そこには……鎧とメイド服が混じった奇妙な服を纏った姿の者が。冒険者 ナーベでは無く、ナーベラル・ガンマの姿があった。

「飛行フライ」

一つ呪文を口にして、その身は上空へと浮かぶ。

「さて、どうしますか。ビクトーリア様の御言葉。であるならば………一撃で仕留めるべきね」

そう呟くと、両の手を胸の前で合わせる。

「ツインマキシマイズマント二重最強化……」

『違う』

「ビクトーリア様？」

突然のビクトーリアからのメッセージにより、ナーベラルの両手に集めた力が、霧散する。

『風を感じよ。空気を感知よ。天を感じよ。式式炎雷が、何ゆえうぬのクラスに、エレメンタリスト（エア）を必要としたかを考えよ』

「風を？ 空気を？ 天を？ 私のクラス？」

ナーベラルは目を瞑り、意識を集中させる。

すると、徐々に見えない物が見えて行く。頬を撫でる風を。肌にとわり付く空気を。全てを見降ろす天を。その中で息づく小さな光を。

精神を集中し、その光を自身の内へと取り込んで行く。

そして……………

「チエ速イン・ドラ顔ゴン・ライすトニ龍ング雷！」

力ある言葉と共に、ナーベラルから二匹の雷の龍が得物目掛け突進した。敵を見定めた二匹の雷龍が、スケリトル・ドラゴンに食らいつく。その瞬間、辺りは昼と化し、爆音が鳴り響いた。

「さすがじゃな、ナーベラル・ガンマ。それでこそ式式炎雷の娘。そして、妾の因子を持つ者よ」

救国

番外席次がクレマンティヌを連れ、闇に消えた事で、モモンは一息吐く。

その瞬間、昼間と見紛う光と、爆音が場を支配した。

「あれは？ まさか、ナーベが！」

ナーベには、第三位階以上の魔法の使用を禁止していた。ならば、今の魔法はナーベでは無い事になる。では一体誰が？ 敵か、味方か？ モモンは急ぎ、霊廟へと向かった。

生身の身体だったら、確実に息を荒げていただろうと言う速度で走り、モモンは霊廟へと辿り着く。

現場は見るも無残な状態だった。大地は草木一本残らず、土は焦げブスブスと煙が立ち昇っていた。何かの爆心地か？ と思える場で、その中であって無事な霊廟には、メイド姿のナーベラル、敵であるはずのローブ姿の男達、そして、愉快げに高笑いを上げる………金びか馬鹿が一人。

「見事じゃったぞナーベラル。今のがこの世界での、力の使い方じゃ。うぬも感じたであらう？ 力の本流とも言える光を？」

「はい」

「この世界での魔法の効果は、前の世界とちいと違う様じゃ。前の世界では、魔法は只それだけじゃった。じゃがこの世界では、魔法はあらゆる物に影響を受ける。うぬの様に強化される場合もあれば、恐らく弱体の方へ行く事も有るじやろう。これからは、それを意識して魔法を行使せよ。良いな。そして……それをナザリックで共有せい」

ナーベラルは、この言葉に驚きと感銘を受け

「畏まりました、ビクトーリア様」

その言葉を返すナーベラルの表情は、支配者に向けるそれでは無く、憧れの何かに向ける、花が咲いた様な表情だった。

「うむー」

「うむ、じゃないでしょうに！ 駄巨乳ビッチがあー！」

満足げに場を閉めようとしたビクトーリアに、強烈なツツコミが入れられる。

相手はもちろん、モモン。

「ひゃう！ な、なに、かな？」

「何ですかこの状況！ でっかい花火まで打ち上げて！ 衛兵にどう説明するんです

！」

モモンの怒りはもつともな物だった。

この世界、この転移した世界では、火薬、と言う物は存在しない。よって、大規模な

爆発を起こす事が出来る事象は、魔法のみである。しかし、一般的に第三位階以上の魔法を行使出来る者は、僅かであり、そのほとんどが英雄、もしくはそれに類する者だ。ならば、この事象をどう説明すべきなのか。

モモン自身か、ナーベが使った、と説明するのはどうだろうか？仮にモモンが使った場合、優れた戦士であり、またマジックキャスターだと言う事になる。それは、超英雄の誕生と言われても仕方が無い。まだ、何も功績を挙げていない今の状況で、それを背負うにはリスクが大き過ぎる。

では、ナーベラルではどうだろう？第三位階の魔法が使えと言っただけで、驚かれる様な世界だ。その倍以上の位階魔法が行使できるとなれば、それもまた超英雄の誕生となりかねない。

したがって、どちらも採用できない愚策なのだ。

だが、ビクトーリアは余裕の態度でモモンと向き合う。

そして

「ふふん。それならば、妾に解決案があるぞよ」

「さすがです、ビクトーリア様！」

上機嫌で提案をするビクトーリアに、自分の良い所を見せられて、浮かれているナーベラルが賛辞を贈る。モモンは、無い頬がひきつる思いだった。大抵の場合、ビクトー

リアが上機嫌で披露する提案には、碌な物が無いからだ。

つまりは、状況を楽しんでいるのだ。

モモンはため息を吐くと、ビクトーリアに解決案を提示させる。

「うむ。この場合モモンにしるナーベラルがやったにしる、悪手じゃ。それは、うぬらも解つていよう」

この前置きには、モモンも素直に首を縦に振る。

「そう。じゃからな、二人でやった事にすれば良いのじゃよ。」

「はあ？ 何を言ってるんだ？ この駄巨乳は」

「駄巨乳とは失礼な。それで、妾の提案を聞くのかや？ 聞かぬのかや？」

ビクトーリアの問いに、モモンは一瞬の沈黙の後

「とりあえず聞いて置こうか」

重々しく、そう答えるのだった。

「さようか。まずは、じゃ。モモン。うぬのその剣、魔法の剣じゃな」

「いや、魔法で創った剣ですよ。コレ」

「うんにゃ。それは魔法の剣、なのじゃよ」

「どうしました？ 胸がデカすぎて、馬鹿になりました？」

言った瞬間、モモンの足もとにフラッグポールが突き刺さる。

「うおら骨、妾の話を聞く気が無いのか？ ええ？」

凄い劍幕だった。

さすがのモモンも、ふざけている場合では無いと姿勢を正す。

「それで、ビッチさん。これが魔法の劍、と仮定した場合どうなるんです？」

「うむ。その劍の能力は、魔法を貯め込み、倍加させるのじゃよ」

ビクトーリアの発言に、モモンは言葉を失う。

魔法を貯め込み倍加させる？ そんな都合の良い物など存在するのか？

「でも、都合良すぎませんかねえ。それってチート武器じゃ無いですか」

「そうじゃ。じゃが、それがどうした？ まずは伝説からじゃよ」

「伝説？」

「そうじゃ。伝説じゃ。どこからとも無く現われた、伝説の劍を持った漆黒の戦士。そ

の名はモモン！ どうじゃ？」

伝説と言う言葉と、ビクトーリアの言い様に、モモンの厨二病がうずき出す。

だが、先ほどの愚策の件が頭をよぎる。ビクトーリアが言っている事は、先ほど自身自身が愚策と切って捨てた案と、同じでは無いかと。モモンは、素直にソレを口に出して見る事にする。

「しかしビッチさん、ビッチさんが言っている事って、さっきの愚策と同じじゃありません

んか？」

「そう聞こえたかや？ 同じように聞こえるかも知れんが、ビミョーに違っておるのじゃよ」

「はあ。解るか、ナーベラル」

「至高の存在である、モモンさ——んが解らない事を、私などが、理解できる筈がありません」

「そ、そうか」

モモンは口を噤み、一度頭の中で整理してみる。

しかし、答えは一行に出はしなかった。

そんな様子を楽しげに見ていたビクトーリアは、コホンと咳払いを一つし、回答を提示する。

「コレと先ほどの違いは、アイテムを使う事じゃ」

「アイテム？」

「そうじゃ。この話には、三つの物が揃わねばこの功績は残せなんだと言うておる。まずは一つめ。これは魔法を貯え倍加させる剣じゃ」

この言葉に、モモンもナーベラルも頷く事で肯定する。

「そして二つ目に、第三位階の魔法が使える、ナーベラルの存在じゃ。倍加出来ても、第

一位階の魔法では意味が無いからの。そして三つ目。それを扱う事が出来る、戦士の存在じゃ。それだけの力を振るう事が出来る者、じゃな」

ビクトーリアの話しに、頷く事は出来る。だが、これが愚策以上の効果があるとも思えない。しかし、ビクトーリアの話は、まだ終わっていないかった。

「これはのう、受け取る者によつて違った表情を見せるのじゃよ。ある者はこう思う。剣とマジックキャスターが居なかつたら、戦士はたいした事は無い。またある者はこう思う。剣とマジックキャスターを使いこなせる、戦士は凄い。そして、またある者はこう思う。戦士にそれだけの力の切つ掛けを授けた、マジックキャスターは凄い。またまたある者はこう思う。戦士とマジックキャスターは、剣が無かつたらたいした事は無い、とな」

ビクトーリアは、こう言っているのだ。取る者によつて、違う顔を見せる話によつて、名を上げつつも、上げ過ぎない様になると。

だが、モモンは疑問に思う。

誰にも言つてはいないが、自分が名声を得たいのは、この世界に転移してきているかも知れない、ギルドメンバーにあててだ。では、ビクトーリアはどうなのだろう？

彼女は何故、こうにも？

「ビッチさん。何故ビッチさんは、こうまでしてくれるんです？」

「うん？ 名声を得ることかや？」

「ええ」

モモンの問いに、ビクトーリアは暫し無言の後

「うーむ。救国の英雄、と言う物を創ってみたくてのう」

「救国、ですか？」

「そうじゃ。どこの国でも良いのじゃが、その国の英雄。いや、英雄を超えた英雄が、妾の計画に必要ななるかも、と思うてな。その下準備として、救国の英雄、漆黒のモモンを創ろうと思うて」

「計画って。一体何です？」

「秘密じゃ」

ビクトーリアは、そう言っただけで笑むのみだった。

それに対し、モモンはじつと視線を向ける。絶対に何か、良からぬ事を考えている、と。

だが、当のビクトーリアは、パンツ！と一つ手を打つと

「さて、さらわれた王子様は、この中じゃ。妾は行く所が有るゆえ、ここらで失礼するぞよ」

そうふざけた言葉を残し、フリントロック短銃を発射する。

そして、開いた暗闇に、ロープ姿の者達と消えて行つた。

「ビクトーリア様は、一体何をお考えなのでしようか？」

ナーベラルが、ポツリと呟く様に口を開く。

「解らん。だが、あの魔女の事だ、ナザリックの不利益にはならんだろうが、碌な物では無いだろうな」



ロープの男達、カジットの一味が闇を抜けた場所は、すり鉢状の石造り場所だった。その一番低い場所で、カジット達は立ち尽くし、その場所から階段状に三段程上がった場所で、ビクトーリアが腰を降ろす。

「(ト、トトト)は一体？」

カジットは不安げに声を漏らす。

「そう怯えるでは無い。取って食つたりはせぬわ」

ビクトーリアは、そう呟くのみ。

沈黙が支配する中、時間にして五分程度だろうか、人の気配が生まれる。

「王よ、お待たせして申し訳御座いません」

「よい。時間を取らせてすまん。ニグンよ」

現れた人物は、スレイン法国最高次官、ニグン・グリッド・ルーイン。

この登場に、目を見開き驚きを顕にしたのは、カジット。

「ほ、法服、じゃと。で、では此処は？」

「ええ。スレイン法国ですよ」

カジットの感情など露にも関せず、ニグンが淡々と事実を告げる。

「王から、あらましは聞いています。まずは、名は？」

「何？」

「名を聞いていますのですよ。答えなさい」

ニグンは、冷静に、それでいて圧を掛ける様に言葉を口にする。カジットの顔に、汗が浮かぶ。押されているのは、有々と解った。

「カ、カジットじゃ」

「ほう。フルネームで答えなさい」

「ぐ。カ、カジット・デイル・バダンテール」

「洗礼名があると言う事は……あなた、法国の人間ですね。」

確認を終え、ニグンの視線はビクトーリアへ。

それに相對する様に、ビクトーリアは小さく頷く。

「それではカジット、これからが本番です。あなたの目的を、聞かせて頂けますかな？」

「り、理由じやと。そんな物、言う必要——」

「王が聞いているのです。答えなさい」

きつぱりと言ひ切るニグンの言葉には、得も言われぬ重さがあつた。

「わ、儂は、幼い頃——」

「そんな事は聞いてはいませんよ！ 目的を言いなさい！」

ニグンの言葉は、こう言つていた。

カジット達には、何の興味も無い、と。

「目的を」

ニグンは再度、質問を繰り返す。

冷たい目が、じつとカジット達を睨みつける。

「儂らの、目的は、あ、新たな蘇生魔法の開発……」

カジットが、その言葉を口にした瞬間、ビクトーリアが立ち上がる。

そして、ニグンへと近寄り

「成程のう。ならば、望みを叶えてやろうでは無いか。ニグン、彼奴等の事は任せる」

「王の御心のままに」

そう言うと、ビクトーリアは法国を後にした。



くナザリツク地下大墳墓表層階く

その場所に、番外席次と意識を失ったクレマンティーヌの姿はあった。

二人の出迎えとして、ユリ・アルファとデス・ナイト一体が。

「絶死絶命、それが？」

「そう。コイツ。」

ユリがクレマンティーヌを見降ろす。その視線は、まるで興味が無い様であった。ただ、自分の主人を煩わせた者を、確認しているだけに見える。

「アルベド様の方は？」

「ええ。ビクトーリア様の指示通り、準備は出来ているそうよ」

「そう。それじゃあ」

「ええ」

確認を終え、クレマンティーヌをデス・ナイトに預け、ナザリツク地下大墳墓へと帰還する。

届く思い

混濁した意識の中、その者は眼を覚ました。

だが、その瞳に映る世界は、自分の知っている物では無かった。それどころか、一度も見た事が無い世界だった。広々とした部屋は、塵一つ落ちて居らず、そこを飾る調度品は、精巧な細工を施された一級品。横たわるベッドは天蓋付きで、それから下がる布は、薄く透き通っている。よほど細く高価な糸を使っているのだろう。布団、枕、一つとっても分厚く軽い。

此処は貴族、いや王族の部屋、と思われる場所だった。

しかし、自分にはこんな場所で寝かされている理由が無い。一体、自分はどうしたのだろうか？まだ霞が残る頭を振り、体を起こして見る。

そして、また驚いた。さらさらとした感触ながら、肌にしつとりと馴染む。そんなワンピース型の部屋着を着せられていた。

何が起こったのか？それだけが頭の中を支配する。

その時、ドアがノックされた。起きているのに気付いていないのか、ノックの主はドアを開け入室して来た。

「あれ、気が付いた？」

そう言つて入室して来たのは、番外席次。トコトコと何の遠慮も無くベッドに近づくと、丁寧に天蓋のカーテンを開ける。そして、ベッドに座る者の顔を、じつと見つめると

「うん。意識の混濁とかはないみたいだね。顔色も良いみたいだし。蘇生成功」

「蘇生？」

ベッドに座る者、少女ニニヤの背筋に、冷たい物が走る。

「な、仲間は?!」

ニニヤの問いに、番外席次は無言で首を横に振る。

それを見た瞬間、ニニヤに感情が戻る。同時に、嗚咽と共に尽きる事無く涙が溢れ出す。番外席次は「また来るね」と声を掛け、部屋を後にした。

それから一週間、徐々にだがニニヤは落ち着きを取り戻していった。目にも力が戻り、食事も口にする様になっている。そして、此処がどこなのかも解った。何故、自分が此処に居るのかも。自分が救われた事も。

そんな中、ノックの音がした。

「はい。どうぞで」

「失礼致します」

居候でしか無い自分に対して、きちんとした礼を持ってメイドが入室して来る。メイドの名はユリ・アルファ。あの時、カルネ村で出会ったメイド。

「ニニヤ様、ビクトーリア様がお呼びです」

「は、はい」

ビクトーリア・F・ホーエンハイム、この屋敷の主人であり、番外席次、ユリ・アルファ共々、村で出会った人物だ。そして、ニニヤは村以降一度も会ってはいない。そんな人物が、急に自分呼び出すなど、一体何の用だろう？ニニヤは不思議に思いながらも、素直に言葉に従う。

部屋を出、目的の場所はすぐそこだった。階段の下。詳しくは、階段下に隠れる様に存在するドアの前だ。

「ニニヤ様、これを御付け下さい」

ユリは、指輪を一つ察し出す。ニニヤはそれを受け取り

「これは？」

「毒耐性の効果を持つ指輪です」

「ど、毒？」

「はい。薬も度が過ぎれば毒となりますから」

重病人でも居るのか？と考え、その指輪に指を通す。ユリは、それを確認すると、ゆっ

くりとドアを開ける。開かれたドアからは、赤ともピンクとも取れる煙が漏れて来た。

「これは？」

「回復のポーシオンを、気体化した物です。さあ、下でビクトーリア様がお待ちです」

そう言われたら、ニニヤには断れ無かった。恩人が待っていると言われているのだから。ドアの向こうは、別の世界と言っても良い物だ。

木材で形作られた館とは正反対に、ドアの向こうは無骨な石の階段で構成された空間があつた。その螺旋を描く石造りの階段を、下へ下へと降りて行く。

徐々に霧が強くなり、何かくぐもつた声も聞こえて来た。

その正体は、最下層に到着する事で、明らかになる。

ニニヤの瞳には、あの女が映っていた。自分を拷問し、仲間を殺した女が。その女が………スライムに捕食されている姿が。

「よう来たな。どうじゃ？ 愉快的な光景じゃろ？」

酷くつまらなそうな声が響く。

その声に視線を向ければ、スライムに捕食されるクレマンティーヌの前に置いた椅子に、どつかりと腰を降ろすビクトーリアの姿が。詰まらなそうに、何の感慨も無く、只、一点にビクトーリアの瞳はクレマンティーヌを見つめていた。

だが、そんなビクトーリアの神が作りし、その姿を見つめていたニニヤは気が付いた。

いや、気付いてしまったと言った方が正解だろう。

彼女の、ビクトリアアの黄金の瞳には、クレマンティーヌは映っていない事に。道端に転がる石ころの様に、土の上を這いずる蟻を見る様に、興味無く、詰まらなく、関心無く、只、前を向いているだけなのだ。

「おうごん。びくとーりあさま。おうごん。おうごん……………」

クレマンティーヌは、右腕を天井から鎖で繋がれ、全裸の状態で捕食され続けている。その右手には、指輪が一つ。そして、残りの左手、両足は……三分の一程を残し、存在していないかった。

「解るか、娘。今、こ奴は腹の中を喰われておる。その痛みたるや、精神異常無効の指輪をしても、この状態よ。ふふっ、愉快じゃろ」

「おうごん。びくとーりあさま……………うあ」

クレマンティーヌは、只、そう呟くのみ。

「ひ、ひどい」

二ニヤが言葉を漏らす。

「酷いですか？ あの者は、あなたの仲間を殺し、あなたを拷問する事で快樂を得る様な者ですよ。過去にもそれ以上の事をしている事でしょう。その者に罰を与えるのは、酷い事ですか？」

ユリは、少し気分を害した様な口調で、ニニヤにそう告げる。

「で、ですが、こんな……」

頭では解つていても、人としての心がそれを許さない、今のニニヤは、そんな状態だった。ビクトーリアとクレマンティーヌを、交互に見つめるが、どうする事も出来なかった。そんな状態のニニヤに、選択の声が飛ぶ。

「ならば、うぬならどうする？」

「え？」

「このまま放置し、餌とするか？ 首を飛ばし、一思いに殺すか？ それとも……許すか？」

ニニヤは理解した。自分はその為に、此処に連れて来られたのだと。選択をする為に、来たのだと。目を瞑り、今までの事を思い返す。

仲間の事を。

街で出会った、多くの人の事を。

家族の事を。

そして、姉の事を。

「助けてあげて下さい」

迷いなく、ニニヤは口にした。

ユリは、この選択に驚いている様だったが、ビクトーリアは表情を崩し「ありがとう」

その言葉を残し、非情が支配する世界から姿を消した。



「わ、わたし……」

クレマンティーヌは、ゆっくりとその赤い瞳孔に世界を映す。

「おー、目が覚めたみたいだねえ」

「だ、大丈夫、ですか？」

声を掛けられ、クレマンティーヌの意識は急激に覚醒して行く。そして、表情を引き攣らせる。眼に映る人物は、二番目に嫌悪している者と、自分が殺した者なのだから。

「てめえ！ それに、お前えは！」

「おーおー、そんな口が利ければ大丈夫だねえ」

番外席次はそう言うのと、クレマンティーヌの髪をむんずと掴み、引きずりながら部屋

を出る。

「い、痛い！ いたた。コラ！ テメエ！ 離せ！ 離しやがれ！」

「だーめ。おおさまに叱られるからねえ」

人の話を聞かず、番外席次は軽快に階段を下る。そうなれば、当然の事、引き摺られているクレマンティーヌは

「いだだだだだだだだだだだだだだだだだ！」

階段の角で、尻を打ち続けるのである。

しかし、それだけでは終わらない。階段を抜け、ビクトーリアの待つ書齋までには、丁寧に掃除された板張りの床が。

「あー！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！ 熱い！」

キユウー！と言う甲高い音を、クレマンティーヌは響かせる。

クレマンティーヌは、もう涙目だった。一体、これは何て言う拷問なのだろう、と。

この光景を見せ付けられているニニヤに出来る事は、苦笑いを浮かべる他無かった。

ガチャリと音を立てながらドアを開け、番外席次は書齋へと入る。ビクトーリアは、入って来た面子を見るなり、盛大な溜息を吐き

「小娘よ、妾は雌猫を連れて来いと言うたはずじゃぞ」

「うん？ 連れて来たけど」

「違う。違うのう。うぬが連れて来たのは、裸族じゃ。露出狂じゃ。生粋の変態じゃ。」

此の言葉で、番外席次とニニヤはクレマンティーヌを見つめ

「ああ」

同意の溜息を洩らす。クレマンティーヌの姿は、一糸纏わぬ姿、いわゆる全裸だった。

「ねえ、ひよこ。あんた何で裸なの？ 馬鹿なの？ 趣味なの？ 変態なの？」

「ああ？ てめえが連れて来たんだろおがぁ！」

大声で悪態を吐くクレマンティーヌだが、視線の端で憧れの者を見つけると、急にしおらしくなる。

「あ、あの、ビクトーリア様、で間違い無いでしょうか？」

もじもじと身体をくねらせ、羞恥に悶える少女の様に、質問を口にする。

「うん？ 裸族は妾の名が知りたいのかや？ 左様、妾が煉獄の王ビクトーリア・F・

ホーエンハイムじゃ」

「やつと、やつと会えた……」

クレマンティーヌは両手で顔を隠し、ふとももを擦り合わせながら喜びに打ち震える。そんな感動的で扇情的な場面も、傍から見れば妙な物だ。

「ねえ、何か着ない？ 趣味とはいえ、話相手がヌーティストって何かねえ」

「だから、てめえが連れて来たんだろおがぁ！」

「うるさいのお。着るものぐらい妾が出してやるわ」

そう言うのとビクトーリアは、アイテムボックスを探り

「えーつと、馬鹿には見えないドレスと、その娘が後生大事に抱きしめていた汚パンティーと、羊皮紙。好きなものを選ぶが良いぞ」

そう言うて、ニッコリとほほ笑みを浮かべる。

「おー、羊皮紙。なかなか高度な変態度。ここは馬鹿には見えないドレスだねえ。無難だけど」

番外席次も、この悪ノりに参加の意向を示す。

だが、そんなお祭り騒ぎもすぐに終わりを迎える。今まで微笑んでいたビクトーリアの顔から、表情が消えたのだ。少女の様に、はしやぎ、楽しんでいた顔から、全てを従える王のそれへと。

「遊びは此処までじゃ。さて、雌猫の処遇、じゃが……」

言うてビクトーリアは、クレマンティーヌに向け、自身の寝間着を投げ渡す。

「娘、この者の所有権はうぬに有る。どうする？」

急に話を振られ、なおかつクレマンティーヌが自分の物など、急すぎて、ニニヤに取って到底受け入れられる物では無い。

隣を見れば、クレマンティーヌが唇を噛み、何かに耐える様な表情でうつむいている。

ニニヤには、その表情に覚えがあった。それは、かつての自分の表情だ。力ある者に、手を伸ばす弱者の顔だ。どんなに怨んでも、どんなに恋焦がれても、決して手が思いが届かない者の表情だ。過程や工程、主義や手段、様々な違いはあれど、今のクレマンティーヌは過去の自分なのだ。

だが、一体どんな言葉で伝えれば良いのか、ニニヤには想像すら出来なかった。

「ふう。答えは出んか。ならば、その雌猫、妾が貰い受けるが、良いか？」

場の全員の目が、ピクトーリアに集中する。様々な思いを乗せ、その視線はこう言っていた。コイツ、今なんて言った、だ。

「何じゃ？ 何ぞ異存でもあるのか」

いかにも憤慨したぞ、と言った口調でピクトーリアは口を開く。

「でもさあ、いいの？」

心配そうに、番外席次がそう告げる。

「何がじゃ」

「あれだよ。変態だよ。快樂殺人鬼だよ」

「じゃがのう、此処で見捨てれば、さらにヤバい事しそうじゃし……」

そう言う口元は、僅かに緩み、その瞳は優しさを湛えていた。

番外席次はクレマンティーヌに近寄ると、その身体を肘でつつく。

「ほら、おおさまにお礼」

「う、うん」

クレマンティーヌは、頬を染め、どもりながら

「あ、あの。ビクトーリア様……」

「街中で素っ裸になって、走りながら妾の名を連呼されてものう」

「え？」

全員が疑問の声を上げる。

「何を恍けた顔をしておる。それとも何か、小娘、妾がヌーティストの王と言われても、良いと言うのか？ ならば、うぬも呼ばれてみよ。漆黑聖典 番外席次 神人 脱衣脱毛、とか？」

「うっ！ それは……」

番外席次の頬がひきつる。ビクトーリアの言う事は、あまりにも、なのだ。だが、すぐにそんな砕けた雰囲気は消え去り

「まあ、妾の下に居れば、これ以上悪さはしまい。これが落とし所なのじやろうて」

「ふーん。でもさあ、おおさま」

「何じゃ？」

「立場的には、どうなるの？」

番外席次の問いに、ビクトーリアは一度目をつむり

「妾の小姓で良からう。しばらくは、身の回りの雑務をさせる……それで良からう。雌猫もそれで良いな？」

ビクトーリアは、クレマンティーヌに視線を向ける。クレマンティーヌは、身を縮め、小刻みに震えながら、何度も頷く。その姿を確認し、ビクトーリアはため息を一つ吐くと

「それから、そこな魔女っ娘」

「えー！ ぼ、ぼくですか？」

驚きと共に、ニニヤが返事を返す。

「蘇生が成功した反動で、うぬは以前よりも弱体化しておる。うぬも、しばらく此処に留まるが良い」

此の言葉に、ニニヤは一瞬虚を突かれるが、彼女本来の柔らかい笑みを浮かべ

「はい。お世話になります」

そう答えるのだった。

思わぬ来客

エ・ランテルでの事件から三日。

事後処理は終息に向かい、アインズとナーベラルもナザリックに帰還していた。

そんな何でも無い一日の始まりは、ピクトーリアが頭を抱える事から始まった。本来、ユリとペストニーヤの交代制で行われていた朝食の準備は、二ニヤが簡単な料理なら出来る為、昨日からアルベドの裁量により、二ニヤに一任されている。朝目覚め、食事をし、さて、情報の精査と書齋のドアを開けると、それはあった。

黒く、丸い物体が、書齋の床に鎮座していた。

周囲を見回し、異常が無い事を確認すると、その物体の精査に取り掛かる。注意しながら、机側に回り、やっとその物体の正体が判明する。

その物体は、土下座姿勢のナーベラル・ガンマ、だった。

「へ？ ナ、ナーベラルよ、うぬは何をやっているのじや？」

この問いかけに対し、ナーベラルは頭を上げず

「これまでの非礼、伏してお詫びを」

つまり、ナーベラルは謝りに来た、と言う事だ。

「う、うん。解ったから、頭を上げて。ね」

「いいえ。今まで非礼を行った日々、それと同じ日数こうしてお詫びを」
「て、転移して来てからの？」

「は、」

生真面目な性格だと聞かされてはいたが、まさか此処までとは。

ビクトーリアは、ドン引きだった。それよりも、誰かにこんな所を見られたら。急ぎ
ビクトーリアは、床に這いつくばり、ナーベラルのしょんぼりとしたポニーテールに話
しかける。

「ナーベラル、もう良いから。ね。怒ってないから。ビッチさん、ぜんぜん怒ってないか
ら。ね」

「いえ。本来ならば、この命を持って謝罪すべき事柄。しかし、これ以上、ビクトーリア
様の御尊顔を悲しみに曇らせる事は出来ません。愚かな私には、伏してお詫びをする以
外方法が思い浮かびませんでした」

そう言つて、こちらの言葉を全く聞いてはくれない。

生真面目な上、頑固だった。

ビクトーリアは「むむむ」と唸りを上げる。

これは、思ったよりも厄介な事態だと、ビクトーリアの頭脳は告げる。

「そ、それじゃあ、ちよこつと顔、上げてみようか。ナーベラルの顔を、ビッチさんに見せてくれるかな」

幼子をあやす様に、ビクトーリアは優しく語りかける。

その結果、ナーベラルの肩がピクリと動く。その反応を見過ごすビクトーリアではない。

「ほーら、ナーベラル。可愛い顔を見せてくれるかなー？ 見たいなー。ビッチさん、可愛いナーベラルが見たいなー」

再度、ナーベラルの肩が動き、ゆつくりとだが、その顔が上がる。それでも、地に着けた両の掌の上に、僅かに瞳が見える程度。

「綺麗な瞳だねえ。まるで、黒曜石みたい。髪の色とも合ってるし……」

御世辞とも取れる、美辞麗句を並べ、何とかナーベラルをなだめ様と試みる。数々の褒め言葉を投げかけると、ナーベラルに変化が起る。黒曜石と例えたその瞳から、大粒の涙が溢れて来ていた。それは留まる事無く、次から次へと溢れ出て来る。

またしてもビクトーリアは、再び「むむむ」と唸る他無かった。

「失態を犯した此の身に、何と暖かい御言葉を……。やはり、我が命を持つて——」

やはり、そこに行きつくのかと、ビクトーリアはため息をこぼす。この段階で、説得は無理、とビクトーリアは判断を下す。ならば、打てる手段は只一つ。

ビクトーリアは、ナーベラルの形の良い頭部をガツチリと掴むと、おもむろに自身の胸へと抱き寄せる。

「え？」

ナーベラルは虚を突かれた様な声を出し、涙に濡れた顔をビクトーリアの胸に埋めた。

「ふう。大変じゃったな、ナーベラル。知らぬ地で、主を守らねばならんかったのじゃ、うぬの苦勞も、相当な物じゃろうて。頑張ったのう。ありがとうな。アインズを、我が友モモンガさんを守ってくれて。じゃが、そう氣負うな。失敗したら、妾に言うて来い。言つたであろう、うぬらは妾が守ると」

そう言つて、一層強く抱きしめる。

「う、うう、ビクトーリアさまあ」

ナーベラルが嗚咽を漏らす。

「私、私、頑張つてみたんです。でも、全然、ダメで……。アインズ様に、ご迷惑ばかり……」

ビクトーリアは、ナーベラルの髪を優しく撫でながら

「さようか。じゃがのう、うぬらは、まだ産まれたばかりの赤子の様な存在じゃ。創造主に、そうあれと創られたままのな。じゃがな、何時かは、かくありたいと思える様になつ

て欲しいのじゃ。うぬの、ナーベラル・ガンマの意思での」

ビクトーリアの言葉に、ナーベラルはキョトンとした表情を浮かべる。

その顔を、慈愛溢れる笑みで見つめ

「今は解らずとも良い。じゃが、いつか解つてくりやれ。これは、妾の願いじゃ」

「は、はい」

「うん。今はそれで良い」

それから約二時間、ナーベラルはビクトーリアの膝を枕に心を癒し、ビクトーリアはその髪を優しく撫で続けたのだった。



くナザリツク第九階層く

ナーベラルは、頬をぐにぐにとほぐしながら、自室への道を進む。気を抜くと、頬が緩みそうになるのだ。何時もなら凜とした空気を纏うその姿は、どこか安らいで見えた。

「あれー、ナーちゃんじゃないっすか。どこ行ってたっすか？」

「あ、ルプー」

声をかけて来たのは、戦闘メイド プレアデスが次姉、ルプスレギナ・ベータ。種族
ワーウルフであり、クレリック。

「あれ、どうしたっすか？ 随分と御機嫌っすね」

「え、そう？」

「そうっすよ。何か、こころもち顔が赤いっすよ」

そう言いながら、ナーベラルに近寄りくんくんと匂いを嗅ぐ。

「ん？ 知らない匂いっすね。ナーちゃん何処へ行っつたっすか？」

この問いに、ナーベラルは一度天を仰ぐと

「星青の館。ビクトーリア様の所へ」

「あー。あの化け物の所っすかあ」

言葉を発した瞬間、ルプスレギナの頬が、ガツチリと掴まれる。

「駄犬。今、何と言いましたか？」

眉間に皺を寄せた、見た事も無い表情の妹が目の前に居た。

「へ、ナーちゃん？」

言われて気付いたのか、ナーベラルは慌てて手を引く。

この行動に驚きながらも、ルプスレギナは言葉を続ける。化け物と言う言葉に注意しながら。

「そ、それで、ビクトーリア様と何をしてたつすか？」

「優しく、抱いていただきました」

「え？ ゴメン、もう一回良いつすか？」

「ビクトーリア様に、優しく、抱いていただきました」

「……………ナーちゃんが、女になったつす……………」

その日、ナザリツク第九階層は大騒ぎとなった。

鮮血の戦乙女 化物達の宴

未整地の街道は車輪を拒み、ガタゴトと馬車を軋ませる。周りは漆黒の闇。その中で、小さなランプの光が、心細く灯る。それは、これから起こる常識を逸した惨劇を物語っている様だった。

暗闇に薄つすらと浮かぶ二頭立ての豪華な馬車には、御者が一人、車内に五人。だが、人と言う種で括れば、みすぼらしい服装の御者が一人だけだった。その他の者は、全て異形と称される、化け物の集団。

トウルルーヴァンパイア 真祖シャルティア・ブラッドフォールン。

シャルティアの部下である、ヴァンパイア^吸・ブライト^鬼が二体。

龍人、セバス・チャン。

スライム種である、ウボ^始・サスラ^{まり}、ソリュシヤン・イプシロン。

この世の絶望を詰め込んだかの様な、集団である。

だが、ゆめゆめ忘れるべからず。彼らが、この世界の悪夢、ナザリック地下大墳墓の、ほんの一握りだと言う事を。

「そう言えばソリュシャン。なかなかの、演技であつたそうでありんすねえ」
「楽しんで、そう口にするのは、シャルティア。」

「いえ、私など。シナリオ通りに行つたまでですから」

シナリオ、これこそが、闇夜に馬車を走らせる原因となつた出来事である。
ソリュシャンのこの言葉に、シャルティアは「謙遜を」と返す。

「しかし、シャルティア様——」

「シャルティアで結構でありんすよ、セバス。わらわ達は、役職の上下はあつても、個としての上下はありんせんのだから」

シャルティアの言葉を、セバスは呑み込むように一度腰を折ると

「では、シャルティア。あなたの任務は、武技を持つ者の精査、との事でしたが？」
「そうでありんすえ」

セバスは、疑問形で言葉を発した後、言い淀む様に一度口を嚙み

「この任務、人を探るのならば、デミウルゴスの方が適役だつたのではないでしようか？」

不思議に思つていた事を口にする。

その瞬間、シャルティアの眉が一瞬跳ねるが、すぐに落ち着きを取り戻す。

「確かに、そうかも知れんでありんす。アインズ様ならば……そう言つた方針を取られ

た可能性もありんす」

「で、では、この任務の発案元は……」

「お姉さま、でありんすえ」

「お姉さま？」

セバスとソリュシャンが、同時に疑問を口にする。

「お姉さまは、ビクトーリア様でありんすよ」

セバスは驚きを顕にする。

それと同時に、カルネ村でのビクトーリアの姿が蘇る。あの時、ビクトーリアは、戦況を見ていると言っていた。自分もそれを信じた。

だが、それだけでは無かったとシャルティアは言っているのだ。ビクトーリアが見ていた戦況とは、場で起こる全ての事象の事だったのだから。

「で、では、何故ビクトーリア様はシャルティアを？」

「これは、アルベドからの指示で、お姉さま自身の御言葉ではありんせんが、この世界の者の、Lv上限が不明なためであるらしいんす」

「そ、そんな。脆弱な人間に恐怖するあまり、そんな判断を？」

ソリュシャンは驚きを顕わにする。だが、それはナザリックに与する者としては、当然の判断なのかも知れない。大多数の者にとって、人間とは、愚かで、脆弱な生物なの

だから。

しかし、今のソリュシヤンの言葉は、ビクトーリアを卑下する言葉でありながら、シャルティアをも卑下する物に聞こえてしまう。

「ああ！ ソリュシヤン、テメエ、私には無理って言いてえのか？」

「い、いえ。すいません。言葉足らずでした」

ソリュシヤンの謝罪に、シャルティアはため息を一つ吐くと

「まあ、良んす。セバスは知っているでありんしょうが、ソリュシヤンは絶死絶命を知っているでありんすか？」

ソリュシヤンは、「名前だけは」と答えるに留まる。

「で、ありんしたなら、しょうが無いでありんす。お姉さまのペットであるあの者は、Lv的にはプレアデスを上回る者でありんすよ」

「そんな者が？」

表情を引きつらせながら、ソリュシヤンは驚きを顕にする。

それに満足行つたのか、シャルティアは話を続ける。

「確かに、セバスの言う通り、此度の任務では、デミウルゴスが最適でありんしょう。アルベドからも、そう言われんした。でも彼の者は、Lv100と言いつても、戦闘力は高こうありません。絶死絶命の様な存在が、武技を使った場合のブースト量が解りん

せん内は、戦闘能力の高い者を、と言うのがお姉さまの結論でありんす」

セバス、ソリュシヤンから、驚きの声がかかる。

しかし、シャルティアは、すうっと目を細めると

「もう一つ、この辺りの掃除も任されていんす」

「掃除、と申しますと？」

セバスの問いに、シャルティアは無言で、御者台の方を指差す。それを見、二人は言葉の意味を深く理解した。

「しかし、シャルティア。ビクトーリア様をお姉さま、とは。お二人は、何か御関係が？」
セバスのプライベートな問いに、シャルティアは一度天井を見上げ

「良いんしょう。誰にも言つて無い事でありんすが、特にアルベドには教えんしんした
が、旅は道連れでありんす。これは、ペロロンチーノ様が、お決めになった事でありん
すえ」

「ほう、ペロロンチーノ様が」

「そう。わたしとお姉さまは……………えーと、百合姉妹でありんす」

「ほう。しかし、シャルティア、百合姉妹とはなんでしようか？」

セバスが疑問を口にする。

それに対して、シャルティアは何と答えたらと、こめかみに両の人差し指を当て、ぐ

りぐりと回しながら、言葉を選び口を開く。ぶくぶく茶釜に殴られながら、ペロロンチーノは何と言っていたか。

「えーとお。百合姉妹とはあ……………愛が深い姉妹を射す言葉でありんすえ。もう、心も身体も一つになりんすくらい」

「おおー」

自信満々に言葉を口にするシャルティアだが、その表情は、セバス、ソリュシヤンの驚きの声と共に、影を差す。口を固く結び、何かに詫びる様に、何かに怯える様に、その表情は見てとれた。

「シャルティア、どうしました？」

セバスの声に、答えるかの如くしつかりと両者を見つめ。

「二人とも、二人は何時から記憶がありんすか？」

「記憶？」

セバスとソリュシヤンの言葉が重なる。二人とも、意味が理解出来ない様だった。それは、当然の事だろう。シャルティアの質問は、唐突すぎなのだから。

「最近思い出したでありんす。まだ、ペロロンチーノ様がいらした頃、わたしは、お姉さまと会っていいんす」

「何ですと？」

「そう言えば……ユリ姉さまが言っていたわ。末の妹は、ビクトーリア様を知っていたって」

「オーレオールが、ですか？」

「はい、セバス様」

馬車内に沈黙が訪れた。

誰もが——ヴァンパイア・ブライドを除き——自身の最初の記憶を探る。

「私、は……へロへロ様の自室でしたわ」

最初に記憶の小旅行から帰還したのは、ソリュシヤンだった。

「私も同じですね。たちち・みー様の自室でした」

続いてセバスが。

「そうでありんしょうね。わたしも、そうでありんす。でも……」

「でも？」

「はつきりとした記憶は、そこからでありんすが、その前、ぼんやりした記憶がありんす。ナザリツクの表層部で、ペロロンチーノ様とお姉さまの三人で居た記憶が。そこで、優しい顔のお姉さまに、頭を撫でられ………確かあ………頑張りなんし、と言葉をかけられたでありんす」

セバスは顎髭を均しながら、シャルティアの言葉を噛みしめる。

これは、どう言う事なのだろうと。思考の海を泳ぐセバスに、ある事柄が浮かぶ。それは、自身の創造主であるたち・みーと、やまいこの会話だ。

「へたつちさん、胎教ってやってみました？」

「胎教って、産まれる前の子供に音楽を聞かせたりするやつですか？」

そして、セバスは、一つの回答を導き出す。

「シャルティア。それは、我々が産まれる前の記憶かも知れません」

「――」

セバスの発言に、シャルティアとソリュシャンが驚きを表す。

「し、しかしセバス。そんな事が起こりえんすか？」

「解りません。ただ、それぐらいしか説明がつかないのも……………ん？ 馬車が止まりましたな」

「魚が、餌に食いつきんした様でありんすな」

シャルティアはそう言うのと、二体のヴァンパイア・ブライドを引連れて、馬車の扉の前に立つ。その手を、ドアの取っ手に手を掛けた時、思いだした様に振り向き

「ソリュシャン。そなたの望み確かに了解したのであります。ザック、でありんしたか？」

あの人間、好きにするが良いでありんすよ」

「ありがとう御座います、シャルティア様」

そう言つて腰を折るソリュシヤンを確認すると、シャルティアは馬車の外へと歩を進める。



シャルティアが馬車から出ると、十数人の野盗と思われる男達が馬車の周りを囲んでいた。

「やつと出て来たか。勿体ぶらせやがって」

「ほっ！ なかなかの別嬪さんじゃねえか」

「まあ、成りは小せえが、胸の方は育つてやがる」

みすばらしい格好の男達が、口々に好きな事を叫ぶ。

その中で一人、戸惑いを感じている者がいた。男の名はザック。御者をしていた男だ。

男達は、非合法の商売を生業とする者達で、ザックもその一員だ。この襲撃は、商家のお嬢様へ偽装したソリュシャンが目的の物である。彼女を攫い、何をしようと言うのか。身代金か、売り渡すのか、楽しむ為か、恐らくは全てなのだろう。

そして、馬車から現れたのはシャルティア。

男達は知らなかった。だが、ザックは知っていた。目の前に立つ少女は………馬車には乗っていないかった少女なのだ。

一体、誰なのか？

一体、何者なのか？

そんなザックの混乱など、一切聞せず、場は動き出していた。男達は下卑た笑いを漏らし、シャルティアは詰まらなそうに欠伸を漏らす。その男達の一人が、シャルティアに向け、手を伸ばす。

だが、その手は直前で跳ねのけられた。

「触らんでくんなまし」

シャルティアの身のこなし、話し方、そのどちらも優雅で気品に満ちた物だった。だからこそ、疑わなかった。此の少女が、目当ての令嬢だと。だから気付かなかった、目の前の少女が、化け物である事に。

「一つ聞きたいであります。この中で武技が使える者はいんすか？」

この問いに、答える者はいなかった。

「そうでありんすか。もう一つ聞きたいのでありんすが、この中で一番偉い人は、誰でありんすか？」

シャルティアの、場にそぐわぬ素つとん狂な質問に、男達の視線は一点に集まる。それを確認したシャルティアは、ニヤリと半月の様な笑みを漏らし

「解つたでありんすか？ では、掃除を開始するでありんす」

言葉が終わつた瞬間、シャルティアの影から何かが飛び出し、場を、恐怖と、混乱と、血と、殺戮が支配する阿鼻叫喚の地獄へと変えた。二体のヴァンパイア・ブライドは、その美しい顔を、狂気と興奮で歪め、首を、腕を跳ね、男達の身体を食いちぎる。そこは、地獄。いや、強者による狩り場であつた。

その中で弱者、ザックは尻もちを着き、後ずさる事で何とか命を繋ぎ止めていた。少しづつ、少しづつ、木々の茂みへとその身体を隠す。その行動は、自分の背中が何かに当たる事によつて、終りを告げる。

「ザックさん」

背後から、優しい声が聞こえた。

男達の野太い悲鳴と、化け物たちの狂気を含んだ高笑い。そんな異常な世界で、酷く歪な、酷く滑稽な、優しさを含んだ声だつた。

ザックは慌てて後を仰ぎ見る。そこに居たのは、美麗なドレスを纏った女性。「もう大丈夫ですよ」

そう言葉を掛けながら、背後の女性は、ザックの身体を優しく抱き締める。ザックの背中で、女性の豊かな乳房が押しつぶされる。その体温が、柔らかさが、匂いが、ザックの精神を支配する。気が付けば、ザックの精神、肉体は、女性に包まれていた。それは母性、と言える物かもしれない。

底辺階級の出身であり、それゆえに、あらゆる物を奪われて来たザックにとって、これは初めての幸福と言ってもいい物だった。

「お、お嬢様……」

幸福の中、眩きながら再び後を振り向く。

そこには、神が創りし美貌を持つ、ソリュシヤンの顔………は、無かった。美しかった表情には、愉悦が張り付き、艶やかで可憐な唇は、大きく歪み、光を湛えた瞳は、どす黒く濁っていた。

「あら？ 気付いてしまったのですね。せつかく幸福の中で、食べてしまおうと思いましたが、」

背後の化け物は、そう言って笑う。

ザックは危険を感じ、脱出を図るが、粘度の高い何かに捉えられ、一步も前へは進め

人と言う種

「ふう。まあ片付きんした。それにしても——」

眩きながら、シャルティアは周りを見渡した。そこには、かつて人であった者の、残り物が散乱している。

「もう少し、マナーと言う物を、弁えなんし」

そう言つて、ヴァンパイア・ブライドを睨みつけた。その視線に、ヴァンパイア・ブライド達は、恥ずかしそうに肩をすくめる。

「まあ、それは今後の成長に期待しんす。まずは——」

シャルティアは、一人残された野盗の頭領を見つめる。

チャーム・スレシス
「全種族魅了」

シャルティアの力強い言葉と共に、その赤い双眸が輝きを増した。

「わたしが誰だか解りんすか？」

「何を言っているんだ？ 親友の顔を忘れるはずがないだろう」

シャルティアの使った魔法、全種族魅了は名の通り魅了系に属する魔法で、自分を相手の親しい者に置き換える魔法である。

「おめでとう御座います、シャルティア」

「おめでとう御座います、シャルティア様」

魔法の成功に対し、セバスとソリュシャンから、賛辞の言葉が漏れる。その隣で、二体のヴァンパイア・ブライドも拍手をしていた。浮かれる気持ちを窘めながら、シャルティアは目的の行動に移る。

「それでは聞かせてほしいんでありますが、そなたの周りに、武技が使える者はおりんすか？」

「なんだよ親友。そんな事か。おお、居るぜ。この先の、アジトに居るヤツが使えたはずだ。名は、確か……………ブレインだ。ブレイン・アングラウスってヤツだ」

「ブレイン、でありんすかあ」

シャルティアは、そうポツリと呟くと

「その者は、強いんでありんすかえ」

そんな疑問を投げかける。

しかし、これは当然の事だ。ナザリックの僕達にとつて、任務とは、主の命に則り、己が命を賭してもやり遂げなければならぬ物である。だが、そうは言っても、結果が付いてこなければ、意味が無い。そして、結果を残しても、その結果が主に落胆される様な物ではあつてはならないのだ。だからこそ、シャルティアは疑問を口にするのだ。

「ああ、強い。それは心配ないぞ、親友。ブレインはな、あのガゼフ・ストロノーフを、あと一歩まで追い詰めたヤツだからな」

「ガゼフ・スト、スト、スト……」

「ガゼフ・ストロノーフで御座います、シャルティア」

「わ、解っていんす」

真つ赤になり、恥らうシャルティア。

だが、セバスの方は何か感慨深そうな表情を浮かべる。

「どうされました、セバス様？」

それに気づいたソリリュシヤンが、心配げに言葉を掛ける。

「いえソリリュシヤン、心配は無用です。なに、彼の者の名を、此処で聞くとは思っても居ませんでしたので」

そう言つて、セバスは柔らかな笑みを浮かべる。

「セバス。ガゼフなる者、知つていんすか？」

「ええ。ビクトーリア様がお守りになつた村で、出合つた者で御座います。王国戦士長と言う立場で御座いましたな」

セバスの言葉を聞き、シャルティアは一瞬キョトンとした表情をするが、すぐににんまりとした笑みを浮かべ

「ならば、それを捕らえればミツシヨコンプリートでありんすね」

ガッツポーズで意気込みを現す。その姿をセバスは、笑みを浮かべながら見つめると「ではシャルティア様、我らは此処で失礼させて頂きます」

「左様でありんすか。二人とも、またナザリックで会いんしょう」



セバス、ソリュシャンと別れ、シャルティアは野盗のアジトへと歩を進める。歩を進めると言っても、シャルティア自身は歩いては居ない。むくつけき男を先頭に、扇情的な衣装を纏ったヴァンパイア・ブライド二体が男に追従し、シャルティアは、その髪の長い方に横抱き、いわゆるお姫様だっこをされ進んでいる

そんな奇妙な一団も、目当ての場所へと辿り着く。そこは、うつそうとした森の中であつて、木々が伐採され、開けた場所になっていた。その場は、くぼ地になっており、その底辺に洞窟があった。洞窟からは、僅かに明かりが見える。まさに、森の中の隠れ家を地で言っている様な場所だった。

「あそこで間違い無いでありますか？」

「ああそうだ、親友」

「畏、は？」

「単発的な物が幾つか。後は無いはずだ」

シャルティアは、質問を口にした後、天を仰ぎ見ると

「もういんす。吸って良し」

ヴァンパイア・ブライドに指示を出す。言葉が終わるか否や、ヴァンパイア・ブライド達は、男の首筋に牙を立てる。二体の吸血鬼に血を吸われ、数秒と待たず、男の身体は干からびて行った。

シャルティアは、それを見届けると、ヴァンパイア・ブライドを先頭にし、目的の場所へと歩き出す。十歩程歩いただろうか、ヴァンパイア・ブライドの髪の毛の短い方の歩が止まる。そして、ゆっくりと振り向き

「シャルティア様、ベアートラップに引っ掛かりました」

ベアートラップ、いわゆるトラバサミだ。

「外しなんし」

「はい」

右足を拘束するトラバサミを、力づくで開き、何事も無かった様に、一行は行進を再

開する。

また、十歩程歩いただろうか、今度は、髪の長い方の姿がかき消える。

「シャルティア様」

その声は地面から聞こえた。

「落とし穴に、落ちました」

「上がりんす」

「はい」

そして、また十歩程歩いた時、二人のヴァンパイア・ブライドは同時に振り向く。

「シャルティア様、警報に引つ掛かりました」

「こおんの、バカ共がああああ！」

シャルティアの絶叫と共に、警戒ベルの音が鳴り響く。

ヴァンパイア・ブライドを後ろに下がらせ、シャルティアは先頭で洞窟の入口を目指す。入口には、やはり野盗とおぼしき男が二人、警戒の任についていた。突然の警報に、緊張した顔をしていた男達だが、現れたのが美少女と美女二人。虚を突かれ、少々間抜けな表情へと変わる。

そんな、場の空気など気にもせず、シャルティアは男に声をかける。

「少々質問があるのでありますが、ここに、えーと、ガ、ガ、ガー、ガゼフなる者はいら

すかえ？」

男達は首を傾げる。この娘は、一体何を言っているのか、と。ガゼフと言う男を探しているのか、それとも、王国戦士長のガゼフ・ストロノーフを探しているのか。もし後者だとしたら、この娘は少々可哀そうな頭の持ち主である。男達が混乱からの沈黙でいると

「解りんした」

詰まらなそうに呟き、手を横に振るう。僅かに遅れて、足元でゴトリ、と音がした。目の前の男達は、首から上を無くし、力なく倒れながら、真つ赤な鮮血を吹き出す。だが、その血は地面に落ちる事無く、上空へと舞いあがる。その行く先は、シャルティアの頭上。そこで渦を巻く様に、球体へと形を変える。ブラッド・プール。吸血鬼のスキルの一つである。

その後、洞窟の内部へと足を踏み入れたシャルティア一向。出あう者一人一人に、ガゼフの居所を尋ねる。が、誰一人として知らず、皆首を刎ねられる結果となった。

ヴァンパイア・ブライド達は、溜息と共にシャルティアの行動を見つめる。明らかな勘違いをしているのは明白だが、先ほどの叱責の為、恐怖で進言は出来なかった。

何十体もの屍を従え、一行は洞窟中ほどに到達する。前には、またしても男が立塞がっていた。だが、目の前の男は、今までの者達とは、明らかに違っている。男から感

じる雰囲気は、余裕、そんな感じを受けた。シャルティアが声を掛けようと口を開こうとした時、男の方から声がかかる。

「随分と遊んでくれたみたいだな」

自然体で、そんな言葉を投げかけて来た。シャルティアは、心の中でニンマリと笑みを浮かべる。表面上は優雅な姿勢を崩さずに。

「そなたなら、わたしの問いに答えてくれそうでありんす。ガゼフはどこでありんすか？」

投げかけられた問いに、男は不思議そうな表情で返す。これは、今までの男達と同じだ。シャルティアは何度目かの溜息を吐き、男の命を断とうと動く。

だが、シャルティアが僅かに動いた瞬間、男が口を開く。男が幸運を掴んだ瞬間だった。

「ガゼフ？ それはもしかして、ガゼフ・ストロノーフの事か？」

「そ、そうでありんす！」

シャルティアの必死な表情を見て、今度は男がため息を漏らす。

「ガゼフを探すなら、ここは御門違いだ。あいつは王国戦士長だぞ、探すなら王都だろうが」

「あ……これ？ 王国戦士長が、ガゼフ？」

「そうだ」

「では、わたしは誰を探しているんです？」

男は両手を上げ、首を横に振る。

シャルティアは、両手で頭を抱えながら、ガツクリと膝を着く。その姿を見てはいらぬと、髪の高い方のヴァンパイア・ブライドが近寄り、耳打ちをする。その瞬間、シャルティアに生気が戻り立ちあがった。

「解りました。わたしが探している者は、ガゼフではありません」

「大丈夫か、お嬢さん？」

「心配ご無用、大丈夫であります。わたしが探していたのは！ ブ、ブ、ブ？」

そこで止まってしまふ。シャルティアは後を振り向かずに、手招きでヴァンパイア・ブライドを呼び寄せる。

「あー、何て言いんした？」

「――」

ヴァンパイア・ブライドの耳打ちに、シャルティアは頷き

「ブレイン・アングラウスであります！」

胸を張り、誇らしく言い切る。

「あー、それで。そのブレインに何の用だ？」

「ブレインなる者、武技が使えると聞きんす。それが事実ならば、わたし達の下へ、ヘッドスライディングしに来たんでありんすえ」

「ヘッドスライディング？」

「そう言っつていんす」

「ヘッドスライディングつて、滑り込みの事だが？」

「ち、違いんす！ 言い間違えでありんす！ ヘッドバンキング！」

「頭を振つてどうする」

「あ……これ？」

シャルティアは首を傾げる。

「もしかしてだが、お嬢さん。ヘッドハンティング、か？」

言われてシャルティアは後ろを振り向く。その答えとして、バンパイア・ブライド達

は、首を大きく縦に振った。

「……………こほん。ブレインなる者を、ヘッドハンティングしに来たでありんす！」

「ふーん」

男が興味なさげに返事を返す。

「それで、ブレインなる者は、どこにいんす？」

「俺だ。俺がブレイン・アングラウスだ」

男、ブレインは疲れた声で名乗りを上げた。

「そうでありんすか！ ならば、武技なる物、見せて貰いんす？」

「その前に、お前ら、何者だ？」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら、ブレインはそう口にする。名のらなければ、殺す、と。だが、シャルティアは緊張感を微塵も表に出さず、につこりと笑うと

「わたしの名は、シャルティア・ブラッドフォールン。残酷で冷酷で非道で———それで可憐な化け物でありんす」

言い終わった瞬間、場を強大なプレッシャーが覆う。

ブレインは、シャルティアの赤く、妖しく光る瞳から眼をそらし

「ヴァンパイア、か」

「真祖、でありんすえ」

「ふん」

ブレインは、シャルティアを倒すべき敵と認識する。腰を落とし、左足を引き、右手を刀へと持って行く。同時にシャルティアも迎撃に向け、歩を進める。ゆつくりとだが、二人の距離は縮まって行く。

ブレインは、一瞬のタイミングを見定める為に、神経を集中させる。ブレイン、必殺の武技。それは、領域と呼ぶ探知フィールドと、神閃と呼ぶ居合いの組み合わせ技であ

る。名は、秘劍——虎落笛^{もがりぶえ}。

ブレインは精神を研ぎ澄まし、領域から来る情報に集中する。シャルティアが、一步、また一步とその場へ、ブレインの狩り場へと近づいて来た。

勝負は一瞬、その時をブレインは逃がさぬよう、目の前の敵を凝視する。

コトリ、コトリと靴を鳴らし、ドレスの裾を揺らし、シャルティアは近づいて来る。

後、三步。コトリ。後、二歩。コトリ。後、一步。コトリ……………シャルティアの首目がけて閃光が走る。

勝負は決まった。

ブレインの敗北、と言う結果で。ブレイン渾身の一撃は、シャルティアによって防がれる。その刃を掴む、と言う原始的な行為によって。

「なかなか早い斬撃でありんすねえ。これで武技とやらを使えば、どうなるんでありんしょう。さあ、遊びは終りでありんすえ。次は武技を使ってくんままし」

そう言つてシャルティアは踵を返し、元の位置まで戻ろうと歩き出す。

だが、背後でくぐもつた声が微かに響く。不思議に思い、シャルティアは振り返る。そこには、ガツクリと膝を着き、目に涙を浮かべるブレインの姿が。

「あ……………れ? どうしたでありんす? 武技でありんすよ、武技、ぶーぎ」

だが、ブレインはシャルティアの声が聞こえてはいないかの様に、ただ、眩いていた。

「俺は、俺は……………」

その光景をじつと見つめていたシャルティアだが、一つの可能性に行きつく。

「ひよつとしてえ……………すでに武技を使っていたのでありんすか？」

この言葉に、ブレインはコクリと頷いた。

「申し訳ありません。まさか、これほど弱いとは思っても見ませんでした。ニンゲンとは、いと悲しき生き物でありんす」

そう言つてシャルティアは、可憐な微笑みを見せる。

「う、うあああああああ！」

ブレインはその場から逃げだした。それは、恐怖からでは無く、シャルティア・ブラッド・フォールンと言う現実からの逃走だった。どれだけ手を伸ばしても、どれだけ努力を積み重ねても、決して辿りつけない強者、と言う現実から。自分が目指して来た頂点が、実は階段の一つ目だったと言う事実から。

「あ……………あれ？ あれれ？ ちよ！ 待ちなんし！」

叫びながらシャルティアは手を伸ばすが、空を切るばかりだった。

「あー、しくじりんした！ お前達、追うでありんす！」

シャルティアは、ブレインを追う為に、一步を踏み出す。

だがその時、背後のヴァンパイア・ブライドから声がかかる。

「シャルテイヤ様」

「なんでありんすか！」

「洞窟の外に、新たな人間の反応があります」

漆黒との邂逅

「あの男をどうしますか？ シャルティア様」

「外の間をどう致しますか？ シャルティア様」

洞窟の入口側と、奥側、それぞれにヴァンパイア・ブライドが立ち、シャルティアに指示を仰ぐ。だが、急に訪れた事態にシャルティアは混乱の中に居た。頭を抱え、身もだえするが、どう判断を下すのが正解なのか解らない。それでもヴァンパイア・ブライド達は、指示を待つ。

「シャルティア様」

「うるせえ！ 今、考えてんだらうーがあ！」

洞窟内にシャルティアの怒声が響く。最早、決められた郭言葉も忘れるほど、シャルティアは焦りを顔にしていた。

「あー、もう！ お前は男を追いなんし！ ブレイン以外は、殺して良し！ お前は、わたしと外！」

最終的に、ブレインはヴァンパイア・ブライドに任せ、自身は未知の集団へ向かうと決定する。髪の毛の短い方のヴァンパイア・ブライドが、闇に消えるのを確認し、シャルティ

アは外へと歩き出す。

「あれでありんすか？」

「はい。シャルティア様」

洞窟の入口から、敵、と思われる一団に眼を向ける。

「ひー、ふー、みー、よー、いつ、むー。六人でありんすか」

男が五人に、女が一人。

「いかが致しますか？」

ヴァンパイア・ブライドの問いに、シャルティアはにっこりと可憐な笑みを浮かべ

「まずは、あいさつでありんしょう」

そう言つて、夜空へと飛び立ち、集団の前へと降り立つ。場は、ざわめきに包まれる。

「誰だ？」「何者だ？」などの言葉が飛び交い、一瞬にして六人は統制を失つていた。

「初めまして、でありんす。この中で、武技が使える方はいんすかえ？ 使えるならば、

特別に殺さんで置いてあげんす」

だが、目の前の集団は動揺が広がるばかりだった。

その光景を、ひどく詰まらなそうに見つめ

「解りんした。ならば……一方的に楽しませてもらいんす」

言い終わるか否や、シャルティアの手刀が空を切った。その結果、一番近くに居た者

「さあいごー。おんなあ。でざあーとお。でざあーとお！」

女、ブリタの顔に血生臭いシャルティアの唇が近づく。その日焼けした頬を、血と涎で滑付く舌でペロリ、ペロリと舐め

「でざーと、でざーとお」

眩きながら、味見をする様に弄んでいた。

ブリタは、振るえる身体と、気を抜けば手放しそうになる意識を必死に繋ぎ止める。地面を握る手も、何とか身体を支える事が出来る程度。ブリタは必死に生き残る術を探る。だが、圧倒的な強者である、目の前の化け物から逃れる術は無い。それでも生存本能、とでも言うのか、恐怖で彩られた意識はそれを探る。

ブリタは、振るえる右手を胸元に這わせると、自身の首に掛る金属のチェーンを引き吊り出した。一縷の望みを賭け、チェーンに繋がれたペンダントトップをかざし

「ア、アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

あの日教えられた魔除けの言葉を口にする。成功か、失敗か。生か、死か。涙が溢れるその瞳で、じつとシャルティアを視界に留める。

「ほえ？」

今の今まで奇声を発していた化け物は、間拔けな声を漏らした。

そして、歪な指でペンダントトップを興味深く突いている。

「あいんず・うーる・ごうん……?」

シャルティアの眼に映る物は、確かにアインズ・ウール・ゴウンの紋章。

二度、三度と首を傾げながら、動かない頭を働かせる。

「お前、これをどこで手に入れんした!」

ブリタに言葉をかける化け物は、可憐な少女の姿に変わっていた。

「え?」

「どこで手に入れたと聞いていんす!」

「エ、エ・ランテルの宿屋、で」

「誰から!」

「き、綺麗な金髪の女性……」

金髪の女性、と聞いてシャルティアの脳裏には二人の人物が浮かぶ。一人目はプレアデスが三姉、ソリュシャン・イプシロン。そして、二人目は、ビクトーリア・F・ホーエンハイム。前者であった場合、自らの主アインズ・ウール・ゴウンが関わっている可能性がある。後者の場合は、目的がさっぱり解らない。下手をすると、単なる愉快犯の可能性すらある。そして、同じくらい長期的な目論見も考えられる。

スライムか、駄巨乳か……シャルティアは二つの選択肢の間で揺れ動く。あちらか、こちらか、悩み続けるシャルティアの頭の中では、ローション塗れの巨乳美女

の映像が出来上がっていた。そして、もてあそばされる自分の姿が。

「……………えへへ」

「シャルティア様」

シャルティアはヴァンパイア・ブライドの呼びかけにより、無事現世に帰還をはたす。大急ぎで涎を拭き、表情を引き締める。

「そ、それでどんな姿でありました！ 胸は……両方とも大きいでありんすね。服装は……二人ともドレスでありました。えーと、えーと、せ、性的嗜好は……両者サデイストっぽいでありんすね。性格！ ダメでありんす。どう見ても腹黒さしか感じられんす」

頭を抱え、うーうーとシャルティアの悩みは続く。

「シャルティア様、髪型を聞いてみてはいかがでしょうか？」

背後からヴァンパイア・ブライドが助け船を出す。

「そ、そうでありんす！ 髪は！ クルクルでありんすか？」

ブリタは一瞬戸惑いを見せるが

「いえ。真つ直ぐな綺麗な髪で、それと……金色の瞳」

「！ それを先に言いなんしー！」

シャルティアは絶叫と共に理解した。

「おまえ、そいつから、お姉さまから何て言われんした！ あいつらも皆、お姉さまの手駒でありんすか！」

ブリタの胸倉を掴み、その赤い双眸に光を覗かせながら問い詰める。吸血鬼のスキルである魔眼、魅了の効果があるスキル。

「いえ。私達七人は冒険者組合からの依頼で、野盗討伐に来ました」

トロンとした目つきでブリタはそう答える。

「七人！ もう一人は、どこでありんす！」

「レンジャーが離れた場所に。私達に何かあつたら、協会に連絡が取れる様に……」

この言葉を聞き、シャルティアは突き放す様にブリタを捨てると

「くー！ 眷族よ！」

その言葉が引き金となり、シャルティアの影が蠢く。現れたのはヴァンパイア・ドツグが数体。

「行きなんし！」

号令一過、犬達は森へと消えて行った。

「お前は、コイツを捕まえていんす！」

ヴァンパイア・ブライドに指示を与え、シャルティアは夜空へと身体を投げ出した。うっそうと茂る原生林の中、その中で一際高い樹の上にシャルティアは降り立つ。身動

き一つせず、眷族からもたらされる情報を、一心に精査する。

「え？ ヴァンパイア・ドックの反応が……消えた？」

シャルティアは反応が消失した方角に視線を向けると、若干の焦りと共に場を後にした。

木々の先端を跳ねる様にシャルティアは移動を続ける。暫しの時を要して、目当ての場所が眼に映る。その場には、完全武装と思われる装備で固めた集団が。その数、十二名。シャルティアはその先頭に立つ、黒い鎧の男に視線を向ける。

「アイツ、強い！」

同時に武装集団も、シャルティアの存在を確認する。

「全員、戦闘準備」

男はそう言つて、槍を構えた。

氷結牢獄

ナザリツク地下大墳墓。その第六階層にある、星青の館、その書齋のドアが、小気味良いノックの音を立てる。入室許可の返事が返り、それに反応しドアがガチャリと開く。現れたのは、愛欲の通い妻、守護者統括アルベドである。部屋に入り、礼儀正しく腰を折るが、正面に目的の人物は居なかつた。

「あら？」

小さく声を漏らし、室内を視線で探れば、その人物は珍しい事に、右手側のソファアに腰掛けていた。同じくソファアには、番外席次、ニニヤ、クレマンティーヌの姿が。

「皆様、モーニングテイーで御座いますか？」

「そうじゃ。たまには、こう言うのも良い物じゃと思うてな」

アルベドの問いに、カップを傾けながらビクトーリアが答える。そんな言葉が交わされる中、番外席次が席を立ち、アルベドに座る様に促す。その位置は、ビクトーリアの隣、特等席である。そして、番外席次はクレマンティーヌの隣へ。アルベドが着席すると、すかさずニニヤがカップを出し、紅茶を注ぐ。だが、ここで再び番外席次が口を開く。

「申し訳ありません、アルベド様。いらつしやる事を知りませんでしたので……スコーンが」

番外席次の言いたい事は、こうである。アルベドの訪問を、予期していなかった為、茶菓子を用意していなかった、と。だが、アルベドは気分を害す事は無く、逆ににつこりと妖艶な笑みを見せると

「別に謝る事では無いわ。それに………御菓子が無いなら、王様を食べれば良いじゃない」

そう言いながら、ピクトーリアにしな垂れかかる。アルベドのこの行動に対しての反応は、それぞれバラバラだった。番外席次は拍手喝采で肯定し、憧れの眼で見つめるが、クレマンティーヌに至っては、若干引いている。そしてニヤは、につこりと暖かい瞳で見つめていた。当のピクトーリアは、最早諦めの境地でこの程度のセクハラには、無抵抗作戦を決め込んでいる。そんな強者同士のイチヤコラを、半眼で見つめていたクレマンティーヌだったが、口元を隠しながら、隣に座る番外席次に言葉をかける。

「ねえ、あの色ボケって誰？」

そんな言葉を言った瞬間、番外席次の強烈な肘が鳩尾に入った。

「バカ！ あんた殺されるわよ。普段はくねくねしているだけだけど、アルベド様は私より強いんだからね！」

「マ、マジ?..」

クレマンティーンの驚きに、番外席次は領きで返す。驚きと共に、クレマンティーンはじつとアルベドを見つめる。強者から、さらに強いと言われた者は、幸せを抱きしめ、くねくねしていた。

「アルベド。そろそろ放してくれんかのう。窒息しそうじゃ」

ビクトリアから解放の願いが告げられる。

「はあい。では、続きまして、私がビッチ様のお胸で窒息を……あら?..」

とろけ切っていたアルベドの表情が、真面目な物へと変化した。そして、すぐに立ち上がると虚空に手を伸ばす。

「管理者権限発動。マスターソース、オープン」

アルベドの眩く様な言葉と共に、空中に光の壁が現れる。マスターソース、ナザリツク地下大墳墓の管理システムだ。その光の壁に対してアルベドは、右手を上下左右に動かす、何かを確認し

「ビクトリア様、シャルティア・ブラッドフォールンが反逆しました」

簡潔に言葉を綴る。

「なに?..」

「マスターソースに綴られた名前が、裏切りの意を表しています」

アルベドが迷いなく言い切る。

「モモンガさんは、今何所に？」

「恐らくは玉座の間、かと」

その言葉を聞き、ビクトーリアは部屋の隅に置いてあった木箱に手を伸ばす。そこから指輪を一つ手に取ると、アルベドへ向けほおり投げた。

「ビクトーリア様、これは……」

「緊急だ、使え。今の事をモモンガに伝え、二人でお前の姉の下へ向かえ。妾もすぐに行く」

「第五階層 氷結牢獄、で御座いますね」

「そうじゃ」

「畏まりました」

その言葉を残し、アルベドはリング オブ アインズ・ウール・ゴウンの力によって転移した。アルベドを見送ったビクトーリアは、書斎机に腰掛け腕を組む。

（裏切り、シャルティアが？ 可能性があるとえば、精神支配だな。しかし、シャルティアはアンデッドだぞ。……………ひよつとすると、アレが絡んでいる可能性も？）

「雌猫、ついてまいれ。小娘と魔女っ娘は待機。行くぞ」

言い終わり部屋を出るビクトーリアを、クレマンティーヌは必死で追いかけた。



「それで、ビッチさんは何と？」

「はい、第五階層 氷結牢獄へ向かえと」

「お前の姉の所だな」

そう言つてアインズは、骨の指で顎を撫でる。

「セバスとソリュシヤンも一緒に居たはずだが？」

「確認いたしました。シャルティアの反逆は、二人と別れた後の様です。それと、ヴァンパイア・ブライドが二体、護衛に付いていましたが、行方不明です」

「そうか。マスターソース、オープン」

アインズの前に、光の壁が現れる。それを、先ほどアルベドがしたのと同じように操作する。画面を切り替え、スクロールし目当ての情報が記載されたページへと進んで行く。

「成程。疑いはなさそうだな」

そう呟きながら見つめるページには、全NPC達の名前が白文字で記されていた。だが、シャルティアの名前だけは、黒で表示されている。

（うーん。この状態はゲーム時代だと、一時的に精神支配され敵対した時の物と同じだよな。と言う事は、シャルティアは精神支配された事になる。でも、ホントにそうなのか？ シャルティアはアンデッドだぞ。アンデッドの精神作用無効を抜く程の魔法かアイテムが？ それとも、シャルティアの意思？ 可能性はあるな、エクレアの様に、ペロロンチーノさんが何か仕込んでたとしたら………考えても仕方無いか。やっぱりビッチさんの言う通り、現状確認が先だよな）

「アルベド。ここで考えていても仕方が無い。行くぞ」

「畏まりました、アインズ様」

そこで言葉を切り、二人はリング オブ アインズ・ウール・ゴウンを発動させる。

くナザリツク地下大墳墓 第五階層く

第五階層

そこは、氷と雪が支配する世界。

目指すは、そこにある氷に閉ざされた館、名を氷結牢獄。

アインズは館の重い扉に手を掛け、ゆっくりと開けて行く。館の中は、暗く、敷かれた赤い絨毯には、所々に黒い染みの様な物が見える。まるで、ホラー映画の舞台を見ている様だった。

「ふふっ」

「どう致しましたか、アインズ様」

アインズから、僅かな笑みが漏れる。

「いや。此処を見ると、タブラさんを思い出してな」

「タブラ・スマラグデイナ様を、ですか？」

タブラ・スマラグデイナ。ギルド アインズ・ウール・ゴウン 至高の四十一人の一人であり、アルベドの創造主でもある。そして、此処氷結牢獄の製作者。そのタブラ・スマラグデイナが、ホラー映画趣味丸出しでデザインしたのが此処だ。

アインズは一定の歩幅で館の廊下を進んで行く。無機質だった館は、目的の場所へと近づいて行くと、徐々に調度品などが増えて行く。飾られるフレスコ画は、全て優しげで母性を現した物。

「そろそろか」

「はい、アインズ様」

アルベドはそう言うと、壁に向け両手を差し出す。すると、壁から半透明な腕が伸び、アルベドに赤ん坊の人形を落とす。人形をしつかりと受け取り、それをアインズへ。

「本当に気持ち悪いな」

人形を受け取ったアインズは、それをしげしげと見つめ、素直な感想を口にする。人形は何と言うか、いわゆるホラー映画の小道具的な、廃墟に落ちている様な所々ひび割れた姿をしていた。少々ゲンナリとしながら、アインズは目的の場所へと繋がるドアを押し開ける。室内はがらんとしており、壁は漆喰が？がれ落ちボロボロだ。

そんながらんとした部屋の中央に、ゆり籠が一つ置かれ、その脇に女性が一人、それを揺らしながら背を向けて立っていた。そして静寂が支配していた室内に、声が響き始める。赤子の泣き声と思われる声は、一人では無く、何十と言う声。その声は徐々に大きくなり部屋中に響き渡る。それが合図となり、女性の動きがピタリと止まる。

「始まるな」

「はっ」

女性はゆり籠内の物を手に取ると、プルプルと震え出し、それを壁に向け投げ捨てる。バラバラになったそれは、赤ん坊の人形だった。

「ちがうちがうちがう、わたしのこわたしのこわたしのこおーーー！」

女の絶叫が響き渡り、それに呼応する様に、鳴り響いていた声の主達が姿を現す。床

から、壁から、天井から、部屋のありとあらゆる場所から、それは這い出てきた。
腐肉赤子キヤリオンベイビーと呼ばれる、Lv10程のモンスター達だ。なかなかのこだわり、とアインズ
が関心していると、女はどこからか巨大な鋏を取り出し

「おまえたちおまえたちおまえたち、こどもをこどもをこどもを、さらったなさらったな
さらったなあー！ー！」

絶叫しながら、襲いかかってくる。

そんな状況でも、アインズは落ち着き

「うん。何と言うか、良く似た姉妹だな」

素直な感想を零す。そう言っている間にも、鋏はアインズに迫る。しかし、アインズ
は落ち着き人形を差し出した。

「ほら、お前の子供はここだ」

女は人形を受け取ると

「おおー」

安堵の声を漏らし

「これはこれはモモンガ様、ご機嫌麗しゆう。それに、私の可愛い方の妹。お久しぶり」

「うむ。元氣そうで何よりだ」

「お久しぶり。姉さん」

何事も無かった様に、挨拶を交す。

「ニグレド、お前には伝えて無かったな。私は名を変えた、これからはアインズ・ウール・ゴウン。アインズと呼べ」

「畏まりました、アインズ様」

この女性、名はニグレドと言い、アルベドの姉である。その容姿は、アルベドと瓜二つの美貌を持つNPC。だが、その顔に皮膚があれば、だが。

ニグレドは髪をかき上げると、その筋肉で構成された顔でニッコリとほほ笑み、歓迎の意を伝える。ハッキリ言って不気味であった。そしてアインズは、タブラ・スマラグ・ディナと言う人物の悪趣味さを、改めて感じるのだった。

「アインズ様、今日は何用で？」

「うむ。お前の力が借りたくてな」

「ありがとうございます。それで、どの様な？」

ニグレドの問いに、アインズは手をかざし待てとジエスチャーで答える。

「まだ来客がある。その者が来るまで暫し待て。それからアルベド、ビッチさんはこのギミックを知らないはずだ。お前は外で待機し、ナビゲートしてやれ」

「「畏まりました」」

姉妹は声を揃え了解の意を示す。

アルベドは指示通りドアの前で、愛しき者の到着を待った。暫しの時を持って、待ち人は現れる。

「ご苦労様です、ビクトーリア様」

「うむ。出迎え御苦労」

言って手を挙げる。

「では、姉の下へ案内致します」

そう言うとアルベドは、赤子の人形を差し出した。

ビクトーリアは、手をひらひらとさせると

「あー、いらん」

と、言葉が続ける。

「しかしビッチ様、このイニシエーションが無ければ、姉には会えませんか？」

「今は緊急事態の真っ只中じゃ、タブラの遊びに付き合つてやる時間は無い」

そう言うと、ドアの左側の壁をノックした。すると、丁度胸の辺りの壁、五センチ四方がストーンと開く。その中にはボタンの様な物が。ビクトーリアは、迷いなくそれを押し込んだ。



ニグレドの部屋の中で、アインズは不謹慎だと思いつながら胸を躍らせていた。この恐怖の寸劇で、あの者はどんな表情をするのだろうか、と。あの顔が、恐怖で歪む瞬間を見れるのか、あの者はどんな悲鳴を上げるのだろうか？ そのお楽しみの瞬間が、今始まるのだ。ドアを開け、さあ早く開け、とアインズは念じた。今まさに扉は開かれる、だが……

ピンポーン

呼び出しチャイムの様な音が響いた。隣に佇んでいたニグレドは、さも当たり前のように進み出て、「はーい」と朗らかな声と共に、自らドアを開ける。

「え？」

アインズには事の流れが理解出来ずにいた。

だが、そんなアインズを余所に

「久しいのう、ニグレド」

「お久しぶりで御座います、ピクトーリア様」

二人は何事も無く挨拶を交わす。

「しかし……痛そうじゃな」

「何がでしょうか？」

「うぬの顔のことじゃ。不便は無いのか？」

ビクトーリアの問いに、ニグレドは首を傾げると

「髪が少々べたつきますが、それ以外は」

「さようか」

普通に会話をする二人に対して、混乱する二人。

「ビッチさん？」

「ビッチ様？」

「うん。なんじゃ？」

言い淀む二人に対して、ビクトーリアは平然と言葉を返した。何かおかしな事でもあったのか、と。

「いやいや、ビッチさん。ギミックは？ 儀式は？」

「うん？ 何じゃ、アインズは聞いてはおらぬのか？ 緊急時のギミック回避を」

「え、そんなんあつたんですか？」

「タブラの奴が、ノリノリで教えてくれたが」

ビクトーリアの言葉に、アインズの顎がカクンと下がり

(タブラさああああああん！)

心の中で、彼の者の名を叫ぶのだった。

ワールドアイテム

ビクトーリアが、何のためらいも無く足を踏み込んだ部屋の前で、クレマンティーヌは立ち尽くす。部屋から顔を出した女、あれは一体何者だったのか。容姿からして、人間では無い。それはそうだ、顔面の皮膚を？がされて、笑いながら日常会話が出来る者など居ないのだ。もしかして、あの女も自分よりも強いのではないだろうか？そんな事を、ここ数日の記憶と共に思い出す。

絶死絶命の登場。煉獄の王との出会い。絶死絶命以上の強さを持つと言う、異形の女。小春日和の自然溢れる大地から、転移門をくぐれば氷雪吹きすさぶ純白の世界と言う現実。最早、クレマンティーヌの頭脳はついていけない状況だった。

「雌猫。時間は有限じゃ、早よう入れ」

苦悩するクレマンティーヌに、室内からビクトーリアの櫛が飛ぶ。その声に逆らえる訳無く、クレマンティーヌは恐る恐る一步を踏み出す。だが、その一步の勇氣も木端微塵に碎かれる事になった。部屋の中に、今だ知らない異形の姿を確認したからだ。

闇夜を思わせるアカデミックガウンを纏ったスケルトンの姿を。その、スケルトンと思われる者から溢れ出る雰囲気は、通常とは、クレマンティーヌの知る物とは全く違う

物だ。もしかすると、エルダーリツチなどの上位種の可能性もある。クレマンティーヌの額から汗があふれ出る。恐らく、このスケルトンも強者なのだろう。そんな思いに、心が挫けそうになる。その中で、目の前のスケルトンは、興味深げに自分を見ていた。その骨の指で顎を撫でながら近づいて来る。そして……

「うーん。確か……………クレマンティーヌ、だったか？」

目の前のスケルトンの言葉に、クレマンティーヌの表情が変わる。まるで、心臓を鷲掴みにされた様な心情だった。

「知って……………！ 知っているのですか、私の事？」

どもりながら、言葉を選びながら、クレマンティーヌは何とか言葉を絞り出す。

「うん？ 随分と、しおらしくなった物だな。あの時は、随分と挑発的に話していたではないか」

あの時？ 一体いつの事だろう？もしかして、かつて殺害した何者かがアンデッドとして蘇ったのか？そんな考えが頭の中によぎるが、目の前のスケルトンは楽しそうに、次の言葉を口にした。

「この人外、クレマンティーヌ様には勝てねーんだよ。だったか？」

此の言葉で、クレマンティーヌは理解出来た。今、目の前のスケルトンが誰なのか。

「お前え。いや、あなたは……………モモン——さん？」

「ふふっ。そうだ。モモンだ。本当の名は、アインズ・ウール・ゴウン、と言うがね」
クレマンティーンの受け答えが楽しかったのか、アインズは笑みを含んだ声で答えた。

「アインズよ、遊びは程々にせえ」

「まあ、そうだな。ニグレド、お前の力を借りたい」

「それは無論の事。それで、探すのは生物ですか？無生物ですか？」

ニグレドの言葉に、アインズは首を傾げる。

「如何なされました、アインズ様？」

アインズが示した態度に、アルベドが疑問を投げかけた。

「いや、そうだな……。ピッチさんは、生きていますよね」

「当たり前であろう」

「ですよ。じゃあ、俺は？」

アインズが投げかけた謎で、場が凍りつく。ビクトリア、アルベド、ニグレド、クレマンティーン、種族は違えど彼女らは生者だ。生者であるがゆえ、死は避けられない者達だ。

では、アインズ、アンデッドはどうなのだろうか。アンデッド達には、死、と言う概念は無い。アンデッドにとってのそれは、滅び、なのだから。

「うーむ。アインズの現状を見れば、動く骨じやな」

「そうですね」

「言いかえれば、動くカルシウム」

「嫌な言い方ですね。間違つてはいないですけど」

「じゃあさあ、ヴァンパイアとか、ゾンビは？」

何とか場の空気に溶け込もうと、必死にクレマンティーヌは言葉を綴る。この新たな議題は、さらなる混乱を呼ぶ。

「なるほどなるほど。カルシウムとヴァンパイア、アンデットと言っても、同じカテゴリーとして括つても良いか、と言うことじやな」

「せめて、骨でお願いします」

ビクトーリアが口を開くが、何か解決案を言っている訳では無い。ただ、現状確認をしているに過ぎないのだ。

「ふむ。こう言うのはどうじやろう」

ビクトーリアが、何か閃いたのか口を開く。その堂々とした達振る舞いが、一層アインズの不安感を煽る。

「水、炭素、アンモニア、石灰、リン、塩、硝石、鉄、ケイ素、その他少量の十五の元素を内包する、無生物」

「長いわー……!」

ビクトーリアの発言に、アインズは盛大な突っ込みを入れた。それはもう、精神抑制も及ばぬ程の。そんな寸劇を繰り返す王二人を尻目に、ニグレドがそつと手を挙げる。

「あのー。探す対象は何で御座いますか?」

「シャルティアよ、姉さん」

「そうであれば、すぐに始められるわ。可愛い方の妹」

そう言うのと、馬鹿な会話を続ける支配者を余所に、ニグレドは準備を開始する。そんな現場を垣間見、そして、場の空気を感じたクレマンティーヌは、ここで上手くやっていけそうだと思うのだった。

「カウンター・デイトクト、

フェイク・カバー、

クレアボヤンス、

ロケット・オブジェクト。準備整いました、アインズ様、ビクトーリア様」

複数の魔法を発動し、ニグレドは丁寧に腰を折った。

「あ? うむ。では、映せ」

「は。クリスタル・モニター」

何も無い空間に、映像が浮かぶ。そこに映し出された光景は、何も無い平原にぽつんと佇むシャルティアの姿。

「!」

その姿を目にしたアインズは、言葉を失った。その理由、それは、シャルティアが完全武装の姿であつたためだ。そして、その手には

「……スポイトランス」

「どうした？」

動揺するアインズに、ビクトーリアが声をかける。

「ビッチさん、シャルティアの手にある物……」

「ふむ。あれがどうかしたか？」

「あれ、神器級ゴツズアイテムです」

「なにー！」

アインズという言葉に、ビクトーリアも動揺を示す。

「あれは、ペロロンチーノさんがシャルティアに与えた神器級マジックアイテム。スポイトランスです」

スポイトランス。見た目は科学実験に使う、スポイトに酷似した物で、名前、形を取つてもふざけた感是否めないが、その実武器としての能力は、極悪と言ってもいい物だ。与えたダメージの何パーセントかを、装備者の体力へと還元するアイテムは多々あるが、スポイトランスはそれに特化した武器なのである。

「行くぞ」

アイNZは踵を返し、部屋を出ようとする。

「待て。何を焦っておる」

その行動に、ビクトーリアは待てと声をかける。

「待てて。ビッチさん、シャルティアが心配じゃ無いんですか!」

「解っておる。誰も心配してはいないとは言っておらん。もう少し、情報を集めてからでも、遅そう無いと言っておるのじゃ!」

すぐにも現場に向くと言うアイNZと、それを止めるビクトーリア。御互いの感情は、両者共理解は出来た。だからこそ、引く事は出来ないのだ。どこまで行っても、平行線な意見を言い合う両者だが、その中でアイNZの脳内に言葉が響く。何者かが、メッセージの呪文で語りかけていた。

「誰だ!」

『申し訳ありません。ナーベラルです』

「何だ! 今は忙しい!。すまなかつた。それで?」

激昂していたアイNZの感情は、沈静化によつて一様の冷静さを取り戻す。

『は、はい。冒険者組合のハリガネムシが訪ねて来ました』

「用件は……先日の墓地での事か?」

『いいえ。吸血鬼、との事です』

「吸血鬼、だと」

アインズの焦りは、高まって行く。すでに、冒険者組合にまで情報が流れていると言
う事は、早急にシャルティアを保護する必要がある、と。

「そ、それで、どうなのさ？ 組合は何と言って来ている」

『申し訳ありません。組合からの使者は、下等な者の様で、吸血鬼に対しての相談があ
る、と言う事のみので伝達でした』

アインズは「そうか」と呟くに留まり、口を閉ざす。

「行ってこい」

横からビクトーリアの言葉が響く。

「シャルティアは、妾達が見ておく。うぬは他の憂いを断ってこい。知っておるか、この
様な情報の精査は、妾の得意とする所じゃぞ」

そう言つて、ニヤリと笑う。その姿を空洞の瞳に映すと

「ナーベラル、すぐに行く」と伝える

『畏まりました、アインズ様』

アインズは魔法を終了させ、ビクトーリアへと向き直る。だが、ビクトーリアは口を
開く事無く掌を振り、早く行けと行動で示す。それを確認したアインズは、どこか安心
したように場を後にした。



「さてと、どこから掛ろうかのう」

ビクトーリアは腕を組み、クリスタル・モニターを睨みつける。

「ビッチ様。シャルティアが完全武装と言う事は、何者かとの戦闘が行われたと思われ
ますが」

「そうじゃのう。ニグレド、視線を上空へ」

ニグレドはビクトーリアのリクエスト通り、観測点を上空へと持つて行く。

「辺りに人影は無し、か。生体反応は？」

「ありません、ビクトーリア様」

ニグレドは一切の感情を挟まず、簡潔に答える。

「この地の記憶を読む事は？」

「出来ませぬ」

「ならば、そうじゃな十二時間程前から頼む。

「了解いたしました。リバース時・タイム記・ログ憶」

観察系の魔法に分類される、リバース・タイム・ログ。これは、その土地、場所での自身の行動の記録を、過去半年に限り閲覧する事が可能な魔法だ。だが、探知形の種族、スキルなどの習得を、ある一定の条件でクリアした場合に発現する隠し種族、ゲイザー観測する者を取る事で他者のログ、正確には場で起きた全ての出来事を観測出来る様になる。当然、観測計マジックキャスター特化型の二グレドも、ゲイザーを種族として取っている。「出ました」

映しだされた画面には、先ほどと違い夜の情景が映し出される。

「何もないうじやな。二グレド、五倍速で頼む」

「畏まりました」

二グレドの指が、何かを指示する様に横に動く。すると、それに呼応し、画面が素早く流れて行く。

暫しの時間を置き、画面に変化が現れた。十数人の武装した者達と、シャルティアの戦闘だ。その者達が画面に映った瞬間、ビクトリアの背後から、小さな呟きが聞こえた。

「どうした、雌猫。言いたい事があれば、発言せえ。うぬは奴隷でも何でもないのじゃからな」

ビクトーリアに言葉に、クレマンティーヌの心臓が跳ね上がった。

「ビクトーリア様、あの者達は漆黒聖典。スレイン法国の暗部の者達です」

「また、スレイン法国か……。舐めおつて、あの馬鹿共が」

ビクトーリアがため息を吐こうとした瞬間、まさにその瞬間、画面が光で溢れる。

「ビツチ様、これは？」

「ニグレド、巻き戻せ」

「はい。ビクトーリア様」

ニグレドは、その場面を何度も巻き戻す。それを場の者達は、舐める様に見つめていた。

「右からの光は、シャルティアの清浄投擲槍、と思われます」

アルベドが見解を口にする。

「では、左からの光はなんじゃ？」

「ビクトーリア様。うーん、多分、ケイ・セケ・コウクじゃないかなあ」

全員の視線が、クレマンティーヌに集中する。それだけで、クレマンティーヌの背中は冷や汗で濡れる。

「あ、あの。集団の中に、カイレのババアが居ましたので、間違い無いかなあ、と」
クレマンティーヌの言葉は、推定から肯定の者へと変わる。

「しかしのう、雌猫。そのケイ・セケ・コウクとはなんじゃ？」

ビクトーリアは、腕を組んだまま疑問の言葉を口にする。クレマンティーヌを見つめる、その黄金の瞳は、暗に全てを話せと恫喝していた。クレマンティーヌにとっても、それは望むところであつた。スレイン法国になど、何の未練も持つておらず、現在のクレマンティーヌにとつて、ビクトーリアが全てなのだから。

「ケイ・セケ・コウクはですねえ、六大神のクソツタレが残した物の中でも、至宝中の至宝、と言われている物です」

「アイテムの名、かや？」

「ううん、そうだよお。少し戻してくれるかなあ」

クレマンティーヌの言葉を受け、ビクトーリアはニグレドへと視線を向ける。画面が巻き戻され、戦闘開始前の場面が映し出される。

「あー、居た、居た。ビクトーリア様あ、影に隠れている気色悪いババア、見えます」
「うむ」

「あれが、カイレのババアですねえ」

ビクトーリアの眼がモニター上のカイレの姿を捉えた瞬間、その瞳は爬虫類を思わせる物に代わる。

「なるほど。ククツ。こんな所で出会えるとはのう」

楽しみに、憎々しげにビクトーリアは言葉を綴る。

「ビッチ様、あの……」

ビクトーリアの変化に、アルベドが、ニグレドが、クレマンティーヌが不安げな眼差しを送る。それを感じ、ビクトーリアは一息吐き、自身を落ち着けると

「ワールドアイテムじゃ」

短く言葉を吐いた。

「本当で御座いますか？」

そう言うアルベドの表情は、明らかに動揺の意を表している。

「ああ。ケイ・セケ・コウク。成程のう、言い得て妙じゃ。言葉だけの伝達じゃな。アルベド、ニグレド、雌猫、良く聞くが良い。あのババアが身に付けている物は、ケイ・セケ・コウクでは無く、ワールドアイテムの中でも、いやらしい能力を持つ品、精神支配無効の者の精神すら支配下に置く事が出来る品物。ワールドアイテム 傾城傾国じゃ」

白き鎧

チャイナドレスを纏った、カイレと言う老婆と、シャルティアを交互に見つめながら、ビクトーリアは呟く様に唸りを漏らす。場の者達は、全員それに気づくが、誰も口を挟もうとはしなかった。

「これで全てでは、無いのであろうな」

「どう言う事で御座いますようか、ビッチ様？」

沈黙を破り発せられたビクトーリアの言葉に対し、アルベドが疑問を口にする。

「良く見てみよ。シャルティアは、今だ武装をしておらん」

アルベド、ニグレドは息を飲む。そうだ、そうなのだ。現状のシャルティアは、完全武装の状態だ。しかし、闇夜の中戦うシャルティアは可憐なドレス姿のままなのだ。画面の中のシャルティアを見つめるビクトーリアの黄金の瞳は、決して逸らされる事無く、その額には汗が浮かぶ。アルベドは、愛ゆえにかビクトーリアの僅かな変化に気付いた。そして、声を震わせながら問いかける。

「ビ、ビッチ様、いかがなされましたか？」

「うん？ いやのう、ふふつ。探し物はなかなか見つからぬ物なのに、危惧する物は容易

く姿を現しよる。世は上手く回らぬ物じゃ。かかつ」

ビクトーリアは自嘲気味に笑みを浮かべる。

「ビクトーリア様。危惧する物とは、以前仰られていた？」

「そうじゃ。一つ目はワールドアイテム。もう一つは………妾と同格、もしくはそれ以上の存在」

「ちよ、ちよつと待つて。ビクトーリア様と同格つて、そんなん居るの？」

ビクトーリアの発言に、クレマンティーヌが慌てて異議を唱える。だが、当のビクトーリアは落ち着きを保ちながら

「おるよ。妾程度の者など、妾がおつた世界では腐るほどな。恐らく、雌猫の国が信仰する神もまた、妾やアインズと同じ存在じゃらうて」

「じゃ、じゃあ、ビクトーリア様は、ぶれいやー、なの？」

クレマンティーヌの言葉に、ビクトーリアの眉が跳ねる。

「ほう。雌猫、うぬは知つておるのか、プレイヤーと言う言葉を」

「うん……いや。はい。法国に降り立つた六大神が、ぶれいやーなる物と伝えられています。あの絶死絶命の祖もぶれいやーだと」

ビクトーリアは、クレマンティーヌの言葉に「さようか」と短く答えるに留まる。

「二グレド、時間を先へ」

「畏まりました、ビクトーリア様」

二グレドの手が動き、画面は高速に再生されて行く。暗かった画面が、徐々に明るくなり、端には太陽が見える。日が昇り、周りが昼の明るさになった頃、それは起こった。だらんと力を抜いて佇んでいたシャルティアだったが、その頭がゆつくりと起き上がる。その可憐な少女の様な顔が正面を向いた瞬間、その姿がかき消えた。そして、画面外から金属と金属がぶつかり合う音が響く。

「二グレド、巻き戻せ。人物を中央へ」

「畏まりました、ビクトーリア様」

すぐさま二グレドは、指示を実行する。シャルティアが顔を上げ、姿を消した瞬間画面は停止し、その姿を追う。停止した時間の中、映るシャルティアはすでに武装した姿だった。ビクトーリアは、その状況に驚愕を現し、ゴクリと喉を鳴らす。ゆつくりと画面が動きだし、シャルティアと敵対する者の姿が映し出される。

それは、龍を思わせる純白の鎧を着た戦士の姿。鎧の戦士は、シャルティアの一撃を受けても、ノックバックするに留まっていた。ダメージとしては、右肩装甲の損傷のみ。

勝負は一瞬の事だった。鎧の戦士は、上空へ飛翔すると、自身の周りに十数本の剣を出現させる。その刃を矢の様にシャルティア目がけて発射したのだ。それは、シャルティアの命を奪う攻撃では無い事をビクトーリアは感じ取る。だが、その威力は凄まじ

く、シャルティアを墜落させるだけの力を持つていた。魔法の武器か、それとも鎧の男の魔法か、もしくはスキルによる物か。現状ではそれを確認する事は無理である。しかし、一つだけはつきりと解った事があった。鎧の男が強者、である事だ。

ナザリック地下大墳墓が先兵。守護者最強のシャルティア相手に、無事逃げ切る事が出来るだけの力を持っている、と言う事が。ビクトーリアは、拳を強く握りしめる。プレイヤーか、この世界の者かは解らない。だが、自分やモモンガを脅かす存在は、確かに居ると言う事を心に刻みながら。

「ニグレド、あの者を追えるか？」

「申し訳ありません。離脱直後に反応がかき消えました」

「転移か？」

「恐らくは……」

事実を確認し、一つため息を吐きながら、ビクトーリアの視線はクレマンティーヌへと注がれる。その視線に、クレマンティーヌはふとももを擦り合わせながら身をよじる。

「二人、いやニグンを含めて三人か。……………手が足りぬ、な」

「ビツチ様。足りぬ、とは？」

呟きにも似たビクトーリアの言葉に対し、すぐにアルベドが反応を示す。その声色

は、どこか寂しげであった。

「言葉通りの意味じゃ。妾の手足、いや、眼となる者が足りぬ。現状、妾が動かせる者は、小娘、雌猫、ニグンの三名のみじゃ。魔女っ子の力不足は否めんし、何とか言うつるピ力は魔法研究に専念させておるしな。いや、実質ニグンは動かせんから、二人か」

「ビッチ様！ 私達を！ 私達ナザリックの僕をお使い下さい」

アルベドは悲痛な叫びを挙げる。だが、ビクトーリアは黙って首を横に振る。

「何故です！」

アルベドの瞳に涙が浮かぶ。

「妾が、うぬらの主では無いからじゃ」

「ですから何故ですか！ ビクトーリア様は、ナザリックが神、それならば私達の主では無いのですか！」

「違うのう。うぬらは自らをナザリックが僕と言うが、正確には、うぬらはギルド アイONS・ウール・ゴウンが僕じゃ。妾は、ナザリック地下大墳墓が神。例えるなら、空っぽの城を治める墓守よ」

「そんなあ！ ビクトーリア様は、私の愛と忠誠を受け取って下さいました。それが、何故!?!」

ビクトーリアは、涙で濡れるアルベドの瞳をじつと見つめ

「確かに妾はうぬの心を受け取った。うぬらの愛は、それぞれ愛する者へと向けるが本懐。じゃが、忠を捧げるは唯一人、モモンガのみと覚えよ。アインズ・ウール・ゴウンなる物では無く、モモンガのみ、と。解るな、アルベドよ」

「は、い。畏まりました、ビクトーリア様」

アルベドは、その表情に影を落とし、何とか言葉を絞り出す。

「ふふつ。そんなにしよげんでも良からうに。うぬが、妾の妃である事には、何ら変わりは無きゆえに」

「ビ、ビッチ様？」

アルベドの表情に、明るさが戻る。

「疑うか？ 疑うなら、ユリかナーベラルに聞くが良い。村での妾とモモンガさんの会話を、な」

「は、はい！」

その時、アルベドの脳裏に言葉が飛びこむ。

「ビクトーリア様、アインズ様がお戻りになりました。すぐに、こちらにいらつしやるそうです」

「さようか」

ビクトーリアは、短く肯定の言葉を口にする、虚空から一枚のカードを取り出す。

「アルベド、これを」

アルベドは、それを受け取ると、表面に書かれた文字を見つめ、顔をひきつらせた。

「ビッチ様、こ、これは……」

「そうじゃ。使い所は解っておるな」

「はい。畏まりました」



氷結牢獄に足音が響く。足音の間隔が狭い。走っている、もしくは相当急いでいる事が推測される。足音の主は、恐らく、いや、確実にアインズだろう。その音は、段々と大きくなりドアを蹴破る様に開く。

「あ」

ビクトーリアとアルベドの声が重なった。

「え？」

その声に答える様に、アインズもまた声を上げる。

「おまえおまえおまえ、こどもをこどもをこどもを、さらったなさらったなさらったなあー！ー！」

ニグレドのお約束が発動した。ビクトーリアとアルベドは、アインズの手を確認する。だが、そこに人形の姿はなかった。

「アルベド！ 姉を押さえよ！」

「はい！」

ビクトーリアの号令一過、アルベドが素早く行動を開始する。アルベドは、ニグレドを羽交い絞めにするが、その力は凄まじく、じりじりとアインズとの距離を詰めて行く。

「アインズ、早よう人形を！」

ビクトーリアの叫びとも取れる言葉に、喝を入れられた様にアインズは即座に反応する。

.....

「何とかなりましたねえ」

「アホか！ うぬはこの地の支配者であろうが！」

ビクトーリアの烈火の如き怒りを受け、アインズは申し訳無いと縮こまる。その姿を

見、幾分溜飲が下がったビクトーリアは、溜息を一つ吐き場の空気を変える。

「それでアインズ。精査の結果じゃが……」

ビクトーリアの重い言葉に、アインズは無いはずの喉が鳴った様な気がした。

「ワールドアイテムじゃ」

「え？」

「シャルティアを精神支配したのは、ワールドアイテムじゃよ」

告げられた事実には、アインズは言葉を失う。存在する可能性は、アインズとて頭の片隅にはあった。しかし、それを現実として突き付けられ、アインズは混乱の渦へと沈みこむ。

「じゃ、じゃあ、ナザリックのワールドアイテムで相殺すれば……」

「解らぬ。それが良策なのか、下策なのか」

「何故ですか？」

アインズの言葉を受け、ビクトーリアはニグレドへと視線を向ける。ニグレドも、その意を汲み取り、クリスタル・モニターに映像を映す。場面は、当然あの鎧の戦士とシャルティアの戦闘場面。その光景を目にしたアインズは、一人唸りを漏らす。

「そう言う事、ですか」

「ああ」

「あの様な者が居るとなると……今、ワールドアイテムを使うのは、特に二十を持ち出すのは危険ですね」

「うむ。最早、取れる手段は一つ、じゃな」

「直接シャルティアを、ですね」

アインズ、ビクトーリア、共に直接的な言葉を避けてはいるが、結論的には、シャルティアの打倒である。一度殺し、復活させる、と言う事だ。

「ビッチさん。その前に……」

「何じゃ？」

「階層守護者達に、ワールドアイテムを持たせようと思います」

アインズの言葉に対し、ビクトーリアは一度頷き

「対ワールドアイテム用、か」

「ええ」

御互い言葉は少なく確認すると、アインズは視線をアルベドに向ける。

「アルベド。ユリとシズを呼べ。今から私とお前、四人で宝物庫へと向かう。ビッチさん、引き続き監視をお願いします」

「了解した」

靈廟

「プレアデス、ユリ・アルファ」

「プレアデス、CZ2128・Δ」

「お呼びにより、参上しました」

ナザリツク地下大墳墓、第十階層玉座の間に、透き通るような声が響く。その姿を確
認し、「うむ」と承諾の声をアインズは口にしようとする。だが、それを遮る様にアルベ
ドの身体が動いた。疾風、とも言える速度で、デウラハンであるユリの首をかすめ取る
と、玉座とは逆方向、入口付近に陣を取る。どうやらユリは、アルベドに何か詰問され
ているようだ。それは、残されたユリの身体の動きで判断出来る。体の前で、手を違う
違うと振つてみたり、落ち着けと上下させてみたり、と。アインズは、そのレアな光景
を興味深げに見つめていた。

どれほどの時が経つただろうか、入口付近からアルベドの「よっしやー！」と言う
勝鬨が響く。その終焉の声に、アインズは深く頷いた。これで、本題に入れると。アル
ベドは、満面の笑顔を持って帰還を果たす。その途中で、ちゃんとユリの首を返還する
事も忘れてはいない。立場的に、アインズはこの行動を咎めなければならぬのだろう

が、隣に立つ幸せオーラを全開にするアルベドには、何も言えなかった。いや、言っただけは成らない気がした。何か言えば、さらなる混乱を招きそうな気がしてならなかったからだ。

アインズは、ゆっくりと玉座から立ち上がると、ユリとシズの前まで歩み出て、二人にリング オブ アインズ・ウール・ゴウンを手渡す。此の行為に、ユリ、シズ共に眼を見開き、驚きを顔にするが、これを渡される程の事態が起こっている事に対し、緊張感を持って、背筋を正した。

「ユリ、シズよ。事態はアルベドから聞いているだろうが、これから宝物殿へと向かう」「畏まりました、アインズ様」

「うむ。では、行こうか」



「これは……」

転移した先で、アルベドから驚きの声が漏れる。ユリ、シズも同様の心情だったが、何

とか声を殺す事に成功する。

「うわあ」

いや、シズは誰のも聞こえない程の声で、驚きを表していた。

そこに有った物は、大量のYGGDRASIL金貨、宝石、剣や杖など。それらは、誇張や、比喩を抜きにして、山の様に積まれていた。

「うん？ ユリやシズはともかく、アルベドも宝物殿に入るのは初めてか？」

「はい。ギルドの指輪が無ければ、入る事叶いませんで」

アルベドの答えに、アインズは納得の意を示すが、一つ気になる事があつた。

アインズは、アルベドの、その白魚の様な指に輝く紅玉の指輪に視線を落としながら

「アルベド、その指輪はどこで手にいれた？」

「これで御座いますか？」

アルベドは指輪を撫でながら答える。それは大事そうに。その姿は、まるで婚約指輪を愛でる様に。

「ビッチ様から、お預かりしています」

「ビッチさんから？ ……そうか」

（ビッチさんから？ ギルドの指輪を？ あの駄巨乳、一体どこで手に入れたんだ？

アイツの事だ、どうせ碌でも無い方法だろうが……）

「では行くぞ」

アインズは皆にそう言うと、マス・フライ（全体飛行）の魔法を唱える。全員が宙に浮き。金貨の山を飛び越え、その先にある扉へと辿りつく。扉、と呼んではいるが、それには開くべき戸は無い。ただ、四角く闇があるだけだ。その闇を前にして、アインズは指で顎を撫でる。

（えーと、何だっけ？ まったく、二グレドのギミックと言い、タブラさん凝り過ぎなんだよなあ。パスワード、だよなあ）

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」

その言葉に呼応し、闇に文字が映し出される。

（ラ、ラテン語、か？ ヒントを請求する言葉を使っても、読めなきや意味ないじゃん！
まったく、タブラさんのバカ！）

アインズは心の中で、かつての仲間らに毒付きながら、必死でパスワードを思い出そうと記憶の旅を続ける。

（まあ、シズに聞けば解決するんだけどさあ。それじゃあ、俺がダメ支配者と思われか
も知れないし……）

「えーと、確か………かくて汝、全世界の栄光を我が物とし……暗き物は全て汝より離れ去る、だろう——だったか」

言い終えてアインズは後を振り向く。その視界に映るシズが、小さく頷くのが見える。

CZ2128・Δ。プレアデスが一人であるこの少女。ストロベリーブロンドの髪と、翡翠の様な瞳が印象的だ。だが、この少女を象徴する物は、また別にある。YGGDRASILで行われた、大型アップデートの一つ、ヴァルキュリアの失墜。そこで追加された種族、オートマトン^{自動人形}が、彼女の種族となる。それまでの種族、職業は、比較的ファンタジー要素の強い物が多かったが、このアップデートにより、銃器を使用出来る職業や、オートマトンの様な機械的な種族も追加されたのだ。

そして、もう一つ。ナザリックのギミックの多くを設定したのは、アルベドの創造主であるタブラ・スマラグディナなのだが。同じくらいギミックの設定をしていた人物がいた。名をガーネットと言い、彼が創造したNPCがシズである。そのため、一つの要素として、ナザリック全てのギミックとその解除法を知る、と言う設定がなされている。

そのシズが、肯定の意を表したのだ。アインズは心の中で、ほっと一息吐いた。

アインズ達が扉、闇をくぐると、そこは長い通路に出る。両の壁には四角いへこみがあり、その場所には様々な武器が収納されていた。アルベド、ユリ、シズはそれを横目に見ながら、アインズに続き通路を歩く。百メートル程は歩いただろうか、目指すべき明かりが眼に留る。

通路を抜けた先、そこには広い空間が広がる。何も無い、空虚な空間の中央に、三人掛け、であろうか——ソファアが二対、対面に置かれ、その間にテーブルが一脚。サイドには、ランプスタンドが一つと、ソファアを挟ん反対側に帽子掛け、だろうか？横に何本か短い棒が付き出るポールが一つ。アインズ以外の者達は、その光景を珍しそうに眺めていた。

その時、ソファアで何かが動く。ユリとシズは、アインズの前に進み出て、敵対の姿勢を取る。その行動をまるで意識していかないかの様に、眼前の者はゆつくりと立ち上がった。その者の姿を確認し、最も驚きを顕にしたのは、アルベドだ。

「タ、タブラ・スマラグデйна様！」

そう、一行の目の前に現れたのは、アルベドの創造主、タブラ・スマラグデйна。だが、次の瞬間、タブラ・スマラグデйнаの姿が、グニヤリと歪む。

「やまいこ様！」

次に声を上げたのは、ユリだった。そして、その姿はまたしても歪む。次々に至高の四十一人の姿へと変わり、最後にはビクトリアの姿を映し出す。その姿で、左手を胸に当て、右手を広く伸ばし、芝居の様な、道化師の様な姿勢で腰を折ると

「これはこれは、モモンガ様。その御尊顔、再び拝見出来る喜び、恐悦至極。そして、お嬢様方、ようこそ御出で下さいました！」

そう言つて、不敵な笑みを浮かべる。黙つて見つめるアインズの前と後ろで、殺気が吹きあがる。いや、後のアルベドからの物が前二人の物よりも若干強く感じる。

「ふう。パンドラズ・アクターよ、兎戯は止めよ」

溜息を吐きながら、アインズは目の前の者の名を呼んだ。

「パンドラズ・アクター？」

「うん？ 知らぬのか、アルベド」

「いえ、守護者統括として、名と役職は確認してはいますが……」

「そうか。改めて紹介しよう。この宝物殿の領域守護者にして、ナザリックの財政面での統括者。パンドラズ・アクターだ」

アインズの言葉に呼応し、目の前のビクトーリアが姿を変える。第二次世界大戦中のドイツ軍SSを思わせる、軍服、コート、帽子を身に纏った姿に。だが、その凝った衣装とは裏腹に、この者の顔には表情が無かった。いや、そうでは無い。ゆで卵を思わせる頭部には、穴が三つ空いているだけだった。誇張などでは無く、正に言葉通りに。

「ドツペルゲンガー」

シズが、ポツリと言葉を漏らす。そう、パンドラズ・アクター。種族はドツペルゲンガーの上位種、グレータードツペルゲンガー。

「して、我が創造主たる………モモンガ様！ 此の度はどう言うご用件で？」

先程の落ち着いた言葉遣いとは変わり、妙な抑揚と大きなポーキングで、パンドラズ・アクターは言葉を綴る。

「うん。とりあえずパンドラズ・アクターよ、私は名を変えた。これからは、アインズ・ウール・ゴウン。アインズと呼べ」

「おお！ 我が創造主様が、ギルドの名を！ それは正に頂点！ 世界の頂点へとお上りになられた事実！ ではこれより、このパンドラズ・アクター！ 創造主様の御名前を口にかけて頂く時は、トップ オブ アインズ様！ とお呼び致します！」

パンドラズ・アクターの綴る言葉で、アインズの場合は強制的に沈静化される。アインズはゆつくりとパンドラズ・アクターとの距離を詰め、その身体を壁際に迫りやる。微妙な距離を保ちつつ、アインズの右手は、壁を叩く。

「はっ！ ドンツ？」

いわゆる、壁ドン、と呼ばれる態勢だ。

「おい。俺はお前の創造主、だよな？」

「その通りで御座います、トップ オブ アインズ様！」

胸を両手で抱え、感動に震える様にパンドラズ・アクターはアインズの名を口にする。

「とりあえず、そのトップ オブはやめる。これは命令だ。め・い・れ・い・だ！」

「りよ。了解しました。アインズ様」

「続いて二つ目の命令だ。今、この地にはビッチさんがいる」

「おお！ かの御神体が！ ぜひとも、ご挨拶を……」

「いや。絶対に会うな。いいな？」

「それは……理由をお聞きしても？」

確かに、それ相応の理由は必要だろう。だが、アインズは明確な理由を口には出来ない。

（理由って言ったって、恥ずかしいから、じゃダメだよなあ。コイツにだって意思はある訳だし。でも、ハムスケに乗ってただけで、あの爆笑だぞ。なのに、俺の息子と言つて良いコイツが、こんな厨二病全開だと……）

「パンドラス・アクターよ。これはナザリックの機密に関わる事だ。お前がビッチさんの姿を取れる事は、ナザリックの最高機密だからだ。納得したか？」

アインズの言葉に、パンドラス・アクターはゆっくりと啓札の姿勢を取り

「Wen^我nes^がmei^神nes^のGot^望tes^みWil^とle^あ!」

「ドイツ語だったかああああああ！」

驚愕のあまり、左手も壁に叩きつける。

「ダブルドンツ！」

「それも止めてくれると、ありがたい」

アインズの言葉に力は無く、最早懇願と言つていい物になつていた。パンドラズ・アクターは、それを不思議そうに見つめていたが、最後には了解の返事を返すのだった。アインズ、パンドラズ・アクターは密談を終え、淑女達の下へと帰還する。帰還はしたが、場の空気は微妙な物だった。その空気を払拭しようと、アインズは咳払いと共に、本題への突入を開始する。

「コホン。あー、これから最奥へ行く訳だが、アルベド、ギルドの指輪をユリに渡せ」
「どう言う事で御座いましょうか、アインズ様？」

指輪をはめている左手を、右手でかばう様に握りながら、アルベドは疑問を口にする。「うむ。ギミック的な物でな、この先の靈廟に入る時に、指輪を付けていると、トラップが発動するのだ。指輪の力を使わねば入れぬ場所にも関わらず、指輪をはめるとトラップが発動する。皮肉な物だろう？」

そう言うアインズは、非常に楽しげに見えた。



パンドラズ・アクターの部屋を出、アインズ、アルベドの二人は、再び通路の様な場所に居た。

「アインズ様、ここは？」

「うむ。ここが宝物殿の最奥。ワールドアイテムの安置所である霊廟だ」

「霊廟、と申しますと？」

アルベドの問に対し、アインズは前方を指差す。

「この先に、幾つかのくぼみが見えるだろう？」

「はい。！」

優雅に返事を返したアルベドだったが、瞬時に表情を変える。アインズが指示した先、そこには奇妙な彫刻が幾体も存在していた。

「アインズ様？」

「うむ。これは私が創った物でな、皆の……仲間達の残滓の様な物だ」

「残滓……。それではこれは、封印結界にのみ込まれた至高の御方達の身体なのでしようか？」

（みんなの身体、か。ある意味そうかも知れないな。みんなが居た証明、それはもう、此処にある、みんなが残した武器以外ないからなあ）

「そ、そうだアルベド。いくつか空洞のくぼみがあるだろう。そこには、私の像が置かれ

る予定でな——」

「御止め下さい！ そんな事を、そんな悲しい事を仰らないで下さい！」

アルベドの声が、靈廟に響き渡る。それは、悲しみと、痛みを伴っていた。

「アルベドよ、シャルティアの精神支配は解く事が出来ると思うか？」

「そ、その為にワールドアイテムを取りにいらっしやったのでは？」

「いや、ワールドアイテムは、守護者達に持たせるためだ」

「で、では、シャルティアへの対応は？」

涙で顔を濡らしながら、アルベドは疑問を口にする。その悲しみの表情を、アインズは直視できなかつた。これから自分が口にする言葉は、残酷で、冷酷な物だからだ。彼ら、彼女らは、この世界では魂を持ち、生きているのだ。だが、アインズとビクトーリアが出した結論は、彼ら、彼女らを駒として扱う事に他ならない。だからこそ、アインズはアルベドの顔を見る事が出来なかつた。アルベドに背を向け、かつての仲間達の残滓だけを、その空洞の瞳に映しながら、アインズは口を開く。

「シャルティアを殺す。そして、復活、と言う手段だ」

アインズという言葉に、アルベドはすぐに返事を返す事は出来なかつた。項垂れる様に、頭を下げ、あの妖艶な顔は、今は黒髪に隠れて見る事は叶わない。

「そ、それでは、ビクトーリア様とアインズ様、お二人でシャルティアに？」

「いや。私、単騎で当たる。これ以上ビッチさんに——」

「ホールド オブ グレイプニル」

アルベドの言葉と共に、アインズの足もとに青い光を放つ魔方陣が出現し、そこから現れた鎖が、アインズの身体を捕縛する。

「こ、これは！」

アインズは驚愕の声を上げる。その声を聞きながら、アルベドはゆっくりと立ち上がった。

「ア、アルベド！ コレを、ホールド オブ グレイプニルを解くのだ！」

「申し訳ありません、アインズ様。それは出来ません。」

「何故だ！」

「これは、ビクトーリア様からのご指示ですので」

眞実

アルベドは、目をつむりビクトーリアとの会話を思い出す。

「ビツチ様、これは？」

「うぬの想像通り、妾を拘束したマジックアイテム。ホールド オブ グレイプニル
じゃよ」

アルベドは、手に持つカードをじっと見つめるが、何故これを自分が渡されるのか、それが理解出来ない。思い悩み、表情を猫の目の様に変えるアルベドを、ビクトーリアは楽しそうに見つめていたが、表情を引き締め、理由を口にする。

「アルベド。シャルティアの件、恐らく妾達は最も愚策を選択する事になるであろうよ」
「ビツチ様？」

「ワールドアイテムの効果を打ち消す為に、ワールドアイテムを使う。これが最も良策
じゃ」

「は、はい」

ビクトーリアが何を言おうとしているのか、現時点ではアルベドには解らない。だからこそ、一言一句聞き流すまいと、アルベドは全神経をビクトーリアの言葉に集中させ

る。

「じゃが、それは転移前の世界での事じゃ。この世界では、間違い無くワールドアイテムの再習得は不可能じゃろう。そして、相手もワールドアイテムの所有が確認済みじゃ。彼奴等が、幾つのワールドアイテムを所有しておるかは謎じゃが、いつかは両者共枯渇するは確定。それは解るな？」

「はい」

ビクトーリアは、アルベドの返事を確認すると、僅かな時間沈黙を守り、再び口を開く。

「では、残された手段は、元居た世界のルールを利用する事じゃ」

「ビツチ様、それは一体？」

「うむ。妾やアインズが死んだ場合、蘇生、と言う手段でしか復活はありえん。そうじゃろ？」

「はい」

「しかしじゃ。うぬやシャルティアなどのNPC達はちいと違う。うぬらは、ギルドのシステムに則り、復活が可能じゃ」

ビクトーリアの言葉に、アルベドは再度表情を引き締め

「YGGDRASIL金貨を使つての復活、で御座いますね」

「そうじゃ。アインズ、いや、モモンガさんも、この結論に至るはずじゃ」

ビクトリアアの口にした結論に、アルベドも肯定の頷きで返す。あの思慮深き絶対的支配者ならば、と。しかし、此処までの話では、何故ホールド オブ グレイプニルを自身に与えられたのかの説明がつかない。

「ビッチ様、お話理解出来ました。しかし、ホールド オブ グレイプニルは……」

「うむ。ここからが重要な事柄じゃ。アルベド、シャルティア打倒に、どう言う手を打つ？」

この問いかけに、アルベドは眼を瞑り、最善の策を打とうと思案する。

「100Lv NPCの部隊を結成致します。セバスを王都より呼び戻し、ルベドを起動させます。私、コキユートス、セバス、ルベドを前衛とし、後衛にマーレを配置。全指揮をデミウルゴスに」

「じゃろうな。妾が作戦を立案しても、同じ様な布陣じゃ」

「はい」

「じゃが、許可は出まい」

アルベドの表情が一変する。これが最善。ビクトリアも、それを認めている。それが何故？

「解らぬ、と言う顔じゃな。ならば教えよう。うぬらが、モモンガさんにとって、守らね

ばならぬ者達だからじゃよ」

「そ、それは理解出来ませんが……」

「理解出来ておる様には見えんなあ。シャルティアもまた、モモンガさんの守りたい者じゃと言う事を忘れておる顔じゃぞ」

アルベドの表情がひきつる。失念していた。アルベドの眼は、シャルティアが敵対行動をとった時から、彼女を敵、として見ていたのだ。下唇を噛み、アルベドは言葉に詰まる。アルベドとて、シャルティアが憎い訳では無いのだ。ただ、守護者統括、ナザリックNPCの頂点としての性として、防衛と言う方に神経が行っていただけなのだ。

「ふふっ。すまんのう、少々意地が悪かったの。話は戻るが、そんな、家族とも言えるうぬらが戦う事を、モモンガさんは、良しとするかのう」

「そ、それは、そうですが」

アルベドの、焦りにも似た言葉に、ビクトーリアは二度ほどの頷きで返すと

「結論は、モモンガさん単騎での決着、じゃろうな」

「そんな！ 百歩譲っても、ビクトーリア様との共闘で当たるべきでは？」

「せんじやろうな」

そう言つてビクトーリアは、苦虫を潰した様な表情を浮かべる。

「アレは、モモンガさんは、妾に負い目を感じておるからのう。妾を戦の矢面には立たせ

んじやろうて」

「そ、それは……」

アルベドは、続く言葉を発する事が出来なかった。それは、知っているから。モモンガの思いを。ビクトーリアの嘘を。僕達が、ビクトーリアに向ける感情を。もし、僕達がビクトーリアを受け入れる事が出来ていれば、話は違って来たのだろう。しかし、現状ビクトーリアを支えようとする者など、ほんの僅かだ。L・Vのメイド達でさえ、憎しみの感情の方が強いくらいだ。そして、デミウルゴスが筆頭である、反ビクトーリア勢力の存在。特に、プレアデスが一人、ルプスレギナの、ビクトーリアを舐切った態度は尋常じゃない程。そんな状況を、作り出してしまったのは、まぎれもなくモモンガなのだ。だからこそ、彼は決してビクトーリアを危険な場面には立ち合わせはしない。だが、当のビクトーリアの表情は、そうは言つてはいなかった。真にナザリックの僕達を、モモンガを心配する物だ。

「アルベド。シャルティアとモモンガさんを戦わせてはならぬ。その決断を許せば、うぬらは優しき支配者を失う事になる。解るな」

「はい。心得ております」

ビクトーリア、アルベドが危惧する物。それは、モモンガとシャルティアの相性の問題だった。確かにモモンガは、上位物理無効などの、様々なスキルを持っている。だが

それは、Lvの低い者や、魔法付与値、つまりは武器に内包されるデータ量の少ない物に限られているのだ。100Lvのプレイヤー、もしくはNPCに殴られれば、普通にダメージは通るのだ。そしてもう一つは、モモンガがマジックキャスターである事だ。対してシャルティアは、近接、遠距離どちらもこなせるマルチ。魔法の打ち合いならば、モモンガにも勝ち目はあるかも知れないが、シャルティアが近、中距離での肉弾戦を仕掛けてきた場合、モモンガの物理防御値では、容易くHPを削り尽されるだろう。そして、最悪なのは、モモンガの種族だ。アンデッドのモモンガに対して、シャルティアの習得しているクラス、特に信仰系の魔法は絶対だ。だからこそビクトーリアは、二人の激突を避ける様、アルベドに注意を促すのだ。

「しかしビツチ様、では一体どのような策を？」

「ふん、知れた事よ。妾が単騎で当たる」

「そ、そんな！ それではビツチ様が！」

「いや、妾はシャルティアの誕生に関わっておるからの。負けはせんわ。じゃからアルベド、モモンガさんの足止めは頼む」

アルベドはゆつくりと、そのまぶたを上げ、眼下に横たわるアインズを視界にとらえる。

「アインズ様、申し訳御座いません。もう少々我慢の程を」

「ア、アルベドよ、これは一体どう言う事なのだ！」

アインズは現状の確認を試みる。はじめは謝りの言葉を口にするのみだったアルベドだが、徐々に事の成り行きを語って行つた。その言葉が進むにつれ、アインズの精神は何度も沈静化を繰り返す。

「な、なんと言う事だ……」

眩く様に、アインズはそう言葉を綴る。この言葉に対し、アルベドは再度謝罪の言葉を口にするが、アインズの対応は全く違う物だった。

「アルベド、違うんだ。早く！ 早くビッチさんを！ ビクトーリアを止めるんだ！」

アインズの言葉は、最早絶叫と言つていい物だった。何度も何度も精神は沈静化をするが、それを超える程の感情がアインズの内から湧き上げて来ていた。その行動は、誰の目から見ても、異常と判断出来る物だ。恥も外聞も捨て、床を這いずり、アインズは霊廟の出口へと向かう。

「アインズ様！ 一体何が！」

最早、アルベドの頭脳もパニックを起こしていた。一体何がアインズの行動を速めて

いるのか？」と。

「アルベドよ、確かにビクトーリアはシャルティアの誕生に関わっている。しかしだ、それは生み出すためでは無い！ シャルティアは、ナザリックの一番槍として戦う為に、ビクトーリアを、ピッチさんを仮想敵として、クラス構成がなされている！ 言い換えれば、シャルティアは……シャルティアは、ピッチさんを殺す為に誕生しているのだ！」
アインズの言葉を聞き、アルベドは膝から崩れ落ちる。

「そんな、そんな……………」

「糞っ！ 糞っ！ 早く行かねばならぬ時にい！ アルベド!! お前だけでも行け！」

ナザリック全軍を動かす事を許可する！ 何としてもピッチさんを、ビクトーリアをこの地に連れ戻せ！」

「か、畏まりました！」

言うが早いか、アルベドは走り出した。



くナザリック地下大墳墓 第十階層 玉座の間く

アルベドは、宝物殿から、玉座の間に転移すると、至急メツセージの呪文を介し、各階層守護者、プレアデス、メイド長のペストーニヤに招集を掛けた。各面々は程無くして、全員が集合する。だが、その間にもアルベドの作業は続けられた。ニグレドに連絡を取り、シャルティアの位置座表を確認すると、数枚のスクロールを使い、空間にクリスタル・モニターを展開する。場のシャルティアにはまだ、異常は無かった。アルベドからは、一瞬安堵のため息が漏れる。

「やれやれ、一体どうしたと言うのだね、アルベド」

デミウルゴスが、何事かと問いかける。その達振る舞いは平静とし、それがまたアルベドを憤らせた。

「ナザリック全軍を持って、ビクトーリア様の行動を阻止します」

「んん？ ナザリック全軍を持って？ どうしたと言うのです？」

「ビクトーリア様に危険が迫っています。ビクトーリア様とシャルティアを会わせる訳にはいかないの！」

余裕の無いアルベドの言葉とは裏腹に、デミウルゴスはため息を一つ吐くと

「やれやれ、何だと思えば化け物の事ですか。いいかげんにしてくれないか。何度も言っているだろう？ あんな化け物、早く殺してしまえば良いと。シャルティアが始末

してくれるのなら、それで良いとは思わないかい？」

両手を広げ、場の全員の意見を誘う。だが、誰も賛同はしなかった。しかし、否定の声も上がらなかつた。アルベドの精神は掻き乱される様な荒ぶりを見せる。アルベドは、虚空からバルディッシュとスクロールを一枚取り出す。焦りながら、そのスクロールをナーベラルへと手渡した。スクロールを受け取ったナーベラルは、アルベドの意志を汲み取り、それを展開し、力ある言葉を口にする。

「ゲート」

だが、羊皮紙はひらひらと床へ。ナーベラルは、慌ててそれを拾い上げると、再度空中へ投げ、再び力ある言葉を口にする。

「ゲート」

だが、結果は同じだった。何かの異常が起こっている？ 瞬時にそれを判断し、アルベドはメッセージの呪文を展開する。

「緊急事態よ。ゲートの魔法が展開しないわ」

『現在、ナザリックと、外界への転移門は閉ざしています』

アルベドの問いに、鈴の音の様な声が事情を説明する。

「どう言う事。答えなさい、オーレオール！」

『ビクトリア様から、緊急事態の処置を仰せ使いました』

「ビッチ様から……。転移門を開放しなさい！」

『解放には、ナザリック最高位の方の命令が必要です』

アルベドの奥歯がギリリと音を立てる。

「私は、ナザリック地下大墳墓 守護者統括。転移門を開放しなさい！」

『出来ません。ナザリック最高位、至高の四十一人様か、煉獄の王の承認が必要です』

アルベドは、膝から崩れ堕ちた。彼の王は、此処まで用意して、戦いに挑んだのだ。誰一人として、シャルティアに手を出せない様に、ナザリックを封殺してまで。最早、アルベドには祈る事しか出来はしなかった。一刻も早く、アインズが帰還する事を。ビクトーリアが、無事戻る事を。



「ほう。この距離でも反応無し、か」

シャルティアの正面、五メートル程に位置取り、ビクトーリアは確認した事象を言葉にする。

「となると、明確な敵対行動を起こさねば、反応せぬと言う事じゃなあ」
腕を組み、何度か頷いた後、後を振り返り

「雌猫、ニグレドとのパスは通つておるか？」

「うん？ だーいじょーぶ」

クレマンティーヌは、こめかみに指を当て確認し、返事を返す。

「シャルティアの姿は、誰にも見られてはならん。ニグレドと協力しながら、近づく者は全て殺せ。決して遊ぶでないぞ」

「えー。つまんなーい！」

「仕事とは、そう言う物じゃ」

不満を口にするクレマンティーヌにそう言うと、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「はーあーいー」

渋々返事を返し、クレマンティーヌは姿を消した。

誰も居なくなつた事を^{生命}ディテクト^{感知}・ライフの魔法で確認したビクトーリアは、シャルティアと再度向き合い、^{生命}ライフ^{真髓}・エツセンスを発動させる。

「シャルティアよ、さあ始めようか。姉妹での殺し合いを」

死を記憶せよ

「シャルティアよ、さあ始めようか。姉妹での殺し合いを」

ビクトーリアはそう言うと、ゆつくりとシャルティアに近づき、その兜で包まれた少女の様な顔を、拳で殴打する。その衝撃で、シャルティアはグラリと揺れ、その瞳に力が蘇る。

「あははははは！ いきなりげん骨とは、随分とご挨拶ですねえ。お姉さま」

「ふん。姉が目の前におるのに、寝ぼけとるうぬが悪かろう？」

「これは失礼」

シャルティアは、花の様な笑みを浮かべる。

「それでお姉さま、今日は何の御用で？」

「うぬと殺し合うためじゃよ」

ビクトーリアの言葉に、シャルティアは三度ほど頷き

「それは良い事ですね。攻撃されたのですから、戦わないと」

シャルティアの言葉が、終わるか否やの瞬間、お互いの右拳が振り抜かれる。ドン！
と言う破裂音と共に、お互いの顔面を相手の拳が捉える。両者共衝撃を受け、若干仰け

反るが、勝つたのは体重のあるビクトーリア。すぐに態勢を整え、右のミドルキック、左のハイキックと連撃を決め、振り抜いたハイキックの回転そのままに、シャルティアの腹部へ右の回し蹴り、ソバットを叩きこむ。この攻撃によつて、シャルティアは後方に吹き飛んだ。

これを好機と見たビクトーリアは、走りながら指を鳴らし、青い旗のフラッグポールを手にする。フラッグポールに揺れる旗は、これまでのどんな物よりも豪華であつた。恐らく、ビクトーリアが有する武器の中で、最も上級な物と思われる。その助走の力さえも、武器の威力に上乘せする様に、ビクトーリアはフラッグポールを振り下ろす。

「ウォール・オブ・ストーン^壁」

シャルティアの力ある言葉に応え、地中から生える様に出現した石壁は、ビクトーリアの顔、胸を捉え後方に吹き飛ばす。地面を転がり、胸を強打した事により呼吸を乱しながら

「チャージ」

ビクトーリアは短く呟く。その声に反応する様に、光の玉が二つ出現した。

——チャージ、雷を種族とする者達の最上位種族、鳴神^{なるかみ}によるスキル。

ヴァンパイアのブラッド・プールと同じ様な効果がある物だが、血液では無く、雷の

魔法をストツクしておく物だ。蓄えられた魔法は、瞬時に放つ物と比べ、威力は約80%程となる――

役目を終えた石壁は、埃を巻き上げその姿を瓦礫へと変えて行く。砂埃舞う中、ビクトーリアは目を凝らし、シャルティアの姿を探す。だが、そこにはシャルティアの姿は無い。

「あーはっはっはっは！ なかなか痛かったですよ、お姉さま。そんなお姉さまに、私からプレゼントです」

そう言うと、左手を高々と掲げる。そして、そこには光で形作られた極太の槍が。

「清浄投擲槍、と申します」

言葉と共に、シャルティアは腕を振り下ろす。そのモーシヨンに追従し、槍はビクトーリア目がけ、猛スピードで突進する。

「くっ！ トリプレットマキシマイズマジック、エレクトロ・スフィア」

ビクトーリアの力ある言葉に反応し、雷球が身を守る様に展開した。光の槍と、雷の盾が激突する。その瞬間、場は光と爆音と舞いあがる土煙が支配した。

徐々に砂塵が晴れて行く光景を、シャルティアはじつと見つめていた。霞む景色の中、その人物はしっかりと二本の脚で大地を踏みしめ、立っていた。

「ふうん。流石はお姉さま。ダメージは三分の一、と言ったところですか」

「そうじゃな。しかし、うぬのそのスキル、たいした物じゃ」

ビクトーリアは、こめかみから流れる血を拭いながら、シャルティアに賛辞を贈る。

「お褒め頂き光栄です」

シャルティアは素直にその言葉を受け入れた。それが、第二ラウンドのゴングとなる。シャルティアは、上空から降下すると、その勢いのままスポイトランスを手に、地上すれすれを飛行する。対するビクトーリアも、フラッグポールを手に、跳ねる様に駆け出した。二人は激しくぶつかり合う。御互いの得物を弾き、弾かれ、何合も打ち合う。一切引く事無く、場には金属同士が発する、甲高い音だけが響く。

「なかなかお強いですねえ、お姉さま」

焦れる様に、シャルティアは一旦距離を取る。その後、呟く様に漏れた言葉に、ビクトーリアは沈黙で返す。視線が交錯し、次の一手を探る様に、同時に口を開く。

「グレーター・テレポーターション！」

「チャージ」

シャルティアの姿がかき消えると同時に、ビクトーリアの頭上に、二つの雷球が出現する。頭上の力を感じながら、ビクトーリアは視線を巡らせ、シャルティアの行方を探る。シャルティアの姿、それは再び上空にあった。確認したビクトーリアは、瞬時に力

ある言葉を口にする。

魔法効果範囲拡大化
「ワイデンマジック サウザンド・タスク！」
吐出する千本の牙

その言葉に反応し、地面から何十という牙の様な刺が生え、まるで大地が巨大な獣の口のようにシャルティアを飲み込む。

「不浄衝撃盾！」

シャルティアの言葉と共に出現した圧力によって、牙は爆散する。崩れ落ちる牙の残骸を隠れ蓑に、シャルティアは再度ビクトーリアへ突撃する。瓦礫によって、一瞬シャルティアの存在を見失ったビクトーリアだったが、スポイトランスの直撃の瞬間、体を捻り、シャルティアの右腕を左脇でからめ取った。

「！」

ビクトーリアのこの行動に、シャルティアは虚を突かれる事になった。シャルティアの集中が一瞬、ほんの一瞬途切れる。その瞬間、シャルティアの頭部に、激しい衝撃が襲う。連続して、二度、三度。その正体は、ビクトーリアによる頭突きであった。額を割り、黄金の髪を真っ赤に染めながら、何度となくそれは打ちつけられる。それによって、シャルティアの視界は霞んでいく。

「くっ！ ふ、不浄衝撃盾！」

シャルティアは、空いた左手をビクトーリアの腹部に当て、スキルを発動させる。そ

の衝撃は凄まじく、ビクトーリアを後方へと弾き飛ばす。何度も、何度も地面に打ち付けられビクトーリアは地にひれ伏す。だが、ぼろぼろの身体に鞭打つ様にビクトーリアは立ち上がる。

「グレーター・テレポーターション！」

「チャージ」

ビクトーリアの頭上に、新たに雷球が二つ出現し、シャルティアの姿は再び上空に。先程と同じ構図に戻る。眼下に見えるビクトーリアの姿を確認したシャルティアは、ニヤリと余裕を感じさせる笑みを漏らし

「清浄投擲槍！」

再び光の槍をビクトーリアに向けた。

「ツ、ツインマキシマイズマジック チェイン・ドラゴン・ライトニング！」

光の槍と、雷の龍が空中で激突する。勝敗は龍の方だった。力を若干失ったが、それでも二匹の龍はシャルティアに食らい付き、爆発を起こす。その爆煙を抜け、何かが落下する。シャルティアだ。ドスンと言う音を立て、シャルティアは地に伏せる事になる。だが、シャルティアもビクトーリア同様、身体に鞭打ち立ちあがる。

「うふふ。お互い、大分ダメージが溜まって来ているようですねえ。ですが、こう言う方法もあるですよ。マキシマイズマジック グレーターリーサル！」

シャルティアの身体を、黒い霧が覆う。グレートリーサル。一般的には致死系の魔法に分類される物だが、アンデッドにとっては、回復となる魔法。

「回復か……」

「あらら？ お姉さまは宜しいので？………そうですかあ、お姉さまは回復魔法も、回復アイテムもお持ちでは無いのですね。お可哀そうに。よよよ」

シャルティアの芝居がかった言葉に、ビクトリアの眉が跳ねる。四度目の「チャージ」の言葉と共に、指を鳴らし、赤色の旗が揺らめくフラッグポールを呼び出す。

「舐めおつて。こんのお、ペタン血鬼があー！」

叫びながら、フラッグポールを投擲する。放たれたソレは、シャルティアへ向け一直線に進んで行く。

「あははははは！お姉さま、遊びでは無いのですよー！」

シャルティアは、スポイトランスで軽々と叩き落とす。だが、それが油断を生んだ。フラッグポールに気を取られるあまり、その後ろに迫る存在を見落としたのだ。フラッグポールを弾いた瞬間、シャルティアの首筋辺りを、激しい衝撃が襲う。その正体は、ビクトリア本人。左手でシャルティアの首筋をホルドし、右の肘から前腕で何度も殴りつける。いわゆる、プロレスで言うエルボーと言う技だ。打ちつけられる肘は、脳を揺らし、視界を霞ませる。徐々に足の力が抜けて行き、シャルティアの姿勢が崩れて行

く。それを感じ取ったビクトーリアは、右腕で顎をかち上げた。エルボースマッシュ。前傾姿勢を取っていたシャルティアは、大きな衝撃を受け後ろに仰け反る。だが、簡単にそれを許す程ビクトーリアは甘くも優しくも無い。そして、意地も悪い。後ろに倒れるシャルティアの兜を掴むと、シャルティアの身体を半回転させバックを取る。そして、その首に腕を回し締め上げる。

「あ、あはは、お姉さま。ヴァンパイアであるわたしに、絞め技など、一体何を考えておいでなので?」

「ふん? 効かぬか?」

「当たり前です」

「ならば、自分のHPを確認してみてもどうじゃ?」

シャルティアは精神を集中させ、自身のHPを感じ取る。一瞬の後、その顔が驚愕の表情を見せる。僅かだが、シャルティアのHPが徐々に削られて行くのだ。

「こ、これは!」

「解った様じゃな。シャルティアよ、妾達はこの世界の法則に則りながらも、YGGDRASILのシステムに縛られた者よ。じゃから、この様な攻撃は、この世界のヴァンパイアには通用せんじやろう。じゃが、YGGDRASIL産の者にはどうじやろうなあ」

そうやって締め上げる力を増す。

「ぐ、ぐうっ」

何とか、ビクトーリアの腕を振りほどこうともがくが、ビクトーリアの締め付けは緩まない。苦肉の策として、シャルティアは右掌を背後に向け

「不浄衝撃盾！」

自分もろともビクトーリアを吹き飛ばす。二人は前後に分かれ、土の上を転がるが、すぐに態勢を立て直す。次の行動は、シャルティアの方が若干早かった。すぐさま右手を上げ、力ある言葉を口にする。

「魔法抵抗難度低下ペ、ペネトレートマジック インプローション！」

ビクトーリアの腹部辺りで、爆発が起こる。

「あはははは！ まだまだ続きますよ、お姉さま！ ペネトレートマジック、インプローション！」

再度爆発が起きた。

「ペネトレートマジック、インプローション！」

三度の爆発。だが、シャルティアは違和感を覚える。インプローションと言う魔法は、言葉通り体内で爆発を起こす魔法だ。普通、この攻撃を受けた者は、内臓を楨散らかせるはずだ。だが、ビクトーリアは傷を負ってはいるが、そんな様子は無い。此の現

象によつて、シャルティアの手が止まる。今の状態が、正常なのか、異常なのか判断が付かないためだ。迷うシャルティアの耳に、ビクトリアの微かな笑い声が聞こえた。

「な、何を御笑いになつていますか、お姉さま」

「うん？ いや失礼。随分と悩んでおるな、と思つてな」

「ぐぬぬ……」

「妾が行つた事は簡単じゃ。軸をずらしたのじゃよ」

「軸う？」

シャルティアの眼が見開かれる。驚きを表しているのだ。今のシャルティアは、ビクトリアの言っている事が、何一つ理解出来ないから。

「解らぬ、と言う顔じゃな。うぬは魔法と言う物を理解出来てはおらん。インプローション、これは確かに内部爆発を起こす魔法じゃ。じゃがなあ、魔法を発動すれば、体内で爆発が起こる訳では無いぞ。正確に言えば、目当ての敵の身体がある場所で、爆発を起こすのじゃ」

「！」

「解つた様じゃな。爆発の起こる瞬間、自分の身体をその座標軸からずらす事が出来れば、決定的なダメージを回避する事が出来る、と言う訳じゃ」

「そ、そんな事が——」

「出来る訳無い、か？　今うぬの目で見たであろう？」

「くっ！」

シャルティアの顔に焦りが浮かぶ。今、目の前に居る敵が、どんな隠し玉を持つているか解らないためだ。考えれば考えるほど、シャルティアの思考は迷宮を彷徨う。

「で、では、こう言うのはいかがでしょう」

言うや否や、シャルティアの身体がブレた様に見えた。そのブレは徐々に大きくなり、最終的もう一人のシャルティアが現れる。

「死せる勇者の魂
「エインヘリヤル」

「正解ですよ、お姉さま」

ビクトーリアへ向け、エインヘリヤルが特攻を開始する。

——エインヘリヤル、自身の分身を創るシャルティアの種族スキル。召喚主と同じ力を有するが、スキル、魔法などは使用不可な物——

ビクトーリアは、エインヘリヤルの攻撃をフラッグポールで受けながら、シャルティアへの視線を外さない。そのシャルティアは立ち尽くしたまま、動かない。いや、その口が僅かに動いた。

「眷族召喚！」

シャルティアの周りの空間が歪み、ヴァンパイア・バットが、ヴァンパイア・ドッグ

が姿を現す。シャルティアは、その眷族に対し、スポイトランスを振るう。

「チツ！ フレンドリー・ファイア同による、体力回復か。全く、いらん知恵ばかり付けよって」

ビクトーリアは、エインヘリヤルのスポイトランスを跳ね上げると、腹部にソバットを入れ、後方へと吹き飛ばす。

「簡単に許すと思うなよ。妾をあまり、舐めるで無い。解放！

ライオット・フアランクス雷光の爆砲！」

ビクトーリアの言葉に呼応し、頭上に浮かぶ、計八個の雷球が輝きを増し、シャルティアへ向け放たれる。それは、まるで極太のレーザー砲の様だった。突然の見た事も無い攻撃に、シャルティアのガードが遅れる。爆音と土煙りが上がり、それが収まった時には、場に存在する者はシャルティア一人となっていた。

「ぐぬぬぬ！ 勝負をつけましょうか、お姉さま！」

フレンドリー・ファイアによる回復を阻止された事で、シャルティアは冷静さを失う。そして、取った行動は、エインヘリヤルとの二対一の決戦。ビクトーリアに向け、二人のシャルティアが突撃を開始する。スポイトランスの切っ先が、ビクトーリアの身体を捉える。その瞬間、ビクトーリアが僅かに身体を捻る。

「えっ？」

二本のスポイトランスが、ビクトーリアの正面と背後を通過する。つまりは、空振りさせられたのだ。シャルティアの身体が、ビクトーリアにぶつかった。その瞬間、二人のシャルティアは、ビクトーリアに抱きしめられる。

「つーかまえたあ」

「!!」

「skill 皆傷付けられ、omnes, ultima necat」

シャルティアの、動いていない心臓が跳ね上がる。シャルティアの何かが、根源的な危機を感じ取ったのだ。

「超位魔法……」

ビクトーリアが、最上級の攻撃を宣言する。その言葉と共に、ビクトーリア、二人のシャルティアの周りに、多重魔方陣が展開される。それを見つめ、ビクトーリアは二ヤリと意地の悪い笑みを浮かべ

「memento mori」

場は、黄金の光に包まれた。

見守る者達

大量の落雷が降り注ぎ、ほぼ更地となった戦場に、二人は距離を持って立つ。

「あははは！ 残念ですねぇ、お姉さま」

あざけ笑うシャルティアを、ビクトーリアはじつと見つめ

「ふん。復活アイテムか」

詰まらなそうに呟く。

「その通りです、お姉さま。これは、ペロロンチーノ様が持たせてくれた物。流石とは思いませんか？」

シャルティアの問いに、ビクトーリアはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ

「思わんのう。一対一の殺し合いに、蘇生や回復など無粋な物じゃよ。まあ、こんな事が起こるとは、あの鳥も思っても見んかったじやろうがな」

「は……い？」

理解出来ないシャルティアを余所に、ビクトーリアはフラッグポールを振るう。
ブンツ！と言う風斬り音が、二人の再戦の口火を切った。

御互い跳ねる様に走り出し、フラッグポールとスポイトランスが火花を散らす。何合

か横薙ぎでぶつかり合う中で、シャルティアに僅かな変化が起こる。深紅の兜の影で、シャルティアはニヤリと笑う。スポイトランスの軌道を急激に変え、フラッグポールを跳ね上げる。虚を突かれたビクトーリアは、身体を無防備に晒す事になった。シャルティアは、その隙を突く様に、左の掌打をビクトーリアの鳩尾目掛けて叩き付ける。ビクトーリアの呼吸が詰まり、一瞬動きが止まる。それを見越した様に、シャルティアは身体を回転させ、右足の蹴りを入れた。

だが、シャルティアの連撃は止まらない。ビクトーリアの顎を目掛け、かち上げる様に膝を打ちこみ、瞬時に腰を落とすと、右足でビクトーリアの足を払う。これによって、ビクトーリアは尻もちを付く事になった。シャルティアはそれを確認すると、ロンダートでビクトーリアとの距離を取る。五度、六度と回ると、大地を蹴り、ビクトーリアへと直進を開始した。一気に距離を詰め、あと一步を、最大の力を込めたその右足で踏み切り、左膝を再度ビクトーリアの顎へと叩きつける。その威力を保ったまま、シャルティアは後方へ飛び、ビクトーリア目がけて直進する。次のシャルティアの一手は、膝では無く肘。ビクトーリアの直前でスライディングの様に、地面を滑り、右肘でビクトーリアの顎を三度打ち抜いた。蓄積されたダメージで、ビクトーリアの視界は霞み、意識は朦朧となる。そのビクトーリアを、シャルティアは楽しそうに眺め、その血で濡れた髪を掴み引き吊り起こす。

「あはははは！ 惨めな姿ですねえ、お姉さま」

言うや否や、またもや顎を膝で打ち抜く。力無く腰を落とすビクトーリアを楽しむ様に、周りをぐるりと一周し背後に立つと

「そう言えば、こんな事をしてくれましたねえ」

言つてビクトーリアの背後から、正面越しに腕を回す。右脇で首を固定し、シャルティアはビクトーリアを締め上げる。ドラゴンスリーパー、と呼ばれる物を仕掛けたのだ。仰け反つた姿勢で締め上げられる苦痛で、ビクトーリアの意識が僅かに蘇る。手足をばたつかせ、何とかシャルティアの拘束を解こうともがくが、シャルティアは100Lv NPC、アルベド程では無いにしろ、その力は侮れない物なのだ。

シャルティアの絞め技により、ビクトーリアのHPがじわじわと削られて行く。もがいても脱出不可能と判断したビクトーリアは、地面を蹴る。シャルティアの肩越しにバックへと回り、態勢を入れ替える手段をとつた。だが、それは失敗に終わる。

蓄積したダメージが、僅かにビクトーリアの蹴り足の力を弱めた。回転するビクトーリアを、肩に担ぐ様に捉えたシャルティアは、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。その表情は、ビクトーリアのそれと酷似した物だった。左手で、ポンポンとビクトーリアの背中を茶化す様に叩くと、頭から地面へ突き刺す様に叩きつける。衝撃で朦朧とするビクトーリアの、その血塗れの顔をシャルティアは踏みつけた。

「あはははははは！ 煉獄の王と言っても、この程度ですか。どうやら、魔力の方も底を尽いている様ですし、お姉さまに残された逆転のチャンスは、超位魔法ぐらいですねえ。しかし、わたしはそんな時間のかかる物、許しはしませんよ。あは、あはは、あはははははは！」

シャルティアの嘲笑が、戦場に響き渡った。



時間は僅かに遡る。

やっとの事で玉座の間にアインズが転移して来た時には、戦いがすでに始まっていた。頭上に展開するクリスタル・モニターが映し出す映像を虚空の瞳に映し

「間に合わなかったか……」

現状を確認する様に呟く。アインズの姿を視界に映したアルベドが、急ぎ近寄ってくる。その表情は、普段の優雅さを脱ぎ払った悲痛な物だった。アルベドは、転移門の封鎖などを急ぎアインズへと報告する。そして、急ぎビクトーリアへの応援を懇願した。

だが、アインズの首は縦には振られる事は無かった。代わりにアインズは、メッセージの呪文を発動させる。

「ニグレド。私だ」

『これはアインズ様』

「監視は続けているな？」

『はい』

「では、クリスタル・モニターをナザリックの主要な場所に展開しろ」

『畏まりました』

魔法を終了させ、アインズはアルベドへと視線を向ける。

「アルベドよ。こうなってしまう以上、我々に出来る事は無い。ただ、見守る事しかない」

「何故です！」

アルベドの悲痛な叫びに、アインズは一瞬の沈黙の後に口を開く。

「それが、ビッチさん、と言う者だからだ」

「ですから何故！」

「……見たくは無かったのだろう。私や、仲間達の子供と言ってもいいお前達が、シャルティアとぶつかる所を」

アインズの言葉に、アルベドは両手で口元を押さえ、目に涙を溜める。

アインズは、視線をアルベドからモニターに映し

「見守ろうではないか、ビッチさんを。信じようではないか、我ら至高の四十一人が神と崇めた者を」

この言葉を最後に、場に静寂が戻る。ナザリックに所属する誰もが、クリスタル・モニターに映る光景に目を奪われていた。一進一退、とでも言える戦いに。どれほどの時間が経ったのか、画面が黄金の光に包まれる。超位魔法 *memento mori* が発動したのだ。

「まずは一本、と言う事だな」

「はい」

アインズは、守護者達へと視線を向ける。コキュートスはハルバートを握り締め、じっと画面を見つめている。デミウルゴスはポーカーフェイスで佇むが、その身体からは苛立ちが感じられた。アウラとマールレは口をポカンと開け、画面を見ている。双子のダークエルフの姿を、アインズは微笑ましげに見つめると

「アウラ、マールレ。二人は超位魔法を見るのは初めてか？」

単純な疑問を投げかけた。

「は、はい！」

二人の元気の良い返事に、アインズの精神が若干緩む。だが、すぐに場は騒然となった。今までビクトーリア優位で進んできた戦いは、一転シャルティア有利に動いたのだ。画面には、成すすべ無く血飛沫をまき散らすビクトーリアの姿が映る。

「とうとう現れたか。真にペロンチーノさんが生み出したシャルティアが……」

アインズの言葉に、アルベド、アウラの顔色が変わる。

「ア、アインズ様。真のシャルティア、とは？」

アルベドが必死の表情で問いかける。

「シャルティアは、ビッチさんを仮想敵として産まれた。ビッチさんは、私やペロンチーノさんの様な、マジック・キャスター、遠距離攻撃を得意とする者にとつて、天敵とも言える存在だ。圧倒的な速さで相手に接近し、インファイトで決着をつける。そんな戦い方に、私達は憧れた。いや、少し違うな。もつと見たくなつたのだ。ビッチさんの戦いを。だが、もう一方で勝ちたいと言う欲求も生まれたのだ。ペロンチーノさんが、そんな思いを乗せて産み出したのが、シャルティアだ」

守護者達は、誰一人口を開く事無く、アインズの話聞いていた。

「ビッチさんの特性を否定する事無く、一対一で勝負を付ける。シャルティアは、その為のクラス構成が成されている。」

「しかしアインズ様、それと今のシャルティアの現状との関係は？」

「ああ。さつき、ビッチさんが放った超位魔法 *memento mori* の影響で、シャルティアの魔力がほぼ空の状態になった事が関係しているのだろう」

「から？ あれだけしか魔法を打って無いのに？」

アインズの補足に、アウラが疑問の声を上げる。

「超位魔法は、本来魔力を使用しない。言ってしまうえばスキルに近い物だ」

アインズの言葉に、守護者達は頷きで返す。

「だが、*memento mori* を含め、数は少ないが魔力を消費する物も有るのだ。それも相手の魔力をな」

「――」

「戦士職の対マジック・キャスター用みたいな物がな。すまない、話がそれたな。それによつて、シャルティアの魔力は現在ほぼゼロだと思つて良い」

「で、では……」

「ああ。魔力の枯渇によつて、本来ペロロンチーノさんが設定したシャルティアの骨格とも言える部分が出したのだろう」

守護者達はじつと画面を見つめた。アインズも同様に画面を見つめ

「シャルティアのフリーバーテキストには、ビッチさんの戦闘画像が埋め込まれている。だからこそそのあの動きだ。それゆえに、あの二人は分身、姉妹とも言える存在なのだ。」

そしてもう一人、ナーベラルもまたビッチさんの因子を持つ者と呼ばれていた」

アインズの発言に、守護者達は驚きの意を表す。その中で最も驚いたのは、突然名前を出されたナーベラルである。

「いや。ナーベラルが、対ビッチさん用に創造されたと言う訳では無い。式式炎雷さんが、ナーベラルを創造する時に、参考にしたのはビッチさんが使う雷の魔法と言う事だな」

アインズの補足説明を聞いたナーベラルは、血まみれで横たわるビクトーリアへ向けて、熱い視線を向けるのだった。



「一体どうなっているんだ？」

木の陰に身を隠しながら、チーム クラルグラ リーダー イグヴァルジは呟く。冒険者組合で聞いた場所には、確かに吸血鬼と思われる者は居た。だが、討伐に現れたのは、貴族令嬢と思われる女性だ。本来ならば、此処で戦っているのは、気に入らないア

イツ。漆黒の鎧を纏った、モモンのはずだ。

しかし、目の前に居るのは誰だ？可能性があるとすれば、あの女性がモモンの正体、と言う事だ。だが、それは無いだろう。体格が違い過ぎる。そして、得物も違う。

イグヴァルジは、目の前で展開されている光景が理解出来ずにいた。だが、その光景から眼を離す事も出来なかった。そんなイグヴァルジだが、漂う空気に違和感を感じる。自分が呼吸している空気に、僅かだが鉄の味を感じたのだ。それを確認する為に、ゆっくりと後方へと振り返る。そこには、地に伏せる自分の仲間と、半裸とも言える程の際どいビキニアーマーを纏った金髪の女が。

「はーあーいー」

女は、掌をひらひらとさせ、舐めた口調で、挨拶と思われる言葉を発した。

「だ、誰だ？」

「んー？ あたし？ な・い・しよ。なーんてねえ。あはははははは」

女のふざけた態度に、イグヴァルジは表情を引きつらせる。

「お、俺の仲間は……」

「殺しちゃった。ごめんねえ、あはっ」

「な、何だとお！」

仲間の死を言い渡され、イグヴァルジは激昂する。しかし、目の前の女は、それすら

も楽しむ様に笑い続けた。

「そう、それ！ それなんだよねえ！ 次の言葉わあ……………よくも俺の仲間をお
！ かな？」

そう言つて、女は腰から刺殺武器ステイレットを引き抜く。

「うーん、わたしもねえ、もつとおじさんと遊びたいんだけどお……………お仕事だから」

言うや否や、女はイグヴァルジの喉を、刺殺武器ステイレットで貫いた。物となったイグヴァルジを、ゴミの様に投げ捨てた女は、血飛沫が舞う戦場を見つめ
「ビクトーリア様、勝つよね……………」

ただ、それだけを呟いた。

Grand Symphony

「煉獄の王と呼ばれた御方が、惨めな物ですねえ。あは、あはは、あははははー！」

シャルティアは、ビクトリアの顔を踏みつけながら、優越感に浸る。だが、その踏みつける右足に違和感を感じ、シャルティアは視線を落とす。その視線の先では、ビクトリアがシャルティアの足首をつかんでいた。

「くすつ。哀れですねえ、お姉さま。王と呼ばれた御方が、縋りつきますか……ぐぎゃー！」

余裕を見せるシャルティアの声が、悲鳴に変わる。足に縋りついていたらと思われたビクトリアの行動が、シャルティアの勘違いだったのだ。踏みつける右足を、ビクトリアは右手で掴み力の逃げ場を奪い、左拳でシャルティアの踝を打ち抜いた。シャルティアの鎧が、いかに強固と言っても、関節部はそうは行かない。そこを狙った攻撃だ。バランスを失ったシャルティアは、後方へと踏鞴を踏む。その光景を見つめながら、ビクトリアはゆっくりと起き上った。

「まったく、少しばかり優位に立った程度ではしやぎおって。クソガキが……あまり舐めるでないぞ」

ビクトーリアの瞳が、爬虫類を思わせる物に変化する。よろめくシャルティアに向け、ビクトーリアの蹴りが飛ぶ。右左、ハイ、ミドルとフェイントを交えつつ蹴りつける。シャルティアは、胸の前で腕を交差し何とかガードを固めた。だが、ビクトーリアの連撃は終わらない。次第にシャルティアの腕がしびれ始め、ガードが下がる。それを見逃さず、シャルティアのガードを跳ね上げる様にビクトーリアは蹴り上げた。今度は、シャルティアが無防備にその身体を晒す。ビクトーリアは、そのまま振り上げた左足を、シャルティア目がけ振り下ろす。その左足は、深々と右肩に食い込み、シャルティアは膝を付く。

ビクトーリアの攻撃は続く。踵落しの状態のまま、左踝を九十度回し、足の甲でシャルティアの首を固定すると、空いた右足でシャルティアの顔を踏み抜く。それも、空中でだ。

「グオッ！」

前にも後ろにも力を逃す事が出来ず、シャルティアは力なく蹲る。

その姿を見つめ、ビクトーリアは意地の悪い笑みを浮かべ

「さて、そろそろ本番と行こうかのう……クソガキ」

ビクトーリアは眼を閉じ、右腕を上空に向け、高らかにその名を呼んだ。

「ミヨルニル！」

その声に呼応する様に、ビクトーリアに極太の雷が降りかかる。光が霧散した後、ここには黄金の光を放つ女性が立っていた。金色の髪を頭頂部と襟足で二つずつ、計四つのポニーテールに結び、身に纏うは、鈍い光沢を放つ布で出来たビキニとパレオ。深い輝きを湛えた金色のガントレットにグリーブ。そして、右手には身の丈を超える、巨大なハンマー。

シャルティアは、その存在を眼にし、本能的な恐怖を感じた。

「せ、清浄投擲槍！」

清浄投擲槍の、最後の一投を放つ。黄金に包まれた女性は、眼を瞑ったままハンマーを振るう。その軌道は、まるで見えているかの様に、清浄投擲槍を捉えた。その結果、槍を黄金の砂粒へと変える。

「何を呆けておる……クソガキ」

女が瞳を開く。その黄金を湛えた怪しく光るその瞳は、圧倒的な力を持つ捕食者の物だった。

「お、お姉さま？」

「ん？ 何じゃあ。ちいと髪型を変えただけで、判別出来んか？ あほうな妹じゃ」

ミヨルニルを肩に担ぎ、ビクトーリアはゆっくりとシャルティアに近づく。その歩調は徐々に速度を増し、走る速度でシャルティアと向き合い、ミヨルニルを振るう。シャ

ルティアはスポイトランスを掲げ、ビクトーリアと相対する。

両者の得物が激突した。

「え？」

火花を散らすと思われていたスポイトランスが、何の抵抗も無く、金色の砂へと変わる。

「な、何が！」

動揺するシャルティアに、ビクトーリアは回し蹴りを入れ吹き飛ばすと、意地の悪い笑みを浮かべる。

「これはのう、ミヨルニルと言うて、攻撃力ゼロのゴミアイテムじゃ」

「攻撃力……ゼロ？」

シャルティアの驚きに、ビクトーリアは頷きで返すと

「左様。じゃがな、一つだけ良い所もあってのう、それは……こいつでぶん殴った魔法アイテム、装備を破壊出来ると言う事じゃ。つまり、アイテム破壊に特化した物じゃといえるのう」

ビクトーリアは楽しそうに説明するが、シャルティアには何が良いのか解らなかった。ビクトーリアも、それを承知と補足を口にする。

「こ奴の利点、解らぬと見えるのう」

言つて、ミヨルニルでシャルティアを攻撃する。これにより、シャルティアの兜が、鎧が、光の砂へと消えた。

「これで理解出来るか？ ……出来んか。つまりはじゃ、何の制限も守る物も無く、一対一の殺し合いが出来ると言う訳じゃ」

言い終わつたビクトリアの表情は、見た事も無い愉悦を湛えていた。

「まあ、デメリットも多くてのう、これ呼び出すためには赤ゲージ、つまりは瀕死の寸前まで自分を追い込まなならん、と言う事じゃな。そして、妾の纏つておるこの装備……防御力はゼロじゃ。ここまでせな、これは使えん。つまりは……クソガキ、うぬは強者、と言う事じゃ」

「う、うあああああー！」

シャルティアは声を上げ、ビクトリアに向け走り出す。だが、シャルティアを見つめるビクトリアの瞳は、どんよりとした物だ。その理由は、シャルティアにあった。鎧を破壊されたシャルティアの身体は、インナー一枚の姿となつていた。だが、そのインナーが原因なのだ、紺色の木地に、左右の胸の頂点辺りを走る二本のシーム。胸に貼られた白い布には、しやるていあ”の文字。ビクトリアの記憶が正しければ、あれはスクール水着、と呼ばれていた物だ。それも旧型の。非常に趣味的な物だった。

「あんのエロ鳥があ」

最早、ビクトーリアの口からは、この言葉しか出てこなかった。

両者の拳が交錯し、お互いの顔を捉える。左手で互いの襟足を掴み、ノーガードで殴り合う。ガントレットが赤く染まり、周りの空気も鉄の匂いを含んで行く。純粹な殴り合いの勝負、膝を着いたのはシャルティア。荒く息つき、その眼は焦点が合っていない。

「しつかりせんか！」

櫂を飛ばしながら、横蹴りでシャルティアの顎を打ち抜く。力が完全に抜けていたシャルティアは、この攻撃によつて、後方へと吹き飛ぶ。本能とでも言うのか、シャルティアはすぐに身体を起こす。しかし、このチャンスを逃すビクトーリアでは無い。視界の揺れが収まったシャルティアの眼前に、三本の飛来物が迫る。煙管の形にリデザインされた、ダガーだ。シャルティアは、ダメージを最小限とする為、顔の前で腕を交差する。しかし、その行動は失敗に終わった。直撃するかと思われた煙管は、シャルティアの直前で爆散したのだ。その煙によつて、シャルティアの視界が奪われる。焦り、その場を飛び退こうとするシャルティアの左肩に、激しい衝撃と痛みが走る。急ぎその場所に視線を向ける。そこには、赤い旗が揺らめくフラッグポールが突き刺さる。シャルティアは其れを引き抜こうと手を掛けた。

だが、ビクトーリアの攻撃は終わってはいなかった。フラッグポールに意識を取ら

れ、シャルティアは失念した。敵であるビクトーリアの存在を。それに気付いた時には、もう遅かった。フラッグポールに続き、シャルティア目がけてビクトーリアが飛来する。まるで正座をするかの如く、ビクトーリアの両膝がシャルティアの顔面に食い込んだ。これによつて、シャルティアはさらに後方へと吹き飛ぶ。急ぎ立ち上がるも、しがくが、シャルティアの足は震え、言う事を聞いてはくれない。ビクトーリアはゆつくりと近付きながら、力有る言葉を口にす。

「スキル。運命の三女神」

力の解放により、ビクトーリアの姿がブレる。そのブレは徐々に大きくなり、最後には三人のビクトーリアの姿が。

——運命の三女神。シャルティアが使う死せる勇者の魂の上位互換とも言えるスキル。十五秒間の制限で、過去と未来の自分を呼び寄せる——

三人のビクトーリアは、シャルティアを中心に、前二人、後一人の三角形を作り、同時にシャルティア目がけ走り出し、膝を突き立てた。同時に、二人のビクトーリアは姿を消す。顔を左右から、そして襟足に膝を叩きつけられ、シャルティアはぐつたりと座り込む。その様子を探る様に、ビクトーリアは周りを一周し、シャルティアの正面に立つ。ビクトーリアは、ゆつくりと、優しくシャルティアの両手を取る。その行動は他者から見れば、敗者を讃える者に見えるだろう。だが、この戦いは殺し合いなのだ。シャ

ルティアを救う為に、シャルティアを殺す戦いなのだ。ビクトーリアは、シャルティアと両手を繋ぎながら、右足を引く。そして、力ある言葉を口にする。

「超位魔法Grand^{勝利} Synchrony^{の賛歌}」

二人の周りに多重魔方阵が展開される。

「怨むなどは言わぬ。全ては妾の責じや。復活した後、殺したければ殺せ。……良いな」
ビクトーリアはシャルティアに向け、膝を突き上げる。勝負は決まった。シャルティアは、その姿を黄金の砂粒へと変える。

「流石でありんすえ、お姉さま……」

消えゆく中、シャルティアの眩きがビクトーリアの耳に、胸に傷を残した。

帰還

砂粒となって消えるシャルティアを見つめながら、ビクトーリアはドサリと膝を付いた。うつむいた、その額、髪からはポタリポタリと紅い雫が落ち、地面を濡らす。

「本当に愚かだ。あなたは愚か物だ」

力無く頭を垂れるビクトーリアの背後から罵声と言つて良い言葉が投げかけられる。

「……そう、かな？」

「ええ。そんなに傷付いて、雷神モードまで使つて、一步間違えば……」

「解っている。解っているよ。だから、だから泣くな、タナトス」

——ビクトーリアの背後の者。名はタナトス。褐色の肌と、銀色の髪が特徴的な、ビクトーリア唯一の女性型NPC。その容姿は、ビクトーリアと瓜二つであり、影武者の役割も持つドツベルゲンガー。Lv50程で、そのクラス構成は、ニグレドと酷似した物だ。つまりは、探知特化のクラス構成と言う事になる。YGGDRASILでは、ビクトーリアのホーム、小さな倉庫の様な所に配置されていたのだが、転移後はフレバーテキストに則り、ビクトーリアの影に潜んでいる。——

「な、泣いていません！ それよりも早く回復を！」

タナトスの慌てた口調に、ビクトーリアは僅かな笑みを見せる。

「ふふっ。まだ仕事は終わってはおらん。タナトス、お前は先に帰れ。あつ！ 悪いが、雌猫の回収と、ヴァンパイア・ブライドの捜索も頼む」

そう言うのと、ビクトーリアは虚空からフロントロック短銃を取り出し発動させると、闇へと消える。その光景を、タナトスは潤んだ瞳で見つめ続けていた。



「終わった様だな」

アインズは、展開される水晶クリスタル・モニターの画面を見つめながら、ほっとした様に口を開いた。

「はい」

アルベドがアインズの言葉に反応し相槌を打つ。周りを見渡せば、各守護者達もまちな反応を見せている。コキュートスは微動だにせず、じつと立ちつくし、デミウルゴスからは、小さな舌打ちが聞こえた。マールに眼をやれば、瞳を大きく見開き、憧れの様な視線で項垂れるビクトーリアを見つめている。アウラに至っては、瞳に涙を湛

え、ビクトーリアへ向け腰を折っていた。そして、先ほど相槌を返して来たアルベドは、安心したのか腰が抜けた様に、床に座り込んでいる。

「あ、あの、アインズ様」

憧れの眼そのままに、マールが口を開く。

「ん？ どうした、マール」

「あ、あの。先程ビクトーリア様の使った魔法は？」

マールは、素朴な疑問を口にする。その言葉を受けたアインズは、一瞬何を言っているのが解らなかつた。だが、言葉を飲み込み考えてみると、その意味が良く解つた。マールの中では、超位魔法とは 死を記憶せよ *memorise* の様な、超爆発を引き起こす派手な物と見ていたのだろう。だが、ビクトーリアが最後に放つた 勝利の賛歌 *Grand Symphony* は、多重魔方阵こそ展開はしていたが、非常に地味な物だ。見た目的には、ただ膝蹴りを打つただけにしか見えなかつただろう。しかし、それは超位魔法では無い。アインズは、まるで誇る様にその説明を口にする。

「うむ。ビツチさんが最後に使った超位魔法。あれは、ワンモーションだけ行動がクリティカルになり、それに付随して防御値無視とバフ無効化をもたらすと言う………ゴミ魔法だ」

「「え？」」

アインズの発した最後の言葉に、守護者達から驚きの声が上がった。守護者達の、ポカンとした表情を見直し、してやったりの表情？でアインズは説明を続ける。

「良く考えてみる。超位魔法を唄った次の行動に効果が掛るのだぞ。戦士であるなら、剣を振りかぶった所で、効果は終了だ」

「あ」

アインズは愉快そうに、そう言葉にする。この事により、守護者達も事を理解する。つまりはこう言う事だ。アインズが言ったように、剣士、騎士であれば、剣を振り上げた状態で呪文を口にする。インフアイターならば、殴る構え、蹴る構えの状態で呪文を口にする。Gurand^{勝利} Synchron^{の賛歌}が超位魔法である限り、即時の発動は課金アイテム無しでは不可能。だが、課金アイテムの発動も、ワンモーションと取られてしまう。結果、相手の前で動きを止めている者を、待つ敵が居るか？と言う事である。

「しかし、ビッチ様はどうしてそんな面倒臭い超位魔法を？」

アルベドが根源的な疑問を口にする。デミウルゴスを除き、他の守護者達も領きで同意していた。アインズは、一瞬間を置き、勿体ぶる様に続きを口にする。

「ビッチさんの、戦闘スタイル。そして、最後の技、カミゴエがあるからだ」

「……カミゴエ。アノ、サイゴニ放ツタ膝蹴リノ事デシヨウカ？」

「そうだ」

アインズは、短くコキユートスの質問に答えると、どう説明すれば良いのか悩んでいた。ゲームとしてのシステムで説明するのが良いのか、現実として説明すべきか。選んだのは後者だった。

「端的に言うところだ。蹴り技、絞め技などを駆使し、敵のHPを減らしつつ、好機を得たら頭部、顎への攻撃に変化させ意識を刈り取る。相手が動けなくなったら、両の手を取る事でさらに拘束し、超位魔法、カミゴエと言う流れだな」

「しかしアインズ様。あれは、只の膝蹴りに見えましたか？」

「デミウルゴスがいちやもんを付ける様に、口を挟む。しかし、その言葉に気分を害する事無くアインズは口を開く。

「ふふっ。デミウルゴスともあろう者が、知らぬ筈はなからう。魔法に階位が存在する様に、戦士職の技にも同様の物がある。そうだな、コキユートス」

「ハイ。確力ニ」

「うむ。ビッチさんのカミゴエは、魔法で言う第十位階に相当する威力を要しているのだ」

「じゃ、じゃあ」

驚いたようにマールが呟く。

「そうだ、そんな攻撃を生身、防御力、バフを無効化した状態、まさに生身で食らえば、

「どれだけダメージを持って行かれるか……。解るな？」

アインズの問いかけに、守護者達の喉がゴクリと鳴った。

「しかしアインズ様。カミゴエ、とは、神越えとも聞こえますが？」

アルベドが口を開く。

「確かに。元々の名は、神越えだったはずだ。確か、非公式ではあるが、神を倒した技だとかでな。名の由来が知りたければ、直接聞いてみるが良からう。アイツは此処に居るのだからな」

そう言ったアインズは、少し笑った様に見えた。

「さて、アルベドよ、パンドラズ・アクターにメツセージを飛ばせ。シャルティア復活の準備をせよ！」

「「畏まりました！」」

杖を掲げ、指示を飛ばすアインズに、守護者達は臣下の姿勢で了承の意を返す。



パンドラズ・アクターの働きにより、玉座の間に大量のYGGDRASIL金貨が運び込まれた。枚数にして五億枚。重量にして一万トン。その金色に光る光景を見つめながら、アインズは素直な感想を口にした。

「金貨の山、などと言う比喻を良く聞くんが、これは本当に山だな」

「はい。その通りです」

隣に立っていたアウラが相槌を打つ。

「でもアインズ様」

「何だ？」

「この金貨の山が、シャルティアになるんですよね？」

「うーん。そうだとも言えるし、違うとも言えるな」

「？」

横で首を傾げるアウラの柔らかい髪を、アインズは優しく撫でる。

「これは、対価だからな」

「対価？」

「そうだ。アウラよ、この光景を見てどう思う？」

「単純にすごいと思います」

「そうだ。その凄いと思える物が、お前達の価値なのだ。お前達は、私にとっても、ピッ

チさんにとつても、それだけの存在なのだ」

「……………」

アインズの言葉に、アウラは返事をする事が出来なかった。少しでも気を抜けば、涙と嗚咽が漏れそうになる。それほどに、感動していた。それでも、何とか言葉を絞り出す。

「ビ、ビクトーリア様に、お、お礼、言わなきゃ」

うつむき、その言葉を絞り出すアウラの髪を、アインズは再び優しく撫でた。何度撫でたであろうか、アウラの気分が落ち着いたのを確認すると

「これより、シャルティエ復活の儀式を行う。アルベドよ、モニターから眼を離すな」

「畏まりました、アインズ様」

「復活後、まだ洗脳が続いているようならば、我々守護者が対処いたします」

「デミウルゴスが、釘を刺すように言葉を紡ぐ。だが、その言葉に対し、アインズは首を横に振る。」

「ダメだ。そうなった場合は、私が単騎で当たる」

「アインズ様！」

守護者達の悲鳴にも似た声が響く。

「そうしないと、私はビクトーリアの隣に立つ資格を失うのだ」

「しかし、アインズ様！」

デミウルゴスが再度、懇願の声を上げる。声こそ出さなかったが、アウラとマールも同じだった。だが、この言葉を受け入れ、沈黙を守る者もいた。アルベド、コキユートスである。アルベドは、アインズ、いやモモンガのプライドを感じ、コキユートスは武人として、その誇りを感じたためだ。

「ヤメロ、デミウルゴス」

「何を言うんだ、友よ」

「アインズ様ハ、コウ仰ツテイルノダ。御自分ガ立タナケレバ、我ラノ支配者デハ居ラレナクナルト」

コキユートスの重い言葉に、デミウルゴスも黙る他無かった。

「では行くぞ……」

そう言うと、アインズはスタッフ オブ アインズ・ウール・ゴウンを掲げ、高らかに意志を示す。

「シャルティア・ブラッドフォールンよ、復活せよ！」

アインズという言葉に呼応する様に、山と積まれたYGGDRASIL金貨が、ドロリと溶け出す。黄金の海、とでも言えば良いのか、玉座の間を埋める煌きは、徐々に範囲を狭め、人の形を創って行く。大まかな形を取る煌きは、圧縮する様に細かな造形を形造

る。どれほどの時間が経ったであろうか、黄金の煌きは姿を消し、その場には、白蟻じみた肌、長い銀色の髪、間違い無くシャルティア・ブラッドフォールンが横たわっていた。アインズは、その姿を確認すると

「アルベド！」

急ぎ確認を要求する。それを受け、アルベドは空中に浮くモニターを見つめ

「問題ありません、アインズ様。シャルティアの蘇生は成功致しました」

この回答を聞き、アインズは安心したかの様に、大きく息を吐くと、虚空から漆黒のマントを取り出し、シャルティアに掛けると、玉座に続く階段に腰を降ろす。皆が見つめる中、ゆつくりとシャルティアの瞼が開く。

「あ……れ？ わたしは、いったい？」

「シャルティア！」

「ほえ？」

シャルティアに守護者達の言葉が飛ぶ。だが、シャルティアから洩れた言葉は間拔けな物だった。それを聞いた守護者達は、安心の息を吐いた。何時ものシャルティアだと。

「無事か？ 身体に変調は？」

アインズは、優しくシャルティアに語りかける。言葉を受け、シャルティアは右手で

顔や、身体を撫で

「これと言つて、異常はありません」

にっこりとはほほ笑みそう言った。これを聞いたアインズは、本日何度目かの安堵の息を吐く。

だが、場は緊張に支配される事になる。

「ア、アインズ様！」

何かを感じたのか、シャルティアが大声で呼びかけた。

「ど、どうしたのだ、シャルティアよ！」

「む、胸が……………無くなつていんす」

「はあ？」

シャルティアの発言により、安堵が支配していた玉座の間が紛糾する。先程まで、優しげな瞳で見つめられていたシャルティアに、守護者達から罵声が浴びせ掛けられる。アインズは、その声を手で制止し、シャルティアの側で腰を降ろすと、その髪を骨の指で空く様に撫で下ろす。

「シャルティアよ、疲れている所を悪いが、お前の最後の記憶を教えて欲しい」

「は、はい。えーとお、巨乳美女と、ローション塗れで戯れている所でありんすかえ？」

「はっ。」

アインズを含め、守護者達はこう思う。コイツ、何言っているんだ、と。
「それとお……」

先程の馬鹿な発言に続き、シャルティアは何か言おうと口を開く。

「寂しげな………黄金の瞳」

この言葉を耳に残し、アインズは短く「そうか」と言葉を返し、再度シャルティアの髪を撫でると、玉座へと続く階段に腰掛け、天井に並ぶ仲間達の旗を見つめながら

(シャルティアは、無事復活出来ましたよ。お礼が言いたいです。早く帰って来て下さい。……ビッチさん)

そう、心の中で呟いた。

一顧傾国

終末の訪れ

スレイン法国、首都ニース。だが、人々は首都とは呼ばず、聖地ニースと呼んでいた。南北、東西に大きな水路が十字に貫き、それを繋ぐ様に幾つもの小規模の水路が円環上に造られている。非常に水に恵まれた都市である。

その中央には、城とも取れる、六つの塔で構成された神殿がそびえ立ち、街は非常に明るく、品物が溢れ、道行く人々は敬虔な六大神信者として、皆礼儀正しく暮らしている。

その中央にそびえる神殿の、中心に位置する塔の上層階には、最高神官長の執務室がある。現在その部屋には、二人の人物が居た。一人は、この部屋の主人である最高神官長。もう一人は、スレイン法国の暗部、漆黒聖典の隊長だ。

「先ほども聞いたが、もう一度説明して貰えるか？」

包帯でガツチリと固めた両手で頬杖をついた姿勢をとり、最高神官長は尋ねる。

机を挟み、正面に立つ漆黒聖典隊長は、背筋を正し、微塵も億劫さを出さずに、口を開く。

「はい。破滅の竜王 捜索の下り、謎の吸血鬼と遭遇。戦いとなり、カイレ様が重傷。第八席次、巨盾万壁、第九席次、神領縛鎖が死亡致しました。吸血鬼は、カイレ様の傾城傾国が命中。ですが、部隊の損害を鑑み撤退を選択致しました」

最高神官長は、「うむ」と短く相槌を打つと、漆黒聖典隊長の手に握られた、古ぼけた槍を見つめた。

「お主程の者でも、その吸血鬼には対処出来なかつたのか？」

「解りません。ただ、総当たり、と言う事であつたなら……私一人の生存、と言う形で終われるかも知れません」

「……………神殺しの槍を持つてしてもか？」

「は、い」

最高神官長は、この言葉を受け暫し口を閉じ

「ならば、その槍は、神を殺す事が可能か？」

突然、物騒な言葉を聞かされた漆黒聖典隊長は言葉を失う。言葉を発する事が出来ない目の前の人物を見て、最高神官長は再び口を開いた。

「神、と言つても、我らが信仰する神ではない。その槍は、神を、煉獄の王を殺す事が可能か？ と言う事だ」

煉獄の王、と言う単語を出され、漆黒聖典隊長は、自身の腕にある槍を見つめる。

その時、僅かに塔が揺れた。

「地揺れ、か？」

そう最高神官長が推測をした時、下級神官が慌てて部屋に入って来た。

「何事か！ ノックもせずにはドアを開けるなど……」

重罰物だ、と言葉を続けたかったのだが、下級神官はそれを許さないとでも言わんばかりに口を開く。

「し、神殿の地下で爆発が、謎の爆発が起きました！」

「何！ 異端ニグンが連れて来た魔法詠唱者マジック・キャスターの仕業か！」

「ち、違います。爆発と共に、何者かが侵入したと思われます！」

「――」

最高神官長は、再度何が起こったのか確認しようと口を開くが、それは、漆黒聖典隊長によって止められる。

「最高神官長様、今は現状の確認が先かと」

「解った。礼拝堂へ向かう」

「はっ！」

返事を合図に、三人は階段を足早に降りて行った。

涼やかな声が礼拝堂に響く。漆黒聖典隊長は、声の主に視線を向ける。その者は、入口を背に立っていた。逆光であるが、はつきりとその姿は見てとれる。赤いドレスには、所々黒い染みが広がり、黄金の髪は、赤く濡れている。右手には棒の様な物を持ち、左手には何か丸い物をぶら下げている。

「漆黒聖典は何処いずこにおる」

その者は、もう一度同じ言葉を繰り返した。

喉がヒリヒリと乾く中、漆黒聖典隊長は名乗りを上げる。

「わ、私だ！ 私が漆黒聖典隊長だ！」

言い終わり、目の前の人物を睨みつける。その者は自分から視線を外し、壁際へと視線を向けていた。その視線を辿ってみる。そこには見知った顔の者が頷いていた。その者は最高次官ニグン・グリッド・ルーイン。異端者だ。

漆黒聖典隊長は、全てを理解した。いや、目の前の人物が誰なのかを理解出来たと
言った方が正確だ。

「こんな場所で、煉獄の王にお目通り願えるとは。今日は良い日、なのですかね？」

「さあ。うぬがそうであるならば……………土産じゃ」

そう言つて煉獄の王は左手を掲げる。その手にあつた物は

「力、カイレ様！」

その首だった。

「な、何故に！ 何故カイレ様を！」

漆黒聖典隊長の声が荒い物へと変わる。

「何故？ 何故じゃと。解らぬなら、解らぬまま死んで行け」

その言葉を聞き終わるや否や、漆黒聖典隊長の腹部に、衝撃と痛みが走った。それが理解出来ぬまま、その身体は石壁に叩きつけられる。煉獄の王が持っていた頭部が投げつけられたのだ。息が詰まり、身動きがとれない。敵の足音は、ゆつくりとだが近付いて来る。死ぬのか？ そんな疑問が脳裏をかすめる。その時、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「隊長！」

漆黒聖典第五席次の声だ。

「クワイエツセ？」

その瞬間、礼拝堂が赤い光に包まれた。魔方陣の光だ。

クワイエツセ・ハゼリア・クインティア。召喚魔法の使い手。その呼びかけに応え、場には三体のギガント・バジリスクが現れる。石化の視線、毒を持つ体液。戦士系の者ならば、強敵となるモンスター。

クワイエツセは、モンスターに指示を出し、煉獄の王へと向ける。だが、囲まれているはずのその者は、息を乱す事無く右手の得物を振り下ろした。二度、三度振るうそれ

は、確実にギガント・バジリスクを捉える。僅か数分の後、一体は頭を潰され、一体は腹を裂かれ、もう一体は部位が解らぬほど破壊されていた。

だが、煉獄の王の行動は、それで終わらなかつた。手にした得物を、クワイエツセ目掛け投擲する。その得物は、クワイエツセの頭部を貫き、壁を破壊する事で行動を終える。残されたクワイエツセの胴体からは、真つ赤な鮮血が吹きあがり、礼拝堂を飾る噴水となった。

「ク、クワイエツセー！」

叫びと共に、漆黒聖典隊長は自身の槍を煉獄の王へと向ける。突き出されたその切っ先を、僅かに身体を捻る事でかわすと、槍を持つ漆黒聖典隊長の右手首を掴む。

「な、何をー！」

「何を、では無いわ！」

煉獄の王は、空いた左手で首筋を掴む。その瞬間、漆黒聖典隊長は浮遊感と窒息感に襲われる。煉獄の王は、その細腕で男一人を高々と持ち上げたのだ。拘束から逃れようと足をばたつかせ、もがいてみるが、その力は一行に弱まる事は無い。息が詰まり、意識が薄らぐ。力が抜け、その手に持つ槍が床へと落ちた。

槍が床にぶつかると、カランと言う軽い音に反応し、意識が戻ったかのように煉獄の王は、漆黒聖典隊長を投げ捨て、槍に手を掛けた。槍を手に、煉獄の王は、獲物を見定める様

に礼拝堂の奥へと視線を向ける。薄暗がりのその場所には、腰を抜かしたのか尻もちを付く最高神官長の姿があつた。

「そこに居つたか。この阿呆あほうが」

そう呟くと、瞳に憎しみの色を浮かべ、槍を投げつけた。槍は、光の軌跡を残し、最高神官長の腹部を貫通し、背後の石壁を破壊する。

そして、煉獄の王の視線は再び漆黒聖典隊長へ。ゆっくりとした動作で、その頭部を踏みつけた。ギリギリと万力の様に込められる力と痛みに、漆黒聖典隊長の意識が蘇る。

「うぬが、隊長じゃったな？」

「くっ！」

「質問しておるのじゃ。答えい」

「ぐっ！ うっ！」

「答えい、と言うておる」

そう言いながら、踏みつける足に力を込める。

「うぬが答えぬならば……………他の者に聞くまでじゃが」

煉獄の王の言葉だけ取れば、実に平和的な物だ。だが、煉獄の王はこう言っているのだ。答えなければ……………殺戮を続けると。

漆黒聖典隊長も、スレイン法国最強の部隊を率いる者。煉獄の王の言い分が解らぬ訳が無い。痛みと苦しみの中、何とか言葉を絞り出す。

「そ、そうだ！ 私が隊長だ！」

「ふうん。左様、か。随分と妾の妹を可愛がってくれたそうじゃな」

妹？ 漆黒聖典隊長には、全く心当たりが無かった。それを見越した様に、煉獄の王は言葉を続ける。

「解らぬか。ならこう言えば良いかのう。うぬらが放置した吸血鬼ヴァンパイアの事じゃ」

「！」

「解った様じゃな。では、御機嫌よう」

その言葉が、漆黒聖典隊長の聞いた最後の言葉だった。グシャリ、と言う不愉快な音を立て、煉獄の王の靴底は床に着く。赤い足跡を残し歩きながら、煉獄の王はニグンへ向け口を開く。

「ニグンよ、槍を持ってまいれ」

「畏まりました」

ニグンは、床に散らばる人であった物など、意にも解さず足早に槍の下へと駆け出した。暫しの時間を有し、ニグンは煉獄の王の下へと帰参し、手に持つ槍をうやうやしく差し出す。それを手に取り

「コレとアレは、妾が頂く。異論は？」

「御心のままに」

「うむ、後は任せる。少しじやが気は晴れた。そこらの物は蘇生させるなり、捨てるなり好きにせえ。では、またの」

そう言つて煉獄の王は展開した暗闇へと姿を消した。

それを見送るニグンの顔には、歡喜の色が滲み出ていた。

コンクラーベ

あの惨劇から二週間。スレイン法国上層部は、今後の行く末を早急に決定する必要があった。

六つの塔がそびえ立つ神殿の中央塔、その最も高き場所にその部屋はあった。普段は決して使われる事の無い部屋。約五十人程が、ゆったりと過ごせる広さを持ったワンフロアのみで構成された、部屋である。その部屋の中央に、二十人程が着席出来る長テーブルが一つ置かれ、その上にはクッキーやジャムなどの軽食が置かれていた。テーブルの上座、その右側に座る男、スレイン法国最高次官ニグン・グリッド・ルーインがうやうやしく口を開く。

「まずは、先日の愚か物達についてですが——」

ニグンがそこまで言うのと、場の者達は騒然となる。ニグンの発した愚か物、と言う言葉に違和感を覚えたためだ。ニグンに取って見れば、先日の事件に置いての死者は、神の怒りを買った愚者だ。だが、他の者の考えは、邪悪なる神の虐殺、それに戦いを挑んだ者達。つまりは殉教者なのだ。

「ニグンの坊や、愚か者とは言葉が過ぎるのではない？」

ニグンの正面に座る女性が、注意の声を上げる。火の神官長である、ベレニス・ナグア・サンティニ。

「これは失礼。しかし、坊やは御止め下さい、ベレニス様」

そう言つてニグンは頭を下げる。無論本心は逆なのだが。

「では、改めまして先日の方での事ですが、死者三十二名、負傷者二十名。死者の内、蘇生が可能な者は十三名、蘇生拒否が一名、となつております」

ニグンは、被害のあらましを何の感情も無く、淡々と告げる。

「蘇生可能な人物の中には、漆黒聖典も入っているのか？」

水の神官長ジネディーヌ・デラン・グエルフィが質問を口にする。

「はい。謎の吸血鬼ザアンバイアとの遭遇で死亡した二名も加え、蘇生可能です」

ニグンの言葉に、ジネディーヌは頷きで返す。

「では、蘇生拒否の者とは？」

風の神官長ドミニク・イーレ・パルトウーシュだ。温厚そうに見える男で、元陽光聖典に所属していた事もある者だ。

「カイレ様です」

ニグンは簡潔に、その者の名を口にする。それを受け、場は音を失った。皆の思いは、やはり、と言う納得の感情だろう。

「まあ、その事はイヴオン様に一任するとして、正式な議と行こうでは無いか。

場の空気を変えようと発言したのは、土の神官長レイモン・ザーク・ローランサン。この意見に、この場に集まるスレイン法国最高議会、総勢十二名は頷きで肯定する。この部屋に集められた意味、それは、次期最高神官長の選出。いわゆる、コンクラーベと言う物だ。

「確か、先代は光の神官長が選ばれましたな」

そう言うのは、闇の神官長マクシミリアン・オレイオ・ラギエ。

「ええ。ですので私は除外、と言う事になります」

マクシミリアンの問いに答えたのは、光の神官長イヴオン・ジャスナ・ドラクロワ。

「次の最高神官長は、光を抜いた五色から、で良いわけね？」

意見をまとめる様に、ベレニスが言葉を発する。だが、この正論に異議を申し立てる者がいた。

「そうは簡単には行くまい」

ジネディーヌだ。

「何故です、老侯？」

レイモンが解らぬ、と言った表情で聞き返す。

「煉獄の王、じゃよ。あれが存在し、法国へと介入した以上、我らの取る道は、二つしか

無いからのお」

ジネディーヌが、ヤケクソとも取れる笑顔でそう言った。

「隷属か、敵対か、ですか？」

レイモンの発言に、場が笑いに包まれる。この笑いは、レイモンを馬鹿にした物では無く、自嘲の笑いだった。

「すまないねえ、レイモン坊や。あなたの勇気が嬉しくて……」

ベレニスが謝罪の言葉を口にする。

「で、では一体？」

レイモンの問いに答えたのは、イヴォン。

「レイモン。我々の取れる方法は、隷属と、滅び、だよ」

この発言に、レイモンの口は閉ざされた。

「しかし、我々が滅びるのは、神に近し者の殉教として許せるが、民まではなあ」

ベレニスの言葉に、誰も口を挟む事が出来なかつた。

「では、アレをぶつけて見るのはいかがでしょうか」

沈黙を破ったのは、軍事の最高責任者である大元帥だ。

「アレ、とは法国の最高機密の事かな？」

マクシミリアンが言葉を受け取る。

「そうだ。あの神人だ」

大元帥の提案に神官長達はため息を漏らす。

「何だ？ 俺は変な事を言ったか？」

焦る大元帥に対し

「絶死絶命ならば、とうの昔に煉獄の王の手駒だよ」

レイモンが疲れた様に真実を語る。

「やはり、隷属か滅びしか無いのか」

大元帥は諦めの言葉を口にする。場の空気は、隷属の方へと傾いて行く。

「な、ならば、最高神官長は……」

ドミニクの眩きと共に、場の十一人の視線がニグンへと向けられる。

「ニグンよ、我らの総意だ。次の最高神官長はお主だ」

全員の総意を、光の神官長イヴォン・ジャスナ・ドラクロワが告げた。だが、選ばれたニグンの表情は冴えない物だ。

「これだけのお歴々が集まっても、その結論ですか。滑稽、これは滑稽ですな」

ニグンのこの無礼とも取れる発言に、ドミニクの檄が飛ぶ。

「ニグン、キサマア！ 我らを愚弄するにも程があるぞ！」

激昂するドミニクを、ベレニスがたしなめる。

「ドミニク。幾らかつての部下だとして、今の彼奴は最高次官、言葉を選ぶがよいぞ」
そう言われては、ドミニクとて拳を治めるほか無い。

「ならばニグンよ。最高次官様よ。キサマならば、どう言う手を打つのだ」

この言葉に、ニグンは歓喜の表情を現し

「当然の事！ 我らが神に！ 煉獄の王を頂くのですよ！」

コンクラーベは紛糾する。

「じゃ、邪神を神と崇めるのか！」

「アレは、六大神様が封じた邪悪な者ぞ」

「法国に穢れを持ちこむと言うのか！」

それぞれの者が、それぞれの意見を口にする。だが、ニグンの愉悦は、消え去りはしない。

「誰です？ 一体、誰が煉獄の王を、ビクトリア様を邪悪と決め付けたのです！」

先程とは打つて変わり、ニグンの表情には怒りの色が浮かんでいた。場の誰も彼もが、「六大神が」「伝承が」と口にする。だが、これにニグンは声を大にして反論した。

「先代の最高神官長が下した、村の焼き打ちを阻止し、村人を守つたのは誰ですか！ 誰もが忌み嫌う吸血鬼ヴァンパイア一匹の為に、戦いを挑んだのは、誰ですか！ 力を恐れ、たつた一人の少女を兵器として扱い、地下に幽閉していたのを助け出したのは、誰ですか！ 黄

金と言う穢れを一身に集め、人々の罪を受け入れているのは誰ですか！　そうです。皆様、もうお分かりでしょう。煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイム様であらせられます！　我らが崇め、奉るは、煉獄の王のみ！」

スレイン法国最高機関は、最早、ニグンの言葉を飲む事しか選択肢は無かった。それこそが、煉獄の王の傘の下に収まる事が、スレイン法国の、ひいては国民の安全と幸せを守る事に他ならないからだ。

この日の夜半、礼拝堂の煙突から、白い煙が上がった。

宝石の悪魔

「はーあ」

女は、わざとらしい溜息を吐く。それは、目の前に居る人物を馬鹿にした様な、その姿に安心した様な、どちらとも取れる響きがあった。

「なんじゃ？ 何か言いたい事があれば言うが良からう。オーレオールよ」

現在ビクトーリアが腰を降ろす場所は、ナザリック地下大墳墓 第八階層 桜花聖域。そこは、いつも桜の花が咲き乱れ、忘れられた、記録の中の写真でしか垣間見る事が出来ない、数百年前の日本の田園風景が再現された場所。オーレオール・オメガの住まいも、合掌造りと呼ばれる、アーコロジー内の博物館に展示されているミニチュアでしか見る事が出来ない様な住まいだ。庭に目を移せば、オーレオールの僕であるウカノミタマ、オオトシと言う少女、少年型のモンスター達が賑わしく遊び回っている。実のどかな場所だ。

ビクトーリアの言葉を受け、オーレオールは恐れながら、と口を開く。

「馬鹿だ、馬鹿だとは聞いていましたが、此処までとは。考え無しとはビクトーリア様の事を申すのでしょうか」

白衣の袖で顔を隠しながら、オーレオールは毒を含んだ言葉を語る。

「うん？ 妾のどこが考え無しじゃ」

「知らぬのならば、それは幸せと言う物かと。ですが、回復もせず敵地へと乗り込むとは………怒りで我を忘れましたか？ タナトスの気苦労が透けて見えます」

凶星を突かれ、ビクトーリアは、ぐうと唸るに留まる。

「それに、ペストーニヤ様にも感謝して下さいね。内緒で治療して下さいたのですから」
「解つておるわ」

「そして、私にも」

そう言つてオーレオールはニコリとほほ笑んだ。だが、ビクトーリアにはその裏の意味が透けて見えた。

「それも解つておる。次来る時は、何ぞ菓子を持参しよう」

その言葉を最後に、ビクトーリアは立ち上がり、歩き出す。十歩程歩いたのだろうか、背後からオーレオールが言葉を掛ける。

「またのお越しを」

「うん？ 此処は本来ならば侵入禁止じゃぞ。そうおいそれとは来れまいて」

「言葉に真実味がありませんよ。ビッチ様」

「ビッチじゃのうて、ビクトーリアじゃ」

「止めなさい。彼はあなた達が敵う者では無いわ。それで、何の用かしら？」

ビクトーリアの言葉に、デミウルゴスは小さく笑い

「守護者統括様から、今後のプランを開示せよ、と申しつけられましたね」

不機嫌さを隠しもせず、説明を口にする。

「そう。あなた達、申し訳無いけど、席を外してもらえるかしら」

言葉を掛けられ、三人は立ち上がり、書斎のドアへと足を向ける。ドアノブに手を掛けた絶死絶命の動きが一瞬止まった。どうやら、メッセージの呪文で、頭に声が響いた様だ。こめかみに指を当て、暫し待てと呟きながら退室して行く。ドアが閉じられ、室内には、ビクトーリアとデミウルゴスが残る。

「これが、今後の計画の最初の一步、と言う事です」

そう言って、何枚かの羊皮紙の束を投げ捨てる様に机に置いた。この行為に、ビクトーリアは嫌悪感を微塵も感じさせず、書類を手に取り眼を通す。何枚目を通したかどうか、ビクトーリアの頭の中に声が響く。

「ごめんなさい、デミウルゴス。少し席を外してもいいかしら？」

「ええ、どうぞ。ですが、こちらも暇ではありませんので」

「ええ。解っているわ」

そう言ってビクトーリアは、書斎から出て行った。その姿を見送る形となったデミウ

ルゴスは、やれやれと両手を挙げポーズを決める。だが、その態度もすぐに驚きに変わる。出て行った直後に、ビクトーリアが入室して来たのだ。デミウルゴスに声を掛ける事無く、ドツカリと椅子に座り書類に目を通す。暫しの沈黙が室内を支配する。自分の計画に対し、絶対の自信を持つデミウルゴスは、この行為を無駄と断ずる機会を窺っていた。煉獄の王を、部外者を無能と断罪する為に。だが、実際は異なる方向へと進む。無音の室内に、ビクトーリアの嘲笑が響いたのだ。

「くくつ。スクロール用の羊皮紙生産の為の実験。それに伴う牧場の建設、か。その家畜は、近隣諸国、亜人種の村から調達、か。」

そう呟くと、瞳をデミウルゴスへと向ける。

「どうやって調達する?」

この問いに、デミウルゴスは薄ら笑いを浮かべ

「部下に攫わせます。いや、辺境の村を襲い、全員を捕らえた方が効率は良いですねえ」
自信満々に、口を開く。その瞬間、ビクトーリアの瞳が爬虫類のそれに変わる。

「馬鹿者があ! キサマは何を考えておる! 村を襲うじやと、効率が良いじやと、その様な空気しか詰まっておらぬ頭など切り落としてしまえ!」

デミウルゴスは言葉に詰まる。自分の目の前に居るのは、確かにビクトーリアだ。だが、先ほどの者とは、全くの別人に見えるのだ。そんな、押し潰される様な気迫の中、何

とか声を絞り出す。

「い、一体何が可笑しいのかね」

精一杯の意地だった。だが、それすらも押し潰す様にビクトーリアは相對する。

「かね？ かね、じゃと……………デミウルゴス、キサマは何様じゃ」

ビクトーリアの身体から、バチバチと小さな音が上がる。ビクトーリアは、暗にこう言っているのだ。これ以上の無礼を働くならば……………殺す、と。その殺気、その重圧を目にし、デミウルゴスは膝を折るしか無かった。だが、ビクトーリアの叱責は続く。

「村人全てを拉致した後、どうするのじゃ？」

「え？」

「どうするのかと聞いておる。答えよデミウルゴス」

その黄金の瞳に射抜かれ、デミウルゴスの喉は渴きを覚える。

「デミウルゴス」

三度名を呼ばれる。だが、言葉は出てこない。

「何も考えてはおらぬ様じゃな。辺境の村でも、どこかの国に所属しておる。しからば、税を巻き上げに徴税官は訪れ、村人が消えた事が発覚する。そこはクリアーしておるか？」

「いい、いえ」

「徴税官を始末するか？ さすれば、次は軍が、国が動くぞ。それすらも始末するか？ では、ナザリックの知恵者に問おう。この世界で、最も強き者は誰じゃ？」

デミウルゴスの額に、汗が浮かぶ。

「そ、それは、アインズ——」

「愚か者があ！ キサマは、調べ上げ言うておるのか！ 違うと言うのなら、今すぐ、その空っぽの頭を叩き割るぞ！ それとも、妾自らアインズを殺し、キサマの無知を証明せねば解らぬか！」

デミウルゴスは、ビクトーリアの言葉に、息をする事さえ忘れていた。ビクトーリアはため息を吐きながら椅子に座ると、呟く様に口を開く。

「羊皮紙の牧場は、一時棚上げじゃ。まずは、近隣諸国の地下組織を調べよ」

「そ、それは一体どのような狙いが？」

「攫うのは、一般人で無くても良からう？ 重罪人、死刑囚、などでも事足りる。その者らならば、犯罪結社などとも繋がりがあろう。牢からその様な者達が消えたらどうじゃ？ まず目を付けられるのは、そう言った組織じゃ。それを旨く使えば、ナザリックに繋がる事はまずありえん。亜人の方は、モモンに化けたドツペルゲンガーを使い拉致せよ。その時は、冒険者組合を通し、討伐と言う形を取れ。モモンの名声が高まる。それ

と、妾の雌猫も使うが良からう。アレはそう言う所に精通しておるじゃろうからな」
「な、成程」

ビクトーリアの言葉に、デミウルゴスは肯定の意を告げる。それに納得したのか、ビクトーリアは場の空気を変える様に、次の話題を口にする。

「デミウルゴス。うぬらは、アインズをどうするつもりじゃ？」

この問いに、デミウルゴスの表情は一瞬キョトンとした物を浮かべるが、すぐにそれは歓喜の物へと変化した。

「アインズ様に、この世界の全てを捧げるつもりです。」

「左様か」

ビクトーリアは、言葉少なく口を噤む。暫し、何か考える様な仕草をした後に、デミウルゴスへと向き直る。

「デミウルゴス、これは妾からの忠告じゃ。世界を征服しようとして考えるな。アインズに世界を捧げたいと思うならば、統治、と言う手段を選択せえ」

「それは一体？」

「自分で考えよ。それと、この言葉をナザリック全てに通達せえ。以上、今日はこれまでじゃ」

そう言うのと、ビクトーリアは一方的に話を切り上げた。

デミウルゴスが退室した書齋、その部屋の中には、二人のビクトーリアが居た。

「ビクトーリア様。先ほどデミウルゴスに仰った意味は？」

横に立つビクトーリアを、椅子に座ったビクトーリアは見つめ

「征服、と言う物は、力で、恐怖で従える事じゃ」

「はい。承知しています」

「そうなれば、反発する者が必ず出て来る。それが、一国の内でも済めば良いのじゃが……」

「だが、ですか？」

「うむ。それが世界規模で何十、何百、何千と言う規模で起こったらどうする？ 潰せは

せんぞ、そんな物」

立ち尽くすビクトーリアは、姿を変え本来の物へと戻る。褐色の肌と、銀色の髪に。タナトスだ。

「以前、ビクトーリア様が仰っていた、蜂、ですね」

「うむ。彼奴等の監視、頼むぞタナトス」

「御心のままに」

面でも見る様に駒を配置なさっている。これを讃える言葉は……………化け物、でしよう？ 違いますか、アルベド」

そう言つてデミウルゴスは、疲れた様に笑つた。

リリー・マルレーン

スレイン法国、地下最奥通路。コンティニユアル・ライト 永続コンティニユアル・ライト 光の光が普段は薄暗いそこを、煌々と照らし出す。その数は、この神宮殿に有る永続コンティニユアル・ライト 光を全て集めた様な明るさだった。

光に映し出される物は、瓦礫と化した石壁に、年若い神官達。後に終末の惨劇と呼ばれる事になる、煉獄の王の襲撃によって付けられた傷痕の修繕中である。

左右の壁に張り付く様に働く神官達の合間を縫う様に、一人の少女が重い溜息を漏らしながら歩いて行く。左右で白と黒に分かれた髪色。髪とは逆色を宿す、虹彩異色の瞳。スレイン法国 漆黒聖典 番外席次 絶死絶命。

少女は何も言葉を発せず、ただ溜息のみを吐きながら、中央塔の目当ての場所へと向けて登って行く。目的の場所は、中央塔の上階にある最高神官長執務室。その扉を、番外席次はまたもや湧き出る溜息と共にノックした。部屋の中から、入室許可の返事が返されると、番外席次は乱暴にドアを開け室内へと入っていった。そこには満面の笑みで、自分を迎える、次期最高神官長 ニグンの姿があった。



「あんた、それ本気？」

コンクラーベの結果を聞かされた、番外席次の第一声がコレだった。ソファアに腰掛ける番外席次に対し、窓際で立つニグンは、張り付いたのか？と思えるほど笑顔を絶やさずに口を開く。

「もちろんですよ。こんな事、洒落や酔狂では言えないでしょう？」

「まあ、そうだけど………おおさまを、皇にねえ」

——ニグンの語った事はこうであった。最初コンクラーベは、ビクトーリアを次期最高神官長に、と言う決定であった。しかし、そこでニグンが声を挙げたのだ。最高神官長とは、すなわち神官達の頂点である。神であるビクトーリアを頂くのに、人と同じ地位で良いのだろうか？と。そして、ニグンが掲げた言葉が、法皇の地位。王と言う存在が居なかった宗教国家の頂点に、王を頂くと言うのだ。しかし、この荒唐無稽と思われるニグンの発言を止める者は、誰一人居なかった。傘の下に収まるならば、より大きな傘の下へ。それが総意であり、それほど人、と言う種は弱いのを知っているからだ。――

唸る番外席所の表情を見て取り、ニグンは疑問の声を上げる。

「どうしましたか？ あなたなら、喜んでくれると思いましたが？」

そう問いかけるニグンの言葉にも、番外席次は「うーん」と唸るに留まる。この状態では会話は進まない。結果、ニグンも口を噤む他なかった。部屋が沈黙を抱え、どれほど経つただろうか。ゆつくりと番外席次が口を開く。

「あのさあ。おおさまが、法皇つてのになつたら、この国荒れると思うよ」

番外席次の言葉に、ニグンは首を傾げる。

「おおさまの日常つてさあ、基本文官みたいな物なんだよね。一日中机の前に座つてさあ。そんな中で、時々笑う瞬間があるんだよ」

一旦言葉を切つた番外席次に、ニグンは頷きで続きを促す。

「その時つて、外で女の子達の喧嘩の音が聞こえて来た時や、私と雌猫、それに魔女っ娘が言い争つていたりする時で、その偉い人や、メイドとの会話も楽しそうなんだよ。この国が、そんな風になつても、ニグン、あんた許せる？」

この問いに、ニグンは歓喜の表情で

「当たり前ですよ。なんと慈悲深き御方。それこそスレイン法国の頂に相応しい」

この喜び様を見て、番外席次は再び溜息を吐いた。喧嘩をしていた少女は、ダークエルフと吸血鬼ヴァンパイアであり。言い争っていたのは、ハーフェルフと人二人。偉い人はサキユバスで、メイドはデユラハンとドツペルゲンガー。

つまりはこうだ。人の救済を旨とするスレイン法国が、亜人種、異業種までも救う国家となる。それが、許せるのか？と、問いかけているのだ。だが、ニグンの表情を見る限り、コイツは許すだろうと、いや、歓喜で迎えるだろうと番外席次は見て取った。

「ま、まあ。こう言う事は本人に選んで貰うのが一番だと思うよ。呼ぶ？」

返事は必要なかった。ニグンの表情が、それを物語っていたからだ。番外席次はメツセージの呪文を介し、ビクトーリアへと連絡を入れた。

時間にして約三十分、番外席次は執務室に闇を展開する。その中から産まれる様に、三人の女性が姿を現す。目深にローブをかぶった者。年若い魔法詠唱者風の少女。そして、最後にビクトーリア・F・ホーエンハイム。

ビクトーリア以外の二人に対し、ニグンは若干の不信感を顕わにするが、ビクトーリアの手前、丁寧な歓迎の礼を取る。その行動に対し、ビクトーリアは右手を上げる事で応え、ソファアーへと腰を降ろす。僅かな、ほんの僅かな時間、場を沈黙が支配した。それに気付いたビクトーリアは、コホン、と一つ咳払いをすると、ニグンへ向け口を開く。「ニグンよ。その娘は、妾が預かっておる魔法詠唱者マジックキャスターじゃ。何でも大そうなタレント特殊能力持

ちらしくてのう。名はニニヤと言う」

「ニニヤと申します」

ニニヤは、ニグンに対し名乗りを上げる。

「もう一人は、雌猫、ローブを上げよ」

「はーあーい」

ローブの者は、甘ったるい、ふざけた様な言動で、頭に被るローブを脱ぐ。その下に隠れていた顔に、ニグンの表情が引き釣った。

「お、お前は、疾風走破！」

「せーかーい」

「何でお前が！」

声を荒げるニグンに対し、クレマンティーヌは涼しげな表情で返す。

「いやー、悪さしたら、コイツに見つかっちゃつてさあ、なんやかんやで、今はビクトーリア様の御側に居れる訳やお」

番外席次を指差し、そう答えるが、クレマンティーヌの説明は、色々端折り過ぎな為、ニグンには一切伝わっては居なかった。

「まあ良い。ニグンよ、大丈夫じゃ。こやつは今、妻の小姓として付いておる」

ビクトーリアは、ニグンに対し一応の安全を告げた。

「それで、妾に用とは？」

場が収まったのを確認し、ビクトーリアは本題を告げる事を要求する。これに反応し、ニグンは番外席次に語った事と同じ事をビクトーリアに語って聞かせた。いや、懇願した、と言うのが正解かもしれない。

一連の話を聞いて、ビクトーリアは紅茶のカップを片手に、沈黙を決め込んでいた。場の者達は、再びその口が開かれた時に、何とと言うのかを期待と不安を胸に秘め待ち続ける。そして、その時が訪れた。

「妾が、皇にか……………受けても良い」

「本当で御座いますか！」

喜びを顕わにしたニグンが詰め寄った。だが、その喜びも次の言葉で、若干のメモリを減らす事になる。

「じゃが、条件がある」

「な、何でしょうか?!」

「典範の改正じゃ」

「て、典範の改正……………」

「そうじゃ。無理か？」

眼を細め、自分を見つめて来るビクトーリアを前に、ニグンの背中では、額は、大量の

汗を噴き出す。その汗を袖で拭いながら、恐る恐ると言つた風態で口を開く。

「そ、それは、国民全てに信仰を捨てろ、と言う事で御座いませうか?」

この問いに、細めていた眼を見開き

「はあ? 何を言うておるのじゃ。気でも狂うたか、ニグンよ」

そう言うのとビクトーリアは立ち上がり、窓の前に立ち、街の隅々へと視線を向ける。

「良い街じゃ。良き国なのじやろう。なのに残念じゃ。この国の者達は心が小さい。あまりにも狭量じゃ」

ビクトーリアの独白とも取れる言葉に、場の全員は耳を傾ける。

「うぬらが、妾を傘とするならば、傘となろう。槍と化せと言うなら、槍となろう。うぬらを脅かす者を殺せと言うなら、全てを殺そう。妾は都合の良い歯車と化そう。じゃがな、それは妾の庇護下にある全ての者に適用される。人であろうと、人間種であろうと、亜人種であろうと、異形種でも、それがアンデッドでもじゃ! その為の典範の改正じゃ。答えよニグン。妾を皇と仰ぐか否か」

この言葉に、その姿に、ニグンの膝は折れ、頭は床こまくに付けられる。

「我らが皇よ。煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイム様に永遠の忠誠を」

口にするニグンに対し、ビクトーリアはゆっくりと首を横に二度ほど振り

「違ふのう。妾はリリー・マルレーン。法皇リリー・マルレーンじゃ」

名のりに呼応する様に、絶死絶命が、クレマンティーンが膝を付く。そして、声を揃え

「スレイン法国 法皇 リリー・マルレーン様に永遠の忠誠を」

こうして、ビクトーリアは法国の皇となった。そして、ニグンと絶死絶命の働きにより、最高機関十一人はこれを認め、書簡にて各国の国王に届けられ、法国の民にも発表された。新たなるスレイン法国の門出は、あと僅かに迫っていた。

困惑する者・暗躍する者

スレイン法国における、法皇就任の知らせは、他の諸外国を震撼させる結果となった。
　　↳ ロープル聖王国

「何と言うことなの」

ローブル聖王国 聖王女 カルカ・ベサーレスは、書簡を握りしめながらそう呟いた。整った、その花の顔は影を潜め、苦しげにも見える表情を映し、金糸の様なその髪に隠れた額からは、汗が滲み出ている。その姿を見つめ、すぐにも声を掛ける者がいた。

ケラルト・カストディオ。聖王国最高位神官及び、神宮団 団長を務める人物だ。それは、この聖王国における、宗教的な部門のトップである事を示す。そして、もう一人。レメディオス・カストディオ聖騎士団 団長。聖王国の武におけるトップである。つまりこの場には、聖王国と言う国に置ける、実質の支配権を持つ三人が集合していることになる。

「いかがなされましたか、カルカ様？」

ケラルトが不安げに声を掛けた。カルカは、一度下唇を噛むと、意を決した様に口を開く。

「法国に、スレイン法国に皇が誕生したわ。名は、法皇リリー・マルレーン」
「法国が皇位制に?!」

ケラルトは最大級の驚きを示す。だが、実姉であるレメデイオスは涼しげな表情で「何を驚いているんだ? 国に王が居ても、何も問題は無いだろう」

平然と問題無し、と言い切る。これに対し、ケラルトは盛大に溜息を吐くと

「何を言っているのよ、姉さん。法国程の力ある国に王が産まれたのよ。これは世界が揺れるわ」

「ケラルト。だから、どう言う事だと言っている!」

未だ、事が理解出来ないレメデイオスは、苛立ちを横散らかせる。

「いい、レメデイオス。法国が脅威だって事は、解るわね?」

姉妹喧嘩に発達しそうな会話に、カルカがやんわりと釘を刺す。

「うむ。それぐらい当り前だろう」

「では、今までそれが脅威の内に納まっていた理由は解るかしら?」

「いや、知らん。私は考える立場では無いからな。それは、カルカ様や、ケラルトの仕事だ」

胸を張って、当然と言い切るレメデイオスの姿に、カルカは泣きなくなった。だが、カルカ・ベサーレスは出来る女だ。

「そうね。あなたは武でこの国を守ってくれば良いわ」

ケラルトには、カルカが暗に「馬鹿が考え出すと、碌な事が無いから、考えるな」と言っている様に聞こえた。無論、ケラルトも同意見なのだが。カルカは、顔に微笑みを張り付けて、説明を続ける。

「法国が、脅威の域で納まっていたのは、その指揮伝達の遅さ故よ」

「なんだと！ そんなに愚鈍な国だったのか！ ならば、責め入れても、奴らは気付かないのではないか？」

「姉さん。少しは黙ってカルカ様の話を聞けないのですか？ 馬鹿なのですか？ 馬鹿でしたね」

「むむ。酷い事を言うな」

またしても勃発した姉妹喧嘩を余所に、カルカは溜息と共に説明を再開する。

「良いかしら。法国が、各神官長による、合議制を敷いているのは、幾らあなたでも知っているわね？」

「疲れたのか、カルカの言葉は毒を含む。だが、それに気付けるほどレメデイオスの頭は強く無い。」

「うむ。当然だ」

「それによって、王制を敷いている国と比べると、反応が鈍くなっていたのよ」

「うん。どう言う事だ？」

「トツプダウンで判断が下せない、と言う事よ」

ケラルトが補足説明を行うが、それは、さらにレメデイオスを混乱させる。

「うん？ トツプなのに、ダウンなのか？ それは私に騎士長を降りると言うのか！」

「そんな事、言つて無いでしょう！ もう！ 姉さんに言葉を理解させるより、花に言葉を教える方が容易だわ！」

「何だと、ケラルトの癖に生意気だぞ！」

ワーワー、ギヤーギヤーと始まる姉妹喧嘩にカルカの堪忍袋の緒が切れる。

「もう！ 二人とも黙りなさい！」

机を両手で叩き、雷を落とす。カストディオ姉妹は、まだ何か言いたそうな空気を醸し出すが、カルカの手前、ここは一旦引く事にした。

「レメデイオス、トツプダウンとは勅命の事よ」

「なんだ、そうか。全くケラルトは、難しい言葉を使いたいお年頃か？」

レメデイオスのいらん事言いに、ケラルトの眉が跳ねる。再びカストディオ姉妹戦争勃発の危機は、カルカの刺す様な視線で回避された。

「そう。今までは合議制のおかげで、法国の動きは僅かに遅れていたの。そこに法皇が立った。これによって法国の動きは格段に速さを増すでしょうね。それに……」

「それに何でしょう、カルカ様」

「法皇の名前よ」

「リリー・マルレーン……………あつ！」

「ええ。この人は一体何者なの？」

「どう言う事だ？」

レメディオスの参戦により、先ほどの再戦を嫌ったカルカが、いち早く口を開く。

「レメディオス。あなたの名前は？」

「うん？ レメディオス・カストディオだが」

「そう。じゃあ私は？」

「カルカ・ベサーレス聖王陛下だ」

そう言うレメディオスは、どこか誇らしげだ。

「そうね。私達の聖王国では、名、性と言う順番で自身の名を形成するわ。でも、法国は違う。名と性の間に、洗礼名が入るのよ」

「それがどうした？」

またしても理解していないレメディオスに、カルカは法皇の名を指差す。

「リリー・マルレーン……………そうか！ こいつは法皇じゃ無いのか！」

「違います、姉さん。しかしカルカ様、この名は偽名なのでしょうか？」

「違うと思うわ。これだけ大々的に諸外国へ発表したのだもの、偽名とは考え辛いわ」
「ですが洗礼名を持たないと言う事は、法国において無神論者、と言う事に……」

カルカも、ケラルトも渋い表情を浮かばせる。最早、レメデイオスの事は見ない事にする様だ。

「六大神様を信仰していない者が、法国のトップに？ 考えられません」

「ええ、その通りだと思うわ。考えられる可能性は二つね」

「それは？」

「法皇が異端、もしくは六大神様以上の場合よ」

「そ、それわあ……」

カルカの言葉に対し、ケラルトは表情を引きつらせながら答えた。それほどまでに、カルカの言っている事は非常識なのだ。

「異端と言いますと、黄金信者、ですね。ですが、六大神様以上の者、とは……」

「煉獄の王かしら？」

カルカの言葉で、場は笑いに包まれた。

「カルカ様、さすがにそれは無いかと」

「そうねえ。そうだったら、世界の危機ですものね」

「それで、後は何と？」

他に何が書いてあったのか、とケラルトは問う。その言葉に促され、カルカは再び書簡に視線を移し

「いずれ挨拶に向かう、との事ね」

「良き関係が作れば良いのですが」

「……そうね」

これは、ローブル聖王国での出来事だが、他の諸外国でも概ね同じような判断が下された。しばらくは静観の立場を取る、と言う消極的な手段を。

くナザリツク地下大墳墓 第十階層 玉座の間く

「アインズ様。情報収集に出していたシャドウデーモンから報告が上がりました。人間的な国で動きがあった、との事です」

玉座に座るアインズに、アルベドが報告の内容を告げる。

「そうか。して、その動きとは？」

「はい。スレイン法国にて、新たな王が立った様です」

「新たな王、だど？ 確かビッチさんの報告だと、法国は合議制を敷いて居て、王は居なかつたはずだな」

「はい」

アインズは顎に指を置き、アルベドから視線を外す。

（どう言う事だ？ 一体法国で何が？ クーデターか？ いや、そうならもつと早くに、何らかの動きがあったはずだ。）

「アルベド。監視体制を強化しろ。ニグレドの助けを受けても構わん」

「畏まりました」

此処で会話は一旦終了し、沈黙が訪れる。その後、僅かな間を置き、再びアインズが口を開いた。

「先程、直に報告は聞いたが、お前から見てどうだ？」

問われたアルベドは、一瞬質問の意味が解らなかつたが、すぐに其れに思い当たる。

「リザードマンの村の件で御座いますね。順調、とは言い難いかと」

「うむ。理由を述べよ」

「恐らく武人としての意識が強すぎる為、指揮官としての考えが、追い付いていないのかと」

アルベドの分析に、アインズは肯定の頷きで返した。アルベドは、この沈黙を否定と受け止めたのか、一気に感情を乱し狼狽する。その姿は、見ている方が可哀そうになる程だった。

「し、沈まるのだアルベド。き、気分を害した訳では無い。考え事を……そう！　少し考え事をしていたのだ！」

アインズの声と共に、アルベドがピタリと動きを止めた。そして、顔を覆っていた両手の指を僅かに開き、そこから様子をうかがう様にアインズを見つめる。

「そうだぞ、そうだ。鳴いて、いや、泣いていては、せつかくの美人が台無しだぞ。ビツチさんに、奥さんと認めてもらえたのだろうか？　さあ、顔を上げるのだ」

「はあい」

アルベドの表情を確認し、アインズはほつと胸を撫で下ろす。
機動修正成功 説得は上手くいった様だと。

「しかし、誰にも相談するな、とは、いささか意地が悪かったか？」

「いえ。強く言わねば、きつとデミウルゴス辺りに相談するかと」

アルベドの答えに、アインズは再度頷き

「そうだな。相談に乗るとは言っても、こちらの意図を理解して、上手く誘導してくれる様な者であればいいのだが……」

「ならば、私の旦那様が適任かと」

アルベドの発言に、アインズは首を捻る。コイツ、今サラツと何て言った？

「アルベド。も、もう一度、言ってくれるか？」

「私の旦那様が適任かと」

「だんなさま？」

「はい」

花が咲かんばかりの表情で、アルベドが返事を返して来た。いや、実際咲いていた。そうアインズには見えたのだ。それはもう、キラッキラの星屑と共に。アインズは、さて、と考えを巡らせる。隣でくねくねしている、サキュバスに対しての対応を。そして、積極的な撤退とも取れる手段を選択する。

「その呼び方は、公的な場では控えるのだぞ。し、私的な……そう！二人っきりの時とかに呼べば、きつとビッチさんも喜ぶぞ！」

「はい。かあしこまりましたあ」

どうやら、湯だつて居る様である。アインズは、コホンと咳払いをし、話の軌道修正に着手する。

「まあ、お前の方から、メッセージを介しコキュートスへと知らせておけ。あくまでも自然にな。こう、ほのめかす感じで」

誤解されない様に、注意深くアインズは告げる。ちゃんと理解、してくれと思いがながら、アインズはアルベドの返事を受け取った。本日の議題もこれで一息着き、アインズは立ち上がると背後の肖像画へと視線を向ける。

（ビッチ子さん、早く帰って来て下さいね。話したい事も、相談したい事も一杯あるんですから）

法皇

スレイン法国 神宮殿、その中央塔の階段を、目的の場所へと最高神官長ニグンは登って行く。その場所とは、自身の部屋、最高神官長執務室の一つ上階。新たに用意された、法皇執務室である。

余談ではあるが、今回の神宮殿修復と法皇就任に対して、法国では様々な改革、改変が行われた。まず、一番目立つ物としては、国旗のデザイン変更である。スレイン法国の国旗は月桂樹の葉が、七枝に分かれた蜀台を囲み、その蜀台の中央を除く六枝に蠟燭が灯る物だ。新たにデザインされた物は、既存のデザインを生かしつつ、中央にも蠟燭が加えられた物となった。これは実質、今まで異端とされて来た、黄金が正式に法国の一柱と認められた事を意味する。

次に、先塔、もしくは第一塔と呼ばれる礼拝堂がある塔の三階の壁をぶち抜き、皇との謁見室が設けられた。

そして、最大の変革は、典範の改正である。今までの典範には、人類の救済、と言う文言が書き込まれていた。しかし、その言葉は消され、新たに書き加えられた言葉は、魂

有る者達の救済、及び守護。この改訂により格神官長達は、国民の混乱を危惧したが、反応は実に淡白な物だった。だが、その余波は、思わぬ所で起こっていたのである。それは、奴隷として使役されている、エルフなどの人間種、亜人種達である。魂有る者達、その者達と言う言葉が、諦めていた彼ら、彼女らの沈んだ精神を僅かに浮かび上がらせたのだった。

ニグンは、目的の場所を前に、一度深呼吸をすると、軽やかにドアをノックする。僅かに遅れ、扉が侍女を務める尼僧によつて開かれた。執務室には、侍女二人を含め六人の女性の姿が。ニグンが入室すると、扉の両側に侍女が立ち、うやうやしく腰を折る。ニグンが手を上げ、侍女に礼を取りながら探る様に視線を動かす。目当ての人物は、部屋の奥に居た。純白のゆったりした貫頭衣、その上から金糸で縁取りと百合の紋が縫われた前垂れを着込み、さらに、金色の現代で言うストールの様な帯、ストラを下げている。そして、その頭部には、前垂れ同様に百合の紋が刺繍されたミトラと呼ばれる布製の皇冠の姿が。この装束は、ミトラ以外はニグンが最高神官長の立場を有効活用し、六大神の残した秘宝の内の一つを差し出した物で、伝説級アイテムでもある代物だ。

「ご気分はいかがですか？ 何か不都合は御座いませんか？」

ニグンは、最大級の礼儀を持って、新たななる皇に言葉を掛ける。

「不都合は、無い。じゃがあ……のう」

ニグンの問いに、リリー・マルレーンは言い淀む。その姿に、ニグンの精神はかき乱される。一体、何があつたのだろうか、と。だが、それは杞憂であると、リリー・マルレーンの隣に控えていた者が語る。

「そう心配しないの。おおさまは、緊張してるだけだから」

そう茶化するのは、リリー・マルレーンと同じ衣装——レプリカ——を纏った番外席次。唯一の違いは、ミトラがベールになっている事くらいだ。そして、もう一人番外席次と同じ衣装の者が

「ねえ陛下、ホントに大丈夫。ねえ、ねえ」

しきりに心配して来ていた。

「だ、大丈夫じゃぞ。ホントに。たぶん。きっと……」

詰め寄るクレマンティヌに、リリー・マルレーンは虚勢を張って答える。もう一人、この場にはニヤも居るのだが、彼女は法国とは無縁の存在の為、法服は着ていない。無論、場所が場所だけに、ドレス姿で失礼が無い様にはしているが。

「言葉に真実味が感じられませんが……」

明らかに狼狽しているリリー・マルレーンに、ニヤが感想を述べた。しかし、耳ざとい法皇はそれを聞き逃さない。一足早にニヤに近づくと、目を見開き、真実を暴露

の民が、誕生した皇の姿を一目見ようと詰めかけている。盛大なラツパの音と共に、その扉が開かれた。薄暗かった礼拝堂に、眩しい太陽の光が差し込む。皆が眼を細める中、一人だけ違う行動を取る者が居た。まるで、その光から逃げる様に、番外席次が扉の陰に隠れたのだ。リリー・マルレーンはその行動を見つけ、不快そうに番外席次の腕を引っ張り、自分の右隣に立たせる。

「何をしておるのじゃ」

番外席次はそう咎められると、目を伏せ怯える様に身を縮めた。

「あ、あの。わたし。その、ハーフエルフ、だから」

途切れ途切れに、行動の理由を呟く。その悲しみを、悲哀を、恐怖を、リリー・マルレーンは鼻で笑った

「ふん！ じゃから何じゃ。妾は誰じゃ」

番外席次は、いや、この場に居るニグンにも、クレマンティヌにも、リリー・マルレーンの言っている意味が解らない。自分は誰か？ 法皇リリー・マルレーンである。それ以上に、物騒な名を持つ人物でもある。だが、目の前の法皇はそうは言っていない様なのだ。

「外には人間達が居ろう。そして、うぬはハーフエルフじゃ。つまりは、今、妾は人間種に囲まれておる。この場で一番異端なのは誰じゃ？ この場で人間種で無い、招かれざ

る異形は誰じゃ？ 小娘、胸を張れ、誇れ、声高々に叫べ、自分が何者かを。うぬは妾が、煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイムが、唯一自ら望み手元に置いた者ぞ。その者を、うぬは恥ずかしめるのか？ うぬの存在で、妾は恥をかくのか？ 小娘、妾の言葉が正しいと思うなら行動で示せ」

そう言つて、その黄金の瞳に、番外席次只一人を映す。番外席次は思い出す。あの日、自分の世界が変わつた瞬間を。自分の過ぎて来た闇が、破壊された瞬間を。嗚咽が漏れそうになる喉を、必死に諫め、その右手でペールを脱ぎ去つた。もう脅えないと。もう辛くは無いと。番外席次は、その笹の様な特徴的な耳を外気にさらした。その決意を見て取つて、法皇リリー・マルレーンは満足げに微笑み、番外席次をその胸に包みこむ。それが羨ましかつたのか、背中にはクレマンティーヌが張り付く。リリー・マルレーンは、苦笑いを漏らしながら

「小娘。うぬとタナトスは、妾の両腕となれ。雌猫は、我が剣に。ニグン、うぬは口となり、妾の言葉を民に伝えよ」

この言葉を受け取り、三人は満足げに頷いた。だが、クレマンティーヌが奇妙な声を上げる。

「うにゃ？ 陛下、ニニヤはどうなるの？」

もつともな疑問であつた。言い方は悪いが、ニニヤも立派なビクトーリアの子飼いの

者なのだ。

「うむ。あ奴は、妾の眼となつて貰う。とりあえずは、帝国に魔法学校なる物があると聞く。そこへ行かせるつもりじゃ」

この提案に、三人は肯定の意志を示す。この合図を持つて、準備が整つたとし、法皇リリー・マルレーンは声を挙げる。

「では行くぞ。妾の国民の下へ」

そう言つて、ニグンを先頭に、次いで番外席次が右に、クレマンティーヌは左に位置を取り、最後尾に法皇リリー・マルレーンと言うダイヤモンドを形成し、扉をくぐる。法皇の姿が現れた瞬間、神宮殿前の広場は、地鳴りする程の歓声に包まれた。皆、自分達の皇の誕生を喜んでいるのだらう。いや、この歓声はいずれ訪れる幸福に期待しての物だらう。法国が、もつと巨大に強大になる事で得られる物への期待、と言う事だ。

その歓声の中、用意された演説台の前にニグンが立ち、自らが新たな最高神官長に就任した事や、法皇の下、どの様な教義を進むのかを宣言する。概ねそれは、反対無く受け入れられている。だが、事が魂持つ者の救済、及び守護の話に及ぶと、若干のざわめきが耳に入つて来た。発表から日数が立ち、賢い者ならば、その話の裏に気付いたのだらう。その考えに行きついた法皇リリー・マルレーンは、ニグンを退かし、自らが演説台に立つた。

「皆の者。わが民よ。我らスレイン法国は、今後大きく舵を取る。今までの人間至上主義を捨て、我らの庇護下、傘の下に集う者、全ての庇護を軸とする！」

リリー・マルレーンの演説に、広場に集まった者達から声上がる。

「エルフもか！」

「ドワーフもか！」

「ゴブリンなどを、守るのか！」

様々な種族を持ち出し、法皇の言葉を否定する。だが、リリー・マルレーンは背筋を伸ばし、威厳ある表情を崩さずに口を開く。

「無論！ 無論である！ 妾の傘の下に集うならば、それが人間種でも、亜人種でも、異業種でも平等である！ 例え、アンデッドであつたとしても！」

このアンデッドと言う発言で、広場はさらなる混乱に包まれた。まるで、この場に集まった者達全員が、法皇の就任に反対するかの様な轟音がリリー・マルレーンに向け放たれる。だが、法皇リリー・マルレーンは、こんな事すでに承知済みと、演説台を離れた民の前に立つ。危険を感じた各神官長達は、法皇と民達の間には神官達を走らせ壁とす。この処置は、法皇を守る為には無い。法皇から民を守る処置である。

リリー・マルレーンは、目の前に居た神官の襟首を掴むと、自身の方へと引き寄せる。引かれた神官は、尻もちを付き、何が起こつたのか解らない、と言う顔で法皇を見上げ

ていた。リリー・マルレーンは、その神官の顔を、何の感情も見せない冷たい表情で見つめると、その左手を上げ、そのまま静かに降ろす。一体何を？その感情が場を包む。だが次の瞬間、場は悲鳴が支配する。リリー・マルレーンの行動の後、神官の首が飛んだのだ。ポカンとした表情のまま、首は放物線を描き、地に残された身体からは、噴水のように血が飛び出し、リリー・マルレーンを濡らす。スレイン法国の国民達からは、一瞬にして恐れが溢れ出す。だが、敵対行動は神官達、そして首を刎ねた張本人、クレマントン・マリーの壁に阻まれていた。民達の感情を置いてけ堀にするかの様に、リリー・マルレーンは左手を上げる。それに反応し、番外席次が短杖ワンドを片手に神官であった物へと近づき、杖に内包された魔法を発動させる。その魔法は、第九位階信仰系魔法トゥルー・リザレクション真なる蘇生。地に転がった首は、光の砂へと消え、身体を緑色の光が包む。その光は、徐々に輝きを増し、収束して行く。光が消えた後には、あの死んだ神官が、ポカンと口を開き座っていた。

リリー・マルレーンは奇跡を見せたのだ。感情の波が引いていった。誰も、もう法皇を疑う者はいないだろう。だが、法皇リリー・マルレーンの狙いは、意味は別の所にあつた。クレマントン・マリーヌを退かせ、神官をどかせると、一番先頭に居た一般市民の男に剣を渡したのだ。男は困惑の感情を見せるが、それに構わずリリー・マルレーンは高らかに、この場の民全員に聞こえる様に口を開く。

「さあ！ 我らがスレイン法国の民達よ、審判の時である！ うぬらは、妾の言葉に異議を申し立てた。しからば、その答えを見せよ！」

そう言うが、一体何を持って答えなのか。その疑問も最もと、再度リリー・マルレーンは再び口を開く。

「この神官は、一度死に蘇った。つまりは、アンデッドである」

この言葉に広場に集まる民達、そして法皇就任を祝うため集まった神官長及び、神官達からも驚きの声が上がった。暴論である。だが、真実は突いている。モンスターであるアンデッドもまた、死した者が蘇った結果なのだから。

「うぬらは、妾の言葉に否を突き付けた。ならば、その言葉通り、その者の首を撥ねよ」
冷静に、瞳に何の感情も浮かべずに、そう言い放つ。剣を持つ男は座り込み、震えながら「出来ません」と許しを乞うている。それを確認すると、リリー・マルレーンは演説台へと戻り、民に言葉を掛ける。

「民達よ！ 見たであろう！ これが妾の言いたかつた事である！ 姿、形が変わろうと、そこに魂があれば、我らの傘に集うのならば、その者は我らの友である！ 思い描いて欲しい。汝らの親が、子が、妻が、夫が、友人が、手足を亡くしたとしよう。だが、それでもその関係は崩れぬ筈。ならば、姿が、種族が変わっても、その者は我らスレイン法国の救うべき者である。この正義を！ この愛を！ スレイン法国の……誇り持

つスレイン法国の民達の教義とせよ！これを国是とする自国を誇る為に！」

法皇リリー・マルレーンの声が途切れた。場は静寂に包まれている。肯定か、否定か。僅かな無音の時間が過ぎた時

「ワアアアアアアアアアア！」

広場が大歓声に包まれた。スレイン法国の民達が、法皇を戴いた瞬間だった。

次の一手

スレイン法国を、新たな朝日が照らし出す。

法皇のセンサーショナルなデビューから一日、法皇執務室の明かりが消える事は無かった。室内に居るのは四人。法皇リリー・マルレーン。最高神官長ニグン。そして、番外席次、クレマンティーン。議題は、法国の膿である。奴隷制度、国民の意識改革、内部の組織改革、やる事は山積だ。だが、これらをクリアーしなければ、法皇の、いや、ビクトリアの目指す場所へは行けないのだ。では、最初の一步として選択すべき膿は？

「やはり、これじゃろうな」

そう言つてリリー・マルレーンは一枚の羊皮紙を机の上に置いた。ニグンは、それを覗きこむ様に見つめると

「奴隷の解放、ですか」

「うむ。組織改革は、もう少し個人を見定めねばならぬ。国民の意識改革など、さもありません。よつて、手つとり早く力技で何とか出来るのは、奴隷の解放じゃな」

この発言に、ニグンは表情を歪ませ

「しかし王よ、力技、とは一体？」

と疑問を呈す。だがリリー・マルレーンは、その疑問すら容易い物と言葉を返す。

「簡単な事よ。払ってやれば良いのじやよ。その命の値段をな」

「はあ?!」

この発言には、場に居る全員が驚きを顕にした。だが、その驚きをリリー・マルレーンは楽しげに見つめると

「ニグン、風花聖典を集めよ。そして、奴隷売買に手を染めおる地下組織に情報を流せ。実は好色な法皇が、奴隷の愛妾を求めておる、とな」

その指示により、直ちに風花聖典は街へと入り、ひっそりと奴隷商人にだけ情報が回る様に暗躍した。



くナザリック地下大墳墓 第六階層 星青の館く

あの指示を出してから数日が過ぎた頃、ビクトーリアはアルベドの要請により、ナザ

リックへと帰還していた。お付きの者はニニヤのみである。そのニニヤも、今はキツチン仕事の最中のため、ビクトーリアは一人、書齋のドアを開けた。誰も居ないと思つていた書齋に、動く影があつた。その人物は、この星青の館と言う場所に取つては、非常に珍しい人物であつた。ビクトーリアはその人物の横を通り過ぎ、椅子に座ると、正面で向き合い声を掛ける。

「珍しいでは無いか。まさかうぬが訪れるとはこのう、コキユートス」

そう、今現在ビクトーリアの目の前に居るのは、ナザリック地下大墳墓 第五階層 守護者 コキユートスだつた。何時もは威風堂々としていたその姿は、心なしか沈んで見える。ビクトーリアは腕を組み、コキユートスの複眼を見つめながら口を開く。

「どうしたのじゃ？ うぬが此処へ来るなど余程の事じゃらうて。申して見よ。他言はせんぞ」

ビクトーリアはそう声を掛けるが、コキユートスは沈黙したままだ。いや、僅かにカチカチと言う音を発している事を見るに、言うか言わまいか迷つてゐるのだろう。その葛藤を理解し、ビクトーリアは黙つて自主的な発言を待つ。どれほどの時間が経つただろうか、今までのあらましをコキユートスはポツリポツリと語り始めた。

「成程のう。リザードマンの村を襲撃して、その死体入手。そして、現地亜人種での、アンデッド生成実験、かあ。そして、その実行指揮をうぬに丸投げつと……………何

じゃそのガバガバな作戦は！」

ビクトーリアは立ち上がり、頭を抱えた。コキュートスに暫し待てと指示を出し、ビクトーリアは書斎を後にする。

くナザリック地下大墳墓 第九階層 執務室く

「のふおあー！」

第九階層 執務室にて、上がって来る報告や提案に対し、可否を付けていたアインズが、突然素つとん狂な声を上げた。その声は、本日のアインズ様当番メイド、シクススが驚き身を屈める程だ。声を上げた理由は、突然脳裏に怒声が響いた為である。声の主はビクトーリア。メッセージの呪文を介しての声だ。その第一声が「このおんのお、ドアホがあー！」である。一体何が起こっているのか？アインズには見当がつかなかった。だが、ビクトーリアの怒りの声は本物だ。これまで、さんざんやらかしてきた集団のボスとしては、丁寧な対応を取らざるを得ない。

「えーと。ビクトーリアさん、ですか？」

『何じゃ骨。ふざけておるのか？』

「いいええ。滅相も御座いません」

メッセージを介しての会話なのに、何故か左手でジェスチャーをしてしまうアインズ。傍目で見れば、奇妙な光景だった。しかし、そんな事を気にするでも無く会話は続く。

「本日は、一体何の御用でしょうか？」

『馬鹿にしておるのか？ まあ良いわ。リザードマンの村の事じゃ』

「リザードマンの？」

『そうじゃ。しかし、何じゃあのガバガバな作戦は。あれは作戦と言うてはならん物じゃ。あれは、箇条書きと言うのじゃ！ 任されたコキュートスが、可愛そうじゃろう』
ビクトーリアの溜息混じりの言葉を聞き、アインズは今回の侵略に対しての、本当の狙いを語った。

『コキュートスの成長じゃと？』

「ええ。完成されたと思われるLv100の者達が、新たなる成長が出来るかどうか、と言う物です」

ビクトーリアは口を噤み、アインズの言葉の意味を噛み締める。

『成程のう。そう言う事かや。委細承知、上手くやろう』

「お願いします」

その言葉を最後に、声が消えた。

くナザリック地下大墳墓 第六階層 星青の館く

憂鬱な気分で待ち続けていたコキュートスの下へ、ビクトーリアが戻って来た。その表情は、部屋を出た時よりも疲れて見える。椅子にドツカリと座ると、全て解つたと口を開く。

「してコキュートスよ、うぬの悩みは何じゃ?」

この問いに、コキュートスは「実ハ……」と前置きを言い語り出す。

「成程のう。リザードマンの戦士か……」

「……ハイ」

「で、うぬはどうしたいのじゃ?」

「解リマセン。只、惜シイト」

コキュートスの言葉に、ビクトーリアは一つ頷き

「それほどの強者、なのか?」

確認する様に、言葉を紡ぐ。だが、コキュートスは首を横に振る。

「イイエ。コノ地ニ住マウ戦士達ヨリモ、僅カニ上、程度カト」

この言葉を聞き、ビクトーリアは思案の為、一度目を瞑る。暗闇の中、思う事はコ

キュートスの心中。暫しの後、その黄金の瞳を外気に晒し

「コキュートスよ、うぬは彼奴等に何を見た」

鋭く言葉を投げかける。コキュートスは言い淀むが、意を決した様に

「戦ウ者ノ、覚悟ト魂ヲ」

短い、ハッキリとした言葉で告げた。その言葉を、ビクトーリアは頷く事で受け取る。そして

「救いたいのか？」

端的にコキュートスに問う。だが、コキュートスの答えは曖昧だ。

「出来レバ」

煮え切らない答えに、ビクトーリアの拳は机に叩き付けられた。バン！と言う音と共に、コキュートスは聞いた事の無い声を聞いた。

「うぬがどうしたいのか聞いておるのじゃ！」

実にドスの聞いた声だった

「シカシ、アインズ様ノ才考エガ……」

だが、コキュートスの口は、今だ煮え切らぬまま。これにビクトーリアは、溜息を一つ吐き、優しく、諭す様に言葉を紡ぐ。

「良い。言うてみよ。妾は誰にも言わんぞ」

それでも言い淀むコキュートスに、何度も同じ言葉を場投げかける。何度同じ問答が繰り返されたらどうか、コキュートスがやつと本音を吐露した。

「助ケタイ、ト思ツテオリマス」

その言葉に、ビクトーリアは満足げに頷くと

「しかし、それを成そうとするならば、ちいと策が必要かも知れぬのう」

「策、デアリマシヨウカ？」

「うむ。余程力のある者ならともかく、うぬが語った程度の者ならば、皆納得せんじやろう。特にアルベドやデミウルゴスがな」

「ムム。デハ……」

コキュートスの気持ちがおれて行くのが、手に取る様に解った。恐らく、持ち上げられて、急におとされた様に感じたのだろう。

「あ奴ならば、どうしたじやろうな」

「ア奴？」

「うぬの父の事じや」

「才才。武人建御雷様」

ビクトーリアは、思考の海へと漕ぎ出した。過去の友との思い出の中へと

「やはり、取れる手は少ないのう」

「ヤハリ、ソウデスカ」

「うむ。ならば、シンプルに行くべきじゃな」

そう言つてビクトーリアは立ち上がり、勅命を下す様に口を開く。

「殺せ。うぬが、武神が認めるに足る戦士を選び、完膚無き死を与えよ。そして、その死によつて彼奴の覚悟と魂のあり様を見せつけるのじゃ」

命の値段

「陛下。根回しの程、完了、との事です」

そう言うのは、風の神官長　ドミニク・イーレ・パルトウーシユ。

「さようか。首尾は？」

言葉を受け止め、そう返すのは、法皇リリー・マルレーン。

二人は、神宮殿法皇執務室にて、相對していた。

「話に乗って来た者は、五名程。それぞれが、五、七名程の奴隷を、現在所有している模様です」

好々爺の表情を崩さず、ドミニクは淡々と語る。

「種族は？」

酷く詰まらなそうに、リリー・マルレーンは問いかける。

「ほぼエルフですな。若干他種族が混じっているようですが」

「さようか。金子きんすの準備は？」

「整っている、最高神官長から伺っております。しかし、陛下……」

ドミニクは言い淀む。スレイン法国が、新たな道を歩むのは、もう致仕方無い。だが、

奴隷商人を捕縛するでも無く、金を払って奴隷を買い取ると法皇は言う。一体、法皇の目論見は何なのだろうか？ドミニク含め、最高神官長のニグンですら、その狙いは解らずにいた。そんな中、補足説明でもするかのように、リリー・マルレーンの口が開かれる。「妾は、他人の命で飯を食う輩を、否定も軽蔑もせん。傭兵、冒険者、うぬら裏の部隊の様な、な。じゃが、他人の人生で、飯を食う輩には、虫唾が走る。この国で、妾の機嫌を損ねたら、どう言う目に会うか、あ奴ら自身に味わって貰おうと思うてな」

心中を吐露したと思われるリリー・マルレーンだが、ドミニクにはその真意が理解出来なかった。それを知ってか知らずか、いや、知っているのだろう、リリー・マルレーンは続けて口を開く。

「今は知らずとも良い。妾のやろうとしてる事など、後で知れば良い。それに……エルフならば、森司祭ドレイドなどの、強力な職業クラスを持つて居る者も居ようて」

そう言つて笑みを浮かべるリリー・マルレーンの姿に、ドミニクの背筋に冷たい物が流れた。



執務室での密談から数日、ついにその日が訪れる。第四塔と呼ばれる、正面から見て右奥にある塔の中央階に、その場所は設けられていた。

その日、朝早くから神宮殿の裏門に数十名の者達が集まっていた。その集団を見つめる者が居たならば、きつとこう言うだろう。奇妙な集団だったと。その言葉は的を得た物だ。数十名の人影の中で、恐らく恥を搔く事無く、街を歩く事が出来る者は、五名程しか居ないのである。他の三十数名は、その姿をボロボロのローブ、いや、毛布と言った方が正しい物ですっぽりとその姿を隠しているのだ。この集団を見るに、どう鼻厩眼に見ても、まともな集団では無いのが、一目で解る。そんな者達だ。

しかし、そんな怪しい集団を、一人の神官がうやうやしく神宮殿へと招き入れる。石で出来た階段を上がり、集団は塔の中央にある部屋へと通された。その部屋は、一言で言えば白い部屋であった。床や壁は大理石だろうか？ 白い石で敷き詰められており、その上から樹液であろうか？ が塗られ、現代で言うリノリウムの様な質感があった。部屋の中には何も無く、只、椅子とサイドテーブルが一つずつあるだけで、ガランとしていた。

集団は、神官の指示により、部屋の扉側に集められる。ざわめきつつ時間を過ごして来た者達に、別の神官が、法皇の来訪を告げる。皆、腰を折り、礼を持って法皇を迎え

る姿勢を取った。僅かな後、扉が開き、ゆつくりと三人の人物が現れる。法皇リリー・マルレーン、最高神官長ニグン、番外席次 絶死絶命の三名だ。リリー・マルレーンは、一つだけ用意された椅子に座り、残りの二人は背後に立つ。周囲をグルリと見渡し、リリー・マルレーンは口を開く。

「面^{おもて}を上げよ」

法皇の許しを得て、一同が顔を上げた。その瞬間、場は息を飲むような呻きが支配する。その理由は、リリー・マルレーンの美しさ。美人と言われる造形を数多く見て来たであろう奴隷商人達だが、リリー・マルレーンの美しさは別格であった。醸し出される気品は、皇の重圧となり、高飛車とも取れる言葉は、威圧感に変わる。その王を具現化した様なリリー・マルレーンの口が開かれる。

「皆の者、ご苦労である。後の者達よ、遠慮は無用、顔を見せよ」

リリー・マルレーンは、背後に控えていた者達にも声を掛ける。その言葉に、場の者達は、最高神官長であるニグンですらも驚きを顕にした。それは当然の事である何故ならば、その者達は奴隷なのだから。射抜くようなリリー・マルレーンの視線からは逃げられず、奴隷たちはぼろ布を脱ぎ、その顔を外気に触れさせた。

人数にして三十一名。そのうち三十名はエルフの女性だった。そして、当然の如くその筐の様な特徴的な耳は、半ばで切断されている。その惨状を、リリー・マルレーンは、

酷く詰まらなそうに見つめていた。リリー・マルレーンは、視線を背後に控える番外席次へと移す。その視線だけで、全てを理解したとでも言う様に、番外席次は一つ領き、袋を手に奴隷達の下へと歩を進める。袋の中から、赤い液体で満たされた小瓶を取り出し、一つ一つ奴隷達に渡し、飲む様に促した。毒、とも取れるその液体を、奴隷達三十名は疑う事無く飲み干す。その光景を見せられたリリー・マルレーンは、苦虫を潰した様な、不快感を顕わにする。一見、何とも無い光景なのだが、この行為は、奴隷達の自我とでも言う物の欠如を意味する。何かのトラウマなどによつて、奴隷達は自分を捨てていると言う事だ。そんなリリー・マルレーンを余所に、三十名の奴隷、いや、エルフ達の瞳から涙があふれていた。瞳の焦点は、まだ合つてはいないが、耳が治癒された事により、僅かに誇り、とも取れる何かが蘇つたのだろう。

だがそんな中一人だけ、依然ぼろ布をかぶつたままの者がいた。部屋の片隅で、まるで自分を守るかの様に、きつくぼろ布を掻き抱いている。番外席次がポーションを渡そうとしても、頑なに受け取ろうとしない。困り果てた番外席次は、リリー・マルレーンに視線を向ける。それを受け取り、リリー・マルレーンは立ち上がり、その奴隷の前に立つ。

「その布を取り、顔を見せよ」

威圧的に声をかけて見ても、その者は首を振り拒否の意を告げる。何度かの同じよう

なやり取りを繰り返しても、事態は一向に進展しない。最後には、とうとうリリー・マルレーンが焦れ、布を自身で引きはがす。布で隠れていた者は、人種と思われる女性だった。

いや、そうでは無い。片口と腰の辺りには、亜麻色の綿毛の様な体毛が生え、尾骶骨からは、同色の丸い尻尾。そして、頭頂部には、長く耳が伸びる。ヴォーリアバニー。この世界に住まう、ラビットマンの亜種族である。ラビットマンを人間とするならば、ヴォーリアバニーはアマゾネスに位置する。リリー・マルレーンは、外気に晒されたその肢体を見つめる。その身体には無数の傷跡が見て取れた。その傷で満たされた、と言つても良い身体を、まるで庇う様にヴォーリアバニーの女性は、自分自身の手で抱きしめる。

その光景を見つめるのみで、場の誰も口を開けずにいた。番外席次は思い出す。自分の運命を変えた、あの時を。そして確信していた。彼の者ならば、自分が愛したあの王ならば、必ず救ってくれると。

そして、番外席次の思いは、現実となる。傷ついたヴォーリアバニーの身体を、リリー・マルレーンは優しく、強く包み込む。何を言っているかは、聞こえはしないが、その特徴的な耳に唇を寄せ、何かを囁いていた。徐々にだが、身体の力が抜けて行くのが見える。その後、何度か頷き、ポジションを口にした。リリー・マルレーンは、それを

確認すると、安心したように一度頷き、再び自身の椅子に着席する。もう一度、部屋全体を見渡した後、今回の目的を口にする。

「皆の者。解つては居るじやろうが、再度、妾の口から問う。命の値段を示せ」

その声は、ニグンであつても、底冷えする様な冷たい響きだった。だが、奴隷商人達は、その言葉の意味を汲み取る事はせず、喜び勇んで金額を口にする。

「き、金貨二百枚だ！」

「俺は、一人当たり金貨二百三十！」

「ならば、わしは二百五十枚！」

我先にと望む金額を叫ぶ。その熱気に当てられる事無く、リリー・マルレーンは冷たい表情のまま、応答する。

「それが、うぬらが一人の値段、と取つて良いのじやな？」

自らの良い値があつさりと通り、奴隷商人達の顔に愉悦が浮かぶ。隣ではニグンが、言われた金額を袋へと詰めていた。リリー・マルレーンはそれを受け取り、左端の奴隷商人の前に立つ。

「うぬの値段は、金貨二百、じゃつたな？」

「さ、左様で御座います陛下！」

「ならば受け取れ」

リリー・マルレーンは、手を開き催促する奴隷商人の頭部を、金貨の詰まった袋で………打ち抜いた。その眼から、耳から、鼻から、頭部にあるありとあらゆる穴から鮮血が吹き出し、奴隷商人は絶命する。金貨の詰まった富の袋は、リリー・マルレーンによって、最も高価な殴打武器フック・ジャックへと変えられたのだ。倒れた奴隷商人の骸の上に、金貨金貨の入った袋を投げ捨てると、すぐに次の袋がニグンの手によって渡される。

一人、また一人と奴隷商人達の命がかき消えて行つた。残つたのは一人。あの、ヴォーリアバニーを連れて来た奴隷商人だ。目の前で起こつた惨劇を見て、奴隷商人は腰を抜き、尻もちを付きながら後ずさる。両手を前に出し、勘弁してくれと振りながら、許しを乞うていた。

「金は、金は要らん！ いや、要りません！ 陛下！ 何卒！ 何卒、命だけは！」

だが、そんな言葉もリリー・マルレーンは楽しむ様に、奴隷商人に顔を近づけ

「遠慮するなよ。お前らが、自分で付けた値段だろう、払ってやるよ、値切つたりしないからさあ」

普段とは違い、ねっとりとした言葉で追い詰める。

「し、知らなかつたんだ！ まさか！ まさか！ 自分の命の値段だなんて！」

「はあ？ 妾は言つたでは無いかあ。命の値段を言えとお。妾は、此処に居る者達の値段とは、一言も言つておらんぞ。商人を語るならあ………言葉には気付けんと

なあ。あーあつはつはつはつは」

笑いながら、蔑みながら、法皇リリー・マルレーンは奴隷商人の顔を踏みつける。愉悅に浸つて居た様なりりー・マルレーンの表情が、すうつと冷えた物に変わる。そして「妾は、他人の命で飯を食う輩を、否定も軽蔑もせん。じゃがな、じゃがなあ！ 他人の人生で、飯を食う輩には、虫唾が走るのじゃ！ 理由が知れて、良かったのう。では、御機嫌よう」

言つて、足に力を込める。最後に残つた奴隷商人は、グシャリと言う耳触りの良くない音と共に、この世に別れを告げた。

奴隷商人の骸には興味は無いと、リリー・マルレーンはニグンに向き合い

「火滅聖典に勅命を言い渡す。奴隷商人達の骸これらの商品を、家族、組織の者へと返却せよ。その最、妾の印の入つた領収書を添付せよ。無論、金子もも忘れるで無いぞ。こ奴らが望んだ物

じゃからな」

言つてニヤリと邪悪な笑みを浮かべた。しかしその表情は、すぐにいつもの冷静な物に変わり奴隷、いや、解放された女性達へと向き直る。

「うぬらはもう自由じゃ。身体の傷は癒えても、心の傷はそう簡単には癒えまい。暫し此処での滞在を許す。ニグン、小娘、手配を。精神系の魔法詠唱者マジック・キャストを付けよ。居ないならば、我が僕に任せる。良いな？」

「王の御心のままに」

これで、法皇リリー・マルレーンの、いや、ビクトーリア・F・ホーエンハイムの目指す場所への一歩が始まった。

この惨劇を知った一部の者達は思う、一体この国は何処へ向かうのだろうか。

神官長達は思う、自らが招き入れた、この法皇と言う人物は、これからどれだけの血を流し続けるのだろうか。

そして、違法な職業に手を染めている者達は恐怖する、自分達は、グリフオンの尾を知らずに踏んでいたのだ。

大切な事

奴隷商人達との会合から数日、法皇リリー・マルレーンは執務室で二人の男と相対していた。

一人は、水明聖典隊長ハーマン・ヘンドリック・ボンズ。法国の出先機関である、各神殿を管理する部署のトップである。だが、その真の任務は、布教と各国家の内政情報の収集である。

もう一人は、風花聖典隊長イーサ・ブロン・ササ。スレイン法国にて、情報収集や諜報工作、異端者狩りを主とする部署の頂点に立つ者。簡単に言えば、真黒な警察組織のトップである。

「いやあ陛下、此度の件、なかなかの手腕でありましたねえ」

茶化す様に言うのは、イーサ・ブロン・ササ。短めの髪をオールバックにした、少し面長な顔と眠たそうな眼が特徴なだけの、三十後半から四十前半の、実に平凡な男。

「思うても無い事を言うでは無いわ、イサブロウ」

「イーサ・ブロン・ササです、陛下」

「ふん、イサブロウの方が言いやすい。愛称とでも思えば良からう。して、詳細は？」

リリー・マルレーンは、イーサの言葉を跳ね飛ばし、城下の様子を尋ねた。

「上や下への大騒ぎ、と言った所ですな。国に巣くっていた地下組織は勿論、一部の特権階級の輩も、いつ陛下の魔手が自分に降りかかるかと戦々恐々の状態です。まあ、私の様なエリートは心配無用ですが」

「魔手とは失礼な。この白魚の様な指を見ても、うぬはそう言えるのかのうう」

リリー・マルレーンは、日差しにかざす様に、その手を掲げる。それはともかく、このイーサ・ブロン・ササと言う男、密偵として優秀なのは疑う余地は無いのだが、一言多いのだ。そんな二人のやり取りを見て、室内に笑い声が響く。声の主はハーマン・ヘンドリック・ボンズ。此の男、神官と言う立場を持つ者なのだが、偉丈夫とでも言えば良いのか、とにかく筋肉質でデカイ。体も声も。

「いやー、陛下もイーサ殿も仲が良い」

「ふん。うぬも茶化すで無いわ。で、そちらはどうなのじゃ？ 坊主よ」

「坊主は止めて頂きたい」

「了承した。で、どうなのじゃ？ ゴリラ」

「え！ ゴリラ?! 何かは知らないけど、馬鹿にしませんか、陛下!」

ハーマンは、必死で未知の言葉に対し抗議するが、リリー・マルレーンは聞こえないと耳を塞ぐ。そればかりか、その状態で矢継ぎ早に言葉を繰り返す。

「良いでは無いか、ゴリラで。ゴリラの何が不満じゃ。ゴリラも良い物ぞ。今までどれだけの者が、ゴリラと呼ばれたと思うておる。謝れ。全国のゴリラに謝れ」

最早、無茶苦茶とも言える法皇の発言に、ハーマンは渋々この愛称を受け取るしか無かった。だが、リリー・マルレーンが愛称として呼んでいる物は、小娘、雌猫、魔女っ子など酷い物ばかりだ。そこから考えて見れば、ゴリラはそんなに悪い物では無いかも知れない。まあ、当の本人は知る所では無いのだが

「で、神殿の方はどうなのじゃ？」

「大変です」

即答、とも言える速さで帰って来た答えにリリー・マルレーンは首を傾げる。

「ゴリラよ、うぬは報告と言う言葉を知っておるか？」

そう聞かれたハーマンは「無論」と返す。ならば、とリリー・マルレーンは質問を繰り返す。

「神殿の方はどうじゃ？」

「大変です」

同じ答えが返って来た。その後、何度か同じ質問をして見たが、同じ答えが返って来る。リリー・マルレーンは思う、コイツは本当にゴリラなのでは無いかと。執務室に来る階段の途中で、ハーマンとゴリラは入れ替わったのでは無いか、と。そう思ったら、

居ても立っても居られない。リリー・マルレーンは立ち上がると、ドアへ向け歩きだす。その行動に驚いたのは、ハーマンであった。

「へ、陛下、いざこへ？」

焦りを感じさせる表情でハーマンは尋ねる。しかし、リリー・マルレーンの顔は大まじめだ。

「ゴリラよ、止めるな。妾は水明聖典隊長を救いに行かねばならぬ」

「え？」

「え？ では無いわ。うぬは偽物じゃろう。えーと、オウム返しゴリラ、とか言うモンスターじゃろう」

「はい？」

矢継ぎ早に語られる、ハーマンのモンスター疑惑。だが、そのやり取りを見つめるイーサの目には、リリー・マルレーンの表情の変化が伺えた。徐々にだが、口角が上がって来ている。つまりは、楽しんでるのだ。イーサは溜息を一つ吐くと、口を開いた。

「陛下、お戯れは程々が良いかと」

釘を刺す様なイーサの言葉に、リリー・マルレーンは舌打ちで返事を返し執務机に戻った。

「それで、何が大変なのじゃ」

この問いに、ハーマンは「はい」と短く返事を返すと

「捨てエルフが増えまして」

と、ほとほと困ったと言葉を綴る。

「はあ？」

「陛下が商奴隷商人の數品を返却した、次の夜辺りからですか。この聖地に有る五つの神殿、その門前にエルフが捨てられる様になったのですよ。一晚につき五、六体。いや、人にん。五つ合わせて三十人から四十人」

「何故じゃ？」

いきなりの事で、リリー・マルレーンの頭脳は正解を弾き出せない。そこでイーサが助け船を出す。

「これはあれですな。奴隷所持の発覚を恐れた者達の仕業ですね」

「何じゃと！ では、捨てエルフは、元は奴隷エルフ、と言う訳か」

リリー・マルレーンの結論に、両隊長は首を縦に振る。

「それならばゴリラ、神殿にて捨てエルフを保護せよ。このまま野良エルフになるのを見てはおれんからな」

リリー・マルレーンはハーマンに指示を下す。この指示は、正しい物だ。正しいがゆえに、大きな見落としがあつた。それがゆえに「大変」と言う言葉を使っていたハーマ

ンの表情が歪む。

「それなのですが陛下」

「何じゃ？」

意気揚々と指示を出す法皇に、ハーマンは申し訳無さそうに言葉を告げる。

「あれから四日。エルフの人数は百二十名を超えております。食料などの日用品、及びそれを賄う金子きんすの確保が……」

ハーマンの告げる事実には、リリー・マルレーンは驚きを顔にする。

「ひゃ、百二十名！ 何じゃそれは！ 一体どこからエルフは湧いて来た！」

この問いに、ハーマンは「さあ？」と答えるに留まるが、イーサが補足する様に推測を述べた。

「恐らくは特権階級の者達でしょうね。エルフと言う種族は、見た目は見目麗しく、さらには森司祭ドルイドやレンジャーなどの特殊職業クラスを持つている者達も多数いますから。愛妾としても、護衛としても、道具と考えれば優秀ですから」

イーサの口憚くちはばらない言葉に、リリー・マルレーンは同意の仕草で答える。

「成程のう。二人の調査と現状が、ここで合致する訳じゃな」

この言葉に、隊長二人は頷きで返す。しかし、依然問題は解決していない。さて、どうするべきか……。リリー・マルレーンは、ゆっくりと息を吐くと

「仕方が無いのう。妾の報酬からそちらへと回そうぞ」

自ら傷を負うと宣言する。だが、二人の隊長は反応に困ったかの様に、苦笑いを浮かべた。

「陛下、最高神官長の報酬は知っておられますかな？」

「ニグンのか？ 知らんが。そうじゃ！ 奴にも出させれば良からうな」

「ご機嫌にそう言い切るが、聞いている方のテンションはさらに下がる。」

「一月何とか食いつなげる程度ですよ、陛下」

残酷な現実をイーサは突き付ける。言葉を聞いて、リリー・マルレーンの表情が凍り付く。

「ま、まさか！ では、妾の報酬は……」

「……………ゼロ、ですな」

「はあ！ 何故じゃ！ 何故にそうなる！」

リリー・マルレーンの絶望を伴う問いかけに、理路整然とイーサは答えた。スレイン
法国の報酬、給料制度はこうである。一般、下級神官達は、修行と共に雑務を行い、給
金を得る。そして、役職が上がるごとに、その給金の金額も上がるのだが、そう、だが、
である。

有る一定以上の地位、神官長や聖典隊長などの法国の運営に携わる地位に着くと、

徐々に報酬は減らされて行く。そして、スレイン法国最高位の法皇リリー・マルレーンの報酬は………ゼロである。法皇とは、スレイン法国の民の為に存在する者であり、それは、奉仕の精神で、その民に仕える者である。よって、法皇とは名誉職であるため、給金、及び報酬は発生しない。どんなに頑張ろうが、人々に尽くそうが、良き国を築こうが、無給である。法皇リリー・マルレーン、いや、ビクトリア・F・ホーエンハイムは絶望に襲われていた。

「無一文じゃ」

「は？」

「妾は、無一文なのじゃ。おおさまなのに………よよよ」

リリー・マルレーンは、床に腰を落とし、しなを作つて泣き始める。無論、演技であり訴えかける意味は、金をくれ、である。困った様に眉をひそめるハーマンに対し、イサは瞳を細め

「みつとも無いですよ、陛下」

冷たく現実を突き付ける。その言葉に憤慨したとでも言う様に、リリー・マルレーンは立ち上がり、自身の部屋から退出して行く。そして、その去り際には

「ふん！ 可愛げの無い部下じゃ！ イサブロウ、お前の給金は今月からドーナツツじゃ！ ゴリラはバナナ！ ざまあみる！ ははははは！」

捨て台詞を残し駆け出して行った。

残された隊長達。

「イーサ殿」

「なんですか？」

「法皇陛下って……………おもしろい方だったのですね」

「まったく」



法皇執務室の下階。最高神官長の執務室で、黙々と仕事を片付けていたニグンに突然の災難が訪れる。

「ハッあニグン！」

突然、ドアが蹴破られたのである。だが、ニグンは驚きもせず、音がした方へと視線を向ける。あの時の、煉獄の王からもたらされた恐怖に比べれば、少々の事など驚くに値しないのだ。だからこそ、ニグンはこう答える。

「おや、我が王ではありませんか。本日は何用で？」

「何用では無いわ！ 妾の給金の事じゃ！」

「給金？ ありませんよ、我が王」

リリー・マルレーンの詰問に、平然として返される、ニグンの慈悲の欠片も無い言葉に、リリー・マルレーンはがっくりと膝を付き項垂れる。

「本当じゃったのか……………おおさまなのに、無一文。ニグンよ、何とかならんかや？」

かわい娘ぶって言ってみたが、ニグンの返事は首を横に振るのみ。だが、ここで諦めるほど、煉獄の王の意思は甘くは無い。何とか法国から金子きんすを引き出す方法を考える。

「いやのう、妾が給金を貰わねば、エルフ達が路頭に迷うのじゃ」

「はい？ 意味が解りませんが、我が王よ」

話に乗って来た。これ幸いと、リリー・マルレーンはプレゼンを開始する。これまでののあらましを、僅かに、いや、随分と盛ってニグンに説明する。

「成程、亜人種による特殊部隊の発足ですか……………良き案ですね。流石は我が王。それならば、予算が降りる様、各神官長を説得しましょう」

「誠かや！ 流石はニグン！ 褒めてつかわす！ ………………それでお、妾の給金なのじゃがあ」

「無理ですな」

「むむつ。のう、もうちよつと考えて見ても、良いのじゃなからうかのお」

法国の歴史を解き、名譽の意味を説明し、いかに法皇と言う地位が尊いかを説明しても、リリー・マルレーンは一向に引く気配は無い。どれほどの時間が経過しただろうか、遂にニグンが折れる事になる。

「解りました、我が王よ。一週間に銀貨三枚。それで納得していただきたい」

「もうちいと何とかならんか？」

「これ以上は……」

「左様か」

こうして法皇の労務交渉は終結を迎える。

そして世界は、誕生以来初めての、お小遣い制の国主を迎える事になった。

「話は変わりますが我が王よ。エルフ達の統率はいかがなされますか？」

話が自分以外の事柄に移したため、リリー・マルレーンは表情を引き締め

「とりあえずは、保護をした神殿での下働きをさせつつ、個人の能力の把握じゃな」

「成程」

「その把握が終了次第、配属を決める。戦闘に参加出来、なおかつ、ある一定以上の力ある者は、小娘の下に、で良いじゃろ」

「良き案です、我が王。それともう一つ、ヴォーリアバニーの娘ですが……」

「あの娘か。ニグン、妾は部屋へと戻る。兎を連れてまいれ。妾、直々に話を聞こう」

リリー・マルレーンの言葉に、ニグンは立ち上がり腰を折り

「畏まりました、我が王」

了承の言葉を返す。

「そう言えば、兎の名、聞いておるか？」

リリー・マルレーンの問いに、ニグンは僅かに首をかしげ

「確か………ヴァイエスト、だったかと」

うろ覚えですがと付け加えながら、名を口にした。

「ヴァイエスト、か。良き名じゃな」

そう言つてリリー・マルレーンは優雅な微笑みを浮かべた。

兎の願い

けたたましい労務交渉から約三十分、法皇執務室のドアが叩かれた。風花、水明の隊長二人は、リリー・マルレーンの帰室を確認後、それぞれの任務へと戻って行った。したがって、今現在執務室内には、リリー・マルレーン一人、と言う事だ。ノックに対し、入室の許可を口にする。来客もそれを耳にし、扉が開かれた。入って来たのは、最高士官長ニグンとヴォーリアバニーの娘。

「陛下、お待ちせ致しました」

「うむ。二人とも座るが良い」

そう言いつつ、リリー・マルレーンは上座の一人掛けソファに腰を降ろす。残された二人は、テーブルを挟み置かれた三人掛けのソファに一人ずつ腰掛ける。ほどなくして、執務室に紅茶が届き、喉を潤わせた所で、リリー・マルレーンは口を開く。

「娘、名は何と言うう？」

「あ、あの、ヴァイエストです、陛下」

ヴァイエストは、立ち上がり、自身の種族の特徴とも言える、頭頂部から生えた長い耳を揺らしながら腰を折る。そして、顔を上げると片膝を付き

「この度はご救出頂き、感謝の念が堪えません。この命続く限り……」

「いらん」

「は？」

ヴァイエストは最上級の感謝を告げようとしたのだろう。だが、リリー・マルレーンはそれを拒否した。

「礼など言ってくれるな。うぬらからの礼を受け取れば、妾はこの国の民を殺して回らねばならぬ。それほどのを、この国の民はうぬらにしたのじゃ。じゃから、礼などいらん。落ち着き、腰掛けるが良い」

そして、こう言葉が続けた。これは暗に、国が罪を認め謝罪した事と同意である。それが暖かく思えたのか、ヴァイエストは心穏やかにソファーに沈みこむ。それを確認し、リリー・マルレーンは再度紅茶で喉を潤すと、こう切り出した。

「ヴァイエストよ、うぬのこれからを聞こうと思うてな」

「これから、ですか？」

「うむ。身の振り方、と言うやつじゃな」

リリー・マルレーンが言葉を口にした瞬間、ヴァイエストの喉がゴクリと鳴った。恐らくこれは、彼女にとって重要な選択が必要な事柄なのだろう。じつと俯きヴァイエストは黙りこむ。その様子を、焦る事無くリリー・マルレーンとニグンは見つめていた。

それほどまでにヴァイエストの表情は硬く、状況を物語っていたのだ。ヴァイエストが再び顔を上げるまでには、暫しの時間を必要とした。だが、リリー・マルレーンへと向けるその瞳は力強く、決意を秘めた物だった。

「陛下、恥を承知でお願いがあります。私達を、我が部族を御救い下さい」

ハッキリと自分の願いを言葉にし、再び片膝を付きリリー・マルレーンと対峙する。

「ほう。うぬは再び妾に救いを求めるか……」

その、何の表情も浮かべない冷たい瞳で、リリー・マルレーンはヴァイエストを見つめる。その雰囲気を感じ、ヴァイエストを諫め様とニグンの腰が浮いた。一体、どうやって察知したのだろうか？リリー・マルレーンの左腕が上げられ、ニグンの行動を止める。

「うぬの願いを聞き届けて、妾に何の理がある？」

表情を引き締め自身を見つめ続けるヴァイエストに対し、リリー・マルレーンは冷酷にメリットを示せと問いかける。ヴァイエストの表情は固まり、喉がヒリ付いて行く。下唇を噛み、だが視線だけは決して外さない。

「わ、私の命を陛下に……」

「足りぬ」

捧げます、と続くはずだった言葉は、リリー・マルレーンによって妨げられる。

解っている。

解っていた。

強大な敵と戦ってほしいと言う願いとは釣り合わない事を。幾人もの人の命と、自分の命など天秤に掛けるまでも無い事を。だが、ヴァイエストにとって、今差し出せる物はそれだけなのだ。奴隷として全てを失った此の身に、差し出せる物など無いのだから。羞恥と怒りで掻きまわされる精神を何とかなだめ、ヴァイエストは声を絞り出す。

「では陛下。陛下は何をお望みで？　どんな物なら、我が部族と釣り合うと？」

ヴァイエストの言葉で、リリー・マルレーンの瞳に表情が戻る。いや、戻った気がした。やっとヴァイエストと言う、自分を見てくれた気がした。

「全てじゃ。うぬの部族、その全員を救った暁には、全てを差し出せ。ヴォーリアバニの全てを」

リリー・マルレーンの冷酷とも取れる言葉に、ヴァイエストは喉の渴きを覚えながら「それは、陛下の下へもとと下れくだれ、と言う意味でよろしいでしょうか？」

「左様。じゃが、下れ、では無い。妾が傘の下もとに集い、妾が望む世界を共に創れ」

「陛下の望む世界……。それは一体？」

ヴァイエストの問いかけに、リリー・マルレーンはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ

「混沌じや。聖と邪。光と闇。生と死。全てが混じりあつた世こそが妾の望み」

執務室に、ゴクリと言う喉が鳴る音だけが響く。それは、ヴァイエストのみならず、ニグンからも漏れだした物だ。リリー・マルレーンは、ヴァイエストに返答を迫る。だが、ヴァイエストには答える事は出来ない。その理由が解つていながら、リリー・マルレーンの視線はヴァイエストを捉えて離さない。ヴァイエストは覚悟を決めた様に、その拳を強く握りしめ

「部族全て、と言うお話であるならば、私一人の考えでは返答しかねます。ぜひとも、我が部族の長にお会いして頂きたい」

「ふむ。成程。それが道理じやな。ニグンよ雌猫を呼べ」

「畏まりました」

ニグンはすぐさま反応し、外で待機していた下級神官に指示を飛ばす。ほどなくして、目当ての人物が姿を見せる。

「こんちやーす」

ふざけた言葉と共に。

「うんもう。陛下がお呼びだつて言うから、てつきり蜜月な事だと思つたのにい。堅物があるなんて、ざあーんねん」

「陛下の御前です。ふざけるのも好い加減にしなさい、クレマンティーヌ」

平常運転のクレマンティーンに、ニグンがやんわりと釘を刺す。まあ、これで態度が治るとは、微塵も思っていないのだが。

だがリリー・マルレーンは、この光景を嬉しそうに眺めている。それが、ヴァイエストには奇妙に見える。王の前で、ふざけ合う家臣など、ヴァイエストは見た事も、聞いた事も無いからだ。

そんな疑問を浮かべていたヴァイエストの背筋に、一瞬寒気が襲った。理由は、場の空気が瞬時に凍りついたかの様に、緊張感を持った物に変化したからだ。原因は、リリー・マルレーンの瞳。先程までの楽しんでいた暖かさが影を潜め、冷たい色を浮かべながら、僅かに細められていた。たったそれだけ。それだけの仕草を察知し、ニグンと言う最高神官長と、目の前にいる猫の様な女は背筋を正したのだ。これは、それほど威厳を放つリリー・マルレーンを凄いと見るべきか。それとも、僅かな仕草も見逃さない家臣達の忠を褒めるべきなのか。ヴァイエストは自問自答の中に身を沈める中、場は今後に向けての話し合いが始まった。

「雌猫。うぬには妾の勅使として、兎の国へと行ってほしいのじゃが。どうじゃ？」

この言葉を受け、クレマンティーンは視線はヴァイエストを捉える。そして、その視線はリリー・マルレーンへ。投げかけられた視線を、リリー・マルレーンはしっかりと捉え、一度だけ静かに頷く。

二人の男がうやうやしく膝を折っていた。普通の目で見れば、王宮などで見られるごく一般的な光景だ。だが、男達に視線を絞って見ると、それが違うのだと解る。男達の表情は凍りつき、額、首筋に汗が浮かんでいた。これは、熱いのでは無い。男達は恐怖に魅入られているのだ。では、一体何がそれほど物を感じさせるのか？それは膝を付き、礼を尽くす眼前の者。自身が支える皇に対してだ。

「漆黒聖典 隊長 神槍滅牙しんそうめつが」

「同じく、第五席次 一人師団」

「法皇陛下のお呼びにより、参上致しました」

男達が名乗りを上げる。

「うむ。面おもてを上げよ」

頭上から声が掛る。だが、男達の姿勢は崩れない。顔を上げれば、その視界に、その脳裏に残る恐怖の対象が存在しているのだ。体が固まり、関節が動くなど悲鳴を漏らす。だが、心が挫けそうになるのを、何とか抑え視線を上げる。そして、そこには居た。恐怖と言う物を体現した者が。

「なんじゃあ、硬つたいのう」

酷く砕けた口調で。そして、隣で控える最高神官長に「のう」などと同意を求めている。この光景を見せ付けられ、漆黒聖典二人が最も驚いたのが最高神官長の態度であつ

た。

「自分を殺害した人物が目の前に居るのです。緊張するなど言う方が無体では？」

「小さい男達じゃ」

実に自然体である。死の恐怖をいかにして乗り越えたのか？一度真面目に聞いてみようと思う二人であった。そんな二人の心情など微塵も汲み取る事無く、リリー・マルレーンは言葉が続ける。実に酷い国主であった

「うぬらに来てもらったのは他でも無い。ちいと頼み事を聞いて貰いたくてのう」

気取った感じを微塵も出さずに、そう問いかけ来る。だが、相手は国主、法皇陛下だ。頼むと言われたら、従うしか無い。そして、死にたくも無い。

「妾がエルフの娘と共に、兎の娘を保護したのは知っておるか？」

「ヴォーリアバニーの娘の事です」

リリー・マルレーンの独特の言葉遣いに対して、ニグンが補足を入れた。そして、この問いに関して、漆黒聖典の二人は首を縦に振る。実はこの件、神宮殿内でかなりの噂になっている事柄であった。

「それでお、その兎から助けてほしいと言われてのお」

二人の表情を楽しむかのように、焦らしを含めながら言葉を口にする。

「妾としては、哀れな子兎に救いの手を伸ばさそうと思うのじゃよ。そんでのう、相手の気

持ち、と言う物も大切じゃと思う訳じゃ。妾の手を取るのか？ それとも、独立独歩で行くのか？ 意志の確認に勅使を送ろうと思うてな。それで、うぬらには、その護衛を務めて貰いたいのじゃよ。どうじゃ？ 引き受けてくれぬか？」

実にほがらかに質問をしてきた。断つても、罰など無いと言わんばかりに。

だが、第五席次クワイエツセは知っている。自分の頭部を、フラッグポールで消し飛ばした法皇の非情さを。

漆黒聖典隊長は覚えている。自分の頭を踏み潰した、法皇の慈悲の無さを。

二人は確信していた。断る事など出来ない事を。チラリと目で確認を取り、了承の意を告げる。

「それで陛下。勅使とは誰が務めるので御座いましょうか？」

漆黒聖典隊長が質問を口にする。法皇リリー・マルレーンが、勅使と言う大役を与える人物など、二人しか知らない。最高神官長であるニグンか、自分の隊に在籍する、あの女である。

前者ならば、喜んで引き受けよう。性格はともかく、人格的に見ればニグンは立派な人物だ。だが、後者の場合はどうだろう。最早、最悪の人物だ。

漆黒聖典に配属された頃、あのハーフェルフの女に、どんな酷い事をされたか。ポコポコにされた事もあった。馬の尿で、顔を洗わされた事もあった。その結果、鬱になっ

た。

あの女、番外席次は、目の前の法皇、そして隣に座る者の妹。スレイン法国の性格の悪い女のスリートップだ。

漆黒聖典隊長は、心の中で光の神に祈った。生まれて来て最も願いを込めて。せめて、あの女で無い事を。そして……祈りは神に届いた。法皇リリー・マルレーンの右側に立っていた、ローブをすっぽりと被った者が一步前に出たのだ。

何者かは解らない。だが、体付きから女性の様に見える。二人は、じつとその者を観察する様に見つめていた。その時、リリー・マルレーンの口が開く。

「二人とも、この者じゃ。この者が、うぬらの守るべき者じゃ。ほれ、フードを脱ぎ挨拶せえ」

漆黒聖典隊長は安堵の溜息を洩らした。だが、それは一瞬の事。溜息は、ひきつった呼吸へと変化した。

「こんちゃーす。私が勅使の、クレマンティーヌです。よろしくね！」

謝罪と和解

壇上でご機嫌に挨拶をする女を見て、漆黒聖典の二人は声が出せずにいた。それはそうだろう。クレマンティーヌ・クインティア。漆黒聖典 第五席次 クアイエッセ・ハゼリア・クインティアの実妹にして元漆黒聖典 第九席次。

そこまでは良い。問題はここからだ。土の巫女が有する叡者の額冠を奪い、法国を出走。秘密結社ブローラー・ノーンへの加入。数多の民間人の殺害。一言で言えば重罪人。簡単に言えば、犯罪者である。

そんな者が自分達の頂に座する者の勅使だと言う。一体、何の事だろう？ 出来の悪い冗談は止めてほしい。そんな気持ちなど微塵も汲む事無く、壇上のクレマンティーヌは楽しげに言葉を続ける。

「あれ？ あれれ？ どうしちゃったのかなあ？ びっくりしちゃった？ そりやそーだよねえー！ いもうとですよー！ 元部下ですよー！ 勅使様ですよー！ きやはははははは！ きやつ！」

調子に乗って元上司と兄に向って、暴言を吐き続けていたクレマンティーヌの声に、虚を突かれた様な悲鳴が混ざる。何て事は無い。あまりの調子の乗りっぷりにいらつ

いた法皇が、後から蹴り飛ばしたのだ。当然その身体は壇上から転げ落ち、元上司と兄の居る床にへばりつく事になる。形の良いお尻を突き出す様な態勢で。

「まったく、調子に乗り過ぎじゃ。自分を守ってくれる者らを、敵に回してどうする。少しは考えよ」

溜息を吐きながら、そう呟いた。だが、敵もさる者。即座に身体を起こし、クレマンティーヌは抗議の声を上げる。

「うんもう、ひいっどーい！ 怪我したらどーすんのおー！」

だが、リリー・マルレーンはその言葉を聞き流し、今後の工程を口にする。

「まあ、それが妾の勅使として、兎の国へと赴く。御守はうぬら二人、此処までは良いな？」

法皇からの勅命である。それは、反論を許さない命令だと言う事は解っている。だが、漆黒聖典の二人の気持ちはこうであった。こんな異常者クレマンティーヌの御守などしたくは無い、である。それが表情に出ていたのか、リリー・マルレーンは隊長に言葉を掛けた。

「何じゃ、不服そうじゃのうロン毛。言いたい事があるならば、聞いてやるぞ」

「口、ロン毛……」

今まで呼ばれた事の無いような愛称に驚きつつも、言えと言うのならば、と任務の辞退を含みつつ口を開く。

「陛下、申し訳難いのですが、彼女の制御は、私どもには不可能かと」

「ほう。チャラ男も同意見か？」

「チャ、チャラ……。は、はい。我が妹ながら、行動が読めませんゆえ」

「困ったのう」

リリー・マルレーンは口ではそう言うが、表情は実に楽しげだった。

「雌猫の性格が矯正されれば、うぬらはこの話、受けるか？」

漆黒聖典隊長とクワイエッセは、お互いの顔を見つめ合う。アイコンタクトで確認し合い、クワイエッセが一つ頷いた。結論が出た様で、漆黒聖典隊長が代表する形で返答を返す。

「そう言う事であれば……」

漆黒聖典隊長が言い終わる前に、リリー・マルレーンの言葉が飛ぶ。

「委細承知。雌猫。うぬ、もう一度スライムと戯れて来い」

「えー！」

クレマンティーヌの動きがピタリと停止した。その後、まるでギギギと潤滑油が切れた歯車の様に首が、視線がリリー・マルレーンに向けられる。

「へ・い・か、い・ま・な・ん・て？」

「うん？ 三吉君も腹が減っていいよう。先日の様に、うぬがご馳走してやってくれ」

「さんきちくん?」

「そうじゃ。あの、三吉君じゃな」

三吉君。普段はアインズが、自身の身を清める為にスライム風呂として飼っているスライム。だが、多分に及ばずスライムとは雑食なのである。以前、クレマンティーヌを美味しく頂いたのも彼?なのだ。

その過去が、クレマンティーヌの脳裏にフラッシュバックとして蘇る。膝がガクガクと震えだし、流れ出て来る油汗の量は半端無いほど。唇が真っ青に染まりながら、クレマンティーヌは何とか声を絞り出す。

「い、いや。やめて。へいか。やめて……」

愉悦に緩む口元とは違い、冷たさを湛えた瞳でリリー・マルレーンはクレマンティーヌを視界に留め

「何じゃ、三吉君はいやかえ?」

そつと助け船を漕ぎ出す。これに対し、クレマンティーヌは何度も頷く事で返事を返した。その姿を見つめつつ、暫し考える振りをしたりリリー・マルレーンが出した答えは「ならば、迷惑を掛けた者には謝るのが筋、と言う物では無いか?」

であった。

クレマンティーヌの表情は、どこか屈辱に濡れた感があったが、実際には気恥ずかし

さが出た物だろう。ゆつくりと姿勢を正し、正座をすると

「兄様、隊長。今までご迷惑をおかけして、申し訳御座いませんでした」

謝罪の言葉を口にし、頭を下げた。これには、漆黒聖典の二人は顔を見合わせる事しか出来なかつた。一体何が、クレマンティーヌをこうまで変えたのか？ 見る者全てを殺して来た女が、何故こうも変わったのか？

答えは一つしか無い。目の前に近づいて来る存在。法皇リリー・マルレーン。いや、煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイムによつてだ。その恐怖を伴う偉大な存在は、頭を下げるクレマンティーヌを優しげに抱きしめていた。良く言えた、とでも言うのか、子供を褒める様に、その頭を何度も撫でてゐる。そして、その瞳は、漆黒聖典二人を捉える。

「ご奴がここまでしたのじゃ。うぬら、返答は如何に？」

問いかけの言葉ではあるが、答えは一択だ。首を縦に振るしか無いのだ。この儀式、そう、これは儀式なのだ。法国に対して罪を犯したクレマンティーヌを、再び法国に所属させる為の儀式。有態に言えば、茶番である。外様であつたりリリー・マルレーンや、異端とされていたニグンではなく、法国を支えて来た者達にクレマンティーヌを守らせる為に行われた茶番である。

恐らく、いや、確実にクレマンティーヌはこの事を知らない。それは、あの時の脅え

の表情から見て取れる。絵図面を書いたのは、多分リリー・マルレーンだろう。そして、ニグンも事前に聞かされていた。自分達二人は、まんまと狐の狩り場におびき寄せられたのだ。ヴォーリアバニーの国への使者、それと同時にクレマンティーヌの保護。クレマンティーヌが勅使に選ばれた理由も、彼女の地位向上の目論見があつたのかもしれない。

漆黒聖典の二人は、背中に冷たさを感じていた。目の前に居る自分達の皇には、何一つとして勝て無いのだ。力でも知力でも。彼らに残された道は、頭を垂れ指示に従う事のみだった。



任務に対しての承諾を得、一同は別室へと移っていた。部屋の中には大きめのテーブルが置かれ、上には地図が広げられている。

「それで、うぬの国はどの辺りなのじゃ？」

合流したヴァイエストにリリー・マルレーンが問いかける。問われたヴァイエスト

は、リリー・マルレーンから視線を外し、地図の一点を指差した。

「この辺りの山際を中心とした地域です、陛下」

「フランスの南西、か」

示された地点を確認する様に、リリー・マルレーンが口を開く。

「その辺りですと、エルフの国が近いですな」

自身の記憶と重ね合わせながら、ニグンが補足を加える。

「はい。救って頂きたいのは、エルフ達からなのです」

ニグンの言葉を受け、ヴァイエストが敵の存在を示した。

「エルフか……」

リリー・マルレーンの眩きに

「エルフ全体、と言うよりも、エルフ王の魔の手、ではないですか？」

「は、はい。そうです！」

漆黒聖典隊長の言葉に、ヴァイエストが慌てたようにそれを肯定した。エルフの王と

言う言葉に反応し、リリー・マルレーンの眉がピクンと跳ねる

「ロン毛。エルフの王とは、小娘の？」

「はい。我らも正確には確認していませんが、先代の神官長様達の話す限り……」

番外席次の父親だと、と続く言葉を、漆黒聖典隊長はぼかして告げる。

「成程のう。我が法国としても、戦う理由はある訳じやな」

「ええ。多少強引な理由ではありませんが」

天井を見て呟くリリー・マルレーンに、ニグンが代表して答える。

「でもさあ。エルフと戦争つて、陛下が保護したエルフは大丈夫なの？ 同族と開戦し

たとたん裏切りつて線は？」

「そうじゃのう。雌猫の言も一理あるのう。ニグンよ、そこはどうなのじゃ？ 小娘から何ぞ聞いておらぬか？」

リリー・マルレーンの問いかけに、ニグンは暫し思い出す様に口を嚙み

「それは大丈夫かと。一応、陛下のご指示通り、意思確認は行いましたが、帰国を望んでいる者は皆無でしたので」

「左様か。怨まれておるのう、エルフ王」

そう言つてリリー・マルレーンはクツクツと笑う。

その時、何かを思いついたのか、ヴァイエストに問いかける。

「兎よ。うぬらは、エルフとの共存は可能か？ 無論、問題が解決した後の話じやが」

この言葉に虚を突かれたのか、ヴァイエストは言葉を失うが、慌てて返事を返す。

「か、可能だと思いません。確かにヴォーリアバニーとエルフは緊張状態にありますが、

我々としては、エルフと言う種には何ら恨みはありませんから。」

「うむ、良き種じやな。人も見習うべきじやな。そうは思わんか?」

リリー・マルレーンにそう訊ねられ、スレイン法国の者達は只黙る他無かった。リリー・マルレーンはその光景を見て苦笑いを浮かべながら、地図の一点を指差す。そこは、法国の西に位置する湖である。

「この湖に隣する場所に、エルフの国があるのじやな?」

「ええ、そうです。陛下」

ニグンが肯定するのを確認して、リリー・マルレーンは指を北へと移す。

「こちら側には、何があるのじや?」

エルフの国がある森林から、丘陵を挟んだ反対側。そこには、連なる山々が。

「そこは確か……風花の報告では、ダークエルフの国があつたはずですが」

ニグンの言葉に、リリー・マルレーンの肩が跳ねる。

「成程のう。ニグンよ、ダークエルフとのコンタクトは可能か?」

「ダークエルフとで御座いますか? 可能かと聞かれれば可能かと」

「ふむ」

リリー・マルレーンは、ここで一旦口を噤む。沈黙が支配する中、場の者達は法皇の考えが解らずに居た。

「雌猫。兎との同盟が成功したらば、法国経由でダークエルフの土地に入り、同様の提案

をしまいいれ」

「え？ どう言う事？」

あまりにもな話の展開に、クレマンティーヌは着いて行けず詳細の開示を迫る。場の混乱にそれもそうか、とリリー・マルレーンは地図の一点を指差す。

「エルフの国じゃ。ここを中心として、北にダークエルフの国。南にヴォーリアバニー。東にスレイン法国。一度に攻め入れれば、どうじゃ？」

「成程」

「戦にならない可能性もありますね」

「じゃろ」

クワイエツセの賛辞に、リリー・マルレーンは得意げに返す。だが、愉悦に浸る笑顔はすぐに消え、疲れたとばかりにリリー・マルレーンは会議を締へと展開して行く。

「まあ、情勢を鑑みれば、すぐに戦とはならんじやろう。エルフが大きく動いておる、と言う情報は上がって来てはおらんからな。じゃが、時間は有効に使わねばならぬ。雌猫、ロン毛、チャラ男、すぐに出立の準備を。同行者は陽光、風花から選抜せえ。妾は帝国へと入る。兎は妾の共を。ニグン、準備は任せる」

「御心のままに」

そう言葉を残し、クレマンティーヌ、漆黒聖典の二人は退出していった。部屋に残つ

たのは、リリー・マルレーン、ニグン、ヴァイエストの三人。会議は終了したのに、地
図へと視線を落とすリリー・マルレーンにニグンが問いかける。

「我が王は何がお望みで？」

ニグンの言葉に、リリー・マルレーンはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると

「知りたいか？」

「是非とも」

「ならば、今夜にでも執務室に来るが良い。上等な酒を持ってな」

そう言うに留まった。

魔女は静かに世界と寄り添う

会議が終り、数時間が経った。夜の闇が世界を支配する時間、法皇執務室のドアがノックされた。来訪したのはニグン。会議室での約束を果たしてもらいに来たのだ。入室の許可が下り、部屋へと一步を踏み入れる。

「やはり来たか」

「ええ。我が王の心の中、ぜひとも知りたく有りました」

ニグンの冗談、とも取れる言葉にリリー・マルレーンの頬が緩む。ニグンと言う男、硬苦しいだけでは無い様だ。

「で、土産は？」

遠慮のない言葉に、ニグンは右手に持つ物を掲げる。瓶に入れられた琥珀色の液体だ。詳細に言えば、蒸留酒。簡単に言えば、ウイスキー。

リリー・マルレーンはそれを受け取ると、ニグンにソファアへの着席を進め、虚空からグラスと氷を取り出した。その光景に、見慣れていないニグンは僅かに驚きを顕にするが、この者なら何でもアリ、と思ひ込みグラスを受け取る。御互いのグラスに、蒸留酒を注ぎ、喉を潤したところで、リリー・マルレーンは口を開く。

「それで、何を聞きたい？」

「まず最初に、あの時何を見ていたのですか？」

「あの時？ ああ、地図の話じゃな」

そう言うのと、テーブルに地図を広げる。そして、地図の二か所を順に指差した。

「王国と帝国、ですね」

「そうじゃ。この両国は戦争状態。間違い無いな」

「はい。元は一つの国でしたが、分裂してからずっと」

ニグンから話される現状に、リリー・マルレーンは一つ頷き

「法国としては、どう言う手を打っておる？」

「内々にはありますが、帝国側についております」

「と、言う事はじゃ。いずれ帝国に王国を吸収させると？」

「はい。先代の最高神官長は、そう考えていた様で」

この言葉に、リリー・マルレーンは苦い表情を作る。

「それはあ……無理じゃろう」

告げられた言葉に、ニグンは驚きを顔にした。その表情に満足したのか、リリー・マルレーンは地図の一点を指差す。

「アゼルリシア山脈、ですか？」

「うむ。王国を吸収するのは良からう。じゃが、治安管理や各都市の統治は誰がするのじゃ？ 帝国が人材過多と言うならば、妾の早とちりじゃが？」

「いえ、決してその様な訳では無い様ですが……」

「それにのう。王国側の貴族達は どうするのじゃ？」

ニグンは思い出す様に、一度目を閉じ

「恐らくではありますが、現皇帝が行った肅清が再び起こるか」と

「貴族の間引き、か」

「はい」

ニグンの言を聞き、今度はリリー・マルレーンが一度目を瞑る。

「しかし、それじゃと統治者が足りぬのでは無いか？」

「統治者、で御座いますか？」

「うむ。統治者が減れば、一人が統治する土地の面積が広がるじゃろ？」

「はい」

「広大な面積での農地管理。そこからもたらされる収穫による税政。出来るかのう」

ニグンには、答える事が出来ない。貴族の支配地での税収。全ての貴族が自分の支配地で、百パーセント回収出来ているかと言われれば、否である。誰かが税を誤魔化している可能性を無視出来ないからだ。リリー・マルレーンも同様の意見を持っていた。

「土地が広がり監視が手薄になれば、今以上に税を嘘吹く者達が出てこよう。そ奴らが、私服を肥やし行き着く結末は一つじゃぞ」

「反乱、ですか」

「うむ。彼奴等は革命と言うかも知れぬがな。そうなった時、帝国はどうする？」

「兵を挙げ、鎮圧するかと」

ニグンの言葉に、リリー・マルレーンは我が意を得たりと、地図の中央を指差す。

「アゼルリシア山脈？」

「そうじゃ。帝国の首都はここじゃ。ここから王国領に攻め込むとなると……」

言いながら、リリー・マルレーンの指はUの字を描く。

「成程」

「じゃろ。大回り過ぎるとは思わんか？」

「では、我が王。こちらから出兵しては？」

ニグンの指が、法国の北東を刺す。

「そこには？」

と言うリリー・マルレーンの問いかけに

「ここには帝国の要塞があります」

「ふむ。では……は？」

リリー・マルレーンの指が要塞の南を指し示す。

「やはり無理ですか。カツツエ平野の守りが薄くなりますな」

「カツツエ平野？」

「はい。アンデッドが無尽蔵に湧く場所です」

「物騒じゃのう。しかし、それならうぬの言う通り、手薄には出来んな」

「はい。しかし、我が王よ。帝国側に立って一体どう言うお考えが？」

リリー・マルレーンの問いかけに真剣に返す程、このウォーゲームの意味が解らなくなつて行く。だが、リリー・マルレーンはキョトンとした表情で

「意味は無いのう。本題はここからじゃし」

意地の悪い笑みを浮かべるのだった。その笑みは消える事無く、リリー・マルレーンの指は一点を指し示す。

「妾はここを獲るつもりじゃ」

「ここは……エ・ランテル」

ニグンの顔に驚きが張り付いた。それはそうだろう。この新しき王は、他国に戦を仕掛けると言っているのだ。それも、帝国と王国、二国を敵に回して。

「我が王よ、あなたが幾ら強大とは言え、二国を相手に戦など……」

ニグンは進言する。無謀であると。だが、そんな事はリリー・マルレーンも解つてい

る。

「気が早いとう。今すぐとは言うておらん」

「で、では？」

ニグンの疑問にリリー・マルレーンは指刺す事で答えを開示して行く。それは、エ・ランテルの街を中心に逆Y字を描く事から始まる。

「良いか？ 法国、帝国、王国が領土を分かつてはこの様になる。」

「はい」

「じゃがこれではエ・ランテルを中心に国境が犇めき合い、緊張が絶えん」

リリー・マルレーンが一旦言葉を切るが、ニグンは話にのめり込んでいるのか、頷きだけで答える。

「じゃからのう、此処に干渉地帯を作るのじゃ。東西南北に五十キロ程のな」

「直径百キロ……ですか」

「そうじゃ。そこに新たな、法国と最も友好な国を築き戦力を集中させるのじゃ」

「そ、そんな事が……」

出来るのか？とニグンは続ける。だが、リリー・マルレーンの返事は少し曖昧な物だった。

「タダでは国は作れん。新たな国の長には絶対的なカリスマが必要じゃからな」

「では……」

「うむ。妾が見続けている者が、そうなれば、良いのじやが」

「それでは、この話は？」

「まだ仮定の話じや」

そう聞いて、ニグンはどこかほっとした様に見えた。しかし、リリー・マルレーンの話は終わってはいない。後から思い出せば、これからの話の方が物騒な事だったとニグンは思い返す。

「しかしのう。王国にはちいと疲弊して貰いたいのう。少なくとも、王制がちゃんと機能するぐらいにはの」

「我が王よ。それは、王国貴族を間引きすると言う事で？」

「ニグンよ、うぬは物騒な思考の持ち主じやなあ」

そう言つて、グラスを片手にケラケラと笑う。だが、今回は前と違いその笑顔はかき消える。

「ニグンよ、まずは王国銀貨を集めよ」

「王国銀貨、で御座いますか？」

確認の言葉に、リリー・マルレーンは「左様」と返す

「妾は帝国へと入り、皇帝と茶番を演じる。其の者は風花から選べ。妾が時間を稼ぐ間

に、金工職人と鑄物職人を探させろ」

「金工職人と鑄物職人、で御座いますか？ 我が王よ、一体何をお考えで？」

ニグンの問いにリリー・マルレーンは「ふふん」と笑い

「決まっております。王国銀貨を創るのじやよ」

「銀貨を密造する御積りか！」

「左様。それも僅かに純度を下げてな。そうじやのう……十枚が十二枚になる程に」

「な！」

最早声も出なかった。銀貨十枚を十二枚にしても、型の代金、薪などの燃料代を考えれば損害の方が大きい。では、千枚、万枚と創った場合はどうだろう？ 答えは、莫大な儲けが出る、である。だが、この王が儲けの為にそんな事をするのだろうか？

「我が王よ、真意を伺いたい」

「そうじやな。これでは不親切じやな。良いか、出来るだけ多くの王国銀貨の純度を下げる。その半分ほどを流通させる。そして、時期が来たらこう囁くのじや。王国が秘密裏に銀貨の純度を下げている、とな」

「商人達はパニツクになるでしょうな」

「いや、それでも無かろう。彼奴等は両替に走るだけじや」

ニグンの理解が追いつかなくなっていた。神官と言う職務に、若いうちから付いてい

た事もあるのだろう。今のニグンは、法皇が語る腹黒い計画がまるで英雄譚の様に聞こえていた。それほどまでにのめり込んでいたのだ。

「これで困るのは、王国内で貯め込んでいた者達じゃよ。それでも銀貨程度では腹は痛そう無いじゃろうな」

「で、では……」

「これまでで一番被害をこうむっておるのは、王国の信用、と言うやつじゃ。王国の秘密裏に行つた純度の引き下げ。こんな物、嘘でも誠でも良い。所詮は話、言葉じゃ。しかし、銀貨の純度が下がっておるのは事実。人はどちらを信じるかのう」

まるで詐欺師の様な口ぶりで話す法皇に、ニグンの喉がゴクリと鳴った。王国の信頼の失墜、これが法皇の狙いだとニグンは確信した。だが、そうでは無かった。実際にはもつと恐ろしい物だった。

「そこでじゃー！」

そう言つてリリー・マルレーンは人差し指を一本立てた。

「信用が下がつた所で、法国内に残つた銀貨を市場にばら撒く。どうなると思うかや」

問われたニグンは、首を横に振る。解らないと。

「王国の貨幣価値の大暴落、じゃよ。誰も王国の銀貨を信用せん。最早、混ざり物の銀の価値しか無い物に変わっているから。それと同時に、何の嘘偽り無い金貨の価値

も、重さの価値へと変わる。王国は自国で通貨を作る事は出来ん様になった訳じゃない

「しかし、我が王よ。それで一体我々に何の理が?」

「鈍いのう。価値が下がろうが、ゴミと化そうが、金子きんすが無ければ市場は回らん。王国内では物々交換でしのげるかも知れんが、他国との流通はどうじゃ? そこで商人達が取る方法は一つじゃな。解るか?」

再度の問いに、ニグンは再び首を横に振る。

「信用ある他国の通貨を使う事じゃよ。交易通貨もその一つじゃな。じゃが、王国通貨では最早交易通貨へと両替は出来ん。金銀のインゴットで交換するしか無い。ならば、法国が買ってやろうでは無いか。とな」

「い、いや。我が王よ。理は一体どこに?」

「まだ判らんか? インゴットの値段は幾らじゃ? 相場? バカを言うな。こちらの言い値じゃろ。こちらは善意で助けてやるのじゃからのう」

「他国の経済を牛耳る、と言うことですか」

「左様」

「しかし我が王よ。銀貨はどうやって集めるので?」

ニグンが根源の疑問を提示する。この問いに、リリー・マルレーンは本日最大の笑みを見せ

「神殿があるじゃろうが。王国中の神殿で銀貨を集める様、水明聖典に勅命を出せ。幾ら頭脳明晰な人物が居ても、神殿が自国の経済を破綻させようとしているなど、絶対に考えつかんからな！」

そう言つてカラカラと笑う。

「しかし、我が王よ。王国には黄金と呼ばれる姫がおります」

「黄金じゃと？」

リリー・マルレーンの眉がピクリと跳ねる。どうやら少々機嫌を損ねた様だ。それに気付いているニグンは、怖れながらと言葉を口にする。

「何でも王国の黄金は、怪物と呼ばれる程の知恵者、と言つて噂で御座います」

リリー・マルレーンは怪物、と言つた言葉に反応する様にニヤリと笑みを形作る。

「ほーう。怪物かや。面白い、すこぶる面白い。黄金の姫か、黄金の魔女か……姫の知恵が勝つか、妾の腹黒さが勝つか。勝負じゃ！ ニグンよ、書状を回せ！ 帝国經由で王国へと向かう！ 妾の戴冠の挨拶と行こうでは無いか！」

「はっ！ 王の御心のままに」

死を呼ぶ凶鳥

再びの地カルネ村

カルネ村。そこは、のどかな空気が流れる開拓村だ。少し前までは、村と野の境界も無い様な発展途上の場所であったが、ある人物達との出会いによつて、その姿は様変わり遂げていた。村の外周を囲む様に高い外壁が築かれ、村の中央を横断する様にたわわに水を湛えた水路が走っている。言葉で伝えられれば、何の不思議も無い物だが、実際その眼にすれば、違和感を感じずにはいられない光景だ。

そびえ立つ外壁は全てが石造りであり、その一つ一つが相当の重さを有している。一体、何者が積み上げた物なのだろう？ 辺りを見回しても、それを成せる設備も人員も見当たらない。村を貫く水路にしてもそうだ。幅一メートル、深さ一メートルの円柱状に掘られた穴から、清水と呼んで良い程の透明な水がこんこんと湧き出しているのだ。たまたま浅い所に地下水が？ バカを言うな、そうであったなら、ここは湿地帯と化しているのだ。

そんな異常な発展を遂げるカルネ村が、朝早くから緊張を強いられていた。その理由は、来訪者である。それも、この村と因縁深いスレイン法国からの。村の南門に村の男

性陣が集まり、フランスの代表と思える男と言葉を交わしていた。

「フランスが一体何の用ですか？」

村長が警戒感を隠しめせず、男に問う。だが男は瞳を閉じ、その警戒感も、そこから漏れ出る憎悪すらも受け止める。男の名はイーサ・ブロン・ササ。風花聖典隊長の地位に付く人物である。

「ここで、待ち合わせをしております」

イーサは、いや、かの人物のようにイサブロウと呼ぶべきか？それはともかく、村長の問いに簡潔に答えを述べる。しかし、イサブロウの答えは簡潔すぎる。これでは、意味は理解出来ても話は通じない。これでは、追い返す事も迎え入れる事も困難である。その事にすぐに気付いたのか、イサブロウは補足を入れる様に口を開く。

「この村と我が国において、遺恨があるのは重々承知しております。ですが、我々は命令されて来ているのです。カルネ村のエモット家まで、迎えに来い、と」

「エモット家、ですと？」

「ええ」

村長は右手を顎に当て考える仕草をした後、村の男衆の一人にエンリ・エモットを呼ぶ様指示を出す。ほどなくして件の少女が姿を見せる。二体のゴブリンを引連れて。到着したのは良いが、そうとう急いで来たのだろうか？肩で大きく息をしていた。荒く

短い呼吸を数回続け、やっとの事でエンリは言葉を絞り出す。

「はあはあ、そんな、ちようさん。い、いったい、なにが？」

そのあまりにもな慌てっぷりに、村長は落ち着けと諭し暫しの時間を設ける。徐々に呼吸も納まり、ようやく本題へと進む。

「エンリ。この者達が、お前の家で待ち合わせをしていると言うのだが、心当たりはあるか？」

村長はそう切り出す、当然エンリには心当たりなど無い。首を横に振るエンリだが、イサブロウの興味は別の所にあつた。

「ゴプリン、ですか？　あなたが使役しているのです？」

丁寧とも、ぶっきらぼうとも取れる言葉で問いかける。

「使役？　ち、違います！　このゴプリンさんは、私達の家族です！」

使役、と言う言葉が感に障つたのか、エンリは感情を顕わにする。

「家族……。ならば、共存している？」

「そうです！」

噛みつくエンリに、イサブロウは成程、と現状の確認を終える。

「すみませんね、お嬢さん。フランスの未来を思うと、どうしても言う事柄に敏感でね」
フランスの未来、その言葉がどうにも気なり、エンリは問いかけた。イサブロウは、包み

隠さず新たな法国を語る。その事實は、カルネ村の住人達に大きな衝撃を与える結果となった。

「ほ、本当に人間至上主義を捨てると？」

村長は驚きと共に問いかける。

「誠に。この教義に反する事あれば、首が飛ぶでしょうからな」

この言葉で、さらには場は騒然となる。今まで、亜人種や異形種を進んで狩っていたスレイン法国が、全ての種の保護に転換したのだ。そればかりか、他の種族と仲良く出来ない者は殺される、と言う。一概には信じられない事だった。

イサブロウもそれに気付いたのか、後に停車する馬車に向け手を叩く。その音に反応する様に、一団の中で最も豪華な馬車の扉が開き、三人の女性が姿を現す。その者達を目にし、カルネ村の者達は再度驚かされた。三名の内訳は、エルフが二人、ヴォーリアバニーが一名だったからだ。その人で無い者達が、一番豪華な馬車から顔を出した。これは法国内で、彼女達が一定以上の役職についている事を現していた。法国の方向転換、最早信じる他無いのだろう。そこまで理解出来た所で、話は最初の事柄に戻るのだった。

「では、案内していただけますかな？」

イサブロウはそう言うが、エンリにとっては寝耳に水なのである。

「それで、一体誰が居ると言うんですか？」

「……………陛下です」

「はい？」

「スレイン法国 法皇 リリー・マルレーン陛下です」

「えー！！！」

一同から驚きの声上がる。

「い、居ません！ 大体、此処を何処だと思っっているんですか！ ただの開拓村ですよ！」

エンリは事実を語る。だが、イサブロウも引き下がれはしない。

「しかし、陛下からの直々の御言葉。間違いは無いかと」

最早、押し問答になっていた。

だがこの一件、カルネ村側が折れる結果となって事態は収拾する

「はあ。そんなに非常識な方なんですか」

自宅へ向かう道中で、イサブロウから聞かされたリリー・マルレーンの印象はコレだった。その言葉にヴォーリアバニーのヴァイエストは苦笑いを浮かべていたが。

エンリは頭の中でリリー・マルレーンの人と成りを想像してみる。その人物象は、あ
る一人の人物と重なる。だが、あんなはた迷惑な人間が二人も居るのだろうか？ エンリ

の中での結論は、居ない、であつた。あんな非常識でお騒がせな人物が二人も居てたまるか！と言う思いも乗せて。そんな会話をしながら歩いていると、眼前にエモツト家が見えて来た。

家の前に置いた、木製の大型テーブルには食事を終えたゴブリン達がくつろいでいる。そこにはイサブロウが言う、法皇なる人物の姿は無い。エンリは胸を張り、「ほらね」と諫め様と口を開く。が、視線の端が僅かに動いた気がした。いや、実際に何かが動いた。エンリはそれを確認する様に視界を巡らせる。そこには、見知つた人物が自分の朝食をパクついていた。

「ビー！」

ビクトーリア様！とエンリが叫ぼうとした瞬間、隣の男の声が先に響く。

「陛下！」

「へ？」

そう、「へ？」である。今、隣の男は何と言つたのか？自分の耳が悪くなければ、陛下、と叫んだ様に聞こえた。いや、間違い無く陛下と叫んだのだ。しかし、あそこで勝手に朝食を食べているのは、間違い無くビクトーリアである。そう、煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイム様。この村の救世主の一人。エンリの脳裏に先程の思考が蘇る。あんな非常識でお騒がせな人物が二人も居てたまるか！そう、二人居なかつたのであ

る。

「ええー……」

その声が聞こえたのか、ビクトーリアの視線がこちらへと向けられる。その黄金の瞳にエンリを確認したビクトーリアは、木製のスプーンを口に含んだまま手招きをしていた。エンリは一瞬無視してやろうかと言う思いが芽生えたが、かの御仁は救世主様、そんな訳にも行かず、よろよると近寄って行く。文句の一つでも言ってやろうとその口を開くが、言葉を発するのはビクトーリアの方が早かった。

「おかわり」

そう言つて茶碗を差し出して来た。エンリは、溜息を吐きつつそれを受け取り、スプをよそりに台所へと入つて行つたのだった。



「はー」

「何じゃエンリ。溜息を吐くと、幸せが逃げるぞ」

無遠慮にそんな事を言うビクトーリアに、エンリは唇を尖らせ

「もう。でも、ビクトーリア様つて本当に法皇陛下なのですか？」

嫌味混じりに質問をする。この問いにビクトーリアは暫し悩む様な仕草をし、事のあらましを語る

「ええっ！ なつちやつたんですか？ おおさまに？」

「そうじゃ」

平然と答えるビクトーリアに、頭を抱えるエンリ。

「でもお、ビッチのお姉ちゃん。おおさまつて、簡単になれるの？」

ビクトーリアの膝に抱かれるネムが、素朴な質問を口にする。問われたビクトーリアは、青天の空を見上げながら

「なれるのう」

簡潔に言い切った。これを聞いたイサブロウ、ヴァイエスト、二人のエルフは、いやいやと首を横に振る。

「すごーい！」と諸手を上げ、驚きを頭にするネム。だが、エンリは少し表情に影を覗かせ

「ビクトーリア様は、法国をどうするんですか？」

と、問いかけて来た。ビクトーリアは、エンリとネムの頭を交互に撫で、その瞳にイ

サブロウを捉えながら

「もう二度と、馬鹿共が馬鹿をやらん様に、かの」

そう言うに留まった。それだけでエンリには全てが理解出来た。ビクトーリアは、二度とこの村の様な悲劇を起こさせない、と暗に言っている事に。

「お願いしますね。陛下」

「ふん。うぬに陛下などと言われると、むず痒いわ。いつも通り呼んでくりやれ」

「ふふ。はい、ビクトーリア様」

「ここで一旦言葉を切ると、ビクトーリアは周りに視線を巡らせる。

「問題無く行っている様じゃな。ゴ布林共はどうじゃ？ 仲良くやつておるか？」

「はい。皆さんは、家族ですから」

「左様か。ネムはどうじゃ？ ぬえは息災か？」

「うん！ いつも元気に走り回ってるよ！」

ネムの元気の良い返事を聞き、ビクトーリアはカラカラと笑う。

その後、視線をゴ布林達に向けると

「リーダーは居るかや」

と、問いかける。

「へい。俺がリーダーですが」

呼ばれ、一体のゴブリンが一步前に出る。

「うむ。名は？」

「ジユゲムと申しやす」

「良き名じや」

そう言うのと、じつとジユゲムの瞳を見つめる。

「ジユゲム。うぬは、エンリの危機に命を捨てられるか？」

「あたりめえですぜ！」

「本当じやな？ それはうぬらの総意と取っても良いな？」

ビクトーリアは、二つの質問を投げかけた。その問いを、当然の事とジユゲムは頷く。

その仕草に満足したのか、ビクトーリアは一つのアイテムをエンリに差し出した。

「これは……」

エンリが不思議そうに、それを眺める。それもそうだろう。ビクトーリアが差し出したアイテムは、エンリが以前貰った物と同一の物、ゴブリン将軍の角笛だったからだ。

「もし妾が居らぬ時、この村が脅威に襲われたら使うが良い。使用上の注意は一点のみ。

こ奴らが全滅する前に使う様に。良いな」

ゴブリン達に視線を移しながら、ビクトーリアは呟く。

「は、はい」

「まあ、ぬえも居^おるし、滅多な事では使う機^し会は無いと思うがな」
そう言うビクトリアの瞳は、爬虫類を思わせる物へと変化していた。

呪いの対価

バハルス帝国皇帝、鮮血帝とも呼ばれるジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス。現在彼は、自室のソファアールにどっかりと腰を下ろし、ある書簡を眺めていた。

「クソツッ！」

一様に読み終えた書簡を、忌々しげに投げ捨てる。

「何が法皇だ！ 奴らは一体、何が狙いだ！ 爺！」

いらつきを隠しもせず、ジルクニフはある一人の人物に呼びかける。

帝国首席宮廷魔法使い件、帝国魔法省最高責任者 フールーダ・パラダイン。真っ白で長い髪と鬚が、いかにもな魔法使いを現す高齢の男だ。実質その年齢は、二百歳とも二百五十歳とも言われている。

「ふおふおふお。何が狙いかは解りませんが……そう気を荒げなさるな、陛下。して、書簡には何と？」

フールーダは、右手で鬚を撫でながら問いかけて来る。その余裕を持った態度が、さらにジルクニフを苛立たせる。

「挨拶に来るそつだ」

「挨拶、ですと?」

「ああ。戴冠の挨拶だそうだ。クソツ!」

フルーダはジルクニフの姿をその眼に留まらせながら

「来ると言うならば、お手並み拝見ですな。あの神様狂いの者達が、どんな一手を打ってくるのか……違いますか? 陛下」

茶化す様に言葉を締めるのだった。



ガタゴトと車軸を軋ませながら、法国の一団は帝国へと入っていた。法皇リリー・マルレーンは、馬車の窓から流れ行く市街の光景を見つめていた。

「良い街じゃなあ」

ポツリと呟いた言葉に、風花聖典隊長のイサブロウが受け取る様に答える。

「ええ、まあ。現皇帝の政策が身を結んだ結果ですね」

「貴族の間引き、か?」

「ええ。それだけではありませんが」

イサブロウの言葉に、リリー・マルレーンは興味有りそうに右の眦まなじりを僅かに上げると「他には何を？」

「そうですね。平民から騎士階級への取り立て、なども行つた様ですね」

この言葉に、リリー・マルレーンは一気に興味が失せたと言わんばかりに、視線を再び街へと戻し

「その程度か。皇帝とやらでも……………底が知れるのう」

ポツリと、そんな言葉を零した。その言葉は、皇帝と言う一個人に充てた物か？それとも、帝国と言う国を捉えた物なのか？はたまた、この世界全てに放たれた侮蔑の言葉か？馬車に同乗する者達には、それを選択する事は出来なかつた。

そんな重苦しい空気が支配する馬車は、市街地を抜け王城へと到着する。三台の馬車と、六頭の馬に分散して乗っていた風花聖典の隊員達が先に城へと入り、法皇の乗る馬車を迎える。その中心には帝国側で選抜された者達の姿もあつた。

秘書官　ロウネ・ヴァミリネン。雷光、激風、重爆と呼ばれる帝国四騎士の内の三人。そして、数名の侍女達。

馬車はゆつくりと城門をくぐり、隊員達の前に横付けで止められた。居並ぶ隊員達の中で、一番地位の高い者が一步前に出、法皇の乗る馬車の扉を開く。最初に降り立つの

は、風花聖典隊長 イーサ・ブロン・ササ。次はエルフの女性二人、ヴォーリアバニーのヴァイエスト。

ちなみに、三人の服装はリリー・マルレーンと同じデザインの法服である。

そして、最後に法皇リリー・マルレーン。この一団を見て、帝国側から引き攣った様な驚きが漏れた。それは、法皇の威厳………と云う物では無い。一行の人種構成からの物であった。法皇の馬車に同席していた者達は、法皇を除きエルフが二人にヴォーリアバニーが一人、そして人間が一人。最早信じるしか無いのだ。法国の軌道修正を。

「ようこそ御出で下さいました、法皇陛下。私、案内を仰せ使いました秘書官のロウネ・ヴァミリネンと申します」

帝国を代表してロウネが挨拶を口にする。

「うむ。急な来訪に対応して頂き、貴国に感謝を」

そう言つてリリー・マルレーンは、右手を僅かに上げた。簡単な挨拶を終え、ロウネは「こちらへ」と貴賓室への案内を開始する。帝国側の者達は二列に並び、法皇の道を作る。その中心を一行が歩いて行く。

その歩が中程まで来た時、リリー・マルレーンの動きが止まり、ある人物をその黄金の瞳に映す。その人物とは、帝国四騎士の内の一人 重爆 レイナース・ロックブルズ。

整った顔立ちに金糸の様な髪、そのプロポーションは鎧で隠れて見えないが、僅かに覗くふとももから察するに、魅力的な物だろう。そんなレイナースの唯一の違和感。まるで顔の右半分を隠す様に降ろされている前髪だ。リリー・マルレーンはその部分を凝視し、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると、まるで何事も無かった様に歩みを再開する。残されたレイナースの顔には、屈辱の表情が浮かんでいた。



貴賓室に通され、一行はソファーに腰を降ろす。その中で、先程のリリー・マルレーンの行動が議題に上がる。

「陛下。先ほどのアレは一体?」

イサブロウの問いかけに、リリー・マルレーンは眉をピクリと跳ねさせる。だが、その口は開かれない。

「陛下。イサブロウ様がお聞きになっていただけますが?」

気を使ったのか、ヴァイエストが注意を促す。だが、再度眉を跳ねさせただけで、一

行に口を開こうとはしない。その時、ドアをノックする音が響く。その音に反応する様に、エルフの一人が立ち上がりドアを開けた。そこには、先程列に並んでいた女、レイナースの姿があった。

「レイナース・ロックブルズ、御呼びとの事で参上致しました」

言葉こそ礼を取ったものだが、醸し出す雰囲気は険悪な物だ。それは当然の事なのだが、法皇リリー・マルレーンには通じない。なにせ、この法皇陛下は、意地が悪いのだ。リリー・マルレーンは、レイナースが入室しドアが閉まるのを確認すると

「娘。うぬは何故にそんなに腐敗臭を楨散らかせておるのじゃ？ 香水代わりか？ 悪趣味じゃぞ」

無作法にも、そう言って切つて捨てる。この言葉に、レイナースは苛立ちを覚えながらも、相手の立場を考えぐつと言葉を飲み込む。それが表情に出るのを嫌ったのか、レイナースはハンカチを取り出すと顔の右側に充てた。その動作を見て、リリー・マルレーンの瞳がすうつと細められる。

「娘。うぬは何をしたのじゃ？」

リリー・マルレーンの声に、レイナースの心拍が上った。

「うぬの顔から染み出しておる物。膿じゃろ。病気には見えんし、そう言う種族だと言うなら良いが、うぬが人であるならば……それは呪いの類では無いか？」

レイナースは息を飲む。自分はどうかしらいいのだろうか？相手はスレイン王国のトップである。六大神が降臨した国ならば、帝国や王国では知られていない様な術式が存在していてもおかしくは無いのだ。すぐにでも縋りたい気持ちも、レイナースはぐつと押し殺す。相手は法国、交渉相手なのだ。いくら自身の身を第一に、と言う契約を皇帝と結んでいるとはいえ、自身の行いを交渉のテーブルに乗せられるのは避けたい。ぐつと唇を噛み耐えるレイナースに、リリー・マルレーンが助け船とも取れる言葉を投げかける。

「難しい顔をしておるのう。心配せんでも、うぬの事柄に関しては、妾の知的好奇心じゃ。帝国へは迷惑をかけん事を誓うぞ。ほれ、話してみよ」

だが、レイナースの表情は硬い。まるで、心の中の葛藤が透けて見える様だ。

リリー・マルレーンは、何度も同じ内容の言葉を繰り返す。すると、徐々にレイナースの表情が軟化して行くのが解る。後ひと押し、そうリリー・マルレーンが確信した瞬間、身内から反逆者が現れた。

「しかし陛下。彼女の状態が呪いの類だとすれば、解呪は困難なのでは？ エリートとして言わせていただきますと、その様な呪法は数が限られております。ましてや、呪うのでは無く、解呪となればさらに……」

イサブロウが無表情で口を出して来た。その瞬間リリー・マルレーンの瞳は、鋭くイ

サブロウを睨みつける。その意味は、要らん事を言うな！である。だが、当の本人は涼しい顔だ。

リリー・マルレーンは思う。最近のコイツ等は生意気だと。特にニグン、イサブロウ、ゴリラの三人は。しかし、リリー・マルレーンは大人だ。文句を言いたいのをグツと我慢する。自分で自分を褒めてやりたい。出来た大人、だと。だが、ここで自画自賛しても仕方が無い。リリー・マルレーンは本題へと戻る。

「しかしイサブロウ。呪いを解くと言つても、解呪の方法はさまざまじゃろう。まずは、どの様な呪いを受けたかじゃ。じゃろ？」

「さようですな。レイナース殿、でしたか？ 詳しく説明願えますかな？」

レイナースは、なし崩し的に事情を話す展開へと持つて行かれる。この功績により、大暴落したイサブロウの株価は僅かに上昇したのだった。

この事により、レイナースは覚悟を決めたのか、ポツリポツリと自らの過去を語り出した。

要約するところである。レイナースは、貴族ロックブルズ家の令嬢として産まれた。ある時、領地内ではモンスターの出現が頻繁する様になった。その時、剣に覚えがあったレイナースはモンスター退治を買って出たのだった。何体ものモンスターを狩り、徐々に領地は平穏を取り戻して行つた。そして、一体のモンスターと出会う。レイナー

スは何とかそのモンスターの討伐を成功させるが、モンスターが死に際に放った言葉により、自身の身体は呪いに侵されたと言う。

この説明を聞き、リリー・マルレーンは一つの仮説を展開する。

「うーむ。これは恐らく……………呪、じやな」

「呪？」

全員の声が重なった。その声を満足そうに聞きながら頬杖を付いたリリー・マルレーンは、持論を展開して行く。

「この世、いや、国では、どんな物も呪いと言うかも知れぬが、妾の世、国では呪いとは似ている様で違う物なのじやよ」

この言葉に、レイナースの喉がゴクリと鳴る。

「呪いとは、まじないや祈祷によって起こされる現象を指す。方や呪と呼ばれる物は、その身では無く、魂を縛る物じや。娘の受けた物が呪ならば、解呪はほぼ不可能じやな」

「そ、そんな！」

悲痛な声がレイナースから漏れる。だが、リリー・マルレーンはそれを鼻で笑う。

「実際の所その状態は、うぬ自身が招き入れた物では無いか」

「何故です！」

「何故も何も、うぬが好きで呪われたのじやろ？」

リリー・マルレーンの、この言葉によつて場が騒然となつた。それはそうだろう、リリー・マルレーンの言葉は荒唐無稽で無茶苦茶な物なのだから。誰が好き好んで呪われると言ふのだろうか？ 誰もが疑問を抱き、視線をリリー・マルレーンへと向ける。

「うん？ 説明が必要かや？」

この言葉に全員が頷く事で肯定の意を示す。それを見つめ、リリー・マルレーンはニンマリと意地の悪い笑みを浮かべ

「うぬらは感が悪いのう。自ら呪いを受け入れたと、娘は最初から言うてるではないか」
同じ言葉を繰り返す。だが、場の全員は理解が出来ていないようだ。リリー・マルレーンは溜息を一つ吐くと、再び口を開く。

「この娘は何と言つておつた？ 解らぬか？ この娘はこう言つた。自らモンスター退治を買つて出た、と」

確かにそうだ。レイナースは確かにそう言つたが、それが何だと言ふのだろうか。リリー・マルレーンは、皆の困惑する表情を見つめ、それすらも楽しむ様に言葉を続ける。「戦士、騎士は戦となれば、死を覚悟して戦場に立つ。未知を求める者は、その探求に命を掛ける。ならば、うぬはどうじゃ？ モンスターを狩る時、死を覚悟して立ちあはせんかつたのか？」

この質問とも取れる言葉にレイナースは

「た、確かに私は領民の為に命を掛けて立ちました」

「ならば本望じやろう。まあ、呪いだけですんだのじゃ、結果オーライ。良かったのう」
真面目な空気は何処へやら、最早面倒臭いとも言う様にリリー・マルレーンは締めに入る。だが、この行為はレイナースの感情に火を付ける行為だ。

「ふざけているのですか!」

テーブルに拳を叩きつけ、レイナースが激昂する。しかし、その姿を見てもリリー・マルレーンの表情は涼しい物だ。むしろ、この状況を作ろうとしていたかの様にも思える。

「ふざける? ふざけた事を言うておるのは、うぬじやろう? 領民の為? その為に、うぬはどれだけの命を奪った? その代償としての呪いじゃ。名声を得たのじゃ、我慢せえ」

リリー・マルレーンはキツパリと言い切った。

「そんな!」

ただ、レイナースとて引き下がる事は出来ない。今までの言葉を聞く限り、リリー・マルレーンは何か情報を持っていると思われるからだ。

「何じゃ。まあだ呪いを解きたいと思うておるのか? もう、諦めえ」

「嫌です!」

詰め寄るレイナースに、リリー・マルレーンは本日何度目かの溜息を吐きつつ

「うぬが殺したモンスターは、死に際に呪しゅを放った。相違無いな？」

「は、はい。」

諭すように言葉を投げかける。

「この場合、呪しゅの対価は、そのモンスターの命じゃ。命その物を対価とし、うぬに呪しゅを掛けた」

レイナースは、コクリと頷く。

「これを解呪しようとするれば、同等かそれ以上の対価が必要となるのじゃが………無理じゃろ？ 命以上の対価など存在せんぞ。結果、妾的に解呪は無理と判断したのじゃ。はい、しゅうりょー！」

パチパチと手を叩きながら、リリー・マルレーンは締め姿勢を取った。その瞬間、レイナースの表情に絶望が浮かぶその顔を見て、またもやリリー・マルレーンの口からは溜息が洩れる。本日は、溜息のバーゲンセールだ。

「娘、良く聞け。可能性はほぼ無いじゃろうが、打てる手はある。それに賭けてみるかや？」

この言葉に、レイナースの表情が一気に輝き

「お願いしますー！」

大きな声で、そう返事を返して来たのだった。

故郷の森

「話が纏まった所で、早速……………と云いたいところじゃが。イサブロウ」

「何でしょう、陛下？」

リリー・マルレーンの突然の呼びかけにも、イサブロウは平然と応える。

「皇帝との接見の時間は？」

「明日の正午。昼食会からとなります」

その言葉を聞き、リリー・マルレーンは一度窓越しに空を見つめ

「時間にして二十時間弱。日暮れからを見越せば、僅か数時間か……」

呟きながら虚空に手を入れ、ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡を取り出す。

「娘。うぬの生まれは、城から見てどちらの方角じゃ？」

「は、はい。北になります」

リリー・マルレーンが、あまりに自然に虚空からアイテムを取り出すのを見て、レイナスは若干あつけに取られていた。その為、反応が若干遅れる。

リリー・マルレーンの指が、ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡の上で走り、地域を狭めて行く。だが、土地感の無いリリー・マルレーンに限界が訪れる。ミラー・オブ・リモート・ビューイングの鏡が帝国の北部を

映し出す。それを見つめながらリリー・マルレーンは首を傾げ立ちあがると、レイナーズの横に移動した。

「ここからは、うぬの案内が必要じゃ。しかと見よ」

そう言つて、遠隔視の鏡を傾ける。レイナーズは見せられる光景に驚きながらも、場所を狭めて行く。だがその言葉はたどたどしく、いまいち要領を得て来ない。リリー・マルレーンは眼を細め、レイナーズを見つめた。

「曖昧な説明じやのう」

「す、すみません」

レイナーズは、リリー・マルレーンの一言に頭を垂らす。その行動に何かを感じたのか、リリー・マルレーンはレイナーズの腕を掴み

「へ、陛下!」

「遠慮して離れて居るから見えんのじゃ。近こう寄つて案内せい」

そう言つて、頬が触れる距離まで引き寄せる。しかし、この行動に戸惑つたのはレイナーズ。

「へ、陛下! 匂いが! 膿が!」

自身のコンプレックが、リリー・マルレーンの不快感を誘うと考えたレイナーズは、必死に距離を取ろうとする。だが、リリー・マルレーンは100Lvプレイヤー、レイナー

ス程度ではどうする事も出来はしない。

「なんじや、妾と触れ合うのは嫌か？」

ブスリと表情を変え、レイナースに問いかける。この言葉に、レイナースは困惑する。自分の隣に座る、この者は一体何なのか？と。どう言う思考で行動しているのか？と。困り顔のレイナースに、リリー・マルレーンはさらに追い討ちを掛ける。レイナースの左頬に、自身の右頬を密着させ頬ずりをし始めたのだ。

「へ、陛下。御止め下さい！ 匂いが移ります！」

「妾はそんな事気にはせん！」

言いながら太ももを絡みつかせる。だが、そんなおふぎけを咎める人物も此処にいた。

「陛下。おふぎけも度を越せば嫌がらせと取られますが」

イサブロウがやんわりと窘める。しかしこの言葉が、ヴァイエストとエルフ二人に溜息をもたらす。彼女達は知っていたのだ。これから始まる茶番劇を。

「何じやイサブロウ。何時も通り生意気じゃのう。そんなに妾に意見が言いたいのなら、その権利の代わりに、おぬしの給金は今日から角砂糖じゃ。ははっ！」

「いえ。ドーナッツよりも砂糖の方が、値が張りますが？」

「何じやと！ これは金の匂いがするのお」

に程近い平野だった。皆一様に、無言で辺りに視線を巡らせる。そんな中、口火を切ったのはレイナースだった。

「ここは……私の生家から馬で半日程の森ですね」

ポツリと呟いたその言葉を受け止め、リリー・マルレーンは言葉を返す。

「ふむ。この辺りで、件のモンスターと出会ったのかや？」

「は、はい。この森の奥になります」

リリー・マルレーンは確認を終えると、虚空から一本の刀を取り出しヴァイエストへと渡した。それは、ククリ刀と呼ばれる幅広で湾曲した片手刀。ヴァイエストは、それを受け取ると当然と言った風体で一番先に森へと入って行った。続き、リリー・マルレーンとレイナースも森へと立ち入る。

先頭を行くヴァイエストは、道を作る為、木々を伐採しながら進む。その額には汗が滲み、法衣も邪魔なため現在着てはいない。無防備に思えるかも知れないが、現在ヴァイエストが纏っている、ワンピース水着やレオタードを連想せるインナーは、リリー・マルレーンの所有物で、その防御力はこの世界のスケイルメイル以上の強度を持つ物だ。どれほど奥へと立ち入っただろうか？リリー・マルレーンは不意にレイナースへ言葉を投げかける。

「娘。うぬに呪いを掛けたモンスターは、一体どう言った物じゃ？」

「は、はい。恐らくは、ハーピーかと……」

レイナースは曖昧ながら、種族名を口にする。曖昧な種族名。これはレイナースの無知から来る物では無い。種の特定とは、それほど困難な物なのだ。ヴァイエストを取つてもそうだ。初見で彼女がラビットマンなのか、ヴォーリアバニーであるのか特定は非常に難しい。それほどに、この世界のモンスター達は亜種が多いと言つてもいいからだ。だからこそ、レイナースは曖昧にハーピー系の魔物だと言つたのである。だが、その言葉にリリー・マルレーンは首を傾げる。

「如何致しました？ 陛下」

疲れたのか、木を打ち払う行動を一時中断していたヴァイエストが問いかける。

「うん？ ハーピーのう……」

そう口にしながら、リリー・マルレーンは自身の知識をフル回転させる。YGGDRASIL。ゲーム内のモンスターとしてのハーピー。リアルでの伝記、伝承として語られるハーピー。様々な事柄を推考し、答えが導き出される。

「娘。本当にハーピーだったのかや？」

「どう言う事、でしょうか？」

リリー・マルレーンは、一度表情を引き締めると

「ハーピーと言う種は、その発生からも総じて、上等な者達では無い。ほぼほぼ知性がそ

ぎ取られ、本能で生きておる様な奴らじゃ」

「はい」

「確かにハーピーは呪いの類を使う。じゃが、それは身体や精神に機能する物じゃ。うぬの受けた物を考えると、ちいと度が過ぎておると思うのじゃよ」

リリー・マルレーンのこの考察に、レイナーズの喉がゴクリと鳴った

「うぬの解呪に関して妾は一度うぬを殺し、復活させる事を考えた。じゃが、実際にその状態を見るに、その呪いは魂レベルでうぬを縛っておる。死でもって納めるならば、転生以外呪いを解く方法は無いと思いつたのじゃよ」

リリー・マルレーンの物騒な考察に、誰も口を開けなかつた。只一心に、その言葉に耳を傾ける。

「じゃが、今妾が思っておる者じゃとしたら……うぬの呪い、何とかなるかも知れぬ」

「ほ、本当ですか!」

リリー・マルレーンの言葉に、レイナーズは喜びの驚きを表す。

「うむ。うぬらも知っておるじゃろうが、魔法と呪いは表裏一体、同じ物とも言えるじゃろ?」

「はむ」

「高位の魔法を行使しようと思えば、それなりの力量と知識が必要となる」

リリー・マルレーンの言葉に、二人は頷く事で答える。

「ならば、呪いはどうじゃ？ 呪いも同位であろう？ いや、呪いの方が魔法よりも複雑じゃろ。という事はじゃ、高位の呪いを行使用する者は、知識も高い者となる」

リリー・マルレーンが持論を展開して行くが、話の流れは理解出来ても、なかなか本題が見えては来ない。恐らく、この展開を安心して聞いていられるのは、ナザリックの者達の他には、番外席次とニグンのみだろう。だからこそ、レイナースの表情は徐々に不安を現して行く。しかし、それすらもリリー・マルレーンの楽しみの内なのだ。

そんな砂漠の中で一粒の宝石を探す様な話の中、レイナースの態度が急変する。

「へ、陛下！ 此処です！ この辺りです！」

声を張り上げ、目的の場所だと宣言する。その場所は、森の中として考えると一種異様な場所だった。レイナースが呪いを受けてから、かなりの年月が経過している。実際にヴァイエストが木々を立ち切り、此処まで進んで来たことから、森の成長は見て取れた。

だが今居る場所は、周りと比べて木々の成長が遅い様に見える。下草を見ても、この場所だけ手入れがされていたかのように茂ってはいないのだ。その周りとの差異を見つめりリー・マルレーンの口角が上がって行く。その表情は確実に何かを感じ取っていた。

「娘。これは吉兆かもしれないぞ」

「陛下？」

レイナースとヴァイエストの声が重なる。それほどに、リリー・マルレーンの顔には邪悪とも取れる愉悅が漏れていた。その表情を張り付かせながら、ゆつくりと円を描く様にリリー・マルレーンは場を歩く。一周した後、荒地の中心に立ち

「タナトス」

呟く様に呼びかける。その声に呼応し、リリー・マルレーンの影から女性が姿を現した。褐色の肌に銀色の髪。

「タナトス参上しました。ビクトーリア様」

この光景と、タナトスが口にした言葉を聞き、二人の表情が固まる。影から出現した女性は何者なのだろうか？そして、その女性が口にした名前。ほんの僅かな可能性に思い至り、レイナースの背筋に冷たい物が走った。しかし脳裏によぎった人物ならば、自分の呪いを解くと言う言葉にも確信が持てる。レイナースはあえて口を噤み、目の前の人物達を見守る事にした。

「タナトス、気配を探れ」

「それは隠者を探すと言う事で？」

「違う。どちらかと言えば、^{「イエスト」}幽霊じやな」

「畏まりました。精霊探査」
センシング・マインド

タナトスが探知魔法を展開する。

——センシング・マインド 精霊探査。YGGDRASILにおいて、死霊系の命を持たないモンスターの有無を感知する魔法である。逆の探知魔法として生命探知ディテクトラフの魔法が存在する——

「発見致しました」

そう言つてタナトスは一本の木を指差した。

「間違いは無いか?」

「はい。此処に眠る死霊は、その一体のみです」

リリー・マルレーンは、タナトスの言葉に一つ頷き

「復活を」

次の指示を短い言葉で告げる。主の言葉を受け取り、タナトスは腰にぶら下げた十本程の短杖ワンドの中から一本を手にとった。

「最上級で宜しいですか?」

「うむ」

リリー・マルレーンの返事と共に、タナトスは短杖ワンドを振るう。場が静寂に包まれ、そ

の中を小さな光の粒が浮遊する。徐々に光の粒は数を増し、一点に集約して行く。その集まりは徐々に形を変え、人型を形作って行く。その光が収まった時、そこには一体のモンスターが存在していた。

白き凶鳥の女王

姿を現した人型を、リリー・マルレーンは興味深げに見つめていた。その行動は他の者達も同様であり、皆一様に視線をその人型へと集中している。

（ふむ。身体的には人間種と変ら無いな。乳房も二つだし……乳首も存在しているつと。手足の形状も同じ。顔つきも同様。違う個所わあ……頭部から生えた一對の羽。尾骶骨辺りから生える鳥の様な尻尾？ くらいか？ いや、意外に下の毛が濃いな。個人差か？ まあ、観察はこのくらいか。眼や歯なんかは目覚めてからしか解らんし）

人型を観察し終え、視線はレイナースへ。

「娘。蘇生は成功した。意識が戻るまで暫し待て」

「は、はい」

レイナースは緊張を滲ませながら、短く返事を返す。どれくらいの時間が経過したであろうか、人型が瞳を開いた時には、空は茜色を映していた。人型はゆっくりとその瞳を開く。瞳孔は髪と同じく黒であり、人間と変わり無く見える。特別夜目が利くようには見えない。しばらくは、蘇生の影響だろう、ポーっとしていたが、視界にレイナース

「誰だとは不作法じやのう。まあ良い。妾はリリー・マルレーン」

「リリー・マルレーン？ 知らない」

「そうじゃろうな。あまり名乗らぬ名じやからな」

レイナースは寒気を覚えた。今日の前に居るスレイン法国 法皇は何と言ったのか？ リリー・マルレーンと言う名をあまり名乗らぬ名前、と言った。では、この者は誰なのか？ この者の真の名は？

それに、目の前のモンスターを易々と組み伏せた力。このモンスターは、人間で言う英雄の領域、難度九十には届かないであろうが帝国四騎士の自分がかなり手こずった相手だ。ギリギリの勝利と言っても良い。それを、ああも簡単に。レイナースの頭脳は、疑問で満たされて行く。しかし、現場はたえず前へと進む。

「鳥娘。名は何と言う？」

「……………シーリイ」

「ふむ。種族は？」

「……………セイレーン」

種族に対して自身の推測が当たり気を良くしたのか、リリー・マルレーンは満足げに何度も頷いた。

「さて、シーリイとやら。妾から一つ頼みがあるのじやが…………」

「断る」

「はあ?」

「断る!」

リリー・マルレーンの眉がピクリと跳ねる。

「いやいや、話ぐらい聞いても……」

「断ると言っている!」

取り付く島も無いとは、まさにこの事だ。リリー・マルレーンの中で、何かパチンと弾けた。

「下手に出ればふざけおつて………力で言う事を聞かせても良いのじゃぞ。えええ、この鳥があ!」

リリー・マルレーンの瞳が爬虫類を思わせるソレに変化し、バチバチと音を立てながら、その身に雷を纏う。その姿を見て、レイナース、ヴァイエストは恐怖に囚われるが、タナトスは頭を抱えていた。これでは小悪党、だと。

そして、もう一人。シーリイの態度は一変する。今までの態度は何処へやら、膝を付き、頭を下げたのだ。そしてその瞳には、どこか崇高の色さえ見える。

「その雷。あ、あなたは……我らが神、雷神鳥様では?」

唇を震わせながら、シーリイはそう呟いた。雷神鳥? リリー・マルレーンは後ろ

を振り向き、それぞれの顔を覗き見る。皆一様に首を横に振る。何の事か解らないと。そうだろうと納得すると、リリー・マルレーンは思考の海へとダイブを決める。

（サンダー・バード……リアル世界では、アメリカ大陸に伝わる伝承。雷を起こすとか、雷と共に現れるとか言われる、でっかい鳥だったはず。ゲーム内では……隠し種族である一つを除けば、ビクトリアの最高種族。鳴神の解放クエストのボスだった。それだけだ）

リリー・マルレーンは「うーん」と唸りを漏らしながら答えを探るしかし、答えなど出様が無いのだ。ひとえに、セイレーンの風習、信仰を知らないのだから。だからこそ、リリー・マルレーンは素直に白状する事に決めた。嘘を言っても仕方が無い。

「えーとお、シーリイよ。妾は雷神鳥サンダー・バードでは無い」

「そんな！ それほどの力持つ御方が、雷神鳥様サンダー・バードでは無いとー！」

シーリイは驚きを蹙にする。セイレーンと言う種の中では、雷神鳥サンダー・バードは別格の存在の様だ。さてどうした物かとリリー・マルレーンは思案するが、先にタナトスが口を開く。「確か雷神鳥サンダー・バードとは、ビクトリア様が討伐した魔物では？」

「ま、まあ」

そう聞かれては、答えるしか無い。しかしこのタナトスの言は、場を好転させる切掛けとなる。

「雷神鳥を討伐？」
サンダー・バード

信じられないと、シーリイが呟く様に声を漏らした。

「その証拠として、ビクトーリア様は雷いかずちを行使する最上級種族 鳴神となられております」

（え？ タナトスの奴、なんでそんな事言うの？ それも自慢げに。あれか！ 妾のナザリックでの地位が低すぎて、ストレスが溜まっていたのか？ それとも放置しすぎてスネたか？）

リリー・マルレーンの思いなど周りの者達は露程も感じず、只々驚愕するばかりであつた。

「うむ。それでじゃ、シーリイよ。もう一度聞くぞ？ 妾の頼みを聞いてはくれぬか？」
リリー・マルレーンの言葉は優しく包み込む様であつた。だがその視線は冷たく、それでいて鋭く、反論をしよう物ならその場で殺されそうな雰囲気を感じしめせず垂れ流す。最早脅し。悪党の手口だ。そんなプレッシャーに、この世界のLvの者が耐えられるはず無く、シーリイはうやむやの内に首を縦に振る事となつた。

やっと場が収まった。さあこれからが本題だとリリー・マルレーンが口を開こうとした時、上空から羽音が響いた。それを一早く察知したタナトスは、上空を仰ぎ見る。

「ビクトーリア様、敵襲です」

「うん?」

続けてリリー・マルレーンも上空へと視線を向ける。茜色に染まる美しい空に、複数の異形の姿があつた。言葉にするならば、それは三千世界の朱鴉か、それとも死肉に群がるハゲタカの群れ。上空を支配するその群れから、二体のモンスターが降下して来るのが見えた。徐々に高度を落として来るそれは、セイレーンだった。

「同胞の波動を感じ来て見れば、はらからシーリイか。久しいな」

そう言ったのは、アルビノだろうか白きセイレーン。その隣には雀の様な茶に白が混じった羽色のセイレーンが控えていた。その白きセイレーンの来訪に一番驚いたのは、シーリイ。

「サ、サイレン様!」

その呼びかけに、サイレンと呼ばれた白きセイレーンは一つ頷くと

「左様。どう言った経緯かは知らぬが、復活喜ばしい事」

「勿体なき御言葉、シーリイ感謝で身が引き裂かれる思いです」

鳥たちの会話が続く。リリー・マルレーン達は蚊帳の外。だが、それを良しとしない者がこの場には居た。

「何を勝手に囀っているのですか? 不敬ですよ」

タナトスが一步前になると、そう言葉を放つ。この上からの言に、サイレンの眉がピ

クンと跳ねる。どうやら挑発と受け取った様だ

「低俗なる者よ、そなたこそ不敬である。我を誰と心得る」

「鳥の身分に興味はありません。いきがるのは、もっさりした下の毛だけにして頂けませんか？」

サイレンの白い肌に朱が混じる。それは羞恥からか、それとも怒りからか。

「そなた……………死にたいらしいな」

「死にたい？ 何を言っておられるのです？ 冗談はもっさりした下の毛だけにして頂

きたいものです。そうですね、ビクトーリア様」

タナトスからパスが渡される。しかしこれは、危険球である。

だが、リリー・マルレーンも引く事は出来ない。何故ならば、目の前のもっさりとした下の毛を持つ白いセイレーンの態度にイラツとしたからだ。DQNギルドのギルド長が聞いたなら、何を言うと言われそうだが、上から目線の態度が気に入らないのだ。

「のう、もっさり下の毛。妾はその小鶉と話の途中じゃ、邪魔をするでない。黙つておれ」

「なんだと？ 貴様こそ黙っている。我は同胞ほろからの復活を祝っているのだ」

御互いの眉がピクンと跳ねる。

「ふふつ。無礼な口利きじやのう。素直に引けば下の毛にトリートメントを施し、しつ

サイレンは声にならない叫び声を上げる。過去に味わった事の無い痛みの為である。刺された事はある。切られた事も、殴られた事も。だが、この痛みは別種の物だ。じわじわと骨が軋む痛み。その事が解っているのか、リリー・マルレーンは徐々に腰を浮かせ絞りをきつくさせて行く。同時に、侮蔑の言葉を掛ける事も忘れずに。

「ほーれ、ほーれ、早よう解かんと骨が折れるぞ。下の毛を剃って謝罪するならば、許してやるぞよ」

「だ、誰が！」

「強情じやのう」

リリー・マルレーンはそう呟くと、サイレンの左足をロックしていた自身の左足を僅かに浮かせると、その踵でサイレンのふとももを蹴りつける。

「ぎいー」

「ほーれほーれ」と軽口を叩きながら、何度も蹴りつける。

「き、貴様、卑怯ぞー！」

懇願とも取れる非難の言葉に、リリー・マルレーンはさらに笑顔を増し

「卑怯で何が悪い。こう言う戦い方もあると知らぬうぬが悪いのじゃー」

爪先程も悪びれず、言葉を返す。羽をばたつかせ、痛みを堪えながら何とか脱出を図ろうとするサイレンに、同族から応援の声がかけられる。

「サイレン様！」

「頑張つて下さい、サイレン様！」

方やリリー・マルレーンサイドのタナトスは、安心したかの様に冷静に声を掛ける。

「まだ甘い様です。ビクトーリア様、もつと締め上げた方がよろしいかと」

そんなやり取りが交わされる中、リリー・マルレーンは溜息を一つ吐く。このまま締め上げて、サイレンは負けを認めないと言う考えに行きついたのだ。

リリー・マルレーンは足の拘束を解く。サイレンはチャンスと見るが、足が痺れ上手く身体が動かない。それを承知とリリー・マルレーンは再度サイレンの足を取ると、左足、右腕、右足、左腕と重ねて行く。その行動が終了すると、サイレンをコロんと転がした。

「！」

サイレンには何が起こっているのか理解出来ない。自身は解放されたはずなのだ。だが、身動きが一切出来ない。土下座する様に転がされたまま動けないのだ。麻痺系の魔法か？最初サイレンはそう思った。だが違う。指先や片口、顔の表情筋などは動くのだ。例えるのなら、縄で縛り上げられた様な感覚だ。

「き、貴様！ 一体何をした！」

「うん？ 妾は何もしておらんど。うぬは自分の体重で動けんだけじゃ。惨めじゃ

のお」

そう言つてカラカラと笑う。リリー・マルレーンが仕掛けた技、それはパラダイス・ロックと呼ばれる意地の悪い固め技。リリー・マルレーンはサイレンが動けないのを確認すると、その背中に跨り、サイレンの白く張りのある尻をペチペチと叩く。その虐めるような行為はエスカレートして行き、最後には8ビートを刻む。

「ク、クソツッ！」

「ふふふーん。悔しいじゃろお。妾は楽しいぞお。止めてほしかったら、負けを認め、妾の言う事を聞くのじゃ。どうじゃ？」

「だ、誰が！」

尚も反抗するサイレン。そんな事などお見通しだと、リリー・マルレーンの白魚の様な指はサイレンの尻たぶを掴む。

「何を！」

サイレンはすぐに反応する。

「うん？ 反抗的な鳥の尻を開いて、皆に見て貰おうと思うてなあ。楽しいぞー。新たな性癖の世界へレッツ・ゴー！」

そう言つて指に力を込める。

「解つた！ 我的負けだ！ 貴様に、貴方様に従う！ 止めて！ もう止めて！」

セイレーンの女王、サイレンは煉獄の王の軍門に下る事になった。
全く酷い話である。

訪れた解放

敗北の声を確認し、リリー・マルレーンはサイレンの背中から腰を浮かす。そして、まるでそれが勝者の権利であるかの様に、爪先で軽くサイレンを蹴りつける。敗者に対して鞭打つような行為とサイレン達は思うが、そうでは無かった。あれほど身動きが取れなかったサイレンの拘束が、いともあっさりと解放される。

「?」

サイレンもセイレーン達も何が起こったのか解らない。何か魔法でも使ったのか?と感ぐるくらいだ。

「何を呆けておる。バランスを崩しただけじゃ」

そう言つて意地の悪い笑みを浮かべる。だが、セイレーン達はいまいち理解出来ない様だった。リリー・マルレーンの言葉を聞きながら、セイレーン達はサイレンの下へと集まり、ダメージを心配している様だ。口々に「大丈夫で御座いますか?」や「お身体に異常は?」などと声をかけている。だが、そんな言葉を掛けられる度、サイレンの瞳は潤んで行く。

「クッ! 我に優しい言葉を掛けるな! 泣いてしまうではないか!」

心情を吐露する。最早、威厳も糞も無い。それほどまでに、サイレンの恥辱と精神的なダメージは大きいのだろう。だがそんなサイレンにとつて、救いの手が。

「サイレン様、気をしっかり持って下さい。あの御方に敗北しても、何も恥じる事は無いのです」

シーリイからの言葉だ。

「シーリイ、キサマあ！ 嘘であつたなら、承知せぬぞー」

噛みついたのはニケ。雀の様な羽色のセイレーンだ。サイレンを庇う様に寄り添い、殺気と共にそんな言葉を投げかける。だが、シーリイは恐れずにその口を開く。

「あの御方は、サンダー・バード雷神鳥討伐を成し遂げた方なのです。ですから、この敗北は決して恥ではありません。サイレン様は、それほどの強者に戦いを挑んだ英雄に御座います。ですので、恥じる事無く胸を張るべきなのです！」

この言葉に勇気づけられたのか、サイレンはニケの影から僅かに顔を覗かせると「ほんと？」

ポツリと呟いた。「本場で御座います」と返事をシーリイは返そうとしたが、その言葉はサイレンの絶叫にかき消される。

「キヤアアアアアア！」

絹を引き裂かんばかりの声であつた。何故にそんな絶叫が？理由はリリー・マルレー

ンの行動からである。自分達に背を見せ会話するサイレンの背後から忍び寄り、自身のソレよりは小ぶりだが、十分な質量を持ったサイレンの乳房を揉みしだいたのだ。

「なんだよお。妾を無視するなよお」

甘える様な、馬鹿にする様な声で眩きながら、ひたすらに乳房を揉みしだく。柔らかなサイレンの乳房は、リリー・マルレーンの掌でぐにぐにと形を変える。

「あわわわわわ。やめろ！ やめるのだ！ やめて！ いやっ！ あっ、くふっ、んっ！……」

サイレンから艶めいた声が漏れる。その瞬間、リリー・マルレーンの指はサイレンの乳房を解放する。

「おー、何かヤバかったのう。何かこう、ムラツとした」

「何をやっておられるのですか、ビクトーリア様？ 本題をお忘れで？」

タナトスがびしやりとたしなめる。リリー・マルレーンは首を傾げる。今のタナトスの言葉に、違和感を感じたからだ。視線をレイナース、ヴァイエストに向けると、二人ともどこか不安そうだ。何かの違和感を感じているらしい。一体何が？ リリー・マルレーンは頭の中でタナトスの言葉を思い返す。そして、一つの結論に行きついた。

「タナトスよ。妾はリリー・マルレーンじゃぞ」

「承知しております。ビクトーリア様」

「……………タナトス？ 妾は、リリー・マルレーンじゃ」

「……………はい。承知しておりますよ、ビクトーリア様」

リリー・マルレーンとタナトス、お互いが首を傾げる。

「タナトス？」

「はい。ビクトーリア様」

「じゃからあ、妾はリリー・マルレーンじゃ！」

「解っております、ビクトーリア様！」

「ならば何故ビクトーリアと呼ぶ！」

「解り切った事。私の主人はビクトーリア様、唯御一人です！」

理由は判明した。私の主人はビクトーリア様、ただ頑固なだけだったらしい。意地でも主人を別の名前
で呼びたく無いと言う理由だそうだ。全く持つてメンドクサイ。そしてもつとメンド
クサイのが、レイナースやヴァイエストへの説明である。だが、それは後でも出来るこ
と。今は、本題を進めるのが先決である。

「娘、メロデイ、説明は後ほどじゃ。今は本題を進めるとしようぞ」

そう言うリリー・マルレーンに、レイナースは頷きで返し、ヴァイエストはいきなり
のメロデイ呼びに困惑していた。しかし、そんな者を氣遣うはずも無く、リリー・マル
レーンとタナトスの主従は話を先へと進める。

「こほん。それでのうまた子や——」

(また子?)

全員の頭に?マークが浮かぶ。また子とは、一体誰を指し示す言葉なのだろうか。

「ビクトーリア様。また子とは?」

タナトスが代表して質問を口にする。それを受け、最もとリリー・マルレーンは一人の人物を指差す。その人物とは?セイレーンの女王、白き翼持つ者、サイレン。

「わ、我がまた子かつ?!」

自分を指差し驚きを表す。その問いに、自信をもつてリリー・マルレーンは頷く。

「で、では、コイツ等は何じゃ?! ニケとシーリイであるぞ!」

サイレン、いや、また子は慌てた様に自身の部下を指差す。リリー・マルレーンは僅かに悩むと、ニケ、シーリイの順に指を指し

「ワカメにノリスケ」

簡潔に言い表す。そう言われても、場の者達には理解出来はしない。何故、ワカメにノリスケなのか?タナトスはリリー・マルレーンへと熱い視線を送る。それに気付き、リリー・マルレーンはタナトスへと耳打ちをした。ごによごによと言葉が紡がれる中、タナトスの表情が、花が咲いた様に輝いた物に変わる。

「流星はビクトーリア様! このタナトスには、考えも及びませんでした」

タナトスはぐるりと皆の顔を見回し、指を一本立てると自慢げに説明を開始した。

「まずは、ノリスケから説明しましょう。皆様、海苔と言う物をどこ存じですか？」

タナトスのこの問いに、現地勢は首を横に振る。この回答に「解りました」とタナトスは頷き地面に長方形を描く。

「海苔とは、海藻をこの様な形に整え乾燥させた物です。それをあの方、シーリイさんは持っていたゆへ、ピクトーリア様はノリスケと命名されたのです。ちなみにスケはおまけです」

全員の頭に、再び？マークが浮かぶそして立ち尽くすシーリイを観察する。一体彼女のどこに海苔があるのだろうか。そして発見した。全員の視線がシーリイの一点に集中する。その場所は、彼女の下腹部。そこに張り付いた黒く、艶やかでしっとりとした物。

そして全員がこう思った。まだそのネタ引つ張るんかい、と。

そして、思いつく。ワカメの意味を。ニケの日に焼けた肌から、ちよろりと生える物こそワカメ。サイレン、シーリイに比べれば、まばらに生えるソレはまさにワカメ。肌を岩場と捉え、隠すべきデルタに水を注げばふよふよと浮くだろう。その事実をタナトスは声高らかに宣言する。

「そして、そちらの方。ニケさんでしたね。彼女の物こそワカメです。まるでスूपに

漂う海藻」

そのように宣言され、セイレーン達は身を縮める。今まで何とも思っていないかった事が、妙に気恥ずかしくなって来たのだ。サイレンは顔を上げ、ゆっくりとリリー・マルレーンへと手を伸ばす。

「あのお。服、貰えませんか？」

「何じや、裸族は卒業か？」

「……は、はい」

「しかしのお、ノリスケの蘇生代金もまだ貰っておらぬし……」

「ー」

セイレーン達は声を失った。目の前に居る強者は、武力のみならず、蘇生まで可能な人物なのだ。そして心から確信する。此の者は、決して逆らってはいけない者だと。

「全てを含め、我らに何を支払えと？」

サイレンの問いかけに、リリー・マルレーンは意地の悪い笑みを絶やさず

「全てじゃ。全てを差し出し、妾の手足となれ」

「……………それは、貴行の下へと下れ、もくぐとぐだれ言う意味でしょうか？」

この言葉に、リリー・マルレーンは一つ頷くと

「左様。妾の下で、妾の望む世界を創れ」

身が震える思いだった。世界を創る？一介の魔物である自分達が、圧倒的強者の下で。セイレーン達は膝を付き頭こぶを垂れる。

「御言葉、お受取り致します。一族二百、全てのセイレーンは……」

「ビクトーリア様です。ビクトーリア・F・ホーエンハイム様」

サイレーンの躓きに、タナトスが助け舟を出す。

「全てのセイレーンは、ビクトーリア・F・ホーエンハイム様と共に」

忠誠の儀は終わる。その言葉に、リリー・マルレーンは満足げに頷くと

「しかと受け取った。また子、ノリスケは妾と共に。ワカメは繋ぎとして一族を纏めよ」
「畏まりました」

目的は達成したと、リリー・マルレーンはパンツ！と一つ手を叩く。だが、それを黙って見て居られない人物が此処にはいた。

「待って下さい、陛下！」

後方から声が飛ぶ。レイナスだ。

「私の！ 私の呪いの解呪は！」

悲痛な叫びを漏らす。その声に呼応する様に振り向いたリリー・マルレーンの顔には……
……意地の悪い笑みが張り付いていた。

「何を叫んでおる、艶ほくろ。よう見てみよ。己の顔を」

「え？」

差し出された手鏡を受け取り、レイナースは恐る恐る自分の顔を確認する。変化は無い様に思えた。しかし、その長く伸びた自身の顔の右半分を隠す前髪を掻き上げると……醜悪な腐った皮膚は姿を消していた。思い描いていた自分の顔がそこにあった。シミ一つなく、奇麗な顔が。

「こ、これは一体？」

「妾の計算は完璧じゃ」

「さすがです、ビクトーリア様」

胸を張るリリー・マルレーンに、賛辞を贈るタナトス。だが、説明は一切無い。しかし、レイナースの瞳はソレを求めていた。リリー・マルレーンは溜息を一つ吐き、やれやれと説明を口にする。

「この森の中で、この地だけが枯れておるのは理解出来ておるかや？」

「はい」

リリー・マルレーンの問いかけに、レイナースは素直に答える。

「うぬだけが呪われておったならば、解呪は無理じゃったじやろう」

「それはどう言う意味で？」

「うん？ 狙いがうぬ一人、と言う事じゃ」

レイナースからの返事は無い。しかし、これは否定の沈黙では無く、リリー・マルレーンの言いたい事が理解出来ないからだ。それを承知とばかりに、リリー・マルレーンは言葉を続ける。

「うぬの顔と、この地の荒廃。これは狙いが無い事を意味する」

「狙いが無い？」

「そうじゃ。無秩序と言った方が正確かのう」

「無秩序……」

全員の視線がシーリイを捉える。

「ノリスケは死の間際に呪詛を放った。じゃが、それが死の間際じゃったのが失策じゃったのじゃ。放たれた呪詛は制御を失い、己をも喰らいこの地を蝕んだ。当然、その場におった艶ぼくろをも巻き込んだの」

「で、では、私の呪いは……」

「解呪出来んのも当然じゃ。呪いの核はうぬでは無く、この地にあつたのじゃからな」
「それでは……」

呟く様に言葉を発するレイナースに、リリー・マルレーンは一つ頷き。

「ノリスケの内から発せられた呪詛は、再びノリスケの内に吸収された。復活と言う形を経てな。呪詛が土地を蝕んだのが幸いしたのう。そのおかげで、ノリスケの魂魄もこ

の地に縫い付けられておった」

「そ、そう言う事ですか」

レイナースの納得の意を示す。だが、疑問はこれだけでは無い様だ。レイナースの表情がそう言っている。

「後は、妾が何者か、じゃな」

「はい」

返事を聞きいれ、リリー・マルレーンは一度目を瞑る。その瞳が再び開かれた時、その瞳孔は爬虫類を思わせる物に代わっていた。

「妾は法皇リリー・マルレーン。真の名は、ビクトーリア・F・ホーエンハイム。煉獄の王と呼ばれる墓守じゃ」

思いの果て

レイナーズの解呪と、セイレーンの従属。二つの仕事をそつなくこなしたりりー・マルレーンは、帝国王城に戻り眠りについた。

ベッドは柔らかく快適に眠れ、すがすがしい朝を迎える。ぼさぼさの髪を掻きながら、女官の用意した湯で顔を洗おうと鏡の前に立つ。バシャバシャと気品の欠片も無い音を立て顔を洗い、何故か存在する歯ブラシの様な物を啜えつつ自身の映る鏡に視線を向ける。

「?」

鏡に映る姿は確かにビクトーリアの物なのだが、その姿に僅かな違和感を覚える。何か妙な付属品、いや、身体に模様が付いている様な? りりー・マルレーンは鏡に顔を近づけ、マジマジと自身の姿を確認する。顔には別段異常は無い。寝起きの為か多少だらしのない表情だが、変り無い見慣れたビクトーリアの顔だ。しかし、問題はここからだった。首筋に視線を向ける。そこには、赤黒い痣の様な物が無数に存在していた。

「うん?」

りりー・マルレーンは首を捻る。これは一体何なのだろうか。良く見ると、その痣

の様な物は体中に存在していた。お腹辺りにも、ふとももにも。そして最も多く存在していたのは、豊満な乳房である。「むむむ」と痣を観察しながら、リリー・マルレーンは、ある事柄に行きつく。

「うむ。これはアレじゃな……………キスマーク？」

そう思い至った瞬間、リリー・マルレーンの身体はガタガタと震えだした。この事實は、昨晩ぐつすり眠りこけて居た時に、何者かによつて身体を舐めまわされた事を意味する。

一体誰が？ タナトスか？ いや、違う。タナトスはナザリックへと帰還しているはずである。

では賊の仕業か？ これも間違いであろう。なにせ、ここは帝国王城なのだから。それでは城の者か？ それも考え辛い。何せ前室には、セイレーンのサイレン、シリイ。ヴォーリアバニーのヴァイエストが寝ているのだから。野性味あふれる彼女達が、不審者を通すなどと言う事は非常に不自然だ。そんな思考の迷宮をリリー・マルレーンが彷徨っている中、ドアがノックされ外から声が掛る。

「お早よう御座います、リリー・マルレーン陛下。お目覚めで御座いますか？」

声からすると、ヴァイエストの様だ。

「う、うむ。起きてはおるぞ」

たどたどしく返事を返す。その答えに呼応し、遠慮なくドアが開かれた。

「あ」

双方から間抜けな声が漏れる。何故ならば、今のリリー・マルレーンは半裸の状態なのであるからだ。その豊かな双丸を外気にさらした姿なのだ。

「……………昨晚は、お楽しみで」

「え？」

「随分と激しかった様だな」

「はい？」

「御盛んですね」

「……………？」

ヴァイエスト、サイレン、シーリイの順で、リリー・マルレーンへの感想を述べる。どうやら彼女達は何かを知っている様だ。

「あのく、娘さんたちや、昨晚誰ぞ来たのかのお」

リリー・マルレーンのこの問いに、三人は顔を見合わせ首を傾げると

「夜半遅くに、レイナース殿が」



「妾は法皇リリー・マルレーン。真の名は、ビクトーリア・F・ホーエンハイム。煉獄の王と呼ばれる墓守じや」

この言葉を受け止め、レイナースは崩れ堕ちる様に地面に膝を付いた。美しさを取り戻した顔からは血の気が引き、地面に付いた両膝、両腕はガクガクと震え出している。ヴォーリアバニーのヴァイエスト、そしてセイレーン達は、何事かとレイナースを見つめる。

「どうしました、レイナース様？ 気分がすぐれないのですか？」

ヴァイエストがレイナースの急変に心配して声を掛ける。しかし、レイナースは手で大丈夫だと示し、ビクトーリアの瞳を見つめ声を絞り出す。

「真まことに、煉獄の王であらせられるか？」

「左様。妾はそう呼ばれし者じや」

「ふふっ。ふふふっ」

レイナースから笑い声が漏れる。気でも触れたか？ ビクトーリアはそう思い、レイナースに顔を近づける。

ゆつくりと近寄って行き、もうすぐ鼻先がレイナースの金糸の様な髪に触れると言う段階で、ビクトーリアはドスンと言う衝撃を覚えた。突然レイナースが抱きついて来たのだ。

「ふふっ、ふふっ……ぐすっ……」

レイナースは、ビクトーリアの腹部に顔を沈ませ泣きだした。どうやら感情のコントロールが上手く出来ない様である。その状態を見つめつつ、ビクトーリアはレイナースの髪をすく様に撫であげる。

「大丈夫じゃぞ。もう心配はいらぬ、呪いは解けた。これからは恋も出来る。生を楽しむが良からう」

「あ、ありがとうございます。御座います。ビクトーリア様」

しやくり上げながら、レイナースは感謝の言葉を口にする。それと同時に僅かずつだが、上へとビクトーリアの身体を登って行く。

「一瞬で……恋に落ちる事があるって……本当だったのですね」

「はい？」

レイナースの突然の言葉の意味を、ビクトーリアは探るが、一行に答えは出ない。そうしている内にも、レイナースの顔はビクトーリアの胸へと到着する。ビクトーリアの豊富な乳房にレイナースは顔を埋め、そこから立ち上る香を胸一杯に吸い込むと

「私……女性を恋愛対象と見た事はありませんでした」

「はあ」

「ですが、陛下に、ビクトーリア様に出会い………真実の愛に目覚めたのです」

そう言つて、より一層顔を埋める。良く見れば、レイナースの耳は恥じらいからか真つ赤だ。どうやら本気の様である

ビクトーリアは、ゆつくりとレイナースに気付かれない様に、細心の注意を払つて腰を引いて行く。しかしその行為は、何者かによつて阻止された。背後からガツチリと肩を掴まれたのだ。ゆつくりと視線を背後へと向ける。そこに居たのは、満面の笑みを浮かべるセイレーンの女王、サイレン。いや、また子の姿だった。

「また子……何を？」

「いいじゃないですか、メス同士でも。ププ」

どうやらまた子は、先ほどの意趣返しをしようとしている様である。

そうこうしている間にも、レイナースはズリズリと這い上がって来ている。乳房に埋まつていたレイナースの頭部は、首筋へと辿り付き、ビクトーリアの香りを肺一杯に吸い込み、堪能するとまた這い上がって行く。

そして、視線が絡み合う。

レイナースの瞳は、濡れた様な輝きを放ち、白磁の様な肌は紅潮し、その艶ぼくろを

讚える唇は妖艶に輝く。その姿は、ナザリック地下大墳墓 守護者統括と同様の物だ。つまり、現在進行中でレイナースは発情中、と言う事である。

レイナースは騎士とは思えぬその滑らかな指で、ビクトーリアの両頬を捉えると、その荒く艶やかな息を吐く唇を、ビクトーリアのソレと重ね合わせた。

「！」

驚きで体が硬直し、声が出ないビクトーリアに対し、レイナースは顔の向きを僅かに変えつつ、チュパチュパといやらしい音をたてながら情熱的に行爲を続行する。

「んっ。はあ、はっ。あふっ。ビクトーリアさまあ……」

呟く様にビクトーリアの名を何度も呼び、自身の両太ももでビクトーリアの左太ももを挟み、腰を滑らせて行く。

そして、レイナースはビクトーリアの上に馬乗りになると、腰をゆつくりとビクトーリアの腹部に擦り付けながら、自身の鎧に手を掛ける。さあ全身でビクトーリアの、愛しい人の柔らかい肢体を味わう事が出来る。そう考え、レイナースの欲情に濡れた舌は、自身の艶めいた唇をなぞる。いただきます、そう心の中でビクトーリアに声を掛け、レイナースは襲い掛る。その瞬間

「いぎやー」

奇妙な声と共にレイナースは意識を刈り取られた。

なかった。

憂鬱な気分を引き吊りながら着席し、用意された朝食に口をつける。場には法国から共に来た者達と共に、この地にて傘下入りしたセイレーン二人。カチャカチャと食器が鳴らす僅かな音が支配する空間で、音も無く背後を取ったレイナー스가リリー・マルレーンの耳元でボソリと囁く。

「ビクトーリア様……………男性の機能も持つていらしたのですね」

「ぶ—————！」

リリー・マルレーンは、盛大に口にしたスープを吹きだした。慌て視線をレイナースへと向ける。依然頬を染め、恥らうレイナースは

「大丈夫で御座います。男性の方は頂いてはおりません。そちらはいずれ、ビクトーリア様の方から……………」

此処まで聞いた事で、リリー・マルレーンの意識が遠のいた。その瞬間、心に浮かんだ言葉は……………淫魔が増えた、だった。



そんな朝食の一時を終え、リリー・マルレーンは目的の場所へと歩を進める。昼食会を経て、お互いの顔見せは終わっている。これからが本番だ。皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスとの一騎打ちの始まりである。

女官達先導の元、リリー・マルレーンとイサブロウは一際豪華な扉の前に立つ。静かにゆつくりと扉が開かれ、お互いの存在が顕になる。ジルクニフに対してリリー・マルレーンの第一印象は、実にシンプルな物だった。イケメン。その一言に尽きる。整えられた金色の髪、涼しげな瞳に浮かぶ紅茶の様な色の瞳孔。まあ服装的には何やらジャラジャラしすぎな感も諫め無いが、全体を見れば纏まっている。

「これはこれは法皇陛下。御尊顔拝謁頂き、このジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス感謝の意を告げさせて頂きます」

「ここらこそ、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス皇帝陛下に置かれましては、忙しい所時間を割いて頂き、法国の民を代表してお礼を申し上げます」

まずはお互いが当たり障りの無い言葉で挨拶を交す。御互いの牽制を確認した所で、着席を進められそれに従った。ジルクニフは出された紅茶で唇を湿らすと、先制攻撃とばかりに口を開く。

「法皇陛下。此の度の我が国への来訪、いかがな趣旨と捉えれば良いのですかな？」

ジルクニフの問いに、リリー・マルレーンも同じように紅茶を口に含み

「何、大した事では無い。妾の法皇就任の挨拶と、貴国の後ろ盾の破棄を宣言する為じゃ」

「！」

ジルクニフは声を失った。目の前に居る、法皇なる人物の言う事が本当ならば、王国との軍事バランスが大きく狂ってくるからである。

「は、はは。法王陛下は冗談が上手い。私を驚かせても、何も出はしませんよ」

「そうじゃろうな。妾は真実しか言うてはおらぬゆえ」

「どう言う理由で、その様な結論に至ったのかをお聞きしても？」

「良いじゃろう。スレイン法国が、新たな教義によつて生まれ変わったのはご存じかや？」

リリー・マルレーンから返された問いに、ジルクニフは一度唾を飲み込むと

「ええ存じております。しかし、それと後ろ盾の件との関係は？」

「皇帝陛下も鈍いのう。それとも妾が試されておるのかのう。まあ良い。今後のスレイン法国は、亜人や異形種なども取り込む多種族国家へと舵を取った。貴国は、未来に我が国の民となる可能性がある者達を、売り買いしておると言うては無いか。これで後ろ盾、もしくは国交の樹立は難しかろう」

そう言う事か、とジルクニフは納得する。だが、ここで引く事は出来ない。

「しかし法皇陛下、その結論は些か早計過ぎるのでは無いか？ その様な者達は、我が国とは関係の無い無法者達。簡単には問題の解決は無理かと」

「そうかのう。以前皇帝陛下が執行した間引きを、再度執行すればよからう？」

「これは物騒な事を。ですが、アレを行うにしても、それ相応の時間が必要かと」

「うむ。そうじやのう。では我が法国が、正常化した時間を猶予としたいのじやが、どうじや？」

ジルクニフは一度口を噤み、視線からリリー・マルレーンを決して外さずに頭脳をフル回転させる。奴隷商の一掃。これは決して簡単には出来ない事だ。それに、教義い厳しいスレイン法国よりも、帝国の方が暗部の炙り出しは容易に思える。

「その猶予とは、どれほどの期間ですか？ あまりにも長い月日を待たせるのも、私としても忍び無いのでね」

その言葉を受け取り、リリー・マルレーンはイサブロウへと視線を向ける。イサブロウは小さく頷き、僭越ながらと前置きをするとジルクニフに向け口を開く。

「僭越ながら皇帝陛下に申し上げます。我が国での浄化の期間は、約十四日程となります」

ジルクニフは眩暈がする思いだった。教義に厳しく、暗部は王国、帝国と比べると遙

かに地下に潜らねば生き残れぬ地で、たった十四日でおおよその奴隷商を始末したと言
うのだ。法国の闇、各聖典が幾ら優秀だとしても早すぎるのだ。

「ほ、法国は如何様な手段を用いて正常化を図ったのでしようか。出来ればご教授願え
れば、我ら帝国としても手の打ち様があると云う物」

「ジルクニフの問いに、リリー・マルレーンはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべると
「簡単な事。おびき出し、ぶち殺したまでよ」

皇帝と法皇

「簡単な事。おびき出し、ぶち殺したまでよ」

リリー・マルレーンのこの言葉に、ジルクニフは何度目かに言葉を失う。

「恐怖は伝染する、と言うやつじゃ」

「それは、一体どう言う……」

リリー・マルレーンの端的な言葉に、ジルクニフはさらなる説明を要求する。だが、リリー・マルレーンは意地の悪い笑みを漏らすに留まる。代わりにイサブロウが、リリー・マルレーンの悪行を皇帝に告げた。

「ど、奴隷商の死体を組織と家族に……」

「左様」

ジルクニフは、再び言葉に詰まる。補佐官が言う事が事実であるならば、いや、事実だろうが、この法皇は自国を浄化する為に恐怖と言う毒を国にばら撒いたのだ。国の威信を、いや、自分の機嫌を損ねたらどう言う目に会うかと言う事をまずは実践して見せた。

それを知った者達は、奴隷商で無くとも恐怖に捕らわれたであろう。麻薬売買、禁止

品の取引、横暴な態度を取っていた貴族、神官で構成される法国では少ないであろうが、汚職、賄賂に手を付ける者達も例外では無い。その身に僅かでもやましい思いがある者達は、次の肅清に恐怖する。

そう、勝手に恐怖し、恐怖から逃れる為にソレを手放す。それを可能としたのは、目の前の法皇リリー・マルレーンが自ら手を汚す事も厭わない人物だからだ。だからこそ、取引や減刑を望む事は不可能と判断させる事が出来る為だ。

「は、ははっ」

ジルクニフからは、最早乾いた笑いしか漏れなかった。この皇は異常である。その異常さで国を治める人物なのであると、確信した。亜人奴隷の解放。その為、いや、それを大義名分としてこの人物ならば、帝国と事を構える事も辞さないと確信出来る。

「し、しかし、家族にまで死体を送りつけるとは、物騒な話ですね」

「そうかのう。彼奴の命を言い値で買ってやったまで。身体は勘定に入っては居らぬから」

「ははっ。奴隷商とはいえ、妻も子も居るでしょうに」

「かかつ。鮮血帝と呼ばれる貴公が何を。我らが道を違え、国を疲弊させればどうなる？ 貴公が今身に付けている物。貴公が喰うておる食事。貴公が眠る布団一式。よもやどこから来ておる物か知らぬ訳ではあるまい？」

「ああ、知っている。私の生活の全ては、帝国国民の税から成り立っている。もしも、私
が国を私物化し、疲弊させれば、私は首を落とされるだろう。この私がやった様にな」
ジルクニフの皇帝としての言葉を聞き、リリー・マルレーンは満足げに頷き。

「なれば、同意である。我らが国を収め、その報酬として生かされておるのなら、貴族、
商人、農民、様々な者達も知らねばならぬ。自分が何の犠牲で、恩恵で生かされておる
のかを」

「この言葉を聞き、ジルクニフもリリー・マルレーン同様に頷き

「成程。奴隷商とは言え、それを知るべきだと」

「左様。その恩恵を授かっておった家族、その子も含めての」

「成程。陛下の言いたい事は解った。だが、それは奇麗過ぎる考えだ。奇麗過ぎる水に
は、魚とて暮らせん」

「知っておるよ。妾の言う言葉は理想じゃ。じゃからこうも言う。妾は人を殺す事も、
人から何か盗む事も、誰かを蔑み迫害する事も、止めよとは言わん、と」

「な、何！」

「ただ、知っておれと、覚悟を持って行えと言っておるだけじゃ。殺したら殺される。奪
えば奪われる。何かを踏みにじれば、同じ様に踏みにじられる、と」

「因果応報、ですか」

「そうじゃ」

ジルクニフは、いや、皇帝ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスは理解した。法皇リリー・マルレーンと言う人物を。その法皇を頂いたスレイン法国の行く道を。

「法皇リリー・マルレーン。あなたは狂っている。あなたは愛し過ぎている。あなたにとって、私も、オークも、スケルトンですら同じ物に見えているのだろう。あなたが愛する者として」

「当然。妾の傘に収まる者ならば、全てを妾が守る」

「力強い言葉だ。私には言えぬ。教えてはくれないか？ あなたは何者なのだ？」

ジルクニフの疲れ切った様な言葉に、リリー・マルレーンは楽しそうな笑みを浮かべ「いざれ知る事になる。今はまだ……………妾は法皇リリー・マルレーンじゃ」

そう言つてクツクツと笑つた。

その後、経済、流通などの話に移り、昼の会談は終了となつた。若干の休憩を挟み、晩餐会が開かれ、夜の会談の開始となる。場所は、皇帝の自室。出席者は、法国側からは、法皇リリー・マルレーン、イサブロウ、ヴァイエスト、サイレン。帝国側は皇帝ジルクニフ、宮廷魔術師フルーダ、秘書官ロウネ・ヴァミリネン、そして護衛として帝国四騎士が付く。

一同が席に着く。宮廷魔術師のフルルーダが、若干遅れる事が秘書官のロウネから告げられた。法国側はそれに対し、嫌悪感を見せる事無く了承した。議長としてロウネが会談の開始を告げ、夜の会談は開始される昼のソレとは違い、酒や果物なども用意されていた。これは、格式ばった物では無く、もう少し砕けた話し、腹の中を見せ会おうと言う趣旨がある為である。給仕のメイドが各人のグラスにワインを注いで行く。ヴァイエストとサイレンに注ぐ時に、若干戸惑った様な表情を浮かべたが、瞬時に持ち直した様だ。

「ではこの出会いに、法皇陛下」

「リリー・マルレーンで良いぞ。ファーストネームだけでは可愛すぎる名なのでな」

「では私もジルクニフと呼んで頂きたい」

そう言ってお互いのグラスを鳴らす。

「個人的な疑問なのだが……」

ジルクニフがぶつきらぼうに言葉を口にする。

「何かや？」

答えるリリー・マルレーンに、ジルクニフは苦笑いを見せながら

「レイナース。お前は何故そこに居る？」

ジルクニフの疑問は、レイナースの立ち位置についてだった。レイナースの居る場所

は、リリー・マルレーンの後。これではまるで、法皇の従者の様である。

「何か問題でも？ 陛下から咎の御言葉を受ければ、ジルクニフ殿の言う通りにします
が」

この言葉に、他の三騎士が殺気立つ。ジルクニフはそれを諫めると、レイナースを見
つめ溜息を洩らす。

「そう言う事か。リリー・マルレーン殿も人が悪い」

「何がかや？ それに人が悪いとは、人聞きが悪い。のう」

そう言うつて法国側の三人に同意を求める。だが、その行為は眼を逸らすと言う行動で
黙殺された。

「それで、レイナース。お前は、帝国騎士を抜けると言う事で良いのか？」

「それに関しては、ビ、キャツ！」

ビクトーリア様、と言おうとしたのだろう。その瞬間、レイナースの顔面にバナナが
直撃した。

「そちらの名は言うでは無い」

「……畏まりました」

顔を押しえながら、レイナースは了承する。

「まあ、妾としてはどちらでも良いのじゃが、国に支えておる者ならば、年期とかがある

のでは無いか?」

「ええまあ。彼女に対しては契約期間、と言った方が正しいがな」

ジルクニフの言葉に、リリー・マルレーンは一つ頷き、後方のレイナースに視線を向けると

「艶ほくろ。うぬは暫し帝国に残れ。やって欲しい事もあるゆえ。良いかな、ジルクニフ殿」

「異論は無いが、やって欲しい事とは?」

「うむ。帝国には魔法学院なる物があると聞く。そこへ、妾の子飼いの者を入学させて欲しいのじゃよ」

リリー・マルレーンの言に、ジルクニフは少し悩む様な仕草を見せ

「法国の神官が、帝国の魔法学院に?」

疑問の声を漏らす。

「いや。その者は妾が個人的に保護しておる者でな、元冒険者の魔法詠唱者マジック・キャスターじゃ」

「ほう。その様な者がリリー・マルレーン殿の傍に」

「うむ。そ奴とは、妾が法皇の地位に就く前からの付き合いでな。どうじゃ? 受け入れてくれるか?」

ジルクニフは暫し悩む仕草をするが、リリー・マルレーンの提案を受け入れる事にし

た。

「問題は無い。こちらで預かるう。では、レイナースはその護衛としてか？」

「そうじゃな。その者は、まだ年若い娘ゆえ」

「了解した。治安の良い地区に、屋敷も用意させよう」

「貴国に感謝を」

とりあえず一つの議題が解決した所で、ドアがノックされフルーダの到着が知らされる。ジルクニフが許可を出し、件の人物がゆつくりとした足取りで入室して来た。部屋の中程まで来た所でその人物は立ち止まり、静かに名乗りを上げる。

「遅れまして申し訳無い。首席宮廷魔法使い件、帝国魔法省最高責任者フルーダ・パラダインと申します」

フルーダ・パラダイン。如何にもな老人だった。白く長い髪に、長い鬚。ローブを纏い、手に持つは木が振れた様な杖。絵心がある人物に、ファンタジーに出て来る魔法使いを描いてもらったならば、目の前の人物を描くだろう。それほどにフルーダと言う人物は、魔法使いを体現していた。

フルーダはゆつくりとした足取りで、ジルクニフの下へと歩を進める。その歩が、法国側が着席している位置を僅かに過ぎた時、ガクリと、まるで崩れ墮ちる様に膝を付いた。

「どうした爺！ 爺！」

慌ててジルクニフが声を掛ける。帝国三騎士も慌てて近寄って行く。だが、当のフルーダには一切の声が届いていない様だ。眼を見開き、涎が零れんばかりに大きく口を開き、何かを掴もうとしているのか、その両腕を前へと伸ばしている。その視線の、腕が求める先は………法皇リリー・マルレーン。

「おお。おお。儂が求めておつた御方……。いと高き者……」

ぶつぶつと何かを呟きながら、フルーダはリリー・マルレーンにじり寄る。

「うお！ 何じゃ！ 気色悪！」

リリー・マルレーンは椅子に上り退避行動を取る。その中で、過去の記憶を思い出す。エ・ランテルの墓地で出会った男の事を。現在、法国の地下で新たなる蘇生魔法の研究をしている、通称ピカリンの事を。

「す、すまない、リリー・マルレーン殿！ 爺の悪い病気が出た様だ！」

ジルクニフは、そう謝罪の言葉を口にする。

「びよ、びようき！」

その言葉を反芻しながら、目の前の病気持ちの老人への対処を探るが、一行に答えは出ない。一瞬、蹴り飛ばしてやろうかとも思うが致命傷になりかねない。いや、確実に命の炎共々消え去るだろう。ならば、他の者の手を借りるまで。そう判断したりりー。

マルレーンは、法国一同へと視線を巡らす。

まずはヴァイエスト。その表情は引きつり、フルーダの行動に恐怖を覚えている様だ。

続いてサイレンとイサブロウに視線を向ける。両者とも微笑みを浮かべ、この状況を楽しんでる様だ。滅多に見れない、恐怖におののくりリー・マルレーンの姿に。

後ろを振り返り、レイナースを視界に留める。レイナースの身体からは、殺気とも呼べる物があふれ出し、今にもフルーダを切り殺しそうだ。

これでは誰の手も借りる事は出来ない。リリー・マルレーンは孤立した。椅子の上で怯えながら

「ていへん………きらい」

そう呟くしか無かった。

混乱の産声

椅子の上と言う決して高くは無い場所で、リリー・マルレーンは脅えの中に居た。帝国三騎士の内、一番偉丈夫なナザミ・エネックが腰を挿んでいるのだが、フルーダのにじり寄りには止まらない。僅かずつではあるが、ジワリジワリと近寄って来ているのだ。

「ジ、ジルクニフ殿！ この老人の病気とは?！」

リリー・マルレーンの声が慌てた様に響く。

「ああ！ 爺は、魔法が関わる事柄には歯止めが利かなくなるのだ！」

何て迷惑な老人だ。だが、リリー・マルレーンは自称常識人。声のトーンを整えながら、フルーダに向け語りかける。

「ご、御老人？ 妾の何に引かれたのかや?！」

「おお、いと高き御方。あなた様の偉大なる魔法力量。階位を超えた魔法の深淵。是非とも、是非ともご教授を——」

どうやらリリー・マルレーンが行使出来る魔法位階と、MPに反応したようだ。これには、魔力探知無効化の装備を付けていなかった事が悔やまれる。何とか誤魔化す事は

出来ないか？ リリー・マルレーンは必死に攻略法を探る。そして、一つの光明を見つ
ける事が出来た。

「ご、御老人。勘違いするで無い。そなたのしている魔力は、妾の物では無いぞ。こ、こ
の法服からの物じゃ」

「な、何じゃと？」

フルルダは、リリー・マルレーンの言葉に驚きを示す。その表情は目をさらに見開
き人と言うより、悪魔か獣人の様に見えた。

「しよ、証拠を見せようでは無いか。ちよつと着替えて来るぞ」

ひきつった笑顔を見せながら、リリー・マルレーンは貴賓室へと戻る。貴賓室に到着
し、扉を閉めた所でリリー・マルレーンは盛大な溜息を洩らす。法服を脱ぎドレスに着
替えると、首に掛けたネックレスを外す。

ナイン
フィンガー
ネックレス

——九本指の首飾り。細い鎖に、九個のペンダントトップが付けられたマジックア
イテム。その効果は、本来十個装備出来る指輪を一つ放棄する事で、ネックレスの様に
首に飾る事が出来るおしゃれアイテムである。ピクトーリアは、指輪のゴテゴテした見
た目を嫌い、このアイテムを好んでいる——

ペンダントトップにはめ込まれた宝石、指輪を変化させた物を一つ外し、新たな石、魔力探知無効の物をパチンとはめる。その後、それを首に戻すと、アイテムボックスを漁り、数個のデータクリスタルを取り出す。それを法服の至る所に忍ばせる。準備は完了。リリー・マルレーンは、満足げに頷くと貴賓室を後にした。

ジルクニフの自室に戻って来たリリー・マルレーンは、若干腰が引けていたがフルーダに近付き法服を渡す。その瞬間、いや、リリー・マルレーンが入室して来た瞬間から、フルーダの表情はこわばっていた。

「……………」

リリー・マルレーンの姿を見、その身体から魔力の流れが感じられず落胆した様だ。

「爺の反応から見ると、真実だった様だな」

「そうじゃ。妾は嘘は吐かんからの」

「そう言う人物が、最も疑わしいのですよ。リリー・マルレーン殿」

ジルクニフとリリー・マルレーン。どちらからとも無くそう言って笑い合う。

「しかし、その法服は……………」

「ふむ。これはのう、六大神の一人シエル・シャイナ……………いや、スルシャーナが残した遺物よ」

「スルシャーナだと！ 闇の、黒を司る神か！」

盛り上がる者達を余所に、イサブロウの瞳がスウツと細くなった。今リリー・マルレーンが言ったシエル・シャイナと言う言葉。言い間違い？ いや、そうでは無いだろうとイサブロウは推測する。

一部騒がしい展開はあつた物の、会談は滞りなく進み、帝国と法国は今まで通りの関係が続ける事で話は纏まった。貴賓室へと戻る道中、イサブロウは思い切つて自身が抱いていた謎を問いかける。

「陛下。先ほど口にされた、シエル・シャイナと言う人物は一体？」

「うん？ 何の事じゃ？」

振り向きもせず、リリー・マルレーンはそう答える。

「陛下」

再度呼びかけるイサブロウの声は、低く冷たい物。その真剣さに折れたのか、リリー・マルレーンは

「昔の知り合いじゃよ。ブリスト 神官だったのじゃが、上位の職業習得にまつわるクエストに失敗しての、ペナルティで種族改編してしまったヤツじゃ」

「ほう。一体どんな種族に？」

イサブロウの問いに、リリー・マルレーンは暫し口を紡ぐと

「……………リッチーじゃ」

「リッチー?」

「左様。そのクエストをクリアし、ハイブリスト高位神官へと至ると、新たな扉、セイント聖人への職業展開クラスチエンジが可能となる、と言うの」

「イサブロウは押し黙る。クラスチエンジ職業展開などの言葉は良く理解は出来なかったが、それが頂上な出来事だと言う事は理解出来た。口を噤むイサブロウに対し、リリー・マルレーンは補足する様に言葉を続ける。」

「忘れておった。いや、気付かんかった。この法衣を見るまでは。あの、アンデッドの癖に回復職と言う面白可笑しいヤツの事をの」

「そう言って寂しそうな、それでいて懐かしむ様な笑みを浮かべた。その直後、リリー・マルレーンの頭に言葉が飛び込んで来た。」

「どうしたのじゃ?」

「……………」

「何じゃと! 解った。すぐ向かう。決して早まるでないぞ!」

「そう言ってメッセージの呪文を終了すると、後をイサブロウに任せ、ヴァイエスト、サイルン、シーリイを伴い闇へと消えた。」



くナザリック地下大墳墓 第九階層 アインズ執務室く

(ペツタンペツタン、毎日判子を押すだけの仕事って……………ピッチさん、どこで遊んでるんだろう)

頭の中で、そんな愚痴を零しながらアインズは仕事を続ける。その時、本日のアインズ様付き当番メイドからデミウルゴスが面会を求めていると告げられる。別段断る理由も無く、アインズは即時許可を出す。

扉が開かれ、デミウルゴスが入室する。背筋を伸ばし、大きな歩幅で歩くその姿は、どこか気品を感じさせる。執務机の前、二メートル程の所で立ち止まると、デミウルゴスは礼を持って腰を折る。

「アインズ様。この度はお時間を取って頂き、デミウルゴス感謝致します」
「うむ。ナザリックの為に働いてくれるのだ、当たり前前の事だろうか？」
「ありがとうございます」

一例の挨拶を終え、本題へと入ろうとしたアインズだったが、最近疑問に思っている事をデミウルゴスに聞いてみようと思いを開く。

「デミウルゴス。少し聞きたいのだが……………最近アルベドの姿を見ないのだが？」

この問いに、デミウルゴスは若干頬を引きつらせ、眉間に人差し指を置きながら、言いつつ口を開く。

「あの方は……………何でも病欠、とかで」

「び、病欠？ アルベドは病気なのか?!」

アインズは立ち上がり、驚きを顔にする。だが、デミウルゴスの態度は冷静で、呆れている様にも見える。

「い、いえ。アインズ様に心配して頂く様な事柄ではありません。アルベドの病気は、何でも……………おおさま欠乏症、とか言う物だそうで」

申し訳なさそうに、デミウルゴスはそう告げる。

「おおさま欠乏症？ 何だそれ。アインズは思いに浸る。」

（おおさまは、王様だよな。と言う事は、ビッチさんか。それが欠乏している？ うん？ どう言う事だ？）

「全く守護者統括殿にも困った物です。連日、星青の館に入り浸って、何が欠乏すると言うのか」

デミウルゴスの愚痴の様な言葉を聞き

（ああ、そう言う事か。ビッチさん、ナザリックにいる事になつてゐるからなあ。デミウルゴスからすれば、愚痴の一つも出るよなあ。それにアルベド。寂しいんだろなあ。ビッチさん、嫁さんほおつて置いて何所行つてんの？ 後で連絡してみるか）

「話がそれたな。それでデミウルゴス。用題は何だ？」

「はい。アインズ様」

そう言つてデミウルゴスは、数枚の羊皮紙を差し出す。

「まず一つ目ですが、スレイン法国についてです」

「うむ」

「アイテムの効果か、魔法かは判明してはおりませんが、スレイン法国の中枢の監視は無理との事です」

「何？」

「放つたシャドウデーモンも……………全滅、との事」

「何だと！」

アインズは驚きと共に立ちあがる。が、すぐに沈静化が起こり着席する。

「依然法皇の正体は不明、と言う事か」

「はい」

「それに……………ニグレドの監視を阻害する物に、シャドウデーモンを打ち滅ぼす

者か。今後一層法国の監視を強化せよ」

「畏まりました。次の案件ですが……」

そこまで言つて、デミウルゴスは一つ咳払いをする。どうやら、こちらが本題の様だ。「現地の、巫人などの強さを図るための実験をしようと思うのですが、許可を頂ければ」と

「現地の巫人だと？ おおよそはリザードマンで調べは付いていると思うが？」

アインズの言にデミウルゴスは尤もと頷き。

「確かにリザードマンの強さは把握できました。ですがアインズ様、他の種族はどうでしょう？ エルフ、ドワーフなどは」

「成程な。では、どの様に図る」

この展開を待っていたのか、デミウルゴスは笑顔で計画を語る。

「王国の南に、アベリオン丘陵と言う場所があるのですが、最近そこでダークドワーフと、ダークエルフの集落が発見されました」

「ほう」

「そこに、イビル・レジテンズ悪魔の宮殿の魔法で強襲を掛けます」

イビル・レジテンズ（悪魔の宮殿。確か、第七位階の召喚魔法、だったよな。アーマゲドン・イビル最終戦争・悪の劣化版みたいなやつ。効果はたしか……アーマゲドン・イビル最終戦争・悪では無秩序だった悪魔達を、レベルを下げる事を

条件に指示を与える事が出来る様にした魔法だったかな。召喚される悪魔のレベルは………Lv25以下のランダムだったか)

「成程な。良いだろう。許可する」

「おお！ 有り難き幸せ」

そう言つて満面の笑みを浮かべると、デミウルゴスは退室して行った。

愉悦に浸りながら、デミウルゴスは第九階層の廊下を歩く。宣戦布告は何時しようか。時間的猶予はどれほどにしようか。主の満足行くレベルで戦つて欲しいと言う欲望が湧きあがる。

だが、デミウルゴスは見誤っていた。かつて、自身が最も憎むべき者から進言された言葉を失念していた。そして、彼の地に今、誰の傘が開かれ様としているのかをデミウルゴスは知らなかった。

宝石と黄金

猫と侠客

スレイン法国の北西辺りを、ローブ姿の二十名程の集団がさらに西にあるカーデ連峰を指しひた歩いてた。

カーデ連峰とは、その峰がアペリオン丘陵へと繋がる山々の総称である。

集団に目を移せば、一見傭兵部隊か行商人のキャラバンにも見えるが、その身に纏うマントの縫製、新しさなどからどうやら別の目的の集団と思える。その集団の真ん中、囲われる様な位置に居る者が、不意に口を開いた。

「いやー、思ったよりも堅物でこまっちゃったねえ」

妙に甘ったるい声だ。どうやら、その身は女性であった様だ。その言葉に呼応する様に、右隣りに位置した者が口を開く。

「しかし交渉が失敗したとなると、何と言って詫びれば良いのだ？」
低い声だ。こちらは男の様だ。

「うーん。気にする事は無いんじゃない？」

心配を顔にする男に対して、女は茶化す様に男の言葉を否定する。

「しかし妹よ、相手はあの法皇だぞ」

女の左隣の男が異議を口にする。

此の者達の正体は、スレイン法国使節団。

中央の女は、クレマンティヌ・レクタリアンB・クインティア。スレイン法国法皇リリー・マ

ルレーンの小姓であり、現在勅使として交渉を行っている人物だ。ちなみに、法国へと再帰属するに当たり、彼女自身の希望により洗礼を受け洗礼名を授かっている。まあ、この女が勝手に決めた洗礼名なのだが。

右隣の者は、スレイン法国の暗部漆黒聖典の隊長を務める者。

そして左側の男。前の男と同じく、漆黒聖典に籍を置き、また中央の女クレマンティヌの実兄でもある人物。

周りを固める者達は、諜報部隊風花聖典と、殲滅部隊陽光聖典から抜擢された者達だ。現在彼らは、法皇の勅命であるヴォーリアバニーの女王との同盟を、無事……………失敗し、次の目的であるダーク・エルフとの同盟を成すべき、彼らの住まう土地へと向かって行っている途中である。その最中、失態を恥じる漆黒聖典に対し、それは杞憂であるとクレマンティヌは語るのだ。

「あの兎娘。ヴァイエストだっけ？ アレを連れて行かなかったって事は、どうでも良かったんじゃない」

「何が良かったんだ？ 妹よ」

「うん？ だーかーらー、今回の任務の目的は、早急な同盟締結じゃ無かったってことお」

「どう言う事だ？」

漆黒聖典隊長は思い悩む。元々直情思考の持ち主である彼には、リリー・マルレーンの天然パーマの様なグニャグニャした考えは理解出来ないのだ。クレマンティーヌは、そんな隊長の固まった表情を見

「大体、私を勅使に任命した時点で、無理だつて解つているしねえー」
そう言つて楽しそうにケラケラと笑う。

だが、身内の情からか、兄であるクワイエツセが窘める様に口を開く。

「妹よ。その言い方だと、陛下まで馬鹿にしている様に聞こえるぞ」

「そうだ。あの方の機嫌を損ねたらどうなるか。俺達は頭を消し飛ばされたんだぞ！」
クワイエツセの言葉を引き継ぎ、漆黒聖典隊長が釘を刺す。だが、クレマンティーヌはさらに笑い声を高め

「頭を吹き飛ばされたあ？ あはは、いいねえ。幸せだよねえ」

「どう言う物言いだ、妹よ！」

「私はさあ、スライムに食べられたんだよねえ。生きながらさあ。少しずつ少しずつ

さあ」

この発言に、漆黒聖典の二人は言葉を失う。

「お、お前、何をやったんだ？」

どもりながら漆黒聖典隊長は口を開く。

「いやあ。ある人をさあ、拷問して殺しちゃってさあ」

クレマンティーヌの言葉で、リリー・マルレーンの正体を知る男達は理解した。あの法皇は、やはり異常な存在である事を。だが、違う疑問も浮かび上がって来る。法国内での、あの暴君の態度についてだ。法皇が、本当に慈悲無く異常な人物であったなら、聖典隊長、特に風花と水明の隊長は居ないはずなのだ。何度も見た事があった。神宮殿の廊下で、ふざけ合っているとしか思えない口喧嘩を。その光景と、あの時の恐怖が漆黒聖典二人の脳裏に渦を巻く。だが、悩み、考えても答えなど出るはずはないのだ。これからどう付き合うのか、それだけなのだ。

そんな兄と元上司の思いなど無視する様に、真面目な表情に戻ったクレマンティーヌがボソリと呟く。

「それにさあ、私に与えられた任務は遂行出来たし」

「！」

その言葉に、再び漆黒聖典の二人は絶句する。自分達が言い付けられた任務の他に、

何か重要な機密があつた様なのだ。だがその考えを、クレマンティーヌは鼻で笑う。

「はあ。あんた達さあ、言葉の裏も読めない様じゃ、陛下の手足にはなれないんだけど。大丈夫なの？ 馬鹿なの？」

この言葉に、少々カチンと来る物があるが、此処は黙つて教えを乞うのが大人と言う物だろう。

「大体さあ、何で陛下が村にヴァイエストを同行させなかつたと思うのよ」

そう言われても、二人には答えられなかつた。その何とも情けない兄と元上司の顔を見つつ、クレマンティーヌは一つため息を漏らし

「例えば、聖典の誰かが敵国に捕まつたとするでしょお。そんなもつて、そいつが何年後かにふらりと帰つて来たらどうする？ それも無傷で。敵国の兵士と一緒にさあ」

クレマンティーヌの問いに、答えを出すすれれば一つしか無い。答えは、疑う、だ。

そう、今回の同盟の話素直に考えれば、ヴァイエストを仲介役として話を進めるのが正しい様に見える。だがそれは、同盟相手を知っている事が条件なのである。だからこそ、法皇リリー・マルレーンはヴァイエストを伴わず法国の兵のみでの使節団を組んだのである。

つまり、クレマンティーヌに課せられた言葉なき勅命は、相手の人と成りを見てこい、と言う物である。それが絶対であり、最も重要な任務であつた。それを理解出来ない者

は、自分の手元には置かない、と言う意味も込めて。ニグンが動けない今、イサブロウをリリー・マルレーンが徴用する理由もそこにあつたのだ。

そしてクレマンティーヌはこう続ける。今の地位で踏ん返り返って居たかつたら、言葉の裏を読み取る事を覚えよと。自分が地下組織内で学んだ様に。でなければ、火滅の隊長の様に左遷の憂き目に合うと。



あの会話をした日から幾日かが過ぎ、一行はダーク・エルフの国があると言う森の入口に到着した。

風花聖典の何名かが前に出、森の入口を探知の魔法で探って行く。ほどなくして、風花聖典の一人が手を挙げる。漆黒聖典隊長、陽光聖典選抜、クレマンティーヌ、風花聖典選抜、クワイエッセの順でその方向へと足を踏み入れる。一瞬、立ち眩みの様な眩暈が遅い、それが治まった時には、目の前に道が伸びていた。

「幻視の魔法か？」

漆黒聖典隊長の問いかけに、風花聖典は頷きで返す。

一行は出現した道を、警戒を最大限にして進む。漆黒聖典隊長は法皇から貸し与えられた槍を握りしめ、クレマンティーヌは腰に下がる刺殺武器ステイレットに手を掛ける。他の隊員達も、各々の武器に手を掛けながらゆつくりと歩を進める。森の中を五百メートル程進んだらうか？ 上空——恐らくは葉で隠れた木の上だらうか——声が聞こえた。

「何者だ。此処は我らの土地である。早々に立ち去るが良い。さも無くば……」

太い男の声だ。法国の者達の喉がゴクリとなった。だが、そんな緊張感もどこ吹く風と、クレマンティーヌが一步前に出た。

「あのさあ、物騒な事言つてないで降りて来てくんない？ あたしらスレイン法国の者だけど。あんたらの所の大將に合わせてくんない？ ぶち殺して引きずり出しても良いんだけどさあ。キャハハ」

顔に半月を浮かべ、兆発とも脅しとも取れる言葉を口にする。上空に殺気が広がる。その瞬間、地面に複数の人影が落ちてきた。浅黒い肌と特徴的な笹の様な耳。ダーク・エルフで間違いない様だ。

「やーつと出てきてくれた。いやあ、待ちくたびれちゃったよお。それでどおする？ 殺し合う？ 大將に会いに行く？ それともお………大將の首、取っちゃおつかあ」

ダーク・エルフ達の手が、腰の剣に掛る。
その時

「やめな。なかなか良い根性してるじゃないか。良いだろう。付いてきな。親父に会わせてやるよ」

「お、お嬢！」

年若い——エルフ特有の見た目では年齢は凶れないが——女が、男達をかき分け歩み出てきた。

銀色の髪に、鋭い目つき。女性特有の艶めいた身体に、見事なプロポーシオン。それをボンテージ風のレザーアーマーで引き締めた、誰が見ても、見惚れる様な美女である。その口から放たれた言葉から、どうやら族長の娘の様だ。

「アタシはヴォルフラム。族長の娘だよ。アンタは？」

「私？ 私はクレマンティース。よろー」

そう言つてひらひらと手を振る。

一様の緊張感を残しつつ、場は何とか治まったが、殺気の様な物は残りつつ一行は族長の下へと案内される事になった。案内か連行か。それは感じ取る者、様々だったが。

ダーク・エルフの集落に到着し、一行は周りの建物よりも豪華な家へと通された。どうやら此処が族長の住まいの様だ。クレマンティース、漆黒聖典隊長、クワイエツセの

みが広間に通され、暫し待てと言いヴォルフラムは退室して行った。

部屋には椅子や机が無く、床に木の蔓であろうか？で編みあげられた丸く平らな物が置かれている。ここでは直に床に座る様だ。そしてこの平らな物はクツションか何かなのだろうか。そう確信し、三人は座りながら族長の到着を待つ。

どれほどの時間が経っただろうか、背後のカーテンが揺れる気配がした。クレマンティーヌが身震いするほどの殺気と共に。族長は三人の横を通り抜け、眼前の僅かに高くなつた場所に腰をおろした。銀色の髪を短く刈り込み、目つきは恐ろしく鋭い。頬に刻まれた大きな傷が、歴戦の戦士を思い起こさせる。雰囲気は盗賊団の首領だが。族長は三人にぐるりと視線を巡らせ

「それで、誰が俺を殺してくれるんだ？」

ニヤリと口角をあげ最初の一言を告げる。漆黒聖典の二人は、頭を抱えたい思いだった。この会合は失敗すると。だが、クレマンティーヌはへらへらとした笑顔を浮かべながら族長と相対する。

「いやー。そのつもりだったんだけどさあ、私じゃ無理だわ」

軽口とも取れる様な言葉遣いで、あつさりとは敗北を認める。

「あなたの姿を見てからさあ、何回も殺す方法を頭の中で試してみただけどお、最初の一太刀で殺されるイメージしか浮かばない。お手上げだね、こりゃ」

族長はクレマンティーヌの言に、僅かに口角を上げると

「ほう。どうやら三人の中で、お嬢さんが一番の強者の様だな」

族長とクレマンティーヌが、視線を絡み合わせながら笑顔を作る。それは、視殺戦と言つてもいいほどだった。

「そろそろ用件を言つたらどうだ？ 雌猫」

「それは話が早いねえ。親分さん」

漆黒聖典の二人は、生きた心地がしなかった。クレマンティーヌの物言いは酷く失礼で、いつ目の前の者が白銀を晒しても良い状態だ。

「ホントは同盟の話を持つて来たんだけどさあ。やめとく」

「ほう」

族長の瞳が細く鋭い物に変わる。

「だからさあ、こう言うわ。陛下の子分になれ。世界を創る為の手足として」

クレマンティーヌの言葉、それはまるで法皇リリー・マルレーン。いや、煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイムの物言いにそっくりだった。

「法国は俺に従属を求めるのか？ 舐められた物だな」

「法国？ 馬鹿言うんじゃないよお。誰が法国なんて言うチンケな物に忠誠を誓えと言つたよ。私はこう言つたんだよお！ 我が主、煉獄の王ビクトリア・F・ホーエン

ハイム様の下僕となれ!、とねえ」

二人の視線が絡み合う。場が今まで以上の緊張が包む。その時、外からダーク・エルフの戦士と思われる男が飛び込んで来た。「何事か!」と叱責するヴォルフラムに

「大変です! ダーク・ドワーフの軍勢が攻め込んで来ました!」

「どうやらこの一件、簡単には済みそうには無い様だ。」

争いへの序曲

ダーク・ドワーフの襲来。突然の襲撃に、ダーク・エルフの集落は騒然となった。

法国勅使との会議中であつた族長も例外では無く、言葉短く中座して行つた。その光景を沈黙のまま見送つたスレイン法国の者達も、一度頷き後を追う。

扉を潜り外へと出ると、集落の中央に位置する広場がやけに騒がしい事に気づく。面々はクレマンティーヌを先頭に、その場へと急ぐのだった。垣根の様に集まつたダーク・エルフ達をかき分け、現状確認が出来る所まで来ると、報告とは少々違う空気に気付かされる。クレマンティーヌは一步前に出、族長の娘であるヴォルフラムに声を掛ける。

「どういふこと？ 敵襲にしては随分と静かだけど？」

その声に驚いた様にヴォルフラムは振り向き、人物を確認しつつ口を開く。

「まあ、ね。襲撃は襲撃でも、別の襲撃みたい。コイツ等は、被害者」

そう言つてダーク・ドワーフ達を指差す。

——ダーク・ドワーフ。ドワーフの亜種である。通例ではダークと誇称される種族

は、ダーク・エルフなどと同じく肌が黒くなるのが知られているが、ダーク・ドワーフだけは例外である。通常のドワーフが健康的な肌色をしているのと違い、ダーク・ドワーフは病的にまで青白い。その理由は、祖がほぼ地上には出ず、地下で一生を終えていた事が起因と言われている。

そしてもう一つ、瞳の異常である。通常のドワーフと比べると、黒眼の部分が異常に大きいのが特徴だ。それ以外には大きな差は無く、鍛冶を主な仕事としているのも同様である。唯一、信仰の加護によつて、「黒き炎」と呼ばれる火を扱える、と言う事以外は――

広場の中央に腰を降ろすダーク・ドワーフの人数は二十名程。全員では四百から五百名程になる様だが、広場にいる部族の纏め役以外は、別の場所を集められているらしい。そのダーク・ドワーフの、恐らく族長と思われる男に、ダーク・エルフの族長が話かけているのがクレマンティーンの眼に留る。その二人の方へと、クレマンティーンは如何にも当然と歩き出した。

「その話、私も混ぜてくれない?」

あまりにも無作法に、そして自然に声を掛ける。

「雌猫か。おめえさん話に加わるつて事は、法国も巻き込むつて事だぜ。解つてんのか

「？」

低くドスの利いた声でダーク・エルフの族長が問いかける。

「ま、それもやむ無しだねえ。ここで見捨てて帰ったら、陛下に何されるか」

おどける様に両手を上げ、クレマンティーヌは答える。

「ほう。おめえさんの所の大將は、随分と面白いヤツ見たいじゃねえか。神様狂いの国

の王様とは思えねえな」

「とーぜん。陛下の機嫌を損ねたら、六大神のクソツタレだつて殺されるからねえ」

そう言うクレマンティーヌの言動が気に入ったのか

「まあいい。聞くだけ聞いてけ」

ダーク・エルフの族長は許可を出した。



話は数日前まで遡る。

アベリオン丘陵から南へ僅かの上空に、その者は居た。夕日を背に、赤を基調とした

異国風のスーツと呼ばれる物をきっちり到着込み、清潔感漂うオールバックの髪を風に揺らし、人では無い特徴を顕にしながら。

「あの村ですね」

そう呟きながら、サングラスの位置を正す。この者、ナザリック地下大墳墓 第七階層守護者 デミウルゴス。その宝石の瞳に、しっかりと標的を定め、ゆつくりと降下していった。

ダーク・ドワーフ達が夕食の支度で忙しくしている所に、それは降り立った。何でも無い様に。当たり前の様に。右手を胸に当て、左腕を水平に広げ、まるで道化師の様に腰を折る。何者か？ と斧を手に男体が集まり警戒の様を見せる。だが、デミウルゴスは意にも解さず口を開く。

「慌ただしい時間にお邪魔して申し訳無い。この村の全員を集めて貰えますか？」

実に丁寧な言葉だった。だが、ダーク・ドワーフ達は口々に「何者だ！」「何用じゃ！」などと真意を問う言葉を放つ。これでは話も出来無い。デミウルゴスは理解に苦しむと思いつつ、力を振るう。

「黙りなさい！」

一喝言葉を紡ぐだけで、ダーク・ドワーフ達の言葉は妨げられる。

支配の呪言。Lv40以下の者達を支配下に置く事の出来るスキルである。

「もう一度だけ言います。この村の全員を集めて貰えますか？」

ダーク・ドワーフ達は従う他無かった。本能的な恐怖が、目の前の者が強者であると警鐘を鳴らしていたからだ。ほどなくして集まったダーク・ドワーフ達に向け、デミウルゴスは演説の様に言葉を告げる。

「これより七日後。我が軍勢が、この地を強襲致します。皆様には御健闘頂きますよう。おっと、忘れていました。私の名は、ヤルダバオトと申します」

そう名乗った瞬間、集団の中に居たダーク・ドワーフの女性が一言「何故？」と口にする。その言葉を受け止めデミウルゴス、いや、ヤルダバオトはニヤリと笑みを浮かべる必要はありませんよ。あなた達は只、我々の期待通りの結果を示して頂ければいいのです。では、七日後に」

そう言つてヤルダバオトと名乗った悪魔は去つて行つた。



くナザリック地下大墳墓 第六階層 星青の館く

ビクトーリアの寢室。そのベッドの中で、産まれたままの姿で愛する者の香りに包まれ、愛する者との情事を思い浮かべながら艶っぽく秘め事を楽しんでいたアルベドの脳裏に言葉が響く。

「あら、姉さん。どうしたの?」

言つて自身の愛液で濡れた指をペロリと舐める

『……………』

「ええ、そう。その中に? 解ったわ」

ニグレドとのメッセージのやり取りを終えると、矢継ぎ早に次の相手へとメッセージの呪文を展開する。相手とはすぐに繋がった。

「私よ。そちらで問題が起こっているようだけれど、それに私の旦那様は関わっているの?」

『……………』

「ええ。そう。解ったわ。くれぐれも言いつけ通りに」

そう言つて二つ目の確認を終える。

そして、最後の相手へとメッセージを繋げた。

「申し訳ありません。お時間は大丈夫でしょうか? アインス様」

『ああ。問題は無い』

慈悲深き支配者の凛々しい声を聞き、緊張しながらアルベドは口を開く。

「大変不敬な事だとは存じておりますが、アインズ様にお願いの儀があります」

その言葉を受け、アインズの言葉が一瞬止まる。

「申し訳御座いませぬ。何卒御許しを！」

アインズの沈黙を、不快と見たのか、はたまた最近仕事をサボリ一人遊びに熱中していた事への叱責と取ったのか、アルベドは酷く狼狽する。だが、驚いたのはアインズも同様だった。只、単に僕達からの願い、と言うかおねだりされた事に嬉しくて、言葉を失っただけなのだ。

『い、いや、待てアルベド！ すまない、少しビックリしてしまつてな。それで、何をおねだり……いや、願いは何だ？』

アインズのいつも通りの優しげな言葉に、アルベドはほっと胸を撫で下ろし、願いを伝える。

『成程な。ビッチさんが関わっているのだな？』

『はい。ビクトーリア様のペットに確認を取りました』

『そうか。そう言う事であるならば許可しよう。いや……』

途中まで言つて、アインズは言い淀む。どう言うべきか悩んで居るようだ。許可、と

言う言葉の後の沈黙。何故か今回アルベドは、安心して待つ事が出来た。

『そうだな。アルベドよ、アインズ・ウール・ゴウンの名において命ずる。ビクトーリア・F・ホーエンハイムを、全力を持ってサポートせよ!』

「有り難き幸せ。守護者統括アルベド、生命を持って」

この言葉と共に、メッセージは途切れる。アルベドはその艶やかで妖艶な、まだ汗と女の淫靡な香りが残る身体をシートで包み立ちあがる。

「アインズ・ウール・ゴウンか……………クダラナイ。ビツチ様の物に手を掛ける罪、その身に味わいなさい……………デミウルゴス」

言葉と共に、リング オブ アインズ・ウール・ゴウンを発動させた。

戦争準備

自室へと転移したアルベドは、湯浴みで汗を流し部屋の一角を見つめる。そこには自身の鎧、ヘルメス・トリスメギストスの姿があつた。まるで立像の様に存在するソレを見つめ下唇を噛むと自室を後にする。

第九階層の廊下を足早に歩き、あるドアの前で立ち止まった。そこは自身の創造主、タブラ・スマラグディナの部屋である。アルベドは、何の躊躇も示さずドアを開けると、まるで解つていた様に目当ての場所へと進む。

目当ての場所。そこには、大きな両開きのクローゼットがあつた。扉の取っ手に手を掛け、観音開きのドアを開ける。そしてそれは現れた。

タブラ・スマラグディナが特別に製作した、アルベド用の決戦装束。タブラ曰く花嫁衣装。アルベドはドレスを脱ぎ去り、それを着用する。

衣装の形状は、過ぎた日の記憶。過去への憧憬。忘れられた歴史。和服と呼ばれる物に酷似していた。それも、花魁と呼ばれた遊女の物に。

白い薄手の着物に袖を通す。次は黒い着物。そして最後に、豪華で美麗な赤い着物。それには、金糸で幾つもの小さな蝶と、裾の辺りに一際大きな蝶が刺繍されていた。ア

ルベドは知っていた。黄金の蝶が何を意味するのか。それは、自分の愛する者。煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムの旗印。

その衣装を、これまた豪華な装飾の入った帯で飾ると、白銀のガントレットとグリーンを着用した。

そして、クローゼットに残された二つの物を手に取る。一つはフラッグポール。ポールの先端には、金糸で彩られた翼と角の刺繍が施された黒い旗。このフラッグポールは、通常アルベドが使用しているバルディッシュと同じ物の、外装を弄った代物だ。

そしてもう一つ。眼の部分だけくりぬかれた白い仮面。アルベドはその仮面を抱きしめ

「愛しのリリー・マルレーン」

タブラ・スマラグディナが、ビクトーリアへの思いと共に、昔呟く様に歌っていた歌詞の一節を口にする。アルベドが今、身に纏う装備の中で、唯一創造主が製作していないのがこの仮面。アルベドの誕生を祝して、ビクトーリア自身がタブラに送った物だ。その効果は、情報の遮断、及び偽装と言う物。その仮面を胸に抱きながらメッセージの呪文を発動する。

『ほいほい』

甘ったるく軽い返事が返って来た。

「私よ。準備は整ったわ。ゲートをナザリックに繋げなさい」
『りよーかーい』

メッセージを終了し、次は転移門の管理者、オーレオール・オメガに繋げ、クレマンティーンが発動したゲートを繋げる様に、アインズの名前で指示を出す。

「準備は整ったわ」

そう言って笑みを浮かべる。その微笑みは、子を守る獅子の様であった。



くバハルス帝国 王城廊下く

「しかしのうイサブロウや」

「何です陛下?」

「ゴリラの呼び名を変えねばならぬのう」

突然の言葉に、イサブロウは首を捻る。

「だってそうじゃろ。本物が帝国におったのじゃから」

「陛下、ひよつとして……………バジウツド殿の事ですか？」

バジウツド・ペシユメル。帝国四騎士。今では三騎士と言った方が正しいのだが、その内の一人、雷光を名乗る物だ。

「もう一人おったじやろ。確か……………ナザ……………」

「ナザミ・エネック殿。不動と呼ばれる御方でしたな」

イサブロウの言葉に、リリー・マルレーンは一つ頷くと

「アレらが真にゴリラと言う者よ。我が国のゴリラでは、いささか力不足と言う物」

「ほう。では何と？」

「……………コンドウ、かろう」

そう言うリリー・マルレーンの言葉に、イサブロウは首を傾げる。

「陛下。意味が解りませんが？」

「うむ。コンドウとは、古来からゴリラを生業とする者達の総称じやな。シユウジしかり、イサミしかり、イサオしかり」

「成程。シユウジやイサミ、イサオは、人名なのですな。では今後、ハーマン殿の事はコンドウと」

イサブロウの言に、リリー・マルレーンは大きく頷いた。

「では、新しい火滅と陽光の隊長はいかが致しましょう？」

この問いに、リリー・マルレーンはどうか、と思ひ至る。帝国に来訪する前、法国では二つの人事異動が行われていた。火滅聖典と、陽光聖典の隊長の交代である。陽光聖典は、ニグンが隊長職を辞した後、副隊長が繰り上がったのだが、自分には荷が重いと
の直訴により選り直しとなった。

火滅聖典に至つては最悪の状態で、先の法国を最も引きずつてゐる様な男だった。リリー・マルレーンは、その男を閑職へと回し、結果二つの聖典の隊長が選り出される事になった。

選考は火滅、陽光、漆黒を除く三聖典の隊長とリリー・マルレーンで行われ、ゴリラ改めコンドウの下に居た問題児二人が選出された。リリー・マルレーンは件の二人の顔を思い出しながら

「コンドウの下に居たのじゃ。ヒジカタとオキタで良からう」

ケラケラ笑いながらそう言い捨てる。だがその理屈は、エリートであるイサブロウにも解らなかつた。そんな心中を覗き見た様にリリー・マルレーンは補足を加える。

「シンセングミ。その括りじゃな。忘れても良いぞ」

「いえ。エリートとして覚えておきます」

「意味はないのじゃがなあ」と呟くピクトーリアの脳裏に、言葉が飛び込んで来た。

『へーかー。肉奴隷のクレマンティーヌでーす』

この言葉に、リリー・マルレーンの肩がピクリと跳ねる。

「雌猫。人間きの悪い事を言うでは無い」

『そーお？　じゃあ、愛人のクレマンティーンでーす』

「ほう。ならば正妻は誰じゃ？」

『一号がアルベド様でえ、二号がアンチクシヨウ』

「……………」

『じょーだんだつてばあ。ちよつとコツチでキナ臭い事になつててさあ…………』

リリー・マルレーンの肩が再び跳ねる。リリー・マルレーンは沈黙で答え、クレマンティーンはそれに応答する。

『今、ダーク・エルフの集落に居るんだけどさあ、そこにダーク・ドワーフが逃げて来てさあ。そんで話を聞いたら悪魔の軍勢が攻めて来るつて言うじゃない？　どうする？』

陛下

クレマンティーンに暫し待てと命を出し、イサブロウへと向き直る。

「イサブロウ。悪魔が多数現れたと言う情報は上がったおるか？」

この問いに、イサブロウは顎に手をやり暫し考えた後

「ありませんね」

簡潔に答える。

「では質問を変えよう。悪魔達は、大量に湧く物か？」

イサブロウは黙って首を横に振る。そしてリリー・マルレーンの視線は、ヴァイエスト、セイレーン達へ。それを受け止め、三人は同様に首を振る。

「左様か。ならば、何者かの手引き、と言う事じゃな」

そう言ったリリー・マルレーンの顔を、イサブロウは直視出来なかつた。それほどまでにリリー・マルレーンの怒りは深い物だったからだ。

虚空からフリントロック短銃を取り出すと、迷い無く引き金を引く。破裂音と共に、闇闇が現れる。

「イサブロウ、後は任せる。メロディ、また子、付いてまいれ。ノリスケはワカメに繋ぎ一族を動かせ。落ち合う場所は、うぬの魂魄が彷徨っておった森じゃ。使いの者を送る」

「「畏まりました」」

その言葉を合図に、リリー・マルレーン、ヴァイエスト、サイレンは闇に消えた。

くスレイン 法国 最高神官長執務室く

ニグンが日常業務の書類仕事をこなしていた時、眼前に闇が産まれた。通常ならば驚くべき事なのだろうが、ニグンに取っては当たり前の事であった。

「おや我が王よ何用で？」いつも通り軽口で対応しようとしたが、その意思は一瞬にして消し飛んだ。急ぎ立ち上がると、現れたリリー・マルレーンの前に膝を折る。リリー・マルレーンは、その姿を視界に収めると

「ニグン。火滅と陽光の隊長を呼べ。聖典を動かす」

「皇の御心のままに」

言うや否や、ニグンは足早に退室して行つた。そしてリリー・マルレーンも同様に、謁見の間へと向かつた。

く 神宮殿 第一塔 法王謁見の間く

リリー・マルレーンが赤いドレスを揺らし謁見の間のドアを開けると、二人の聖典隊長はすでに到着していた。傳かすくく訳でも無く、敬意はあつても膝ま付く事も無く、ただ自然体で二人はその場にいた。そしてリリー・マルレーンも玉座に付く事無く口を開く。「キサマら、火滅と陽光を動かす。場所はアベリオン丘陵近く。全軍を持つて悪魔の軍勢を殲滅しろ」

「ああ？ 何言つてんだ。俺達火滅は国の守りだ。なんでアベリオン丘陵くんだりまで出向かなきやいけねえんだよ」

「まあ、俺達陽光は殲滅部隊。陛下がやれつて言うなら従いますがねえ」

火滅聖典隊長ヒジカタは憮然と、陽光聖典隊長オキタは飄々と、それぞれの心境を隠す事無く口にする。

——ヒジカタは三十台前半、オキタは二十代後半。二人とも剣の腕は超一流で、漆黑聖典に入っても可笑しくは無い人物だ。だが、その素行不良が原因でどこの聖典でも持てあまされ、結局は人の良い水明聖典隊長ハーマン、いや、コンドウに拾われたのだ。――

リリー・マルレーンはヒジカタの胸倉を掴み柱に叩きつけると

「かの場所が法国の土地ならば良いのだな？ V字前髪」

「ああつー！」

それでもヒジカタは屈しない。

「ああつ、では無いわ！ 答えろヒジカタ！ かの場所が法国の土地ならば良いのだな？」

細腕でヒジカタの身体を持ち上げる。息が詰まり、呼吸が困難な状態でヒジカタは短く「ああ」と肯定の意を告げる。リリー・マルレーンは投げ捨てる様にヒジカタを解放すると

「雌猫、妾じゃ。早急にその土地を手に入れる。代金は、そうじゃなあ、ダーク・エルフとダーク・ドワーフ全員の命と繁栄」

メッセージを繋げてから約五分。返事が返つて来た。リリー・マルレーンはそれを沈黙で受け取ると、二人の隊長と向き合う。

「交渉は締結された。今、この時より彼の地は法国の領地である。これで問題は無いな、ヒジカタ？」

「こゝも手早く無茶苦茶に外堀を埋められては、最早ヒジカタは領くしかなかった。それを確認し、リリー・マルレーンは背を向ける。

「本日中に立せよ！ 作戦の目的は、敵悪魔の殲滅！ 一匹残らず塵と化せ！ 法皇リリー・マルレーンの勅命である！」

退出して行つた法皇の背を見送り

「なかなか面白い陛下じゃありませんか。そう思いませんか、ヒジカタさん？」

「ヒジカタつて俺かよ？」

「ええ。そうらしいですぞ。ちなみに、俺の事はオキタと呼んでください。それで、どうです？」

問われ、気分を害した様に一度舌打ちをし

「無茶苦茶なヤツだ。だが、悪くない」

唇の端を僅かに上げ、その言葉にした。

リリー・マルレーンは執務室へ向かう間も、今回の黒幕について考えを巡らす。だが、その人物はすでに判明していた。ヤルダバオトと名乗った悪魔。クレマンティーヌがダーク・ドワーフから聞き出した情報から導き出される人物は一人。

「舐めおつて。あれほど言つても解らぬか。忠を履き違えた馬鹿者が。タダで済むと思ふなよ……………デミウルゴス」

戦いの火蓋は切つて落とされた。

集う者達

ヤルダバオトの宣戦布告から四日後、ダーク・エルフとダーク・ドワーフの連合軍は、戦場となるダーク・ドワーフの集落に集結していた。

全軍で三百二十名。ダーク・エルフの総勢三百の内、戦える者は百。ダーク・ドワーフ、五百の内二百。そして、スレイン法国の勅使隊、二十。僅かこれだけ。実に心もとない数字だ。

「自殺行為だねえ」

周りに視線を巡らせながら、クレマンティーンは呟く。

「まあ、仕方ねえだろ。俺達もドワーフ達も長命種だ。子が産まれ難いからな。それに……俺達は一度故郷を捨てて、散り散りになっちゃまっているしな」

ダーク・エルフの族長が自嘲気味にそう答える。

そこで一度目を瞑り

「それで、法国の動きはどうなんだ？」

「火滅と陽光が動くみたい。合計で二百ってトコかなあ」

「それでも五百ちよい、か……負け戦だな」

ダーク・エルフの族長はそう言いながらも、それを楽しむ様に口角を上げる。

「私もまともじゃ無いけど、あんたも大概だねえ」

「喧嘩は派手な方が良いだろう？ それに、まともじゃねえって言うなら、おめえさんとこの大将だ。土地を渡す代金が、俺達の命と繁栄だ？ 大法螺も此処まで行くと気持ちが良いじゃねえか」

そう言つて太く低い笑い声を上げた。だが、その姿を見るクレマンティーヌの瞳は細くなり

「陛下が参戦するなら、もっと面白くなるけど」

「はあ？ おめえさんそりやあどう言う……」

ダーク・エルフの族長がそこまで口にした時、村の入口を警備していた年若いダーク・エルフの男が駆け込んで来た。

「ぞ、族長！ な、謎の集団が近付いて来ています！」

この言葉を受け、ダーク・エルフの族長はクレマンティーヌへと視線を向ける。その視線にクレマンティーヌは一度頷いた。

「ギャーギャー騒ぐんじゃねえ。おい、髭達磨一緒に来な」

「お、おう」

短い言葉を交わしながら、ダーク・エルフ、ダーク・ドワーフの両族長とクレマン

ティーヌは村の外れへと歩き出した。

村外れで、五人の者達が相対する。

「おいオキタ、こりやあ外れだ。色白の髭達磨に、妙チクリンな格好した色黒爺。それに、ウチの重罪人様まで居るじゃねえか」

ヒジカタが言葉を切った途端、オキタが動く。神速、そう言えば良いのだろうか、ブロードソードとは思えない程のスピードで剣を抜き、眼前のダーク・エルフの族長へ下段から切り上げる。だが、その煌きは細い鋭利な刃によつて受け止められた。

「刀、ですかい？」

「ああ」

「ヒジカタさん。案外ハズレじゃあ無いかも知れやせんぜ」

「そうだな」

剣を引くオキタをダーク・エルフの族長はその視界に捉えつつ

「全く、おめえらみたいなのひよつこの狂犬を送り込んでくるたあ、法国も随分変わった物だなあ。興味が出て来たぜ、おめえらの大将に」

冗談を言う様に口を開くダーク・エルフの族長に対し、ヒジカタは

「幻滅すること請け合いだぜ。こんな死地に、可愛い信徒を送り込む様な法皇様だ。口

クナヤツじゃねえ」

「ふふつ、ははつ、あーはっはっはっはっ！」

どちらからとも無く笑いが起きる。

「しかしヒジカタさん。これじゃあダメみたいですぞ」

そう言つてオキタは、自身のブロードソードを背後に居た部下に投げ渡す。

「そうだな。少し癩だが、使うしかねえか」

ヒジカタも同じ行動を取り、部下から新たな得物を受け取る。

「ほう。おめえらも刀を？」

ダーク・エルフの族長が、興味深そうにそれを見つめる。

「キクイチモンジつて言うらしいですぞ。おい、犯罪者。お前の分も預かつて来てる。

とつとと受取りやがれ」

クレマンティーンヌに向け、二本の刀を放る。

「そいつは小太刀つて言うらしい。刀身が短いんで刺殺武器と同じ感じステイレットで使えるそう

だ。ついでに言うると、ヒジカタさんのは妖刀らしいんで、抜いたら呪われやすぜ」

「何渡してんだ、あのクソ女あー！」

決戦まであと三日、戦場は場違いな程の笑いが漏れていた。

「それで、何か新しい情報はあるのか？」

ダーク・エルフの族長は、柔らかな表情を消し、そう問いかける。

「確定の情報では無いが、相手は第七位階の魔法、イビル・レジテンス悪魔の宮殿つてヤツで仕掛けて来るだろう、と言う事だ」

「だ、第七位階だと!」

ヒジカタの発言にダーク・エルフの族長は驚きを示す。隣に視線を移すと、声には出さないがダーク・ドワーフの族長も同様の反応だった。

「おいおい、六大神や八欲王じゃねーんだぞ。それで、そいつはどんな魔法何だ?」

「ああ。何でも巨大な転移門を出現させて、そこから低レベルの悪魔を無尽蔵に召喚するらしい」

「無尽蔵だあ! それで、止める方法は?」

それを問われ、ヒジカタは如何にもウンザリとした表情で両手を上げる。

「簡単な事でさあ。門を破壊するか、術者を殺せば魔法は解除出来るつて事でさあ」
補足する様にオキタが答える。

ダーク・エルフ、ダーク・ドワーフの両族長も、ヒジカタと同じ思いに至っていた。確かに簡単な事だ。だが、それが最も困難であると知っている。何せ相手は第七位階魔法を使うと言う、神話級の化け物なのだから。ならば選択する手段は一つ。門の破壊である。

「その転移門つてのはどう言う物なんだ？」

ダーク・エルフの族長の問いに、ヒジカタ、オキタの両名は首を横に振る。

「解らねえ。巨大な門だつてのは聞いているが……」

「巨大ねえ……」

場は静まり返る。巨大な門。情報はそれだけだ。自分達で破壊可能かも解らない。だが、その中でオキタがダルそうに口を開く。

「一樣、こんな物を預かって来ているんですがねえ」

そう言つて一枚のカードを差し出した。

「なんだいそりゃ？」

問いかけるダーク・エルフの族長の言葉に、オキタは黙つてカードを手渡した。ダーク・エルフの族長は、珍しがる様に裏、表とカードを遊ばせながら確認をする。

「そいつに、微量な魔力を通してみてくたせえ」

ダーク・エルフの族長は、言われた通りに魔力を通す。すると、一瞬でカードは大きな筒状の物に変化した。直径三十センチ、長さ一メートル五十センチ程の物に。

「これは？」

「陛下から頂いた物なんですがねえ。何でも魔法の筒とか言う物で、マジック・シリンダーケツの魔法石に魔法を貯めて打ち出す物らしいでさあ」

「ほう。どれほどの魔法を貯め込めるんだ？」

フアイヤーボール
「火 球なら、三十発」

「ほう。すげえじゃねえか。で、数は？」

素直にダーク・エルフの族長は、関心の意を示す。

「二十本。陛下の言葉を借りるなら、敵が見えたら問答無用でぶつぱなせ。とのことでさあ」

「物騒過ぎるだろ、あの女あ！」

オキタの言葉に、ヒジカタはツツコミを入れる。だがその言葉を聞き、クレマンティーヌは思わず噴き出した。

「ああ？ テメエ、何が可笑しいんだ？」

ヒジカタは威圧的に口を開くが、当のクレマンティーヌは涼しい表情で

「陛下の言葉が物騒だっていうからさあ。本当に物騒なのは、陛下自身だってーの」

ダーク・エルフ、ダーク・ドワーフの族長は不思議な表情を浮かべるが、ヒジカタ、オキタの両名は「ああ」と納得の意を告げる。

「しかし、おめえらの大將は一体どこからそんな情報を？」

今まで疑問に思っていたダーク・エルフの族長が不意に告げた。

「知らねえ。と言いたい所だが、あいつも神話級の、いや、神話その物の化け物って言う

事だ」

ヒジカタの言を聞いたダーク・エルフの族長は、ニヤリと笑みを漏らし

「ほう。面白れえじゃねえか。法国の変化もソイツの仕業か？」

「ああ。コリ固まっていた法国を、天災さながらに更地に変えて行きやがった」

「ははっ！ 会うのが楽しみだ」

そう言つてダーク・エルフの族長は、遙か遠くに位置するスレイン法国を見つめた。



「小娘は？」

「迎えに出立致しました」

リリー・マルレーンの問いに答えたのはニグン。傍らには、サイレンとヴァイエストが控える。

「左様か」

言葉少なく、リリー・マルレーンは眼を瞑る。

（まず間違ひなく手駒の無いデミウルゴスは悪魔の宮殿イビル・レジテンスで仕掛けて来る。問題は……その後ろに控える三魔将じやな。門の破壊と魔将の殲滅。そしてデミウルゴスとの対決。妾一人で可能かどうか。小娘を前に出すか？ いや、もし法国が言う様にドラゴン・ロードの来襲など起きたら……：収拾が付かんか。さて、どうするか）

思いを巡らせ、リリー・マルレーンはその黄金の瞳を外気に晒すと

「また子。うぬらはどの程度の魔法を行使できる？」

「この問いに、サイレンは僅かに沈黙し

「シーリイ達は第四位階の風葬ウインド・ランス槍まで、我はその上第五位階の暴風葬テンペスト・ランス槍までだな」

「左様か。ならば上空からの奇襲は、うぬらの一族に任せる。また子は妾とちいと危ない事をしてもらう」

「はう。それで危ない事とは？」

「門の破壊じや」

「了解した」

サイレンは緊張感を顔に滲ませながらも、迷い無く答える

「そう緊張するで無い。うぬの役目は妾を門まで運ぶ事じや」

「！」

ニグンの顔色が一瞬にして曇る。

「わ、我が王よ。それは……」

「そうじゃ。門から後は、妾一人で対応する」

「き、危険です！ 王に何かがあれば……」

ニグンの言葉に、リリー・マルレーンは自嘲気味に笑うと

「彼奴等はいぬらでは敵わん。むぎむぎ死ぬ事もあるまい」

「ですが、我が王よ！」

それでもニグンは一歩も引く事無く、法皇に苦言を呈す。ニグンのしつこさに、リリー・マルレーンは困った様に頭を掻くと

「頼まれたのじゃよ。遙か昔に別れた友にな………じゃから、妾がやらねばならぬのじゃ。今、地の底で妾の名を呼んでくれる友の為に。その友と、日のあたる場所を並んで歩く為にな」

リリー・マルレーン、いや、ビクトリアの独白を、ニグンはじっと、噛みしめる様に胸に刻む。自身の王が創ろうとしている世界は、その為の物なのだろうと感じながら。

「我が王よ。無事の帰還、お待ちしております。ビクトリア・F・ホーエンハイム様」
そう言って最大級の礼を持って腰を折る。その姿を見つめ、照れたようにはにかんだ笑顔を浮かべ

「とうぜんじゃ」

何事も無いかの様にビクトーリアは言うのだった。

泥の悪魔

ナザリツク第一階層にコツコツと言う金属音が響く。その音を響かせる者は、形容するならば、しやなりしやなりと石造りの回廊を歩く。その表情は硬く、何か思い詰めたかの様に見える。

「何処へ行くでありんすか？ アルベド」

柱の影からその者、守護者統括アルベドに声を掛ける者がいた。その者はゆつくりと姿を現す。

「何の用かしら？ シヤルティア」

声の主はシヤルティア・ブラッドフォールン。この地、ナザリツクの第一く第三階層の守護者である者。

アルベドは、若干の不機嫌さを滲ませながら応対する。

「何の用とは御挨拶でありんすえ。守護者統括であるあなたが、外に出るなんて、異常を疑いせん方がどうかしていると言う物でありんす」

「そう。では言うわ。ビクトーリア様のお手伝いに行くところよ」

「お姉さまの?」

「ええ」

シャルティアは一度その赤い瞳を睨んで隠すと、ここからが本題だと口を開く。

「アルベド。今一度聞きんす。お姉さまは、至高の方々を殺したのでありんすか？」

アルベドは振り向く事無く。

「ビクトーリア様が、そう仰ったのならば、そうなのでしよう。信じるか、信じないかは各自の自由よ」

今回のデミウルゴスの行動で、アルベドの思いは、半ば諦めていた。ナザリックの全ての僕に、ビクトーリアを信じさせるのは無理なのでは無いかと。だからこそ、自分だけでも共に歩もうと決心したので。たとえ、ナザリックを、ひいては絶対的支配者であるアインズ・ウール・ゴウンを敵に回しても。

「ならば質問を変えるでありんす。今、この場に至高の方々がお戻りになったら、どうするでありんすか？」

「……………解らないわ。ただ、そうね。報いは受けてもらうわ。ビクトーリア様に掛けた呪いの分の」

その冷たく、研ぎ澄まされた言葉に、シャルティアは背筋が寒くなる思いだった。そして、アルベドはゆっくりと振り向くと

「ビクトーリア様は、あの御方は、とつても嘘付きなの。それでいて……………嘘が下

ある

上空に漂う彼の者は、遠くに霞む集落を宝石の瞳に映しながら

「そろそろ良いでしょう。さあ、我らが支配者 アインズ様の礎となりなさい！

マキシマイズ・マジックイビル・レジテンス
魔法最強化悪魔の宮殿！」

デミウルゴスの力ある言葉に反応し、地面から巨大な建造物が現れた。高さ十五メートル、幅十メートル。その外見は、様々な遺骸が絡みついた様な禍々しい物で、その中央に古ぼけた巨大な両開きのドアが存在していた。

その姿を満足げに見つめると

「さあ行きなさい。地獄の門よ、開きなさい！」

その言葉に呼应し、地獄の門はゆっくりと開いて行つた。



「来やがったな」

呟く様にダーク・エルフの族長が口を開く。

「まあ、分かっていた事じゃねえか」

そう言ったヒジカタに、ダーク・エルフの族長は自嘲気味に口角を上げる。

「そんでさあ。作戦はどーすんの？」

甘ったるい声で、クレマンティーンが問いかけた。まるで遊びの相談でもする様に。

「犯罪者様にしては、随分真面目だな。作戦？ そんなもん一つしかねえだろ」

「ふふっ。そうだな」

ヒジカタの言葉に、ダーク・エルフの族長が同意する。

「目の前の敵を、切り続けるだけだ」

シンプル イズ ベスト。あまりに単純な答えに、流石のクレマンティーンですら言

葉を失う。

「そう言う事でしたら、目の前のヒジカタさんを切っても良いって事でさあね」

ヒジカタの首筋に冷たい刃が当たる。

「何で、そうなるんだよ！ 切るのは敵だろお！」

「俺の敵は、ヒジカタさんだけでさあ」

じゃれ合う二人の聖典隊長を目にし、ダーク・エルフの族長はクツクツ笑う。

「そう言やあ、隊長とか言うヤツがもう一人居たんじゃねえのか？」

ダーク・エルフの族長に言われ、フランスの三人はハタと思いだす。そう、この場にはも

う一人、聖典の隊長がいたのだ。

「おい、犯罪者。お前んとこの隊長はどうした？」

ヒジカタの問いに、クレマンティーンは苦笑いを浮かべ後方を指差した。そこには、
頭こゝろを垂れ、地面に座る漆黒聖典の隊長と第五席次の姿があつた。

「何やってんだ、アイツら」

首を捻るヒジカタに、クレマンティーンは愉快そうに顔に半月を形造り

「何でもさあ、話について行けないんだつてえ。笑つちやうよねえ。」

「はあ？ ドラゴン・ロードがどうか言つてたエリート様が……………情けねえ」

そう言つてヒジカタは、葉巻の煙草を地面で消すと、オキタ、クレマンティーンと共に歩きだす。

「オイ、コラア！ なーにやってんだ？ このヘタレ共！」

「お、お前、達」

虚ろな瞳で、漆黒聖典の隊長はヒジカタ達を見つめる。

「ああ。こりやダメですぜえ、ヒジカタさん。こいつら恐怖に飲まれちまつてまさあ」

「はんつ これだから坊ちゃん育ちは。……………使えねえな、こりや。」

頭を掻きながらそう言う

「おい、犯罪者。略式だが、今からお前が漆黒の隊長だ」

「はあ？ 何言つてんの？ バカじゃない？」

「オメエさんは知らないかもしれないが、戦時で隊長を失つた場合、副隊長以上の階級の者、二名以上の許可が下りれば、そいつが隊長の権限を持てるんでさあ」

ヒジカタの言葉に、オキタが補足を入れる。

「あー、そう。それで、なんでアタシが隊長な訳？ 聖典だつて来て無いじゃん」

クレマンティーヌの正論に、ヒジカタは溜息を吐き

「一応、建前つてヤツがあるからな。法国に戻つてから、漆黒聖典が何もしなかつたのも不味いだろ」

「そう言うことでさあ」

「メンドクサ」

ぶつきら棒に呟くクレマンティーヌに、ヒジカタは詰まらなそうに

「仕事つて言う物はそう言うもんだ」

言い聞かせる様に言葉を紡ぐ。クレマンティーヌはその言葉を受け止め

「はあ。それ前にも陛下に言われたなあ」

諦めた様に、そう口にする。

その時、前方から声が掛る。

「来たぞー！」

悪魔の襲来である。急ぎ三人は前方へと駆け出した。

前線に到着したクレマンティーン達の瞳に映った物は、単に言うとは波、だった。黒く蠢く数千と言う悪魔達。

その姿は酷く歪で、まるで姿を変えながら向って来ている様であった。

「はーあ。アレに突っ込むのお。私は陛下に突っ込まれる方が望みなんだけどお」
クレマンティーンは冗談交じりに軽口を叩く。

「こんな時に下ネタかよ。女同士で何言ってやがる、犯罪者の漆黒聖典隊長さんよお」
疲れた様にヒジカタが突っ込む。

「まあ、つべこべ言っても仕方ありません。まずは俺達が数を減らしやす。その後
は……」

「俺達が突っ込む、と言う訳だ。狂犬らしい作戦だ」

オキタの言葉に、ダークエルフの族長が賛辞を贈る。

僅かの沈黙。

全員の口角が上がる。

「行くぞオメエら！ ダーク・エルフの意地、見せてやれ！」

「悪魔ごときで………ビクトーリア様の剣を止められると思うんじゃねーよ！」

「一歩も下がんじやねーぞ！ 火滅の名を汚すヤツは、その首跳ね飛ばす！」

「数を減らせえ！ 撃ちまくりやがれえ！」

戦いの火蓋は切って落とされた。



まるで泥の中にもいる様な感覚に襲われながら、連合軍は剣を振るう。所々で爆発が起こり、赤い炎が地面を晒す。だが、それもすぐに泥に沈む。あちらこちらで黄金の砂粒が舞い、同じだけの赤い霧が立ち込める。

「切りが無ねえぞ！ こいつら、切っても切っても湧いて来やがる！」

ヒジカタが刀を振りながら叫ぶ。

「ははっ。無尽蔵に湧くって言ったのは、オメエらじゃねえか」

息切れ一つなく、悪魔を切り捨てダーク・エルフの族長が答えた。

「でもさあ、こんなんじゃ門には近づけないじゃない」

軽口を叩きながら、クレマンティーヌは踊る様に双刃を振るう。

「しかし、ヒジカタさん。このままじゃあ、ジリ貧ですぜ」

オキタが的確に悪魔を切り伏せながら、冷静に状況を語る。

「テメエ、オキタ！ 何でテメエが居やがる！ テメエらは後方支援だろうが！」

「部下には言つて来やしたぜ。ぶつ倒れるまで打ちまくれ、つて。それに、ヒジカタさんが、あまりにも情けないんで、出張つて来やした」

「よーし解つた。テメエ後で覚えてろよ」

「後があつたら、お付き合ひしやすぜ」

口喧嘩をしながらも、何体もの悪魔を切り伏せる。

「こりゃあ、数も数だが、俺達の体力が持たねえかもな」

状況を分析したヒジカタが、ポツリと呟く。

「坊主が何言つてやがる。三百五十歳の爺が頑張っているんだ！ 若けえなら……………気張つて見せろ！」

ダーク・エルフの族長の櫂が飛ぶ。

「そうですぜえ、ヒジカタさん。そんなんじや、女の一人も喜ばせられねえですぜ」

「ホントだよねえ！ 一発や二発で中折れなんて……………ヒジカタ弱ーい！」

「オメエら……………戦の最中に、何下ネタ言つてんだあ！」

そんな軽口を叩き合う面々だが、状況が劣性なのは誰が見ても明らかだった。徐々に軍勢は押し寄せ、何人かの部隊員達が孤立して行く。そして、隊員達が恐怖に蝕まれて行く。

これでは本当に負け戦になる。ピクトーリアの到着まで持たないかも知れない。そんな思いがクレマンティーヌの脳裏によぎった。そして、それが僅かな隙を造った。

背後から悪魔達が迫る。クレマンティーヌは死を覚悟した。只一つ思う事は、ピクトーリアの役に立てずに命を落とす事への後悔だった。

だがその瞬間、クレマンティーヌに迫る悪魔達が消し飛んだ。それも一体や二体では無い。五十、百のレベルでだ。

クレマンティーヌ、いや、場の全員の眼がそこに釘付けとなった。その現象は、その現象を起こした者は、優雅に、何も無かった様にそこに居た。

流れる様な黒髪。そこから生える振れた角。真っ白な仮面に、見た事も無い衣装。そして、腰から生える漆黒の翼。

「ア、アルベド様?！」

クレマンティーヌは呟く。仮面の女は振り返り、首を横に振る。

「違うわ、クレマンティーヌ。私はリリー・マルレーン。ピクトーリア・F・ホーエンハイム様の妻よ」

光の一撃

「私はリリー・マルレーン。ピクトーリア・F・ホーエンハイム様の妻よ」

そう言うトリリー・マルレーンは、クレマンティーヌから視線を外し、フラッグポールを一凧する。ゆつくりと振るわれた様に見えたソレは、周りの悪魔を巻き込み、数十体の悪魔を砂の粒へと変える。その攻撃は一度では終わらず、二度、三度と猛威を振るう。

「おい、ボウズ共。あいつ、リリー・マルレーンとか名乗っていたが、アイツがおめえらの大將か？」

悪魔を切り捨てながら、ダーク・エルフの族長が疑問を口にする。オキタは口を開かずに、ヒジカタに視線を向ける。それを受け、ヒジカタは溜息を吐くと

「知らねえ。名前だけは確かにそうだが、だが、ウチの陛下には、角も翼もねえ」

「ほう。じゃあ、アイツは何者だ？」

「それこそ知らねえ。只、今解るのは……」

「ああ。解るのは……」

「勝てる見込みが出て来たって事だ！」

ヒジカタとダーク・エルフの族長は、重なる様にそう叫ぶと、再び砂粒を舞い上げらせる。

一方リリー・マルレーンは何十、何百の悪魔を砂粒へと変え、それでも減らぬ悪魔に苛立つ様に小さく舌打ちをし

「私の……愛して、愛して、愛して……ちよー！ あいしているビクトーリア様の物に手を出すなんて！ 消え去りなさい、このおゴミがあー！」

叫びと共に、フラッグポールを地面に叩きつける。その衝撃で、直径約十メートルの地面が陥没し、その衝撃で倍の面積に存在していた悪魔が消し飛んだ。

「今だー！ 一気に潰せー！」

オキタの号令で、部隊が殲滅に動く。徐々にだが、連合軍に流れが向き始めた。だが、依然悪魔は湧き続け根本的な決定打が打てていないのも事実だった。その様子を呆れた様に見ていたクレマンティーンだが、後方から迫る羽音の存在に気付く。

「チツ！ ……まで来て新手かよー！」

焦りの表情を浮かべ、クレマンティーンは上空に視線を移す。蒼天の空には、無数の巨大な鳥が飛来して来ていた。その鳥達は、まるで得物を狙う様に戦場の上空を埋め尽くす。

「あれは………セイレーン？」

クレマンティーンが小さく眩く。今の自分達には上への対処法が、ほぼ残ってはいない。マジック・シリンドラー魔法の筒を扱っていた陽光聖典の隊員達は、ほぼ魔力切れと言っても良い状況だ。悪魔を切り伏せつつ周りに目を向ければ、二人の隊長やダーク・エルフの族長も同じ考えの用だ。リリー・マルレーンだけは、気にも留めず暴れ回っていたが。

「オイ！　上がヤバイぞ！　魔力が満ちていやがる！」

ダーク・エルフの族長が叫ぶ。人である法国の者達には解らなかつたが、魔法に通じるダーク・エルフにはその力の根源が見えていた。

上空のセイレーンから力ある言葉が発せられた。

ウインド・ランス
「風葬槍」

上空のセイレーン達から風を纏う魔力の矢が放たれた。約二百のセイレーンから、一人当たり五本の矢。地面に突き刺さるその光景は、最早絨毯爆撃と言つても良い物だった。

戦場に土煙が広がる。セイレーン達の攻撃により巻き上げられたソレは、まるで濃霧の様に人も悪魔も包み込む。一寸先も見えない中、徐々に煙が晴れていった。そして、霧がはれた戦場を目にした連合軍の面々は目を見開く。魔法の矢に穿たれていたのは、悪魔達だけだったのだ。

「お、おい。これは一体?」

「解らねえ」

ダーク・エルフの族長の問いに、ヒジカタは答えられなかった。いや、この場に居る全員が答えられなかった。そんな一瞬の静寂が訪れた荒れ地に、一体の鳥が舞い降りた。雀の様な、茶と白の羽を持つ魔物が。

「ご無事でしたか? どうやら間に合った様ですね」

「て、てめえらは一体?」

ヒジカタの問いに、鳥の魔物は丁寧な腰を折ると

「私はニケと申します。煉獄の王の勅命により、セイレーン二百と共に参戦致します」

「煉獄の王だと? それでアイツは? 陛下はどこに?」

矢継ぎ早に問うヒジカタに、ニケはニツコリと微笑みで返し、一点を指差す。連合軍全ての者が目にした。門へ向け、上空から一粒の砂金が舞い落ちる様を。そして、恐怖した。一粒の砂金が起こした、圧倒的な暴力に。



砂粒と血煙の舞う戦場の遙か上空に、その者達は居た。

白き翼を持つ者。セイレーンの族長、サイレン。

そして、黄金の輝きを放つ神話。煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイム。

「陛下。そろそろだ」

サイレンは眼下の門を瞳に映し、ビクトーリアに告げる。

「うむ。ご苦勞じゃったな、また子よ」

礼の言葉を口にし、ビクトーリアはサイレンの足を手放した。

「うぬは、皆の下へ。指揮は任せる」

「承知」

その言葉を最後に、サイレンは戦場へと飛び立ち、ビクトーリアは自重落下を始める。

ビクトーリアの黄金の瞳に、転移門が大きく映る。それを見つめ、ニヤリと笑みを浮かべると

「超位魔法——」

その瞬間、転移門を中心に、多重魔方陣が展開した。

「illuminati（私は光となり、全てを滅す）（イルミナティ）！」

力ある言葉と共に、ビクトーリアの身体は、黄金の弾丸となり、転移門と激突する。戦

場が光に包まれ、僅かに遅れ轟音と爆風、そして衝撃波が襲う。再び濃霧の様な土煙が舞い、それが晴れた時、全員が眼にした物は………何も無くなつた大地に、悠然と優雅に、そして威風堂々と立つビクトーリアの姿だった。

深紅のドレスを揺らし、金色の髪をなびかせ、手に持つフラッグポールの旗が揺らめく。ビクトーリアはフラッグポールの石突で地面を一度叩き

「新たなる日の始まりである！ 祝福の叫びを挙げよ！ 煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイムが命じる！ 悪魔の残党を殲滅せよ！ 一匹残らず塵と化せ！」

高らかに鬨の声を挙げた。

その言葉によって、力を取り戻したかの様に、兵士達は立ち上がり、悪魔の残党へと向かつて行く。

ビクトーリアはその光景を、勇士を満足げに見つめると

「出てこい。居るのであろう？」

何も無い方向へと言葉を掛ける。その言葉に呼応する様に空間が歪み、人型の悪魔が姿を現す。デミウルゴスが直々に召喚した三体の魔将イビルロードの内イビルロードの二体。

蝙蝠の羽に、鍛え抜かれた身体。赤い髪に、目元を仮面で隠した強欲の魔将イビルロード

肉感的な女性の身体に、鴉の様な顔を持つ、嫉妬の魔将イビルロード

二体の魔将が、ビクトーリアと対峙する。

「ふん。憤怒の魔将は居らぬ様じやな。この程度の悪魔で、妾の足止めか？ 舐めおつて、クソガキ。いや、バラガキが！」

ビクトーリアは地面を蹴り、強欲の魔将へとフラッグポールを振るう。その一撃を強欲の魔将は何とか得物の鎌で受け止めるが、Lvの差、とても言えば良いのか、鎌の柄は砕かれその身に一撃を喰らう。一撃で強欲の魔将の右腕を切断し、その勢いのまま胴を両断する為にフラッグポールを右上方へと走らせる。

その隙、とても言う様な一瞬の残心を見逃さず、嫉妬の魔将が背後からビクトーリアに襲いかかる。だがその行動は、すんでの所で阻まれた。嫉妬の魔将の身体は二つに分かれ、遙か後方に弾き飛ばされその身体を地に横たえた。

「下等な悪魔の分際で、私の旦那様に襲いかかろうなんて……………死になさい」
 ビクトーリアは強欲の魔将の胴を両断し、ゆっくりと立ち上がり援護の者へと振り返る。

「……………アルベド？」

「はい。ですが、今の私はリリー・マルレーン。もう一人のビッチ様ですわ」

そう言って妖艶に微笑んだ——気がした。

アルベドの発言に、ビクトーリアは頭を抱えたい気分になった。コイツは何を言っているんだと。

眉間に皺を寄せ、苛立ちを隠さずデミウルゴスは言い放つ。

「敵対？ 何を言うておるのじゃキサマは。妾は最初からアインズの敵じゃぞ。何時の日にか、妾はアインズを殺す！」

衝撃的な言葉だった。隣で聞いていたリリー・マルレーン、いや、アルベドですらその言葉に恐怖した。だが、それは一瞬で溶けて消えて行く。

「妾の友は、アインズ・ウール・ゴウンなる人物では無いわ！ 妾の友は、私が守る友は、モモンガ一人じゃ！」

アルベドは理解出来た。

だが、デミウルゴスには理解出来なかった。

それは何故か？

それは、アインズ・ウール・ゴウンと言う人物と、モモンガと言う人物を分けて考える事が、認識する事が出来なかったからだ。

デミウルゴスの横の空間が歪み、一体の悪魔が姿を現す。三魔将の最後の一人。イビルロードラリス。憤怒の魔将である。獣の様な身体のあちらこちらから炎が噴き出している。

ビクトーリアは、意地の悪い笑みを浮かべながら

「アレの相手、頼めるか？ リリー・マルレーンよ」

その言葉を受け取り、リリー・マルレーンはビクトーリアから距離を取ると

「我が名は、黄金の魔女　リリー・マルレーン。下等な悪魔よ、私に相手をして貰える事を、光栄に思いながら死になさい」

静かに、そして優雅に、流れる様に口状を口にし、フラッグポールの石突を鳴らす。それが合図となり、二つの戦いが口火を切った。

フラッグポールを振り下ろすビクトーリアに、デミウルゴスは剣の様に伸ばした爪で応戦する。悪魔の諸相　鋭利な断爪。デミウルゴスが持つスキルの一つである。お互いの得物が火花を散らせる。だが、負けたのはデミウルゴス。その結果が納得行かなかったのか、デミウルゴスは珍しく感情を爆発させる。

「あなたは、何故私の邪魔をするのです！」

言い放つデミウルゴスに、ビクトーリアは怒りの形相を向け

「気に入らんからじゃ！　我が友の行く道を、霸道で塗り固め様とする、キサマらの行いが！」

再び二人は激突する。

心の内

自身の前に立つ異形の者、リリー・マルレーンに対し、憤怒の魔将は奇妙な違和感を覚えていた。自分の姿を見、存在を知覚しながら目の前の者は、何の恐れも無く只そこに居るのだ？

「誰だ？ お前、は？」

イビルロード ライス
憤怒の魔将の低い声が響く。

「あなた如きゴミが知る必要はないわ。只一つ、覚える事は、私はリリー・マルレーン。頂上の者と言う事だけよ」

「舐める、な。獄炎」

イビルロード ライス
憤怒の魔将の力ある言葉に呼応し、リリー・マルレーンの身体に黒い炎が絡みつく。

それは、徐々に勢いを増し、終には丸い球体となりリリー・マルレーンを飲み込む。

「グハハハハハ！ 矮小な者よ、我が力の前にひれ伏すがいい！」

イビルロード ライス
憤怒の魔将は勝ち名乗りを挙げる。

だが、その声はすぐに驚愕の物へと変化した。目の前の黒炎が霧散したのだ。いや、そうでは無い。リリー・マルレーンが振るったフラッグポールの一撃で掻き消されたの

だ。

「この程度の炎で勝利者宣言とは……度し難い程の無知ね。その程度では、この身に纏う月華つきはなの耐性は、抜けはしないわよ」

——タブラ・スマラグディナの製作した、アルベドの決戦装束。花魁の様な艶やかさを形作る衣装の名は「月華つきはな」。その効果は、物理耐性、支配、呪いなどに対しての精神耐性、炎、冷気などの各種耐性。

そして、一番の特徴は………帯電——

リリー・マルレーンは地面に落ちていた小石を拾い上げると、嬉しそうに笑い声を漏らし

「くふふつ。ここの言う使い方も出来るのよ」

そう呟き、指で小石を弾いた。何気ない行動に油断し、憤怒の魔将イビルロードは無防備でそれを受けた。結果は………左腕が根元から消失していた

「超電磁砲レールガンと言うらしいわ。ビッチ様から御教え頂いた物よ。そうね、これ以上旦那さまからの贈り物を、煤で汚すのも忍びないわね」

リリー・マルレーンは左手で仮面を剥ぐ様に撫でる。その行為に追従する様に、仮面

デミウルゴスは激昂し、腕を巨大化させ——悪魔の諸相 豪魔の巨腕——ビクトーリアへと殴り掛る。ビクトーリアは苛立ちを顕にしつつ「馬鹿者が……」と小さく呟くと、身体を回転し攻撃をかわすと

「あの小市民が、そんな孤独に耐えられる訳が無かろうがあ！」

言葉と共に、デミウルゴスの顔面に拳を叩きつける。いや、打ち抜いた。

その衝撃で、デミウルゴスの赤いスーツが土に塗れる。

「キサマは、キサマらは解つておらぬ。何も理解しようともしておらぬ。至高の支配者？ 最後まで残つた心優しき御方？ はあ？ 笑わせるな！ キサマらの助言が、あ奴にどんな影響を及ぼした！ リザードマンの村を滅ぼし、アンデッドの作成研究じやと？ フザケルな！ そうやってキサマらは、アインズの中から妾の友を、四十人が愛した友を、モモンガを消し去つて行くのじや！ なれば妾は敵となる！ 何度でもキサマらの計画を潰してやる！ それでも止まらぬなら………ナザリックごと、キサマらを消し去つてやるわ！」

激昂するビクトーリアの瞳には、涙が浮かぶ。

ビクトーリアは好きだった。

寂しさを内に秘めながらも、笑うモモンガが。

楽しそうに話す仲間達を、一步離れて眺めている時の楽しそうなモモンガが。

そして、仲間の事を語るモモンガが。

だからこそ言う、モモンガと、友と日の下を歩く事が出来るのならば、どんな物でも破壊する。それが、世界の常識でもだ。それが、世界を敵に回す事になってもだ。

デミウルゴスは、話を聞きながらゆっくりと身体を起こす。だが、起こした片膝に重みを感じる。自身の右ふともも、その場所には黄金のグリーブがあった。デミウルゴスは、ビクトーリアによって立ちあがる事を阻止されたのだ。

「な、何を？」

デミウルゴスは焦りを浮かべ、短い言葉を口にする。

「あほうなクソガキには、躰が必要じゃろう？」

そう答えたビクトーリアは、デミウルゴスのふとももを踏み台の様に利用し身体を浮かせると、空いた右足を上空へと投げだし……………踵落しの要領でデミウルゴスの頭部を撃ち抜いた。

スコープオン・ライジング。

その攻撃によって、デミウルゴスの意識は刈り取られた。

「終りましたね、ビクトーリア様」

後ろからリリー・マルレーンが、いや、アルベドが語りかけて来る。その表情は落ちていた様を伺わせながらも、恐怖の色を含んでいた。自分達がいかに主人の、アインズ

の心を考えていなかったのか諭されたためだ。

「うむ。すまぬがこ奴を桜花聖域に運んでくれ。妾の頼みじやと言えば、オーレオールも受け入れてくれるじやろう。それと、内密にペストーニヤを呼び治療を。あと、これが最重要なのじやが、今回の事、決してモモンガにばれてはいかんぞ。……………それとアルベド」

「は、はい」

「うぬも同様じや。もし、今後もう一度モモンガに害を成す様ならば、うぬとて消し飛ばすぞ」

「か、畏まりました」

若干の震えを含みながらそう言うのと、眼前に出現させたゲートの魔法に、デミウルゴスを引き摺りながらアルベドは消えて行った。ビクトリアはそれを見送り、疲れた様な溜息を漏らすと

「少し、言い過ぎたかのう。しかし、酷い扱いじや。あれは、相当溜まっていたと見える」
　　楽しんで微笑むのだった。

「ええ。ペストーニヤの話でもその様で……」

「なんでかな？　なんでかな？」

全員が心配そうに声を掛けている。子供達はどうかやら、オーレオールの僕達の様だ。

「しかし、そもそもこ奴には口が無いのじゃから、話すのは無理かものう」

そう言うビクトーリアに

「そうですねえ。ウルベルト様も酷な事を」

「ほんとだね。ほんとだね」

アルベドの言葉に、オーレオールの僕達が同意する。

一体何が起こっているのか？　デミウルゴスには理解出来なかった。デミウルゴスは、一度ゴクリと喉を鳴らし、声が出る事を確認すると恐る恐る声を出す。

「あ、あの。君達は何をやってるんだね」

その声に反応して、オーレオールの僕達が振り向いた。そして、発せられた言葉は

「ビツチさま。めがねかけきがおきたよ」

「おきたよー！」

その言葉に対しビクトーリアは

「ああ、気にせんでも良い。眼鏡掛け機は頑丈じゃからな。心配なのは、デミウルゴス

「じゃ」

そう言いながら依然畳を見つめている。一体何を言っているんだ？ デミウルゴスは、ビクトーリアの視線を辿る。そこには、良く見知った物があった。自分のサングラスが。

「でもすごいよね！ めがねがほんたいだなんて！」

「すごいよね！ すごいよね！」

「ええ本当に。まさか、デミウルゴスの本体がサングラスの方だったなんて」

「！」

デミウルゴスに衝撃が走る。彼らは一体何を言っているのか、と。

「これはアレじゃな。彼奴はサングラスを掛けた悪魔じやのうて、悪魔を掛けたサングラスじゃった、と言う訳じゃ」

その瞬間、襖ふすまが開けばなしの隣室から、大爆笑の音が響く。その方向に視線を向けると、あの貞淑さではナザリック一のオーレオールが腹を抱えて笑い転がっていた。畳の上を転がり回り、時には畳を叩きながら。

そして、視線をビクトーリアへと戻すと……………いやらしい満面の笑みが。デミウルゴスは理解した。いや、やっと理解出来た。自分はからかわれていたのだと。ビクトーリアはサングラスを手に取ると

「ほれ眼鏡掛け機よ、本体と合体じゃ！」

声高らかに、そう口にする。

デミウルゴスは震えながらサングラスを受け取ると、ゆっくりと、位置を確かめる様にそれを掛け

「何をやっているのですか、あなたと言う人は！」

プライドが傷つけられ、デミウルゴスは激昂する。だが、ビクトーリアは涼しい顔でデミウルゴスに近づくと

「何を怒っておるのじゃ？　これで許してやると言うておるのじゃ、感謝せえ」

「は？」

今までとは打って変り、ビクトーリアは真面目な表情を浮かべ

「今回の件、決してモモンガに、アインズに知られてはならぬ。僕同士が、それも妾を加えての大喧嘩など、あ奴の小さな小さな肝が耐えられるはずがないからのう。それに……………妾の腹の中を知ったのじゃ、手伝ってもらうぞ、デミウルゴス。アインズを殺し、モモンガを守る、そして、ナザリックを外に出す計画をのう」

ビクトーリアの言葉に、デミウルゴスは身が震える思いだった。ナザリックを外に出す。それはすなわち、ナザリックによる世界統一と言う事なのだ。デミウルゴスは考える。

煉獄の王と不死者の王。二人の王が協力し合うのならば、それは不可能では無い。矮

小な自分が考えるよりも、もつと効率の良い手段で。デミウルゴスは、痛む身体に鞭を打ち起き上がると片膝を付き

「煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイム様。ナザリツク 第七階層守護者 デミウルゴス、モモンガ様とビクトーリア様に、永遠の忠誠を」

誓いの言葉を口にした。

戦後報告くナザリツク篇く

桜花聖域で目覚めた翌日、デミウルゴスは緊張感に苛まれながら第九階層の廊下を歩く。

そして、あるドアの前にたどり着くと、ネクタイを直し、さらなる緊張感を持ってドアをノックする。すぐにドアが開かれ、本日のアインズ様当番のメイドが顔を出した。用件を伝えると、すぐに許可が下りデミウルゴスは部屋の中へと歩を進める。

「どうしたのだ？ デミウルゴ——」

デミウルゴスと言おうとしたアインズの言葉が途中で止まる。その理由は、デミウルゴスの姿にあった。

ビクトリアの職業クラスによる効果で、一部の傷が治っていないのだ。端的に言えば、殴られた頬の腫れが。

「ど、どうしたのだデミウルゴス！ お、お前、その顔……」

アインズは驚きを顔にする。後半、演技を忘れるほどに。

デミウルゴスは苦笑いを浮かべながら事のあらましを説明する。もちろん、かなりぼかしてだが。

「ふむ。お前が先日提案した現地亜人のL.V調査において、少々やり過ぎて、プツ、ピツチさんに、プツ、怒られ、ププツ。殴られた、と?」

「はい」

アインズの言葉に、デミウルゴスは頭しやうくと尻尾を下げ、小さな声で返事を返す。その返事が呼び水となったかの様に、アインズは大爆笑とも言える笑い声を挙げる。それは、何度も何度も沈静化を繰り返しながら十分程続いたのだった。

「あー、いや、すまん、デミウルゴス。お前の受けた罰が、あまりにもウルベルトさんと似ていてな」

「ウ、ウルベルト様とですか?」

デミウルゴスの問いに、アインズは顎に指を当て暫し考える様な仕草をした後「あれは何時だったか、ウルベルトさんが人間、そう人間に宣戦布告をしたのだ」

「おおー!」

デミウルゴスが感嘆の声を挙げる。

「その時、攻撃の手段として使ったのが、第十位階の最終戦争アーマゲドン・イビル悪でな、無秩序な悪魔の軍勢に人間を襲わせたのだ」

「流石はウルベルト様」

「だがな、一つ誤算があったのだ」

「！」

デミウルゴスの顔に、緊張が走る。

「その人間達は、初心者……………非常にLvの低い者達でな、うっかり全滅させてしまったのだ。その時、たまたま居合わせたビッチさんに、殴られたそうだと。やり過ぎだ、馬鹿者！」と云う言葉と共に、な。」

そう言うアインズは、酷く楽しそうに

「ナザリックに帰還したウルベルトさんを見て、皆で笑った物だ。何せウルベルトさんのHPは、一桁まで削られていたのだからな」

言葉を聞き、デミウルゴスからは冷や汗が流れる。まさか、親子共々同じ失態を犯し、同じ理由で叱られたのだから。

「ははっ」

最早、デミウルゴスからは乾いた笑いしか出て来なかった。穴があつたら入りたい。まさに、そう言う心境だった。

「おっと、話が逸れたな。それでデミウルゴス、用件は何だ？」

アインズの軌道修正に対し、デミウルゴスはうやうやしく腰を折ると

「はい、アインズ様。ダーク・エルフ、ダーク・ドワーフ共に、リザードマンとの差異は感じられませんでした。しかし、ごく一部の者は脅威になる可能性を秘めておりまし

た。」

デミウルゴスの報告に、アインズは一度頷き「そうか」と了承の言葉を口にする。だが、デミウルゴスの報告はそれだけでは無かった。

「それとスレイン法国の事なのですが……」

「うん？ あの国がどうした？」

アインズの問いに、デミウルゴスは表情を引き締め

「彼の国は、ビクトーリア様が責任を持って見守る、との事で……」

「どうした？ 遠慮せずに言え」

アインズからの許しを受け、デミウルゴスはビクトーリアからの伝言を口にする。

「もし、干渉しよう物ならば、そのあばら骨でギロの演奏会を開催してやる！ と」

「えー」

（あいつの事だ、やると言ったら、絶対にやる。俺のあばらがギロになるどころか、頭蓋骨を打楽器に、掌をカスタネットに、足の裏をシンバルと化し、世にも奇妙な不協和音の演奏会を開始する。）

「そ、そうか。では、法国はピッチさんに任せよう。……それにしても……デミウルゴス、お前は何時からピッチさんに敬意を払う様になったのだ？」

アインズの問いにデミウルゴスの心拍が跳ね上がった。それどころか、大量の汗が額

を伝い、本体、もとい、サングラスの中で目が泳ぐ。それはそれは縦横無尽に。誰も居ない巨大な露天風呂で、一人大はしやぎする子供の如く。デミウルゴスは、ゆつくりと本体、いや、サングラスの位置を直すと

「ははっ。何を仰いますかアインズ様。私は最初からビクトーリア様を敬愛申し上げて
りますよ。ははっ、ははっ」

ぎこちない言葉と共に、デミウルゴスは乾いた笑いを浮かべる。

（あー、これは、ずいぶんこっぴどくやられたなあ。一度火が付くと、ビッチさん手加減しないからなあ。ウチのギルドで、ビッチさんにやられていないのは……………やま
いこさんくらいかあ。後で、ねぎらつてやら無いとなあ。見ているコッチが可哀そうに
なつて来るよ）

そんな思いを胸に秘め、アインズは右手を僅かに挙げると

「御苦労だったデミウルゴス」

この言葉で報告会は終了となった。

アインズの部屋を出たデミウルゴスは、礼を持って扉を閉め、十メートル程廊下を歩くと、壁に寄りかかる様に蹲る。その弱り切ったデミウルゴスに、二つの影が近付く。

「あれ？ デミウルゴスじゃん。どうしたの！」

「あ、あの、大丈夫、ですか？」

第六階層守護者、アウラとマーレであった。デミウルゴスは、声のする方へとゆつくりと振り向き。

「ああ。あなた達、でしたか」

そう言うデミウルゴスを、二人は憐みの瞳で見つめる。今のデミウルゴスは、なんかもう、疲れ果て幾分げっそりとして見えたからだ。

「何があつたのさあ」

アウラが代表して聞くが、デミウルゴスは首を横に振り

「同じ階層守護者として忠告します。あの方には、ビクトーリア様には決して逆らつてはいけませんよ」

「え？ それってどう言う——」

再び問いかけるアウラの言葉を遮る様に

「あの御方は、我々の創造主そのものですよ。私は言葉を聞き違えていました。ビクトーリア様の仰つた血肉を食らつたと言う御言葉は、咎などでは無く、私達の創造主、ウルベルト様やぶくぶく茶釜様の、心と意思を受け継いだ、と言う事だつたのですよ」

「ええー！——」

双子の声が重なる。

「覚えておいて下さい。ビクトーリア様には、私達の創造主様の意思が、思いが、宿つて

いるとおおー」

その言葉を最後に、デミウルゴスは意識を手放した。ここ数日の心労ゆえに。



ビクトーリアは、久々に我が家とも言える星青の館に戻って来ていた。御供の者は居なく、いや、恐らくタナトスはいるだろうが、連日の激務の疲れを癒すために、二日程ダラダラすると決めていた。ちゃっかりと法国の食糧蔵から、酒を拝借すると言う事も忘れずに。

懐かしき我が家を見つめ、そのドアのノブを回し、扉を開く。後は適当な肴を用意して、自室でのんびりを気取るのみ。そんな晴れやかな気分で、屋敷に一步踏み入れる。「あら？、いらっしやいませ」

聞き覚えの無い声がかげられた。そして、その物と視線が交差する。箒を持ち、メイド服を身に纏った、白い蜥蜴と。

ビクトーリアは「おじやました」と小さな声で告げ、ゆっくりと扉を閉めると、脱

そんでね、メイド服着てね、掃除してるの。それでね、いらつしやいませって、いうの！ どーゆうこと！ どーゆうこと！ 説明せんかい！ クソボツチ骸骨があ！」

ビクトーリアの絶叫を聞きながら、アインズは「ああ」と思い出す。リザードマンの適性を見る為に、色々な仕事をさせていた事に。ビクトーリアにすぐに行くと言え、アインズは転移の指輪を発動させた。

アインズが館に到着した時、ビクトーリアは未だ木の陰に隠れていた。あの魔女と呼ばれた者が、まあ可愛らしい事で。記録用のスクロールを持って来ていない事が、悔やまれる様な姿であった。

「ビッチさん」

アインズは思い切って声を掛ける。錯乱状態なら、いきなり襲って来る可能性も考慮しつつ。聞きなれた友の声に、ビクトーリアはゆっくりと視線をそちらに向ける。

「モ、モモンガ？」

「ええ。今はアインズですが」

そう答えるアインズの声など聞いていないと言うばかりに、ビクトーリアは館を指差す。アインズは一度頷くと、館へと消え、扉が開いた時には、あの珍獣と共にいた。

「ビクトーリアよ。この者はクルシユ・ルールー。リザードマンだ」

「へ？」

アインズの言葉に、クルシユは驚いたように臉をパチクリさせると、一步前へと出
「ビクトーリア様、この度は我らリザードマンの命を御救い頂き、全部族を代表し感謝
を」

そう言つてペコリと頭を下げた。

だが、そう言われても、ビクトーリアには身に覚えが無い。

「あのー、モモンガさんや。」

「アインズです」

「そのアインズですさんや、この人は何を言つておるのじゃ」

困惑するビクトーリアに、アインズはテラスの椅子に座る様に進め、お茶を入れて来
たクルシユと共にリザードマンの村での経緯をビクトーリアに語つて聞かせた。

「ほう。あのコキュートスがのう」

「ああ、私も驚いた物だ。まさか、土壇場になつて計画の変更を告げられるとはな」

クルシユの前であるからか、アインズは支配者モードで会話を続けている。

「では、うぬが貸したアンデッドの軍勢は？」

「結局は一度も戦闘せずに終わったな」

そう言つて「ふふふ」と笑う。その笑い方が支配者の笑いだと思つているのだろう。

ビクトーリアは思いっきり茶化してやろうかと思ったが、クルシユの手前止めてあげる事にした。自分の優しさに感謝しろと思いつながら。

「それで？」

ビクトーリアが先を促す。

「ああ。何度かの示威行為によって、彼らの緊張感と危機感を高め、最後の詰めとして私も使われたのだよ。ふふふ、素晴らしい成長だろう？」

「ほう。それが最後の引き金となって、同盟状態だったリザードマン達は、一致団結した訳じゃな」

「ああそうだ。その後で、コキュートスは一族の代表を選ばせ戦った」

「成程のう。して、被害は？」

「死亡者三名、だな」

「怪我人を含めると？」

ビクトーリアが尋ねると、アインズは顎に手をやり、暫し考えた後。

「最初に行つた宣戦布告の混乱で五十名程と聞いている。まあ、ほとんどがかすり傷程度だがな」

それを聞いたビクトーリアは、ティーカップに口を付けると

「死した者達は？」

「うむ。三人の内の一人は、全リザードマンの族長として、彼の村にいる。他の二人は……」

今まで流暢に話していたアインズが言い淀む。ビクトーリアに嫌な予感が湧きあがる。一体何をしたのだろうか？ まさか本当にアンデッドの製作実験を？

「あー、そのー、ハムスケと修行しています」

「は？」

「ですから、ハムスケと修行中です」

「ハムスケ。ハムスケ。ああ、モモン専用のメリーゴーランド！」

「やーめーてー！」

結果を言えば、リザードマンの村への襲撃に対し、コキュートスが猛烈に反対したため、アインズは全ての作戦をコキュートスに一任した。そしてコキュートスは、自身の強さを見せつけ、繁栄を対価とし支配下に入る事を要求したのだと言う。そしてリザードマンの村は、ほぼ無血開城の体を見せ、無事ナザリックに併合されたのだ。

「成程。見事な采配じゃったな」

そう言うビクトーリアを見、アインズは僅かに笑みを浮かべ

「ビッチさんの入れ知恵でしょ。コキュートスから聞きましたよ」

モモンガの口調でからかう様に言葉を投げかける。

それに照れたのか、ビクトーリアは頬を掻き立ち上がる。

「さてと、妾は二日程自堕落に暮らすからの。決して邪魔をするではないぞ！」
そう宣言して館へと消えて行つた。

「面白いヤツであらう？」

アインズはクルシユへと言葉を掛ける。

「はい。それに、とても照れ屋なんですな」

そう言つて二人は笑うのだった。

ビクトーリアは照れ隠しからか、若干憤慨した様に自室のドアを開ける。

「まったく！ あ奴らは揃いも揃つて妾で遊びよつて」

文句を口にしながら入室し、ドアと向き合い閉じようと腕を前へと伸ばす。その瞬間、後から誰かに抱きつかれた。

「誰！」

瞬時に攻撃に移ろうとした時、聞きなれた笑い声が聞こえた。

「くふうう」

ビクトーリアの背筋に冷たい物が流れる。自分の記憶が確かならば、この声は性欲の権化。愛欲の通い妻。守護者統括 アルベドの物だ。

ゆつくりと後ろに視線を向けると、予想通りの者が居た。それも全裸で。

そしてその者は、ゆっくりと、ジリジリと自分をベッドの方角へと引きずって行く。ビクトーリアは床に這いつくばり、腕の力で脱出を試みる。

「照れなくても宜しいですわ。夫婦ですもの。くふうう。さあ、ア・ナ・タ」

外へと伸ばされたビクトーリアの腕は、徐々に自室へと引き吊り込まれ……………ドアが閉じた。

その時、一階エントランスに飾られた花が一凛ポトリと落ちたのだった。

「あつ！ そう言えば」

「どうしたクルシユ？」

「アルベド様がいらしている事を、お教えするのを忘れていました」

戦後報告くスレイン法国篇く

時は僅かに遡り、ピクトーリアはアルベドとデミウルゴスを見送り、再びリリー・マ
ルレーンへと名を変える。誰も居なくなつた平原をぐるりと一度見渡し、フリントロッ
ク短銃を発射した。

戦闘が終わり、悪魔が消えた戦場で、連合軍の者達は一人を除き誰もが地面に座り込
んでいた。

「何だ、だらしねえな。爺が立っているのに、若えテメエらが腰抜かしてんじゃねえよ」
ダーク・エルフの族長は、煙管を取り出し一服を決め込むと、座り込む三隊長に言葉
を掛ける。その言葉に対し、三隊長は盛大に溜息を洩らす。

「こんな状態で立っていられるのは、化け物だけだ！ クソっ！」

ヒジカタが呆れ声でこう続ける。

「化け物だあ？ 面白え事言つてくれるじゃねえか」

「オメエじゃねーよ。俺が言っているのはアイツの事だ」

そう言つて親指で後方を指し示す。ダーク・エルフの族長が、その指を辿り視線を向
けると、優雅にドレスを翻し、一人の人物が近付いて来るのが見えた。その者は、三隊

長の傍まで来ると

「何じゃ。なっさけないのー。これしきの戦でへばりおつて。ほれ、さっさと立て、帰るぞ。さもなくてば……鼻からマヨネーズを流し込むぞ」

マヨネーズ。リリー・マルレーンから謎の言葉が発せられる。何かは解らないが、三隊長の背中に冷たい物が流れた。

「へ、陛下。まよねーずつて?」

クレマンティーヌが、恐る恐る謎の言葉の意味を問いかける。リリー・マルレーン考える様な、思い出す様な仕草をしながら

「マヨネーズか……彼の物は、白く、ネバネバ、ドロツとし、口にすると、ねっとりとした触感と僅かな酸味と共に、すっぱい臭いを発生させる物。じやな」

「テメエ! 人様に何注入しようとしてんだ!」

「うわあ。何そのエロい物体」

「それは良いつすねえ。ぜひともヒジカタさんに注入してください。下の穴から」

「オキタ、テメエ! 何言つてんだ!」

説明に対して、騒ぎまくる三隊長を見つめながら、リリー・マルレーンは慈愛に満ちた笑みを漏らす。

「ふふつ。あんたがこいつらの大将か?」

只一人、その表情を見ていたダーク・エルフの族長が言葉を掛けた。それに呼応し、リリー・マルレーンもその黄金の瞳にダーク・エルフの族長を捉え

「うぬがダーク・エルフの族長かや？ 妾はリリー・マルレーン。法皇をしておる」

「そうかい。察しの通り、俺がダーク・エルフの族長をやっている者だ。名は、カルロだ」

ダーク・エルフの族長の名乗りに、リリー・マルレーンは首を傾げ

「カルロ？」

「ああ、そうだが」

「なんかのお、感じが違うのお。うぬの場合は……ジロチヨウとかが正解では無いのかや？」

「くくつ。そりやあ良い」

そう言つて、お互いにニヤリと半月の笑みを形造る。

「だが、そう言うオメエさんこそどうなんだ？ ビクトーリアとか言つていた様に聞こえたが？」

ダーク・エルフの族長 カルロ改め、ジロチヨウはリリー・マルレーンへと問いかける。問われたリリー・マルレーンは、今までの意地の悪い笑みを消し、少女の様な頬笑みを浮かべると

「ないしよじや」

その艶やかな唇に人差し指を当て、そう言うに留まる。

「ふふつ。そうかい。まあ、良いき。今はな」

とりあえず、お互いの第一印象は悪い物では無い様だ。穏やかな空気にその身を置きながら、リリー・マルレーンはジロチヨウをじつと見つめる。

「何だ？」

「いやのう、うぬの装束、随分と風変りな物じゃな。それはひよつとすると、和装と言う物かえ？」

リリー・マルレーンの言葉に、ジロチヨウのこめかみがピクリと反応した。

——和装。YGGDRASIL内では、サムライ、ニンジャなどの職業を習得している者達に、人気があつた装備の総称である。他にも、夏や冬などの季節毎に行われたイベントなどで、女性キャラクターを使用していた者達が着用した浴衣、晴れ着。男性キャラクターが着用した着流し、なども和装と呼ばれていた。——

現在ジロチヨウが着ている物も、着流しに羽織と言う和装その物だった。

「オメエさん。その知識をどこで？」

若干の殺気を含みながら、ジロチヨウは問いかける。だが、リリー・マルレーンは涼

しい顔で

「識っていただけじゃ。そう、只、識っていた、と言う事じゃ」

ただ事実のみを口にするリリー・マルレーンに、ジロチョウは殺気を消し去り

「そうかい。和装か、いやあ、久々にその言葉をきいたぜ。こいつあ、昔の仲間に貰った物だ。コイツも含めてな」

そう言つて刀をチラつかせる。

「左様か。して、その者は？」

「ふっ。二百年も前の事だ。とつくに墓の下だ」

そう言うジロチョウの表情は、どこか寂しそうに見えた。リリー・マルレーンは短く「すまぬな」と謝罪の言葉を口にした後、両の手をパチンと合わせ空気を変えようと

「このクズ共！ お家に帰るぞ、とつと立ちやがれ！」

あまりにもな言葉と共に、フリントロック短銃の引き金を引き、転移門ゲートの魔法を展開した。

ヒジカタは頭を掻きながら

「なんでウチの陛下は、ああも口が悪いんだらうな」

眩きながら暗闇へと消える。

「ヒジカタさん。陛下は口だけじゃなく、意地も悪いですぜ」

怖いもの知らずな言葉と共に、オキタが続く。

「あんたらねえ。いい加減にしなさいよね」

珍しく諫める様な言葉と共に、クレマンティーヌも消えて行つた。それに続き、各聖典隊員、クレマンティーヌと行動を共にしていた勅使隊達も闇へと消える。その光景を見つめながらリリー・マルレーンは

「さてと、うぬらにも来てもらおうぞ」

そうダーク・エルフ、ダーク・ドワーフの族長に告げた



後に一日戦争と呼ばれる戦闘の翌日、謁見の間には十三人の人物とリリー・マルレーンの姿があつた。

壇上には玉座に腰掛けるリリー・マルレーン。その両横にニグンと番外席次が立つ。眼下には、セイレーンのサイレン。ヴォーリアバニーのヴァイエスト。ダーク・エルフの族長であるジロチョウ。ダーク・ドワーフの族長。そして、六色聖典の各隊長と元漆

黒聖典の隊長が勢ぞろいしている。

スレイン法国が誇る最高戦力の指揮を執る者達をリリー・マルレーンは見つめながら、幾度も目頭を押さえていた。

「如何なされました、陛下」

その仕草を心配してニグンが声を掛ける。だがこの言葉に、リリー・マルレーンはどう答えるべきか思い悩む。

「おおさま？」

今度は番外席次が声を掛けて来た。仕方が無い。そう思い、リリー・マルレーンは口を開く。

「うーん。何と言ったら良いのか解らぬのじゃが、妾の知り合いに良く似た者が居るのじゃよ」

「？」

ニグンには言葉の意味が解らなかった。

リリー・マルレーンの瞳に映る物。それは、黒いフードをすっぽりと被った、小柄な骸骨の顔をした者だった。言うなれば小型のアインズである。それとも、アレが死神と言う物だろうか？ 悩んでいても仕方が無い。本題に入る前に、事実確認を済ませておこうとリリー・マルレーンは口を開く。

「あー、コンドウ。うぬ、死ぬのか？」

「は？」

リリー・マルレーンの問いに、ゴリラ改めコンドウが返事を返す。

「あの一、陛下？ 意味が解らないんですが」

質問に質問で返され、リリー・マルレーンは「うむむ」と唸り

「いやの、さつきからうぬの隣に死グリム・リップバー 神が見えるのじゃが、うぬは死ぬのかのう」

その言葉と共に、全員の視線がコンドウの隣に注がれる。だが、一番に言葉を発したのは、よりにもよってオキタだった。

「死出の旅路に連れて行くのは、コンドウさんじゃ無く、ヒジカタさんにして下せえ」

「いやいや。それよりも、ウチのヘタレ元隊長か、兄貴に」

それに乗ったのはクレマンティーヌ。

「お前ら、場を弁えろ」

静かにヒジカタは突っ込みを入れる。がやがやと場は湧きあがるが、一行に死グリム・リップバー 神の正体は不明である。どれほどの無駄な時間が経過したであろうか、おもむろにイサブロウが口を開く。

「皆さん茶番も楽しまれた様ですので、エリートの中から説明します。陛下。彼の者はグリム・リップバー 死 神などではありません。彼の者は、六色聖典が一つ、土の神官長が率いる山冠聖典さんかんせいてん

の隊長です」

「ほう」

スレイン法国に属する、ほぼ全ての者達から驚きの声がかかる。その光景に、リリー・マルレーンには非常に違和感を覚えた。何故に、コイツらは驚くのだろうか？ 驚きを顕にしなかつたのは、イサブロウとニグン、そして元漆黒聖典隊長の三名のみだつた。

「ちよいと待て。何故にうぬらは驚いてるのじゃ？ 聖典の隊長じゃぞ？ 漆黒の様に、後ろ暗い物ならばともかく、土じやろ？ 大地の信仰者じやろ？ 風花みたいに何しとるか解らん者でも無し、水明の様に詐欺師の集団でも無く、陽光や火滅みたいな過激派でもなからう？ 何故に皆知らんのじゃ？」

混乱するリリー・マルレーンに、ニグンはそつと囁く。

「土は暗殺部隊ですよ、陛下」

最も物騒な部署であつた。それならば、あの仮面も誰も会つた事が無い事も頷ける。だが、それは見解の間違いだとイサブロウは告げる。

「恐らく、陛下が考えている事は間違いです。彼女。ああ、山冠聖典の隊長は女性なのですが、彼女が顔を隠し、ほぼ誰の前にも姿を現さなかつた理由は……」

「う、うむ。理由は？」

リリー・マルレーンは前のめりになつて、イサブロウの言葉を待つ。

「非常に恥ずかしがり屋でして……」

「はあ？」

「それでいて、極度の上り症でもあります」

「はあ」

最早言葉が無かった。それでもリリー・マルレーンは法皇陛下だ。威厳を持って山冠聖典隊長に声を掛ける。

「山冠聖典隊長よ」

「は、はい」

消え入りそうな声だった。

「名は？」

「ペ、ペンネ。ペンネ・ブラン・アルマリート、です」

「左様か。ではえんぴつ、仮面をと——」

「いやです！」

喰い気味で拒否して来た。

「取り合えず、仮面をの——」

「いやっ！」

仮面を外させようとリリー・マルレーンは声を掛けるのだが、ペンネ、えんぴつは拒

否の言葉を繰り返す。徐々に身体も震えて来ている様に見える。

「あー、わかった、わかった、わかりました。しかし、うぬの顔を妾が知らぬ訳にもいかぬ。後ほど見せてもらうぞ。良いな？ 無論、誰も同席はせぬ」

その言葉に、えんぴつは小さく頷く。だが、此処で声を上げる者がいた。否定では無く、肯定の。だが、その声は大きく騒がしかった。

「流星は陛下！ 良き采配ですな！」

コンドウだった。しかしリリー・マルレーンは、コンドウの発言に対し、ピクンと眉を跳ね上げ

「うるさいのう。少しは小声で話せぬか？ 今度発言する時は、手を挙げる様に。もし、断りなく口を開いたならば……」

「開いたならば？」

「うぬのケツの毛を筆るぞ」

リリー・マルレーンの発言に近藤は身体を硬直させ、自身の尻を両手で押さえる。そして、僅かに震え出した。

「陛下。プレイを想像して、コンドウさんが興奮してやす。DMのコンドウさんには、むしろ褒美だと思いやすが？」

このオキタの発言を受け、リリー・マルレーンは英断を下す。

「では筆り役は、ヒジカタとイサブロウ。以上」

「何でだよ！」

「何故ですか！」

小気味言い突っ込みであった。最近恒例になりつつある、スレイン法国のコント劇場を終え、一同はやつとの事本題へと進む。

「今から、人事異動を行います！」

「陛下。その言い方では、威厳も糞もありませんよ」

イサブロウである。その言葉に、リリー・マルレーンの眉が跳ねる。そして、各聖典の隊長達の顔をグルリと見渡した。

漆黒聖典、ヘタレ。

風花聖典、クソマジメ。

山冠聖典、シヤイ。

水明聖典、ゴリラ。

火滅聖典、ナマイキ。

陽光聖典、ドS。

まともなヤツが一人も居ない。リリー・マルレーンは、一度頷くと

「お前ら、全員死刑！」

「何で！」

隊長六人からの突っ込みが響く。一人は元が付くが、実に良い響きだった。

「あー、では本題へ行くぞ。漆黑聖典、すでに元ではあるが、うぬを隊長職から外す。席次はそのままとする。次の隊長が決まるまでは、雌猫、うぬが代理じゃ」

この言葉に、クレマンティヌは「えー！」と不満の声を挙げるが、次の隊長に心当たりがある、と言うリリー・マルレーンの言に少々了解の意を告げた。

「次、小娘」

「ん？ 私？」

思いもよらなかつた呼びかけに、番外席次は首を傾げる。

「うぬは、漆黑に席を置いたまま、妾直属の部隊の隊長とする。副隊長はまた子。ジロチヨウ親分は相談役とする。ダーク・ドワーフの方は、鍛冶職を仕切れ。以上、質問は？」

場の全員から質問は出なかつた。只、数名から溜息は漏れたが。

人事異動の報告会を無事に終え、リリー・マルレーンは立ち上がり扉へと歩き出す。そして、扉の前で立ち止まると、何かを思い出したように振り返り、今後の行動を口にする。

「妾は疲れたので、一週間の有給休暇を取ります！ 各自、隊長としての責任を持って行

動する様に！ 先日の戦は皆、頑張ったと思いましたが！ まる！」

「そう言い残し、去って行った法皇陛下の背中を見つめながら

「作文？」

全員の声が重なった。

ビクトーリアの異世界探訪録

ビッチと金の鳥 前編

ビクトーリアは必死にカーペットを掴む。だが、その行為は虚しい抵抗でしか無い。ドレスの留め具は、すでに淫魔アルペドによつて外され、ビクトーリアの染み一つ無い白磁の様な肌は、薄闇にさらされていた。

そして、その肌を淫魔アルペドは唾液で光る舌で舐めながら身体を重ねる。ぺちやりぺちやりと味わう様に舌は這い回り、へそや、胸の谷間、鎖骨、首筋を何度も往復する。そして淫魔アルペドの掌は、その白く細い指で、ビクトーリアの豊かな乳房の形をゆつくりと変えて行く。

「くふう。ビッチ様、期待してくださいね。私、初めてですが、満足頂ける様頑張りますので」

淫魔アルペドは、艶を含んだ荒い息を吹きかけながら、ビクトーリアの耳元で囁く。自分の唾液で濡れたビクトーリアに、自身の身体を擦り付け、ビクトーリアに快楽を与えながら、自身も快感を貪る。ハア、ハアと絶え間なく漏れる快楽に浸るその呼吸を止める事無く、淫魔アルペドの艶めいた唇は、ビクトーリアの唇へと距離を縮めて行った。

ここで負ければ、快楽と引き換えに何かを失う。いや、失うと言うよりこのまま墮ちて行く。墮落して行く。そう思いながらも、七割方色香に流されて行くビクトーリアに、救いの手が差し伸べられた。それはもう、元気良く。

「ビクトーリア様あ！ お時間良いですか！」

妖艶で淫靡な香りしか存在しなかった寝室に、明るい日差しが差し込んだのだ。

遠慮なくドアを開け放った存在。それは、第六階層 階層守護者 アウラ・ベラ・フィオーラだった。

そのアウラが、一步踏み込んだ部屋で展開されていた大人のプロレスごっこ。その光景を視界に納めると、愛らしい顔を一瞬引きつらせ、ゆっくりとドアを閉じる。だが、その行動は阻害された。一步前に出した右足を、ビクトーリアがガツチリと掴んでいた為である。アウラは、ゆっくりと視線を下に向ける。そこにあっただのは、快楽からか頬を赤く染め、荒い息を吐きながら、瞳に涙を湛えたビクトーリアの姿。アウラは、溜息を一つ吐くと、淫魔^{アルベド}へと口を開く。

「アルベドさあ、いい加減にしたら。ビクトーリア様、ビツクリしてんじゃん」

声を掛けられ正気に戻ったのか、アルベドはビクトーリアの瞳を見つめる。その潤んだ瞳を。

「ビッチ様……………可愛いです！ くふー！」

言葉と共にアルベドは、ビクトーリアの唇にむしゃぶりつく。時には啄む様に、舌をビクトーリアの口内に侵入させて情熱的に口付けを交わす。アウラは両手で目を隠し「わー」と呆れ気味の声を上げている。ビクトーリアは朦朧とする意識の中で、細い糸を手繰る様にアルベドを力一杯抱きしめる。瞬間、アルベドの身体がピクンと跳ねた。そして、僅かな後

「!!!」

!!! 声にならない叫びを上げ、アルベドは糸の切れた人形のように倒れ込む。

どうやら絶頂イッテしてしまった様だ。ビクトーリアは、自身の上からアルベドを退かせ起き上がる

「危ない所じゃった。うっかり、流されそうな自分が居ったわ」

そう溜息混じりに口を開く。だがこの言葉は、背後に居た者から注意を受ける。

「危なかったって、身から出た錆じゃないですか。アルベド、最近すつごく寂しそうですよ。ビクトーリア様」

アウラの言葉に、ビクトーリアは「あー」と納得の意を示しながら頭を掻き、横で幸せそうな笑顔で眠るアルベドの髪を、優しく撫でた。その後、二人でアルベドをベッドに寝かしつけ、書斎での待ち合わせと言う約束の後、ビクトーリアは浴室へと向かう。ビクトーリアを見送り、アルベドの顔を眺め、書斎へと向かう為に背を向けたアウラに

声が掛る。

「アウラ。何故此処に？」

アルベドの声だった。その言葉に驚き、アウラは後を振り返る。アルベドは豊かな胸元をシャツで隠しながら、半身を起き上がらせていた。

「起きてたの？ 急に声を掛けるから、ビックリしたじゃん」

「そう。それは御免なさい。それで、もう一度聞いわ。あなたは、何故此処に来たの？」

此処は、ビクトーリア様がお使いになっている屋敷よ」

アルベドは、言葉を選びながら問いかける。だが、言葉の意味はこうだ。ビクトーリアを憎んでいるあなたが、何故此処に居るのか？ アウラは言葉の意味を汲み取り、バツが悪そうに頬を掻きながら

「そうなんだけどさあ。あたし達、最初から決めつけてたじゃん。でも、ユリから話を聞いたり、こないだのアルベドの顔とかさあ、見てたらあたしらも思う訳じゃん。ビクトーリア様を、もつと知る努力をしようって」

自分の心情を口にする。その言葉は酷く曖昧ではあったが、的確にアウラの今を語っていた。アウラの言葉に、アルベドは静かに「そお」と短く呟くと、再びベッドに横たわる。だがその表情は、心なしか微笑んでいる様に見えた。アウラはアルベドを視界に収めつつ、寝室を立ち去った。



「ビクトーリア様、ドードーって知ってますか？」

書齋でビクトーリアと向き合ったアウラの第一声がコレだった。

「ドードー？」

ビクトーリアは一度目を瞑ると、過去の記憶からドードーに関しての記憶を引き吊り出す。一致する項目は二つ。一つは実物の存在としてのドードー。どれほどだったかは忘れたが、昔に滅んだ鳥の名だ。ガチヨウだか何だかに酷似した鳥だったはず。もう一つはフィクションとして。古典の物語に登場するキャラクターだ。はたしてアウラは、どちらを指して言っているのか？ どちらも指していない可能性もあるが。

「アウラよ。詳しく話を聞こうでは無いか」

事実確認の為、ビクトーリアはこう話を切り出す。この言葉にアウラは頷き、懐から一枚の羊皮紙を取り出しテーブルに広げる。

「地図？」

「はい！ アイんズ様が王国で手に入れた物の複写です」

そう言って地図の一点を指差す。その位置は、バハルス帝国の北西。セイレーン達が住んでいた場所の近くだ。

「ここに、ドードーが？」

「あ、いえ。ドードーかは解らないですよ」

「ん？」

——アウラの話はこうである。各地に情報収集に放っていたシャドウ・デーモン、レッサー・デーモンから報告があつた。バハルス帝国の北西にて、未確認の鳥型モンスターを確認。その鳥型モンスターは飛ぶ事はせず、地面を歩く事で行動すると思われる。その情報が、ビーストテイマーであり、魔物に詳しいアウラに上がって来た。だが自身の持つ知識と照らし合わせても、その様なモンスターの情報は無い。そこで図書館に行き、過去のデータと照らし合わせの作業をしたが、YGGDRASILのモンスターとの一致は無かつた。

この様な事例は、過去一件のみである。その存在は、ハムスケ。森の賢王である。と言ふ事は、その存在とは？ 答えの道先は、弟であるマーレの手の中にあつた。

「不思議の国のアリス」

そこに登場する鳥。それがドードー。——

「成程のう。それで？」

「行つてみませんか？ ビクトーリア様」

身を乗り出し、満面の笑顔でアウラは告げる。この行動に、ビクトーリアは驚きの表情を張り付かせた。だが、すぐに普段通りの不敵な笑みを浮かべ

「面白い。未知を既知とする事こそ、YGGDRASILプレイヤーの本懐。行くぞアウラ！ 共をせえ！」

「はい！ ビクトーリア様！」

そう言つて、二人連れだつて暗闇へと消えた。



「ここからかう？」

「そうですね」

黄色いヘルメットを被つたみょうちきりんの二人組は、森の奥深くにまで侵入していた。傍らには、大きな狼と思える物の姿もある。

「ホントにいますかねえ」

アウラは呑気にそんな言葉を口にする。

「うぬが言った事じやろう。ここにドードーが居ると」

ビクトーリアが、惘然とした表情で語る。だが、アウラも負けてはいない。

「あたしは、そうは言っていないよ。ドードーらしき鳥がいたらしい？　と言ったんです」

「確かにそうじゃがあ……」

ビクトーリアの納得行っていない様な言葉に、アウラは矛先を変える事で対処する事にした。

「しかしビクトーリア様。このヘルメットに書いてある、安全第一ってなんですか？」

「うむ。それはのう、何事も安全第一。それが冒険ならば尚更じや。そう言う戒めの言葉、じやな」

「なるほど！」

そんな緊張感の欠片も無い会話を続ける二人の耳に、ドスン！　ドスン！　と言う音が響く。狼、アウラの使役するモンスター。フェンリルのフェンも警戒を顕にする。

そして、森の奥からソレは姿を現した。森の木々に阻まれ、全貌は未だ見えない。だが足音はなお響き続け、さらにはその間隔も短くなっている。これは、対象が速度を上

げた事を意味していた。ビクトーリアは視線を細め

「アウラよ、気を抜くでないぞ」

「はい！」

注意を促した。

ビクトーリアとアウラ、二人は遂にソレと邂逅する。

全高2・5メートル。

全幅2・5メートル。

全長2・5メートル。

姿を現したソレは、単に言えば玉だった。黄色い巨大な毛玉だった。例えるならば、巨大なひよこまんじゅう。それが、猛スピードでこちらに突進して来ていた。

「ひーーーーーーーーーーーーーーーー！」

翼を広げ、ものすごく嬉しそうに。そして……………ビクトーリアを跳ね飛ばし、いや胸に貼り付け走り去って行った。

「あ、あれ？ フェン！ 行くよ！」

叫び、アウラはフェンリルに跨り後を追った。件の毛玉を見失ってから、どれほどの時間が経過しただろうか？ ようやくアウラはソレを発見した。森の中の僅かに開けた場所。ビクトーリアの上で、静かに鎮座した状態で。

「ビ、ビクトーリア様！」

「びー……！」

アウラは慌てて声を掛けるが、毛玉によって阻止された。翼を広げ、どうやら威嚇を
しているらしい。

「ぐほお。こ、れ。動くで、無い。お・も・い」

「びびー！」

ビクトーリアの声に反応して毛玉は嬉しそうに身を震わせる。

「動くな！ うー……うー……うー……」と叫ぶか、どけえー！」

ビクトーリアは下から毛玉をほおり投げる。「まったく」と呟きながら立ち上がるビ
クトーリアだが、すぐ後ろには毛玉が現れる。そして、絡む様に頬ずりをし始める。

「……………ずいぶんと、なつかれて、いますね」

その様子を見ながら、アウラが呟く。心配して損した、と。そして、二人同時に溜息
を吐いた。

ビッチと金の鳥 後編

ビクトーリアとアウラ、二人は顔を突き合わせ「うむむ」と唸る。その理由は、今だにビクトーリアにちよっかいを掛け続ける毛玉の正体についてだった。

「ビクトーリア様。ホントにこいつって、何なんですかねえ？」

そう言われても、ビクトーリアには答える事が出来ない。アウラが発見する前、つまり、毛玉の敷物になっている時、色々な考察を試してみた。リアル、ゲーム問わずだ。

リアルでの場合巨大な鳥と言うと、ダチヨウ、キウイ、絶滅種だがジャイアント・モス。

そして伝説の中では、フェニックス不死鳥、ロック鳥。

ゲームの世界で考えれば、様々な種類の巨大な鳥の魔物が存在していた。百年程前に流行したレトロゲーム内のチ○コボなどもそうだ。

だが、この毛玉はどれも違う様に見える。リアルで考えた場合は、デカ過ぎる。コイツはどう見ても幼鳥だ。ならば大人になった時、どれほどの大きさになるのか？ それほどの大きさならば、恐らくは飛ぶ事は出来ない。

ならば、ダチヨウなどの飛ばない鳥？ そうなると、毛玉の成体は十メートル以上に

なってしまう。それだと、自重で足が持たないだろう。

ではゲームでは？ 少なくとも、YGGDRASIL内ではこんな毛玉は存在しなかった。そうになると、残された可能性は伝承の中。フェニックス不死鳥、ロック鳥、そして………

サンダー・バード
雷神鳥。

サンダー・バード
雷神鳥？ ビクトーリアは、後でじゃれつく毛玉に視線を向ける。だが、その考えをビクトーリアはすぐに放棄した。自身の種族と同じ特徴を持つ雷神鳥が、こんな毛玉では無い。決して。そう思いたい。思う事にした。

フェニックス
「不死鳥とかですかねえ？」

アウラは謎の毛玉を、一番メジャーな物に例えて見た。そして、二人して決玉に視線を向ける。結果、お互いを見つめ首を横に振る。

「アウラよ。仮にじゃ、毛玉が不死鳥フェニックスじゃとして、妾に懐く理由が解らんぞ？」

「そうですねえ。ビクトーリア様が強いから！ とかでは無いですねえ」
アウラの言葉に、ビクトーリアは一度頷き

フェニックス
「左様。不死鳥が強さに下る、など聞いた事も無いからのお」

「そうですねえ。では！ ビクトーリア様の特性とか？」

「妾のか？」

「はい！」

ビクトーリアは一度目を瞑り、自身の種族、職業クラスを思い返す。だが、正解は出ない。「違うのう。妾はタイム系の職業クラスは取ってはおらん」

ビクトーリアの言葉に、アウラは首を傾げ

「では、種族との関係は？」

「種族のう……」

頭では考慮すべきと考えるが、心では拒否したい。そんな思いで、ビクトーリアは考えに浸る。そして、おもむろに右人差し指と親指を立てると、その間にパリツと電気を走らせる。

「びびり……！」

毛玉が声を上げた。

「喜んで、ますね」

アウラが状況を述べた。どうやら、毛玉は喜んでいらしい。放電を止めてみる。

「びり」

「あ、しよげた」

再び放電。

「びびり……！」

止める。

「びー」

「ビクトーリア様あ」

それが答えなのか？ ビクトーリアの額を、嫌な汗が流れる。

その時、上空から羽音が聞こえた。その羽音に、ビクトーリア、アウラ、フェン、毛玉が一斉に警戒の姿勢を示す。だが、それは杞憂に終わる。

上空に現れたのは、茶と白が混じった羽色を持った者。セイレーンのニケ、またの名をワカメであった。バサリ、バサリと頭頂部の羽をはためかせながら、徐々に高度を落として来た。そして着地すると、礼を持って腰を折る。

「奇妙な波動を感じましたので、偵察に出て参りましたが、やはりビクトーリア様でしたか」

「失礼な物言いじゃのう。ワカメ……」

威厳を持って接しようとしたビクトーリアだったが、此処にはそれを邪魔する者が居た。ビクトーリアの黄金の髪を啄み、自分に興味を引かそうとする者が。毛玉はこう言っているのだ、もつと自分に構えと。

「なんじゃあ、もう。ちいと黙っておれ。妾は忙しいのじゃ」

「びー！」

従う気は無いらしい。毛玉はさらにビクトーリアにじゃれ付いて来た。

「じゃから！　じゃれるなと言っておる！」

「びびー！」

「やめんかー！」

言葉と共に、帯電状態の拳を叩きつける。それによつて、毛玉は十メートル程吹き飛んだ。だが毛玉は一切のダメージを感じさせず、すぐに起き上がると、ビクトーリア目がけて突進して来た。どうやら、遊んで貰っていると思つていらしい。

一方ビクトーリアは、じつと自分の拳を見つめる。傍らのアウラも同様だった。ビクトーリアは、仮にもナザリック最強のシャルティアを打ち倒した人物なのだ。その攻撃が通用しない者など……。

「何故じゃ？　何故？」

そう呟くビクトーリアに、ニケが言葉を掛ける。

「その娘に雷撃は効果ありませんよ」

「は？」

ビクトーリア、アウラの両名の目が点になった。そして、ニケの言葉はこう続いた

「その娘は、ドラゴンにも匹敵する唯一の魔物。雷神鳥サンダーバードの雛ですから」

真実が明らかになった。その事により、ビクトーリアはがっくりと腰を落とした。だが、ニケの追撃は続く。

「たぶん、ビクトーリア様の波動を感じて、親だと思っっているのでは？」

そう言うニケに、アウラは毛玉と戯れるビクトーリアを視界に収め

「どっちかかって言うのと、飼い主じゃない？」

そう言つて苦笑いを浮かべた。

ニケは心配そうにビクトーリアを視界に収めつつ、サンダー・バード雷神鳥の雛を撫でる。

「我らが神鳥様。あなたはどうしたいのですか？ ビクトーリア様は、この地を御去りになります。此処で暮らしますか？ それとも……」

「ま、待て！」

ビクトーリアは、ニケの言葉を止めようと口を開く。

「びー！」

「付いて行くそうです」

間に合わなかった様だ。再びビクトーリアはがっくりと地面に四肢を付く。サンダー・バード雷神鳥の雛はそれを目ざとく見付け、ビクトーリアの背にどっかりと鎮座した。

「お、おもしろい……」

「これはあ、おんぶですね」

アウラが冷静に分析する。

「な、ならば、わ、妾の上に乗って、いたのは……」

「だっこ、と言う事になります」

「びー！」

サンダー・バード 雷神鳥の雛はバサバサと短い翼をはためかせ、肯定の意志を告げる。ビクトーリアは諦めたかの様に、その四肢を地面に投げだした。

それから二十分程経ち、サンダー・バード 雷神鳥の雛の飼育を覚悟したビクトーリアは、何時もの様に、悠然と立っていた。頭上にサンダー・バード 雷神鳥の雛を乗せた状態で。これでビクトーリアが両手を挙げれば、完全に♀マークの完成である。

「これわあ、どう言う事じゃ？」

ビクトーリアは、自身の状態に対し疑問の声を上げる。だが、アウラとニケは目をそらしながらも事態を冷静に判断した。

「鳥つて、肩とか頭に止まりたがりますよね！」

この言葉に、ビクトーリアは眉をピクリと跳ねあげる。その中で、アウラが羊皮紙を広げているのが眼に付いた。

「アウラよ、何をしておるのじゃ？」

「ん？ ああ、これですか？ 記録を撮っているんですよ」

「どうやら、アウラが持っている羊皮紙は、記録用のスクロールの様だ。ビクトーリアは盛大に溜息を吐くと、話の方向を変える。

「ワカメ。実際の所、この毛玉は何を喰うておるのじゃ？」

「サンダー・バード雷神鳥は雑食なので、何でも食べますよ。詳しい事は、サイレン様に御聞きするのが良いかと」

「また子にかや？」

「はい。サイレン様は、サンダー・バード雷神鳥の巫女でもありますから。白い羽を持って産まれるセイレーンは、サンダー・バード雷神鳥の加護を持って産まれ出ると言われています」

ニケの説明に、毛玉の世話はその巫女に丸投げしようとビクトーリアは決めた。

「それでビクトーリア様。その子の名前はどうします？」

アウラが急にそんな事を言い出した。

「名前かや……」

ビクトーリアは瞳を閉じ、じっくり考えてから名を口にする。

「毛玉、で良いのでは？」

そう言ったビクトーリアを、二人は半眼で見つめていた。この表情には見覚えがあった。アインズ・ウール・ゴウンの四十人が、モモンガを見る目つきだ。それを敏感に感じ取ったビクトーリアは、毛玉を頭の上から降り落とし、コホンと咳払いをする

「冗談じゃ。さすれば、コンスタンチンではどうじゃ?」
「びー!」

毛玉がそっぽを向いた。これは、拒否の姿勢らしい。

「うーむ。ならば、デユランダル」

「びー!」

これもダメらしい。その後、ランスロット、ガウエイン、モルドレット、サザーランド、ジエレミア・ゴッドバルトなど言ってみだが、全て拒否された。この名付けに飽きて来た、いや、疲れて来たビクトーリアはどうでも良いと開き直り

「じゃあ、ビリビリ」

適当に語感で選び、その名を口にした。アウラ、ニケの二人の反応は、散々な物だったが、当の毛玉は

「びびー!」

気に入った様だ。

だが、アウラはもちろんだが、ニケの視線は鋭い物に変わる。それはそうだろう。ここで、この毛玉の名がビリビリなどと言う冗談で付けた以外考えられない物に決まっただけならば、自身達が信仰する神の名が、ビリビリ様となるのだ。それは何としても阻止しなければならぬ。もしかすると、神の名付けに立ち会った者として、自分の名も後世

に残るかもしれないのだから。

だからこそ訴える。言葉に出すと怖いので、目力のみで。その願いは、その思いは、ビクトリアの鋭敏な感性に確実に届く。やはり、あまりにもだと。

ビクトリアは自身の記憶を混ぜ返し、正解を導き出そうと努力を繰り返す。そして、行きついた。以前、仕事で過去のサブカルチャーの歴史を記録していた時に見た覚えがある言葉。ビリビリと対成す言葉。ビリビリを体現した者の名。

「ミサカ」

「びびー！」

「本日、この場を持ってうぬの名はミサカじゃー！」

「びびびー……！」

凄いはしやぎ様だった。よほど気にいったみたいだ。

「ミサカ……」

「ミサカ様！」

アウラとニケの評価も上々の様だ。ビクトリアは、満足げに何度も頷いた。

こうしてビクトリアは、ドラゴンに匹敵すると言われる神鳥を手に入れたのだった。ちなみに、サンダー・バード雷神鳥が成態となるには、二百年かかると言われている。

ビッチと豆の木 前編

帝国での一件を終え、アウラと毛玉、いやミサカを伴いナザリックに帰還したビクトーリアは、書齋にて今までのナザリックの行動報告に目を通していた。

「成程のう。結局ザイトルクワエの正体は不明、と言う事か」

「はい。ピニスン、ドライアードが言うには、突然空から落ちてきたそうですが……」
ビクトーリアの眩きに、アルベドが補足する様に答えた。だがその声は、不自然に下の方から聞こえた。

——ザイトルクワエ。数百年前、突然現れた植物系のモンスターである。トブの大森林の東側に着床し、魔樹と呼ばれる存在。冒険者ギルドの貴重な薬草採取の依頼を受け、その地を訪れたモモンとアウラ、そしてハムスケ。そこで偶然出会ったのがドライアードのピニスンである。ザイトルクワエの復活の危機に助けを求められ、ナザリックの階層守護者達の手で討伐された。——

「左様か……」

「何か不審な点が？」

アルベドの問いに、ビクトーリアは些細な事だとも言う様に事実確認だけを済ます事にする。

「それで、当然討伐後は再調査したのじやろうな？」

「はい？」

嫌な返事が返って来た。ビクトーリアは、ゆつくりと自分の下へと視線を向ける。椅子として自分を座らせているアルベドに。何でも、対リザードマン戦の時にシャルティアがアインズの椅子と成る事で罰を受けたのが羨ましかったそうだ。

「討伐後の再調査、したのじやろう？」

ニッコリとほほ笑んで、ビクトーリアは再度問いかける。しかしアルベドのところが切った瞳は、ゆつくりとその光を失って行く。

「しておらぬのか？」

「……………はい」

アルベドの言葉に、ビクトーリアの眉がピクンと跳ねる。そして

「なーにをやっておるのじゃ！ 相手は植物じゃぞ！ 根つこの一本からでも、復活したらどうするのじゃ！」

叱責の言葉を吐きながら、アルベドの色香漂うむっちりとした肉付きの良い臀部をパ

ンパンと叩く。

ビクトーリアとしては、躰、もしくは罰としての様な行為だったのだが、アルベドにとってはどうやら違ったらしい。痛みに、いや、刺激に対しての反応が異常に艶っぽいのだ。時折「あふっ」とか、「あんっ」などの声が漏れている。捕食者にして被虐性愛者。アルベド、恐ろしい女である。まさに魔性の女。

若干表情を引きつらせるビクトーリアの脳裏に、ふと今回の失態の原因が思い当たる。この失態は当然の結果であると。

アインズが、いや、モモンガが指揮を取っていたのだから、再調査などするはずが無いのである。その最大の理由は、自分達二人が育った環境ゆえであった。自分達の学んで来た学問では、自然科学と言つて良いのかは解らないが、植物の生長などの学問がバツサリと割愛されていたのだ。中学、高校、大学などと進めば化学などの授業もあったのだが、所詮小学校レベルではそう言つた授業など省略されている。一早く社会の歯車となる教育がなされている為だ。

だからこそモモンガは知らなかった。ブルー・プラネット辺りが居れば、また行動は違つていたかも知れないが……。

その考えに至らなかつた自身を恥じ、ビクトーリアはお詫びとして、アルベドの艶を秘めた臀部を優しく何度も撫で上げた。それがいけなかつたのか、それとも良かったのか

か、五回ほど撫で上げた時、アルベド椅子はクシャリと崩壊した。嗜虐と寵愛、それを同時に受け、軽く達してしまった様だ。

桃色吐息を吐きつつ幸せそうに眼を瞑るアルベドを抱き上げ、自室のベッドに寝かせると、ビクトーリアは館を後にするべく外界へと続くドアを開ける。

だが、開け放たれたドアから見えた景色は………黄色一色の世界であった。その黄色をビクトーリアは半眼で見つめ、盛大に蹴り飛ばす。衝撃を受け、十メートル程吹き飛んだ黄色、いや、ミサカは、すぐに立ち上がり嬉しそうに駆け寄って来る。

何と言うかこのひよこ、異常なまでに防御力と攻撃力が高いのだ。種族特性なのか、防御力はアルベドを上回り、攻撃力はステータスを見る限り、セバスのそれを上回る。誠に恐ろしい生物であった。

そのミサカだが、ビクトーリアの前まで走り寄って来て――。

「げーーーーー」

何かを吐いた。

その口からはびちやびちの吐瀉物では無く、丸い物がぼとりと吐き出される。いわゆるペリット、と言う鳥類が吐き出すゲロである。この行動に対し、ビクトーリアは眉をピクリと跳ねさせ、再び蹴り飛ばす。またしても十メートル程吹き飛び、何事も無かった様に戻って来る。それはそれは楽しそうに。

そして、くちばしで自身の吐いたペリットを突く様に指し示す。どうやらビクトーリアに受け取れと言っているようである。

「……………これを、妾にかや」

「びー」

本当にそうであった。思い悩んでいると、ミサカをつぶらな瞳が悲しげに濡れて行くのを見てとれた。ビクトーリアは溜息を吐くと、その若干粘つくペリットを手に取り、解体して行く。少しずつ少しずつ外皮の様な物をはぎ取って行くと、その中心部分からインペリアル・トパーズを思わせるオレンジ色の宝石が現れた。

ゲーム内では、ドラゴンが時々落とすドラゴン・ドロップの様な物か？ と思いながらビクトーリアはそれを見つめていたが、ミサカはくちばしでビクトーリアの胸元を指し示す。ビクトーリアの胸には、ナインフィンガー九本指の首飾りネックレスが。

「はめよ、と言うのか？」

「びび」

どうやらそうらしい。ビクトーリアは、ナインフィンガー九本指の首飾りネックレスの中央の石を外し、ミサカのペリットをはめ込んでみた。その行為に、ミサカは満足げに頷き

きこえるっ「びび　びび　びび」

「！」

耳から聞こえる声は、ミサカの鳴き声なのだが、それと同時に翻訳される様に脳内に少女の様な幼い声が響く。

「ミ、ミサカなのかや?」

そうだよー! ミサカだよー!
「びびー! びびびー!」

「何じゃ? これは……」

しらない。ミサカねえ、おねえちゃん、おはなししたかったのー
「びびーびびびびびびー、びびびー!」

この事象に対して、ミサカは知らない、と言うよりも無意識での現象の様だ。ならば、巫女であるサイレンに聞いた方が何か解るかも、とビクトーリアは思い至る。この事は一時棚上げである。

「ミサカよ、妾はちいと用がある。うぬは留守番を——」

ミサカもー!
「びびー!」

付いて来る気満々だ。ビクトーリアは僅かに思い悩むが、それも一興とミサカの背中に飛び乗り腰掛ける。

「ミサカよ、目的地は闘技場。発進!」

いっっきまー!
「びっびびー!」

僅かな助走の後、いきなりトップスピードに持つて行き、ミサカは怒涛の勢いで疾走して行った。土煙を上げミサカのスピードはさらに増して行く。そして、あつと言う間

に闘技場に到着した。だが、そのスピードは一向に落ちない。闘技場の入口となる、細い通路にミサカは狙いを定める。

「ミサカ！ 止めよ！ さすがに危険じゃ！」

「びびびびー！」

有言実行！ 自分の横幅とほぼ同じ程の通用門をすり抜けた。それでも速度は落ちず、闘技場の中程で横滑りする様に停止を掛ける。土煙を上げ、何かを弾き飛ばしミサカは停止した。

「びっぴびー！」

誇らしげに胸を張るミサカに対し、ビクトーリアはゆっくりと背中から降りると正面へと回り

「調子に乗り過ぎじゃ。馬鹿者！」

言葉と共に三度蹴り飛ばした。だが、やはりすぐに帰って来た。全くダメージを感じさせずに。

「びっぴびー！」

「黙りなんし！」

文句を言うミサカを、ビクトーリアが妙な郭言葉で一括する。だが、すぐに一人と一匹は、自分達が注目的になっている事に気づく。どうやら本日闘技場では、何かが行

われていた様だ。周りを見渡せば、数名のリザードマンにデス・ナイトが一体。そしてアウラの姿があった。遠くにはマーレの姿も確認出来る。

「ビクトーリア様、一体どうしたんですか?」

表情を若干引き攣らせながら、アウラが声を掛けて来た。極端な性格の者が多いナザリック地下大墳墓だが、今日のこの一人と一匹は頭一つ突きぬけている。言うなれば、田舎の細道をレーシングマシンで大暴走して来た感じだ。世界ラリー選手権の世界だ。

だが、アウラの引き攣りはその行動だけでは無かった。お騒がせ犯達は、ゆつくりと差し出されたアウラの指が示す先に視線を向ける。そこには、壁にめり込む様に倒れる毛玉があった。目を凝らして毛玉を観察する。その正体は、目を回しているハムスケであつた。ビクトーリアはアウラへと視線を戻し

「あ奴は何を遊んでおるのじや?」

疑問を口にする。ミサカも同様らしく、可愛らしく首を傾げていた。

「遊んでるじや無いですよ! 事故ですよ! 事ー故!」

「事故とな? 危ないのう。アウラも気を付けるがよいぞ」

ほんただね!

「ひー!」

この一人と一匹の言葉に、アウラは溜息を吐き

「事故の原因はミサカです! ミサカに跳ね飛ばされたの!」

眞実を突き付けられた一人と一匹は、お互い視線を合わせ

「何をやっておるのじゃキサマは！」

「びー！」
だって！

「とりあえず、拾つて来い」

「びー！」
はい

ビクトーリアの言葉に、渋々納得しミサカはハムスケを拾いに向かう。これでやつとまともに話が出来ると、ビクトーリアは溜息を溢しながらアウラと向き合う。

「アウラよ、うぬにちいと頼みがあるのじゃが——」

そう口にした瞬間、闘技場に叫び声が響く。

「あー！ 見つけたでありんす！ お姉さま！ 再度勝負を！」

シャルティアの様だ。記憶が無いとは言え、先の一戦の敗北がさうとう悔しいらしい。そもそも、ビクトーリアを仮想敵として産まれたシャルティアにとって、ビクトーリアに勝利する事が己のアイデンティティーの一部となつていているらしい。胸のパットがずれるのも気にせず、大股でビクトーリア、アウラに近づいて来る。だが、シャルティアは知らなかった。この場にはビクトーリア以上に厄介な者がいる事に。

「おねえちゃんはおねえちゃん、わたしはわたし——」
「びー、びー、びー！」

ハムスケをサッカーのドリブルの様に転がしながら、ミサカがシャルティアに向かつ

て突進する。

「え？」

ドドド！　と言う音と共に迫り来る何かに気付き、そちらに視線を向けようとしたシャルティアだが、そうする事も許されずミサカに跳ねられた。

「あ」

ビクトーリアとアウラ。二人からはその言葉しか出なかった。

「きゅ〜」

シャルティアは、跳ね飛ばされた勢いで壁に激突しのびていた。アウラは慌てもせず、メイド長であるペストーニャへと連絡し、視線をビクトーリアへと戻す。二人はこう思ったのである。アレくらいでは怪我もしないだろう、と。

「ビクトーリア様。それで、あたしに頼みとは？」

覚えていたらしい。全く賢い娘である。

「うむ。うぬに魔樹の所までの案内を頼みたくてのう」

「魔樹？　あー、この間あたし達が倒したヤツですね」

「うむ」

そう言うが、アウラは少し困った様な表情を浮かばせる。

「うーん。お受けしたいのはやまやまなんです、あたし今日は階層守護の当番日なん

ですよ」

「そうかや。では無理にとは言えぬのう」

そう言つてビクトーリアは天井を見つめる。他の階層守護者に同行を求めるか？
そう考えるが、皆忙しそうだ。

「あ！ ビクトーリア様。マーレでもいいですか？」

「良いのかや？」

「はい！ ぜんぜん大丈夫ですよ！ マーレー！ ちよつと来なさいよ！」

アウラは闘技場の客席に座っていた弟に呼びかけた。

ビッチと豆の木 中編

「アウラは大声で闘技場の観客席に座る弟を呼びつける。その声に気付き、顔を上げた弟は立ち上がりトコトコと階段を降りて来た。その行動を見て、アウラが苛立った様に声を上げる。」

「何やってのよ！ 早くしなさい！ マーレ！」

その時不意に、アウラは頭頂部に重みを感じる。ビクトーリアが手を乗せていたのだ。ぐりぐりと少し乱暴ぎみに頭を撫でると

「そう言うな。慌てて転んで怪我でもしたら大変じゃ。人にはそれぞれペースと言う物がある。素早き者、頑丈なる物、悪知恵が回る者。じゃろ？」

「は、はい！」

忠義の示し方は色々ある。それぞれが出来る事を、得意な分野で奉げれば良い。ビクトーリアの伝えたい事は、そう言う事なのだ。

しかしアウラは後を僅かに振り返り、目に映る者達を見て苦笑いを浮かべる。マーレを急がせる事での怪我の心配をしていたが、今だサッカーボールと化しているハムスケと、気を失っているシャルティアは良いのだろうか？ と。アウラがそんな事を考えて

いる内に、マールレが息を切らせながら到着した。

「はあ、はあ。お、おねえ、ちゃん、なに？」

「もう！ これだけの事で情けない」

言いながらアウラは溜息を吐き、本題を口にする。

「マールレ。あんたちよつとビクトーリア様の道案内して来なさい」

「え？」

アウラのあまりにもな直球での物言いに、マールレは杖を握りしめ、その幼い少女の様な顔にキョトンとした表情を映す。

「あ、あの。えつと。どう言う事？ お姉ちゃん」

言いながら首を傾げる。意味が解らないと。まあ、それはそうだろう。アウラは行き先を言つてはいないのだから。アウラもそれに気付いたのか「ああ」と頷き

「こないだ退治した魔樹があつたじゃん。あそこに案内してほしいんだつて」
やつと行き先を告げた。

そう言われてマールレは、上目遣いでビクトーリアを見つめると

「あ、あの、僕で良いのでしょうか？」

「何がじゃ？」

マールレの問いに、ビクトーリアは首を傾げる。

「アウラよ。食堂に行つて菓子を貰つて来てはくれぬか？」

「え？ お菓子ですか？」

「うむ。コック長に、何時もアルベドが貰っている奴をくれ、と言えば解る筈じゃ」

「はい！ 解りました！ すぐ行つてきますね！」

そう言つてアウラは駆け出して行つた。

残されたビクトーリアは、以前アウラが持つていた地図を取り出す。それが胸の谷間からであつた為、マレーの顔はさらに赤みを増した。

「うん？ どうしたのじゃ？」

「あ、いえ。その……ごめんなさい」

ビクトーリアは何を謝るのかと疑問に思いながら、闘技場の地面に地図を広げた。

「マレーよ。魔樹が居つた場所はどのあたりじゃ？」

問われたマレーだが、別の事を考えていたのか驚いた様に言葉を返す。

「あ、あの。えつと。ここら辺りになります」

そう言つて指示した場所はトブの大森林の東側。帝国と王国を縦断する様に広がる大森林の王国側。

「ふむ。マレーはその位置を知覚できるかや？」

ビクトーリアは難しげな言葉で問いかけているが、簡単に言えば、そこまでゲートの

魔法を繋げる事が出来るのか？　と言っているのだ。

「は、はい。大丈夫です」

確認作業も終盤に差し掛かった頃、アウラが戻って来る。その手には、三十センチ強の箱が。

「お待たせしましたー！」

元氣よく、それでいて慎重にアウラが近寄って来る。注文された品をビクトーリアへと渡し、自身のお使いの意味を尋ねた。

「ビクトーリア様、これって一体何に使うんですか？　これってケーキですよね？」
「うむ。これはのう……」

そこまで言っただけでビクトーリアは、右手の指をこめかみへと当てる。

「用意は整ったぞ。早よう扉を開けよ」

誰かへとメツセージの呪文を飛ばした様だ。

言葉が終わるとすぐに眼前に暗闇が浮かぶ。だが、その大きさは五十センチ程。その暗闇から、細く美しい女性と思われる腕がニユウつと伸びて来る。その腕をビクトーリアは忌々しげに見つめると、お使いの品を手渡す。腕は、まるでお盆でも持つ様に、ワ
ンホールのケーキを受け取ると闇へと消えて行った。

そして僅かな後、再び闇が現れる。だが先ほどとは違い、今度は人が通れる程の大き

さで。

「まったく、段々と凶々しく成りおつて。一体誰に似たのやら……」

そう言うビクトーリアを、アウラとマーレは不思議そうに見つめていた。それに気付いたのかビクトーリアは疲れた笑いを浮かべ

「あれはオーレオールじゃよ」

腕の正体を告げた。

「「え？」」

アウラとマーレ、二人の声が重なった。どうやら信じられない様だ。

「まったく。知っておるか？ 最近あ奴、手土産を持参しんと転移門を開放せんのじゃぞ」

「マジですか？」

「マジじゃ」

ビクトーリアとアウラは盛大に溜息を吐く。

「あ、でも、それだけビクトーリア様に甘えているのかと」

叱られているでも思ったのか、マーレがオーレオールのフォローに入る。

「はあ。そう言う見方も出来るか。まあよい。ではアウラよ、マーレを借りるぞ」

「はいー」

その言葉に、マーレは肯定の言葉を返し、ミサカはこの場の感想を口にする。そう、この何も無い場所、まさに爆心地と言った方が的確な場所なのであった。

ビクトーリアの脳裏に過去に見た映像が浮かぶ。

黒く変色した大地に、無数に転がるかつて人だった物達。

腕の無い骸。

足の無い骸。

頭の無い骸。

そして、何かも解ら無くなった者。

その映像が、何枚も何枚も脳裏に映し出される。そのせいか、ビクトーリアの身体がグラリと揺れた。

「ビ、ビクトーリア様？」

「おねえちゃん?
びびびび?」

揺らめくビクトーリアを心配して、マーレとミサカが声を掛ける。

「だ、大丈夫じゃ……」

大地を強く踏みしめ、映像を振り払うかの様に頭を振りつつそう答える。

（どう言う事じゃ? カルネ村で力を振るった時には何も感じてはいなかったはずなのに……。モモンガは精神が種族に引つ張られていると言っていたが………違うのう。

恐らくは元からのじやな。そうか、そう言う事か)

「かかつ！ くくつ！ ぎゃーはっはっはっはっはっ！」

ビクトーリアは急に狂った様な笑い声を上げ、その額を黒く染まった大木に打ち付けた。ビクトーリアの額から一筋の鮮血が流れ落ちる。

「ビ、ビクトーリア様！」

おねえちゃん！
「びびびび！」

マールとミサカが、慌てて声を掛ける。だが、ビクトーリアの目は二人を映してはいなかった。

「見つけたぞ。はっきりと確信出来た。これでアイツを日の下に……」

ぶつぶつと独り言を呟くビクトーリアに、マールが手を触れる。その感触に、ビクトーリアの身体がビクリと反応を示す。

「マ、マール？」

「は、はい。……大丈夫、ですか？」

そう言うマールの瞳は、恐怖と困惑で僅かに揺れていた。

「すまぬ。もう大丈夫じゃ」

そう言って額の血を拭い、魔樹が茂っていたと思われる場所へと歩を進める。

「……からかえ？」

「は、はい。この辺りだと思えます」

「ふむ。では、妾はこの中心付近を探る。マーレとミサカは外周辺りを頼む。何か可笑しな物を見つけたら、呼んでくりやれ」

「は、はい！」

「ひー！」

その言葉を合図に、二人と一匹は現場調査を開始する。だが、マーレとミサカの行動は不発に終わる事をビクトーリアは知っていた。何故ならば、目当ての物は目の前にあつたからだ。

魔樹の残滓。

炭化した残り物。

荒れ地の飾り。

つまりはゴミ。

それに隠される様に、それはあつた。

それは存在した。

そこに生えていた。

黒く染まった大地を割り、瑞々しい色を湛え、魔樹サイトルクワエの新芽が。ビクトーリアは傷つけない様にそつとソレを掴むと、ゆつくりと引き抜いた。若々しい緑色

の茎の下方には、白い根があった。その七つ程に分かれた根は、無脊椎動物の様にうねうねと蠢いている。間違いはなさそうだ。

ビクトーリアは虚空から小さな寶石箱を取り出すと、ザイトルクワエの苗を入れ、虚空に戻す。得る物は得たとビクトーリアは立ち上がり、手をパンパンと叩き汚れを落とすとマーレとミサカに呼びかけた。

「どうじゃ、何か見つかったかや?」

「い、いえ。何もありません!」

「なんにもないよー!
びびびびー!」

一人と一匹の返事にビクトーリアは一度頷くと、ナザリックへの帰還を口にした。

ビッチと豆の木 後編

ザイトルクワエの新芽の収集に無事成功したビクトーリアは、一度ナザリックへと帰還し、そこでマーレと別れ別の地に転移して行つた。

ビクトーリアが転移した先。そこは、スレイン法国神宮殿内の中庭である。

若き修道士^{モンク}達が、それぞれの得物を手に修行に勤しんでいる最中に、それは現れた。全てを飲み込む様な暗闇。その中から、巨大なひよこに乗った法皇陛下が姿を現す。その暗闇が、何を意味する物かを知らない若い修道士^{モンク}達は騒然となった。だが、この場にはそれを知る者も居た。

「あー、おまえらあ、静かにしろー。面白い見世物が現れたただぞー」

失礼極まりない言葉を口にしながら、オキタが歩み出て来た。そして、ひよこ、ミサカに乗るリリー・マルレーンに視線を向ける。

「どうしたんでさあ、陛下。随分と楽しそうな物に乗つて。思わず嘖き出しそうになりやしたぜ」

そう言つてオキタは、DSの本性を？き出しにしたかのような笑みを浮かべる。だが、そんな事で怯むほどリリー・マルレーンは甘くない。

「ふふん。何を言っておるのじゃ？ 面白いのはこれからぞ。オキタ、勅命じゃ。森司祭ドレイド クラスの職業を持つエルフを三人程連れてまいれ。場所は……そうじやのう、建設中の、大堀の西側で良いじやろう」

「りよーかいしやした」

リリー・マルレーンの言葉に、オキタは若干の戸惑いの色を示すが、それを受け入れ城内へと姿を消した。

リリー・マルレーンの指定した待ち合わせ場所。スレイン法国も当然の如く城郭都市である。現在、以前の城郭の外に、新たな壁を築く工事が行われていた。それは防衛の強化、と言う側面もあるのだが、実際には移住するセイレーンやダーク・エルフ、ダーク・ドワーフ達の居住地の確保の為でもある。その大外掘りの西側、と言う事だ。

オキタの背を見送ったリリー・マルレーンは、ミサカに前進の指示を出す。その言葉通りにミサカは目的の場所へと進路を取った。その途中で奇妙な声を出しながら近づくと遭遇を果たす。

「はあああああああ！」

声の発生源に目を向けると、そこには目を見開き、これでもかと大口を開けたサイレンが居た。そして、掌をわなわなとさせながらにじり寄って来る。その姿は、神宮殿の地下で魔法の研究に就いているピカリンや、帝国の病氣持ちを思い出された。

ゲンナリするリリー・マルレーンに対して、サイレンはなおも近寄って来ている。僅かにだが、息も荒くなっていた。どうやら興奮している様だ。

「はあ、はあ、はあ。へ、陛下……その方は？」

吐く息の間隔を徐々に狭めながら、サイレンはミサカへとゆっくり手を伸ばして来る。だがその行為は、手が届くすんでの所で阻止された。ミサカの足は、いや、その鋭利な爪は、ガツチリとサイレンの頭部を掴んでいたのだ。

おねえちゃん、この白いのなんかきもちわるい
「びーびびびーびび、びー」

リリー・マルレーンは、そう言われて改めてサイレンに視線を向ける。巨大な爪でホールドされたサイレンの表情は隠れて見えにくいのが、端から見え隠れする物は、どこかうつとりとした物だ。

ミサカの言う通りだった。確かに気持ち悪い。だからこそ、リリー・マルレーンはサイレンに声を掛ける。

「おーい。これ、また子。気色の悪い表情をするで無い。ミサカがおびえておるでは無いか」

そっだよ！
「びびー！」

リリー・マルレーンの言葉に、ミサカも同調する。だが、そんなミサカをリリー・マルレーンは半眼で睨みつけ

「ミサカも取り合えず足を離せ。このままでは、また子が足の裏を舐めて来るぞ」

未だ片足立ちのミサカに、注意の言葉を投げかける。だが、ミサカは若干不安げに

「でもお、おそつてこないや？」
「びーびー?」

警戒の言葉を告げる。その言葉と態度に対し、リリー・マルレーンは尤もだと頷くと「心配するでない。そうなったならば、妾が蹴り飛ばすからの」

物騒な言葉で話を締める。

この言葉で安心したのか、ミサカはサイレンを解放した。ミサカが力を抜いた瞬間、サイレンは両膝を地面に付け、祈る様な仕草を見せる。

「おお、我らが神鳥、雷神鳥様。サンダー・バード様 健やかなお姿を拝見出来、巫女として嬉しい限りです」

サイレンは、しっかりと礼を尽くしミサカに言葉を掛けた。だが、相手はミサカである。ミサカは可愛らしく首を傾げると

「びびび? みこつてなに? びびび? しはんや?」

やはり、理解してはいなかった様だ。

二人のあまりにもなすれ違いっぷりに、リリー・マルレーンは溜息を一つ漏らし、さてどう説明したら良いのか思い悩む。そして、導き出された答えは……

「ミサカや。こ奴はのう……うぬの子分じゃ」

実に投げっぱなしの言葉だった。

「^{ミサカの子分!}
びびび!」

だが、ミサカの反応は嬉しそうだ。

いささか行き過ぎた表現だったが、祀られた側から見れば、巫女を子分や召使と
存在と取っても間違いではないだろう。それに、この方がミサカにとつて解りやすい筈
だ。

そう思いながら、若干の不安を胸に視線をサイレンへと向ける。するとサイレンの瞳
も、リリー・マルレーンに向けられていた。それと同時に、サイレンが一度頷く。どう
やら今の説明で良いと言う意思表示の様だ。それを受けリリー・マルレーンも一度頷い
た。それを合図に難しい挨拶は終了とでも言う様に、サイレンは話題を切り換えた。

「それで陛下は何を為さりに行くのだ?」

「ガーデニングじゃ!」

「が、ガーでん?」

「うーん……………植樹、とも言うがのう」

そう言つて虚空から箱を取り出し開いて見せる。その中には、根っこをウニウニと動
かし続けるザイトルクワエの苗が。

「うわっ! 何だ、このミミズ千匹の様な物は! びゅー!」

ミミズ千匹、この言葉を発した瞬間、サイレンの頭頂部を衝撃が襲う。

「卑猥な言葉を言うでない！」

警告の言葉と共に、リリー・マルレーンの踵が直撃したのだ。

「何が卑猥だ！ 我はミミズ千匹と言っただけだぞ！」

「それが卑猥なのじゃ！」

「どう言う事だ！ ミミズも千匹も卑猥では無いぞ！」

サイレンの反論に、リリー・マルレーンは最もと領き

「確かにまた子の言う通り、ミミズも千匹も卑猥では無い。じゃが！ じゃがじゃ！」

この二つが合わされば、卑猥な言葉となる。数の子と天井などもじゃな。タコ壺も別の意味を持ちうるゆえ、注意する様に」

注意喚起の宣言を口にした。

だが、意味の解らないサイレンは、首を捻るばかり。その様子を半眼で見つめていたリリー・マルレーンは、ミサカの背から降り、サイレンに言葉の意味を耳打ちした。リリー・マルレーンから、真実を語られるサイレンの顔は、徐々に赤味が差して行く。

「そー！ そんな意味が……。陛下、我は理解したぞ。無知とは恥ずべき事だと！」

ガツポーズをしながら、サイレンは高らかに学問の追及を宣言する。そんな、美女達の寸劇が終わろうとしていた時、新たな演者が加わる事になる。

「陛下あ、何やってるんでさあ」

リリー・マルレーンの言いつけ通りエルフ達を連れ、オキタが歩いて来た。リリー・マルレーンはサイレンからオキタへと視線を移し

「いやのうち、また子が往来で、卑猥な言葉を叫んでいたので注意をしていたのじゃ」

「へーえ。そりやあいけやせんねえ。発情中の鳥は鳥籠へ、つて事できあ」

「ふむ。また子を鳥籠で調教のうち………良い案じゃな」

「陛下も良い御趣味をお持ちで」

オキタとリリー・マルレーンは、顔を突き合わせて「ふっ、ふっ、ふっ」とサドつけたっぷりの黒い笑いを浮かべる。

だが、ふと周りを見渡せば、皆の目が冷やかな物である事に気付く。つまりは、ドン引きされていたのだ。

その事を敏感に感じ取ったリリー・マルレーンの行動は早かった。胸の前で、手をパチンと合わせると

「さて、人員も集まった事なので、目的の場所へ向かうとしましょう！」

ぎこちない言葉で、次の行動を促した。



一同がゾロゾロと目的の場所へと到着する。

現場は地均しを終えたばかりなのか、何も無い場所であった。リリー・マルレーンは、その場所を見定める様にゆっくりと歩き、ある一点で立ち止まる。

その場所を何度も確かめる様に踏みしめ、ザイトルクワエの苗木を置いた。するとザイトルクワエの苗は、自分の意志で根を動かし地面へと埋まって行く。リリー・マルレーンはその行動を満足げに見つめ、桶の水を掛けると、エルフ達に指示を出す。

「うむ。娘さん達や、成長促進の魔法を頼めるかや？」

だが、エルフ達は首を傾げている。どうやら意味が解っていない様だ。

「うむむ。うぬらの職業クラスである森司祭ドルイドの魔法に、植物の成長促進の魔法があるじゃろ？」

リリー・マルレーンの問いに、エルフ達は頷きで返す。

「それでの、それをこの苗木に使って欲しいのじゃよ」

この言葉で、エルフ達はやっと理解出来た様だ。この様子を眺め、エルフ達の心がまだ縛られている事をリリー・マルレーンは感じ取る。事細かな事まで言わなければ、行動に移せないからだ。その中で僅かに他の者より力有る瞳をした、水色の髪をしたエルフが口を開く。

「そ、その。へ、陛下。わ、私達、ふ、複数の術者を、あ、集められたと言う事は、ぎ、儀式魔法でしょうか？」

勇気を振り絞つての言葉なのだろう、ぎこちなさからそれは読み取れた。リリー・マルレーンは、この勇気とも呼べる行動に満足し笑顔を浮かべると

「うむ、そうじゃのう。妾は森司祭ドレイドの職業クラスは取つては居らぬからのう……。どうなのじゃ？ 集団での儀式魔法しか、成長促進の魔法は使えぬのか？」

正面に立つエルフを試す様に、疑問の言葉を口にする。問われたエルフは、一瞬恐怖の表情を浮かべたが、二度ほど首を左右に振り

「ど、どの程度成長させるのか？ 期間はどの程度なのかで、ち、違います」

過去の記憶を振り払う様に答えを提示する。

「成程、成程。すぐに五メートル程まで成長させて欲しいのじゃが……。どうじゃろう？」

「そ、それならば、ぎ、儀式魔法が最適かと……」

「左様か。頼めるか？」

「は、はい！ ご主人様。い、いえ、陛下のお望みならば！」

（ん？ 今何か不遜な言葉が聞こえたのじゃが。それに娘の瞳。妙に色つぽいと言うか、艶つぽいと言うか……。艶ぼくろを思い出すのう）

心の中で目の前のエルフの分析をするリリー・マルレーンを余所に、エルフ達はザイトルクワエの苗木を囲み、呪文を展開して行く。地面に魔方陣の光が浮かび、力がザイトルクワエの苗木に満ちて行く。その光を瞳に映しつつ、リリー・マルレーンは虚空から茶色のマントを取り出し身に纏う。準備は整った。

リリー・マルレーンは瞳を細め、成長して行く魔樹に集中して行く。時間にして約三十分、魔樹はリリー・マルレーンの指定した大きさにまで成長した。リリー・マルレーンの右手が上る。

その行動を汲み取り、エルフ達の詠唱が止まった。その瞬間、軀くびきから解放された様に、ザイトルクワエが動き出した。根の半分を触手の様に蠢かせ、幹の頭頂部辺りに大きな花を咲かせている。花卉の中心には、爬虫類、鱷の顔の様な物が牙を見せながら口を開いている。

「くくつ。会いたかったぞ、我が手駒」

「陛下。こりやあ、不味い物じゃありませんか?」

「な、なんじゃこれわー!」

「ミサカ、コレきらい!
びびー!」

リリー・マルレーン、オキタ、サイレン、ミサカ。それぞれが思い思いの反応を示す。混乱、と言っても良い状況の中で一人、リリー・マルレーンは羽織っていたマントを

脱ぎ去った。その古ぼけた、お世辞にも上物と言えないマントの下から現れた物は、普段のドレスとは違う物だった。

身体の線を隠す事の無いびったりとフィットした布地。

扇情的とも言える太ももに沿って走るスリット。

現代的に言えば純白のチャイナドレス。

だが、リリー・マルレーンの身に纏うそれは全く別の物。

かつて、シャルティア・ブラッドフォールンを支配下に置いた物。

ワールドアイテム、傾城傾国。

リリー・マルレーンは右手をゆっくりと上げ、力ある言葉を紡ぐ。

「世界の理を破棄し、彼の者を妾の駒とせよ」

リリー・マルレーンの言葉に呼応し、ドレスに彩られた龍が光を放つ。その光はリリー・マルレーンの身体を駆け上がり、前へと突き出された右腕を伝いザイトルクワエを飲み込んだ。

一瞬場が光で支配された。だが、すぐに光は収まり、視界が戻って来る。

オキタやサイレンはザイトルクワエに警戒の姿勢を取るが、その心配は無用の心配だった様だ。触手は依然うねうねと空中で蠢いているが、攻撃の意思は無い様だ。

リリー・マルレーンに視線を向けると、顎に指を当て何か考えている様に見える。

（ふむ。支配が完了した瞬間、コレか……。名前はザイトルクワエ。ん？ 横にカーソルが点滅している。名前の変更が可能なのか？ 種族は「魔樹／竜種」 成程のう）

ザイトルクワエを支配した瞬間、リリー・マルレーンの脳裏にステータスの様な物が流れ込んで来たのだ。それを理解したリリー・マルレーンは脳裏に浮かぶ名前を除去する様に、左手を大きく振るうと、右手の人差し指で魔樹を指し示し

「ふふっ。魔樹よ。うぬは一度滅び復活を果たした。よって新たな名で妾に支えるか
良い」

このリリー・マルレーンの言葉に魔樹は「グワツ！」と声を上げる。

「スレイン法国 法皇 リリー・マルレーンと、煉獄の王 ビクトーリア・F・ホーエンハイムが命名する。汝の名はビオランテ！」

リリー・マルレーンの命名に、ビオランテは再度「グワツ！」と声を上げた。

その名は夜右衛門

ザイトルクワエ改め、ビオランテの調教を終えたりリー・マルレーンは、自身の執務室で、ある人物を待っていた。ほどなくして、控え目なノックの音が響く。りリー・マルレーンは、これだけで目当ての人物だと容易に想像出来た。入室の許可を出すと、その人物が恐る恐る入って来た。ゆつくりと開いた扉の陰に隠れながら。

「あ、あのー！ おおおおおおお、およー！ お呼びに、よー！ よりー！ ペ、ペンネ・ブラン・アルマリート、参上いたしましたしゅたん！」

緊張からか、それとも生来の上り症からか、ペンネの言葉は嘸み嘸みだった。その行動をりリー・マルレーンは、微笑ましく、また呆れ気味に眺める。だが、当の本人は依然怯えたままだ。

「あー、えんぴつ。そう緊張するでない。取って食おうなどとは思っておらんゆえ」
「ほ、ほんとうですか！」

ペンネが髑髏の仮面越しに顔を近づけ確認を取る。その行動にりリー・マルレーンはゆつくりと頷き

「無論じゃ。その仮面を取るだけで良いぞ」

満面の笑みで、悪意を感じさせない様に注意を払い言葉を紡ぐ。

だが、この言葉を聞いたペンネの行動は素早かった。一瞬で部屋の奥へと移動すると、リリー・マルレーンに背を向けしやがみ込む。流星は暗殺を旨とする山冠聖典の隊長、まるで忍者か瞬間移動の魔法の様だ。

しかし相手はリリー・マルレーン。これしきの事ではひるみもしない。忍び足でペンネに近づくと、耳元で囁く様に言葉を告げる。

「ほうれ、何をしておるのじゃ？ 妾に素顔を見せるがよい」

「ひっ！」

引き攣った声を上げ、ペンネは反対の角へと瞬間移動？し、蹲る。その素早さにリリー・マルレーンは感心しながら再度同じ事を心みる。だが結果は同じだった。二度、三度と同様の行動を取った両者だったが、一向に事態は進行せず、最後には取っ組み合いのやり取りとなった。

「何をしておるのじゃ！ 早よう仮面を外さんか！」

「いやー！ やめてー！ 仮面以外なら何してもいいから！」

「ほう。ならば、うぬの乳を見るが良いのか？」

「……………はい」

ペンネの答えにリリー・マルレーンは驚愕する。

「何じゃと！ 素顔よりも乳を取るのか！ すべこべ言わずに仮面を取れ！」

「いやー！ おっぱい見てもいいから、素顔はやーめーてー！」

ドツタンバツタンと、最早取っ組み合いの体をなしながら、仮面の争奪戦が続く。その間にもペンネは「仮面を外すと呪いが……」とか、「死んだ祖父の遺言が……」など理由を言いつて何とか外さずに済む様に立ち回るのだが、そんな言葉はリリー・マルレーンには通用しない。結局の所、約三十分と言う時間を費やし、仮面はリリー・マルレーンの手に渡る。

「ふっ、ふっ、ふっ。妾の勝ちじゃ」

最初の目的を忘れ、リリー・マルレーンは仮面を高々と掲げ勝ち誇った言葉を口にす。方やペンネはと言うと、往生際悪く両手で顔を隠しリリー・マルレーンに背を向けていた。

「陛下……」

「何じゃ？」

「下も脱ぎますから、顔だけは……」

ペンネは最終手段として、自身の下半身を交渉材料に出して来た。これでは、今現在、上半身が裸の様な発言だ。控え目なふくらみを晒しているかの様な言葉だ。この発言に、リリー・マルレーンは驚愕を超えドン引きだ。

だが、もう一方で本来の悪戯心もムクムクと湧きあがって来た。奪い取った仮面を被る様に頭に載せると、ニンマリとした笑みを浮かべ

「わたしリリーちゃん、今あなたの十歩後ろにいるの」

「ひい！」

「わたしリリーちゃん、今あなたの七歩後ろにいるの」

「ひひい！」

言葉と共に、ゆっくりと近づいて行く。五歩、三步と同じセリフを口ずさみながら歩を進める。そして、ペンネの背中にピッタリと自身の身体を密着させ

「わたしリリーちゃん、今あなたの後ろにいるの」

そう言つてペンネの耳に、ふうつと息を吹きかけた。

「ひひひひひい！」

嬌声を上げペンネは逃げようとするが、リリー・マルレーンにガツチリと掴まれ行動は不発に終わる。この行動で敗北を悟ったのか、ペンネはゆっくりと身体のを抜いた。

此の事によつて、ようやくペンネの素顔をリリー・マルレーンに見る事になる。白髪を思わせる薄緑色の髪を、ショートカットにし、どこか東洋系の雰囲気醸し出す容姿に漆黒の瞳、ハッキリ言つて美少女の類のルックスだ。

「ふむ。なかなかの美少女ではないか」

リリー・マルレーンは素直に感想を漏らす。だが次の瞬間、ペンネの顔は一瞬で真っ赤に染まる。そして、再び顔を両手で隠しながら執務室内を走り回る。

「いやー！ 嘘です！ 嘘に決まっています！ 陛下は嘘付きです！」

ドタバタと走るペンネを追いながら、リリー・マルレーンは説得を心見る。

「う、嘘では無い！ うぬは真正正銘の美少女じゃ！ 誇りを持つのじゃ！ 妾が保障するぞー！」

「違います！ 違います！ 私が美少女なんて！」

「聞き訳の無い娘じゃ！ 良いから生まれ！ 顔を真っ赤にして走り回るなど、うぬは機○車ヤエモンか！」

異世界では意味不明な突っ込みと共に、リリー・マルレーンはペンネを組み伏せる。倒れ突つ伏すペンネの正面に回り、サラサラと指触りの良い頭を撫でながらリリー・マルレーンは慈愛の笑みを持ってペンネと対峙する。

「ヤエモンよ」

「ヤエモン？」

リリー・マルレーンの中で、ペンネの呼び名は、えんぴつからヤエモンへと変更された様だ。

「ヤエモンよ、自信を持つのはいい。うぬの髪色も、この肌も、そして全てを映す様な黒き瞳も妾は大好きじゃぞ」

そう呟きながらリリー・マルレーンの指は、ヤエモンの脛を、頬を、可憐な唇を撫でた。

「へ、へいか……」

ヤエモンの呟きと共に、その瞳から涙が零れ落ちた。そして、ゆっくりと身体を起し

「……………好き」

「はい？」

ヤエモンの口から信じられない言葉が飛び出した。

「好きです。陛下」

聞き間違いかと思つたが、どうやらそのままの意味らしい。

リリー・マルレーンはヤエモンの額に掌を当ててみる。どうやら熱は無い様だ。

「そ、そうか。妾も嬉しいぞ」

「はい。ありがとうございます。この思いと共に、神々の下へと参ります」

「は？」

ヤエモンは言うや否や、自身の首筋にナイフをあてがった。だが、その行動は瞬時に

リリー・マルレーンの手によって止められる。

「う、うぬは何をしようと言うのじゃ!」

ヤエモンは、突然リリー・マルレーンに言葉と共に手を掴まれポカンとした表情を浮かべる。

「何をしようとしたのじゃ!」

再度リリー・マルレーンは問い詰める様に言葉を投げかける。そこでやっと理解出来たのか、ヤエモンがたどたどしい言葉で理由を口にした。

「へ、陛下に告白など、あ、あつてはならぬ不敬な事。で、ですから自害してお詫びしよう……」

この言葉に、リリー・マルレーンはがっくりと膝を付く。確かにそうかも知れないが、極端過ぎると。

(うーむ。こ奴と言ひ、ナーベラルと言ひ、どうにも極端な輩が多いのう。抑圧されているのか? 何とかせんと、パンクしそうじゃなあ)

「良い」

「はっ」

リリー・マルレーンの口から突然発せられた許可の言葉に、ヤエモンは再びキョトンとした表情を浮かべた。言葉が理解出来ない様である。ヤエモンのそんな表情を

見つめながら、その可愛らしい額を人差し指でつつきながら

「良いよと言いうておる。人の感情は止められぬ物じゃ。しかし、その感情が悪意ある物じゃとしたら、それは抑制するべきじゃ。じゃが、好意を持つての感情ならば、地位や立場で押さえる物ではなからう？ 違ちがうかや？」

おどける様に、ふざける様に、当然の事と言うかの様にリリー・マルレーンは口を開く。

「で、ですが、陛下……」

リリー・マルレーンの言葉が、救いではあるが間違いだと言エモンは言う。

「そうじゃのう。許されざる事なのじゃろうなあ。じゃがな、ここは何処じゃ？ このくらいの事、妾の力で握りつぶしてくれるわ」

だがリリー・マルレーンは、その悩みこそ小さな物だと笑う。その程度で不敬などと言う事柄は、自身が統治する場所では存在しないと。

慈愛に満ちた光を湛えた瞳を宿し、優雅に豪胆に笑うリリー・マルレーンを、ヤエモンは憧れの様な瞳で見つめていた。後で思い起せば、この時が、真の意味でペンネがスレイン法国の神を戴いた瞬間だった。神の信徒としての誕生だった。この事を、件の神が知ったなら、きっと鼻で笑うだろう。褒めても何も出ないと。

さて話を戻し眼前を見ると、とろけた様な瞳のヤエモンが居た。その濡れた様な瞳

に、リリー・マルレーンは見覚えがあつた。そう、その瞳は奴らの物と同一だ。あの淫魔共と。

ならば、早急に手を打たねばならない。あの二人の様になる前に。先手を取られる前に。

だが、リリー・マルレーン。いや、ビクトリアに手立ては思いつかなかつた。少女を慰めた経験も無ければ、女性をあしらつた事も無いからだ。そんな経験は皆無だつたからだ。

だから取れる手は一つしか無かつた。優しく抱きしめる事だけだつた。その豊満な胸に、ヤエモンの頭部を抱え込み、身体を密着させると、言い聞かせる様に優しく何度も頭を撫でる。ただ、それだけだ。だが、それだけで良かった。

良く考えれば解るはずなのだ。神に仕える事を、唯一の喜びと捉えていた様な旧スレイン法国体制の中で、暗殺部隊の隊長にまで上り詰めた人物の人生が、まともであつた可能性など、僅かな物なのだから。ナデポ、ニコポ、と言われる物かも知れない。だが、それで救われる者がいるのなら、それはそれで良いのだろう。問題は、それ以降どうするか？ である。

神への信仰のみに、今までの人生を捧げて来た少女にとって、初めて味合うであろう温かみと肉の感触。以前、この神宮殿の地下で一人隔離されていた少女と同じ様に。

責任を取らねばならないのだ。この少女を、ペンネを抱きしめた瞬間から、リリー・マルレーンは責任を負ったのだ。逃げられない、降ろす事は許されない荷を背負ったのだ。それは……ペンネだけでは無い。

あの時、ニグンの言葉を受け取った時に背負った荷なのだ。スレイン法国の法皇として。

だからブレた。あの時、ザイトルクワエの居た場所で意識が遠くなった。何とも思わなかった、過去の戦争の写真を思い出し、吐き気を催した。

モモンガは、精神が種族に引張られていると言った。だが、違うのだ。何が違うか？ モモンガがアンデッドだからか？ それは違う。モモンガがアンデッドだから、人の死に様を見ても何も思わないと言うならば、彼は何故生きている物を憎まないのだ？ 答えは簡単に導き出される。そう、答えは簡単なのだ。

自分達は、もともとそう言う人間だったのだ。自分達は壊れていたのだ。人の死を見ても、人を殺しても、何も感じない程に。感じない程度に壊れていたのだ。

人の中で暮らしながら、人と通じていながら、孤独感に苛まれていた鈴木悟と言う人物と、常に一人で、絶えず孤独で居たビクトリア・F・ホーエンハイムのプレイヤー。どちらも人を、人と言う者を、物としか見えていなかったのだ。

だから感じなかった。

だから動じなかった。

自分達のリアルはYGGDRASILにしか無かったのだ。

だからモモンガは、この世界で仲間を探そうとするのだろう。

ならば、自分も向き合うべきなのだろう、かつての友に里子に出した彼の者と。

あなたが居れば

ヤエモンとの一件を何とか収め、リリー・マルレーンは何時もの様に執務に追われていた。傍らにはニグンが控え、様々な点で意見を交わす。その中でも、本日の最重要議題は、王国への対処と次期漆黒聖典隊長の選考である。

「酷い物じゃのう。表向き治安は安定している様に見えるが、内政は瓦解しておる」

この言葉は、風花、水明から上がって来た王国に対しての報告書を見た、リリー・マルレーンの素直な感想だった。

「我が王の仰る通りで御座います。やはり、王国には潰えて貰うのが一番なのでは？」

リリー・マルレーンの言葉を受け、ニグンの口から率直な言葉が漏れる。

「じゃがのう……それが一番と言うのが各王の本音じゃろうが、現実を見れば難しいじゃろうなあ」

「それで御座いますか」

「うむ。王国の国民を根絶やしに、と言うのなら可能じゃが、そうは行かんじやろ？」

「誠に」

「なれば、王国を潰した後には、難民の問題が出て来るからの」

リリー・マルレーンの眩きに、ニグンも同意の頷きで返す。

このやり取り、一見ニグンが馬鹿の様に見えるが、それは勘違いと言う物だ。この手法は、リリー・マルレーンが最も好む会議の形式なのだ。お互いが荒唐無稽な、無茶苦茶な、破天荒な、過激な発言をし、相手がそれを窘める。そう言ったやり取りの中で、徐々に要点を狭めて行き、結論を導き出す。そう言った方法論をリリー・マルレーンは好んでいた。

「なれば、各国との連携を取り、難民の受け入れを……無理ですな」

「うむ。法国と帝国は何とかなるやも知れんが、その場合、どちらかの領地が飛び地となる。これでは治安や統治が難しかろう。その案で行くならば、評議国当たりに入れてやった方が上手く行くじやろう」

「ですが、評議国とは……」

「そうじゃな。今度は帝国と評議国との戦になりかねん」

「では、聖王国では？」

そう言うニグンの言葉に、リリー・マルレーンは報告書の束を掻き交ぜ、数枚の書面を取り出すと

「無理じゃろうな。彼の国は、国が割れておる」

「貴族派と王制派。南と北の対立ですな」

「そうじゃ。地理的に見ても、利益を得るのは北、じゃからな」

「そうですな。南はアベリオン丘陵と接してますから」

「下手をすれば、利権を巡つてのクーデター、かの」

「この結論に、二人は揃つて「むむむ」と唸り声を洩らす。王国を潰す、と言う結論は愚策と言う結論に至つた。

「なれば、取れる手立ては……」

「そう言うニグンの眩きに」

「王の首のすげ替え、と言う手もあるのう」

「成程。では我が王よ、三人の内誰に王位を継がせると？」

ニグンの問いに、リリー・マルレーンはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ

「一体誰が、王位継承権を持つ者を選ぶと言つた？」

ニグンが思つてもいなかった言葉を口にした。そんな言葉を突き付けられ、ニグンは口を開くしか無かつた。その表情に満足したのか、リリー・マルレーンは一つずつ答えを開示して行く。

「まずは第一王子。彼は論外じゃな。風花の調べによると、彼の者の後見人は主戦派じゃ。これを選べば戦が続く事になる。それは、妾達の迷惑と違える。よつて除外とする」

そう言つて二本立てた指の一つを折つた。此の事に対しては、ニグンも同意見だ。

「次に第二王子じゃが、こ奴も論外じゃな」

「?」

リリー・マルレーンの言葉に、ニグンは妙な違和感を覚えた。

「しかし我が王よ、風花の調べによれば、かの第二王子は、優秀だと聞いておりますが?」
そう、王国にあつて、国内の情勢を把握し国を存続させられるのは第二王子しか居ないと言われている。そして、第二王子の後ろには、絶えず国のバランスを保つために動いているレエブン候が居るのだ。しかし、リリー・マルレーンの推測では、そうは行かないらしい。

「ふふん。確かに風花の調べによればそうじゃな。じゃが、もう一つの報告でこう言つておる。人望が無いと。能ある鷹は爪を隠す、と言うが、隠し過ぎて誰も知らん。このままでは、慈悲深い現国王の跡目を無能が継いだ、と言われかねん。そして、行きつく先は、国民の暴動じゃ。最良として貴族派の傀儡止まりじゃよ」

そう言つて二つ目の指を折つた。此の言には、ニグンも最もと頷くしか無かつた。

「では、王女は如何ですか?」

「それは最も愚策と言える行為じゃな」

バツサリと切り捨てた言葉に、ニグンは黙りこむ。

「良く考えてみよ。彼の王女が提案した政策、失敗する事を前提とした物ばかりであろう?」

「主だった事案ですと、奴隷の解放に、街道の整備などですな」

「うむ。奴隷の解放を謳い、地下組織を潰しても顧客の意識を変えねば根本的な解決は出来まい。街道の整備にしてもそうじゃ。街道の整備は国がする事ではなからう?」

あれは領主の仕事じゃ。その為に領民から税を取っているのじゃろうが」

「誠に。では我が王は誰に王位を継がせると? 以前仰っていた者に?」

「いや。彼の者はエ・ランテルでの防衛を任せたいのじゃがなあ。王国には、さしあたって国民に信頼されている者を就けたいのう。王国戦士長辺りが適任か」

「王国戦士長! ガゼフ・ストロノーフですか! しかし、あの者は統治など……」

ニグンはリリー・マルレーンの言葉に疑問を呈する。だが、そんな事はお見通しだとリリー・マルレーンは笑う。

「解つておる。王などは飾りで良いのじゃよ。信頼を得る、安心させる象徴じゃ。内政は……そうじゃのう、件のレエブンなる者に任せれば良いではないか」

それも一理有る、とニグンは困惑しながらも納得する。その方が、諸国との連携が取りやすそうだと。

「ま、仮定の話じゃがな。じゃが、レエブンなる者とは、一度話がして見たい。イサブロ

ウに連絡を付けさせよ」

「畏まりました、我が王よ」

「ここで話は終り、次の議題へと移行する。」

「では、我が王よ。漆黒の隊長の件なのですが」

「うむ。妾はこ奴を引つ張り出そうと思つておる」

そう言つてリリー・マルレーンは、一枚の古ぼけた書類を提示する。それを受け取り、目を通したニグンは、言葉を失つた。そこに書かれていた人物は、法国にとつて最高機密中の最高機密に値する人物であつたからだ。

「わ、我が王よ。こ、この方は……」

声を震わせ、ニグンは何とか言葉を絞り出した。だが、リリー・マルレーンの対応は、冷静その物だ。

「そうじゃ。法国最強聖典の槍は、彼の者以外ありえんよ」

「ですが我が王よ、あの御方は何百年も地下に籠つたままで……」

「それに関しては杞憂じゃ。アレは妾が行けば、必ず面会に応じる」

そんな余裕を見せるリリー・マルレーンだが、ニグンはその態度に妙な違和感を覚え
た。

リリー・マルレーンの物言いでは、まるで件の人物と親しい間柄の様では無いか？

五百年近く、法国の地下に籠っている人物と。

いや、法皇の真の名であれば、知っていてもおかしくは無い。地下に籠っている者は、法皇リリー・マルレーンの真名の者を封じたときとされる者達に近い人物だからだ。ニグンが思いやむ中、リリー・マルレーンは席を立ち、その者との面談へと向かうため自分に案内を申し出ていた。此の言に、ニグンはゆつくりと頷き了承すると、先に出て法皇執務室を後にした。



二人は、神宮殿の地下へと延びる階段をゆつくりとした歩調で下って行く。誰もが神宮殿の最地下と思っている場所にたどり着き、通路の最奥にある六大神の遺物が眠る宝物庫へと歩を進める。雑然とガラクタの様な古ぼけた品の中を通り抜け、壁にぶつかると思った時、ニグンの手が動いた。空中で十字を切るような仕草をし、何やら言葉を呟いている。どうやら何かの術式の様だ。一連の儀式が終わると、壁がゆつくりと左右に分かれて行く。その壁に阻まれていた先には、更に地下へと続く階段があった。

ニグンに促され、リリー・マルレーンもその階段を降りて行く。徐々に明かりが遠くなり、代わりに酒気が強くなって行く。

どれほどの距離を下ったのか、突き辺りに鉄製の頑丈な扉が見えた。古く、所々錆つき、一見では牢獄の様に見える。実際、そうなのかも知れない。誰も人が来ない地下深くで蹲る人物にとっては。

ニグンは一度リリー・マルレーンに視線を向けると、扉に向け声を掛ける。

「従属神様、我が国に皇が立たれました。此処にいらつしやいます。どうか、扉を御開け下さい」

従属神。そう、ニグンが言う通り、この扉の向こうに居るのは、闇の神と崇められているスルシャーナのNPCである。礼儀正しく言葉を綴るが、扉からは何の反応も無い。

「従属神様……」

再び声を掛けるが、結果は同用であった。困りはて、ニグンは再び視線をリリー・マルレーンへと向ける。リリー・マルレーンもそれを理解し、ニグンを下がらせた。

「妾がこの国の皇となった。うぬに用がある。ここを開え。^{あけえ}聞こえておるじやろ

……ミトラ」

ミトラ。リリー・マルレーンがこの言葉を口にした瞬間、扉の向こう側から微かな物

音が聞こえた。

「誰？」

か細い声が、それだけを告げる。

「誰？ 誰じゃと？ うぬが知らぬ訳がないじやろう？」

「嘘！ ま、まさか……………ビクトーリア様？」

「左様。煉獄の王…………。いや、うぬにとつては、黄金の魔女 ビクトーリア・F・ホーエンハイムじゃ」

リリー・マルレーンの言葉を確認する様に、扉がゆっくりと開かれた。

部屋の中からは、二十代前半と思われる女性が姿を現した。長い黒髪を、後ろで一つ太い三つ編みにし、瞳はブルーとグリーンのおツドアイ。鎖骨から流れる胸は、豊かに膨らみ、色香を湛える腰つきは誰もが見惚れる物だ。

だが、このミトラが人間種ではないと三つの点が語っている。人のそれと同じ場所に存在する耳は、肉食獣の様な三角を形作っており、左右色の違う瞳は、ネコ科の様な瞳孔を湛える。そして、一番の特徴は、尾骶骨辺りから延びる細く縦縞で彩られた尻尾。

ワータイガー。これが彼女の、ミトラの種族。

ミトラは確かめる様にリリー・マルレーンを視界に納めると

「ビクトーリア様」

ただ、それだけを呟く。

「左様。妾じゃ。久しいのう、ミトラ。何年ぶりじゃ?」

気さくな感じで話すリリー・マルレーンだが、その声は酷く平坦に聞こえた。少なくとも、ニグンにはそう聞こえた。感動の再会、と言う物では決して無いと。

「何年ぶり、ですって?」

呟くような口調だったミトラの言葉に、熱が戻る。一步一步確かめる様にリリー・マルレーンへと近付き、その襟元を掴み自身の方へと引き寄せる。

「何をしに来た! 何の用がある! あなたが! あなたが居てくれれば……シエル様は、死を選ばなかった。それなのに、今さら、今さら現れるなんて……」

強く詰問する様な言葉だが、最後の方は泣いている様に聞こえた。突き付けられる言葉に、リリー・マルレーンは耐える様に沈黙を貫く。

光の指し込まぬ地底深くに、ミトラの言葉だけが響いていた。詰り、責め、罵倒していたミトラだが、ゆっくりと感情が溶けて行ったのか、その言葉は徐々に変化していった。

「あなたが、あなたが居てくれれば……」

「……すまぬ」

黙って思いを聞き続けたリリー・マルレーンの言葉は、これだった。たったの一言。

謝罪の言葉だった。

だが、この言葉を聞いて顔を上げたのはミトラの方だ。ミトラだって解っている。嫌と言うほど解っている。目の前の人物に、何の罪も無い事を。自らの主人が死を選んだのも、それが彼自身の選択だった事も。

だが、目の前の人物は謝るのだ。責任は全て自分にあるかの様に。ミトラの瞳から、涙が溢れる。それは、無念からか、八つ当たりに対しての後悔からか。

「酷い顔じゃ、ミトラ。せつかく美人に造ってやった物を」

「ひ、酷い物言いです、ね。創造主様」

茶化す様に言葉を綴るリリー・マルレーンに、カ一杯否定するミトラ。

蚊帳の外と化していたニグンであったが、聞き流せ無い言葉が飛び込んで来た。

「わ、我が王よ。今、従属神様は、我が王の事を創造主と申されましたが、一体？」

根源的な疑問をニグンは口にするが、リリー・マルレーンは涼しい表情で

「うむ。ミトラは妾が創った最初のNPCじゃ」

真実のみを口にする。

NPCと言う言葉の意味は解らなかつたが、この言葉によって、ニグンは身が震える思いだった。自身が信仰する神は、破壊神でありながら創造神でもあつたと。そんな感動するニグンを余所に、二人の会話は続く。

「大体じゃミトラ。うぬは何をしておるのじゃ。妾が週給銀貨三枚であくせく働いておるのに、うぬときたら……」

「何百年ぶりの再開だと言うのに説教ですか？ ビクトーリア様」

「説教もしたくなると言う物よ。嫁に出した娘と再開して見れば、引きこもりとは」

「ひ！ 引きこもり！ それは言葉が過ぎると言う物です！」

「何が、言葉が過ぎるですか？ このヒキニート」

リリー・マルレーンとミトラの争いに、第三者が油を注ぐ。リリー・マルレーンの背後に立つ影。タナトスである

「誰だお前は？」

ミトラの瞳が細く鋭く変わる。

「あなたの妹、と言う事になります。不祥ながら」

「不祥、だと？」

「ええ。NPCと書いてヒキニートと読む姉上様」

「無礼な……妹とて容赦はせんぞ」

ミトラは不敵な笑顔で、タナトスと対峙する。だが、タナトスの態度はどこ吹く風。豪胆さならば、似た者姉妹と言った所だろうか。

しかし、この場にはもつと上手の者が存在する。姉妹同士のじゃれ合いを、意地の悪

い笑みで見つめる者が。

「ふふん。ヒキニートは嫌かえ、ミトラ」

リリー・マルレーンの思いがけない言葉に、姉妹が同時に振り返る。

「ヒキニートは嫌か、と聞いておるのじゃが？」

リリー・マルレーンの二度目の問いに、ミトラは僅かに沈黙し

「と、当然」

肯定の言葉を口にする。下知は取ったと、リリー・マルレーンはニンマリと笑い
「ならば働け。今、この時点から、うぬが漆黒聖典の隊長じゃ」

事も無げに言い放った。

王都動乱 序章

魔女と蝙蝠

王都での根回しを一先ず終えたエリアス・ブラント・デイル・レエブンは、馬車で久方ぶりになる自分の領地に向かっていた。その領地、エ・レエブルの空は、どんよりと曇り、今にもぽつぽつと降り出しそうであった。まるで、この後起こる案件を予言しているかの様に。

案の定と言うか、雨は降り出し、その勢いは増していった。ザーザーと耳触りの良くないノイズが外界を支配し、唯一聞き取れるのは一定のリズムを刻む、蹄鉄ていてつの音のみ。そんな世界で一人、馬車の車内で男、レエブンは苦々しげな表情を作る。王都からの帰り道、レエブンの表情は何時もこうだ。思い返す程に嫌になる。誰も彼もが保身に走り、そうでは無い僅かな者達は、お花畑の住人だ。どんな事があっても、王国が存続すると、繁栄すると思ひ込んでいる。

「愚か者達が。何故に解らんのだ。王国など、帝国がするクシヤミ一つで吹き飛ばぶと言う事が」

蝙蝠と呼ばれ、内と外のバランスを保ってきたレエブン候には、自分の口が語った言葉が、嫌と言うほど理解出来る。だが、バランスを保つ以外どうする事も出来ない事も理解している。王国の、全貴族の首をすげ替える事など出来はしない、と。

結論の出ない問題を、何度も繰り返す中、馬車の前方からノックする様な乾いた音が鳴った。自身の屋敷に着いた、と御者が告げる何時もの合図だ。

それを切掛けに、レエブン候は思考を切り替える。政治の綱渡りは此処まで、と。これから先は、子煩悩な只の父親に戻る。そう、何時もの様に。

だが、運命の悪戯か、神の気まぐれか、この日そうは行かなかつた。

馬車を降り使用人が持つ傘で雨を避け、急ぐ気持ちを隠す様にゆつくりとした歩調で屋敷の扉へと歩いて行く。その道筋で、最近見慣れた物が視線の端に映った。王国の様式とは違う、流麗な細工の施された馬車。スレイン法国の特使の物だ。

どう言う思惑なのか、法国は自分にコンタクトを取って来ていた。だが、何度会談しても、真意は見えない。ただ、法皇の使いだ、と言うに留まっている。今日も同じような言葉が繰り返されるのであろう。レエブン候は、内心ウンザリする思いだった。

扉を開け、屋敷内に足を踏み入れ、最初に目に入った物は、妻の姿だった。普段なら、使用人に出迎えられ、妻と子の下へと向かうのだが、妙な事もある物だ。そんな呑気な事が頭をよぎったのだが、すぐにそれが違うと言う事を知る。

何と言うか、空気が違うのだ。此処は自分の屋敷だ。だが、そこに漂う空気が違って
いた。緊張感、と言えば良いのか、そんな空気が取り巻いていた。妻や使用人の表情を、
それと無く探ってみても、間違いはなさそうだ。皆、一葉に表情が強張っている。

「どうしたのだ？」

何気ない言葉を掛けてみる。だが、答えは返っては来ない。口は開いているのだ、言
葉を選びかねている、と見て良いだろう。沈黙が重しとなり、屋敷を押しつぶそうとす
る。

「あ、あなた……」

その時、意を決した様にレエブン候の妻が口を開く。

「どうした？」

相槌を打つ様に、レエブン候は言葉を返す。その言葉を受け、迷いを振り切る様に頭
を振り

「……気を付けて」

それだけを告げる。レエブン候も理解した。今宵、この屋敷に來ている人物は、そう
言う人物なのだ。対応を間違えれば、全てを無くす様な人物なのだ。レエブン候
は、安心させるように一度頷くと、使用人に部屋へと案内する様指示を出した。



客の居る部屋の前で、レエブン候は一度深呼吸をし、気持ちを落ち着けてから、二度ノックをする。乾いた音に続き、「どうぞ」と言う男の声が聞こえた。聞き覚えのある声だ。あの、イーサと言う男の声だ。

レエブン候はドアノブを握ると、ゆっくりとドアを開け放つ。部屋の中には、三人の男女が居た。一人は特使として、何度も会談を持っているイーサ・ブロン・ササ。もう一人は、ローブをすっぽりと被っていた。だが、身体の線から見て、女性だろう。そして、一人だけソファアーに座っている女。

あの、特使として働いていたイーサが、後に立つと言う事は、法国でも相当の地位に就く者なのだろう。もしかすると、神官長クラスの人物かもしれないとレエブン候は考察する。

「そなたがレエブン候かや？」

妙な口調で女が言葉を掛けて来た。

「ああ、そうだ。私がこの地、エ・レエブルの領主、エリアス・ブラント・デイル・レエ

ブんだ」

レエブン候の言葉に、女は一度頷くと

「左様か。お初にお目にかかる、レエブン候。妾はリリー・マルレーン。法皇リリー・マルレーンじゃ」

レエブン候は息が詰まり、声が出ない。地位の高い人物であろうと推測していたが、大物中の大物が直々に乗り込んで来ようとは。

相對してみて解る。此の者は、常識の範囲で収まる物では無い。レエブン候は王国でも名だたる貴族だ。王国王家の者や、諸国の王侯貴族などとも面識はある。だが、目の前の者は誰とも違う。

何気ない仕草が、言葉には出来ない圧力を生んでいる。見ているだけで喉が渇き、身体が凍り付いた様に動かせない。何度も唾を飲み込み、ヒリ付く喉を湿らせ、レエブン候は何とか言葉を絞り出す。

「そ、それで陛下は、私に何用で？」

これが現状精一杯の強がりだった。だが、リリー・マルレーンは、そんな事などお構い無しに言葉を紡ぐ。それも、物騒極まりない言葉を。

「ふむ。レエブン候、うぬの人となりは、このイサブロウから聞いておる」

そう言つてリリー・マルレーンは、後ろに控えるイサブロウに視線を向ける。そして、

腰を浮かせると、再びレエブン候と向き合い

「うぬ、王になる気は無いかや?」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、そう言うのだった。

「お、王ですと?」

「そうじゃ。王様じゃ。どうじゃ? なつてみんなか?」

リリー・マルレーンの言葉に、レエブン候は戸惑いを覚えながら言葉を返す。再び出会う事の無い可能性の中で、何とかこの法皇の情報を引き出したいと言う思惑を込めながら。

「し、しかし、陛下。王になると言われますが、一体どの国での事ですか?」

「はあ? うぬは鈍いのう。それとも、ワザとかや? うぬが王になる場所など一つしかあるまい。ここじゃよ。リ・エステイーゼ王国じゃよ」

レエブン候は再び言葉を失う。何を言っているんだ、と。

「お、お戯れを、陛下。この国には、すでに王族が居ります」

「その王族が問題じゃろうに。まあ、問題は王族に留まりはせんがな。しかし、そうなる」と、少々物騒な手を使わねばならんか。のう、イサブロウや」

「王国を焦土に変えますか?」 陛下

恐らくはワザとなのだろうが、イサブロウの短絡的で効果的な王国殲滅作戦の言を聞

き、リリー・マルレーンは眉をひそめる。どうやら、御気に召さない様である。

「イサブロウよ、それは短絡的と言う物よ」

リリー・マルレーンの発言に、レエブン候は胸を撫で下ろす。この法皇と言う人物は、決して戦を好む者では無い、と。

だが、その希望は簡単に打ち碎かれる。その、法皇自身の言葉によって。

「うぬらは、妾一人を働かせるつもりかや？ 王国など、うぬら聖典で焦土と化せばよろうに」

リリー・マルレーンの不満は、戦をする事では無かった。自分一人が、事を起こす事が不満だったのである。それと同時に、リリー・マルレーン一人で王国を無かった物に出来ると暗に語っていた。

しかし、レエブン候の驚きは、それに留まらなかつた。リリー・マルレーンは、法服の袖口から一枚のコインを取り出し、テーブルへと置いた。

「それに、武力を使わずとも、これで事足りる、と妾は思うのじゃがなあ」

そう言つてリリー・マルレーンは、意地の悪い笑みを浮かべる。

レエブン候は、置かれたコインに視線を向ける。それは、良く見知つた物だつた。王国の発行する銀貨。それが、リリー・マルレーンが提示した物の正体。

だが、それが何を意味する物なのかまでは、レエブン候には推測出来なかつた。

リリー・マルレーンは、意地の悪い笑みを湛えたまま、ローブ姿の者へと手を伸ばす。その行動が何を意味する物かを瞬時に理解し、ローブの者は懐の中に持っていた物をリリー・マルレーンへと手渡した。妙に甘ったるい声と共に。

レエブン候は、テーブルに置かれた物を凝視する。それは、天秤量り。

レエブン候が注目する中、リリー・マルレーンは先ほどの王国銀貨を片方の天秤に乗せる。天秤は瞬時に反応し、カタンと言う軽い音と共に、片側を傾かせる。

その様子を見つめながら、リリー・マルレーンは袖口から、もう一枚銀貨を取り出し、もう片側に乗せる。その結果、天秤はゆっくりと傾きを変えて行く。それが示す意味とは？

「な、何をしたのです？」

レエブン候は、絞り出すようにそれだけを口にする。リリー・マルレーンのした事は、おおむね推測はしている。王国を滅ぼす銀貨。こんな事を言われて、想像出来ない者は、統治者として失格以前の問題である。だが、リリー・マルレーンの口からは

「さあ、何じやろうなあ？」

からかう様な言葉、のみである。

答えてみる。これはリリー・マルレーンからレエブン候への挑発である。これすら見抜けぬ者とは、手を組む価値は無いと言う。

「無断での、純度の切り下げ……」

「正解じゃ」

レエブン候の答えに、リリー・マルレーンは小さく拍手を送る。

「法国は、王国の経済を握る御積りか?!」

「どうじゃろうなあ? このままじゃと、そうなるかもな」

レエブン候の叱責に、リリー・マルレーンは溜息を吐く様に答える。

「妾にとつて、今の王国は害にしかならんゆえ」

「だから、王国を潰す、と?」

「いや。そうすれば、後の統治が面倒じゃ。出来れば、妾達に協力的な王国であつてほし

いのじゃがな」

「それで私に王になれ、と?」

「いやいや、そうは言つてはおらん。うぬが王にならんでも、相応しい者を王位に付け、

うぬは宰相として諸外国と付き合う、と言う立場でも良い」

レエブン候は口を噤み、リリー・マルレーンの言葉の意味を推考する。導き出される

答えは、酷く簡単な物だ。統治は任せる。だが、逆らう事は許さない。酷く不平等な提

案だ。

だが、現在の王国を考えてみれば、行く末的には、帝国への吸収である。それを考え

れば、王国としての体は保たれる。王国としての威厳も、自身の領地も。

頷くか、跳ね退けるか。レエブン候の心の天秤は、ふらふらとどちらかとも無く傾きを繰り返す。それを理解したのか、リリー・マルレーンが不意に口を開いた。

「今、決めよとは言わん。この計画には、今少しの時間を要するのでな。妾はこれより王都に入り、うぬの主人達を見て来る。その結果しだいでは、計画の変更もあり得るのでな。しかし、この話を外部に漏らしたならば……」

リリー・マルレーンがそこまで言つた瞬間、背後に居たローブの者の姿がブレた。それと同時に、レエブン候の左脇から刺殺武器ステイレットが生える。

「法国は、何時でも見ておるぞ。その事を努々ゆめゆめ忘れるでないぞ」

そう言つてリリー・マルレーンは、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべるのだつた。

その瞬間、レエブン候には全てが解つた。解つてしまったと言う方が正しいかもしれない。自分は、もう逃げられないのだと。逃げないと解つていて、リリー・マルレーンに勝負を挑まれたのだと。

最後にリリー・マルレーンは、こう言つていた。

「強き者が傘を広げ、全てを守る世界。それが、妾の望む世界」

この日レエブン候は、何十年ぶりに、安らかな睡眠を取る事が出来たのだつた。



ガタゴトと車軸を鳴らし、馬車はエ・レエブルの領地を走る。

「しかし陛下。銀貨の密造、一体何時の間？」

イサブロウが疑問の言葉を口にする。確かにそうなのだ。帝国でのヘッドハンティングは、失敗に終わっている。ダーク・ドワーフにしても、鍛冶場はまだ本格稼働していない。

だからこそ問うのだ。何時の間に銀貨を密造したのか？ と。その問いにリリー・マルレーンは、少女の様な笑みでこう返した。

「銀貨の密造？ 妾はそんな事はしておらんぞ」

「で、ですが、先程の銀貨は重量が……」
違っていた。

イサブロウはそう言いたかったらしい。だが、言葉は最後まで発せられる事は無かった。

「混ぜ物以外でも、重量は変えられるであろう」

リリー・マルレーンはそう言って、銀貨の端を爪で擦る。

その時イサブロウは知った。銀貨云々の話、現時点では全てハツタリであったと。恐らく銀貨に細工をしたのは、リリー・マルレーンの横でほくそ笑むローブ姿の者。クレマンティヌの仕業であろう。

この人物達は、たったの二人で王国と言う巨大な組織に、レエブン候と言う楔を打ち込んで見せたのだ。この行動に、イサブロウは呆れながらも、身が震える思いだった。

一行を乗せ、馬車は進んで行く。王国の運命が決するまで、後僅か。

王都にて

リリー・マルレーン達を乗せた馬車は、エ・レエブルと首都リ・エステイーゼの堺にたどり着こうとしていた。一定の速度を維持していた馬車は、急激に速度を落として行く。

「合流の様じゃな」

それが、何を意味しているのかを知っていたのか、リリー・マルレーンが小さな呟きを洩らす。

御者は馬を操り、早駆から、歩く様な速度に落とし、そして馬車を停止させる。

馬車が止まったその場には、もう一台の馬車が待機していた。それは、大きさと、僅かな装飾の違いはあれど、ほぼ同じ様な車両。つまりは、スレイン法国の物である。

イサブロウが馬車の扉を開けると同時に、向こうの馬車も扉を開いた。こちら側は、リリー・マルレーン、イサブロウ、クレマンティーヌ。向こうからは、ヴァイエストにジロチヨウ、馬車の屋根上にヤエモン。そして、護衛として風花、陽光聖典から選ばれた者が馬上に控える。

ヤエモン、クレマンティーヌは護衛、密偵として控え、王城へはリリー・マルレーン、

イサブロウ、ジロチヨウ、御側付きとしてヴァイエスト、表向きの護衛としての風花、陽光。これが王国攻めのメンバーである。個々が自分の役割を持って、各馬車に分乗し、馬車は再び王都を目指す。



事前の連絡と、先頭で馬に乗る神官の差し出した書簡によって、王都へはすんなりと侵入、いや、入国出来た。

カタコトと揺れる車内で、リリー・マルレーンは物思いにふけていた。何か大切な事を忘れていたのでは無いか、と。ヴァイエストは、心から心配する顔で見つめるが、イサブロウ、ジロチヨウ親分はどこ吹く風である。そこに至る思考は、コイツがこんな顔をする時は、大した悩みでは無いと確信しているからである。物騒な事を考えている時は………もつと嬉しそうな表情を創る、と。

そんな微妙な空気が流れる車内で、リリー・マルレーンは声を上げる。

「そうじゃ！ 羅紗じゃ！ 馬車を止めい！」

いきなり此の発言である周りの者は置いてけ掘りだ。

「陛下。月の物ですか？ 顔が面白いですよ？」

イサブロウがそう口にした瞬間、腹部に鋭い痛みが走る。何て事は無い、イラついたリリー・マルレーンに蹴られたのだ。ぐぬぬ、と腹を抱えるイサブロウを余所に、リリー・マルレーンは事の経緯を開示する。

「失念じゃった。この王都には、妾を知る人物がおる。そこから妾の素性がバレれば……」

ゴクリ、とヴァイエストの喉が鳴る。リリー・マルレーンの素性がバレると、一体何が起ころとと言うのだろうか？ もしかして、法国の崩壊に繋がるとでも？

嫌な思いだけが、ヴァイエストの脳裏を巡る。今、法国が消えれば、自分達の種の存続にも影響を及ぼしかねない。リリー・マルレーンは何を語るのか？ ヴァイエストは、その瞬間を今か今かと待ちわびる。

リリー・マルレーンの口が開く。法皇は何を語るのか？

「……妾の暗躍が知られてしまうでは無いか」

「はっ」

一体リリー・マルレーンは何を言いたいのであろうか？ ヴァイエストには、その真意が見えない。

「ここには、妾の力を知る者がおる。その事が広まれば、法国は諸国に対して脅威以上の存在となる。解るじやろ？ そんな物を前にした者達の行動が如何なる物か」

そうして真実とも言える推察を語るリリー・マルレーンだったが、ヴァイエストの鋭敏な耳は、最後にボソツと呟いた「後からバラす楽しみが減るでは無いか」と言う本音を聞き逃さ無かった。さてどうしようかと思うヴァイエストを余所に、ジロチヨウが唐突に口を開く。

「ちようど良い。馬車を止めたらどうだ？」

「急にどうしたんですか、親分？」

ヴァイエストが発した親分と言う言葉、リリー・マルレーンがジロチヨウと言うあだ名と共に使いだした言葉であり、そちらの方が呼びやすいと、聖典隊長以下の者達がジロチヨウに対しての呼び名である。

それはさておき、突然馬車を止めろと言うジロチヨウの真意は何なのか？

「なんじゃあ、ジロチヨウ。良い女でもおったかや？」

そういつて、リリー・マルレーンは茶化す様な言葉を口にするが、ジロチヨウの言葉は意外な物だった。

「いやあ、なに。昔の知り合いが居たんでな、ちよつくら顔を見て来ようかと、な」

「ほほう。王都に知り合いなど居ったのじやな」

単純に感想を述べるリリー・マルレーンに、ジロチヨウは僅かに口角を上げると

「いや、そうじゃねえ。知り合いが王都に来ていたってだけだ」

「成程の。それでも驚きじやて。外界と接触を断ってきた、うぬらダーク・エルフの知り合いが居るなど」

「そうだな。まあ、知りあいと言っても、何百年ぶりの再会だがな」

そう言うジロチヨウを視界に収め、リリー・マルレーンはニヤリと笑い

「行つて来るが良からう。妾も羅紗を買いに行かねばならぬゆえな。イサブロウ。王城へは明日で良いのじゃろ？」

「はい。本日は、天女の歌声亭で宿を取り、明日の午前中に王城入り、となつております」
腹部の痛みから、やつとの事で解放されたイサブロウが、滑らかな口調で行動予定を口にした。

その言葉で、我が意を得たりとリリー・マルレーンは行動を開始する。馬車を止め、急ぎ外へと出ると、早着替えのマントを使い何時ものドレス姿へと衣装を替える。ヴァイエストもそれに続き、法服を脱ぎ、冒険者の様な軽装備を纏う。

「それでは各々方、集合場所は天女の歌声亭。後は任せたぞイサブロウ」

「畏まりました。陛下ならば心配無いと思いますが、御気を付けを」

「うむ。ジロチヨウも旧交を温めるが良いぞ」

「ああ。そうなる事を祈るがな」

その言葉を交わし、三者は目的へ向け散って行った。



ゆっくりと視線を巡らせながら、久しぶりにビクトーリアに戻ったりリー・マルレーンは王都の見聞を開始する。町並みは、ごく普通に見える。だが、一つだけ気になる事があった。

ビクトーリアは、おもむろに後を振り返りヴァイエストを睨みつける。

「こりやメロディヤ」

「は、はい」

「なぜにそんな物を被っておる」

ビクトーリアの不満の先、それはヴァイエストの装備にあつた。革の胸当てに貫頭衣。ぴっちりとしたパンツルックに革製のブーツ。そこまでは良かった。問題は頭部である。

ヴァイエストは、種族の特徴である頭頂部から生える長い耳を、バンダナの様な物で押さえつけ、隠していたのだ。その行為が、ビクトーリアには我慢が出来なかった。

それゆえに強引な行動をビクトーリアは選択する。頭を叩く様な速度で、ヴァイエストの頭上からバンダナを剥ぎ取ったのだ。その瞬間、ヴァイエストの頭頂部で種族特有の長い耳がピヨコンと立ち上がる。

「へ、陛下！ 何を！ お戯れは、およし下さい！」

ヴァイエストは、必死でバンダナを取り返そうとするが、ビクトーリアは頑として受け付けない。

「何がお戯れを、じゃ。この馬鹿者が」

「え？」

「え、でも無いわ！ うぬらは、そうとして産まれ、そうとして育った。そして、そうとして生きておる。それに何の恥がある。答えよ」

ヴァイエストを見つめるビクトーリアの瞳は、怒りで満ちていた。だがその眼差しは、酷く悲しげで、泣いている様にヴァイエストには映る。

「ありがとうございます。陛下」

何故かは解らないが、ヴァイエストの口からは感謝の言葉が漏れた。

だが、そう言う事なのだろう。この法皇と言う人物の傍に居ると言う事は。法皇の傘

の下に有る、と言う事は。

そして、ヴァイエストは思う。この王の創り上げる世界はきつと、と。

一方ビクトーリアはと言うと、正面切つて礼を言われた事に恥じたのか、頬を掻きながらキヨロキヨロと辺りを見渡していた。

「しかしのう、メロディヤ」

「はい」

「羅紗はどこに売っておるのかのう」

目的の根源とも言える疑問を口にするビクトーリアに、困惑を顕にするヴァイエスト。

「申し訳無いのですが、陛下、私は王都へ来た事が……」

「無いのかや?」

「……はい」

ヴァイエストの発言に対し、ビクトーリアは「ぐむむ」と唸りを上げる。が、その唸りもすぐに止み、次の一手を打ちに掛る。単純に、誰かに聞いてみよう、と。

「ですが陛下」

「何じゃ? それと陛下と呼ぶで無い。そうじゃなあ。うん。そうじゃ。妾の事はボスと呼ぶが良いぞ」

「ボ、ボス、ですか?」

「うむ。それで何じゃ? 何か発見でもあったかや?」

戸惑いながらも、ヴァイエストは大通りの反対側を指差した。

そこに視線を向けると、周りの者達とは違った装束を纏った二人組が目に入る。冒険者? で良いのだろうか、かつての漆黒の剣のメンバーなどと比べると、格段に豪華な物を身に付けていた。金回りも良いのだろうかと判断し、ビクトーリアは声をかけてみる事にする。

だが、一つだけ解らない事がある。二人組の一人、白い鎧を着た金髪の女は、まあ良い。

問題はもう一人の方だ。赤? 紫? そんな色の鎧を着込んだ偉丈夫だ。隣の女と同じような金色の髪。洗みを感じられる、その相貌。鍛え抜かれた体躯。どこに出しても恥ずかしくない戦士。

その見本の様な人物だ。だが、どこか妙な感じがする。ビクトーリアは、その違和感を確認する作業に没頭して行く。

「顔は……好みによるからのう。身体は丈夫そうじゃ」

そう言いながら、視線が下半身に至った瞬間、ビクトーリアは驚きを顔にした。

「うおっ! 何じゃ、このハイレグパンツは! ブーメランじゃ、ブーメラン! メロ

「デイ見てみよ！ 変態じゃ！」

「へ、いえ。ボス！ 失礼ですよ！」

偉丈夫戦士のブーメランパンツを見つけ、大騒ぎするビクトーリアを、ヴァイエストは何とかなだめ様と必死だった。だが、その喧騒は収まらず、徐々に熱を帯びて行く。それも、本人の目の前で。

「おい、ラクユース。俺は馬鹿にされているのか？」

偉丈夫戦士が、隣の金髪女性に声をかける。どうやら、金髪女性はラクユースと言うらしい。

「さあ、解らないけれど、多分そうじゃないかしら」

ラクユースは呑気な口調で偉丈夫戦士にそう返す。偉丈夫戦士は一度盛大な溜息を吐くと、ビクトーリアを視界の中心に納める。

「おい、オメエ。俺を何だと思ってるんだ？」

「うん？ ……………変態戦士かのう」

「はあ？ じゃあ、俺の性別は？」

「オス？」

ビクトーリアは首を傾げながら、思ったままの答えを告げる

「オスって何だよ！ 俺は女だ！ オ・ン・ナ！」

偉丈夫戦士の女発言に、ビクトーリアはグラリと身体を揺らし

「な、何じやと。女じやと?」

「ああ、そうだ」

「で、では、うぬのソレは、ハイレグアーマー、と言う事か……」

「はあ? 意味は解らねえが、言葉尻を取ればそう言う事だな」

「そうか。それは悪い事を申した。妾はビクトーリア。うぬの事は、敬意を込めてコング先輩と呼ばせて頂こう」

腰に手を当て、踏ん反り返りながら謝罪の言葉を言うビクトーリア。これには、偉丈夫戦士もラキユースも呆れ返るしかなかった。

「はあ。それであなた、何の用なの? ガガーランをからかうのが目的では無いのでしよう?」

ガガーラン。それが、この偉丈夫戦士の名前なのであろう。しかし、それで相手の呼び名を変えるビクトーリアでは無い。ガガーランは、これから一生コング先輩なのである。

脱線続きの会話であったが、ビクトーリアは本題へと軌道进行を向ける。

「実はもう、妾達は羅紗を探しておるのじや。うぬら、取り扱っておる店を知らぬか?」

「羅紗? おい、ラキユース。羅紗ってアレだろ? スケスケの布」

「ええ。羅紗……。申し訳無いけど、王国ではあまり見ないわね。帝国や聖王国とかでは、たまに扱っている店はあるらしいけど。そもそも、あなたは、何故羅紗を？」

ラキユースの問いに、ビクトーリアはクルリとその場で一回転すると

「羅紗を求める理由など、二つしかあるまい？ ソレを身に纏い踊るか、素顔を知らせぬためじゃ」

悪戯っぽい笑みをニヤリと浮かべる。

「あなたは、踊り娘には見えないわね……。何故顔を隠したがるの？」

ラキユースは唐突に、そんな疑問を投げかける。王国の裏で、力を持っている、ある組織との繋がりを懸念したためだ。

だが、そんな懸念など、ビクトーリアにはどこ吹く風である。ビクトーリアは、右手で左目を覆う様に隠すと

「妾の瞳には、世界を滅ぼす力が宿っておる。これは、妾と対をなす者との接触で解放されるのじゃ」

「な、何と！」

ビクトーリアの言葉に、ラキユースが大きな反応を示した。

「で、では、素顔を隠すと言うのは……」

「左様。その対なる者に、妾の存在を知らせぬ為よ」

適当な言葉を口にした後、ビクトーリアは「ふふふ」と不敵な笑みを浮かべる。その笑いに呼応する様に、ラキユースも不敵な笑みを浮かべる。そして、一度目を瞑ると、覚悟を決めた、とでも言うのか、慎重に口を開いた。

「ビクトーリア殿。この王都で羅紗を探すのは難しいであろう」

「左様か。それは困ったのう」

「だが、今、王都には、帝国の大商家の令嬢が滞在していると聞いている」

「ほう、帝国の」

そこで、ラキユースは一度頷き

「その者達ならば、羅紗を手に入れる事も可能では無いかと思うのだが？　どうだろうか？」

ラキユースからの提案。これを飲まないビクトーリアでは無い。ラキユースから、その大商家の令嬢の滞在している邸宅の場所を聞き、その場所へと足を向けた。

去りに際にビクトーリアは、ラキユースとガガーランに一礼すると

「感謝する。ラキユース殿、コング先輩。いずれ礼を兼ねて一献付き合つてたもれ。では」

思いの外、礼儀正しく謝辞を言われた二人は、虚を突かれた様に固まってしまったのだった。遠ざかるビクトーリアの姿を、ラキユースは視界に留めながら

「ガガーラン。私は真の意味での友を見つけたかもしれない」
熱の籠った瞳で、そう言った。

招かれざる者達

「この様です陛下。いえ、ボス」

ぎこち無く、迷う様にヴァイエストはそう口を開いた。その姿を見ているビクトーリアからは、盛大な溜息が洩れる。

「ボスと呼ぶのに、抵抗があるのかや？」

おどける様な言葉に、ヴァイエストは表情を硬くすると

「はい。陛下にはお似合いでは無い様に思います」

ハッキリとした意志表示に、ビクトーリアは満足げに表情を緩め

「ふむ。ならば何と呼ぶ？」

「街中での呼び名あらば、お嬢様がよろしいかと」

「おじょうさまかあ……。まあ、良いわ。じゃったら、妾は複合商家のお嬢様で、うぬは、その御側付きと言う事で」

「はい。お嬢様」

改めて、互いの立ち位置の設定を済まし、二人は一軒の屋敷へと踏み入る。

その屋敷は、貴族の邸宅程では無いが、それなりの大きさを誇っており、この場に停

泊している者は、ある程度以上の身分の者だと言う事が簡単に見て取れた。その雰囲気、たじろぐ事もせず、ピクトーリアは玄関のドアをノックする。だが、反応は無かった。

留守か？　とも思ったが、屋敷からは確かに数人の気配が感じられる。だからこそ、ピクトーリアは遠慮無く、二度、三度とノックを繰り返す。

コンコンと響く音は、屋敷のエントランスに響き渡る。丁度、二階へと向かう為、その場所を通りかかった金髪、ドレス姿の女性の眉が、ピクンと不快げに跳ね上がった。

今現在、屋敷の中では厄介事が進行中だった。なのに、新たな厄災が、ドアをノックしているのである。少なくとも、この女性はそう感じていた。苛立ちを隠す事も無く、美しい美術品の様な相貌の眉間に、深く皺を刻みドアのノブに手を掛ける。

「何かしら？」

ドアを開け、女性が発した最初の言葉がコレだった。

不遜に、何も映さない様なドロリとした瞳で、来客に対応する。

その、何も興味が無い様な視線に晒され、ヴァイエストは息を飲むが、その後ろに佇む者は勝手が違う。女性の振る舞いに、すこぶる楽しそうな笑みを浮かべると、女性に向け挑発する様に口を開く。

「ほーう。客に向かつて随分な言い草じゃのう。この程度の演技も出来んとは、人選を

間違えたかのう。任命責任を問わねばならぬか？　のう、ソリュシヤン」

その声を聞き、女性、ソリュシヤン・イプシロンの瞳は驚きと共に、大きく見開かれた

「ビ、ビクトーリア様！」

ソリュシヤンはすぐに片膝を付き、臣下の礼を取る。ソリュシヤンがビクトーリアに忠誠を誓っているかと言われれば、否である。この行動は、彼女の主人であるアインズ・ウール・ゴウンの面子を保つ為の演技であり、自身の内から湧きあがる恐怖からの行動であった。

目の前に居るのは、恐怖の具現者であり、自分達とは比べる事も出来ない程の化け物なのだから。

失態だった。ソリュシヤンは胸の内で自身の行動を反省する。

どうも、最近の自分は大だ。上手く感情が制御出来ない。全てはあの女のせいだ。上司の拾って来たあの下等生物の。身体の奥底から湧きあがる苛立ちと恐怖に、ソリュシヤンの感情はグラグラと揺れる。それが僅かにでも表に出ていたのか、ビクトーリアが疑問の言葉を投げかけた。

「しかしのお。ソリュシヤン。何があつた？　うぬがそこまで取り乱すなど……余程の事じゃらうて」

「ビクトーリア様？」

悟られた事に驚き、ソリュシャンは顔を上げた。見上げたビクトーリアは、何か難しい顔をしていた。

「あ、あの、ビクトーリア様は、どうしてお解りに？」

ソリュシャンの問いに、ビクトーリアは一度頷くと

「うん？ いや、なに、うぬらのパーソナルを考えれば、一目瞭然じやろ」

「パーソナル？ ですか？」

キョトンとした表情で、ソリュシャンはオウム返しに問いかける。普段はゆとりある様な表情でいる彼女の、レアな顔見を見て満足したのか、ビクトーリアは二度ほど頷き口を開く。

「そうじゃ。うぬらは、基本的に創造主が望んだ性格を基本としておる。ユリならば凛とした態度。ルプスレギナならば忠犬。ナーベラルならばクールと言った様にな」

「は、はい」

ビクトーリアの言葉に、納得がいったのか、ソリュシャンは素直に返事を返す。

「それは、今のうぬらの根幹であり、揺らぐ事を許さぬ物じゃ。その根幹が揺らいだのが、今のうぬじゃ。じゃから解った。……それで、何を悩んでおる。アインズに報告する前に、妾に話してみよ」

そう言うビクトーリアに、ソリュシャンは少し黙り思い悩むが、ポツリポツリと語り出した。

先日、上司であるセバスが下等生物ニンゲンを拾って来たと言う。

ナザリックに報告すべきと言うソリュシャンに、それほどの事では無いと言うセバス。

ましてや、貴重なスクロールを用いて、その下等生物ニンゲンの治療をせよとの命。

その結果、下等生物ニンゲンの所有者が来訪し、今現在厄介な事になっている、と。

この顛末を、独自の判断でナザリックに報告するか否や、セバスに謀反の意、有りとソリュシャンの話を聞いて、ビクトーリアは「ふふん」と鼻で笑う。これは良い兆候であると。NPC達が、自身の思いと考えて、悩み、葛藤する。いずれ、個として確立してくればと願うのだった。

それはさておき、ビクトーリアは断りも無く屋敷に足を踏み入れると、ソリュシャンに手招きをする。それに応え、ソリュシャンはビクトーリアの隣に立つ。

「良いか、ソリュシャン。今から妾達は姉妹じゃ。帝国の商家の、長女と次女。分かったかや?」

「了解致しました、ビクトーリア様」

「違う。お姉様じゃ。それと……硬い言葉も禁止じゃ」

「はい。分かりましたわ、お姉様」

「うむ。では、参ろうか」

そう言つてヴァイエストを御供に二人は、厄介事の渦中へと歩を進めるのであつた



「欲を掻くのは問題では？」

客人、いや、災いを運びし者達の言葉に、セバスがそう反論した瞬間、客室のドアが開き、声が響く。

「いや、欲は人の原動力となる。そう馬鹿にする物では無いと思うが？」

背後から聞こえた女性の声に、セバスは瞬時に姿勢を正す。向かいに座り、声の主を視界に納める事が出来た来客二人は、声を失い只見つめるのみ。その中で、先ほど声を発した女性とは違う女性の声が響いた。

「セバス、控えなさい。お姉様が事に当たる、との事です」

微妙にヒステリックな声。この屋敷の女主人、ソリュシヤンの物だ。

その声に促され、跳ねる様にセバスは立ち上がり、胸の前に右手を置き、ソリュシヤンの言うお姉様を向かい入れる。新たに登場した女は、客人に挨拶もせず、セバスの座っていたソファアーにどっかりと腰を降ろすと、不機嫌な声で自分の名を告げる。

「妾はビクトーリア。この者の姉であり、執事バトラーの主である。妹の手腕見たさに、王国を任せてみたのじゃが、どうやら揉め事と言う事。当商会の主として、妾が取り合う。宜しいな？」

ビクトーリアの射抜く様な瞳に圧倒され、客人二人は認めるしか選択肢は無かった。「で、では、私は王都の治安管理を受け持つておる、巡回使のスタッファン・ヘーウィツシユである」

肥え太った男が名乗りを上げる。隣に居る、陰気な男は名乗る素振りを見せない。恐らく、話の流れの中で名乗るのだろうとビクトーリアは推察し、声を荒げる事は無かった。

不愉快ではあったが。

「で、何用じゃ。妾達は暇では無いのじゃ。うぬらに対応しておるこの時間も、金は出て行つておるからの」

皮肉を交えながら、最初の一手をビクトーリアは打った。言葉を聞いた瞬間、スタッファンのこめかみがピクリと引き攣った。軽い挑発でコレである。

「いやいや、暇では無いのはこちらの事。だが、犯罪を取り締まるのが、私の仕事なのでね」

「ほう、犯罪、とな？」

ビクトーリアの瞳が、すうつと細く閉じられる。

「ええ。彼、彼はサキユロントと申しまして、どうも後の御仁が、金と引き替えに、彼の店から従業員を拉致したと言うのだよ。これはあれだ、人身売買、と言つてもいいのではないのかな？」

「ふむ。物は言い様じやのう。妾には、単純なヘッドハンティングに聞こえるのじやが？」

「いやいや、怪我をした従業員を連れ去つたのですぞ。ヘッドハンティングでは通りません」

「ほう。それならば、単なる慈善では無いか」

「さすれば、何故金を？」

喰い下がるスタッファンに向け、ビクトーリアはニヤリと意地の悪い笑みを向けると「見舞金、じゃな」

馬鹿にするように軽口を叩く。スタッファンは「ぐぬぬ」と呻きながらも、何とか気持ちを落ち着け、話を続ける。

「彼等としては、この度の営業妨害に対し、幾らかの賠償金と損害補償金を受け取りたい、との事で」

足早に話を終わらせようとするスタッファンに対し、ビクトーリアは待てと言葉を投げかける

「まあまあ、話を急ぐでない。事実確認が先じゃ。まず第一に、その従業員とやらをヘッドハンティングしたのが、ウチの執事^{バトラー}じゃと、どうして解った？」

「ほほう、その事ですか。彼が無理やり金を押し付けた、従業員の証言からですな」
スタッファンの言葉に、ビクトーリアは一度頷くと

「ならば、直接証言を聞きたい。彼の者を此処へ」

そう言うのだが、スタッファンは首を横に振った。

「いいいえ。買収などで口裏を合されては、事件の真相究明に支障が出ますので」

やんわりとたが、引き合わせる気は無い様だ。

「成程。彼の者は、すでにネズミの餌か。哀れよのう」

物騒な言葉を口にするビクトーリアに、スタッファンの目が泳ぐ。どうやら、真実の様だ。その行動を、楽しそうに見つめながら、ビクトーリアは言葉を続ける。

「まあ、いない者はしょうがないのう。それで、我が家が雇い入れたと言う従業員なのじゃがあ……」

「人身売買の間違いでは？」

ビクトーリアの言に、沈黙を守っていたサキュロントが訂正をいれた。

「ふむ。あくまでも、そう言い切る訳じやな？」

「当然の事」

言葉短くサキュロントは呟く。そうであるならば、とビクトーリアの脳は次の追い込み罫の用意に掛る。

「そうであるならば、仕方が無いのう」

溜息を吐きながら、ビクトーリアは諦めたかの様な言葉を口にした。

勝った。サキュロントとスタッファンは目くばせし、自分達の勝利を確信する。だが、ビクトーリアの口から出た言葉は、思いもよらない物だった。

「では、清算と行こうかのう」

「なに？」

驚きの言葉を口にする二人に対し、ビクトーリアは「ふふん」と口角を釣り上げる。

「当然であろう。妾としては、今回の事、大事にはしたくは無い。うぬらはどうじや？」

「そ、それは……」

「ま、まあ、私としても、サキュロント殿の頼みで来た訳ですし……」

言い淀むサキュロントに、微妙な言い回しの言葉で告げるスタッファン。だが、二人

ともビクトーリアの真意は解らない。

「では、此度の件、人身売買や奴隷売買では無く、うぬの所の従業員を、我が家の執事がパトラー保護した、と言う見解で良いのじゃろう?」

「そ、それは、まあ」

曖昧な言葉に踊らされるように、スタッフアンが答える。

「それによつて生じた損害を、当家に請求するのならば、当然当家も諸費用を請求する。それが手打ちと言う物じゃろう?」

「は、はあ」

「それでは。そちらは、どれほどの金額を当家に請求するのじゃ?」

いやらしい笑みを湛えながら、ビクトーリアは本題を口にする。やつとの事でその言葉を聞けたと、サキュロントが金額を提示し始める。

「まずは、彼女が稼ぐはずだった金額。そうですね、金貨百枚、と言った所ですか」
「ほう」

「それに加え迷惑料として、金貨三百枚。合計……」

そこまで言つた所で、スタッフアンが言葉を遮る。

「おいおい、サキュロント君。忘れて貰つては困る」

この言葉で、サキュロントは言葉の意味を理解し、こう続ける。

「そうでしたな。スタッファンさん、どうぞ」

それを受け、スタッファンは満面の笑みを湛え、自身の取り分の話を開始する。

「本件を、穩便に片付け様としますと……提出された書類をどうにかしないといけないのですよ」

「ほう」

「それに対して、少々支払が発生しまして、ねえ」

「ふん。前置きは良い。幾らじゃ？」

「ええ。金貨百枚、程」

そう言つて下卑た笑いを顔面に張り付かせる。

「合計、金貨五百枚、か。……………良かろう。払おうではないか」

「おお」

歓喜に浸る二人だが、ビクトーリアの言葉はまだ終わつてはいない。

「言い値を払つてやるのじゃ、こちらの頼みも聞いて貰えぬか？　のう」

ビクトーリアの言葉は、やんわりとした物だったが、その表情は底冷えする様な冷やかさを持つていた。その空気を恐れる様に、スタッファン、サキュロントの二人は、首を縦に振る。

「素直に受けてくれてありがたい。なああに、簡単な事じゃ。件の従業員、死んだ事にし

てくりやれ」

「な、なんと?」

ボソリと呟くサキユロントに、ビクトーリアは急ぐと言わんばかりに言葉が続ける。

「金貨五百と引き換えに、彼の娘を寄こせ、と言うておるのじゃ」

「いやいや、それでは法が通りますまい」

スタツファンは譲る気は無いらしい。

この態度を見て、ビクトーリアの腹黒い頭脳は回答を導き出す。この二人以外に、まだ、第三者の影がある、と。その者への手柄として、件の従業員が必要なのだと。つまりは、何も与えず、全てを手中に、と言う結果が欲しいのだろう。

「たった一つ、小さな嘘を吐くだけで、金貨五百枚。悪い取引ではなからう?」

ビクトーリアのこの言葉に、スタツファンが「ぐぬぬ」と唸る。彼の中で、葛藤しているのだろう。後少し、背を押せば……。

「あの者は、重傷であったのだろうか? ならば、死んでいてもおかしくは無からう? 違うか?」

ビクトーリアは、そこまで譲歩するのだが、スタツファンの態度は煮え切らないままだ。

その姿を見続けるのに疲れたのか、ビクトーリアは盛大に溜息を洩らすと、右の指をパチンと弾いた。その瞬間、サキユロント、スタッファンの背後の空間がグニヤリと歪み、二人の喉元に冷たい物が触れた。

「な、なにを！」

サキユロントが、小さな声で驚きを示す。方やスタッファンはと言うと、口をパクパクと開閉させるに留まる。そして、驚きを顔にする者は他にもいた。セバスとソリュシャンである。

感覚系の職業を取っていないセバスはもとより、暗殺者の職業を持つソリュシャンでも、その人物達が居るのを察知できなかつたのだ。その理由としては、ビクトーリアが貸し与えた、感覚遮断のマントのせいなのだが、それを抜きにしても驚きの展開と言つても良い物だつた。今まで、相手との和解を第一に持つて来ていたビクトーリアの態度が急変したのだ。

おもむろに立ち上がると、方手をテーブルに置き、二人へと詰め寄る。

「もお、良い。もお、良いのじゃ。二人とも、待たせたのう。戦争の始まりじゃ。うぬら
が手を伸ばした子兔が、いかに高い代償を払う物か、その身で知るが良からう。雌猫、ヤ
エモン。二人を連れて行け。イサブロウと共に背後を調べ上げ、妾の前に引き吊り出
せ」

表情が消え、淡々と言葉を紡ぐビクトーリアに、クレマンティーヌとヤエモンは深々と腰を折り

「御心のままに」

そう言つて二人を拘束し、屋敷を後にした。

部屋に残つたのは、ビクトーリア、セバス、ソリュシヤン、ヴァイエストの四人。いや、セバスの拾つて来たニンゲンを入れて五人となつた。

ビクトーリアは、再びソファーに腰を降ろすと、セバス、ソリュシヤンに話かける。

「あ奴らは、妾が対応する。良いな？」

「畏まりました」

ビクトーリアの言に、異形の二人は腰を折る。

「それと、セバスの連れて来たニンゲンなのじゃが………ナザリックに連絡を入れ、一時的にでも保護を申請せよ」

このビクトーリアの判断に、意を唱える者が居た。ソリュシヤンである。

「ビクトーリア様、下等生物をナザリックで保護など……」

「黙れ、ソリュシヤン。それを可とするか、否とするかの判断を下せるのは、アインズのみである。僕のうぬに、それをどうこう言う権利は無い。もし、うぬが言う様にアインズが考えるならば、許可はせん。それだけじゃ」

「か、畏まりました」

その言葉をもって、ビクトーリアは屋敷を後にした。屋敷を背に歩くビクトーリアに、ヴァイエストが問いかける。

「お嬢様。羅紗の件は宜しかったので？」

「……………」

この言葉で、ビクトーリアは急ぎ屋敷へと引き返すのであった。

最初のドミノ

スタツファン、サキユロントの首筋に刃物を突き付け、ヤエモン、クレマンティーヌは屋敷を後にする。扉を開け外に出ると、門前に飾りつ毛の無い黒い馬車が停車していた。おもむろに馬車の扉が開き、茶色のローブ姿の男が降りて来る。

「お待ちしておりました。場所は確保済み、との事です」

そう言う男に、クレマンティーヌ、ヤエモンの二人は小さく頷くと、乱暴にスタツファン、サキユロントの両名を馬車へと放り込んだ。

スタツファンは、事の成り行きに驚愕しガタガタと震えるに留まっているが、サキユロントはと言うと視線鋭く、隙あらば逃走の機会をうかがっている。その目の動きに氣付いた髑髏の仮面の少女、ヤエモンは、短く力ある言葉を紡ぐ。

「麻痺ハラライズ」

その瞬間サキユロントは一瞬痙攣し、ぐったりと身体を横たえた。

「静かにしてください。これは、ご主人様の決定なのですから」

ヤエモンの口からは、冷たく事務的な言葉が発せられる。

「平常運転だねえ」

それを聞いたクレマンティーヌからは、茶化す様な言葉が漏れた。詰まらなそうな表情で。

「ええ。私がデレるのは……陛下の前だけ」

ヤエモンの答えにドン引きしながらも、クレマンティーヌは馬車へと乗り込むのだった。



暫しの時間をかけ、馬車は一軒の邸宅の前で停車する。御者がチリンと小さくベルを鳴らすと、邸宅のドアが開き四名程の男が現れ、スタツファンとサキュロントを屋内へと連行する。

二人が連れて行かれた場所は、二階の一部屋だった。家具も何も無く、只椅子が一脚と男が一人居るだけの部屋だった。白い法服を着こみ、冷たく何の感情も映してはいない、それだけが特徴と言える男が。

「ほ、法国の者か!？」

ガタガタと震えながら、スタツファンが叫んだ。だが目の前の男は、涼しい顔で何も答えない。そればかりか、右手に持っていた黒い何かの引き金を引いた。

その瞬間、パンツ！　と言う乾いた音と共に、スタツファンの左太ももに一センチ程の穴が空く。穴から流れ出す赤い体液は、ダラダラと床を濡らし、それと共にスタツファンの絶叫が邸宅内に響き渡った。

「叫び声ですか……………存分にお上げ下さい。この邸宅には認識阻害の結果を張っていますので、声は外に漏れませんので。あ、そうそう、初めまして、お巡りさんです」「お巡りさんって何ですか？」

謎の言葉を口にした男、イサブロウに対し、いつの間にか背後に陣取っていたヤエモンが疑問の言葉を口にした。その行動に対し、驚く事も気分を害す事も無く、只事実のみをイサブロウは口にする。

「陛下が仰っていた御言葉ですよ。お巡りさんとは、法の番人の名称であると」「成程。流石は陛下」

妙な事で意気投合する聖典隊長二人であった。

呑気な隊長二人とは異なり、床の上でスタツファンは血を流し続け、サキュロントは驚愕の表情を浮かべていた。その光景を冷めた瞳に映しつつ、イサブロウは部屋に残る隊員の一人へと命令を下す。

「このまま死んでしまっても良いのですが、まだ聞きたい事がありますので、取り合えず止血をしてあげてくれますか」

その言葉に隊員はすぐに反応し、スタツファンスタツファンの股関節辺りを縄できつく縛りあげた。その一方でイサブロウの視線は、サキユロントへと向けられる。

「さて、そろそろ麻痺パラライズの効果も薄れて来ていると思うのですが、どうですか？ えーと、目つきの悪い方」

イサブロウの軽い挑発に、サキユロントは唸り声で返す。その仕草で術からの回復を悟り、別の部下に捕縛を命じた。ぐるぐるに縄を掛けられ、芋虫の様になったサキユロントの横にイサブロウは腰を落とす。そして、見下す様な視線で見降ろし

「話して頂きましょうか？ あなたが何者で、後に誰が居るのかを。話して頂け無いのなら……」

イサブロウは言葉を切り、再びスタツファンに向け引き金を引いた。同じ様に乾いた音を響かせ、左足に風穴が開く。目を見開くサキユロントに対し、イサブロウは何事も無かった様に右手に握る物に視線を向け

「ああ、これですか。これは魔動拳銃スペルハンドガンと言う物ですよ。魔法を貯め込み、引き金を引くと発動する。便利な物でしょう。あ、ちなみに今込められている魔法は風属性の物です」

淡々と自分の得物を紹介した。

その後、視線はスタッツファンを捉え

「さて、このままだと、アチラの方が亡くなってしまいますが、どうでしょうか？ あなたの背後を話して頂けませんか？」

「俺の、背後、だと？」

「ええ、そうですよ。六腕のサキユロントさん」

イサブロウが自身の名前を言った瞬間、サキユロントの表情がひきつった。目の前に居る連中は、不味いやツラ、だと。自分が所属している組織を知っていて、それを承知で拉致したのだと。

「……何故だ」

ポツリとサキユロントの口から、こんな言葉が漏れた。

「はい？」

意味が解らないと言うイサブロウに対し、サキユロントの口は同じ言葉を繰り返す。

「何故、こんな事をする。貴様ら、法国の者だろう？ 俺達とは、何も関係が無いはずだ」

サキユロントの問いに、イサブロウは表情を歪め、困った様に一度天井を見つめた後「いえね、それはそうなのですが……陛下の機嫌を損ねてしまったのですから………全く運が悪い」

「何の、事だ？」

イサブロウの言う事が、サキュロントには一切理解が出来なかつた。それを理解しているのか、または不憫に思ったのか、イサブロウは続けて言葉を紡ぐ。

「せっかく陛下が、折り合いが付く様に譲歩して下さつたのに……欲をかき過ぎましたね」

譲歩、欲をかき過ぎた、二つの言葉がサキュロントの頭の中をぐるぐると回る。そして辿りついた答えに、血の気が引いて行つた。あの時、あの屋敷で自分達の前に居た人物こそが……。そして、彼の人物はこう言つた「戦争の始まりじゃ」と。

サキュロントは、知らずドラゴンの尾を踏んでいたのだ。自分達が強者であり、捕食者であると言う思い上がりの元、国家と言う化け物に喧嘩を売つたのだ。気付けば嫌な音が脳内で鳴り響く。それが、自分の歯がガタガタと鳴らす音だと言う事を気付くのでさえ、数分を要した。

「納得いただけただけ所で、再びお伺いします。あなたの背後を教えて頂けあすか？」

「は、八本指だ！ 俺は！ 八本指のメンバーだ！」

許しを乞う様にサキュロントは叫ぶが、イサブロウはスタッファンに向け引き金を引く。三度乾いた音を立て、今度は左肩に風穴が空いた。

「そんな事は知っていますよ。あなたは私を馬鹿にしているのですか？ 名前を聞いているのですよ。ヒルマさんですか？ コツコドルさんですか？ それとも、他の方達

ですか？」

サキュロントは口をパクパクと開閉するだけで、何も言葉が出てこなかった。

この者達は知っているのだ。組織の事を。

知っていて聞いているのだ。穩便に事を治める為に。ピンポイントで関係者を吊るし上げる為に。

「口を割りませんか。えーと、そのアナタ。その肥え太った御仁の手当をお願いします。このままでは死んでしまいますから」

イサブロウは部下に、スタッファンの回復を指示した。

サキュロントは窮地の中でも、僅かに安堵した。この者達は、命まで取るつもりは無いのだと。だが、すぐにそれは間違いだと知る事になる。

「さて、あちらの方が回復したら、事情をお聞きしますので、あなたは黙っていてくださいね」

そう言うや否や、サキュロントの右太ももに風穴が空いた。

「ぎゃあああああ！」

サキュロントから絶叫が漏れる。

「五月蠅いですよ」

冷たい言葉と共に、二発、三発と魔弾を撃ち込む。それに伴い、サキュロントの絶叫

は続く。

「ああ、もう、五月蠅いですね。仕方が無い。この方の治療もお願いします」

溜息と共に、イサブロウは別の部下へと指示を飛ばす。

「さて、どうしますか？」

困った様な表情で、イサブロウはヤエモン、クレマンティーヌと視線を交わす。ヤエモンは、どうした物かと首を傾げるが、クレマンティーヌは顔に半月を創る。

「んー。ここは一つ、陛下に習うってのは？」

楽しそうなクレマンティーヌの言葉に、イサブロウは些か嫌な気配を感じたが、リー・マルレーンの名前を出されては聞く以外の選択肢は無い。隣に視線を移せば、ヤエモンも同意見なのか、僅かに頷いて見せた。

「それで、陛下はどんな方法で尋問を？」

「んーとねえ。軽い方のヤツだと……質問する毎に、指を一本ずつ潰して行つたとかあ」
クレマンティーヌの言葉に、イサブロウ、ヤエモンの二人は「ほう」と感嘆の声を漏らす。そうすると気になって来るのは、重い方だ。

「それで疾風走破、重い方は何ですか？」

イサブロウの問いに、クレマンティーヌは少し表情を歪め

「生きたまま、スライムのご飯になるってヤツだけど……」

思い出したくない、そんな顔色で呟く。

「成程。流石は陛下。意地が悪い。しかし……スライムは手配が必要ですから、ここは……」

そう言つてイサブロウは、部屋の隅に置いてあつたバッグから金槌を二本取り出す。

「どちらがやりますか？ あ、もちろん一本は私用ですが」

そう言いつつクレマンティーヌ、ヤエモンに視線を向ける。

嬉々として手を挙げたのは、クレマンティーヌだった。二人は金槌を持ち、部下にサキュロントとスタッファンを拘束させ、両の手を床に固定させる。

「さて、これからあなた達に質問をします。答える答えないは自由です。しかし、その場合……」

イサブロウは、そこで言葉を切り金槌を掌で遊ばせる。

「最初の質問です。あなた達の背後に居る者の名は？」

「コツコドルだ！」

二人の言葉が重なつた。

「はい？」

「あー」

あまりにもあつさりと白状した事に、イサブロウとクレマンティーヌは拍子抜けした

様だった。

「仕方ありません。次の質問です。どうやら、件の子兎は、色々な薬物を投与されていたそうです。出所——」

「ヒルマだ！」

またしても速効で答える二人。

「ぶー！ つまんなーい！ なんかこうさ、キサマ、裏切るのか！ みたいな展開を希望してたのにい」

ぶー垂れるクレマンティーヌに、イサブロウは溜息混じりに言葉を掛ける。

「仕方ありませんよ。その程度の繋がりなのでしょうから。さて、次の仕事です。コツコドルさんと、ヒルマさんの捕縛と連行。どういたしますかねえ」

「んー。じゃんけんで良いじゃない？」

呑気なセリフを言うクレマンティーヌに、ヤエモンが頷きで答える。それを確認し「そうしますか」

イサブロウの声と共に、三人はじゃんけんを初めた。

「それでは、最初に勝ち抜けた疾風走破がコツコドルさんを。次の勝者の私がヒルマさんを。負け残りのヤエモンさんは、ここで二人の見張り、と言う事で」

「んー？」

話が収まった所で、クレマンティーヌが妙な呻き声をあげた。

「どうしましたか？」

それに対応する様に、イサブロウが口を開く。

「標的を捕まえるのは解ったけどさあー。他の奴はどうすんの？ 部下もいるだろうし」

「ああ、その事ですか。始末してかまいませんよ。それと……コツコドルさんの所は、娼館ですので、お客様も同議です。娼婦の方々は、保護して頂けるとありがたいですね。神の信徒になられるかもしれませんが」

冷静な声で指示を出すイサブロウだが、言っている事は、酷く物騒な事だった。それに対し、クレマンティーヌは満面の笑みを湛え了承する。

後に、王国を揺さぶる出来事の、最初のドミノが今、ゆっくりと倒れて行った。

敗者として

男はゆっくりと、その重い瞼を持ち上げる。焦点が合わず、ぼやけた視界に映る物は、記憶に無い景色であった。見た事も無い天井、そこに走る梁。

男は、無意識にそれに手を伸ばそうとした。しかし、若干の重さを持つ何かに、阻害される。それが、掛け布団である事を認識するのに、僅かな時間を要した

「(い)は……どこだ?」

視界の霞が徐々に晴れて行く中で、男は囁くほどの大ききで言葉を口にする。それは、誰に聞かせるでもなく、自分自身に問いかける訳でも無く、只、口に付いただけの様だった。

「何を言っているんだ、俺は?」

男が僅かに身体を起こし、自嘲気味に薄く笑みを浮かべた時、部屋にガチャリと言う金属音が響いた。その後、ギイイと言う何かが擦れる音が聞こえる。ドアが開き、誰かが入って来た様だ。

「ん? 目が覚めたか」

そう言ったのは、鍛え抜かれた身体に、髪を短く刈り込み、顎髭を蓄えた目つきの鋭

い男だった。

「……………ガゼフ？ ガゼフ・ストロノーフ、か？」

ベッドで身体を起こした男は、記憶の中にある良く似た男の名を口にした。その、あやふやな言葉を聞き、ガゼフと呼ばれた男は、呆れた様に口角を僅かに上げ

「おぼろげか？ 俺は覚えていたんだがな、アングラウス」

ベッドの男の名を、ハッキリと口にした。それを聞き、ベッドの男、ブレイン・アングラウスは重い身体を無理させる様に右腕を上げ、頭を搔く。申し訳無いとも言えない。

「まあ良い。もう少し寝ている。お前の事だ、半日もすれば、動ける様になるだろう。そうしたら、下に降りて来い」

それだけを言って、ガゼフは部屋を出て行った。



ガゼフの言葉通り、ブレインは半日、夕方頃には起き上がり歩ける程には回復してい

た。現在、一階のリビングと思える部屋で、二人は相対していた。

「落ち着いたか？」

そう言つてガゼフは、ブレインの前に湯気の立つカップを差し出す。

「……すまないな」

ブレインはゆつくりと、そのカップに口を付ける。野菜か何かのスープなのだろうか、温かさがゆつくりと身体に沁み渡り、気分が僅かだが落ち着いて行くのが感じられた。

「アングラウス。何があつた？ お前ほどの男が……」

雨に打たれ、生きる事を諦めるなど、と続けるつもりだったのだが、途中で言葉にする事を躊躇つた。それほどまでに、ブレインの顔は憔悴していた。

「ストロノーフ。俺達は弱い。弱いんだ」

「アングラウス、お前は何を言つているんだ？ そんな事は解つていた事だろう？ 巫

人や異形の者達と比べて——」

「そうじゃ無い。そうじゃ無いんだ！ 巫人や異形の者達も含めてだ！ 俺達は……」

目を見開き、絶望を顔にするブレインに対し、ガゼフは妙な違和感を覚える。

「……アングラウス。お前、何を見た？ 一体、誰と出会つた？」

ガゼフの問いに、ブレインはポツポツと自分が出会つた吸血鬼の話を語つて聞かせ

た。何の手を打つ事も出来なかった、と。傷を付ける事も出来なかった、と。自分を、敵として見る事もしなかった、と。

ブレインの独白に、ガゼフは静かに「そうか」とだけ呟く。その言葉に、ブレインは自嘲気味に、無理やり笑顔を形作ると

「信じられないだろうな、だが、真実だ。けど、俺が生きる事を手放したのは、吸血鬼のせいじゃ無い。別の存在のせいだ」

「別の存在？」

「ああ。長くなるが、聞いてくれるか？」

そう言うブレインに対し、ガゼフは静かに首を縦に振った。

「そんな者が？」

「ああ。俺が手も足も出なかった吸血鬼を倒したんだ。それもたった一人で。力と力の戦いで。……そんな奴は存在するのか？ い、いや、存在したんだが。刃を通さぬ肌を叩き潰し。地形すら変える力を、その身に受け。その上、世界を滅ぼす程の、魔法を行使していたんだ。それも……女がだ！」

そう言うってブレインは、拳をテーブルに叩きつける。

「ははっ。気が触れたと思っっているんだろ？ ストロノーフ。だが、だがな、事実なんだ」

ガゼフは目を瞑り、何も言わずじっと思考の中に居た。何度目だろうか、自虐的な言葉の口にするブレインを前に、ゆっくりと瞼を開いて行った

「アングラウス。……………その者は、金色の髪をしていなかったか？」

「ストロノーフ？」

「ドレスを身に纏い、髪と同じ、金色のガントレットとグリーブを身に付けていなかったか？」

「ど、どうして……………」

「強力な、夜を昼に変える程の雷を纏っていなかったか？」

「何故、何故知っている。アイツは、アイツは誰なんだ？」

ブレインの問いに、ガゼフの口が閉じられる。言うべきかどうか迷っている様に見えた。

「アングラウス。お前が見た者は、お前が出会った御仁は……………煉獄の王、だ」

煉獄の王？ ブレインは一瞬、ガゼフの頭がどうにかしてしまったのでは？ と言う思いが浮かぶ。だが、表情を見れば、それが間違いだと気付かされる。

「ほ、本当なのか？ 本当に……………」

疑問の言葉を繰り返すブレインに対し、ガゼフは頷き

「本当だ」

短くそう言って、自身の経験した事柄を語って聞かせた。

「アインズ・ウール・ゴウンに、セバスと言う老執事……その二人が煉獄の王の近くに居るのか？」

「ああ。それだけ、とは限らないがな」

「ふふっ」

二人から、自然と笑みが漏れた。

「願わくば、彼らが敵であらぬ事を」

ガゼフが呟く様に、そんな言葉を口にした。それに応える様に、ブレインは「まったくだ」と呟き、立ちあがる。

「どうした。身体は良いのか？」

「ああ。少しダルさは残ってはいるが、少し身体を動かしたい」

「そうか。金は有るのか？」

そう言われて、ブレインは言葉を失う。吸血鬼と遭遇し、何も持たずに逃げ出した自分に対して、酷な問いかけだ。言い淀むブレインに対して、ガゼフが小さな巾着の様な物を投げてよこす。首を傾げながら中を覗くと、銀貨が十数枚入っていた。

「それだけあれば、少し飲み食いする分には困らんだろ」
「す、すまない」

ブレインは戸惑いながらも、礼の言葉を口にした。

「帰りに、ワインでも買って来てくれ。その駄賃だと思ってくれれば良い」
「分かった」

その言葉を最後に、ブレインはガゼフの家を後にした。



とぼとぼと、街並みを確認する様にブレインは歩く。喧騒の中に落ち着きがり、国民の生活は落ち着いている様だ。表向き、は。

そう感じながら大路を歩いていた時、人だかりが目にも留まる。好奇心から近付き、野次馬の隙間から視線を巡らすと揉め事の様だった。

老紳士と冒険者の様な男が向き合い、少し離れた場所に冒険者風の少年が、幼い男の子を介抱している。街の裏側で良くある光景だ。

ブレインはそう思い、その場を立ち去ろうとした。喧騒に背を向けたその時、背筋に悪寒が走った。闘気、とでも言えば良いのだろうか？ 何者かが発する殺気が身体を襲う。焦り振り向くが、場はすでに納まり、老紳士達は姿を消していた。その事を確認したブレインは、すぐさま裏路地へと駆け出した。

幾つかの辻を曲がった所で、件の人物達の姿が確認できた。その姿を視界に捉えた瞬間、先ほどの殺気とは別物の、強烈な空気が辺りを襲った。その重圧が、老紳士から発せられた物だと認識するまでに、暫しの時間を要した。それほどに強大で、人が放てる物とは到底理解できない程の物。理解出来る様に言葉にするとすれば、竜が持つ絶望感、と言える物だった。

「どちら様ですか？」

唐突に、老紳士から声が掛る。ブレインは辺りを探るが、誰も居ない。やはり先ほどの言葉は、自分に対しての言葉だった様だ。

「申し訳無い。覗き見するつもりは無かったんだが……」

頭を掻き、恥ずかしげにブレインは姿を見せる。それと同時に、視線は老紳士を捉え続けた。すらりとした体躯。上質な衣装。どこに出しても恥ずかしく無い、執事として見本のような人物だ。だが醸し出される雰囲気は、一流の剣士であるブレインでさえも、気遅れしてしまう物がある。

「すまないが、あなたの名前を教えるはくれないか？　い、いや、すまない。俺はブレイン。ブレイン・アングラウスだ」

「ブレイン？　あなたがブレイン・アングラウスさん……」

ブレインの予想に反して、口を開いたのは少年の方だった。

「知っているのか？　俺を」

「ええ、もちろんです。あの戦士長様と、互角以上の剣士だと」

少年の言葉は、以前のブレインならば喜ばしい事だったのだろうが、恐怖から逃げ出した今の自身にとっては、皮肉以外の何者でも無かった。

それと同時に、ブレインの興味は少年へも向けられる。

「君は、何故先程の覇気を受け止められたんだ？」

そう、ブレインが感じた竜が放つような殺気、覇気は、この少年、クライムに向けられた物だったのだ。問われたクライムは、恥ずかしそうに、また、困った様に笑いを浮かべ

「守りたい方がいますから」

揺るぎの無い言葉だった。だがブレインにとって、この言葉は衝撃的な物だった。

「それだけなのか？　それだけの事で、あの覇気を……」

信じられない。ブレインにとっては、そんな理由だった。

「ではお聞きします。アングラウス様、あなたは、何故力を欲するのですか？」

老紳士から言葉がかけられた。ブレインは拳を握り、答えを求める。必死に、何故、力を求めるのか、と言う問いに。

「負けないためです」

顔を上げブレインは、自分の中にある答えを口にした。

「そうですか。それだけですか」

「どう言う事、ですか？」

負けない為に力が欲しい。そのどこに間違いがあるのだろうか？ 力を欲するの
に、それ以上の意味があるのだろうか？ そうでなければ、誰も護れはしないのに。自
分の命でさえも。

だが、目の前の老紳士は、それは小さな事だと暗に語っていた。

「アングラウス様の仰った事は、正しい事です。ですが、それだけでは次の段階へは行け
ないと愚考しますが？」

「次の段階？」

「ええ。」

短く相槌を打ち言葉を切る。その時、老紳士の頭の中で、あの言葉が浮かんだ。自身
のもう一人の主と、地下の館で話した言葉が。

「ある貴族の言葉です。私のもう一人の主人は、その貴族の言葉を聞き、感銘を受けたそうです」

「その、言葉とは？」

ブレインの喉が、ゴクリと鳴った。

「私は、負け続けながらも、戦い続ける者を愛している」

かつてのモモンガの様に、と続けられた言葉を切り、老紳士は言葉を告げた。

ブレイン、クライムの顔を老紳士は見つめるが、いまいちピンと来なかつた様だ。老紳士は笑みを浮かべ、噛み砕いて再び言葉を投げかけた。

「何度負けようと、心を砕かれ様と、退がらず、立ち止まり、一步を踏み出す。それが敗者の特権であり、求める者の姿だと。そんな姿勢を愛していると云われたのですよ」

老紳士から見て、ブレインの瞳に力が戻つて来た様な気がした。自分達に話しかけた時の、死者の様な瞳に。

「俺は負けた。だけど生きている。そう言いたいのですね」

ブレインの言葉に、老紳士は表情を緩め

「私はそれほど偉くはありませんよ。只、主人の言葉を口にしただけです」

謙虚にそう言うのみだった。そして、思い出した様に

「失礼。名を名乗ってはいませんでしたね。私はセバスと言います」

ブレインは、頭を思いっきり殴られた様な気がした。

やはりこの老紳士は、ガゼフが出会ったセバスだったのだ。そして、先ほどの言葉。あれは、恐らく彼の者の言葉なのだろう。ゆつくりと、僅かにだが、ブレインは心の霧が晴れて行くのを感じた。

苦悩

「……?」

ブレイン、クライムとの会話を中断し、セバスは道の両脇に立つ家屋の屋根に視線を巡らせる。

「どうしました?」

その行動に、不安を覚えたのかクライムが声をかける。

「いえ」

何事も無かった様にセバスは告げるが

(監視の者ですか。ビクトーリア様は、全てを任せよと仰って下さいましたが………降りかかる火の粉程度は、自分で払わねば、申し訳が立ちませんね)

心の奥で、次の行動を決意した。

「御二方、申し訳ありません。少々用事が出来てしまいましたので、ここで失礼——」

「何か、あったのですか?」

セバスが、やんわりとこの場を去ろうと別れの言葉を口にした時、ブレインがそれを阻止する。どうやら、何かキナ臭い雰囲気を感じた様子だ。

さて、どうした物かとセバスは自身の影に視線を落とす。その時、一瞬セバスの影が揺らいだ。街に放っていた、シャドウデーモンの一体が帰還した合図だ。

「ふむ。そうですか」

「どう致しましたか？」

セバスの眩きに、今度はクライムが反応を示した。

「さて、どうしましょうか」

最早、二人と別れ、単独行動を取るのには不可能に思える。ならば、過激な策を捨て、偵察程度に今回は留めるのが良策と思えた。

「仕方ありません。御二方、実は私の仕えている商会と、この街の方との間でトラブルが起こりまして……謝るにしても、手打ちに持つて行くにも相手方の居場所が分からねば……御二方、よろしければ私の護衛として、お付き合いますか？」

少々苦しい説明だった様だ。ブレイン、クライムの両名の表情は、いまいち腑に落ちない、と言う物だった。だが、語って聞かせたのはセバスなのだ。二人の首は、縦に振られた。

その行動を確認し、セバスは「では」との言葉と共に歩きだした。

セバスを先頭に三人が辿り着いた場所は、お世辞にも上品とは言えない場所だった。街の路地を幾つも曲がり、奥へ奥へと進んだ場所。そんな場所に居を構える者などに傷を持つ者だけだろう。

無論、セバスはそれを承知で来てはいるのだが。

「あそこの様ですわね」

そう言つてセバスは、裏路地に面した一つのドアに視線を向ける。

「あそこは……」

その場所を目にし、クライムが唸る様に口を開く。

「知っているのか？」

疑問の声を上げたのはブレイン。

「ええ。あそこは……この国の裏を凝縮した様な場所です」

「どう言う事だ？」

「八本指、と関りがあると言う事です」

八本指、その言葉を聞き、ブレインの表情が一層硬い物へと変わる。だが、それ以上に固い表情を浮かべているのはセバスだ。

「セバス様、どうされたのです？」

いち早くそれに気付いたブレインが問いかけた。問われたセバスからは、何の答も

帰っては来ない。只、扉をじつと見続けるのみだった。どれほど時が経ったであろうか、セバスが不意に口を開いた。

「可笑しいですね。静か過ぎます。……それに」

「ええ、強くなっていますね」

「はい」

セバスの言葉に、ブレイン、クライムが頷く。

彼らを感じた物。それは……だんだんと強くなる鉄の様な匂い。血の匂いだった。

三人は目を見合わせ一度頷くと、扉へと歩を進めた。

「少し、下がって頂けませんか。何者かが現れた時、巻き添えにしてしまうかも知れませんが」

扉の前に立ち、セバスはブレイン、クライムを下がらせる。巻き添え、その言葉を含む理由を嘔み締め、大人しく二人は後ろへと下った。

ドアノブに手を掛けそつと回すと、ノブは驚くほど軽やかに回った。鍵は掛かっていなかった様である。

ドアノブを握り締め、ゆっくりと警戒しながらドアを開けて行く。

僅かに開いたドアの隙間から、ムツとする様な鉄の匂いが溢れ出して来た。その匂いに、顔をしかめながらドアを開いて行く。部屋の中が、セバスの瞳に映った時、思わず

言葉を失った。

壁には、赤黒い液体と何か柔らかい破片がこびり付き、床には人であつた物の、頭が、目が、耳が、腕が、足が、内臓が、ちりじりになつて転がつていた。この部屋に、何人のニンゲンが居たのかも解らぬ程、細切れになつて。

立ち尽くすセバスの耳に、僅かな靴音が聞こえて来た。その音は部屋の奥から近付いて来る。ゆつくり、ゆつくりと近づいて来る足音。それに伴い、何かを引きずる様な音。その音の正体が、僅かな明かりの中、セバスの前に現れる。妙に甘つたるい、緊張感の無い声と共に。

「あんれえ？ セバス様じゃないの。おひさー」

そう言つて血塗れの女、クレマンティーヌは左掌をヒラヒラさせた。

「！ な、何であなたが此処に？」

セバスの問いに、クレマンティーヌはキョトン、とした表情を浮かべ

「私が居る理由？ そんなの一つしか無いんですけど」

セバスは目を閉じ、自分の言葉を恥じる。そう、彼女、クレマンティーヌが此処に居る理由など、一つしか無いのだから。

「あの御方は、どの程度の規模の粛清をお考えなのでしょうか？」

「粛清つて。セバス様も過激な発言をするよねえ。これは警告だよお」

「警告、ですか？」

セバスのオウム返しのような言葉に、クレマンティーヌは少女の様な笑みを浮かべる。「んー。コイツで今回の関係者は全部御縄についたわけだけとお……」

そう言つて、引きずつていた物に視線を向ける。そこには、あらぬ方向に手足の関節を曲げた、坊主頭と言つても良いほど髪を短く刈り込んだ男が居た。

「まああ、今回は様子見だねえ。組織内で行方不明者が出て、その原因がどつかとのトラブルでえ、それでもちよつかいを掛けて来るようなら………あの人は見放すよ。価値は無い、つてね」

クレマンティーヌの言葉を、セバスは静かに受け止める。

「王国も含めて、でしような」

「……………たぶんね」

御互いの視線が交わる。僅かの緊張感の後、お互いの表情が和らいだ。

「商品になつてた女達は、地下にいるよ。隣の家から、地下に潜れるから、よろー」

「了解しました。幸い、こちらは人手がおりますから。この惨事は、何者かの襲撃、で宜しいので？」

「うーんとお、そうしてくれると、ありがたいかなあ」

そう言つて、クレマンティーヌは悪戯がばれた子供の様な笑みを浮かべるのだった。



商館の女達を、王国戦士だと打ち明けたクライムに預け、セバスは屋敷に帰って来ていた。扉の前で盛大な溜息を一つ吐き

「彼女らを哀れに思うのは、私の独善なのでしょいか？　彼女らも……………ツアレの様に……………いやいや、いけませんね。……………誰かが困っていたら、助けるのが当たり前。たっち・ミー様、これは呪いなのでしょいか？　……………答えを下さい、ビクトーリア様」

自身を責める様に言葉を紡ぎ、硬く拳を握りしめる。

その後再び溜息を吐き、ドアノブにそつと手を掛けた。扉を潜り視線を上げると、目の前にはソリュシヤンが居た。

「セバス様」

セバスは耳を疑った

今彼女は何と言ったのか？

解っている。

しつかり聞こえていた。

「セバス様」とソリュシヤンの艶めいた唇はそう形作った。

メイド服を纏った、ソリュシヤン・イプシロンが。

「いらつしやっているのですね？」

「はい。二階でアインズ様がお待ちです」

「そうですか」

それだけを言つて、セバスは階段の手すりに手を掛けた。

「あの、ニンゲンも同行させる様に、との事です」

「解りました」

その言葉を最後に、セバスは二階へと消えて行つた。

セバスはメイド、ニンゲンの女、ツアレを伴い客室のドアをノックする。

「入りなさい」

聞き覚えのある声が、入室許可の言葉を返して来た。扉を開け一礼の後、視線を上げると、そこには異形の者達がいた。デミウルゴスが、コキュートスが、胎児の様な外見

の、第八階層守護者ヴィクティムが。そして、自らの主、アインズ・ウール・ゴウンの姿が。

「お忙しい所——」

「止めよ。私は煩わしい事が嫌いだ。主題を先に進めようではないか。セバス、そのニンゲンを保護してほしい、との事だな」

「はい」

アインズの言葉に、セバスは腰を折り答える。その一方で、性急に話を進め様とするアインズに、妙な違和感を覚えた。

「ふむ。保護事態は問題ない」

アインズの言葉に、セバスはほっと息を吐いた。だが次の言葉で、それは悪夢へとかわる。

「だが、ニンゲンを保護して、ナザリックに何のメリットがある？」

答えられなかった。

ツアレを保護するメリット？ そんな物は一切存在しない。言ってしまったら、害悪以外存在しない。現状ですら、厄介な事に陥っているのだ。セバスは、答えられずじつとうつむくのみであった。

「示せない様だな。話は終わりだ。セバス！ ナザリックに疫を持ちこもうとした事

実、どう責任を取る？」

「そ、それは……」

アインズの詰問に、セバスの額に汗が流れる。

「そうか。解らないか。ならば、私が命令しよう。セバス！ そのニンゲンを殺せ。それを持って、償いしよう」

アインズの冷酷な命令が投げかけられる。自分は一体どうすれば良いのか？ 必死でセバスは考える。その時、温かな言葉が脳裏に蘇る。

“己の善性に従え”

「その命令には、従う事は出来ません」

背筋を正し、ハッキリと言葉を告げる。

これに驚き意を唱える者がいた。

「セバス。これは、アインズ様に対する裏切りですよ」

デミウルゴスだ。だが、セバスは自信を持って口を開く。

「いいえ。そうではありません、デミウルゴス様」

「どう言う事だい」

「彼女を救うのに対して、私は許可を受けております」

「ー」

場の全員に驚きが広がる。

一体誰が、ニンゲンの救出に許可を出したのだろうか。デミウルゴスが問い詰め様と口を開いた瞬間、セバスからその人物の名が告げられる。

「私は、私の善性によって行動する事を、ビクトーリア様に許可して頂いております」

セバスの言葉に、デミウルゴスは眩暈がする思いだった。まさか、ここでもビクトーリアが先手を打っているとは思ひもしなかったのだ。

「はは、流石はビクトーリア様」

「そうだな。流石はナザリックの神体だ」

疲れ切った様に言葉を漏らすデミウルゴスに、アインズは賛同の意を告げる。だがその言葉が、セバスが感じていた違和感に止めをさした。

「お話の途中、申し訳ありません。あなたは……どなたですか？」

そう言つてアインズに拳を向けた。

「セ、セバス！ 君は何をやっているんだ！ アインズ様に拳を向けるなど！」

デミウルゴスから諫める言葉が飛ぶが、セバスは動じない。

「アインズ様ならば……ですが」

言葉短く、セバスは拳を叩きつける。

だが、その時

「待て、セバス！」

空間が歪み、漆黒のローブ姿の異形が姿を現す。

その瞬間、デミウルゴス、コキュートスの二人が片膝を付いた。それと同時に、アインズの姿がグニヤリと歪み、軍服の様な物を纏った異形へと変化する。

「ふふつ。驚かせてしまった様だな。許せ、セバス、ソリュシャン」

「はっ」

セバス、ソリュシャンの両名は、慌てて片膝を突く。僅かに遅れ、ツアレも同様の行動を示す。

「良い。面を^{おもて}上げよ。すまぬな、セバス。デミウルゴスが心配症でな。万が一と言って、聞いてはくれなかったのだ」

「いいえ。アインズ様。アインズ様の御命こそが、第一であります」

アインズは謝罪の言葉を口にした後、ゆつくりとソファーに身を沈め、話を再開する。「しかしセバス。良く私が偽物だと気付いたな。我ながら良く似ていたと思うんだか？」

アインズに問われ、セバスは恐れながら、と口を開く。

「慎重さを旨とするアインズ様とは思えぬほど話を急がれた件が、疑問の始まりでした」
「ほう」

「しかし、確信が持てたのは……ビクトーリア様をお褒めになった事でした」

他のメンツは不思議そうな顔をしていたが、アインズには腑に落ちる答えだった。確かにあの魔女には、感謝はあれど褒める所など一つも無いのだから。

「成程な。セバスよ」

「はっ！」

「良く仕えてくれている。私はお前を誇りに思う」

「有り難き御言葉」

アインズは、顎に指を寄せ暫し考えたと

「セバスの忠義に、私は褒美を渡そうと思うのだが。セバス。何か望みはあるか？」

そんな提案を口にする。

「ア、アインズ様」

「何でも良い。言ってみろ」

セバスは僅かに思い悩むが、己の心の言葉に従う決意を固める。

「では、ツアレをナザリックで保護して頂けませんか？」

「ふむ。そんな事で良いのか？」

「はい」

淀みない言葉だった。アインズも、それがセバスの成長として心から喜ばしい事だった。

「女、面おもてを上げ、名を名乗るが良い」

そう言われて、ツアレは脅えながらも顔を上げ、自身の名を告げる。

「ツ、ツアレニーニャ・ベイロン、です」

「ツアレ、ニーニャ、か。似ているな」

「アインズ様？」

眩きに、デミウルゴスが心配そうに声をかけて来た。アインズは、何でも無いと手で制すると、立ち上がり高らかに宣言する。

「アインズ・ウール・ゴウンの名において、これより、ツアレニーニャはナザリツクの保護対象とする」

魔女と悪魔

王都での騒動も一旦落ち着き、リリー・マルレーンは宿の寝室で睡眠を取ろうとベッドに腰掛ける。永コンティニアル・ライト続 光の光を消そうと、手を伸ばした時、僅かにドアがノックされた。こんな夜半に？ と言う憤りを感じたが、逆を返せばこんな時間に来るほどの用が、楽観視できる様なものでは無いのだ。リリー・マルレーンは立ち上がると、ガウンを纏いドアへと近付きながら口を開く。

「誰じゃ？」

呟く様に放たれた言葉に、ドアの前にいるであろう人物が丁寧に言葉を返す。

「夜分遅くに申し訳ありません。至急、陛下のお耳に入れねばならぬ事が御座います」
「……入れ」

リリー・マルレーンは、ドアから離れながら、入室の許可を出す。ドアを開け、入って来たのは、黒装束の男だった。部屋へと踏み入り、ドアを閉めると、男は片膝を付き、臣下の礼を取る。

「風花聖典で御座います」

「ふむ。イサブロウの部下か……して、話は何じゃ？ 恐らく、楽しい物では無いのじゃ

ろ?」

「はい」

言葉重く、男は案件を語り出した。

「陛下の命により、監視を続けておりました御老人なのですが、かの者らが助けた商館の女達が、何者かに暗殺されました」

「何?」

椅子に深く腰掛け、足を組むリリー・マルレーンの瞳が、細く鋭く変わる。

「彼の女達は、王国戦士達に保護されたのでは無いか?」

「はい。静養場所も、王国が手配した場所と確認しております」

「そこが襲われた、と言う事じゃな?」

「はい」

単純に報告だけ聞いたリリー・マルレーンは、顎に手を持って行き背後を想像してみ
る。

(まず思い付くのは、八本指とか言う組織の仕業じゃな。しかし、これは無いじやろうな。妾が組織のトップなら、責任者行方不明の部門はとつと切り捨てるからの。次は……客じやった貴族派の隠ぺい工作、か。……これも無いのう。自分も一枚噛んでいると言っている様なものじゃからなあ。残るは………最悪、じやの)

リリー・マルレーンは溜息を一つ吐くと、再び口を開く。

「了解した。うぬらは、背後を探つてくりやれ。妾は独自のルートで、探りを入れて見ようぞ」

リリー・マルレーンの言葉に、風花聖典の男は短く「畏まりました」の声と共に、退室して行つた。

ドアが閉まるのを見届け、リリー・マルレーンは次の行動へと移行する。右の指をこめかみに当て、メッセージの呪文を展開した。

「デミウルゴス、聞こえるか？ 妾じゃ」

その言葉は、リリー・マルレーンでは無く、ビクトーリアとしての言葉。重く、凜とした声色、異形の王の声。その声に、礼を尽くす様に、奉る様に、返事はすぐに帰つて来た。

『おお、これはビクトーリア様。このデミウルゴス、遂にお役に立てる時が？』

「ふん。持ち上げが過ぎるわ。うぬに頼みたい事柄がある。良いか？」

『何を仰いますか。ビクトーリア様は、只、やれとお申し付け下されば良いのです』

デミウルゴスの変わり様に、頭が痛くなる思いだったが、それを此処で言つても仕方が無い、とビクトーリアは話を続ける決定を下す。

「うぬに調べて欲しい事があるのじゃが。うぬ、今何所におる？ ナザリックかや？」

『いいえ、ビクトーリア様。私は今、王都に居ります』

「王都?」

『はい』

「妾も王都に居る。合図を出せば、来れるかや?」

『それは勿論。このデミウルゴス、ビクトーリア様の為ならば、何時、何所でも御前に参上致します!』

調子の良い言葉に、ビクトーリアは少々虐め過ぎたか? と反省をしながら、部下から禁止されている行為である、窓を開け、窓枠へと腰掛ける。

「デミウルゴス。今から光を灯す」

そう言って、人差し指と親指の間に電気を流す。放たれた力は、空气中に明るいライオンを作り出した。

その明りを合図に、ビクトーリアの前に飛行体が舞い降りる。赤いスーツに、蝙蝠の羽を生やしたカエルの顔の異形が。

「御苦労、デミウルゴス。入れ」

言葉少なく、ビクトーリアは窓枠から腰を浮かした。

その表情、思い声、デミウルゴスは瞬時に召集は簡単な事柄では無い事を読み取った。何者かが、この暴君の意に沿わぬ事をしてかしたのだ、と。

部屋へと足を踏み入れ、何時もの悪魔の姿に変化したデミウルゴスは、当然の様に胸に手を当て腰を折る。それを当然の事と、表情を変えず受け止め、ビクトーリアは椅子に腰掛け足を組み、平坦な声で言葉を綴る。

「デミウルゴス。うぬが王都に放っておる、影シャドウ・デーモンの悪魔を借り受けたい」

「影シャドウ・デーモンの悪魔を、ですか？」

「うむ。うぬは、先日セバスが助けた女を知っておるか？」

「はい。アインズ様の名で、保護された下等生物ニンゲンの事で御座いますね？」

デミウルゴスの言葉に、ビクトーリアは疲れた様な笑みをこぼす。

「それだけでは無い。あの小栗鼠の件で、少々厄介な事があつてのう。妾が事に当たっておつたのじゃ」

「な、なんと！ セバスがビクトーリア様の御手を煩わせているとは！ ナザリックを代表して、伏してお詫び致します」

そう言つて膝を付こうとするデミウルゴスを、ビクトーリアは苦笑いで制止する。

「その事は良いのじゃ。問題は、その後じゃ」

「？」

デミウルゴスは首を傾げるが、その表情は愉悦に溢れていた。如何にも悪魔らしい、いやらしい表情が。

「その後、妾は関係者の炙り出しを行い、小栗鼠と同じような者共を解放したのじゃが……」

「だが、で御座いますか?」

デミウルゴスの問いかけに、ビクトーリアは一度頷き

「全員が、骸となつて発見された」

ビクトーリアの言葉に呼応して、デミウルゴスの顔から表情が消えた。

「……何者かが、ビクトーリア様の施しに唾を吐いたと?」

「左様じゃ。これでは、事を成した者達の努力が報われん」

「おお! 自身への侮辱よりも、臣下の功を踏みにじられた事に憤るとわ! 流石は、ビ

クトーリア様」

デミウルゴスのおべっかに対し、ビクトーリアは小さく鼻で笑うと、商館襲撃後のあらましを語つて聞かせた。

「成程。ビクトーリア様は、当たりを御引きになった様ですな」

デミウルゴスの顔に、先程よりも五割増しな歓喜の表情が作り出された。

「当たり、とはどう言う事じゃ?」

「どう言う事も何も、私は主犯を知っているのですよ」

「なんじゃと!? 良くやった、デミウルゴス! これは、殊勲賞ものじゃ!」

驚き立ち上がったビクトーリアは、素早くデミウルゴスのサングラスを奪い取り、賛辞の言葉をかける。

「あ、あの。ビクトーリア様？ 私はこちらなのですが……」

「はあ？ 眼鏡掛け機は黙っておれ。良くやったぞデミウルゴス。特別に、妾の肌着でふいてやろう」

そう言うと、ビクトーリアは脱ぎ散らかした衣服を漁り、シルクで出来た自身のパンツでレンズを拭こうと手を掛けた。

「御止め下さい！ ビクトーリア様！」

「何故止める、眼鏡掛け機よ！ アルベドであつたなら、狂喜乱舞する御褒美じゃぞ！」
言い合いながらも、パンツでレンズを拭こうとするビクトーリアに、必死で奪還を試みるデミウルゴス。

「私を、あんな変態と一緒にしないでいただきたい！」

デミウルゴスが放つた一言で、ビクトーリアの動きが止まる。その顔は、驚愕を超えた様な表情だった。

「ビ、ビクトーリア様？」

「そ、そうじゃよな。あ奴は……じゃよな」

声には出ていなかったが、デミウルゴスの眼は、ハッキリとビクトーリアの唇が、変

態、と言ったのを読み取っていた。

「は、はあ。まあ。休憩と言つては、ビクトーリア様の寢所に潜りこみ、一人遊びをする程度には、変態だと思いますが」

「な、なんじやと……。では、妾の部屋の空気が、いつも艶っぽいのも、ベッドが僅かに湿り気を帯びているのも……」

「アルベドの置き土産、ですな」

「デミウルゴスの言葉に、ビクトーリアは力無く椅子に腰かける。右の掌を、両目を隠すようにあてがい、罪を語る罪人の様に口を開く。

「妾が……もつと構つてやつておれば。よよよ」

その嘆く様な言葉を耳にし、デミウルゴスは苦笑いを浮かべる。

「まあ、アルベドは、あれで平常運転な気がしますが。しかし、あの劣情がアインズ様に向いていないのは良き事では無いでしょうか？ 感謝致します、ビクトーリア様」

そして、嬉しくも無い謝辞を口にするのだった。

「嬉しくも、何とも無いわ」

ビクトーリアは、ブスリと不満の籠った表情でそう返すのだった。

「アルベドの事はさておき、ビクトーリア様」

「妾の貞操は、どうでも良い事なのかや？」

「い、いえ。そう言う意味では……」

ビクトーリアからの思いもよらぬ返しに、デミウルゴスは顔を引きつらせる。だが、すぐにビクトーリアの表情が緩んだため、それが冗談だと解り、胸を撫で下ろす。

「そ、それなのですが、ビクトーリア様」

「何じゃ？ 遠慮はいらん。申して見よ」

ビクトーリアの許可に、デミウルゴスは姿勢を正し話を再開する

「今回の首謀者を含め、王国に対しての作戦があります」

「ほう。それは、楽しき物なのかや？」

ビクトーリアの、「楽しき物」と言う言葉に、デミウルゴスの心は躍らんばかりに跳ね上がる。

「はい！ アインズ様の、いえ、冒険者モモンの、アダマンタイト級への昇進を祝福して、王国殲滅計画の第一弾を催したいと思います」

「ほう。王国殲滅計画のう。それに、モモンがアダマンタイトに……………アダマンタイト？」

唐突に、ビクトーリアが首を傾げる。

「誰がアダマンタイト級になったと言うのじゃ？」

「モモンがです。ビクトーリア様」

「モモン言うたら、アインズでは無いか」

「はい。仰る通りですが？ 実際にはアインズ様と、ナーベラルの二人が、ですが」

「え？ ナーベラルも？」

「はい」

デミウルゴスの淀みない答えに、ビクトーリアははにかんだ様な笑みを零す。だが、笑いながらも首を傾げ

「しかし何故じゃろうなあ。妾の計画が上手く行っておるはずなのに、アインズが偉くなったと聞くと、妙にイラツとする」

「は、はあ」

ビクトーリアの心情の吐露に、デミウルゴスは短く返事する事しか出来なかった。

「まあ、妾の心根は置いておいて、じゃ、計画を聞かせて貰おうかのお」

この言葉を聞いて、デミウルゴスはほっと息を吐いた。やっと本筋の話が出来る。

デミウルゴスは、再度佇まいを直し、虚空から数枚の羊皮紙を取り出し、ビクトーリアへと渡す。

「これが、王国殲滅計画の第一弾。ゲヘナの全容であります」

書面を受け取り、ビクトーリアはゆっくりと、だが確実に目を通して行く。書面が最終ページ、三枚目に差し掛かった所で、ビクトーリアが口を開いた。

「この計画に、妾は関わらんでも良いのか？」

「この言葉にデミウルゴスは、驚きを顔にする。

「参加、して頂けるの、ですか？」

「まあ。これは、妾の計画に都合が良さそうじゃからな。少々手直しをするが、良いか？」

「そ、それは当然！ 煉獄の王に参加して頂けるならば、私の計画など子供の考物程度なぞなぞですので」

デミウルゴスが何やら言っているが、ビクトーリアは好きにして結構と言う意味と推え、羊皮紙にペンを走らせて行く。約三十分程度の時間を使い、ビクトーリアによる推敲は終了した。

羊皮紙を返され、デミウルゴスは変更された箇所をつぶさに拾い読みをして行く。読み進める毎に、羊皮紙を持つ手が震えて行くのが解った。デミウルゴスは、確認作業を終えると、本体、いや、サンガラスの位置を丁寧直し

「素晴らしい。素晴らしい出来で御座います、ビクトーリア様！ 魔皇ヤルダバオトに続き現れる、真皇インゴット・ナインテイル！ そして、仮面の悪魔の真実！ これこそ、まさに絶望！ そして、颯爽と現れる漆黒の英雄モモン！ 明かされるモモンの正体！ 素晴らしい！ 素晴らしい出来で御座います！」

デミウルゴスは歓喜に震える。
王国に災厄の夜が訪れるまで、
あと僅か。

「はあ。コンドウよ、うぬの言う良い国とは、治安が良く、活気に溢れておる、と言う意味じゃろ?」

「ええ、そうですが……」

リリー・マルレーンは、コンドウとの一連の会話の後、首を横に振る。お前の考えは間違っているとしても言う様に。

「何と言うかのう。良き国である事と、良き国であり続ける事は、正反対の事であり、同意でもあるのじゃ」

「いまいち要点が解り辛いのですが?」

ヴァイエストが首を傾げる。リリー・マルレーンとしても、それは理解している。だからこそ、言葉が続ける。

「うむ。良き国とは、戦が無く、飢えが無く、安心して子が産め、育てられる土地じゃじゃろ?」

「はい」

「では、良き国であり続けると言う事は、それを現実にする手段、と言う事になる」

「手段、ですか」

「そうじゃ。戦に備え、飢餓に備え、民草の心に安心感を持たせる事じゃ。つまりは、統治に関してじゃな」

リリー・マルレーンの言葉に、コンドウ、ヴァイエスト共に沈黙と共に自身の中で言葉を反芻する。

「コンドウはもとより、メロデイも知っておるじやろうが、今、この国は帝国と戦争状態にあるじやろ？」

「ええ」

「なのにな。王は独自の兵を持つとはせぬ。まあ、確かにある事はおるよ。じゃが、王都に駐留する王国騎士や、王国戦士だけで、帝国の専門兵士団と渡り合えると思うか？」

「ですが陛下。王国は農民兵が……」

リリー・マルレーンの言い分に、コンドウが意見を挟んだ。だがこれさえも、リリー・マルレーンにとつては織り込み済みな事なのだ。

「それがいかんと言うておるのじやよ、妾は」

「どう言う事で？」

コンドウはいまいち要点が掴めない。一方のリリー・マルレーンだが、言葉にするのもバカバカしいと言う様な表情だ。疲れを隠しもせず、どつかりとソファーに沈み込みリリー・マルレーンは再び口を開いた。

「今の様な、名乗り合いから始まる戦ならばまだしも、帝国が宣戦布告無しに攻め込んで

来たらどうする？ 農民を掻き集める暇など無いぞ」

「ですが、陛下。帝国からの出兵となれば、エ・ランテル辺りでの監視に引つ掛かりますでしょう」

「ならば、聖王国ではどうじゃ？ 評議国でも良い」

リリー・マルレーンの言に、コンドウは押し黙るしか無かった。だが、リリー・マルレーンの愚痴は止まらない。

「妾が最も愚かに感じたのは、王族の考えじゃよ」

「王族の、ですか？」

沈黙を守っていたヴァイエストが問いかけた。

「そうじゃ。今の王は、平時ならば良き王なのじゃろう。じゃが、緊張感が足らん。第一王子など論外じゃ。本気の半分も出しておらぬ帝国に対し、絶対有利で勝利出来ると思っておる。取り捲きの貴族共もな。どれだけ己を知らぬのか、全く、あほうとは、これらの事を言うのじゃろうて」

「はあ」

リリー・マルレーンの呟きに、コンドウ、ヴァイエストの兩名からも空返事しか出てこなかった。

「第二王子にしてもじゃ、国の内政は解っておるのじゃろうが、現在の思考は、いかに兄

を蹴落とし王位を継ぐかしか頭がない。妾の見解では、鴉が鳴いておる。閉店、ガラガラじゃ」

リリー・マルレーンが最後に言った言葉自体は解らなかつたが、意味は理解出来た。そりゃあ、荒れるわ、と。

「ならば、王国の要はラナー王女に託された、と言う事ですか？」

王国の存続を考え、コンドウは告げる。だが、リリー・マルレーンの答えは、想像を絶する物であつた。ニッコリと少女の様な笑顔を浮かべながら語られた言葉は？

「生きておれば、じゃがな」

まるで死する運命だと言う様なものであつた。

その後味の悪さを払拭する様に、リリー・マルレーンは話題を変える。

「さて、妾とメロディは、この後黄金の姫様とお茶会な訳じゃが、コンドウ、うぬの所の上級神官と中級神官を三人程貸してくれるかや？」

「うちの、ですか？」

「そうじゃ。その者らに、これを一つずつ持たせ、ある人物に届けてほしいのじゃよ」

そう言つてリリー・マルレーンが取り出した物は、羊皮紙が二枚と、魔封じの水晶が一つ。

「中級神官に羊皮紙を一枚ずつ。上級神官に魔封じの水晶と言伝を」

「陛下の御言葉を、ですか？」

コンドウは品物を手に首を傾げる。

「そうじゃ。水晶を羊皮紙に使え、とな。いや、伝言はうぬが伝えよ。彼の者はこの城に居る筈じゃからな」

「はあ。それは良いのですが、一体誰に？」

「うん？ 蝙蝠にじゃよ」

リリー・マルレーンの言葉に、やっと理解がいったとコンドウは首を縦に振る。だが、一つだけ疑問も残っていた

「しかし陛下。何故三人、いや、俺を入れて四人に？」

コンドウの問う顔を、リリー・マルレーンは半眼で見つめ

「鈍いおう。一人に全部任せて、殺されたらどうするのじゃ。機密は護られるために存在するのじゃぞ」

「た、確かに、ですな」

リリー・マルレーンの物騒過ぎる物の考えに、コンドウは若干引いた様に返事を返す。それと共に、この国の王族をお花畑の住人と詰った事へも理解が出来た。考え方のベクトルが真逆なのだ。決して相容れる事など無い程に。



「ふふん。いよいよ対面か」

正装と言える法服に身を包み、司教冠ミトラに羅紗を縫い付け顔を隠したりリー・マルレーンが、王宮の廊下を、ヴァイエストを伴い目的の場所を目指し、歩を進める。

午前中に国王と、昼食会を挟み第一王子、第二王子と対面し、僅かに日が落ちかけたこの時間帯。これからリ・エステーゼ王国王女、ラナー姫殿下との会談と言うお茶会の始まりである。

「随分と楽しそうですね、陛下」

種族の特徴でもある、頭頂部から生える長い耳をピョコピョコと揺らしながらヴァイエストが問いかける。

「そう見えるかや?」

意地悪く聞き返すリリー・マルレーン。だが、ヴァイエストとしても、この暴君とはそれなりの付き合いである。

「ええ。とつても。ネズミを齧る猫の様に」

「ほほう。妾が小娘をいたぶる様な人物じゃと?」

「……違うんですか?」

そう言つてヴァイエストは、邪氣の無い笑顔を作る。その表情を見、リリー・マルレーンは反論の権利を放棄するのだった。

そんな身分に拘らない会話をしながら、二人は一つのドアの前に辿り付く。そのドアを前にして、ヴァイエストはリリー・マルレーンを後ろに引かせ、庇う様に自身の背に隠しながら数回ノックをする。待ち時間など無くドアは開かれ、メイドがうやうやしく頭を下げる。

「陛下が参られている。ラナー王女殿下へ取り次ぎを」

先程の柔らかな空気を、微塵も感じさせずにヴァイエストは儀礼的な言葉を口にする。メイドは再度頭を下げ、ドアを閉じた。

再びドアが開く前に、室内から「まあまあ、陛下が? 早くお通しして!」などと言う元気な声が漏れて来た。声の主が、恐らく王国の黄金、ラナー王女なのだろう。

扉が開かれる。だが、ドアノブを握っていたのは、先ほどのメイドでは無かった。

サラサラの金色の髪。愛嬌のある、少し垂れ目気味のエメラルド色の瞳。幼さを残した表情。誰もが庇護欲に駆られる、ラナー王女とはそんな存在に見えた。

リリー・マルレーンとヴァイエストは、ラナーに導かれ、窓際に用意された円卓の席

に腰かけた。

座るとすぐにティーカップが出され、ポットに入った茶が注がれる。僅かに花の香りがした部屋は、一瞬で紅茶の豊潤な香りに塗り替えられる。

カップに手を付けないリリー・マルレーンに気付いたラナーは、メイドに声を掛け退室を促す。これに意を唱えるでも無く、あっさりとしてメイドは隣室へと消えた。

「ほーう。王国はメイドの教育も満足に出来ん様じゃな」

ラナーと出会ってから発した、リリー・マルレーンの初めての言葉がこれだった。

いきなり喧嘩を売る様な言葉に、ヴァイエストは苦笑いを浮かべる。窘める様な言葉を言った方がいいのだろうか、この場に居るのは、法皇と一国の姫君なのだ。自分の様な、一介の重人が何か言うべきでは無い、と口を閉じる。

だが、この先制もラナーにとって、良い方向に働いた様だった。

「陛下もお解りになりますか？ あの方は、とある貴族の娘なのですが、何と言いますか……」

「城に奉公に上がれば、箔が付くとも思っておるのじゃろう？ うまく行けば、内情や弱みも握れるやも知れぬしう」

遠慮のない言葉に、ラナーはポンつと手を合わせ、賛辞の言葉を口にする。

「さすがです、陛下！ ですが、そのベールは取られないのですか？」

羅紗の事が気になって居る様である。しかし、そこはリリー・マルレーン。空気を吐く様に、嘘を吐く人物である。

「うむ。これはのう、未婚の信徒は、おいそれと人前に素顔を晒してはならぬ故の処置じゃ」

「まあ、そんな理由が！ では陛下は、何れ旦那様を貰うのですか？」

純真無垢に信じて居る様な口ぶりだ。

「うん？ 妾がか？ 何故にそうなる。嫁を娶るかもしれぞ」

そう言つて笑いながら司教冠ミトラを外した。

「まあ！」

ラナーは、口を隠しながら目を見開く。

「そんなにお美しければ、お顔を隠すのも当然ですわ」

「ふふん。褒めても何も出ぬぞ」

「そんな。御冗談を」

法皇と王女の会談は、そんな朗らかな空気の下始まつた。

王国と法国の違い。帝国へ行つた時の、街並みの様子。そんな事を話している内に、話題は身近な者達の事へ。特にラナーは、クライムと言う少年の事を、嬉々として話し出した。それは、堰を切つた様に。

「ほう。なかなか勇敢な少年の様じゃのう」

「はい！ クライムは凄いですよ。先日も、地下で営業していた商館を、たった三人で潰したんですよ」

「ふむ。その話なら、妾の耳にも入っておる。何でも救出した娼婦が全員死亡したとか」
リリー・マルレーンは、笑みを潜め言葉を紡ぐ。

「ええ。酷い話です」

だが、ラナーは笑みを湛えたままだ。

「そうじゃのう。酷い話じゃ。救った者すら守れんとはの」

「どう言う、意味でしょうか？」

ラナーの顔から、笑顔が消える。

「そのままの意味じゃ。無能、と言っておるのじゃよ。うぬの駄犬は」

無能な駄犬、その言葉が引き金となったのか、ラナーが静かに立ち上がる。その行動に、相手をしてやる、とでも言う様にリリー・マルレーンも立ち上がる。

相対する黄金の瞳と、エメラルドの瞳。一つの瞳には、怒りと殺意が浮かび、一つの瞳には、侮蔑と敵意が浮かぶ。

「陛下。いくら陛下でも、その御言葉だけは撤回して頂きたい」

「ほう。そんなに悔しいのかや？ 妾が憎いのかや？ しかし、撤回など出来るはず無

かろう。自分の愛しき者の功に唾を吐く主人などに。それに気付かぬ程盲目な駄犬などに」

リリー・マルレーンの言葉に対し、ラナーの瞳が大きく開かれた。

「な、何を……」

「私のクライムに、色眼を使うなんて……じゃったか？」

ラナーは言葉を失う。今、リリー・マルレーンが口にした言葉。それは、あの夜訪れた、あの悪魔しか耳にしていけない言葉なのだ。

「妾の目は何時も見ておる。妾の耳は誰の声でも聞いておる。妾の足は千里を駆け、妾の腕は全てを握りつぶす。良いか年中発情期の小娘。妾の配下の功に唾を吐いた事、ゆめゆめ努々忘れるで無いぞ。妾は法皇リリー・マルレーン。世界を創りし者ぞ」

黄金の瞳に射抜かれ、ラナーは只、立ち尽くす他無かった。

「許しなど乞うてくれるなよ。そんな無様な姿を見せよう物なら、キサマの大切な物を奪い取ってくれるぞ。せいぜい足掻がよい。妾に尻尾を振ってみせよ。惨めに、必死に、ご機嫌を取るが良い。大切なクライム君を守る為に」

そう言つてリリー・マルレーンは、ケラケラと笑うのだった。

暗殺依頼

「……陛下」

ラナーの部屋を出たリリー・マルレーンに、ヴァイエストが気遣う様に声を掛ける。先程の言葉は、酷過ぎはしないか、と。だが、そんなヴァイエストを振り返る事無く、リリー・マルレーンは言葉を凶器とする。

「それ以上言うでは無いぞ。誰が一番酷い扱いを受けたのか、それをしでかしたのは誰かを知れ」

「失礼致しました、ビクトーリア様」

ヴァイエストは、目の前を歩く人物の真名を呼ぶ。

この数日の一件で、誰が怒りを覚えているのか、理解しているからだ。怒っているのは、怒りを抱いているのは、スレイン法国法皇リリー・マルレーンではない。煉獄の王、ビクトーリア・F・ホーエンハイムなのだから。

「これから、どう出るでしょうか？」

もう一つの不安案件を、ヴァイエストは口にする。

リリー・マルレーンが言った様に、可愛がっている男に色眼を使うかも知れない、な

どと言う事柄で、十数人もの元娼婦を殺害しているのだ。絶えず気を張っていないと、リリー・マルレーンに危険が及ぶ。

だが、当のリリー・マルレーンは呑気なものだ。

「なああに、主犯は、あのクソガキで、実行犯も解っておる。妾に手を出すならば、潰すまでよ。そうじやろう、メロデイ」



法皇との面白くも無いお茶会を終えた夜、ラナーは珍しく苛立ちを表に出し、来訪者を待っていた。その者は、音も無く暗闇から現れ、ラナーの背後から声を掛ける。

「渡したスクロールをこうも早く使うとは、何か問題がありましたかな？」

声の主。

赤い異国のスーツと呼ばれる衣装を纏い、色付きの眼鏡、サングラスを掛けた悪魔。名をヤルダバオト。

ラナーは、ヤルダバオトの出現に驚く事も無く、そのドロリとした視線を向ける。

「ええ。私とクライムの仲を引き裂こうとする人がいるの。殺しては頂けないかしら？」

平然とそんな言葉を口にする。あどけない表情で、子供っぽい口調で。まるで、面白半分には蟻を潰す幼子の様に。

「ふむ。それは、追加の謝礼、と言いうことですか？」

ヤルダバオトは笑みを絶やさずラナーと向き合う。

「出来れば、そうして頂けるとありがたいですわ」

グニヤリと表情を崩しながら、ラナーは答えた。

「考慮しましょう。それで、ターゲットはどなたですか？」

「法皇よ。スレイン法国の法皇陛下。とっても意地悪な人なの」

そう言つて表情とは裏腹な、少女らしい笑い声をあげる。

「スレイン法国、ですか」

「何か問題が？」

ラナーの問いかけに、ヤルダバオトは僅かに眉を寄せ

「あの国は、私の主人の一人が見ている国なのでね。おいそれと手が出せないのだよ」

ヤルダバオトの言葉で、ラナーの顔には一層の歪んだ笑顔が浮かぶ。

「大切な主人の為に、あんな人を王にしているはいけないわ。あんな人が王様になつ

ている国ですもの、いずれ偉大なるあなたの主人にも手を掛けようとすわ」

ラナーは何とか誘導をしようとしているのだろう。

以前の盲目的な自分なら、主人の為と言って、勝手な思い込みで行動していたかもしれない。だが此処で行動して、この後に控える計画に支障が出るのは避けなければいけないのだ。あの恐怖の魔王が関わっているのだから。

「仕方ありませんね。一度、様子を探ってみましょう。殺す、殺さないはその後。計画の成功を持って、と言う事で」

「仕方ありませんわね。忠告はしましたよ」

ラナーは素直に引きさがりながら、殺害を急がせる様な言葉を付け加えるのを忘れないう。この言葉に、ヤルダバオトは苦笑いを隠しながら、闇へと溶けて行った。

再びヤルダバオトが姿を現した場所は、王城の尖塔である。足場など無い円錐の頂点に、器用に爪先で立っていた。

「さて、困りましたねえ」

茶化す様に、楽しむ様に、デミウルゴスはサンングラスの位置を直しながらほくそ笑む。

「しかし、報告だけは致しませんと」

デミウルゴスはそう呟き、右の指をこめかみへと持つて行く。

「ビクトーリア様。デミウルゴスで御座います。夜分遅く申し訳ございません」
声を低くし、謝罪の様に言葉を綴る。

『何じや、デミウルゴス。しかし、何とも胡散臭い声じやのう』

礼儀正しく言葉を尽くしても、この返事である。全く意地が悪いとは、この人物を指す言葉なのだろうとデミウルゴスは心の内で呟く。

「ははっ、お戯れを。それで本題なのですが……」

『ふむ。うぬの、その調子から見ると、何か楽しい事なのじやろうな』

ビクトーリアから、無茶振りのリクエストである。

法皇暗殺が楽しい話題なのか、楽しくない話題なのか？ 悪魔としてのデミウルゴスにとっては、混乱の引き金となる話は楽しい物だ。では、会話相手の暴君にとっては？

デミウルゴスの額に、嫌な汗が浮かぶ。

「ま、冗談は置いておいて本題じや。何用じや？」

デミウルゴスは、ほっと息を吐いた。

「件の黄金の姫なのですが……」

『ほう。あの、発情期のクソガキがどうかしたのかや？』

発情期のクソガキ。もう嫌な予感しかしない。一体、あの下等生物ニシゲンは、何をやらかし

たのだろうか？

「え、ええ。ゲヘナへの協力の見返りに、スレイン王国の法皇を暗殺する様に頼まれたのですが、いかがなされますか？」

『……』

ビクトーリアからの返事が無い。デミウルゴスの額には、滝の様な汗が流れ出る。

『かかつ！』

僅かながら、脳内に笑い声が響いた。この声はよく知っている。ビクトーリアの声だ。

『法皇を暗殺しろとな？ 面白い。殺せるのかや？ リリー・マルレーンを』

「リリー・マルレーン……」

デミウルゴスが、ビクトーリアの言った法皇の名を繰り返す。

その瞬間、空中に暗闇が出現し、何者かが転移して来た。

「殺せるのかや？ 妾を。法皇リリー・マルレーンを」

リリー・マルレーン。デミウルゴスの前に現れた法皇は、ビクトーリア・F・ホーエンハイムその人だった。

「ビ、ビクトーリア様！」

デミウルゴスの驚きの声に、リリー・マルレーンはいやらしく意地の悪い満面の笑

みを浮かべ

「何を言うておる。妾は、そなたの殺害対象じゃぞ。妾はスレイン法国法皇、リリー・マ
ルレーン。こうして顔を合わせるのは二度目じゃな、ヤルダバオト殿」

そう言つて、踊る様に宙を舞う。

デミウルゴスは、どんどんと自分の喉が渴いていくのを感じていた。失念していた。
考えが浅墓だった。自分は再び、煉獄の王を見誤っていた。

考えてみれば解つたはずなのだ。

偵察に出したシャドウ・デーモンを事も無げに倒し。あのニグレドの監視網を搔潜
者など、目の前の人物意外、自分は知らないのだ。

まず初めに法皇と疑うべきは、煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイムなのだ。そ
う、この者は法皇であつたからこそ、あの戦い、アベリオン丘陵での戦いに参戦したの
だ。

「は、ははっ」

からからに乾いた喉から、やつと絞り出された声は、歓喜の笑いだった。

「あはははははは！ 素晴らしい！ 素晴らしいです！ 脱帽致しました、ビクトーリア
様！ 流石はナザリックの神体！ すでに国を取られ、さらに！ その国の表も裏も支
配されているとは！ これも、ナザリックによる世界支配の一環でございますね！」

喜びに打ち震えながら、デミウルゴスは湧くし立てる様に賛辞の言葉を綴る。

「支配じやのうて、ナザリックを表に出す計画なのじゃがな」

そう言いながら、リリー・マルレーンは、ふふんと鼻で笑う。方やデミウルゴスの表情には、歓喜が張り付いていた。

「それでどうするのじゃ？ 妾を殺すのか？ 殺さぬのか？」

喜びの中に居たデミウルゴスにとって、水を浴びせ掛けられた様な心境だった。出来る事ならば、今すぐにもこんな事態を招いた発情期のクソガキを、恐怖候の下へと送ってやりたい心境だ。

「冗談は御止め下さい。ははっ」

胃が痛くなる。この神体は、本当に意地が悪い。そして、口も悪い。

「どうするのじゃ？ ほれ、言うてみよ」

よほど腹が立っているのか、ビクトーリアの追及は終わらない。デミウルゴスが何か答えを出さねば、この会話は朝日が登るまで続くだろう。そう考えるだけで背筋が寒くなる。

目の前の人物は、自身の創造主でさえフルボッコにした人物なのだ。デミウルゴスは必死で頭を回転させる。何か良い案は無いかと。暗中模索の中、デミウルゴスの脳裏に光が灯る。

「ビクトーリア様」

「なんじゃ？」

「依頼は失敗、と言う事にされてはいかがでしょうか」

「デミウルゴスの意外な回答に、ビクトーリアは興味深げに首を傾げる。

「ほう。ナザリックの威光を第一に考えるうぬにしては、珍しい回答じゃな」

「いいえ。これもナザリックの威光を高める為の処置で御座います」

「失敗、と言う結果が？」

「ええ。あの発情期のクソガキは、一時的にはこちらを甘く見て来るでしょう」

「そうじゃな」

「しかし、実態はどうでしょうか？ 自分が殺して欲しいと願った人物が、自分が頼ろう

とした組織の神である人物だった。それを知った時、あの発情期のクソガキは、どう思

うのでしょうかねえ」

言つてデミウルゴスは、ビクトーリアと同じような意地の悪い笑みを浮かべてみる。

「なるほどのう」

ビクトーリアの目が細められる。

此の瞬間、デミウルゴスは叱責を覚悟した。焦っていたとはいえ、あまりにも幼稚な発想だった。だが、それは杞憂に終わる。

「ふふん。絶望に染まる顔が見たいか。悪魔らしい趣味嗜好じゃ。良いじやろう、好きにするが良い」

デミウルゴスは、ほっと息を吐いた。とりあえずは何とかはなった、と。だが、相手はビクトーリア。これだけで終わる訳が無い。

「今回連絡を怠ら無かった事は、褒めてやろう」

「おお、ありがたき幸せ」

「じゃが、前回報告が無かったのは、何故じゃ?」

前回? その言葉でデミウルゴスの表情筋が痙攣をおこす。一体、どれが前回なのだろう。アベリオン丘陵での戦の事であろうか? それとも……。

「うぬらが、娼婦を殺害した件じゃよ」

デミウルゴスの額からは、一旦引いていた汗が滝の様に流れ出す。

「ふん。どうせ、ゲヘナに妾が参加せん予定であつたせいじやろ」

「ま、誠に……」

短く呟かれたデミウルゴスの言葉に、ビクトーリアは溜息を零し

「デミウルゴスよ」

「は、はい」

「うぬは知恵者じゃ。それは妾も認める」

「あ、ありがとうございます。御座います。ビクトーリア様」

「じゃがな」

来た。そう思ったデミウルゴスは、背筋を直す。

「うぬの情報収集は、一方的過ぎる。娼婦の件にしても、王国戦士達が保護したのは知っておつたのじゃろう？」

「は、はい」

「ならば、何故前を遡らんかった。遡れば、セバスが関係していた事に気付けたはずじゃが？」

「そ、それは……」

デミウルゴスは答える事が出来なかつた。答えるどころか、答えその物がみつからないのだ。

「デミウルゴス。今回の件を心に刻め。この失態は、うぬが人間をあまりにも軽く見ていた為起きた事象じゃ」

「下等生物を、ですか？」

「左様。ニンゲンを下等生物と軽んじた為に、ナザリックに汚点を、恥をかかせたのじゃ」

「わ、私が、ナザリックに汚点を……」

「そうじゃろう？ アインズまで担ぎ出して、セバスが助けた娘の付属品を守れなんだのじゃからな。これで、世界征服などと、へそが茶を沸かすわ」

「返す言葉ありません」

デミウルゴスは、ガツクリと肩を落とす。知らず失態を犯していた事を恥じているのだろう。その、あまりにも悲痛な表情を垣間見、ビクトーリアは何度目かの溜息を洩らす。

「一つ勉強になったであろう？ 実際にナザリックに被害が出てからでは遅かったのじゃ、タイミング的にはギリギリセーフ、じゃな」

「ありがとうございます、ビクトーリア様」

そう言つて、臣下としての礼を取る

「この事は、報告はせん。良いな？」

「お、御心使い、感謝いたします」

「その礼、と言つては何じゃがな」

「はい？」

「妾の事も暫し黙っておれ」

「ビクトーリア様の事を、ですか？」

デミウルゴスの問いに、ビクトーリアは一度頷き

「法国の法皇は、今だ正体は不明。良いな？」
「畏まりました、ビクトーリア様」

王の帰還

くすむ楼閣

城塞都市エ・ランテル。そこに存在する宿の中で、一際威厳と格式を誇る黄金の輝き亭。その一室のドアが、控え目に、礼を持って叩かれた。

「入れ」

部屋の中からは、低く、重みのある言葉で入室許可の声が響く。

「失礼します」

凜とした硬質な声と共に、女は敷居をくぐった。

「モモンさ——ん。書簡が届いていました」

「……………たまに出るな、それ」

「すみません」

「いや、良い。それで、書簡とは？」

「こちらになります」

そう言つて女は、全身鎧フルプレートの男に数枚の巻物を渡す。入室して来た女、名はナーベと言う。

書簡を受け取った全身フルプレート鎧の男はモモン。このエ・ランテルを中心に活躍している冒険者である。その実力は折り紙つきであり、僅かな期間で冒険者の最上位クラス、アダマンタイトまで上り詰めた者達だ。

男、モモンは書簡を受け取り、封蠟を外し目を通す。

「ふむ」

「どうか致しましたか？ モモンさん」

「依頼だ」

「依頼？」

ナーベは首を傾げる。

自分達は冒険者だ。依頼書が回って来る事など日常茶飯事のはず。なのに、目の前のモモンは、それを不自然に感じている様に見える。

「あ、あの、モモン様」

「モモンだ！」

「モ、モモンさん。依頼書には何が？」

問いかけるナーベに、モモンは僅かに口を噤みながらも依頼書の内容を口にする。

「ナーベ。王都の東に位置する、エ・レエブルと言う都市を知っているか？」

「は、はい」

「その領主である、レエブンなる人物からの依頼でな、何やら近く物騒な事が起こるか
ら、我々に来て欲しいそうだ」

モモンはゆつくりと言葉を紡ぐが、その言い回しは懐疑的に見えた。だが、一方の
ナーベには、字面通りの依頼に聞こえた。

「モモンさんは、この依頼に裏があるか?」

ナーベは思い切つて、問いかけてみる。その言葉に、モモンは若干緊張感を解いた様
な口調で答えて来た。

「そうだなあ。二つほど可笑しな点が見受けられる」

「二つ、ですか?」

「そうだ。物騒な事が起こる場所が、自分の領地では無く王都、と言う事だ」

「王都、ですか?」

「ああ。それに加えて、最も疑わしいのがコレだ」

そう言つてモモンは、数枚ある羊皮紙の内一枚をナーベに渡した。

受け取るとすぐに、懐から解析眼鏡を取り出し、書簡を読み進めて行く。最後の行を
読み終えたナーベだったが、首を横に傾げた。何も可笑しな点は見つからなかったの
だ。

「モモンさん。不敬を承知でお聞きしますが、私には不審な点が見当ら無いのですが?」

そう言うナーベに、モモンは僅かに笑う様に息を漏らし

「文字では無い。書簡の一番下に有る紋様だ」

そう言われて、ナーベはそこへと視線を向ける。

「これは……蝶、でしょうか？」

そう、そこには蠟の上に、指輪だろうか、に刻まれた蝶が転写されていたのだ。封蠟の印とも違う印象が。

「うむ。これは恐らく暗示だな」

「暗示、ですか」

「ああ。何者かがレエブンなる人物を使い、我々を王都に導こうとしている。……いや。王都で起こる騒動に、加担させようとしているのだろう」

「では、その者が敵、と言う事でしょうか？」

ナーベの言葉に、モモンは沈黙で返す。そうだ、とハッキリと言い切れる理由が見当ら無いからだった。

そしてもう一つ。書簡に押された蝶の印象。

「蝙蝠、狼、狐、猫、蜘蛛、そして蝶」

「モモンさん、それは？」

「うむ。この六つの動物は、聞けば何て事無い様に思うが、私達の世界、そうYGGDR

ASSILでは別の意味を持つ物なのだ」

「別の意味、ですか？」

思い出す様に語るモモンに、それを興味深そうに聞き入るナーベ。

「そうだ。この六つの象徴は、ある集団の一員である事を意味する」

「……集団？ それは？」

「魔女の夜明け、だ」

魔女の夜明け、その言葉にナーベは鋭く反応する。

「そ、それは、ビクトーリア様の……」

「そうだ。そして、蝶はビッチさんを意味する紋章でもある」

「では？」

ナーベの問いに、モモンは右指をそのフルフェイスヘルメットのあご部分に寄せ、暫しの間考えると

「来い、と言っているのだろうか。あの魔女が」

そう結論を下した。



く王都・某所く

「集まりが悪い様だな」

薄暗い部屋の中に置かれた、円卓の一席に座る男が、不機嫌そうに呟く。

「ああ。奴隷部門と薬物部門が欠席だ」

最初に言葉を発した男の、隣に座る男が端的に答える。

「理由を知る者は？」

最初の男が口を開く。どうやら、この男がこの場、王国の裏を支配する組織、八本指の定例議会の議長の様だ。

しかし、この問いに答える者は存在しなかった。だが僅かな事実と、それから推察される事柄を語る者は居た。

見事な褐色の体軀。その肌に描かれた、数多くの刺青。剃り上げられた頭髮に、鋭い眼光。警備部門を統括する男。名は、ゼロ。

「ウチの所のサキュロントが姿を消した。その絡み、じゃねえのか？」

「巡回使のスタッフアンも同様だと聞いたが？」

「ふむ。コツコドルにヒルマ。六腕のサキュロントに巡回使のスタッフアン、か。繋

「がりは……」

「あの商館、ですな」

ゼロの言葉に導かれる様に、他の者も自分達が知っていた情報を開示して行く。それによって、バラバラだった積木が徐々に形になって行った。

「では、そのバラした従業員と執事服の男のトラブルが原因だと?」

「そうでしょうな。それを起因として、小銭目当てで動いたスタッファンに、コツコドールとサキュロントが同調した、と」

「しかし、何故ヒルマまで?」

「お忘れですか? あの商館の商品達に言う事を聞かせる薬は、何所から仕入れているのかを」

「成程。そう言う事か」

議長である男が、結論に行きついた、と口を開く。

「どう言う事ですか?」 議長

「我々八本指に敵対する勢力、もしくはは組織が、この王都の市場を狙っていると言う事だろ?」

「その根拠は?」

「最も金になる部署の責任者が狙われている事だ」

「では、賭博部門が無事なのはどう言う理由だ？」

この問いに、議長は少し口を噤み考えたと

「賭場は大々的に設置すると、露見しやすい。そちらは何れ、と言う事かもしれない。もしくは、我らの賭場を狙っているやもしれん」

議長の言葉に、場の全員が成程、と頷く。

「じゃあ、どうするんだ？ 黙って指をくわえているのか？」

これはゼロの言葉だ。警備部門、荒事を主とする彼としては当然の言葉。このいちやもんとも言える言葉に、議長は首を振る事で答える。

「いや。それでは我らが舐められる。原因となった商品を取り返し、奴らの裏を引き吊り出す。頼めるかな？ ゼロ」

「ああ。六腕に任せておけ」

そう言つてゼロは口角を上げた。



「聞いたか？ デミウルゴス」

「はい」

夜の闇に染まる王都を一望に出来る神殿の鐘付き塔に、二人の姿はあった。

先の言葉を発した人物、ビクトーリア・F・ホーエンハイムの表情は険しい物だ。

「あれだけの注意喚起をして置いたのに、この始末じゃ。我らはそうとう甘く見られておる様じゃな」

「誠に嘆かわしい事で御座います。矮小な組織同士の小競り合い、とでも勘違いしたのでしょうか？」

「多分、の」

言葉短く肯定したビクトーリアの瞳が、爬虫類を想像させる物へと変化する。最早慈悲は尽きた、と。

「アインズは何と言っておる？」

「同じで御座います。今のビクトーリア様と」

「ゲヘナを速める。出来るか？」

出来ないとは言わせない。そんな空気を纏いながら、ビクトーリアはデミウルゴスに命令を下す。だが、そんな事はデミウルゴスにとっては織り込み済みの事であった。

「セバスから連絡を受けた時に、何時如何なる時にも対処出来る様にしております」

「ほう。人間の方はどうじゃ？」

「そちらも抜かりなく。本日の昼間に発情期のクソガキの手筈で、冒険者を集めたそうです」

デミウルゴスの采配に、ビクトーリアは満足げに首を縦に振る。

「決行は残されていた紙切れに記されていた時間、で宜しいですね？」

「無論。して、人員はどうなっておる？」

デミウルゴスの迅速の対応に、ビクトーリアは少し気が晴れたのか、日常会話でもする様な気軽さで問いかける表情を見るに、デミウルゴスも同様の様だ。

「はい。今回、事に当たる人員は、シャルティア、マールレ、プレアデスに私。そしてセバスとなります。ですが、セバスは下等生物ニンゲンを奪還ハ本指したい撤退となりますので、先に言ったメンバーが事に当たります。その後、愚か物達を清掃致しましたら、それらの連行と物品の運送にマールレが当たりますので、ゲヘナへの参加は実質プレアデスと私、と言う事になります」

「うむ。良き配置じゃな。流石はデミウルゴス」

「いいえ。この人選は、アルベドの物です。御褒めの言葉ならば、是非アルベドに」

「そうか。後で声を掛けよう」

「アルベドも喜ぶ事でしょう」

確認作業とでも言うべき一連の会話が終了するのだが、ビクトーリアには一点腑に落ちない事柄があった。

「しかしデミウルゴスよ。シャルティアの名が出てはおらんかったのじゃが、あ奴の役目は何じゃ？」

単純な疑問。そんな調子でビクトーリアは聞いたのだが、デミウルゴスの表情は暗く、固まった。その顔を読み取るに、言いにくそうな事情がある様に思える。

「はつきりせえ。何を言われても妾は怒らんぞ？」

そう言われ、デミウルゴスは渋々、と言った感で口を開いた。

「……ゲート要因、です」

「はあ？」

「……退去時と、ビクトーリア様の盛上げ時でのゲート要因、となっております」

この言葉を聞いた瞬間、ビクトーリアの表情は、絶望を現したかの様に歪む。それは、悲しみから来る物では無く、哀れみを映す物だった。

「あ奴は、それで良いのか？ 納得しておるのか？」

「……い、いえ。納得は……どうなのでしょう？」

煮え切らないデミウルゴスの言葉に、ビクトーリアは盛大に溜息を吐き、右の指をこめかみに当てる。

「伝言」
メッセーシ

魔法を発動すると、すぐに相手と繋がった。

「あら？ お姉様ではありんせんか？ それで、どこへ転移門ゲートを繋げれば良いんでありんすか？」

一言目でこれだった。

「う、うん。まあ。う。転移門ゲートの注文では無い」

「ほれ？ それでは何用でありんしょう？」

「うむ。ゲヘナに当たり、少々シナリオの変更があった。うぬは戦闘要員として、アインズズの側に立つてもらいたい。良いか？」

ビクトリアの言葉が終わるが、シャルティアからの返事は無かった。

暫しの沈黙。さて、シャルティアは何と答えるか？

「ぐすつ。ずずつ。あ、あじがどうごじやいまじゅー！ ぐしゅー！ じやるでいあ・びゅらつどぼーじゅん、いのじがげでぎゃんぱりましゅー！ あじがとう、おねえじやまー！」
大泣きだった。絵に描いた様な大泣きだ。自分のキャラクター性でもある郭言葉を忘れてしまう程の。

「う、うん。詳細はデミウルゴスに伝えておくからの。ま、まあ。頑張りなんし」

「あじがとう、おねえじやまー！ あじがとう！ あじがとうごじやいまじゅー！」

そんな感じでビクトーリアは伝言メッセージの呪文を終了した。

「妾の手札を三枚切る。シナリオの修正はこうじゃ」

この後、三十分程を掛け、ゲヘナのシナリオは再度修正された。

王国を舞台にした茶番劇まで後僅か。

薔薇と蜘蛛

「えいー！」

豪華な屋敷の扉の前で、マーレは力強い言葉と共に杖を地面に突き立てる。その力に導かれ、地面から多数の鳶が屋敷をからめ取った。窓を、戸口を塞ぎ絡まったその鳶は、まるで檻の様に見える。

「じゃあ、行きましようか」

「はあーいー！」

マーレの言葉に、エントマが元気良く答えた

マーレはゆつくりとドアノブを握り、そつと回す。鍵が下りていると思ったそれは、驚くほど軽やかに回る。

「あれ？ 鍵が掛っていない」

小さな眩きと共に、静かに扉を押し開く。

解き放たれた扉の隙間からは、人が生活する中で生じる匂いでは無く、別の物がマーレとエントマを包み込む。鉄にも似た、濃厚な生臭い香りが。

それを認識しつつ、マーレはぐつと扉を押し込んだ。

屋敷の中は……想像通りの光景であった。壁には黒い飛沫が飛び散り、床に至ってはドロリとした液体が広がり、ニンゲンであった物があちらこちらに散乱していた。何人分の破片なのかも解らぬほど大量に、手が、足が、頭部が、内臓が散乱する。

「うわあ。ど、どう言う事なんでしょうか？」

惨状を目の当たりにし、疑問を口にするマールレの後で、ジュルリと言う何かをすすする様な音が聞こえた。静かにマールレは、音のした方に視線を向ける。そこには着物の袖で、人間で言うあごの辺りを拭うアントマの姿があった。

「いけない、いけない」

先程の音は、アントマが涎をすすった音だった様だ。その事実には、マールレは苦笑いを漏らす他なかった。

「あ、あの、アントマさん。おやつはお仕事が終わった後、で良いですか？」

「はあーい」

マールレの提案に、アントマは両手を上げた承の意を告げる。

「そ、それじゃあ、僕は二階を見てきますね」

「りよーかいしましたあ」

その言葉を最後に、二人は別れ屋敷の捜索に乗り出した。

アントマは、階段を上って行くマールレを見送ると、足元に転がる男性と思われる足を

手に取り

「少しくらいならいいよねえ」

そう呟きながら囁り付く。

「うん！ やつぱり、ダイエツトにはお肉は男のだよねえ。おっと、いけない。お仕事、お仕事。みんなあー！」

言つて左袖をブンブンと振る

その合図を見取り、屋敷の外から一メートルはあろうかと言う甲虫が何匹も現れた。エントマは、その甲虫達と向き合い

「はい。みんなでお仕事」。部屋の中にある物を、全部持つて行つてねえ」

命令一過、甲虫達は各部屋へと散つていった。

残されたエントマはと言うと。

「わたしは監督作業。……もうちよつといいよねえ」

そう言つて二本目の足へ手を伸ばした。

方やマールと言えば、二階の部屋を一つずつ確認して回っていた。一部屋、寝室の様な部屋を見つけたのだが、誰かを発見する事は出来なかつた。

「可笑しいなあ？」

そんな独り言を呟きながら階段を降りると、エントマが荷物を持った甲虫達と外へと

向かう所だった。

「あ、あの。エントマさん」

マールレが声を掛ける。

その声に反応し、エントマが振り向いた。

「あ。マールレ様。二階はどうでしたあ?」

エントマの言葉に、マールレは二度ほど首を横に振ると

「ダメでしたあ。誰も居ません」

「一階も一緒でしたあ」

そう言つてエントマはブンブンと袖を振る。

「?」

その姿を見て、マールレは首を傾げる。

微妙に、いや、妙にエントマの腕が長いのだ。

目をこすり、再度エントマを視界に納める。それによつて、違和感の正体が解つた。

エントマは自身の手に、床に落ちていたニンゲンの腕を掴んでいたのだ。それも、両手とも。

「あ、あのー。エントマさん。そ、それは?」

マールレの問いに、エントマはニンゲンの腕を振り

「これですかあ？ おやつですうー」

元気に答えを返す。

「あ、そうですか。それじゃあ僕は、受け入れの手筈を整えますので、ナザリツクへ戻ります。こちらの事はお願ひしますね」

そう言つてマールは、ペコリと頭を下げる。

「わかりましたあ。マール様もお氣をつけてえ」

同じ様に、エントマも可愛らしく頭を下げた。



マールを見送り、エントマと甲虫達は荷造りと出荷作業に盛を出す。もそもそと甲虫達が屋敷を出入りし、屋外では人を超える大きさの羽虫達が荷を受け取り飛び立つて行く。

その作業も終わりを迎えるころ、背後から声が掛けられる。

「よお。何やつてんだ？」

気軽に、何でも無い様に、軽い挨拶の様に掛けられた言葉だったが、それには酷い殺気が含まれていた。

「なにつて？ おさんぽー！ ただの、おさんぽー！」

だが、エントマは気にするでも無く振り返り言葉を返す。

「こんな夜にか？」

声を掛けて来た下等生物^{ニンゲン}？ 食人鬼^{オーガ}？ が繰り返し疑問を告げる。

「そう、さんぽー！ 優雅にさんぽー！」

「じゃあ、その手に持っている物は何だ？」

そう言われて、エントマは改めて自分の袖口を見つめる。そこには、当然の如くニンジンの腕がブニヨンブニヨンと揺れていた。

「これ？」

エントマは、手に持つ物をさらにブニヨンブニヨン揺らしながら問いかけた。それを見つめていた良く解らない種族の剛の者は、ゆっくりと頷く。

「これはねえー。これはあ。……おやつ？ さんぽのおやつー！」

ふざける様な、茶化す様なエントマの言葉に、良く解らない種族の剛の者は無言でウオー・ピックを振り下ろす。だが、この攻撃をエントマはひらりとかわす。

「もー！ 危ないなあー！」

そして両の袖をブンブン振りまわし、抗議の意を示す。

「危ねえだあ？ こっちは殺す気で行ってんだ。覚悟しろよな、人喰いの化け物！」

叫び、良く解らない種族の剛の者のウォー・ピックが何度もエントマを襲う。

「もー！ しつこいなあ！」

エントマが言葉を発した瞬間、良く解らない種族の剛の者のウォー・ピックがすんでの所で止められる。

「何だ」

自身の得物の先を凝視する良く解らない種族の剛の者。そこには、盾の様な物によって力を止められたウォー・ピックの槌部分が。

「何だ？ 急に盾が。……魔法か？」

そう呟いた瞬間、盾が律動しウォー・ピックを弾く。

「つつ！ 何だ！」

視線に止める化け物の盾がズルリと動く。

「硬甲蟲。私はねえ、虫使いなの。剣刀蟲！」

エントマの言葉に呼応し、空中から一匹の虫が飛来する。

その羽虫は、躊躇する事無くエントマの腕に止まり、前足を重ね合わせる。擬態、とでも言えればいいのだろうか？ 羽虫は剣へと姿を変える。

「ほう。なかなか面白れえ事をするじやなねえか」

「何時まで、そんな事が言えるかなあ！」

言葉を交わし、エントマと良く解らない種族の剛の者は激突する。

良く解らない種族の剛の者は、何度もウオー・ピックを振り下ろし、薔ぐが、その全てをエントマはステップでかわし、または硬甲蟲で弾く。

何合と打ち合うが、一行に決定打が打てない事に、良く解らない種族の剛の者からは焦りが見え隠れする。その時、良く解らない種族の剛の者の背後から下等生物ニシゲンの聲が響く。

「ガガーラン！ 加勢する！」

エントマは声の方へと視線を巡らせた。

良く解らない種族の剛の者、ガガーランと言うらしい名前？ 種族？ の後方には二体の下等生物ニシゲンの姿があった。一体は、髪をナーベラルの様に結った雌。もう一体は、貧弱な体型をローブで隠した仮面の雌？

「お仲間？」

エントマは動きを止め、ガガーランと言う種族の者に問いかける。

「ああ。若干卑怯だが、これでテメエも御終いだ」

「うーん。三対一かあ。面倒だなあ」

ガガーランと言う種族は、勝ちを確信し、ニヤリと笑うのだが、エントマは首を傾げるに留まる。

「そうだあ！ 式蜘蛛符う！」

言葉と共に、左手に握った符を四枚、ガガーランと言う種族の背後に投げつけた。地面に落ちた術符は、姿を巨大な蜘蛛へと変える。

「あんだ達の相手は、その子お」

茶化す様なエントマの言葉に、仮面の雌は憤る様に言葉を漏らした。

「舐めてくれる。蟲殺し！」

ヴァーミンベイン

仮面の雌が右手を掲げ、力ある言葉を紡ぐ。その言葉に呼応し、正面に霧の様な物が噴出される。霧に包まれた蜘蛛達は、徐々に力を失い、最後には痙攣し砂の粒へと消える。

「……何をした？」

エントマの口調が変わる。本能が、今の魔法に警鐘を鳴らしていた。

「ふふっ。何を怖がっているんだ？ ただの殺虫魔法だぞ」

エントマの言葉に、気を良くしたのか、仮面の雌はどうだとばかりにぺったんこの胸を張る。多分、仮面の下でドヤ顔をしているのだろう。

それが理解出来るからこそ、エントマの気分はこれでもかど地に落ちる。

「ころすう。もう、ころすう」

眩きながら、眼前の敵へ突撃を開始した。だが、相手もそれを許す事はしない。

「ガガーランは右！ ティアは左！ 私の魔法が当たった瞬間に仕掛ける！」

「了解！」

「クリスタル・ランス
水晶騎士槍」

力ある言葉に呼応し、幾本の水晶の槍がエントマを襲う。

その攻撃を、エントマは左右の蟲で弾く。

だが、同時に左右から下等生物ニンゲンの攻撃が迫る。上からはウォーピックが振り下ろされ、前方からは刀の光刃が、胴を薙ぐ様に迫る。

弾くか？ 止めるか？ それともかわすのか？

エントマは即座に次の行動を思い描く。だが、迫りくる攻撃に対し、決定が付けられずにいた。理由は只一つ。情報不足。

敵の持つ武器が、どれほどの威力を内包する物かが解らない。

次に、敵がどれほどの攻撃力を持っているのか解らない。

自分より上なのか？ それとも下なのか。自分に対して、傷を付けられる者なのか？ はたまた低レベルの雑魚なのか。全てが未知であった。

ガガーランと言う種族の攻撃は止める事が出来た。だが、それが本気の一撃であった

かどうかも不明。

エントマの思考が停止する。

この瞬間、エントマの脳裏を占める思いは只一つ。

無能と思われて死にたくない。支配者であるアインズに、功を捧げぬまま死にたくない。そんな思いだった。

「蜘蛛子ちゃん、刀を弾いてくれるかなあ」

後ろから、妙に甘ったるい声が入る。エントマに掛けられる。

エントマはすぐに反応し、硬甲蟲で刀を弾く。それと同時に、ガガーランと言う種族の者が後方へと吹き飛んだ。何者かが蹴り飛ばした様だった。

エントマの隣に、声の主が並び立つ。

エントマは知っていた。この者が敵では無いと言う事を。自分の事を蜘蛛子と呼んだ事によって。

「くそっ！ 誰だテメエは！」

ガガーランと言う種族の者が、胸を押さえながら叫ぶ。

敵である三人の目、合計六つの瞳がエントマの隣に立つ者に注がれていた。

ワンピース水着の様な革鎧に、革製のブーツにグローブ。短い刀を両手に持ち、左手には道化師の様な彫刻が刻まれたバックラー。そして、表情を隠す目元だけくりぬかれ

た白い仮面。その仮面には、大げさにまつ毛が彩られ、左頬の辺りに涙を思わせる意匠が描かれていた。

「何者だ？ 敵か？」

仮面の雌が再度問い詰める。

「あたし？ うーん……」

（本名はまずいよねえ。あとはあ、ビクトーリア様の名前もまずいかあ）

乱入して来た女は僅かに逡巡し

「わたしはコロンビー又つて言うのお。愛の奴隷でえ、そんでもってお掃除の達人。お見知り置きを、蒼の薔薇の子豚ちゃん」

ケラケラと笑いながら名乗りを挙げた。

反逆者

「さあつて、どーする？ 蜘蛛子ちゃん」

コロンビーヌの問いかけに、エントマは気分を害したとでも言う様に袖を振りまわし「不敬ー。蜘蛛子つて不敬ー」

抗議の声を上げる。

その反応に対し、コロンビーヌは困った様に首を僅かに傾げ

「んー。でもさああ、名前言っちゃうと、あたしの主人にも蜘蛛子ちゃんの主人にも迷惑かけちゃうじゃない？ 一応隠密任務な訳だし？」

論す様に正論を口にした。

この言葉に、エントマは「ぶー」と不満げな声を上げるが、そこは戦闘メイド プレアデスの一員。すぐに気持ちを切り替え、コロンビーヌに指示を出す。

「それじゃあねえー。あのちんちくりんの魔法詠唱者をおねがい」
マジックキャスター

「りよーかああい」

場にそぐわない軽い口調でそれぞれの分担を決め、二人？ は攻撃の態勢を作る。

「あちらさんの話し合いが終わったみたいだぜ」

「ああ。私の相手は、あの仮面の女のようだ」

「仮面同士お似合い。妖しさ大爆発」

ガガーラン、イビルアイ、ティアは言葉を交わし、相手同様に得物を構えた。どちらかとも無くゆつくりと歩き出し、徐々にスピードが増し、武器と魔法が交錯する。

「水晶騎士槍！」
クリスタル・ランス

イビルアイが魔法を放つ。だが、コロンビーヌは、飛来する水晶騎士槍を見つめながら口角を上げる。

「……流水加速」

咄く様に囁かれた言葉と共に、コロンビーヌの姿が掻き消える。

「……即応反射」

囁く様な声と共に、イビルアイの放った水晶の槍が一本、また一本と霧へと消えていく。

「な、何が……」

イビルアイの口から、驚きの言葉が漏れる。目の前で起こっている事象が、理解出来ても、許容出来ないのだ。魔法を防ぐのでは無く、切り刻む、などと言う事は。

そんな、状況に困惑するイビルアイの眼前に、嘲笑うかの様にコロンビーヌが迫る。

相対する仮面と仮面。

「信じられない、つて？　ざあーんねんだねえ、ちびっこ」

(まあ、種も仕掛けもあるんだけどねえ)

そう言つて胸に揺れる九本指ナインフィンガーの首飾りを揺らしながら、挑発、としか思えない言葉をイビルアイに浴びせ掛ける。

「舐めるな！　一二重最強化——　グフツ！」

イビルアイが再度魔法を行使しようとした瞬間、腹部に鋭い痛みが走つた。一瞬の内にコロンビーヌが近付き、イビルアイの腹部に蹴りを入れたのだ。

「遅い」

冷めきつた声が、コロンビーヌの口から洩れた。それと同時に、イビルアイは後方へと吹き飛んだ。

「蒼の薔薇だかアダマンタイトか知らないけど……なめんじゃねえぞ。クソガキ。さーて、蜘蛛子ちゃんの方はどうかなあ？」



「何だよこいつは？ ナリの割にカテエぞ！」

「……たぶんあのメイド服、ガガーランの鎧並の強度がある」

「マジかよ！」

ガガーランのぼやきに、ティアが冷静な分析を返す。

一方エントマは、相手の分析を第一とし防御に徹していたが

「こんなもんかあ。じゃあ、これいらなーい」

そう言つて右手にある剣刀蟲を開放する。そして、それと同時に

「おいでえ！」

エントマの呼びかけに応じ、一匹の巨大な蟲が這い寄る。

長さが十メートルを超えるムカデが姿を現し、エントマの右腕に絡みつく。千鞭蟲、
と言われる蟲である。

「うわあ！ によるによるは苦手なんだよ」

弱音を吐くガガーランに

「ドラゴンも裸足で逃げだすガガーランに、苦手な物が？ 大丈夫。それを克服すれば、
新たな進化の可能性が産まれる」

ティアが茶化す様な合の手を入れた。

余裕、などは無い。

だが、それでも馬鹿な会話で気持ちを落ち着かせようと、冷静さを保とうと心得る。絶えずメンタルを最適化する。こう言う行動が、彼女達を最上級冒険者、アダマンタイトと言う地位に昇りつめた理由かもしれない。

しかし、それは冒険者としての話だ。今、目の前にいる存在は彼女達が今まで相手にして来た者達、化け物達とは桁が違う。ナザリツクの最終防衛線を守る戦闘メイド プレアデスが一人なのだ。

「ティアー！」

「解った。爆散符！」

ティアーはエントマ目掛け、数枚の符を投げつける投擲させた符は、一直線にエントマ目掛け直進し爆発を起こす。

「今だ！」

爆発により煙幕の様な煙に包まれたエントマ目掛け、ガガーランがウォーピックを振り下ろす。

だが、その判断は少し甘かった。

振り下ろされるウォーピックよりも早く、煙を突き破り千鞭蟲が姿を見せる。そして、その強靱な頰はガガーランを銜え込む。その勢いのままガガーランを上空へと持ち上げ、しなる鞭の如く地面へと叩きつける。

「グフッ！」

その衝撃で息が詰まりガガーランの動きが止まる。その瞬間を、エントマは見逃さなかった。

「雷鳥符う！」

放たれた符は、空中で青白い放電を放つ鳥となり、ガガーランを襲う。

「くそっ！ 間に会え！ 不動金剛盾の術！」

エントマが放った符術は、すんでの所でティアによつて阻まれる。

「うーん。なんで邪魔するかなあ」

苛立ちを顔にするエントマを余所に、ティアはガガーランに駆け寄り声を掛ける。

「すまねえ、助かったぜ」

「遠慮無用」

御互い視線を合わせ、状況を確認するが、決して良い方向へ向いているとは言えない。

「イビルアイは？」

「苦戦している様だ」

ガガーランの問いに、ティアが答える。エントマに注意しながらも、その瞳にイビルアイを映す。二人が見つめる先では、地に伏せるイビルアイの頭部を踏みつけるコロンビーヌの姿があった。

「う、嘘だろ？」

「イビルアイが……」

ボーゼンと見つめる事しか二人には出来なかった。だが、そんな甘い状況を許す者など此処には居ない。

「何をボーつとして居るのかなあ」

千鞭蟲をユラユラとうねらせながら、エントマが迫つて来ていた。

ふざけた格好をしたメイドと、コロンビーヌと言う仮面の女。

圧倒的な強者二人を相手に、アダマント級級の冒険者は手も足も出なかった。最早此処まで。ガガーラン、ティアは元よりイビルアイですら死を覚悟した。

その時、コロンビーヌの頭上に影が射す。その異変に気付き、コロンビーヌはバックステップで回避する。

ズドン！　と言う衝撃音と共に何か落ちて来た。いや、何者かがこの戦いに参戦したのだ。

漆黒のフルプレートアーマーを着込み、二本の大剣を背負いし者。アダマント級級の冒険者。名は漆黒のモモン。

「こんな夜更けに随分と楽しそうだな。はて、俺の相手はどちらかな？」

威風堂々と、それでいて飄々とした感じでモモンは口を開く。

「おま、いや、あなたは、漆黒のモモンとお見受けする。私は同じアダマンタイト級冒険者、蒼の薔薇のイビルアイ。頼む、力を貸してくれ！」

言葉を掛けられ、モモンはイビルアイに視線を向ける。

「ほう。あなたが有名な蒼の薔薇の……。じゃあ、お前達が敵、と言う事だな？」
そう言つてモモンは、右手に持ったグレートソードをコロンビーヌに向ける。

「へえ。アダマンタイト級冒険者ねえ」

モモンの言葉を、コロンビーヌは嘲笑う様に受け止める。

「何がおかしい？」

モモンが、気分を害した様にコロンビーヌに言葉を返す。

「ええ？ だつてさあー、あなたが冒険者なんておつかしいんじゃない」

「どう言う事だ？」

コロンビーヌの意味深な発言に対して、モモンは回答を持つてはいない。この女が何を言っているのか、全く意味が解らない。一つだけ解るのは、あの魔女が、ビクトーリアが何かをたくらんでいる、と言う事ぐらいだった。

「どう言う事だあ？ ふざけてるの？ それとも……」

コロンビーヌは言葉が終らないまま一即座にモモンに切り掛る。キン！ と言う金属音を響かせ二人の刃が交錯した。

「いきなり、だな」

「ふーん。前よりは出来る様になっているじゃない。魔界の反逆者さん」

「！」

モモンは言葉に詰まる。

魔界の反逆者？ 一体ビクトーリアは何をしようとしているのだろうか？ どんな

絵図面を書いているのだろうか。

コロンビーヌを視界に収めながら思考するモモンの前に、この茶番劇の、もう一人のシナリオライターが姿を現す。バサリ、バサリと蝙蝠の様な翼をはためかせ、その者はこの地に降り立つ。赤い、見た事も無い衣装に身を包んだ仮面の者が。

「お久しぶりですね、魔界の反逆者モモン。いえ、こう言いなおしましょうか。裏切り者、アインズ・ウール・ゴウン」

最強の称号

（王国某所）

四方を石壁で囲まれた、ひんやりとした、それでいてどこかすえた空気が流れる場所に一人男が居た。

どつかりと椅子に腰掛け、瞼を閉じたその姿勢は、何かを心待ちにしている様に見える。

いや、実際に男は待っていた。自身の力を鼓舞する事が出来る事象を。自身の力を振るえる時を。自身が人間種最強と証明する機会を。

その為に少女をさらった。

自身の部下をさらい、その部下が護衛に付いた同僚の商館を壊滅させた者と戦う為に。

男の名はゼロ。

王国の地下に巣食う闇組織、八本指の一人。六腕と呼ばれる、荒事を生業とする者達の頭である。

精神を集中させ、豪邸と言える屋敷の地下で時を待つゼロの耳に、カツンと言う硬い

靴音が響く。

「誰だ？」

ゆつくりと臉を持ち上げながら、ゼロは視線の先に問いかける。

言葉の先には、漆黒のローブを纏った者が幻の様に立っていた。

ゼロはその姿を瞳に収め、幽霊ゴーストか？　とも思うのだが、それは間違いだった。目の前

の者は、地獄の扉を開く水先案内人、なのだから。

「俺は誰だ、と聞いているんだが？」

訝しげに、それでいて苛立ちを顕にしながら、ゼロは再び問いかける。

だが、目の前の者は何も答えはしなかった。その代わりに、懐から水晶を一つ取り出

し

「転移ゲート門」

・
眩く様に力ある言葉を紡いだ。

その言葉に呼応し、ローブの者の前に波打つ様な暗闇が現れる。

そして、その暗闇から産み出される様に何者かが衣ずれの音と共に姿を現した。

拘束服を思い起こさせる様な衣装。

左右で白と黒に別れた髪色。

髪とは逆の意匠を持つ虹彩異色。

・

スレイン法国の最高機密の一つ。

人間種最強の存在。

人類の守り手。

漆黒聖典 番外席次にして、法皇直轄部隊ナコト写本の隊長。
名を伏せし者、絶死絶命。

「あなたが、お爺ちゃんのお嫁さんをさらった愚か者？」

囁く様に、絶死絶命の唇が動く。

その声色は穏やかな物だったが、どこか憤りを感じさせた。

「嫁だと？ ああ、あの廃棄品の事か」

ゼロはわざと挑発的な言葉を口にする。目の前に居るのは、年端も行かぬ小娘。警戒する必要も、危険視する必要も無い。只、力でねじ伏せれば良いのだ。

メインディッシュ前の前菜。肩慣らしにはちょうど良い。薄ら笑いを浮かべながら、ゼロはゆっくりと立ち上がる。

だが、立ち上がり再びその視界に絶死絶命を捉えた瞬間、背筋に冷たい物が流れた。「廃棄品？ おおさまが、その名を持つて救おうとした者が廃棄品？ 度しがたいほどの恥知らずね」

言葉は平坦な物なのだが、その身に纏うオーラは怒りの色を示していた。

「ふん。こ、小娘が生意気な——ヴッ！」

「私にその名を言つて良いのは、おおさまだけ」

ゼロの腹部に、拳がめり込んでいた。

一体何があつたのか？ 絶死絶命との距離は、僅かにだがあつたはずだ。なのに、何も見えなかつた。

目の前に居たはずの女が次の瞬間、自分に拳を叩きこんでいた。

だが、耐えられない程では無い。腹筋に力を貯め、ゼロは攻撃の姿勢を取る。

「自信があつたみたいだが、この程度らしいな。フンッ！」

力強く、ゼロは拳を突き出す。狙いは女の顔面。一撃で血の花を咲かせるつもりだ。

しかし、その攻撃は届かなかつた。

絶死絶命の、その可憐な表情を映す顔の僅かに前。掌一枚の所でゼロの拳は止まつていた。

いや、実際に絶死絶命の掌によつて防がれたのだ。ゆつくりと指を折り、ゼロの拳を握り締めた絶死絶命は

「遅い。そして……軽い」

残酷な言葉を呟きながら、拳を握り締めた。

グシヤリ！、もしくはバキリ！ と言う心地の良くない音を立て、ゼロの右拳はあつ

さりと握り潰された。

「グツ、ガァァ」

ゼロは潰れた右手を庇う様に左手で包みこみ蹲る。

「どうしたの？ 掌が一つ潰れただけでしょ？ まだ、左手があるじゃない。肘も、足も残ってる。まだ戦えるでしょ？」

無慈悲かつ容赦の無い言葉を絶死絶命は口にする。

それに応えたのかは不明だが、ゼロの身体がゆっくりと起き上がった。

「お、俺は最強なんだ。ニンゲンサイキョウはオレ……だ」

まるで自分を鼓舞する呪文の様に言葉を呟きながら再度戦おうとゼロは立ち上がる。

だが、仕切り直しなどと言う生易しい事を許す程、絶死絶命は甘くは無い。

「そう。最強、なんだ」

「グワァー！」

ゼロの声が地下に響く。

その声と共に、再びゼロは地に這いつくばる事になった。

「立ちなさい。まだ、左腕と右足があるでしょ」

そう、言葉と共に絶死絶命はゼロの左膝を正面から蹴りつけたのだ。

それによって現在ゼロの左足は、あらぬ方向へと曲がっていた。いや、へし折られた、

と言った方が正しいだろう。

「立たないの？」

絶死絶命は再度ゼロに言葉を掛ける。

だが、ゼロは一向に立ちあがる気配を見せない。

「……俺が、俺が最強なんだ。……人間で最強なのは……俺なんだ」

呟く様に、自分に言い聞かせる様にゼロは呟く。そうしなければ、心が、自分が折れてしまう、とでも言う様に。

だが、そんな自己防衛も遙かな高みに立つ強者にとっては、哀れな戯言にしかならなかった。

「あんたさ、人間種最強とかいってるけど、……高みは遥か彼方なの解ってる？ 人間なんて矮小な種族の中で一番になっても、他の種族には何の意味も無い事解ってる？ 私が此処に来たのもそう。あんた程度の奴が、おおさまの姿を見る事すら意味の無い事だから」

「……王様、だと？ 一体どこの王だ？ 俺はランポッサなど容易く殺せる！ 皇帝だつて殺せる！ 一体どこの王が俺を殺せると言うのだ！」

もはや絶叫と言ってもいい物だった。ゼロの声が地下に響き渡る。そんな恫喝と言っても良い声に、絶死絶命は涼しい顔で真実を語る。

「おおさまは、おおさま。煉獄の王ビクトリア・F・ホーエンハイム様。あなた程度では、どんなに手を伸ばしても、恋焦がれても、振り向かせる事すら出来ない御方。ん？違うか。あんた達が振り向かせた。絶対に敵に回してはいけない人達を。二度も注意を喚起されたのに、あなた達は踏み入れた。化け物のテリトリーに。絶対強者の庇護する者に手を掛けた。この意味が解る？ 哀れな人？」

絶死絶命の言葉に、ゼロは言葉を失った。

コツコドールとスタツファンをさらい、今襲撃を掛けているのは、自分達と同じ地下組織の者では無いのか？

八本指のメンバー達の意見は、そう言う方向で固まったでは無いか。

廃棄品を連れ去ったのは帝国の商家の人間だったはずでは無いか。

誰も教えてくれなかった。

誰も知らなかった。

自分は何て愚かな事をしたのだろう。

自分は何て愚かなのだろう。

ゼロの頬を自然と涙が伝う。

その意味は、ゼロ本人ですら解らない。

悔しいのか、死にたく無いのか、それとも両方なのか。

だが、目の前にいる死を告げる者は冷酷だった。慈悲も無く、救いの言葉も無く、只、そう只この言葉を告げるのみであった。

「誰に喧嘩を売ったのか、死んだ後でも後悔しなさい。私はスレイン法国法皇直轄部隊ナコト写本の隊長、絶死絶命。では、ごきげんよう」

言葉と共に、ゼロの頭部を蹴り上げる。

その力は今までとは異なり、事も無げにゼロの頭部は胴体と別れを告げ、天井に潰れる様に張り付いた。

「はーあ。そんな恨めしそうな目をしちゃって、次に産まれる時は、ドラゴンにでも産まれる様に祈りなさい」

そんな別れの言葉と共に、絶死絶命は本来の任務を遂行する為の行動を開始した。

地下にある幾つもの部屋のドアを、手当たり次第に開け目当ての人物を探す。

三つほど開けた所で、絶死絶命は少女と邂逅を果たした。

奇麗な金髪に、どこか幸薄い表情。そして、仕立ての良いメイド服。

「あなたがツアレニーニャ？」

まるで興味が無い、とでも言う様に絶死絶命は本人確認の言葉を口にした。

「は、はい。………わ、わたし、が、ツア、れ、です」

「そう、良かった。じゃあ、お爺ちゃんが来るまで、一緒に待とうか」

絶死絶命の言葉に、ツアレは引き攣る様に驚きを顔にする。

目の前の女が言う事が本当なら、セバスが此処に来ると言う事になる。何故？

そんな言葉しか、ツアレの脳裏には浮かばなかった。自分の様な女を、何故に助けに来るのだろうか？

それに、この女性もそうだ。あの屋敷には、こんな人物は居なかった。ならば、誰かが指示を出し、自分の救出を指示した、と言う事になる。

一体誰が？

お嬢様が指示を出したのだろうか？

それとも、あのアインズ・ウール・ゴウンなる人物だろうか？

「……………あ、あの」

「なに？」

「あ、あなたは、だ、誰の……………」

ツアレがたどたどしく言葉を綴る途中で、絶死絶命は何を言いたいのかを理解した。

「わたしは別系統の命令で動いているの」

「べ、別系統？」

「そう、わたしの主人はビクトーリア様。ビクトーリア・F・ホーエンハイム様」

絶死絶命の口にした言葉で、ツアレの表情が一変した。

ビクトーリア・F・ホーエンハイム。

この世界で生きる者ならば、知らぬ筈が無い名前。

「……煉獄の、王」

眩く様にツアレは、その者の敬称を口にする。それを受け、絶死絶命は柔らかい笑顔と共にゆつくりと頷いた。

ツアレは思う。

自分は無限の確立の中で、とんでもない人達に救われたのだと。それはまるで、砂漠の真ん中で一粒の砂金を見つけた様に。

願わくば………愛しい妹との再会を。しかし、この願いは表には出さず、そつと心の奥底にしまい込み鍵を掛ける。それまで願うのは過ぎた思いだと。

その時、部屋の外から太い男の声が響いた。

「ツアレ！ 何所ですか！」

その声に反応して、ツアレの肩が揺れる。

聞き覚えのある声。温かく優しい、それでいて力強い声。

僅かに視線を巡らせると、絶死絶命の反応も同様の物だった。

絶死絶命はツアレの手を取り、起き上がらせると静かにドアを開け、通路へと誘導す

る。壊れ物を扱う様に。ゆっくりと、慎重に。

通路の端、下り階段を降り切った場所にその者達は居た。

ナザリツク地下大墳墓執事セバス・チャンバトラ。そして冒険者だろうか？ 数名の男の姿

も見受けられた。

セバスの姿をその瞳に映し、ツアレはほっと息を吐く。

だが、ツアレの反応とは違い、セバスの方は驚きを映す。

理由は単純。

絶死絶命の姿。

何故、彼女が此処に？

理由など考えるまでも無かった。

セバスはツアレを抱きしめると、視線を絶死絶命に向け。

「ビクトーリア様に感謝を」

静かに頭を下げる。

この謝辞に絶死絶命は、必要無いと首を横に振るのだった。

見つめる先

モモンはヤルダバオトと剣を交し、イビルアイはコロンビーヌと、ガガーラン、テイアはエントマと相對していた。

「流石ですね、モモン」

自身の武器である、伸ばした爪の汚れを払う様に腕を振り、ヤルダバオトはモモンに向け賛辞の言葉を投げかける。

「ふっ。世辞など言っても、何も出無いぞ」

「謙遜を」

冗談を言い合う様な緩い空気を醸し出しながら、お互いの表情が緩む。まあ、モモンの方は、フルフェイスの兜で表情は見えないのだが。

「さて、コロンビーヌ、スパイダー、兎戯はそれくらいにして下りなさい。そろそろ、本番の時間ですよ」

「本番？」

ヤルダバオトの言葉に、モモンは疑問の声を上げる。

「はい、本番で御座います。王都の皆様楽しんで頂ける演目を用意致しました。特に

……あなたに」

そう言ったヤルダバオトの表情は、仮面で解らないが、恐らくは愉悦の表情を浮かべているのだろう。

その中で一つ、モモンには聞き逃せない言葉が混じっていた。

「……俺に？」

呟く様に口にした言葉だったが、ヤルダバオトの鋭敏な耳はそれを脳へと伝える。

「ええ。ええ、そうですともモモン。あなたを愛する御方が、あそこでお待ちになります」

樂しげに、そう宣言したヤルダバオトの右手が上る。

指し示された方角は、王都の中心地近く。

場に居合わせた全員の視線が、その方向へと向けられる。その瞬間、地表から炎が湧きあがり、街の数ブロックを囲う様に炎の壁と化した。

「……ゲヘナ、か」

再びモモンが、呟く様に言葉を口にする。

「左様で御座います。流石はモモン」

茶化す様に、樂しげにヤルダバオトはそう賛辞を贈る。

「あの魔法で何をするつもりだ！」

二人、相対するモモンとヤルダバオトに、イビルアイが口を挟んだ。

「ふむ。塵芥が私に質問をしますか。まあ、良いでしょう。ここで袖にすれば、今度こそ私は消し飛ばされかねませんからね」

ヤルダバオトが私情を眩きながら、視線をイビルアイへと向け、その口を開く。

「そのゴミ……いや、矮小な者よ。私の主人の慈悲と共に、あなたの質問に答えましょう。あの魔法はゲヘナ。なあに、怖れる事はありませんよ。単純な魔法ですので」

「単純、だと?」

「ええ。何の害もありません。そうですね……あの炎で囲われた範囲内では、悪魔が少しだけ強化される、と言う程度の物ですよ」

ヤルダバオトの何でも無い、とでも言うかの様な言葉に、蒼の薔薇のメンバーの表情は凍り付く。

悪魔。

言葉だけ聞けば、モンスターの一種の様に感じる種族でもある。

だが、悪魔と言う種は、出合う事などまずは無い。出あつてはいけない種族だとも言える。それほどに力を持ち、遭遇すれば死を意味する者達。そんな者達の力が僅かにでも強化される……それは、信じがたい事柄だった。

「な、何だと!」

イビルアイとガガーランの声が重なる。

唯一言葉を発しなかったティナだが、ヤルダバオトを見つめる瞳には、二人と同じ感情が浮かんでいた。

その感情の名は、憎悪。しかし、その凄まじい憎しみを向けられるヤルダバオトは楽しげに、すこぶる楽しげに三人を見つめる。

「ふふっ」

ヤルダバオトから、嘲笑、とも取れる笑いが口についた。

「……何が可笑しい」

イビルアイの口が、重々しく開かれる。

「あなた達が、こんな簡単に、私達に糧をくれるのが可笑しくてねえ」

「糧、だと?」

「ええ。憎しみこそが我らの糧。もっと憎みなさい。その分だけ我らは強くなる」

「くっ!」

ヤルダバオト、いや、悪魔の言葉に蒼の薔薇の三人は奥歯を噛み締める。

昔から、負の感情は悪魔の糧となると言われていた。それが真実であったと悪魔本人の口から宣言されたのだ。実際にはビクトーリアが唄った嘘なのだが。

だが、これで神話は完成される。

アインズへの裏切り者と言う配役の通達。

ゲヘナと言う舞台装置の設置。

現地のニンゲン達への布告。

下準備は整った。

「ではモモン、私達は一旦下がらせて頂きます。後ほど炎の向こうで御会いしましょう」
ヤルダバオトは礼を持って腰を折ると、スパイダー、コロンビーヌと共に闇に溶けて
行った。



掻き消えた暗闇をじっと見つめていたモモンに、背後から声がかかる。

「し、漆黒のモモンとお見受けする。加勢、感謝する」

イビルアイだ。

その声に反応し、モモンは後ろへと視線を向ける。イビルアイを先頭に、ガガーラン、
ティナが並ぶ。

「しっかし、アンタすげーなあ」

手放しで賛辞を贈るガガーラン。

「でも、アイツはあなたを知っているみたいだった」

疑問を口にするティナ。

（知っているみたいって、実際知っているし……何て答えたら良いんだ？ デミウルゴスは、ビッチさん主導の作戦って言ってたし……あの駄巨乳、肝心な所をぼかす癖があるからなあ。クソツ、腐れ魔女が！ こうなったらアドリブで行くしかないか）

「ああ、以前にな。ここから遙か南の地で、一度やり合った事がある」

「裏切り者、とは？」

「さあな」

「しかし……」

はぐらかすモモンに、ティナは食らいつく。

「止めろ、ティナ」

何時までも続くと思われた押し問答に、思いがけない所から救いの手が指し伸ばされた。

「誰にだって、話したく無い事はある。私にだって、お前だって」

「……………解った。すまない」

イビルアイの言葉に、ティナは素直に頭を下げる。

「いや、良い。それよりも……」

モモンは気にする素振りも見せず、視線を再び炎へと向けた。

「そうだな、まずは……アレだ」

イビルアイの言葉に蒼の薔薇のメンバーは同意、と頷いた。



く王都 王城 玉座の間く

リ・エステイゼ王国 国王 ランポツサ三世は、玉座に腰を下ろし、上がって来る報告に耳を傾けていた。

だが、隣に控える王国戦士長 ガゼフ・ストロノーフの耳には、重要な報告ですら雑音と化していた。

彼の瞳に映るのは、炎の壁。彼の耳にこだまするのは、何時か聞いたあの声。

(……俺は何をしているんだ)

王国戦士長と言う立場と、王国戦士長としての自分。その狭間で彼は揺れていた。

王国戦士長と言う立場は、王を守れと言う。

だが、王国戦士長としての自分は？

あの声が脳裏から離れない。

何時も自分を攻め立てる。

何時も自分の足を、前へと踏み出させようと急きたてる。

「ガゼフ・ストロノーフよ、国とは何じや？」

そう、あの時出会った、出合ってしまった世界の危機の言葉。

その言葉がガゼフを攻め立てる。

お前は何をやっているのだと。

民草が、今、恐怖に震えているのだぞ、と。

お前が立つべき戦場は、そこでは無いのか？ と。

ガゼフは一度頭を振ると、ゆっくりとランポツサ三世の前で膝まづく。

「王よ、王国戦士長の地位を退く事をお許し戴きたい」

ガゼフの言葉に揺らぎは無い。

「せ、戦士長よ、一体どうしたのだ？」

方や、国王、いや、この場に居た者達は驚きの言葉を口にする。中には、「臆したか！」
「平民上がりは」などと口汚い者達も居たが、ガゼフの耳には入っては来ない。

ガゼフ・ストロノーフの望みは只一つ。

あの日、あの時、救えなかった者達を救う事。

そんな事は無理だと解ってはいる。

死んだ人間は、帰っては来ない。

だが、今、まさに今、怯え、泣いている民達を救う事が出来たならば、あの時救え無かった開拓村の民達が笑ってくれる様な気がしたのだ。

自分が、武の道を選んだのは、この日のためだったのだと思うのだ。

ガゼフは熱く、胸の内をランポッサ三世に語る。

だが、その考えは浅墓だとランポッサ三世は窘める様に言葉を紡いだ。

「戦士長よ。君の考えは、高潔な物だ。武人として正しく、強き者としても褒められる物だろう。しかし、王国戦士長と言う肩書は、そんなに軽い物ではないぞ」

ガゼフはグツと奥歯を噛み締める。

解っていた。

解っている。

戦士長として、王の身を第一に守らねばならぬ事など。

しかし、この場に彼の者が居たら何と言うだろうか？

自分達に、戦士としての輝きを見た、と言ってくれた彼の者が。

ガゼフは拳を握りしめ、懐に仕舞っていたアイテムを差し出した。

「戦士長よ、これは？」

問いかけるランポッサ三世に対し、ガゼフはアイテムの効果を含み隠さず開示する。

「王よ、これは王国の秘宝ガーディアンと同じ効果を生むアミュレットに御座います」

「な、なんと！」

ランポッサ三世は、震えながらそのアイテムに手を伸ばす。

「王よ、それは献上致します。今後とも健やかに。良き国を」

ガゼフは穏やかな表情でそう言葉を口にし、ゆっくりと立ち上がる。

その姿を鋭い眼差しで見つめたランポッサ三世は

「戦士長よ、そなたの決意は理解した。ならば、余も逃げる訳には行かぬ」

そう言い立ち上がる。

「民の下へ参る。戦士長よ、戦士団と共に余に続け」

「……………御意！」

真皇

普段なら月が優しく照らす王都は、地獄絵図と化していた。

王都の一角は、炎の壁で切り取られ、モンスターが跋扈する魔界へと姿を変えている。上空にはソウル・イーター、ガーゴイルが飛び回り、地上を逃げ回る民達の背後には、オーバー・イート、レッサー・デーモンが襲い掛る。

だが、人間も無力では無かった。

王国戦士団、冒険者、はては引退した冒険者達が苦戦しながらも悪魔達と渡り合っている。しかし、それも一時しのぎでしか無く、徐々に押され劣勢となつて行つた。

「クソツ！ 数が多すぎる！」

「諦めるな！ 私達が最後の希望なのだぞ！」

弱音を吐く年若い王国戦士に、ラキユースの檄が飛ぶ。

しかしラキユース自身も、悪魔の圧倒的な数に飲まれ様としていた。

だが、天は人間を見捨ててはいなかった。

悪魔達が波の様に人間を飲み込もうとした瞬間、それは空から舞い降りた。

夜の闇を写し取ったかの様な漆黒の全身フルプレート・アーマー鎧。力の象徴の様に構えられた、二本の

グレートソード。

アダマンタイト級冒険者、漆黒のモモン。

モモンは地面に着地した瞬間に、身体を捻り手に持つ双刃を振るう。その威力は凄まじく、一閃で何体ものレッサー・デーモンが砂粒へと消えていった。

「大丈夫か？ 苦戦していた様だが？」

振り向く事無く、背後に居るラキユースに問いかける。

失礼、とも取れる言葉だが、ラキユースは気にする事無く感謝の言葉を口にする。

「すまない、助かった。しかし、あなたは一体？」

それと同時に、疑問の声も上げた。その問いかけの答えは、モモンの口からでは無く上空から示される。

「漆黒のモモン。エ・ランテルのアダマンタイト級冒険者だ。名前くらいは知っているだろう？」

「イビルアイ！ あなた……」

一体どうして？ そんな言葉も続か無い程、ラキユースは混乱の中にいる。

何故エ・ランテルに居るはずのモモンが、王都に居るのだろうか？ 何故イビルアイは、そんな彼と行動を共にしているのだろうか？ 疑問は尽きない。

茫然とするラキユースだが、その答えを語る者が今度は背後から現れる。

「レエブン候からの依頼だそうだ」

声の方向へと振り向く。

「ガガーラン！ それに、ティナも！ 二人も無事だったのね」

喜びを顕わにするラキユースだが、ガガーランの表情は浮かない物だった。

「どうしたの？ 何かあったの？」

「ああ。悪い知らせだ」

この言葉によつて、ラキユースの表情が一気に硬い物へと変化する。無言でガガーランを見つめる瞳は、先へと促している様に一点を見つめる。暗黙の了解、それを十分理解しているガガーランは、これまでの事を語る。

「そんな！ 悪魔達だけでも苦戦している状況で、さらに上位種まで居ると言うの！」

「ラキユース、そうじゃ無い。上位種のさらに上が居るかも知れない」

「なんですつて！」

ラキユースは目を見開き、絶望、とも言える表情を形作つた。

「その話、本当なのか？」

蒼の薔薇のメンバー同士の会話に、割り込む者が現れる。

「あ、あんたは……」

ガガーランが驚くのも無理は無い。現れた者は、ガゼフ・ストロノーフ。この国の、王

国戦士長だ。

「すまんな。邪魔をするつもりは無かったのだが、聞き流せ無い言葉が聞こえたのでな」
「い、いや」

立聞きしていた事を素直に謝罪するガゼフに、ガガーランは恐縮した様に短い言葉で返事を返した。

「それで、上位種のさらに上が居ると言うのは本当なのか？」

「ああ。俺達を圧倒した二体の敵、それに命令を下す者が居たんだよ」

「それが、上位種？」

ラキユースの問いに、ガガーランは一度だけ頷き、再度言葉を突き付ける。

「そいつが言ったんだ。自分の主が待っている……」

「待っているって………一体誰を？」

ラキユースの問いに、ガガーランは前方へと視線を向ける。

「モモン殿を？ 何故？」

呟く様に言葉を発したのはラキユースのみだったが、場の全員の気持ちも同様の物だった。

「他には何か言っただけだったか？」

ガゼフの言葉にガガーランは沈黙するが、答えはイビルアイからもたらされる。

「確か……魔界の叛逆者、えーと、名前は……ア、アイン何とか……」
「アイン？ まさか……」

イビルアイの言葉にガゼフ一人だけが反応を示す。

そして、足はモモンの下へ。

ガゼフはモモンの隣に立つと、静かな声で言葉を掛ける。

「初めまして、で良いのかな？」

ガゼフなりに何かを感じたのか、その態度はよそよそしい物だ。

モモンもガゼフの気遣いに何かを感じたのか

「ふっ。どうだろうな。王国戦士長殿」

「そうか、そうだな」

御互い目を合わせ無い。見つめる先は只一つ。ゲヘナの中心。

さあ、ここからが本番だと、モモンが一步を踏み出そうとした瞬間、上空から拍手の音が響く。

「皆様、御休憩は済みましたかな？」

赤いスーツを身に纏った、仮面の悪魔がそこに居た。パチパチと、小馬鹿にする様に拍手をし、胸に手を当て一礼をする。

「お前が、悪魔達の親玉。そう思って良いのか？」

モモンの問いに、仮面の悪魔は軽く首を横に振り

「いいえ。我が主は、遙か高みに座る御方」

陶醉する様な言葉を紡ぐ。

「では、キサマは何者なのだ？」

ガゼフが問いかける。

「私ですか？ 私はヤルダバオトと申します。魔皇、と呼ばれている者です」

「魔皇……」

冒険者達にどよめきが感染して行く。

そして、それは恐れに変わり、恐怖へと変化して行つた。

「む、無理だ……。魔皇なんて存在、相手に出来る訳が無い」

一人の冒険者が呟いた一言が、混乱の引き金を引いた。

一人、二人と後ずさりし始め、それが伝染する様に多くの冒険者達が戦場から逃げ始める。口々に、言葉にならない悲鳴を漏らし、我先にと魔皇ヤルダバオトに背を向ける。

その地獄、とも取れる光景を、ヤルダバオトは仮面の下で満足げに見つめると

「止まりなさい！」

大きく、威厳のある声を響かせる。

その後の光景を、蒼の薔薇、ガゼフ・ストロノーフ、上級冒険者達は忘れないだろう。

脱兎の如く逃げ惑っていた者達の動きが止まったのだ。

「な、何が起こった、の」

理解が追い付かない、とでも言う様に、ラクユースが呟く。

「精神だ。ヤルダバオトは、精神に干渉したんだ」

「そんな事が？」

「出来る。魅了などのスキルの上位互換だと思えば」

イビルアイの説明に、納得のいったラクユースだが、それを防ぐ手立ては持つてはいない。

それを嘲う様にヤルダバオトは、次の言葉を口にする。

「膝を付き、こつぱ頭を下げなさい」

動きが止まっていた冒険者達は、言葉通り振り向き膝を付きながら頭を下げる。その姿はまるで、王宮で王に謁見する騎士の様だった。

「あ、あなた達……」

驚きの表情を顔に張り付かせ、ラクユースは何とか言葉を絞り出す。

「か、身体が、言う事をきかねえ」

冒険者の言葉を受け、ラクユースは憎しみの瞳でヤルダバオトを睨みつける。しかし、その表情を嘲うかの様にヤルダバオトは両腕を水平に上げ、高らかに宣言する。

「さあ、絶望の始まりです。我が皇の姿を戴のです！」

ヤルダバオトの言葉に反応する様に、盛大なファンファーレと共に王都の中央広場に暗闇が産まれる。

その中から、巨大な旗をはためかせながら、二体のスケルトン・ソルジャーが姿を現した。

続いて四名の仮面を付けたメイドが。

その後、巨大な、身の丈を超える鉈を手にした着物姿の獣ライカン・スロープ人の女性。

そして最後に、二十体は超える鎧を纏ったスケルトン・ウォーリアーに担がれた神輿が現れる。

その神輿の中央には、豪華な、それでいて不気味な、あらゆる種族が入り混じった骨で創られた椅子が一脚。それに腰掛けるは、純白のドレスに身を包んだ、鴉の様な仮面の女性だ。

「我らが皇。魔界の支配者。全ての善なる者の敵。光への叛逆者。真皇インゴット・ナインテイル様！ 愚かなる者達よ、控えなさい！」

ヤルダバオトの言葉により、冒険者達の頭はさらに下がり、石畳へと擦り付けられる。混乱が渦巻く中、インゴット・ナインテイルはゆっくりと立ち上がり口を開く。

「下等なる者達よ、ワルプルギスの夜会へようこそ参られた。妾がこの夜会の主催者、イ

ンゴット・ナインテイルである。この夜、うぬらの出来る事は只一つ。阿鼻叫喚の声を上げ、妾を楽しませる事のみ。さあ、夜会を始めようぞ！」

インゴット・ナインテイルの視線は、冒険者達に注がれる。

「ふむ。少々数が多い様じゃな。しかし、妾達と相對する者は、どれほど居るか？ 間引きを兼ねた予選と行こうかのう」

仮面の隙間から覗く艶めいた唇の端を僅かに上げ、インゴット・ナインテイルはいやらしく言葉を紡ぎ両の手を上げる。その仕草に反応し、二十枚程の札がインゴット・ナインテイルを囲む様に出現した。

「散れ」

「はあーい」

言葉を合図に、札は四方に飛び内包された姿を現す。身の丈を遙かに超える蜘蛛達の群れ。

インゴット・ナインテイルの足もとから妙に幼い声が漏れたが、それはあえて無視を決め込んだ。

石畳を、壁を埋め尽くす様に存在する蜘蛛は、一斉に冒険者に向けその牙を向ける。その矛先は、モモンですらも差別は無い。

「ふんっ！」

迫り来る蜘蛛を、モモンは右のグレートソードで一刀の元仕留める。

その姿をインゴット・ナインテイルは見逃さない。右手を上げ蜘蛛の行動を制止すると

「やはり守ったか。裏切り者、魔界の勇者モモン！ いや、アインズ・ウール・ゴウン！」

「な！」

モモンは声を失う。

一体どう言うシナリオで、この茶番劇は展開されているのだろうか？

ビクトーリアは、自分をどうしたいのだろうか？

その真実はすぐに明かされる事になる。

距離があつたモモンとの間を一瞬の内に詰め、インゴット・ナインテイルは蹴りを放つ。虚を突かれノーガードで受けたモモンは膝を付いた。

「何を——」

モモンが言葉を紡ごうとした瞬間、自身が被るフルフェイスの兜がインゴット・ナインテイルに掴まれた。

「脆弱なるニンゲンよ、真実を知るが良い。知って絶望するが良い。さあさ思い出して御覧なさい、自分がどんな姿だったのかを」

そう言つてインゴット・ナインテイルは、掴んだ兜に微弱な電流を流す。漆黒だった

兜は、徐々に色を変え、熱を発生させて行く。電磁波による分子の高速振動。電子レンジの原理である。

モモンは、真つ赤に変色した兜をインゴット・ナインテイルの手を振りほどくと同時に消し去った。

そして現れたのは、当然の如く皮膚も何も無い髑髏の顔。

モモンのさらしたその姿を、インゴット・ナインテイルは満足げに見つめ

「あーはっはっはっ！ 見たか？ 見たであろう？ 自分達が信じた、自分達が助けを求めた人物が何者だったかを！ キサマラはアンデッドに、忌み嫌うアンデッドに救われていたのじゃ！ 愉快であろう？ 痛快であろう？ ぎゃーはっはっはっ！」

場が声を失う。

それほどまでに驚きが大きかったのだ。

それはモモンも、いや、アインズも同じであった。

自分の正体を晒す事に、一体何の意味があるのだろうか？

その回答は、すぐに訪れた。

高笑いを決め込むインゴット・ナインテイルに向け、石が投げられたのだ。力は弱く、ゆつくりなスピードだが、確かに石が投げられた。

アインズは、石の放たれた方向へと視線を向ける。

そこには、場に相応しくない者が居た。
幼い少年が。

しかし、アインズはその少年に見覚えがあった。

何所かで出会ったのでは無い。その少年の産まれた時から知っていた。

その少年とは……………ナザリック地下大墳墓、桜花聖域に居るはずのオオトシ。

領域守護者であるオーレオール・オメガが使用する人型モンスターである。

そのオオトシに向けインゴット・ナインテイルは

「ドラゴン・ライトニング」

魔法を放つ。

「ウォール・オブ・ストーン」

その攻撃を、アインズは石の壁を出現させる事で防いだ。

「正気か！」

激怒するアインズに対し、インゴット・ナインテイルも感情を爆発させ

「やはりか！ やはり脆弱なニンゲン風情を守るのか！ 我らを裏切り、二度も！
こちらの側に立つと言うのだな！ アインズ・ウール・ゴウン！」

「モモンさんは勇者なんだ！ 悪魔になんてまけないんだ！ アンデッドだって、アン
デッドだって、ぼくたちの味方なんだ！」

オオトシが叫ぶように声を張り上げる。

「そうだな。どんな姿であっても、どんな種族であっても、ゴウン殿はゴウン殿だ」

ガゼフが迷いを断ち切る言葉を発しながら一歩前へと進み出る。

「そうだ。その通りだ」

「助けてもらった恩は返さなきゃあな」

「同意」

イビルアイが、ガガーランが、ティナがガゼフの横に並ぶ。

「あなた達が信じた人物ならば、私も信じるわ」

「私も」

ラキユース、ティアも名乗りを上げる。

す

「ふふっ。かかっ！ ぎゃーはっはっはっ！ ならば掛つて来るが良い。我ら仮面の悪魔を打ち滅ぼして見せよ。そのアンデッドが、キサマラの英雄だと証明して見せよ！」
今、王国最大の敵との戦いが幕を開ける。

砕かれた希望

「ふふつ。かかつ！ ぎゃーはっはっはっ！ ならば掛つて来るが良い。我ら仮面の悪魔を打ち滅ぼして見せよ。そのアンデッドが、キサマラの英雄だと証明して見せよ」

インゴット・ナインテイルが、高らかにその言葉によつて戦いの火蓋を切る。

この言葉に呼応し、仮面の悪魔達は得物を見定める。

「魔法詠唱者は面倒ね。アレは、私と Δ が受け持つわ」
マジック・キャスター

ガントレットを着用した悪魔、 α が標的を決める。
デルタ
アルファ

「ならばアタシは、あの白いのっすねー」

軽い言葉遣いで赤い髪の悪魔、 β がラキュースが標的だと告げる。
ベータ

「それなら私は、あのポニーテールの美人を」

ナーベの相手は、ボンデージ衣装の様なメイド服を纏つた ϵ と決まつた。
イプシロン

「それでは私の相手は、あの髭面の男ですな」

ヤルダバオトが、ガゼフに視線を向ける。

「では、私の相手は……」
わたくし

身の丈ほどの鉈を持った和装の女が一步を踏み出し

「あなたですわ!」

言葉と共に、モモンへと切りかかる。

「何!」

虚を突かれる形となり、モモンは振るわれる刃を受ける事で精一杯となる。

「私、白蓮と申します。インゴット・ナインテイル様の、最初のNPC、と言えば御解り

頂けるかしら?」

何合も振るわれる鈍の光刃と共に、白蓮が自分の事を言葉にする。

その言葉で、モモンは、いや、アインズは目の前の人物が誰かを知った。記憶の片隅に仕舞い込んだ、かつてゲームの合間にビクトーリアから聞いた話を。

「……お前は……ミトラか? 確かビツチさんの——」

呟く様なアインズの言葉に、白蓮は攻撃する事で正解と告げる。

最初は互角、と思われた勝負だったが、ハッキリとモモンが劣勢に回って行くのが解る展開となる。

白蓮の振るう鈍のスピードに、回避が間に合わなくなっていくのだ。

幾らアインズが100Lvのプレイヤーだったとしても、それは魔法詠唱者として

だ。今の剣や鎧を纏った縛り有る状態での力は、30Lv程度の戦士と変わり無い。1

00Lv戦士職の白蓮とは、その力は雲泥の差なのだ。

奥の手、パーフェクト・ウォーリアーの魔法を使うか？ アインズは僅かに思考する。だが、その一瞬が命取りとなった。

僅かな距離を一気に詰め、白蓮の鉞が上段から振り下ろされる。

ガツン！

金属同士がぶつかり合う音が響く。

しかし、それはモモンと白蓮が出した音では無かった。距離を詰め、襲い来る白蓮とモモンの間に、何者かが割り込んだのだ。

「何者かは知りませんが、至高の御方に刃を向けるとは。死を持っても償える物ではありませんせんえ」

深紅の、血を写し取った様な鎧で身を固めた少女。

真祖、シャルティア・ブラッドフォールンの姿がそこにあつた。

「シ、シャルティア……」

「はい、そうでありんす。英雄であられるアインズ様、命を救って頂いた恩、返させて頂くでありんすえ」

命を救った？ アインズにとつては寝耳に水である。

この件が無事終了した暁には、一度じっくりと話をするべきだと判断した。自分の遙か向こうで、いやらしい笑みを浮かべている魔女クソビッチと。

「そんな思いを胸中にしまい込むアインズの目の前で、芝居は次の展開へと移る。……吸血鬼、ですの?」

白蓮がポツリと呟いた。

「正解、でありんす。真祖シャルティア・ブラッドフォールン」

「そう。運命の出会い。戦う宿命と言う物ですわね」

「ほう。それでは、あなたは人狼ワウルフでありんすか?」

「いいえ。人虎ワタイガーですわ。ですが、獣ライカンスロープ人としては、同じカテゴリー」

「なるほど、なるほど。では……」

「ええ」

「殺し合うしかありません!」

「殺し合うしかありません!」

同じ言葉を口にし、お互いの得物が衝突する。

次の瞬間、驚きの言葉を発したのはシャルティアであった。自身の得物、ナイトランスを弾かれたのだ。

「な、なに!」

その声を聞き、白蓮の口角がニヤリといやらしく歪み

「何を驚いておりますの?」

まるで茶化す様な言葉を口にする。

「もしかして、あなたのランスが弾かれた事を驚かれていますの?」
「ぐー!」

凶星を突かれ、シャルティアの口からは呻き声のみが漏れる。

「簡単な事よ。力の差、と言う物でしょうに」

「そんな事はありません! わたしは100Lv! ナザリックの一番槍であります
!」

シャルティアの言葉に、白蓮は「ほほほ」と笑いの声を上げる。

「識っていますわ。ですが、100Lvと言つても、強いとは限りません事よ」

「ど、どう言う意味でありんすか」

「職業構成、クラスと言う事ですわ。そ、れ、に、ヴァンパイア ワータイガー、吸血鬼と人虎、力の伸び率も関係していま
すわ!」

言つて鉞を横に薙ぐ。

その斬撃を、シャルティアはバックステップでかわし

「清浄投擲槍!」

スキルを発動させる。

極太の光はシャルティアの手を離れ、高速で白蓮に向け飛来し爆散した。

仕留めた。シャルティアは胸中でガッツポーズを作る。

だが、煙の晴れた向こう側には、鉈を正眼に構えた白蓮が立っていた。

「なっ!」

再度驚きを顔に張り付けるシャルティアに対し、白蓮の口が開かれる。

「成程。信仰系の職業クラッスも取られてらっしやるのね。それならば………私わたくしに勝て無いのも道理、ですわ」

再び交わされる鉈とナイトランス。

ガキン! と金属音が響く中、シャルティアから疑問の言葉が飛ぶ。

「わたしでは勝て無いとは、どう言う意味でありんすか!」

怒りを顕わにするシャルティアに、白蓮は飄々と言葉を返す。

「そのままの意味ですわ。職業構成クラッスの違い。私の職業構成わたくしクラッスは、近接攻撃と、防御に特化した物ですわ。ニンゲンを巻き込めない、縛りある今のアナタでは、到底勝ち目があり

ません、わよ!」

語尾と同時に最大限の力で鉈を振るう。

「うきやー!」

シャルティアの身体は、その衝撃で弾かれ、悲鳴と共に家屋を突き抜けて行った。

「あら? 遠くへ行ってしまいましたわ。創造主様、こちらはお任せしても?」

「うむ。彼奴の相手は任せる。しかし、やり過ぎるでないぞ。あれはうぬの……」
叔母の様なもの。インゴット・ナインテイルは、暗にそうほのめかす。

「お任せを」

その言葉を最後に、白蓮はゆっくりとシャルティアの下へと歩き出した。
インゴット・ナインテイルはぐるりと周囲に視線を巡らせる。

その先では、至所で戦闘が繰り広げられていた。仮面の悪魔の相手をしていないガ
ーラン、ティア、ティナも同意である。彼女らは、冒険者へと迫る下級悪魔の相手
をしている。

今、この地獄、とも言える場所で、戦闘に参加していない者は二名のみ。

インゴット・ナインテイルとモモンだ。

「さて、やはり妾の相手はうぬのようじゃのう」

気楽に、何の気負いも無く、まるでフォークダンスの相手を決めるかの様にインゴッ
ト・ナインテイルは語りかける。

「こんな戦いに、意味はあるのか？」

モモンが根源の疑問を投げかけた。

インゴット・ナインテイルの答えは？

「無論。妾とうぬ、二人で陽の下を歩くための、の。さあアインズ、本気のPVPじゃ」

言つてインゴット・ナインテイルはフラッグポールを手に納める。同時にモモンもグレートソードを引き抜いた。

そして次の瞬間、悲鳴、とも取れる金属音を響かせ二人の得物が邂逅する。

だが、結果は先程と同様。力負けしたのはモモン。

「奥の手は使わぬのかや？　今のままでは、妾には勝てぬぞ？　それとも……みじめたらしく、地に這いずるのが御望みかや？　アインズ・ウール・ゴウン！」

アインズ・ウール・ゴウン。

インゴット・ナインテイルは、いや、ビクトーリアはその名を持って挑発して来ている。

ならば答えなければならない。なぜならば、その名は、その名を名乗った時から、モモンが背負ったからだ。四十人の思いを、プライドを、歴史を。

「挑発もいい加減にしろ！　このクソビッチがあ！　パーフェクト・ウオーリアー！」

アインズは魔法を発動し、再びインゴット・ナインテイルと切り結ぶ。

アインズの剣激を、インゴット・ナインテイルは何事も無かった様にかわして見せる。右、左、と身体を捻り、時には後ろへとステップバックし攻撃を逸らす。

（凄い。これがビッチさんのプレイヤースキル。だが！）

モモンの剣が、徐々にだが一撃事のスピードが増して行く。

そして……モモンの剣が止まる。インゴット・ナインテイルが、自身の得物、フラッグポールで受け止めたのだ。

「見事。見事妾に得物を使わせた。褒美じゃ」

「グッ！」

モモンから呻き声が漏れる。言葉と同時にインゴット・ナインテイルの左の掌打が腹部に打ち込まれたためだ。

「褒美として……妾の土俵で相手をしてやる」

次の瞬間、モモンの左側頭部に衝撃が走る。右脚のハイキック。

だが攻撃は終わらない。ハイ、ミドル、右、左。コンビネーションの蹴り。

モモンも何とかガードを試みるのだが、慣れとスピードにかけては、インゴット・ナインテイルが一枚上手だ。

防戦一方、だが着実にモモンの視線はインゴット・ナインテイルの動きを捉えて行く。しかし、それを許す程インゴット・ナインテイルは甘くは無い。

一瞬の間、インゴット・ナインテイルが背を向けた。

いや、身体を回転させたのだ。攻撃は上段廻打、頭部への後回し蹴り。グラリ、とモモンの視界が歪む。

だがこのままでは終われない。

無意識の中、モモンが右腕を振るう。普通なら只の打撃となる行動だが、距離が違っていた。

攻撃を終え、インゴット・ナインテイルが着地した瞬間、それは不意撃ちとして襲う。

モモンの拳はインゴット・ナインテイルの頭部の後方に。しかし、その二の腕は？

肘は？ 腕はインゴット・ナインテイルの首元を捉え、顎を引つ掛け、勢いのまま撃ち

抜かれた。

ラリアット。

インゴット・ナインテイルの身体は、モモンの腕を支点に一回転し頭部から地面に叩きつけられる。

「返せた、のか？」

モモンは、囁く様に言葉を漏らす。

「妾から、一つ忠告じや。相手に背は見せん方が良いぞ」

声が聞こえた瞬間、肩が重くなる。そして、一気に背後へと引き抜かれた。

リバース・フランケン・シユタイナー。

足を使つての投げに分類される技だ。

地に伏せるモモンの、その骸骨の頭部を掴み立ちあがらせると、その巨体を肩に担ぐ。

「な、何を!？」

モモンは驚きの声を上げるが、疑問は早々に解決される。

インゴット・ナインテイルは、モモンを担いだまま走りだし、三階建ての建物の壁へと叩きつける。それは投擲、と比喩した方が良い程のスピードで。

打ち付けられたモモンは壁を突き抜け、その衝撃で建物は埃と轟音を残し崩れ去った。

土煙が漂う中、冒険者達は絶望に襲われる。

アダマンタイトを冠する者が、英雄と呼ばれる者が、………まるで子供扱いでは無いか。

真皇と呼ばれる者と、ここまでの力の差があるのか、と。

その時、瓦礫の中から僅かな音が聞こえた。灰燼の中から産まれ出でる様に。地獄の底から蘇る様に。

「全く、酷い事をしてくれる」

闇夜を写し取った様なアカデミックガウンを纏った異形が、呆れた様に言葉を紡ぐ。

黄金の意思

「全く、酷い事をしてくれる」

アインズは疲れた様に眩き、インゴット・ナインテイルを視界に納める。

「ふん。やはり傷一つ負っておらぬか」

茶化す様な言葉に、アインズは詰まらなそうに僅かな呻き声をあげる。

それに続き、言葉を紡ごうと口を開くが、それを邪魔する者達がこの場には数多く存在する。ハッキリと指し示すと、上空を覆うガーゴイルや地を徘徊するモンスター達である。ギャーギャーと騒ぎたてるモンスター達に、アインズは軽く舌打ちの様な声を漏らし

「騒がしいぞ！ 焼夷！」

地面から火柱が立ち上がり、地面と上空に居たモンスター達を焼き尽くす。

「全く、ピーチクパーチクと騒がしいにも程があるぞ」

憤慨するアインズに、ガゼフが声を掛ける。無論視線は破壊された街並みに向けられているのだが。

「ゴ、ゴウン殿……」

「ん？」

「ま、街が……」

そこまで言われて、改めて気が付いた。今襲撃事件で、一番の破壊行為を行ったのが自分だと言う事を。

「あ、ああ。気にするな。修繕なら任せて貰おうか。優秀な人足も居るしな。何せ疲れもせず、食料も要らず、文句も言わない者達がな」

（全く。あのクソビッチ。せつかく用意した、モモンと言うアンダーカバーが台無しだ。……ああ、もういいや。俺も、好きにやらせて貰う）

アインズは、メイスを片手に瓦礫の中から歩み出る。

「良くもまあ追って来た物だ。暇なのか？ ナインテイル」

挑発の言葉を口にする。

「暇？ そうじゃなあ。下等生物ニンゲンを弄ぶ程には暇じゃなあ」

言葉を返し、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

相対する異形と異形。

その時、遠くで叫び声が上がった。アインズは、その方角に視線を向け溜息を洩らす。冒険者達が、モンスターに襲われていたのだ。

「はあーあ。騒がしいと言った側からこれか。火ファイヤ球ボール」

アインズのかざしたメイスの先から、巨大な火の玉が発射され上空のモンスターを焼き尽くす。

「おい、冒険者」

急に自分達に声がかかり、冒険者達は声を失う。だが、そんな事など気にする事でも無いとアインズは言葉を続ける。

「もういい。下がれ。サモン・アンデッド・6th！」

力ある言葉に呼応し、石畳を割りアンデッドが出現した。グールが、スケルトン・ウォーリアーが、デス・ナイトがアインズに膝ま付く。

「お前達、モンスターを清掃しろ。それと……ニンゲンには手を出すな。行け！」
号令一過、アンデッド達は散りモンスターへ攻撃を仕掛けて行った。

「やつと落ち着いて話が出来るな」

「ほう。話、とな？」

「ああ、話だ。肉体言語、と言うヤツでな」

短い会話の後の、僅かな沈黙。

「^{フライ}飛行！」

言葉と共に、二人の身体は上空へと飛翔した。

距離を置いて混じり合う視線。

そして、どちらかとも無く

「ヴァーミリアン・ノヴァ朱の新星！」

「コイル・グレートター・サンダー万雷の撃滅！」

第九位階の魔法を発動する。

天から放たれた豪雷はアインズの身体を貫き、爆発する様に産まれた炎はインゴツト・ナインテイルを飲み込んだ。

突如として昼間を超える明るさに包まれた王都。

爆音が響き、衝撃波が建物を倒壊させる。

その圧倒的な暴力に、誰もが立ち止まり言葉を失う。

それは仮面の悪魔も、冒険者達も同様だった。

そして、全ては恐怖した。インゴツト・ナインテイルと言う悪魔に。アインズ・ウル・ゴウンと言う異形に。

夜の帳が戻った夜空に、二つの影が浮遊していた。

あれだけの熱量の中であつても、全くの無傷で。

身に纏う衣類さえ、僅かな綻びも無く。

「流石に簡単には行か無いか」

ポツリとアインズが胸の内をさらす。

「左様。うぬらが恋焦がれた存在は、そうであるろう？」

「ああ。ああ、全くだ。行くぞクソビッチ！ 今日俺が勝つ！」

「やれる物なら、やってみるが良い！ この、ボツチ骸骨があ！」

御互いが、同じタイミングで右手を水平に掲げた。それと同時に、アインズの周りには赤い、インゴット・ナインテイルの周りには黄色の玉が十数個出現する。

「スカーレット・クラスター！」

「フォトン・シューター！」

「ファイア！」

浮遊していた光球は、追尾弾となり相手へ向け射出される。

しかし、この攻撃は相撃ちとなり、お互いの光球を消滅させるに留まる。

だがアインズにとっては、それが狙いでもあった。

対消滅によって上空は煙に包まれ、視界が霞む。その中で、アインズの虚空の瞳は揺れる人影を捉えた。

「核爆発！」

再び王都の空は、白く染められた。

煙る向こうで、アインズは人影がボロリと崩れ去るのを視界に留めた。

「な、何？」

チエイン・ドラゴン・ライトニング
「連鎖する龍雷！」

地上から上り来るように、二匹の龍がアインズを飲み込む。

中央広場にあつた銅像によつての攪乱。

それからの魔法攻撃。

だがアインズは知っていた。恋焦がれ、見ていたからこそ解っていた。この攻撃の全てが、次の一手への布石だと言う事を。

チエイン・ドラゴン・ライトニング
連鎖する龍雷への防御を捨て、アインズは頭上で腕をクロスさせる。

瞬間、二の腕に衝撃が走る。

インゴット・ナインテイルの上からの攻撃。

勢いを乗せた地上へ向けての蹴りだ。

轟音を立て、アインズは地上に叩きつけられる。

いやらしい笑みを湛え、視線を地上に落とすインゴット・ナインテイルだが、一瞬の内にそれは驚きへと変わる。

「チッ！」

インゴット・ナインテイルを囲む様に出現した幾つもの魔方陣から鎖が伸び、インゴット・ナインテイルを拘束したのだ。

次の瞬間、地上から声が響く。

「フレイム・ウイング
炎 翼！」

片翼の火の鳥がインゴット・ナインテイルを襲う。

魔法防御。

インゴット・ナインテイルの脳裏に、その言葉が浮かんだ刹那。

「リアリテイ・スラッシュ
現 断！」

無慈悲な言葉が夜空に響いた。



くナザリック地下大墳墓 玉座の間く

静寂が支配する玉座の間にクリスタルモニターを展開し、王都での成り行きを見守る二つの影があつた。

「まずはアインズ様が優勢、でしょうか？ ビクトーリア様」

白き淫魔、守護者統括アルベド。

「そうね。でも、あれで終わるかしら」

そう言つて黄金の魔女はクスクスと笑う。

「ですが、あのドツペルゲンガー……」

強い。

白き淫魔は最後の言葉を濁しながら、心の内を吐露する。

「そうね。でも、そうでなければ、彼にバレてしまうわ」

「はい。………ビクトーリア様？」

「なに？」

白き淫魔は言葉を掛けるが、続きを発言するかで迷っていた。言葉にする事は、不敬、に当たるのでは無いかと。

しかし、黄金の魔女は再度問いかける。それは、心の内を隠す事は無い、と言う慈悲深い言葉に思えた。

「あ、あの、ビクトーリア様」

「なに？」

「不敬な事だとは承知でお聞きしますが」

「ええ」

「普段と言葉遣いが違う様ですが？」

「ああ、その事。ここにはあなたと二人しか居ないから。それに……演技を止める様

言ったのは、アナタじゃないかしら？」

そう言って、顔を綻ばせる。

その少女の様な笑顔に、白き淫魔の下腹がキユンと疼く。何時もの高圧的な態度のビクトーリアも良いが、今の様な少女なビクトーリアも良い。もうこのまま、押し倒しても良いのでは無いかと白き淫魔の息は上がって行く。

しかし、それを押しとどめる様に黄金の魔女の口が開く。
「この映像は、ナザリック全域に？」

「はい。御指示通りに」

「そう」

黄金の魔女の瞳は、再び画像へと向けられた。



リアリテイ・スラッシュユ

現 断をその身に受け、インゴット・ナインテイルの身体は鐘楼を瓦礫と化しながら

ら地上へと墮ちた。

「さて、どれほどのダメージを奪えたか」

アインズは、そう思いながら石畳の上に降り立つ。

リアリティ・スラッシュ

現 断は、魔法防御を無視してダメージを与える事が出来る。だが、物理防御値は

別の話であり抜く事は出来無い。100LVのプレイヤーであるビクトーリアを、リアリティ・スラッシュ

現 断 一発で打倒する事など無理な話だ。ならば考える事は、相手のダメージ量とこれからの攻撃手段。

思考するアインズの聴覚に、瓦礫の崩れる音が聞こえた。

自分と同じ様に、瓦礫の中からインゴット・ナインテイルが立ち上がって来る。黄金の髪を紅く染めながら。

「ハア、ハア、流石じやな。妾の戦法をそっくり返されるとは思わなんだ」

「アンタが言った事だろう。アンタは、俺達が恋焦がれた存在だと」

「そうか、そうじゃったな。ならば、負ける訳には行かんかう」

アインズ、インゴット・ナインテイルは、軸足を引き力を込める。そして、爆発する様に駆け出し、得物同士が再び激突した。

何十号と打ち合い、相手の得物を弾き、弾かれる。撃ち合いの中、インゴット・ナインテイルは妙な違和感を覚える。

マジック・キヤスター

魔法詠唱者のアインズと、インファイター格闘家の自分。得物同士の打ち合いならば、自分の方が有

利のはずだ。なのに、互角に打ち合っている。

鏑迫り合いの中、インゴット・ナインテイルが口を開く。

「アインズ。キサマ、まさか……」

「良く解つたな、クソビッチ。パーフェクト・ウォーリアーだよ。無詠唱での、な！」

「！」

叫び、胴回し蹴りを決め、インゴット・ナインテイルを上空へと跳ね上げる。

アインズは、即座にメイスを捨て、自身の手にグレート・ソードを創り出す。

「飛行^{フライ}！」

胸のペンダントが言葉に反応し、アインズの身体を猛スピードで上空へと飛翔させる。

アインズとインゴット・ナインテイルの距離が徐々に縮まって行く。

このままインゴット・ナインテイルの胸を、剣で貫けば戦いは終わる。

だが、インゴット・ナインテイルは、いや、ビクトーリアは、この世界でたった一人の友だ。都合が良い事に、自分が纏うアカデミックガウンのおかげで、地上からは上空で何が起こっているのかは見え無い。ならば、ビクトーリアの脇腹に剣を通し貫いた様に見える事が出来る。

アインズは狙いを定め、剣を構える。

その行動を見て、インゴット・ナインテイルが僅かに微笑む。

アインズは理解した。ビクトーリアも同じ考えなのだ。

ならば、と勢い良く剣を前に突き出す。

「え？」

剣に重さが感じられる。

自分の顔に、温かい何かが降り注いでいる。

「ビ、ビッチ子さん？」

何が起こったのだろうか？

自分は、何をしたのだろうか？

自分の剣は、何を貫いているのだろうか？

インゴット・ナインテイルの、いや、ビクトーリアの優しい指が自分の頭部に回され

る。そして、埋める様に自分を胸に抱きしめた。

それは、深く剣が貫く事を意味する。

ズズツと嫌な感触がアインズの掌に伝わって行く。

「ビ、ビッチ子さん……。あんだ、なんで」

「ふふっ。モモンガさん、あなたの勝ちです」

悲しみの果て

見上げるクリスタル・モニターには、インゴット・ナインテイルがアインズに貫かれる場面が映し出されている。

「！」

その事象を見た瞬間、アルベドが声にならない声を上げた。

「偽物と解つてはいても、あまり良い気分が致しません」

黄金の魔女に視線を向けながら、自身の胸中を口にする。

その言葉に反応するかのように、黄金の魔女は玉座へと続く階段から腰を上げた。

「ビ、ビツチ様？」

アルベドが不安げに声を上げる。

「申し訳御座いませぬ。主の命令とは言え、あなたを謀つていた事を謝罪致します」

言葉と共に、黄金の魔女の、いや、ビクトーリアの身体に変化が起きた。

染み一つ無い白い肌は、健康的な褐色に。金糸を思わせる艶やかな髪は、鈍い光を湛えた銀色に。

「初めて御会い致します。ビクトーリア様のNPCとして創造して頂きましたタナト

ス、と申します」

「あ、あなたは……」

「種族はドツペルゲンガー。主な仕事は、ビクトーリア様の影となる事で御座います」

「影？ 影武者……」

アルベドは、たどたどしく言葉を返すのみ。

「本日の命は、ビクトーリア様の影としてナザリックに有る事。そしてもう一つは………アルベド様を封殺する事」

「私の、封殺」

アルベドは、自分の喉がどんどん乾いて行くのを感じていた。

此の者の話を聞いてはいけけない、と心が警戒する。

現状を早く確認しなければいけないと、心臓が早鐘を打つ。

「はい。ビクトーリア様の計画で、一番の障害はアルベド様でした」

「わたし、が？」

「はい。ビクトーリア様の危機に、アルベド様はどんな事があっても駆けつけるだろうと」

「あ、あたりまえよ！」

「ですから、ビクトーリア様は私を使い、アルベド様をこの地に、ナザリックに縫い付け

る事にされたのです」

タナトスの言葉が進んで行く度に、アルベドの頬を嫌な汗が伝う。

「で、では……あのクリスタル・モニターに映る——」

「本物のビクトーリア様です」

「い、いや——————」

タナトスの語る真実に、アルベドは膝を付き絶叫の声を上げた。

「では、私はまだ仕事がありますので、失礼致します」

タナトスは丁寧に腰を折ると、漆黒の闇に溶けて行った。

広い玉座の間には、只、アルベドの声だけが響きわたった。



ビクトーリアは、アインズをその胸から解放すると、ゆっくりと背を地上に向け落下して行った。

「び、ビッチさん！」

アインズは手を伸ばす。だが、ビクトーリアの手を掴む事は叶わなかった。

急ぎ後を追うアインズを嘲う様に落下の速度は増して行き、最後には不愉快な音を立て石畳に叩きつけられた。衝撃からなのか、ビクトーリアの付けていた仮面がコトリと言う軽い音と共に外れる。

その瞬間を間近で瞳に収めた者が居た。

イブシロン
ε、と名乗ったソリュシャンと戦闘を行っていたナーベラルである。

冷静に、表情を表に出さずに戦っていたナーベラルだが、落下して来たビクトーリアの表情を見て顔色が一気に変わった。白く白磁の様な肌は、見る見る青ざめ、その切れ長の瞳は歪み見開かれる。

ビクトーリアの瞳はドロリと色と焦点を無くし、艶やかな唇にはべったりと吐き出された血液が張り付いていた。そして、胸部、厳密には胸の谷間からは、清水が湧き出さかの如く紅の液体が滾々こんこんと溢れていた。

「あ、あう、びくとーりあ、びくとーりあ……さま」

ナーベラルは、ゆらゆらと歩き出し、その身体はビクトーリアの横に沈み込む。

腕は宙を彷徨い、行きついた先はビクトーリアの胸だった。只失って行く物を止める為に、血液の流れ出る場所に手をかざす。掻き集める様に、こぼさない様に。

徐々にナーベラルが纏っていた白いシャツが赤く染まって行く。それに呼応するよ

うに、冷静さが消えて行った。

「なんで！　なんで止まってくれないの！　びくとーりあさま！　びくとーりさま！　いやー！　いやー！　いやー！」

もはや半狂乱、と言う状況だった。

最早、場の誰もが動きを止めていた。仮面の悪魔も、冒険者達も。

その中で空中から黒い影が飛来する。

「ナーベ、まずは止血だ。ポーシオンを」

アインズは、ビクトーリアの傷口にポーシオンを掛けようと手を伸ばす。だがその腕は、下から伸びた手によって防がれた。

「ま、まだ。まだ終わってはおらぬ」

「ビッチさん！」

「ビクトーリア様！」

アインズとナーベラルの声のみが響く王都に、暗闇が産まれ、何者かが転移して来た。銀色の髪に白い仮面を付け、対称的な褐色の肌。そして黒いドレスを纏った者が。

「ヤルダバオト様、お疲れさまでした。おいで下さいまし、インゴット・ナインテイル様」
言つて膝を折り、招く様に両手を前に出す。

インゴット・ナインテイル？　彼の者は何を言っているのだろうか？　場の全員が疑問

を心に浮かばせる。その言葉の意味はすぐに解った。

ビクトーリアから？ がれ落ちた仮面から足が伸び、先ほどの者の方へと歩き出したのだ。褐色の仮面の悪魔は、足元まで来た仮面を腕に抱く。

「あなた方が何を思っているのかは知りませんが、その血塗れの骸は、我らが真皇様ではありませんよ」

無慈悲で冷たい言葉だった。

「真皇様は、この方。我らは仮面の悪魔。体など、使い捨ての駒でしかありません」
「何だと！」

ガゼフの声が響く。

「で、では、この者は?!」

「その骸ですか？ その物の名は……ああ、そうでした。その物は煉獄の王。煉獄の王ビクトーリア・F・ホーエンハイム。私達の敵であった物です。そうそう、お礼を言い忘れました。ありがとう御座います。私達の敵を葬り去ってくれて」

「！」

誰もが驚きと絶望を顔に張り付かせた。

その表情を見つめ、褐色の仮面の悪魔は口角を釣り上げる。

「解って頂いたようですね。あなた達は、自分自身で希望を摘み取った、と言う事を」

「もう良いかしら？ 次の身体を探す為に、世界を超えるのでしょうか？」

真実を語る褐色の仮面の悪魔の横に、白蓮が現れる。

「はい。次はもつと強い身体を」

そう言い残し、褐色の仮面の悪魔と白蓮は暗闇に消える。それに続きヤルダバオトが、仮面のメイド達を消した。

これによって、王国は救われた事になる。

場は安堵で覆われていた。

茶番劇の終わりを耳にしたビクトーリアは、その血濡れた口を開く。

「モモンガさん。後を見て下さい」

アインズは早くポーシオンをと言うが、ビクトーリアの言葉は強く、譲らない。

言葉通りアインズは、ナーベラルは後に視線を向ける。そこには、安堵の表情で座り込む者達が居た。

「彼らを守った、のは、あなた、ですよ」

「ビッチさん！」

「この世界は美しい。空も、水も、人々も。でも、心は……。だから導いてあげて。アンデッドであるあなたが手を広げてあげて。全てを飲み込み、全てを混じり合わせた世界を。人も、人間種も、亜人種も、異形種も、そしてアンデッドも。みんな一つに。その

為の布石を、スレイン法国に残して来たから。ね、モモンガさん」

ビクトーリアの言葉は弱々しく、握られている手にも重さを感じない。

いや、違っていた。ビクトーリアの手が、足が、身体の至所が黄金の砂粒と化して消えて行っているのだ。

「ビッチ子さん！」

「ビクトーリア様！」

「くすつ。泣かないの、ナーベラル。すぐに会えるから」

「本当、ですか？」

ナーベラルの瞳に涙が浮かぶ。

「ビッチ子さん」

アインズが静かに声を掛ける。

「ふふん。妾は消えんよ。じゃが、少しだけ疲れた。少し眠ろうと思う。なにせ、転移して来てからこつち、妾は働き詰めじやつたからのう」

無理をしている。アインズにはハッキリと解った。

だが、今の言葉は煉獄の王の言葉だ。

ならば、自分も返さなければいけない。この心優しき友に。

「人、その友のために命を捨てること、これより大いなる愛は無い」

「ふふつ。久しぶりに聞いたのう。言っていたのは誰じやったかのう。ダブルのやつじやったか？ エロ鳥では無いのは解って、ケホツ」

咳き込みと共に、新たな紅がビクトリアの顔を汚す。

「有給休暇扱いにはしませんよ。給料を減らしたくなければ、早く戻って来て下さいね。なにせあんたは、あなたは、ナザリックの神なんですから」

「くくつ。そうかあ。給料が減らされるかあ。ならばすぐにでも戻らねばな。なにせ妾は……無一文じゃか……」

アインズの手の中で、ビクトリアの身体は砂の粒へと消えて行った。

「ゴウン殿」

ガゼフが声を掛ける。

「ああ。解っている」

「ビクトリア殿の事……」

ガゼフは、そこから先の言葉が出てこなかった。

何時も自分を急かした声。

何時も自分の背中を押してくれた声。

成りたかった自分になれる様に信じてくれた声。

その者が逝ったのだ。

残念だ。お悔やみ申し上げる。そんな言葉では言い表せない。

だが、アインズは気丈に立ち上がる。その髑髏の顔を隠す事無く。

「戻って来ると言ったのだ。煉獄の王がそう言ったのだ。我々は信じる他無いだろう。

いや、信じなければいけない。違うか？ 戦士長殿」

「ガゼフだ。ガゼフと呼んでくれ」

そう言つてガゼフは右手を差し出した。

「では、私の事はアインズと呼んでくれないか？」

言葉を返し、骨の手でガゼフの右手を握り返す。

「ふふっ。アインズの手は暖かいな」

「お世辞も好い加減にした方がいいぞ、ガゼフ。私はアンデッドだ」

アインズの言葉に、ガゼフは二度首を横に振る。

「違う。貴公はアンデッドでは無い。貴公は我々の戦友だ。そして……救国の英雄だ！

そうだろ、みんな！」

後ろを振り返り、言葉を突き付ける。

一瞬の沈黙の後、場は喝采に包まれた。



あの戦いから数日。

ナザリックは沈黙に覆われていた。

アルベドは、ビクトーリアの寝室に籠っていた。

セバスは、只、膝を付き悲しみに堪える。

ナーベラルは星青の館の書斎に籠り、彼の者が座っていた椅子を見つめる。

他の者も同様で、自室に籠り悲しみに堪えている。

デミウルゴスに至っては、アインズの玉座の隣に位置する、もう一つの玉座を凝視し続けている。

コキュートスは、只、一心に刀を振るう。

一方シャルティアは、自身の部屋から一步も出ては来ない。

そして、アウラ、マーレ。年若い彼女、彼らは、闘技場の観覧席に座り事態を受け入れられずにいた。

最後に、ナザリック大墳墓、第九階層、ロイヤルスウィート。アインズの自室である。

「クソッ！ クソッ！ 何が帰って来るだ！ 何が煉獄の王だ！ 俺達か！ 俺が！

クソツッ！ ビッチさん………何で、何で！」

自室のベッドを破壊し、アインズは荒れ狂う。何度も、何度も、沈静化は起こるが、それ以上に感情が湧き上がり荒れ狂う。

「全く。妾が数日留守にしただけでこの荒れ様とは。余程寂しかったのかや？ このボッチ骸骨は」

懐かしくも聞き覚えのある声が背後から聞こえた。

アインズは疑いながらも振り返る。

そこには、恋焦がれた姿があつた。

「ビッチさん」

アインズは、いや、モモンガは。只そう口にした。

王の帰還

くナザリツク地下大墳墓　玉座の間く

アインズは玉座に腰を下ろし、眼下に並ぶ僕達に視線を向ける。

それぞれがそれぞれの表情をその顔に映し出しているが、一葉に酷い物だった。特にアルベドとナーベラル、そしてデミウルゴスの三人の表情は、見ているアインズが心配になるほど焦燥しきっていた。

理由は、ビクトーリアを失った喪失感。

良い気持ちを持つていなかった者達も、命を賭してアインズを表舞台に立たせた行動で、自分達の間違いに気付きビクトーリアの事を悲しみ、悔やんでいた。

「皆の者、面を上げるが良い。姿勢も楽にして構わん。まずは、今回の一件について、私から話そう」

アインズは、まず今回の集まりの本題を切り出す。

「最初にゲヘナの草案についてだが。……デミウルゴス、あれはビクトーリアが改ざんした物だな？」

「……」

「デミウルゴス？」

「……」

「デミウルゴス！」

アインズは声のボリュームを上げ、デミウルゴスの名を呼んだ。その事によつて、デミウルゴスはやつと自分が呼ばれている事に気付いたのだった。

「はっ、アインズ様、申し訳御座いません」

頭を下げ、謝罪の言葉を口にする

「よい。ゲヘナの改ざん、あれはビクトーリアのした事だな」

アインズの問いに、デミウルゴスは拳を握り悔しさを噛み締めながら口を開く。

「ま、誠に御言葉通りで御座います。私をもっと優秀であれば、ビクトーリア様の心内を理解出来ていれば……アインズ様！　どうか、どうか私を罰して頂きたい！」

心からの言葉だった。

デミウルゴスは許せなかったのだ。自分の決断の甘さが。ビクトーリアの裏を読み切れなかった自分自身が。だが、アインズは首を横に振る。

「良い。アレの考える事など、誰にも解りはしない。そもそも、知られる様な行動を起こしていないのだから。私が聞きたいのは一つ。ゲヘナの改ざんは、ビクトーリアの意思か否かだけだ。どうなのだ、デミウルゴス？」

デミウルゴスは奥歯を噛み締め、質問に答える。

「アインズ様の御言葉通り、ゲヘナは、私の草案をビクトーリア様が修正した物です」
「そうか、解った。皆も聞いたな。今回のビクトーリアの行動は、ビクトーリア自身の物だ。デミウルゴスに罪は無い。したがって、罰も必要無い」

「ここで一息着き、アインズは杖で床を突いた。カッンッ！　と言う乾いた音を響かせ、僕達の視線を集め

「ここからが本番だ。皆の者、ビクトーリアの復活を願うか？」
究極の二択を迫る。

此の言葉で、皆の瞳に、僅かに生気が戻った気がした。

「アインズ様！　出来るのですか？　ビクトーリア様を蘇らせる事が！」
アルベドが問いかけて来る。その姿は、必死であり、何か僅かな可能性に縋ろうとする様にも見えた。後ろではナーベラルが、横ではデミウルゴスがアインズを視界に留めていた。

だが、アインズは冷静に言葉を選びながら口を開く。

「ビクトーリアを蘇らせる。つまりは死者の蘇生。それは、不可能だ」
アインズの言葉に、僕達は絶望を顔に映す。

しかし、それを見つめながらも、アインズは言葉を続ける。

「ビクトーリアの蘇生は不可能だ。だが、復活、と言う手段ならば出来ない事は無い」
「ほんとう、で御座いますか?」

アルベドが再び言葉を紡ぐ。

「本当だ。しかし、それには二つの条件をクリアしなければならぬ」

「二つの、条件?」

誰とも無く、声が重なる。

「そうだ。一つ目の条件は、すでにクリアーしている。それは、かの神の復活は、ナザリック地下大墳墓でなければならない、と言う事だ」

アインズの言葉に、場は僅かに活気づく。

しかし、第二の条件を提示された時、再び絶望が襲う。

「第二の条件だが。至高の四十人が力を合わせねばならぬ、と言う事だ」

「そ、そんな!」

アルベドが膝を付き項垂れる。その瞳からは大粒の涙が溢れていた。

「無理だ、と決め付けるのか?」

「ど、どう言う意味で御座いますでしょうか?」

デミウルゴスが冷静に言葉を返す。

その言葉に、アインズは苛立ちを顕にする。

「セバス！」

「はっ！」

アインズの呼びかけに、セバスが腰を折り答える。

「お前は何と言われた！ あの時、カルネ村に救援に行く際、ビクトーリアに何と言われたのだ！」

セバスはビクトーリアの言葉を思い出す。

「ナーベラル・ガンマ！ お前はどうか？ スケリトルドラゴンと戦った時、あの者はお前を何と呼んだ！」

ナーベラルは覚えている。

あの、温かな言葉を。

「皆もそうだ！ お前達は、至高の四十人が手塩に掛けて産み出した者達だ！ 親に出て、子に出来ぬ道理は無い！ 思え！ 彼の神が、再びこの地に降臨する姿を！ 願え！ かの神が、この玉座に座する事を！ 捧げよ！ 彼の神に忠義を！ 我らの思いを！ 愛を！ 彼の神に！ ビクトーリアに捧げるのだ！」

声高らかに宣言し、ギルドの印、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掲げる。

その言葉を聞き、全僕が膝を付き、ビクトーリアに呼びかける。

「ビクトーリア様！」

「ビクトーリア様！」

「お姉さま！」

「ビッチ様！」

その呼びかけに呼応するように、数匹の黄金の蝶が舞い降りる。

「ダメだ！ 足らぬ！ まだ足らぬ！ 叫べ！ 乞え！ ビクトーリアの存在を！ ビクトーリアの愛を！」

「ビクトーリア様！」

全員の声が重なる。

アインズは、再度杖を掲げ、力ある言葉を紡ぐ。

「喝采せよ！ 王の帰還である！」

アインズの宣言に反応する様に、玉座の間は、黄金の輝きで満たされた。



夜の闇が支配する時間。

王城の一室で、黄金の姫は就寝の為の身繕いを行っていた。

しかし、無遠慮、とも言う時間に来客が訪れる。無論、まともな客では無い。

部屋の中に暗闇が現れ、そこから産み出でる様に一体の悪魔が現れる。赤い、スーツと言われる衣装を身に纏った悪魔が。

「まあ、ヤルダバオト様。こんな時間にいかが致しましたか？」

笑顔の仮面を貼り付け、黄金の姫、ラナーは来訪者を迎え入れる。

「いえ、こんな時間に申し訳無いね」

「いいえ。あなた方は、私の願いを聞き入れてくれた方々。遠慮など無用ですわ
ヤルダバオトの謝罪に、ラナーは微笑みで返す。

しかし、これからが本題である。

悪魔の来訪の理由、とは？

「実は、法皇暗殺について、私の主人が最終確認をしたいと言うのだよ」

「まあ。あの酷い人は、早く殺した方が良いわ」

ラナーは、朗らかに物騒な言葉を紡ぐ。ヤルダバオトは笑顔でその言葉を受け入れる。

「では、私の主人に、説明してくれるかい？ 法皇がいかに酷い人物かを」

「ええ。ええ、もちろんですわ」

ラナーの言葉に、我が意を得たりと、ヤルダバオトは主人を招き入れる。

「ビクトーリア様、同意を取り付けました。お姿を御見せ下さい」

ヤルダバオトの言葉に、ラナーは胸をときめかせる。

だが、その感情は、徐々に絶望へと変わって行つた。

暗闇からヤルダバオトの主人が産まれ出でる。

黄金のグリーンブが。赤いドレスの裾が。その、豊満な胸が。そして、神が創りしその相貌が。

「初めまして、ご機嫌はどうじゃ？ 発情期のクソガキ」

煉獄の王が、楽しげに言葉を紡ぐ。